鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　23

平成18年度発掘調査報告

（第２分冊）

極楽寺中心伽藍跡
横小路周辺遺跡群
若宮大路周辺遺跡群
保寿院跡
円覚寺門前遺跡
若宮大路周辺遺跡群
材木座町屋遺跡
能蔵寺跡

平成19年３月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　23

平成18年度発掘調査報告

（第２分冊）

極楽寺中心伽藍跡
横小路周辺遺跡群
若宮大路周辺遺跡群
保寿院跡
円覚寺門前遺跡
若宮大路周辺遺跡群
材木座町屋遺跡
能蔵寺跡

平成19年３月

鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群

保寿院跡

例　言

1　本書は平成18年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。

2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総　目　次

（第２分冊）

8　極楽寺中心伽藍跡（No.290）極楽寺三丁目1028番1の一部地点

第１章　環境と立地……3
第２章　調査の概要……5
第３章　遺構と遺物……6
第４章　調査成果……19

9　横小路周辺遺跡（No.259）二階堂字四ツ石115－3地点

第１章　調査地点の位置と歴史的環境……32
第２章　調査の経過と層序……33
第３章　検出した遺構……39
第４章　出土した遺物……47
第５章　まとめ……47

10　若宮大路周辺遺跡群（No.242）御成町126番１地点

第１章　環境と立地……67
第２章　調査の概要……75
第３章　発見遺構……76
第４章　出土遺物……78
第５章　調査成果……83

11　保寿院跡（No.250）西御門一丁目922番４地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……94
第２章　調査経過・グリッド配置・基本土層……96
第３章　検出遺構と出土遺物……99
第４章　まとめ……129

12　円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内松岡1377番6地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……145
第２章　調査の概要……146
第３章　発見された遺構と遺物……149
第４章　まとめ……162

13　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目402番9ほか地点

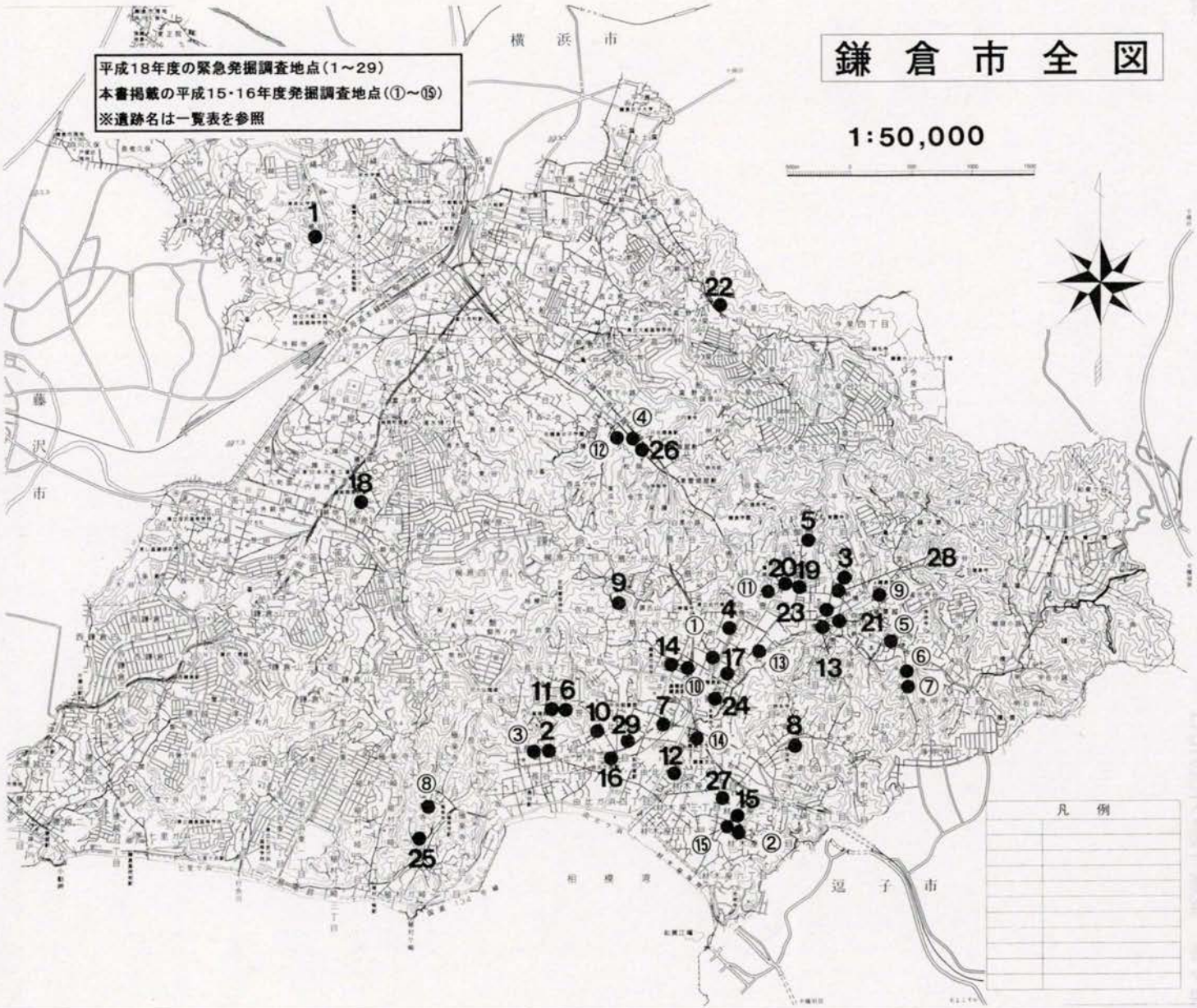
第１章　調査地点の概観……172
第２章　調査の概要……182
第３章　発見された遺構と遺物……186
第４章　まとめと考察……240

14　材木座町屋遺跡（No.261）材木座一丁目921番5外地点

第１章　遺跡概観……265
第２章　検出された遺構と遺物……268
第３章　まとめ……279

15　能蔵寺跡（No.314）材木座二丁目294番3外地点

第１章　調査概要 …… 291
第２章　検出された遺構と遺物 …… 295
第３章　まとめ …… 322
第４章　能蔵寺跡の花粉化石 …… 323


鎌倉市全図
1:50,000
平成18年度の緊急発掘調査地点（1～29）
本書掲載の平成15・16年度発掘調査地点（①～⑲）
※遺跡名は一覧表を参照
横浜市
藤沢市
逗子市
相模湾
凡例

極楽寺中心伽藍跡（ごくらくじちゅうしんがらんあと）　(No.290)

極楽寺三丁目1028番１の一部地点

例　言

1. 本報文は、極楽寺中心伽藍跡（№290）内、極楽寺三丁目1028番１の一部地点における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、個人専用住宅の建設に先立ち平成15年５月28日から６月27日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は43㎡。
3. 調査体制は以下の通り。
   調　査　員　汐見一夫　小泉衣理
   調査協力者　荻野勲　佐藤美隆　杉浦永章　小俣勉
4. 本報文に係わる整理作業は汐見・小泉が行ない、原稿執筆は第１・２章を汐見が、第３章の遺物を小泉が、第３章の遺構と第４章は両名討議の上汐見が文責を負い、全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構を汐見が、遺物を小泉が撮影した。
5. 発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。
   ㈳鎌倉市シルバー人材センター　㈲鎌倉遺跡調査会　㈱博通　東国歴史考古学研究所
6. 本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本文目次

第１章　環境と立地……3
第２章　調査の概要……5
第３章　遺構と遺物……6
第４章　調査成果……20

挿図・表目次

図１　周辺の調査地点……4
図２　グリッド配置と堆積土層……5
図３　1a面遺構……7
図４　建物遺構……8
図５　1a面遺物（1）……9
図６　1a面遺物（2）……10
図７　1b面遺構……11
図８　1b面遺物……12
図９　２面遺構……13
図10　２面遺物……14
図11　３面遺構……15
図12　３面遺物……16
図13　４面遺構……17
図14　４面遺物……18
図15　採集遺物……18

表1　出土遺物数……19
表2　出土遺物計測表……19

写真図版目次

図版１　1. 1a面全景（北から）……23
　　2. 建物址（東から）……23
　　3. 1b面全景（北から）……23
　　4. ２面全景（北から）……23
図版２　5. ３面全景（北から）……24
　　6. ３面水晶出土状況（東から）……24
図版２　7. ４面全景（調査区北側・北から）……24
　　8. 岩盤溝トレンチ（北から）……24
　　9. 西側堆積土層（東から）……24
図版３　出土遺物（1）……25
図版４　出土遺物（2）……26
図版５　出土遺物（3）水晶……27

第1章　環境と立地

本遺跡名は現極楽寺域周囲の海抜21m前後の主に平地に付され、ほぼ四方を囲む丘陵は標高50～80mを測り複雑に分岐した尾根に由り大小15以上の谷戸・支谷が開析する。

極楽寺は真言律宗西大寺末、霊鷲山感応院極楽寺と号し開山は良観房忍性、開基は北条重時で正元元年(1259)の創建と伝える。『極楽寺縁起』(以下「縁起」)に拠れば、正嘉年中(1257～1259)に北条重時が、当時は別の場所に在り阿弥陀如来像を安置していた小寺を遷して律院の大寺とするに相応しい場所を諮り、忍性が当時は地獄谷と呼ばれていた現在地一帯を「創建七堂伽藍　今極楽寺之地景是也」と答え、文永4年(1267)に入寺したという。元亨2年(1322)に編纂の『元享釈書』にも、草創に係わる前身が在る事を挙げている。一方、『吾妻鏡』の極楽寺初見は弘長元年(1261)4月21日·24日条に見る北条重時の極楽寺山荘が落成し将軍宗尊が入御した稿で、極楽寺山荘が当時の寺容とどの様に係わるのか審らかではないが、この年に北条重時は没している。「縁起」に「始于正元元年、成就于文応元年、其余七々四十九院建立」とあり、『元享釈書』には「至此武州与其弟業時。戮力修営成巨刹」とあることから、中心の伽藍は1年で完成したかも知れないが、四十九院は北条重時の子長時、業時兄弟が遺志を継いで極楽寺を完成させた後に忍性を迎え入れたとされる（大三輪1980）。建治元年(1275)の火災では、堂宇悉く焼亡したが忍性が旧館に復し、寺勢は北条氏の庇護もあり寺勢は維持された様だ。

極楽寺の寺容は絵図に依れば、極楽寺切通しを経て橋を渡ると二王門が、その東方で川が西へと曲折する辺りに下馬門が在り、二王門を潜ると左に子院の勧学院、右に僧食堂が配され、鐘楼・鼓楼等を繋ぐ四玉門（四足門）が描かれる。現在の境内域はこの範囲ぐらいであろうか。四玉門（四足門）の背後には食堂、講堂、方丈（華厳院）が直線に並び、食堂の左右に東西の金堂、講堂の東に御影堂、西には順に護摩堂、玉塔、五重塔、十三重塔が在る。五重塔と十三重塔の前には石塔院と御廟が、背後の稜線上位には本願御墓堂と宝塔が描かれる。更にこれら中心伽藍の周囲は、尾根や谷戸の稜線、河川や橋、滝と思しきもの等地理地形が表現されている。鎌倉有数の大寺を誇り政治的にも北条氏と結びついた極楽寺は、幕府が滅亡する元弘3年(1333)には後醍醐天皇の勅願寺となり寺領を安堵され、室町期には代々の鎌倉御所の保護を受けたが、正平12年(1357)の台風、応永32年(1425)の火事、永享5年(1433）の地震でも罹災する。その後、罹災と復興を経て天正13年(1585)には徳川家康から寺領を安堵され江戸中期に掛けて復興を図るが、天明5年(1785)頃には寺勢は嘗ての勢いを失い、近代の震災で大きな被害を受けた。現在では堂宇は少ないが、境内奥の大石塔や所蔵する木像・工芸品に往時の寺勢を窺い知ることが出来よう。

平地の調査地点の内、地点2では狭小な調査範囲ながら岩盤山裾を削平して谷戸内を平坦化した岩塊敷き上から、かわらけ・瀬戸窯製品・常滑窯甕が出土している（赤星1983）。稲村ヶ崎小学校内の地点4（大三輪・玉林1980）では、方丈華厳院と推定される基壇と建物、僧坊址や門跡等の建築遺構、石列、貝殻面等の遺構群を発見し、飾り物・嗜好品から生活用具・日常雑器や瓦に至るまで多種多様の遺物が多量に出土している。出土遺物の年代観から2面の火災面を建治元年(1275)の火災に、1面の焼土面を応永32年(1425)の火災に比定して1～6期の変遷と把え、元亀3年(1572)の火災についてはその年代を示す出土遺物が無いことから、少なくとも基壇上には建物は無いとしている。中心域に近い極楽寺川右岸地点7・9の調査では13世紀末～14世紀前半の遺構面を確認し、地点9の遺構群は希薄で瓦を除いた出土遺物も少なく、極楽寺境内域の空閑地としている(継·宗臺1999)。地点5では基壇・区画・土丹積み遺構・小規模な掘立柱建物・方形竪穴等密なる遺構群を発見し、多岐に亘る遺物の中でも

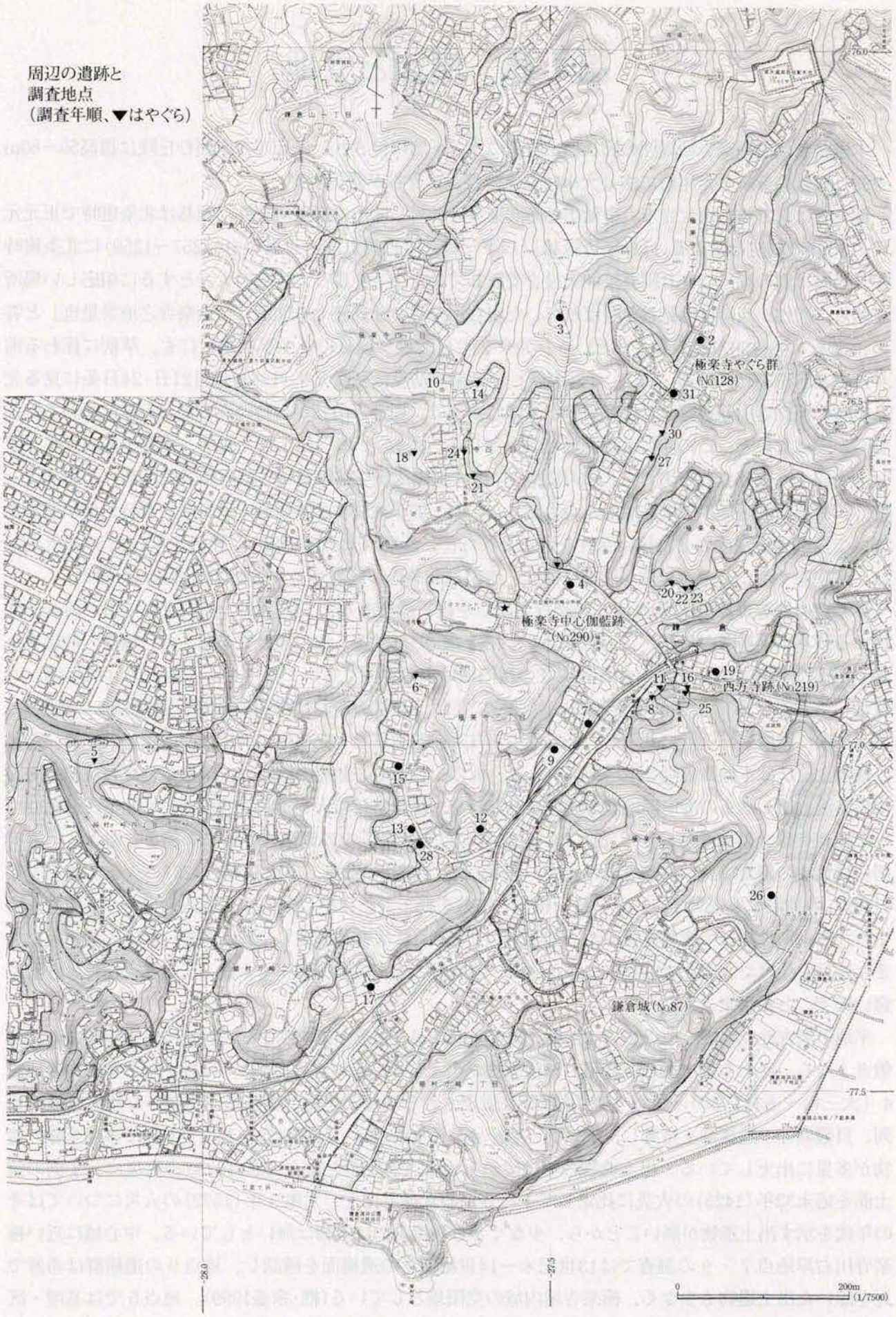

周辺の遺跡と
調査地点
（調査年順、▼はやぐら）
極楽寺やぐら群
(No.128)
極楽寺中心伽藍跡
(No.290)
西方寺跡(No.219)
鎌倉城(No.87)
0
200m
(1/7500)

図１　周辺の調査地点

特に瓦が大量に出土している。この瓦の出土量と発見した遺構群から、薬師堂或は二王門から東に延びる築地塀に囲まれた一角と考えられている（齋木1998）。

中心域以外ではこれまでに月影ヶ谷で４カ所、西方寺跡内で1カ所調査が行われている。月影ヶ谷開口部の地点12では、岩盤を削平した面に合わせた14世紀前半の生活面上に布掘り溝を発見し、遺構は伴わないものの中世以前の遺物が多量に出土している（田代1997a）。地点13では、13世紀後半～14世紀前半にかけて岩盤山裾を削平しては土盛り地業し、谷戸地形を克服する様に平坦面の確保と生活域の拡幅を図っている（田代1997b）。地点15は狭小な調査範囲ではあるが、木造基壇束柱らしき柱穴列、礎石建物、掘立柱建物、柵列、溝等を発見し、これらの遺構が13世紀末～14世紀前半にかけて生活面を更新しながらも遺構軸がほぼ同方向であることから、場の利用が踏襲されていることを指摘している。何れの遺構も全体規模は把み得ず性格も不明で照応し兼ねるものの、絵図に観る月影地蔵と記された前面に描かれている子院や塔頭を想定するに難くはない。地点19は、これまでに極楽寺坂に面した西方寺跡内で唯一の調査で、13世紀後半～15世紀初頭にかけて幾度も生活面を更新しているが、各面とも発見した遺構群は希薄で出土遺物の殆どをかわらけが占め、寺院址を推定し得るものは殆ど無い（齋木・粂2000）。

山裾での調査は、馬場ヶ谷内は本調査地点を含め２地点、開口部で1地点、西ヶ谷内で５地点、新宮谷内で３地点、極楽寺坂と中心域平地に面した尾根裾で４地点、月影ヶ谷内で1地点在り、その殆どが急傾斜防災対策工事に伴い発見されたやぐらで計21基を数える。

第２章　調査の概要

本調査は、個人専用住宅の建設に伴い確認調査と諸協議を経て実施された。確認調査の結果から、調査区の北側で現況地表下約20㎝、南側では約30㎝まで表土掘削を行った。その際、調査区の南端には調査区にほぼ直交して近現代の埋め戻し層があり、目安を兼ねて調査深度まで攪乱として掘り上げた。この表土掘削及び攪乱層掘り上げ土と調査に伴う残土は、敷地内南東で場内処理することとした。

調査開始にあたり調査区を囲む様に方眼グリッドを設定し、調査区の北西隅から２m間隔で東へアルファベット（Ａ～）を、南へ算用数字（1～）を付した。調査区内に現れるのはＢ～Ｃ-２～４である。Ｃ-３を基本として、本調査地の緯度は北緯35度19分39秒、東経134度34度20秒、南北軸は磁北より13度25度00秒東に振れ、国土座標値はＸ：－800.526、Ｙ：－558.581。

１面検出過程で調査区北側の一部に岩盤が遺存し、遺構面は南へと緩やかに傾斜する様相が判断され、調査区のほぼ中央東西方向に土層観察のベルトを設定し、下層への掘下げの際にも遺す事とした。南への傾斜に各面の整合に惑わされつつ台風の襲来にも目減ず、６月末には調査レベルが調査深度に達し、調査区壁の堆積土層を記録保存の上、関係各方面に連絡の上器材を撤収し調査終了とした。調査終了時点で発見し記録した遺構は、建物遺構に関わるものを含めて多数のピット・土坑８基・溝等であり、出土遺物は整理箱３箱である。

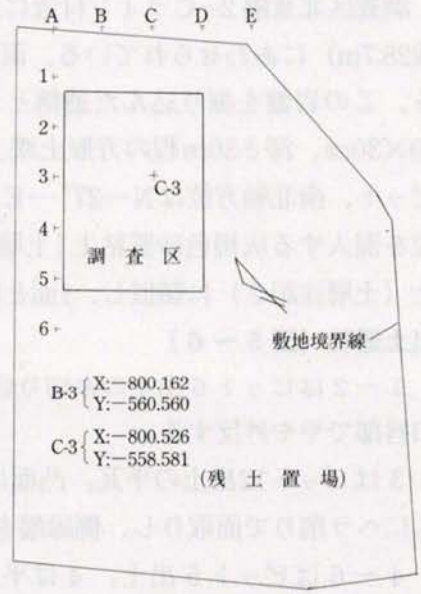


図２　グリッド配置と堆積土層

第３章　遺構と遺物

本章では発見された遺構と出土した遺物について述べる。本調査地点は極楽寺背後の谷戸である西ヶ谷の西側の裾野に位置している。調査区はその裾野を北位で背にし、地形的形状による北西から南東への緩い傾斜がある。調査区北側では最終面である岩盤面を含めて４時期の生活面を発見したものの、調査区南側では表土からの規定深度により岩盤までは確認し得なかった。以下、調査順に上層の生活面の新しい時期より述べていく。尚、遺構番号は整理の段階で改めて付したものを使用し、全側図は縮尺1/80、各遺構個別図は縮尺1/60、断面図の基準高は海抜(m)で、出土遺物は1/3で示している。遺構規模は上幅の最大値を東西×南北で、深さは掘り込みレベルからの平均値を、単位㎝で示している。

第１節　１面の遺構と遺物（図３～８）

１面は、時期差のほとんどない破砕土丹で地業された２枚の生活面が発見され、新しい面より1a面、1b面とした。

1a面の遺構（図３）

1a面は、地表面から北西約50㎝下（海抜28.8m）、南東約60㎝下（海抜28.6m）で、谷戸の地形的形状による北西から南東への緩い傾斜がみられる。暗茶褐色粘質土（土層注記４）乃至Ｃラインより東側は暗黄褐色粘質土（土層注記５）で全体的に破砕土丹で地業され、ピットは15基、土壙４基が発見されている。この内、図化し得る遺物が出土しているのはピット５・６・12である。

地業面上には、柱痕こそみられないものの伊豆石や鎌倉石、整形された土丹が多く発見され、建物の礎石として利用されたと推測できる。中には焼けた痕跡をもつものがあるが、顕著な火災面は発見されていない。礎石を再利用するため、他の場所で火災を受けた後に運び込まれたのであろうか。これらのうち調査区中央２～４-Ｂ～Ｄラインにある現況２×２間の遺構（図４）も建物址としての可能性があると考えられる。南北軸方位はN―38.5°―Eで、この面での堀り残しの可能性のある1b面上の礎石も含め、芯心は120㎝～220㎝と幅があり、統一されていない。ピットは径30～50㎝内外の不整円形で深さ15～20㎝程、礎石もほとんどが鎌倉石であった。

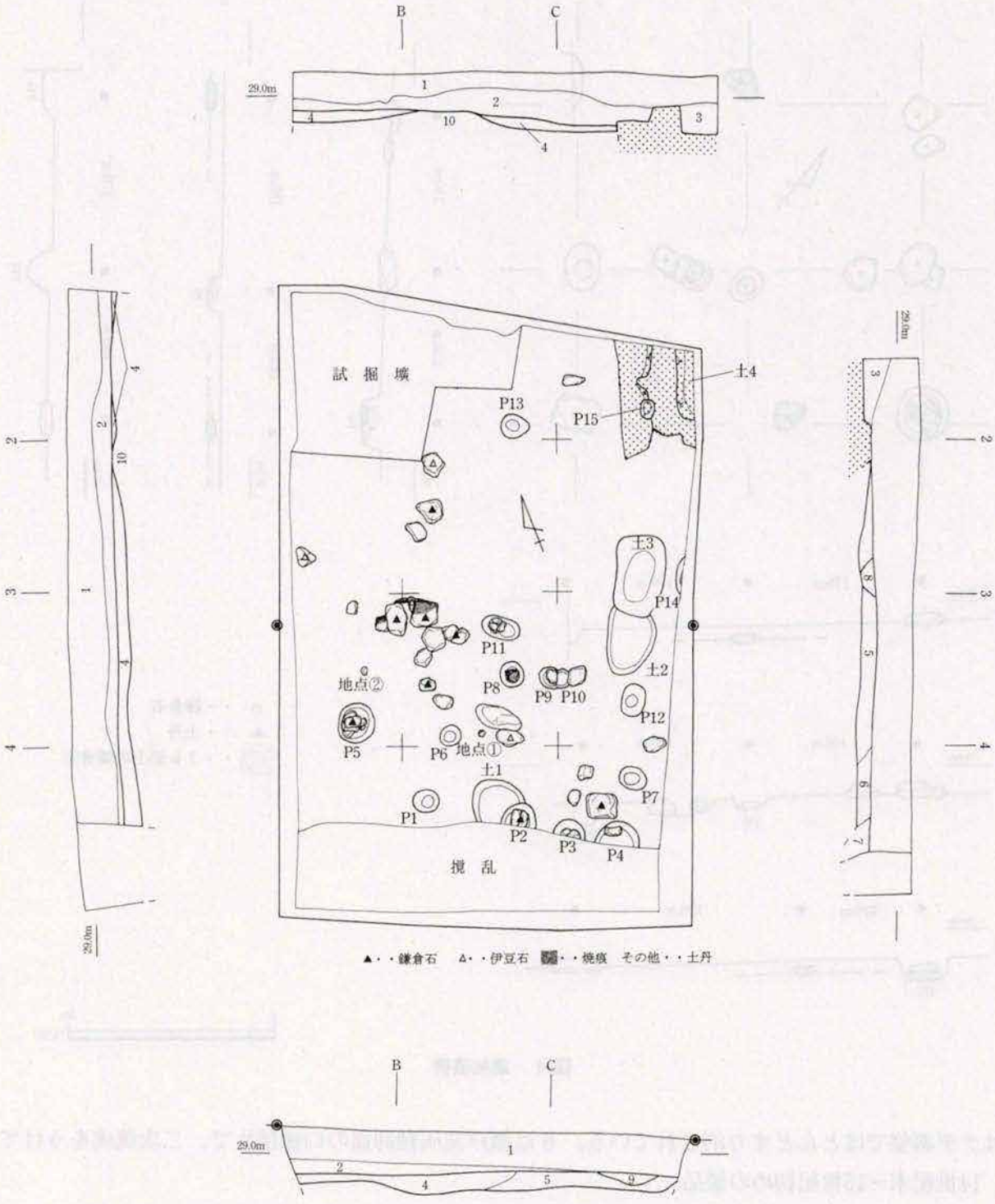
調査区北東隅２-Ｃライン付近には岩盤が突出して発見され、1a面はこの岩盤の下段と同レベル（海抜28.7m）にあわせられている。南北軸方位はN―16°―Eで、1面の遺構の軸方向とは多少ずれてはいる。この岩盤を掘り込んだ遺構としては、土壙４とピット15が発見されている。土壙４は確認規模90×30㎝、深さ30㎝程の方形土壙、南北軸方位は不明。ピット15は径15～25㎝、深さ15㎝程の楕円形ピット、南北軸方位はN―27°―E。どちらも遺構内から遺物は出土していない。両遺構の覆土は土丹粒を混入する灰褐色砂質粘土（土層注記３）で、他の中世遺物を内包する遺構覆土とは異質で近世耕作土（土層注記２）に類似し、1面と同時期あるいはそれ以後に埋没した遺構と推測される。

出土遺物（図５～６）

１～２はピット６出土の糸切り底かわらけ。背高で、厚味のある器壁は大きく開きながら立ち上り、口唇部でやや外反する。

３はピット12出土の平瓦。凸面は斜格子目叩き痕、凹面は指頭ナデ調整が施される。側面、端面ともにヘラ削りで面取りし、側縁端をナデ調整で丸く仕上げている。

４～６はピット５出土。４は平瓦。凹面はナデ調整が施され、凹凸面とも離れ砂が付着している。側面、端面ともにヘラ削りで面取りした後、さらに側縁を狭く面取りしている。５は丸瓦。凸面の縄目



土層注記

1．表土
2．近世耕作土
3．褐色砂質粘土　土丹粒・炭化粒・土器粒を含む
4．暗茶褐色粘質土＋土丹破砕地業層
5．暗黄褐色粘質土＋土丹破砕地業層
6．黒褐色粘質土　土丹粒を含む
7．暗茶褐色粘質土　土丹粒を含む
8．暗茶褐色粘質土（ピット14覆土）
9．暗茶褐色粘質土（土壙２覆土）
10．黒褐色粘質土＋大小土丹ガラ層
岩盤

0　2m　(1/80)

図３　1a面遺構

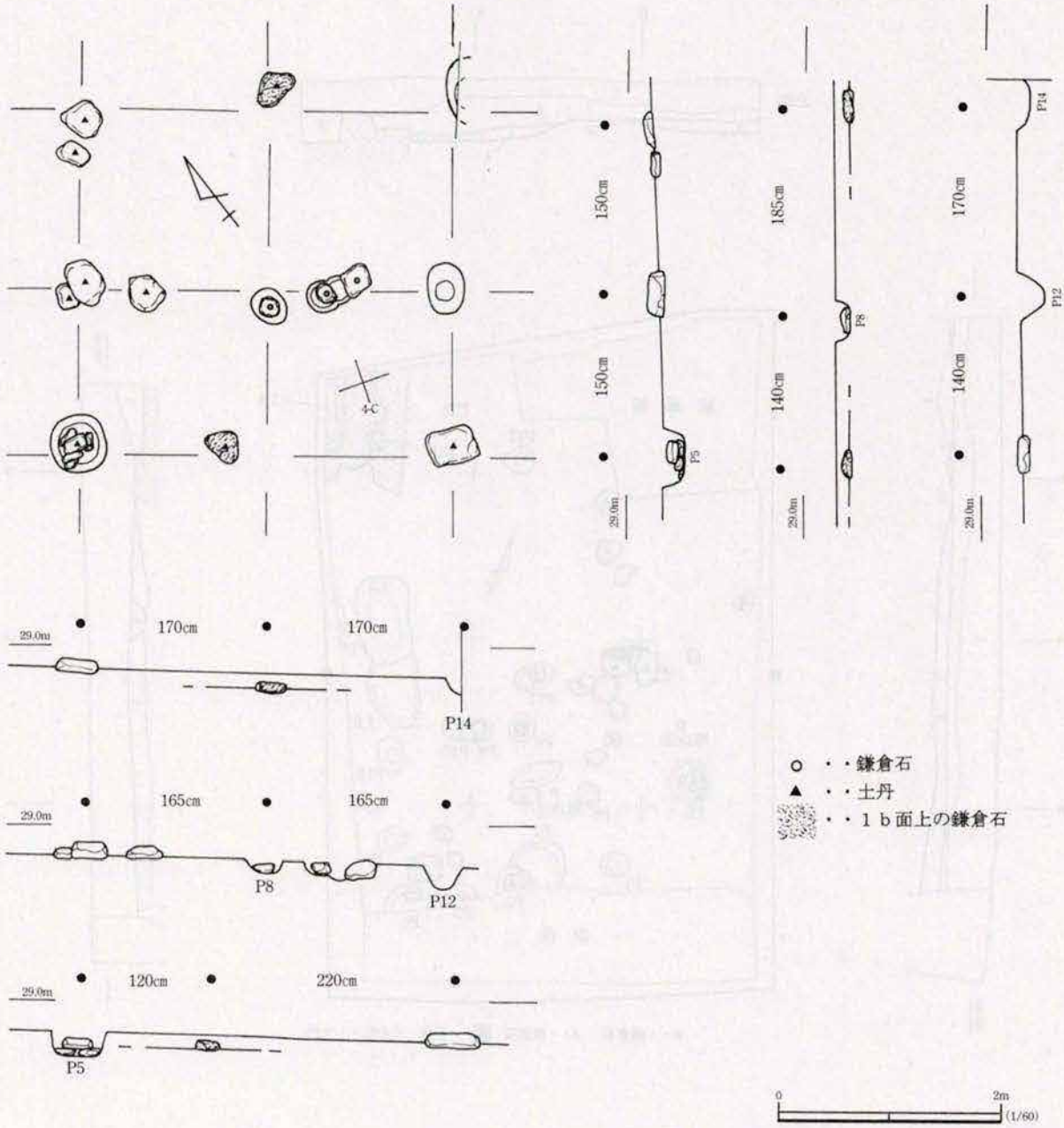


図4　建物遺構

痕はナデ調整でほとんどすり消されている。6は瀬戸窯灰釉卸皿の口縁部片で、二次焼成をうけている。14世紀末～15世紀初めの製品。

7～18は1a面直上より出土した遺物（8は図3地点①の表向き、9は図3地点②の裏向き）。

7～13は糸切り底かわらけ。概ね背高～背高気味で、厚味のある器壁は大きく開きながら立ち上がる。10・13は内弯気味に立ち上がり、口唇部でやや外反する。8～10は煤が付着している。

14は瀬戸窯天目茶碗の底部。削り出し高台で、内底部がわずかに凸む。黒色の鉄釉は薄く掛けられ、内底面にキズがみられる。14世紀後葉～15世紀前葉の製品。15は常滑窯甕転用磨製品。周囲全体が擦られている。16は瓦器質火鉢。器表は磨かれ黒色処理が施される。口縁付近の横位沈線帯間に小型の巴文スタンプが3つ、珠文が1つと繰り返し配されている。17は平瓦。凸面に北条氏の家紋である三鱗文が陰刻されている。三鱗文を有する瓦は、周辺の調査地点4からも出土している。18は丸瓦。凸面は縄目叩き痕をナデ調整ですり消している。凹面は糸切り痕と布目痕がのこる。

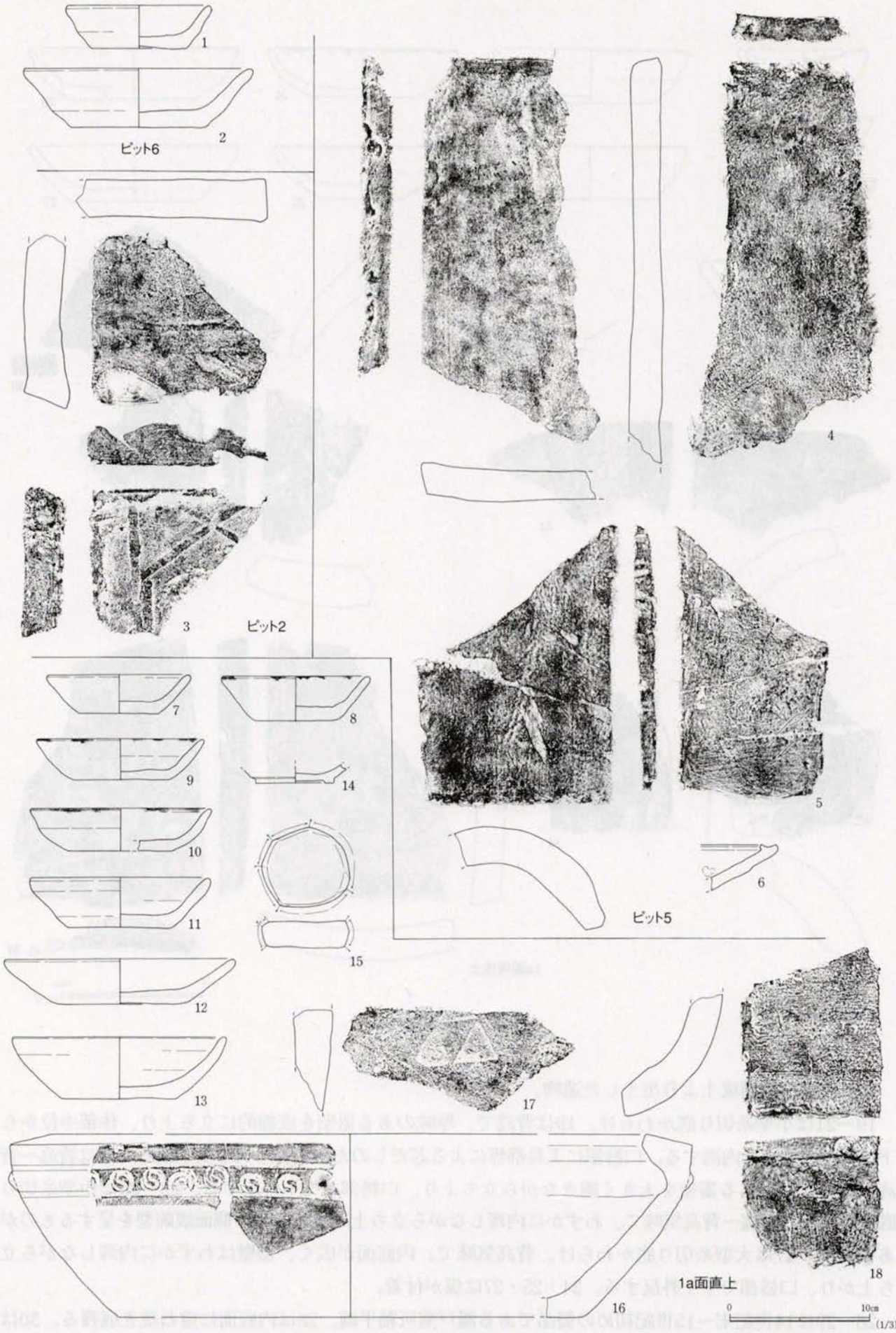

1
2
ピット6
3
ピット2
4
5
6
ピット5
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
1a面直上
0
10cm
(1/3)

図５　1a面遺物（1）

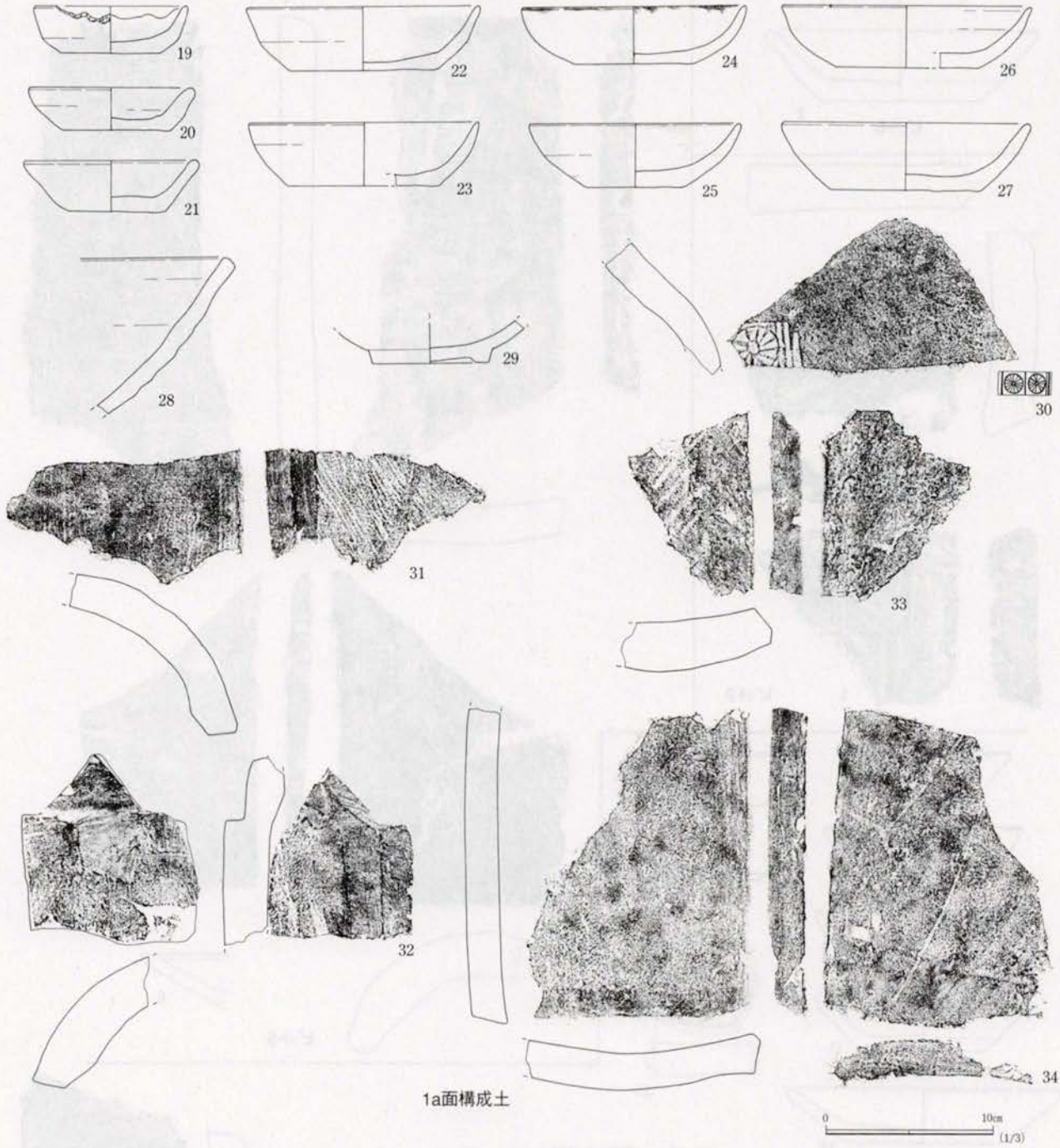
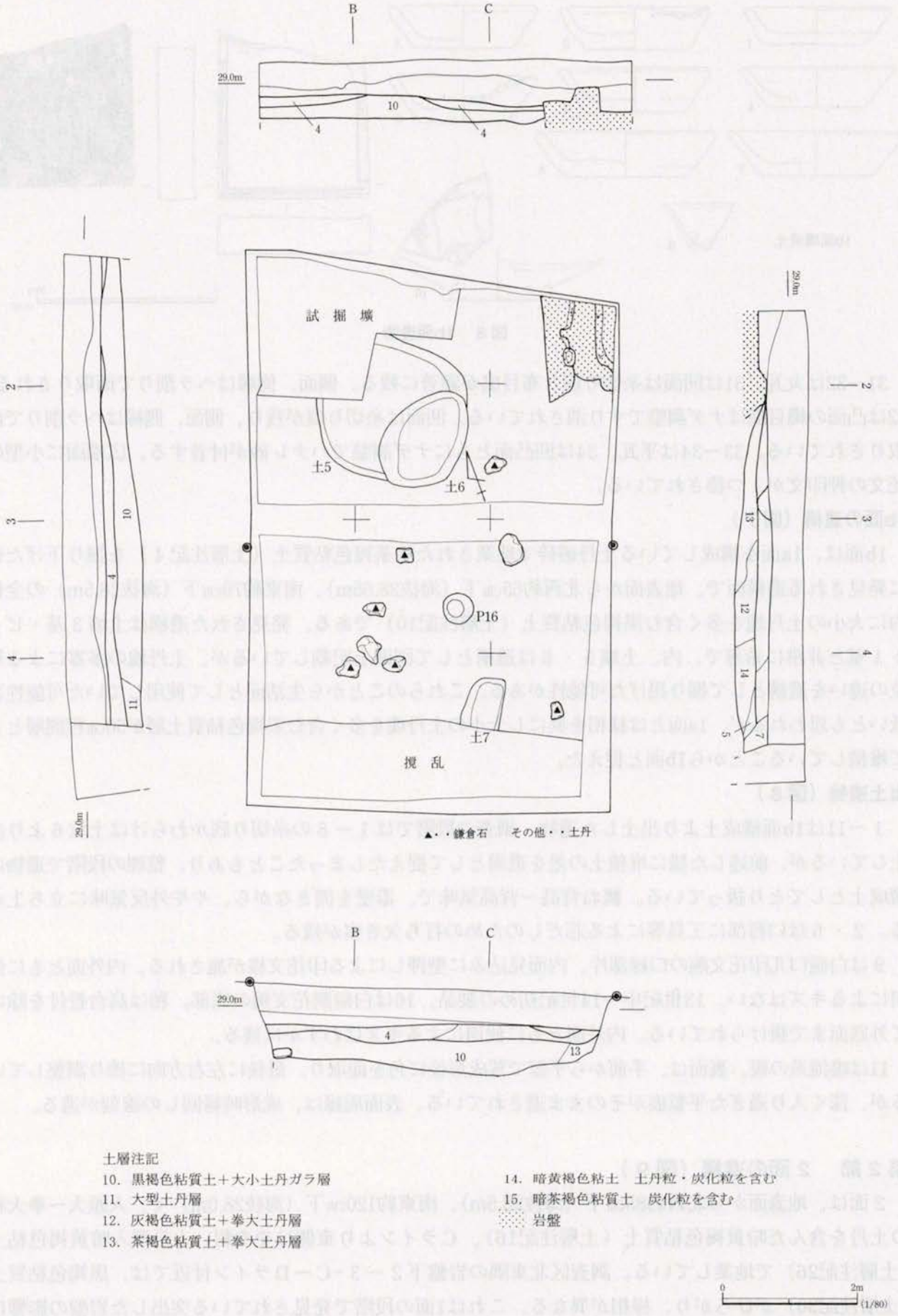


図6　1a面遺物（2）

19～34は１面構成土より出土した遺物。

19～21は小型糸切り底かわらけ。19は背高で、厚味のある器壁を直線的に立ち上り、体部中位から下位の稜線でやや内湾する。口唇部に工具都等による芯だしのための打ち欠き痕が残る。他は背高～背高気味で、厚味ある器壁を大きく開きながら立ち上り、口唇部でやや外反する。22～25は中型糸切り底かわらけ。背高～背高気味で、わずかに内弯しながら立ち上がるものと、側面観碗型を呈するものがある。26～27は大型糸切り底かわらけ。背高気味で、内底面が広く、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がり、口唇部でやや外反する。24・25・27は煤が付着。

28～29は14世紀末～15世紀初めの製品である瀬戸窯灰釉平碗。28は内底面に重ね焼き痕残る。30は常滑窯甕押印文拓影。肩部に縦線と車輪文の組合せで捺される。



土層注記

10. 黒褐色粘質土＋大小土丹ガラ層
11. 大型土丹層
12. 灰褐色粘質土＋拳大土丹層
13. 茶褐色粘質土＋拳大土丹層
14. 暗黄褐色粘土　土丹粒・炭化粒を含む
15. 暗茶褐色粘質土　炭化粒を含む
岩盤

図７　1b面遺構

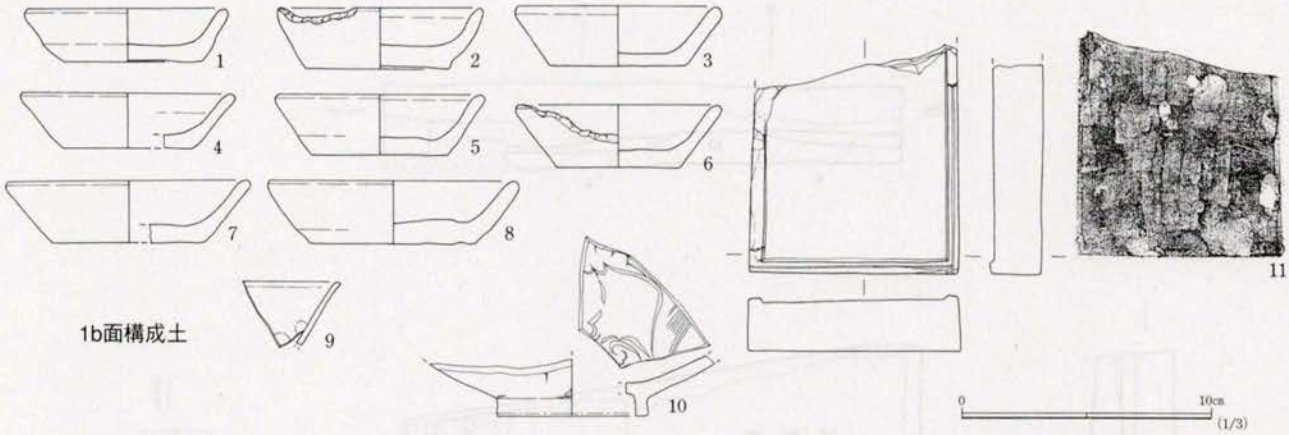


図８　1b面遺物

31～32は丸瓦。31は凹面は糸切り痕と布目痕が顕著に残る。側面、側縁はヘラ削りで面取りされる。32は凸面の縄目痕はナデ調整ですり消されている。凹面は糸切り痕が残り、側面、側縁はヘラ削りで面取りされている。33～34は平瓦。34は凹凸面ともにナデ調整でハナレ砂が付着する。広端面に小型の花文の押印文が１つ捺されている。

1b面の遺構（図７）

1b面は、1a面を構成している土丹破砕で地業された暗茶褐色粘質土（土層注記４）を掘り下げた後に発見される遺構面で、地表面から北西約65㎝下（海抜28.65m）、南東約70㎝下（海抜28.5m）の全体的に大小の土丹塊を多く含む黒褐色粘質土（土層注記10）である。発見された遺構は土壙３基・ピット１基と非常に希薄で、内、土壙５・６は遺構として図面上記載しているが、土丹塊の多寡による層位の違いを遺構として掘り揚げた可能性がある。これらのことから生活面として使用していた可能性は低いとも思われるが、1a面とは様相を異にし大小の土丹塊を多く含む黒褐色粘質土層が50㎝程間層として堆積していることから1b面と捉えた。

出土遺物（図８）

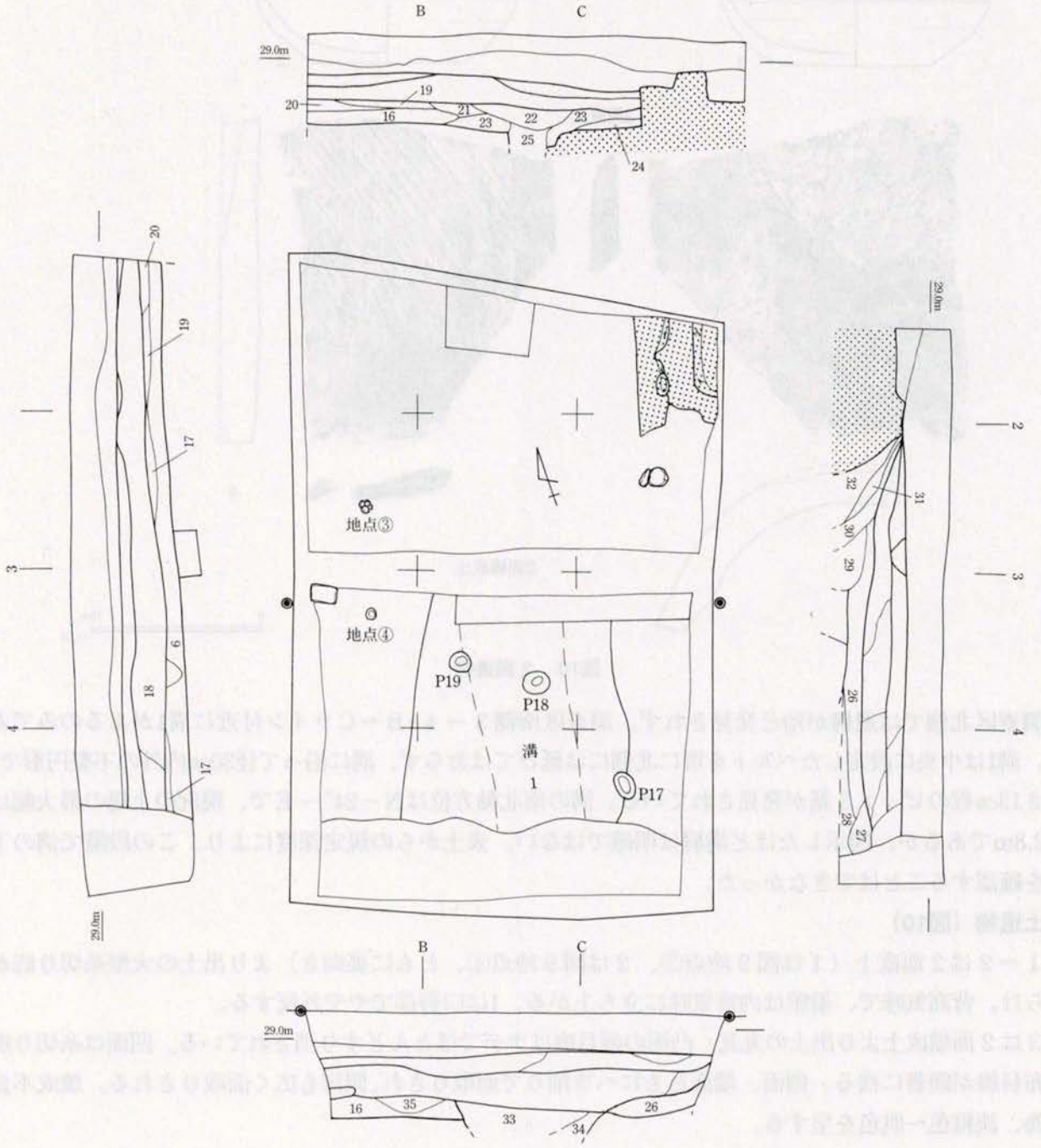
１～11は1b面構成土より出土した遺物。調査の段階では１～８の糸切り底かわらけは土坑６より出土しているが、前述した様に堆積土の差を遺構として捉えたしまったこともあり、整理の段階で遺物は構成土としてとり扱っている。概ね背高～背高気味で、器壁を開きながら、やや外反気味に立ち上がる。２・６は口唇部に工具等による芯だしのための打ち欠き痕が残る。

９は白磁口兀印花文碗の口縁部片。内面見込みに型押しによる印花文様が施される。内外面ともに使用によるキズはない。13世紀中～14世紀初めの製品。10は白磁劃花文椀の底部。釉は高台畳付を除いて外底面まで掛けられている。内外面ともに使用によるキズはわずかに残る。

11は鳴滝系の硯。裏面は、手前から平鑿で荒成形後に角を面取り。最後に左右方向に擦り調整しているが、深く入り過ぎた平鑿痕がそのまま遺されている。表面周縁は、成形時縁回しの線刻が遺る。

第２節　２面の遺構（図９）

２面は、地表面から北西約85㎝下（海抜28.5m）、南東約120㎝下（海抜28.0m）で、人頭大～拳大程の土丹を含んだ暗黄褐色粘質土（土層注記16）、Ｃラインより東側はやや粗い土丹混入暗黄褐色粘土（土層注記26）で地業している。調査区北東隅の岩盤下２～３-Ｃ～Ｄライン付近では、黒褐色粘質土（土層注記30）がひろがり、様相が異なる。これは1面の段階で発見されている突出した岩盤の影響によるものと考えられよう。



土層注記

16. 暗黄褐色粘質土＋拳大～人頭大の土丹層
17. 暗黄褐色粘質土　土丹粒を含む
18. 黒褐色粘質土＋大型土丹層
19. 黒褐色粘質土　土丹粒を含む
20. 黒褐色砂質混粘質土　土丹粒を含む
21. 暗茶褐色砂質粘土　土丹粒・炭化粒を含む
22. 黒褐色粘質土に暗茶褐色土が混じる
23. 暗黄土色粘土＋拳大土丹層
24. 暗黄土色粘土　土丹粒・砂質土混じる
25. 暗黄褐色砂質粘土＋人頭大土丹層
26. 暗黄褐色粘土＋土丹粒破砕地業層
27. 暗黄褐色粘土　土丹塊を含む
28. 暗茶褐色粘土　土丹塊を含む
29. 大型土丹層
30. 黒褐色粘質土　わずかに土丹粒を含む
31. 暗茶褐色粘土　わずかに土丹粒を含む
32. 黄褐色粘土　土丹粒を含む
33. 暗黄褐色粘土　土丹塊・土器粒・炭化粒を含む
34. 黒褐色粘質土＋大型土丹
35. 大型土丹層
岩盤

0　2m
(1/80)

図9　2面遺構

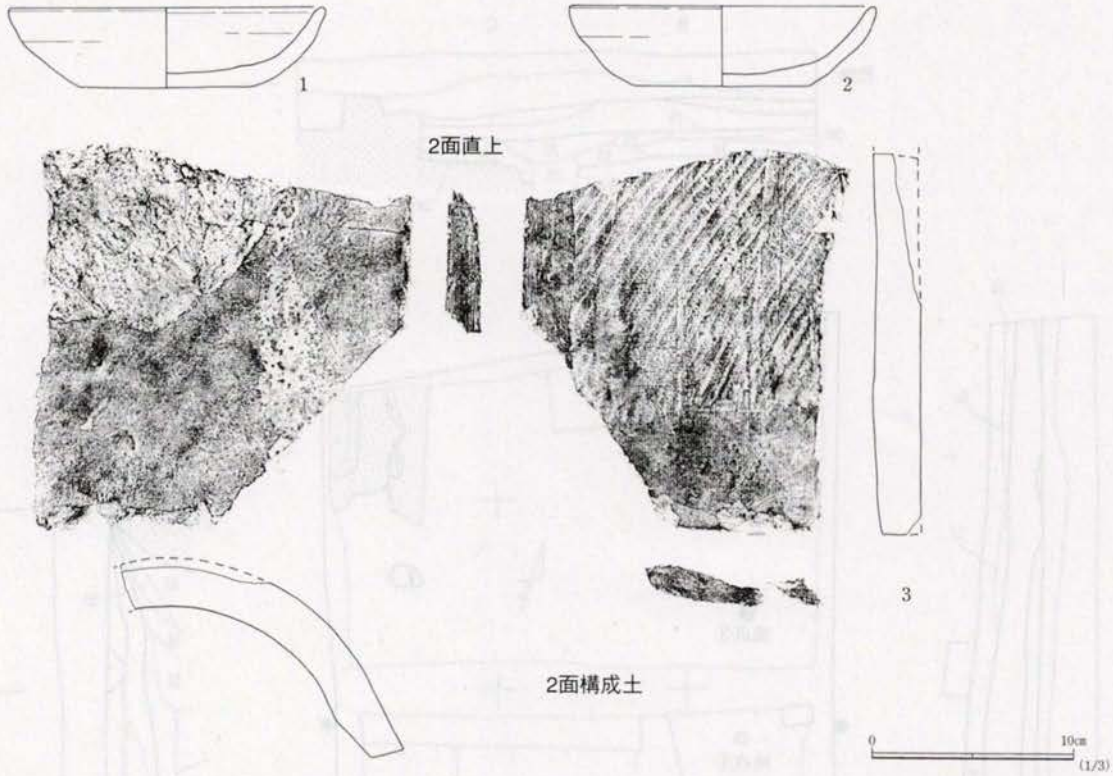


図10　2面遺物

調査区北側では遺構が殆ど発見されず、調査区南側３～４-Ｂ～Ｃライン付近に溝1があるのみである。溝1は中央に設定したベルトを堺に北側には延びてはおらず、溝に沿って径30㎝内外の不整円形で、深さ15㎝程のピット３基が発見されている。溝の南北軸方位はN―24°―Eで、現況の上場の最大幅は約2.8mであるが、図示したほど溝肩は明確ではない。表土からの規定深度により、この段階で溝の下場を確認することはできなかった。

出土遺物（図10）

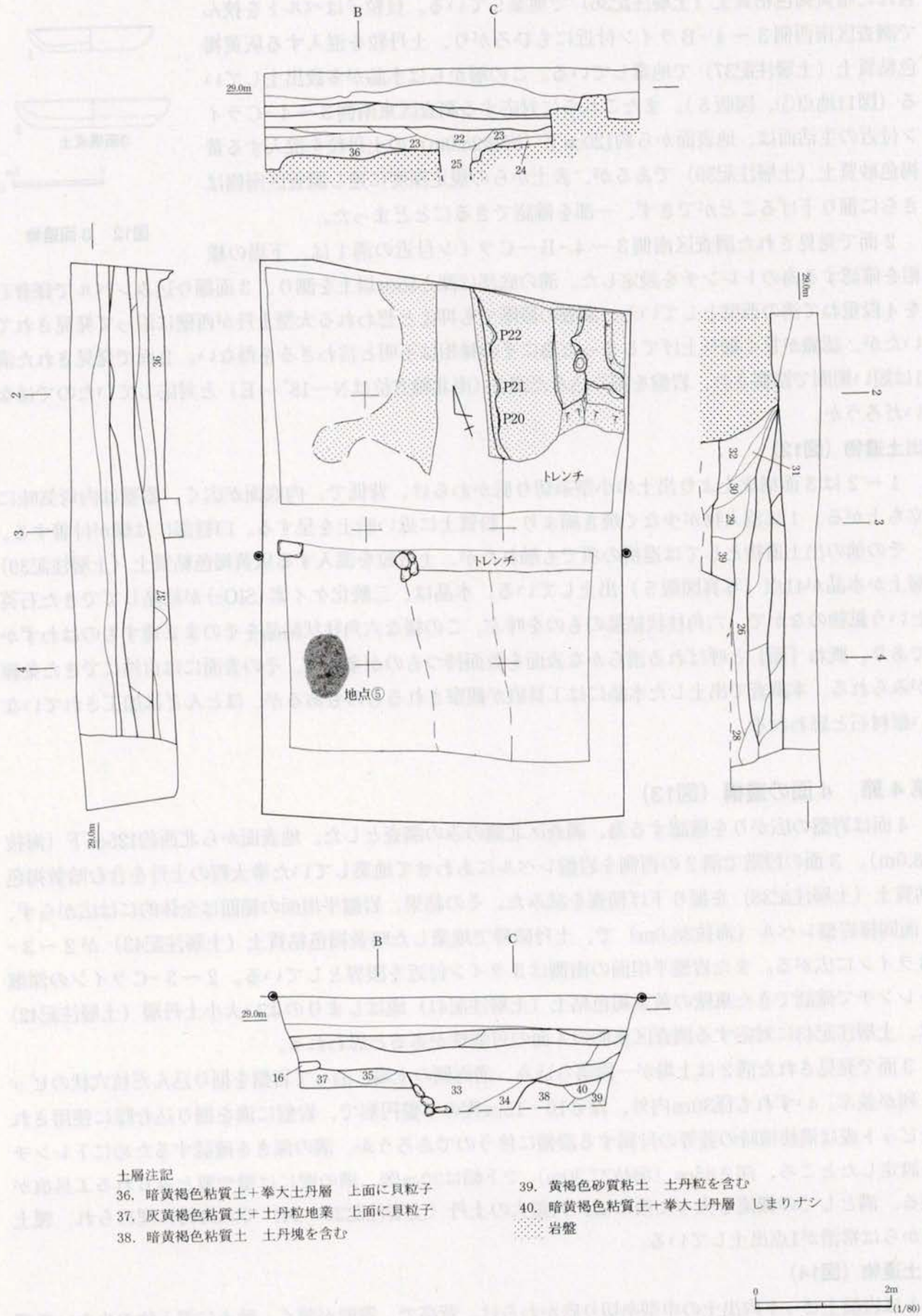
１～２は２面直上（１は図９地点③、２は図９地点④、ともに裏向き）より出土の大型糸切り底かわらけ。背高気味で、器壁は内弯気味に立ち上がる。1は口唇部でやや外反する。

３は２面構成土より出土の丸瓦。凸面の縄目痕はナデでほとんどすり消されている。凹面は糸切り痕と布目痕が顕著に残る。側面、端面ともにヘラ削りで面取りされ、側縁も広く面取りされる。焼成不良の為、淡橙色～肌色を呈する。

第３節　第３面の遺構（図11）

3面は地表面から北西約110㎝下（海抜28.15m）、南西約135㎝下（海抜27.85m）で確認できた。1面の段階で発見されていた調査区北東隅2－Ｃライン付近の突出した岩盤は、2面の構成土を剥がすと西側、南側ともに落ち込む。西側には海抜28.15m前後で岩盤平坦面がひろがり、その岩盤を掘り込んだ溝2が発見された。溝２の南北軸方位はN―18°―Eで、突出した岩盤とほぼ同一方向である。溝東側上場には溝と切り合う径25㎝内外、深さ10～15㎝程の半楕円形ピットが並んで３基あるが、溝西側上場にはそれに対応するピットはない。また、南側の落ち込みは、２面の段階で様相の異なっていた黒褐色粘質土（土層注記30）～黄褐色粘土（土層注記32）を掘り下げた後に岩盤斜面が確認できる。人為的に加工してある様に観察されたが、風化してたのか斜面には工具痕等の痕跡はみられなかった。

溝２の西側１～３-Ｂライン付近は、岩盤レベルにあわせて上面に貝粒子が散在する拳大程の土丹を



土層注記

36. 暗黄褐色粘質土＋拳大土丹層　上面に貝粒子
37. 灰黄褐色粘質土＋土丹粒地業　上面に貝粒子
38. 暗黄褐色粘質土　土丹塊を含む
39. 黄褐色砂質粘土　土丹粒を含む
40. 暗黄褐色粘質土＋拳大土丹層　しまりナシ

岩盤

図11　3面遺構

含んだ暗黄褐色粘質土（土層注記36）で地業している。貝粒子はベルトを挟んで調査区南西側３～４-Ｂライン付近にもひろがり、土丹粒を混入する灰黄褐色粘質土（土層注記37）で地業している。この層からは水晶が多数出土している（図11地点⑤、図版５）。またこれらに対応する調査区東南側３～４-Ｃライン付近の生活面は、地表面から約120㎝下（海抜28.0m）の土丹粒を混入する黄褐色砂質土（土層注記39）であるが、表土からの規定深度に達し調査区南側はさらに掘り下げることができず、一部を確認できるにとどまった。

図12　３面遺物

２面で発見された調査区南側３～４-Ｂ～Ｃライン付近の溝１は、下場の様相を確認する為のトレンチを設定した。溝の底部は深さ55㎝以上を測り、３面掘り込みレベルで鎌倉石を４段重ねて溝の西壁としていた。調査の段階でも抑えと想われる大型土丹が西壁に沿って発見されていたが、認識が甘く掘り上げてしまった為にその様相は不明と言わざるを得ない。２面で発見された溝1は短い期間で踏襲され、岩盤を掘り込んだ溝２（南北軸方位はＮ―18°―Ｅ）と対応していたのではないだろうか。

出土遺物（図12）

１～２は３面構成土より出土の小型糸切り底かわらけ。背低で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がる。１は混入物が少なく焼き締まり、粉質土に近い胎土を呈する。口唇部には煤が付着する。

その他の出土遺物としては遺構の項でも触れたが、土丹粒を混入する灰黄褐色粘質土（土層注記39）層上か水晶が41点（写真図版５）出土している。水晶は、二酸化ケイ素（SiO_2）が結晶してできた石英という鉱物のなかで、六角柱状結晶のものを呼ぶ。この様な六角柱状結晶をそのまま遺すものはわずかであり、概ね『面』と呼ばれる滑らかな表面を数面持つものが多数で、その表面には自然にできた条線がみられる。本調査で出土した水晶には工具痕が観察されるものもあるが、ほとんどは加工されていない原材石と思われる。

第４節　４面の遺構（図13）

４面は岩盤の広がりを確認する為、調査区北側のみの調査とした。地表面から北西約125㎝下（海抜28.0m）。３面の段階で溝２の西側を岩盤レベルにあわせて地業していた拳大程の土丹を含む暗黄褐色粘質土（土層注記38）を掘り下げ精査を試みた。その結果、岩盤平坦面の範囲は全体的には広がらず、３面同様岩盤レベル（海抜28.0m）で、土丹破砕で地業した暗黄褐色粘質土（土層注記43）が２～３-Ｂラインに広がる。また岩盤平坦面の南側は３ライン付近を限界としている。２～３-Ｃラインの深堀トレンチで確認できた東壁の黄茶褐色粘土（土層注記41）或はしまりのよい大小土丹層（土層注記42）は、土層注記43に対応する調査区東側の４面の可能性があると思われる。

３面で発見された溝２は上場が一段落ち込み、溝両側の上場に沿って岩盤を掘り込んだ杭穴状のピット列が並ぶ。いずれも径30㎝内外、深さ10～15㎝程の不整円形で、岩盤に溝を掘り込む際に使用されたピット或は溝使用時の蓋等の付属する設備に伴うのであろうか。溝の深さを確認するためにトレンチを設定したところ、深さ85㎝（海抜27.30m）で下幅は30㎝弱、溝の壁には鑿や鏨とみられる工具痕が残る。溝としての機能を失った後には、人頭大の土丹（土層注記25・44）で人為的に埋められ、覆土中からは常滑が1点出土している。

出土遺物（図14）

１は岩盤上ピット内出土の中型糸切り底かわらけ。背高で、器壁が薄く、胎土に混入物の少ない所謂薄手丸深型といえる。内底面に煤が付着する。

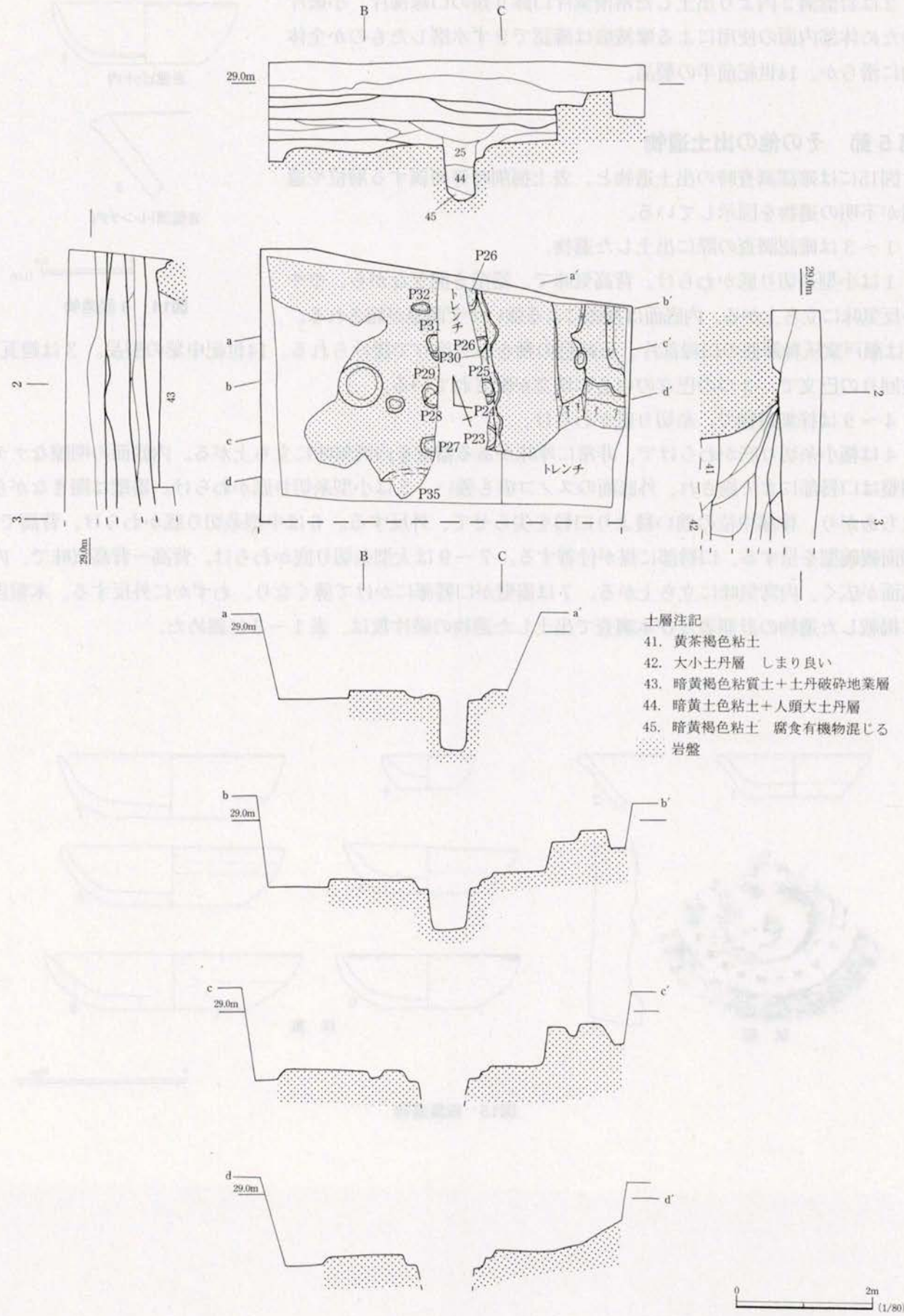

B
C
29.0m
25
44
45
P26
a′
b′
c′
d′
P32
トレンチ
P31
P26
P30
P25
P29
P28
P24
P23
P27
トレンチ
P35
a
b
c
d
2
3
43
41
42
29.0m
土層注記
41. 黄茶褐色粘土
42. 大小土丹層　しまり良い
43. 暗黄褐色粘質土＋土丹破砕地業層
44. 暗黄土色粘土＋人頭大土丹層
45. 暗黄褐色粘土　腐食有機物混じる
岩盤
0
2m
(1/80)

図13　4面遺構

2は岩盤溝2内より出土した常滑窯片口鉢Ⅱ類の口縁部片。小破片のため体部内面の使用による摩滅痕は確認できず水磨したものか全体的に滑らか。14世紀前半の製品。

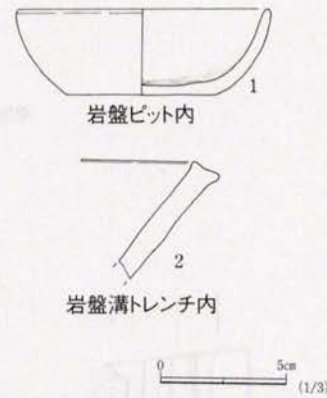


図14　4面遺物

第5節　その他の出土遺物

図15には確認調査時の出土遺物と、表土掘削時等帰属する層位や遺構が不明の遺物を図示している。

1～3は確認調査の際に出土した遺物。

1は小型糸切り底かわらけ。背高気味で、器壁を開きながら、やや外反気味に立ち上がる。内底面は指頭による強いナデ調整が施される。2は瀬戸窯灰釉卸皿の口縁部片。灰緑色の釉をハケ塗りで掛けられる。14世紀中葉の製品。3は鐙瓦。左回りの巴文で、3つの巴文の中心に珠文が配されている。

4～9は採集遺物で、糸切り底かわらけ。

4は極小糸切り底かわらけで、非常に厚味がある器壁を内湾気味に立ち上がる。内底面の明瞭なナデ調整は口唇部にまで施され、外底面のスノコ痕も強い。5は小型糸切り底かわらけ。器壁は開きながら立ちあがり、体部中位の強い稜より口唇を尖らせて、外反する。6は中型糸切り底かわらけ。背高で、側面観碗型を呈する。口唇部に煤が付着する。7～9は大型糸切り底かわらけ。背高～背高気味で、内底面が広く、内弯気味に立ち上がる。7は器壁が口唇部にかけて薄くなり、わずかに外反する。本報告に掲載した遺物の計測表及び本調査で出土した遺物の破片数は、表1～3に纏めた。

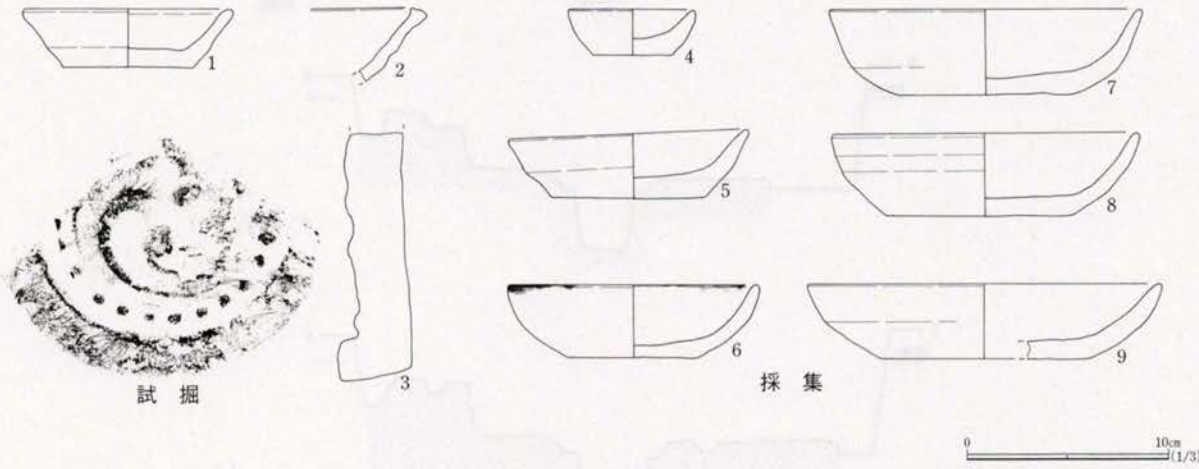


図15　採集遺物

第4章　調査成果

今回の調査は目前の崖面に岩盤が露出する位置に在り、調査区北半では岩盤面とそれを掘り込んだ遺構を発見したものの、調査可能深度範囲内では調査区南半は岩盤を確認し得なかった。参考までに、調査区南半では場所により、金属製ピンポール（長さ１m）が人力で押込むことが出来、未だ観えぬ下層下位には自然地形である岩盤を改削した遺構或は

生活面が在る可能性は想像に難くはない。多いとは言えぬ出土遺物から観ると、岩盤を箱状に掘り込んだ４面溝２下層出土遺物の年代から、調査地点付近は少なくともそれ以前から岩盤山裾を崩して活動域を拡げていることが窺え、これは先の章で触れた寺伝の記述や何処に辺るかはさて措き絵図の記載と矛盾するものではない。その後、2面に至るまで出土遺物の大きな年代差はなく、短期間に岩盤を開削しつつ造成と生活面の更新が行われた様だが、顕著な罹災面やその片付けを想わせる焼土や炭を内包する堆積土は確認していない。罹災の痕跡が看取し得るのは、出土遺物から観るとやや間が空く1面建物に利用されていた礎石表面にであり、その間堆積土層に観る造成が行われ遺構軸が変わることから、そうせざるを得ぬ何事かが遭ったことは窺える。

今一つ調査成果として挙げられるのは、３面遺構面上とした概ねB-４グリッド周辺の堆積土上面から出土した多量の水晶であろう（図版５）。付近の堆積土層に周囲との差異は殆ど無く、残滓や工具も調査深度と範囲内では発見されていない。これまでに主に寺院址関連の調査地点から水晶製五輪塔（斉木　他　1987、など）や水晶玉（斉木1990、馬淵1997）の報告はあるが、往時の極楽寺域内とはいえこれほど多くの製品化されていない水晶が出土するのは珍しい。分析を含めて今後の課題としたい。

齋木　秀雄　他　1987「鶴岡文庫建設に伴う鶴岡八幡宮二十五坊の調査　雪ノ下2丁目1地点　正覚院跡」『鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』鶴岡八幡宮境内遺跡発掘発掘調査団・鎌倉市鶴岡八幡宮

齋木　秀雄　1990『名越・山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡発掘調査団

馬淵　和雄　1997「材木座町屋遺跡（№261）材木座三丁目364番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13　平成8年度発掘調査報告（第1分冊）』　鎌倉市教育委員会

表１

遺構名	国内産陶土器類					舶載品	石製品			金属製品	計	%
	かわらけ	常滑窯	瀬戸窯	火鉢	瓦	白磁	硯	水晶	玉石			
1ａ面遺構内	29		1		8				2	7	47	5.1%
1ａ面遺構外	233	25	4	1	25	2			7	1	298	32.1%
1ｂ面遺構外	130	3			2	2	1		2	6	146	15.7%
2面遺構外	86	1	2		1				2	4	94	10.1%
3面遺構外	168	1			5			41	8		231	24.9%
4面遺構内	8	2							1		11	1.2%
4面遺構外	8										8	0.9%
採集	89	2	2		5				2		94	10.1%
計	751	34	9	1	46	4	1	41	24	18	929	100.0%
割合	80.8%	3.7%	1.0%	0.1%	5.0%	0.4%	0.1%	4.4%	2.6%	1.9%	100.0%	

表 2

図版番号	遺構名	種別	口径/長さ cm	底径/幅 cm	器高/厚 cm	備考（胎土・色調等）
図5-1	1a面 ピット6	土器 かわらけ・糸	(8.0)	(5.3)	2.4	胎土は多量の黒色・白色微砂、雲母、白針を含む橙色弱粉質土　外底面のスノコ痕が強い
図5-2	1a面 ピット6	土器かわらけ・糸	(12.9)	(7.7)	3.3	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を含む淡橙色弱粉質土外底面のスノコ痕が強い
図5-3	1a面 ピット12	平瓦	—	—	2.4	表面は黒灰色土、胎土は鉱物質をあまり混じえない灰白色土
図5-4	1a面 ピット5	平瓦	—	—	1.8	表面は灰黒色、胎土は白色小石、黒色微砂を含む灰白色軟質土
図5-5	1a面 ピット5	丸瓦	—	—	2.1	表面は灰白色土、胎土は白色小石、黒色微砂を含むやや軟質な灰白色土
図5-6	1a面 ピット5	瀬戸窯 灰釉卸皿	—	—	—	胎土は淡黄灰色土弱粘質緻密土　釉は灰緑色
図5-7	1a面 直上	土器 かわらけ・糸	(8.0)	4.5	2.2	胎土は雲母・白針・黒色微砂・白色微砂を含む橙色弱粉質土　外底スノコ痕
図5-8	1a面 直上	土器 かわらけ・糸	8.2	4.6	2.55	胎土は雲母・黒色微砂を含む橙色弱粉質土　煤付着　体部内面はぜている　外底面のスノコ痕が強い
図5-9	1a面 直上	土器 かわらけ・糸	(9.4)	5.4	2.3	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む肌色弱粉質土　煤付着　体部内面はぜている　外底面のスノコ痕が強い
図5-10	1a面 直上	土器 かわらけ・糸	(10.2)	(6.0)	2.4	胎土は多量の雲母と黒色微砂・白針を含む肌色弱粉質土　煤付着　体部内面はぜている　外底面のスノコ痕は不明瞭
図5-11	1a面 直上	土器 かわらけ・糸	(10.1)	(5.8)	2.8	胎土は雲母・白針・黒色微砂・白色微砂を含む淡橙色弱粉質土　外底面のスノコ痕は不明瞭
図5-12	1a面 直上	土器 かわらけ・糸	(13.0)	(7.8)	2.6	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む肌色弱粉質土　外底面のスノコ痕が強い
図5-13	1a面 直上	土器 かわらけ・糸	(12.0)	6.6	3.5	胎土は雲母・黒色微砂・土丹粒を含む淡橙色弱粉質土　表面全体的にはぜている　外底スノコ痕
図5-14	1a面 直上	瀬戸窯 天目茶碗	—		(4.4)	胎土は淡黄灰色弱粘質緻密土　黒色の鉄釉を掛ける
図5-15	1a面 直上	常滑窯 甕転用磨製品	—	—	—	
図5-16	1a面 直上	瓦器質 火鉢	(39.0)	(27.0)	10.6	表面は黒褐色～赤茶褐色、胎土は淡灰色を呈す
図5-17	1a面 直上	平瓦	—	—	2.2	表面は暗灰色、胎土は白色小石粒・黒色粗砂を含む灰色硬質土を呈する　凸面に三鱗文の押印文
図5-18	1a面 直上	丸瓦	—	—	2.1	表面は灰色、胎土は小石粒・黒色粗砂を含む灰白色土を呈する
図5-19	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	(7.2)	4.7	2.2	胎土は雲母・白針・黒色微砂・土丹粒を含む肌色弱粉質土　口唇部に芯だしの打ち欠き痕　外底スノコ痕
図5-20	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	(7.7)	5.2	2.0	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む淡肌色弱粉質土　外底スノコ痕が強い
図5-21	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	8.2	4.7	2.45	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土　外底スノコ痕
図5-22	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	(11.0)	7.0	3.0	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む淡肌色弱粉質土　外底スノコ痕
図5-23	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	(10.8)	(7.2)	3.0	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む肌色弱粉質土　表面全体的にややはぜている
図5-24	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	(10.6)	(5.8)	2.7	胎土は雲母・白針・黒色赤色微砂を含む肌色弱粉質土～粉質土　表面全体的にはぜている　煤が付着
図5-25	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	(10.0)	(4.6)	3.0	胎土は多量の雲母・白針・黒色微砂を含む肌色弱粉質土　煤が付着　外底スノコ痕
図5-26	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	(11.8)	(6.8)	2.9	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む肌色弱粉質土　表面全体的にはぜている
図5-27	1a面 構成土	土器 かわらけ・糸	11.7	7.2	3.2	胎土は雲母・白針・黒色微砂・土丹粒を含む暗肌色弱粉質土　煤が付着　外底スノコ痕
図5-28	1a面 構成土	瀬戸窯 平椀				胎土は淡黄色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色を呈する
図5-29	1a面 構成土	瀬戸窯 平碗		4.6		胎土は淡黄色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色を呈する
図5-30	1a面 構成土	常滑窯 甕押印文拓影				肩部に縦線と車輪文の組合せ
図5-31	1a面 構成土	丸瓦	—	—	1.9	表面は黒褐色、胎土は白色粗砂を含む淡黄白色土を呈する

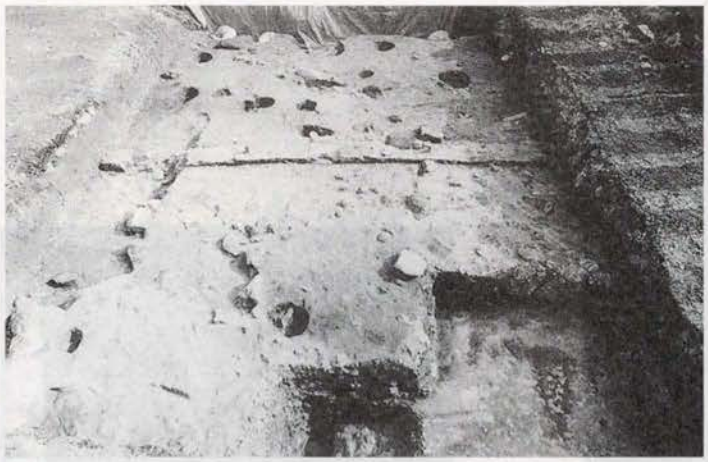
表 3

図版番号	遺構名	種別	口径/長さ cm	底径/幅 cm	器高/厚 cm	備考（胎土・色調等）
図5-32	1a面 構成土	丸瓦	—	—	2.4	表面は黒褐色、胎土は黒色微砂を含む白色土
図6-33	1a面 構成土	平瓦	—	—	2.4	表面は灰色、胎土は白色小石粒・黒色粗砂を含む灰白色土を呈する
図6-34	1a面 構成土	平瓦	—	—	1.7	表面は暗灰色、胎土は白色・黒色微砂を含む灰色土を呈する
図8-1	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	7.9	5.5	2.1	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土　外底スノコ痕
図8-2	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	8.0	5.7	2.4	胎土は雲母・白針・黒色微砂・土丹粒を含む暗肌色弱粉質土　口唇部に芯だしの打ち欠き痕　外底スノコ痕
図8-3	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	(7.9)	5.4	2.35	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土　外底スノコ痕
図8-4	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	(8.4)	(5.2)	2.2	胎土は多量の雲母・白針・黒色微砂を含む橙色弱粉質土～粉質土　外底スノコ痕
図8-5	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	(8.1)	(5.4)	2.4	胎土は雲母・黒色微砂を含む暗橙色弱粉質土　外底スノコ痕
図8-6	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	(8.0)	4.9	2.5	胎土は雲母・黒色赤色微砂・土丹粒を含む暗肌色弱粉質土　口唇部に芯だしの打ち欠き痕　外底面に煤付着
図8-7	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	(9.5)	(6.0)	2.5	胎土は雲母・黒色微砂を含む肌色弱粉質土外底面のスノコ痕不明瞭
図8-8	1b面 構成土（D6）	土器 かわらけ・糸	(9.8)	(6.6)	2.5	胎土は雲母・白針・黒色微砂・土丹粒を含む肌色弱粉質土　外底スノコ痕
図8-9	1b面 構成土	舶載品 白磁口兀碗	—	—	—	素地は白色弱粘質緻密土　釉は不透明な乳白色を呈する
図8-10	1b面 構成土	舶載品 白磁劃花文碗	—	(6.0)	—	素地は白色弱粘質緻密土　釉は不透明な乳白濁色を呈する
図8-11	1a面 構成土	石製品 丹波・鳴滝産系硯	—	8.3	1.9	
図10-1	2面 直上	土器 かわらけ・糸	12.4	7.0	3.1	胎土は雲母・白針・黒色微砂・土丹粒を含む肌色粉質～弱粉質土　煤が付着　外底スノコ痕
図10-2	2面 直上	土器 かわらけ・糸	12.0	7.0	3.1	胎土は雲母・白針・黒色微砂・小石粒を含む肌色弱粉質土　表面に鉄分が付着　外底スノコ痕
図10-3	2面 構成土	丸瓦	—	—	1.9	表面、胎土ともに淡橙色を呈し、胎土は白色小石粒や微砂を含む　淡橙色土器質土
図12-1	3面 構成土	土器 かわらけ・糸	(6.9)	(4.6)	1.2	胎土は雲母・黒色微砂をわずかに含む淡橙色粉質土　煤が付着　外底スノコ痕
図12-2	3面 構成土	土器 かわらけ・糸	(8.3)	(6.5)	1.55	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂を含む肌色弱粉質土　外底スノコ痕
図14-1	4面岩盤 ピット内	土器 かわらけ・糸	(10.0)	(6.0)	3.2～3.4	胎土は雲母・白針・黒色微砂をわずかに含む肌色弱粉質土　煤が付着　外底スノコ痕
図14-2	4面岩盤 溝トレンチ内	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	胎土は小石粒・石英を含む黒灰色土　器表は暗茶褐色を呈する
図15-1	試掘	土器 かわらけ・糸	8.2	5.2	2.3	胎土は雲母・白針・多量の黒色微砂と白色微砂を含む暗色弱粉質土　内底面の指頭ナデが強い　外底スノコ痕
図15-2	試掘	瀬戸窯 灰釉卸皿	—	—	—	胎土は淡黄灰色弱粘質緻密土　釉は灰緑色を呈する
図15-3	試掘	鎧瓦	(14.2)			表面灰黒色、胎土は鉱物質を混じえる灰白色土を呈する
図15-4	採集	土器 かわらけ・糸	(5.0)	(3.2)	1.8	胎土は白針・黒色微砂・土丹粒を含む橙色弱粉質土　内面のナデ調整、外底面のスノコ痕が強い
図15-5	採集	土器 かわらけ・糸	9.4	6.1	2.4～2.7	胎土は雲母・白針・黒色微砂・白色微砂を含む肌色弱粉質土　外底面にスノ痕
図15-6	採集	土器 かわらけ・糸	(9.8)	(5.2)	2.9	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土　煤が付着　外底スノコ痕
図15-7	採集	土器 かわらけ・糸	12.3	6.9	3.4	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む淡橙色弱粉質土　外底スノコ痕
図15-8	採集	土器 かわらけ・糸	12.0	7.4	3.3	胎土は雲母・白針・黒色微砂・土丹粒を含む橙色弱粉質土　外底スノコ痕
図15-9	採集	土器 かわらけ・糸	(14.0)	(8.3)	3.0	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む肌色弱粉質土　外底スノコ痕

（引用・参考文献）

赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館.
赤星直忠　1983「8.極楽寺馬場ヶ谷内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.
上本進二　2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『神奈川県逗子市桟敷戸遺跡発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所調査研究報告第26集.227～246頁.東国歴史考古学研究所.
大三輪龍彦・玉林美男他　1980『極楽寺旧境内遺跡』極楽寺旧境内遺跡発掘調査団.
鎌倉市史編纂委員会　1979『鎌倉市史　史料編　第三』吉川弘文館.
鎌倉市教育委員会編　1990『としよりのはなし』鎌倉市文化財資料第７集.鎌倉市教育委員会.
鎌倉市教育委員会　1998「６．極楽寺旧境内遺跡」『鎌倉の埋蔵文化財３』鎌倉市教育委員会.
齋木秀雄　1998『極楽寺旧境内遺跡』極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団
齋木秀雄・粂健一　2000「西方寺跡（№219）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16（第１分冊）.鎌倉市教育委員会.
白井永二編　1976『鎌倉事典』東京堂出版.
鈴木庸一郎・木村吉行　2000a『極楽寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告90.（財）かながわ考古学財団.
鈴木庸一郎・木村吉行　2000b『極楽寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告93.（財）かながわ考古学財団.
鈴木庸一郎・木村吉行　2000ｃ『一升枡遺跡所在やぐら群』かながわ考古学財団調査報告100.（財）かながわ考古学財団.
鈴木庸一郎・菊川英政・松尾宣方　2001『「古都鎌倉」を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・（財）かながわ考古学財団.
高柳光寿・貫達人　1959『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
田代郁夫・継実・大坪聖子　1995「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査「」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集.東国歴史考古学研究所.
田代郁夫・継実・大坪聖子　1996a「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集.東国歴史考古学研究所.
田代郁夫・継実・大坪聖子　1996b「極楽寺旧境内遺跡内横穴墓」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集.東国歴史考古学研究所.
田代郁夫　1997a「極楽寺旧境内遺跡（№291）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13（第１分冊）.鎌倉市教育委員会.
田代郁夫　1997b「極楽寺旧境内遺跡（№291）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13（第２分冊）.鎌倉市教育委員会.
田代郁夫・宗臺秀明　1998「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査「」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集.東国歴史考古学研究所.
田代郁夫・田村良照　2002「二ノ谷横穴群」『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集.東国歴史考古学研究所.
継　実　1992「３　極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団.
継　実　1998「極楽寺旧境内遺跡（№291）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第１分冊）.鎌倉市教育委員会.
継　実・宗臺富貴子・田代郁夫他　1999『極楽寺中心伽藍跡群遺跡』東国歴史考古学研究所調査研究報告第25集.東国歴史考古学研究所.
貫達人・川副武胤　1980　『鎌倉廃寺事典』　有隣堂
長谷川厚・大塚健一　1999a『極楽寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告72.（財）かながわ考古学財団.
長谷川厚・大塚健一　1999b『一升桝遺跡所在やぐら群』かながわ考古学財団調査報告73.（財）かながわ考古学財団.
福田誠　2003『五合枡遺跡（仏法寺跡）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会.
松尾宣方　1983a「４.極楽寺旧境内北やぐら」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.
松尾宣方　1983b「９.極楽寺枡形遺構」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.
桝渕規彰　2002「鎌倉市極楽寺一丁目23の平成11年度急傾斜地崩壊対策地業に伴う立会調査」『神奈川県埋蔵文化財調査報告44』神奈川県教育委員会.
馬渕和雄　1999『極楽寺旧境内遺跡』極楽寺旧境内遺跡発掘調査団.
三浦勝男　1968『鎌倉の古絵図』Ⅰ.鎌倉国宝館図録第15集　鎌倉国宝館.
見上敬三・江藤哲人　1986　『鎌倉市文化財総合目録　地質・動物・植物篇』　鎌倉市教育委員会.
宮坂淳一・根本志保　2003『真言院北やぐら群』かながわ考古学財団調査報告156.（財）かながわ考古学財団.
宮田眞　1997『極楽寺旧境内遺跡内やぐら』極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団.

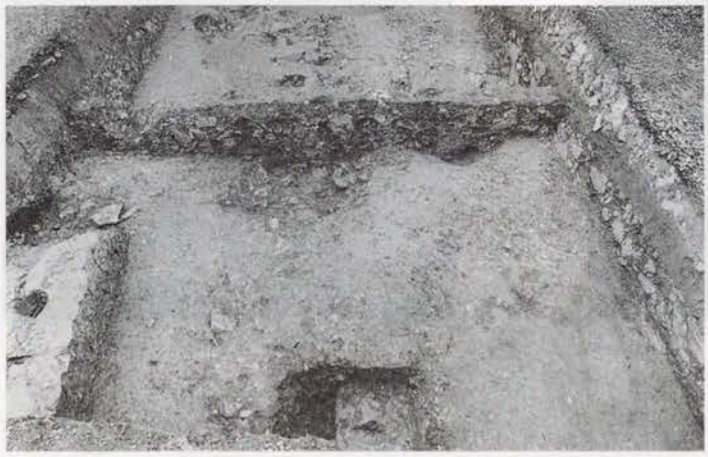
図版 1



1．1a面全景（北から）

2．建物址（東から）

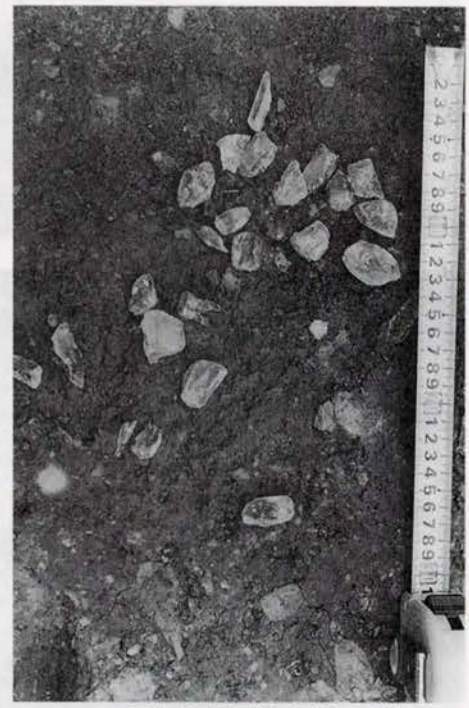
3．1b面全景（北から）



4．２面全景（北から）

図版 2

5．３面全景（北から）



6. 3面水晶出土状況（東から）

7．４面全景（調査区北側のみ・北から）

8．岩盤溝トレンチ（北から）

9．西側堆積土層（東から）

図版 3

5-8

5-9

5-21

8-1

12-1

12-2

6-19

8-2

8-3

5-13

6-22

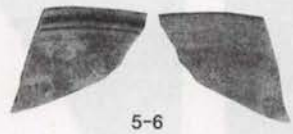
6-27

10-1

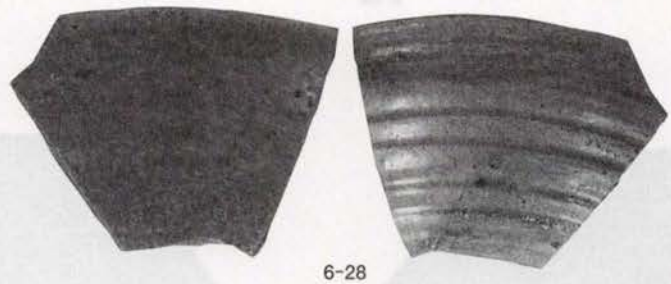
10-2

14-1

8-10


5-6

6-29

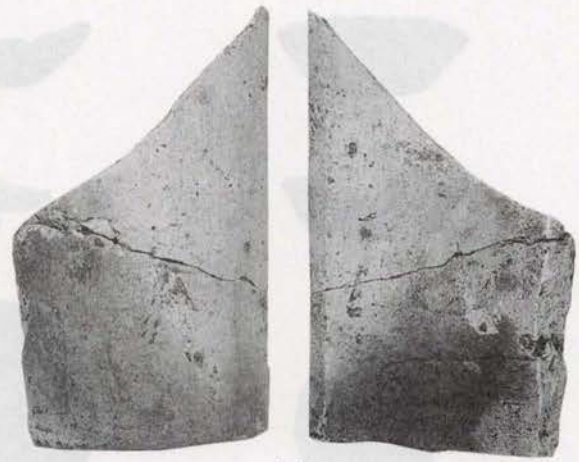

6-28

8-11

5-16

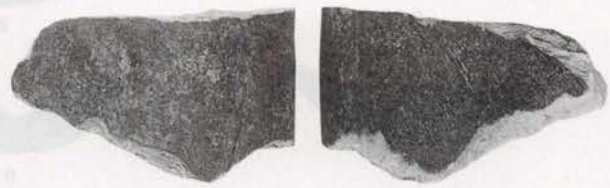
図版 4

5-3



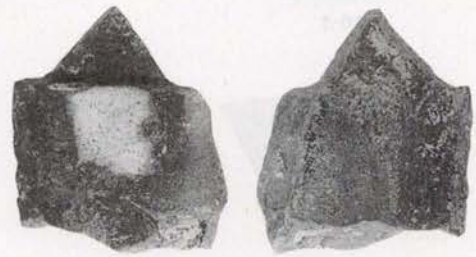
5-5

5-17

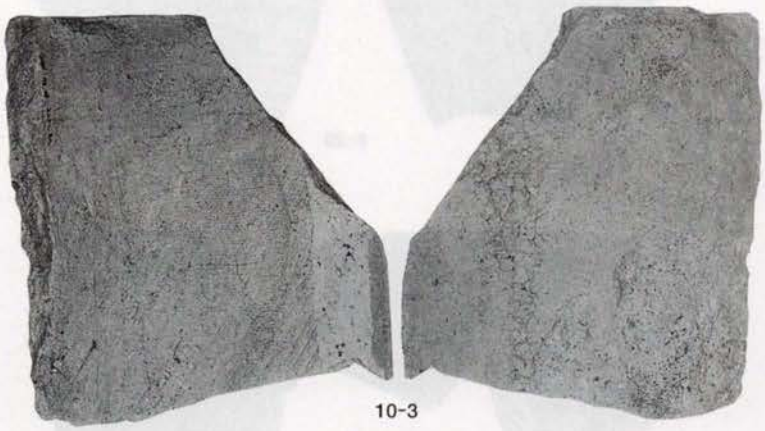


6-31

6-33



6-32

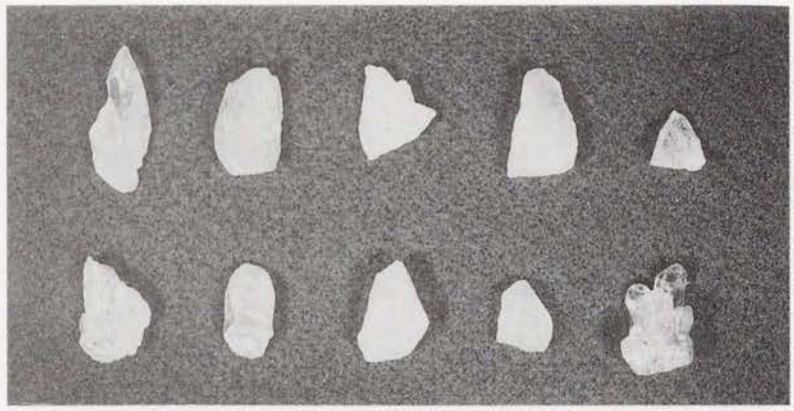


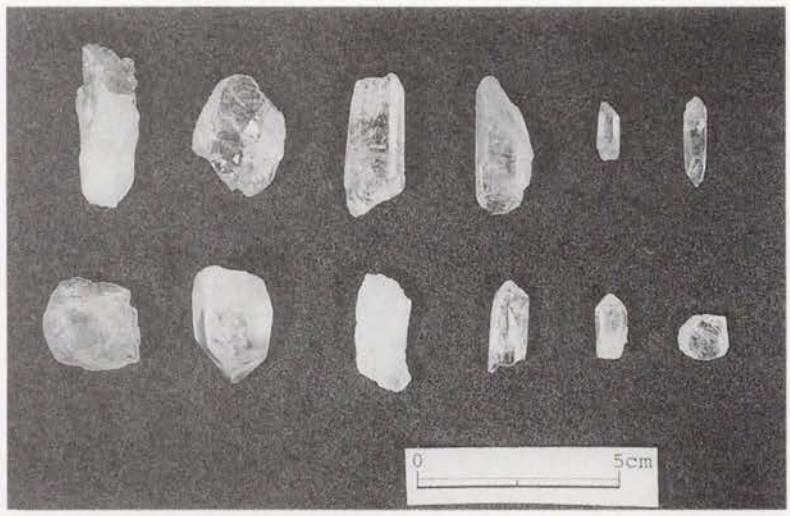
10-3

15-3

図版 5

水晶





横小路周辺遺跡（よここうじしゅうへんいせき）　(No.259)

二階堂字四ツ石115-3地点

例　言

1. 本書は鎌倉市二階堂字四ツ石115-3の一部に所在する、個人専用住宅の建てかえに先だち行われた、横小路周辺遺跡（県遺跡台帳№259）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成15年8月8日から同年9月27日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担して作成し、原稿執筆は福田 誠が担当した。編集は福田が行った。
4. 本書に使用した写真のうち全景写真・個別遺構写真は鈴木絵美が、遺物撮影は古田土俊一が行った。
5. 発掘調査・整理作業の体制は以下の通りである。
   発掘調査
   主任調査員　福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
   調　査　員　石元道子　鈴木絵美　本城 裕
   調査補助員　古田土俊一　鈴木弘太　長友純子（鶴見大学大学院）　久保田裕美
   　　野崎美帆　山口正紀（鶴見大学）村山 卓（立正大学）
6. 整理作業
   主任調査員　福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
   調　査　員　石元道子　菊川 泉　古田土俊一　鈴木絵美
7. 発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

本 文 目 次

第1章　調査地点の位置と歴史的環境……32

第2章　調査の経過と層序……33

第3章　検出した遺構……39
　1面……39
　2面……39
　3面……39
　4面……39
　5面……39
　6面……39
　7面……39

第4章　出土した遺物……47
　1面・2面まで・2面の遺物……47
　3面まで・4面まで・4面の遺物……47
　5面まで・6面遺構・7面遺構の遺物……47

第5章　まとめ……47

挿 図 目 次

図1　遺跡位置図……33
図2　本調査地点と周辺の遺跡……34
図3　周辺遺跡の遺構配置図……35
図4　調査グリッド割付図……36
図5　西壁・東壁土層断面図……37
図6　北壁・南壁土層断面図……38
図7　1面全測図……40
図8　2面全測図……41
図9　3面全測図物……42
図10　4面全測図……43
図11　5面全測図……44
図12　6面全測図……45
図13　7面全測図……46
図14　1面・2面まで・2面の遺物……50
図15　3面まで・4面まで・4面の遺物……51
図16　5面まで・6面遺構・7面遺構の遺物……52

表1　遺物法量表

図 版 目 次

図版1　西壁・東壁土層断面・1面全景……53
図版2　2面全景……54
図版3　3面・4面全景……55
図版4　5面全景……56
図版5　6面全景・遺構……57
図版6　6面遺構・7面全景……58
図版7　1面・2面まで・2面の遺物……59
図版8　1面・2面まで・2面の遺物……60
図版9　3面まで・4面まで・4面の遺物……61
図版10　3面まで・4面まで・4面の遺物……62
図版11　5面まで・6面遺構・7面遺構の遺物……63
図版12　5面まで・6面遺構・7面遺構の遺物……64

第１章　調査地点の位置と歴史的環境

遺跡地は鎌倉宮の南隣に位置している。古代において鎌倉（郷）には郡衙がおかれ政治経済の中心地であったと考えられている。当地は鎌倉（郷）の東側、近接する荏柄天神を中心とした荏草（えから）郷に含まれると考えられる。鎌倉幕府成立以前の鎌倉の様子は、中世に行われた都市開発に伴う大規模な土木工事等により破壊された可能性や、この時期の調査数が少ないこともあり不明な点が多い。しかし平直方の娘婿となった源頼義や子の義家以降、源氏相伝の地となり更に源頼朝入府以降、荏草は鎌倉に組み込まれていったのかもしれない。相模国府から鎌倉、荏柄を経て抜け房総半島方面に抜ける、後に六浦道として整備される幹線道路が調査地の南方を東西に通る。西方から御霊神社、甘縄神明神社、窟堂、荏柄天神社、杉本寺といった古い寺社が東西に並ぶことを見ても古代より拓けていた地域であるといえる。荏柄天神参道脇の縄文土器の出土[1]。南御門の弥生時代の集落。国指定史跡永福寺跡で出土している土師器、竪穴住居[2]等周辺地域では古くから人々が居住していた。

住環境が大きく変化するのは、源頼朝が鎌倉に入り大倉に居を構えて以降になる。幕府を中心に有力御家人たちの屋敷が造られていった。また、永福寺が創建されそれに伴い二階堂大路が新たに造られた。六浦道と二階堂大路の交差点でもある大倉の辻の東側を中心に鎌倉初期の街区が形成されていったと思われる。遺跡地の隣にある鎌倉宮（大塔宮）の境内は東光寺跡と伝えられている。民部大夫行光（二階堂氏）が承元三年（1209）永福寺脇に建てとする説と、頼朝が建久四年（1193）に永福寺傍に建立した薬師堂が当寺の前身であるとする説がある。

町名の二階堂は、源頼朝が創建した永福寺三堂の内「二階堂」名が残ったものである。

16世紀末、徳川家康関東入国以来、周辺の集落が集まって二階堂村となる。江戸時代には村の一部が天領に、後の大部分が社寺に寄進されていた。寄進されていた社寺は東慶寺、覚園寺、杉本寺、荏柄天神一乗院があげられる。天領は代官支配であったが、幕末には幕府の退勢が目立ち、次第に諸大名に預けられていった。嘉永五（1852）年に彦根藩、安政元（1854）年に長州萩藩、安政六（1859）年に肥後熊本藩、文久３（1861）年に下総佐倉藩と次々に預け替えとなる。慶応3（1867）年に佐倉藩から再び天領に戻ったが、翌年大政奉還があり明治維新となった。

明治４（1871）年廃藩置県が実施され、社寺領は上知され二階堂村は明治新政府のもと神奈川県第16大区7番組に編入された。明治９（1876）年の改革で、第16大区７小区に入り二階堂となった。明治17（1884）年に谷合四か村の組合わせに入り、明治22（1889）年の町村制で東鎌倉村に、明治27（1894）年には東西鎌倉村が合併し鎌倉町が成立した。昭和14（1939）年に腰越村と合併し、鎌倉市制がしかれ鎌倉市二階堂となる。

註１　『鎌倉市史』考古編　P34　1．荏柄天神社前遺跡　1959　吉川弘文館
註２　永福寺跡平成２年池の調査時に水際で火災住居跡を確認している。

参考文献
『鎌倉廃寺事典』有隣堂　1980年『鎌倉市史』社寺編　鎌倉市　吉川弘文館　1959年
『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会　1971年『鎌倉事典』東京堂出版　1976年

第２章　調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、平成15年８月８日から表土掘削を開始し同年９月27日まで行われた。遺跡の位置は北緯35°19′19″、東経139°34′12″である。グリッドは、住宅の建築範囲を基準に南北軸を設けた。調査面積約78㎡。グリットの基準は、鎌倉市４級基準点（第Ⅸ座標系）の050（X=-75,148.630 Y=-23,932.221）と051（X=-75,118.895　Y=-23,902.009）を移動した西原点（X=-75、174.847 Y=-23、945.114）と東原点（X=-75168.899 Y=-23937.705）である。２点間を結んだ軸線は真北から50°15′19″東に振れる。使用したレベルは、国指定史跡永福寺跡内に設置されている永福寺跡測量基準点№３（海抜18.227m）を移動して設置した西原点（海抜15.445m）と東原点（海抜15.360m）を使用した。

調査区は、現地表（海抜15.30m）から約50～60㎝の表土層を重機で掘削した。地表面はほぼ平坦で、したがって検出した第１面もほぼ平坦な面（海抜14.70m）である。

試掘調査により、表土から地山面まで約140㎝の深さになることを確認した。その後、壁面を利用して土層の堆積状況を観察した。結果、中世地山の黒褐色粘質土層までの間に、大きく６期の地業面を確認した。この結果を踏まえて、１面～７面（中世地山面）までの調査を行うこととした。

各面の概要は以下の通りである。１面は２層の灰色粘質土層により構成されている。２面は５層の土丹地業層から構成され、１面と同様に遺構は少ない。３面は土丹地業層から構成され１・２面と同様で遺構は少ない。平坦面が広がる。４面も同じく土丹地業層から構成され、西側で落ち込みが検出される。５面は黒褐色粘質土層から構成されている。東西方向に走る浅い溝２条と轍状の凹み、柱穴を検出する。６面は淡褐色粘質土層と暗褐色粘質砂層から構成され、礎板入りの柱穴（建物）と多くの柱穴を確認する。７面は黒褐色粘質土層の中世地山である。南北方向に伸びる溝状の落ち込みを確認する。

９月27日に器材等の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構の詳細は次章に譲る。

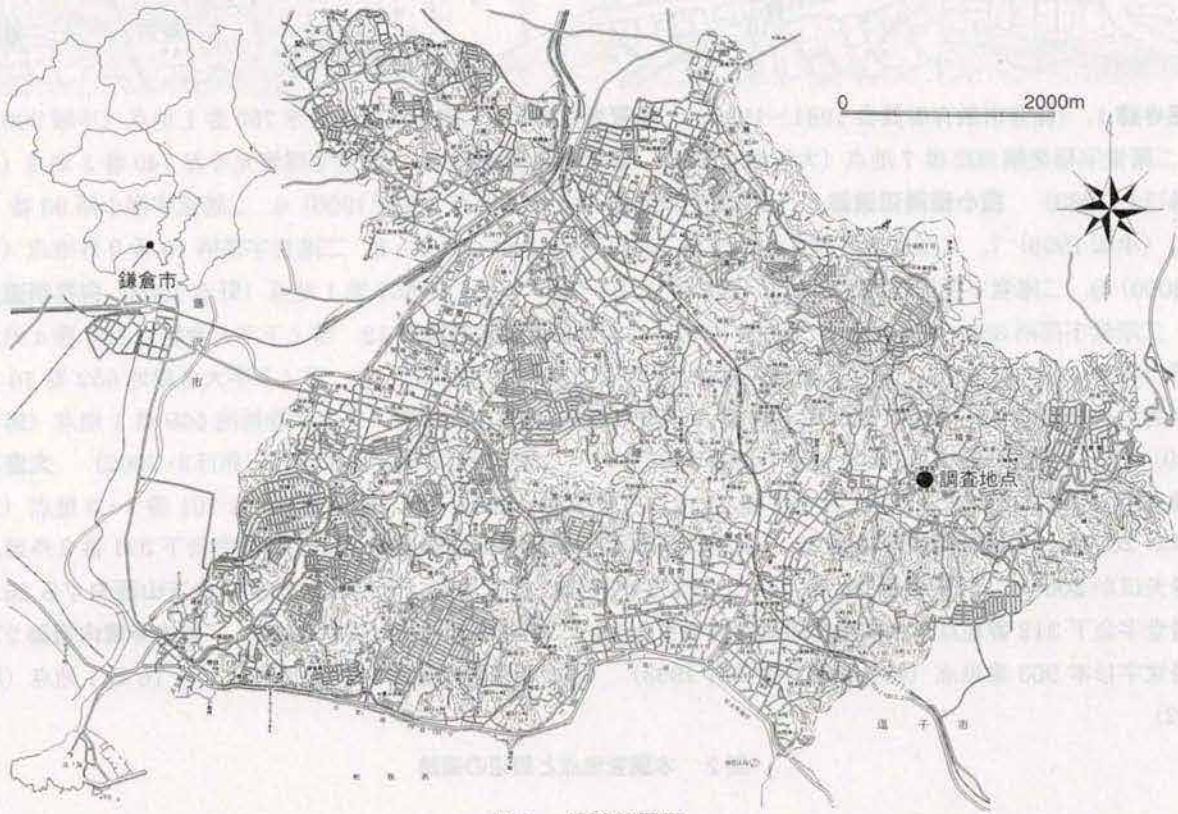
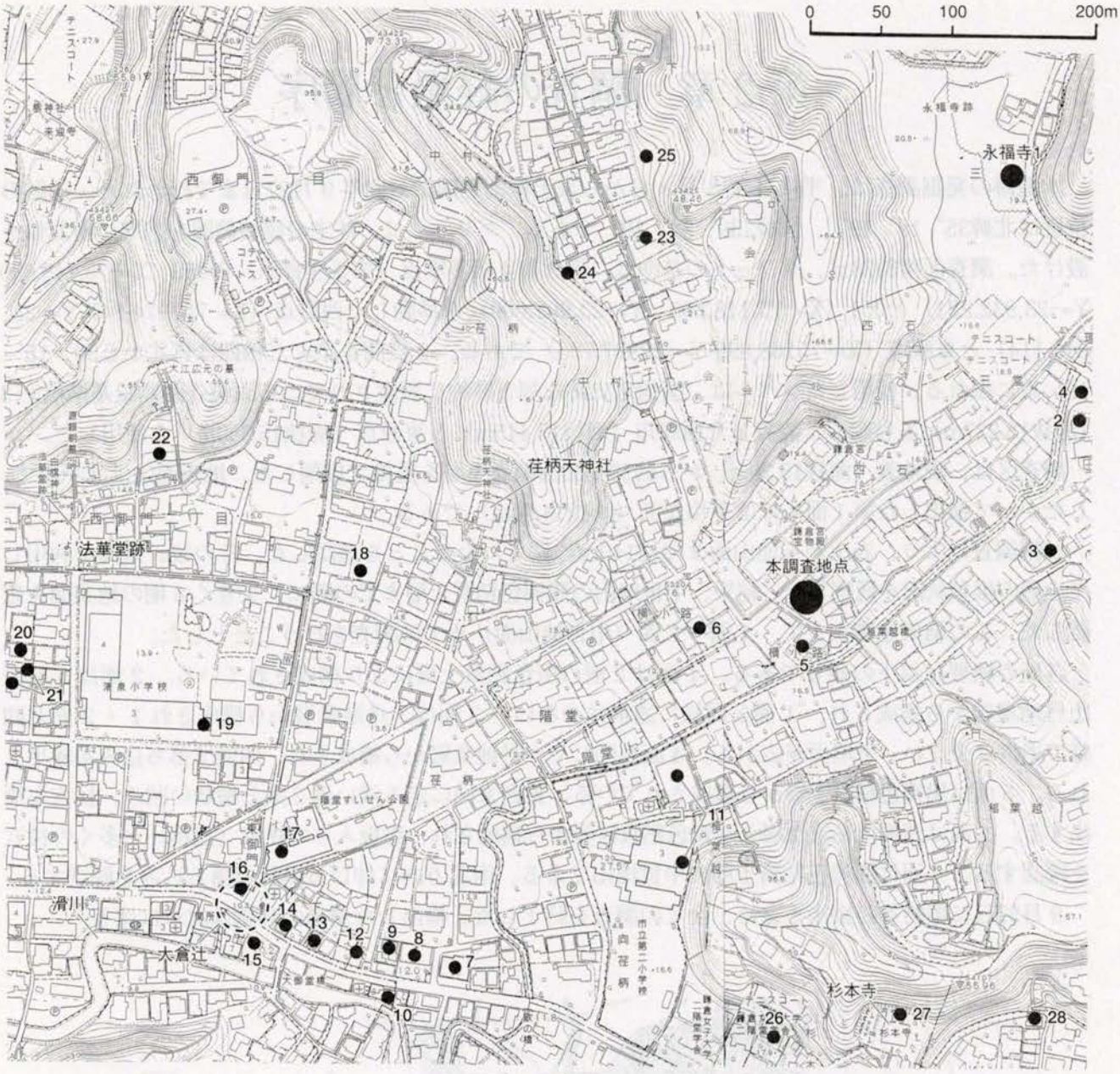


図１　遺跡位置図



永福寺跡 1.（鎌倉市教育委員会 1981～1996）　**理智光寺跡** 2. 二階堂字理智光寺 750 番 1 地点（手塚 2001）3. 二階堂字稲葉越 802 番 7 地点（大河内 1991）　**理智光寺橋遺跡** 4. 二階堂字理智光寺谷 749 番 1 地点（大三輪ほか 1983）　**横小路周辺遺跡** 5. 二階堂字横小路 110 番 3 地点（宗臺 1996）6. 二階堂字横小路 93 番 11 地点（手塚 1999）7. 二階堂字荏柄 9 番 1 地点（菊川英政 1990・1991）8. 二階堂字荏柄 10 番 9 外地点（福田 2000）9. 二階堂字荏柄 10 番 1 地点（原 2003）10. 雪ノ下五丁目 557 番 1 地点（野本 1998）**向荏柄遺跡** 11. 二階堂字荏柄 880・874 番地点（馬淵 1985）　**大倉幕府周辺遺跡群** 12. 雪ノ下字大倉耕地 565 番 4 地点（菊川英政 1996）13. 雪ノ下字天神前 562 番 29 地点（福田ほか 1996）14. 雪ノ下字大倉耕地 652 番 16 地点（菊川泉 2001）15. 雪ノ下四丁目 567 番 7 地点（馬淵 2004）16. 雪ノ下字大倉耕地 569 番 1 地点（馬淵 1990）17. 二階堂字荏柄 38 番 1 地点（馬淵 1993）18. 二階堂字荏柄 38 番 1 地点（原ほか 2002）　**大倉幕府跡** 19. 未報告 20. 雪ノ下三丁目 701 番 14 地点（滝澤ほか 2004）21. 雪ノ下三丁目 701 番 1・3 地点（馬淵ほか 2004）　**北条義時法華堂跡** 22.（松尾ほか 2005）**覚園寺旧境内遺跡** 23. 二階堂字会下 331 番 3 外地点（降矢ほか 2005）　**天王寺跡やぐら** 24. 二階堂字中村 384 番 1 地点（田代ほか 1995）**会下山西やぐら** 25. 二階堂字会下 312 番地点　**杉本寺周辺遺跡内やぐら** 26. 二階堂字浄明寺（田代 1996）　**杉本寺境内遺跡** 27. 二階堂字杉本 903 番地点（鎌倉市教育委員会 1983）　**浄妙寺旧境内遺跡** 28. 浄明寺三丁目 16 番 1 地点（継 2002）

図 2　本調査地点と周辺の遺跡

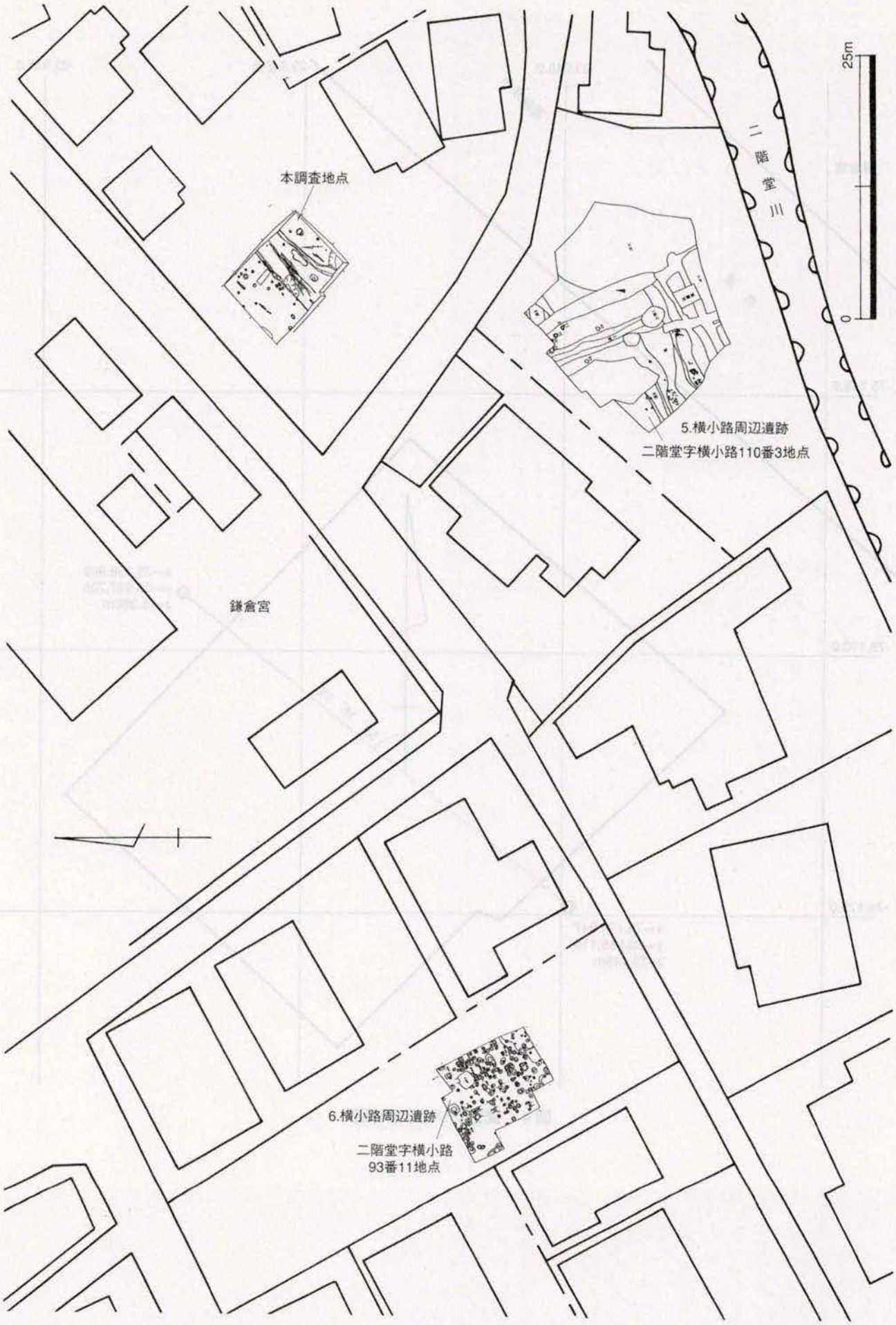


図3　周辺遺跡の遺構配置図

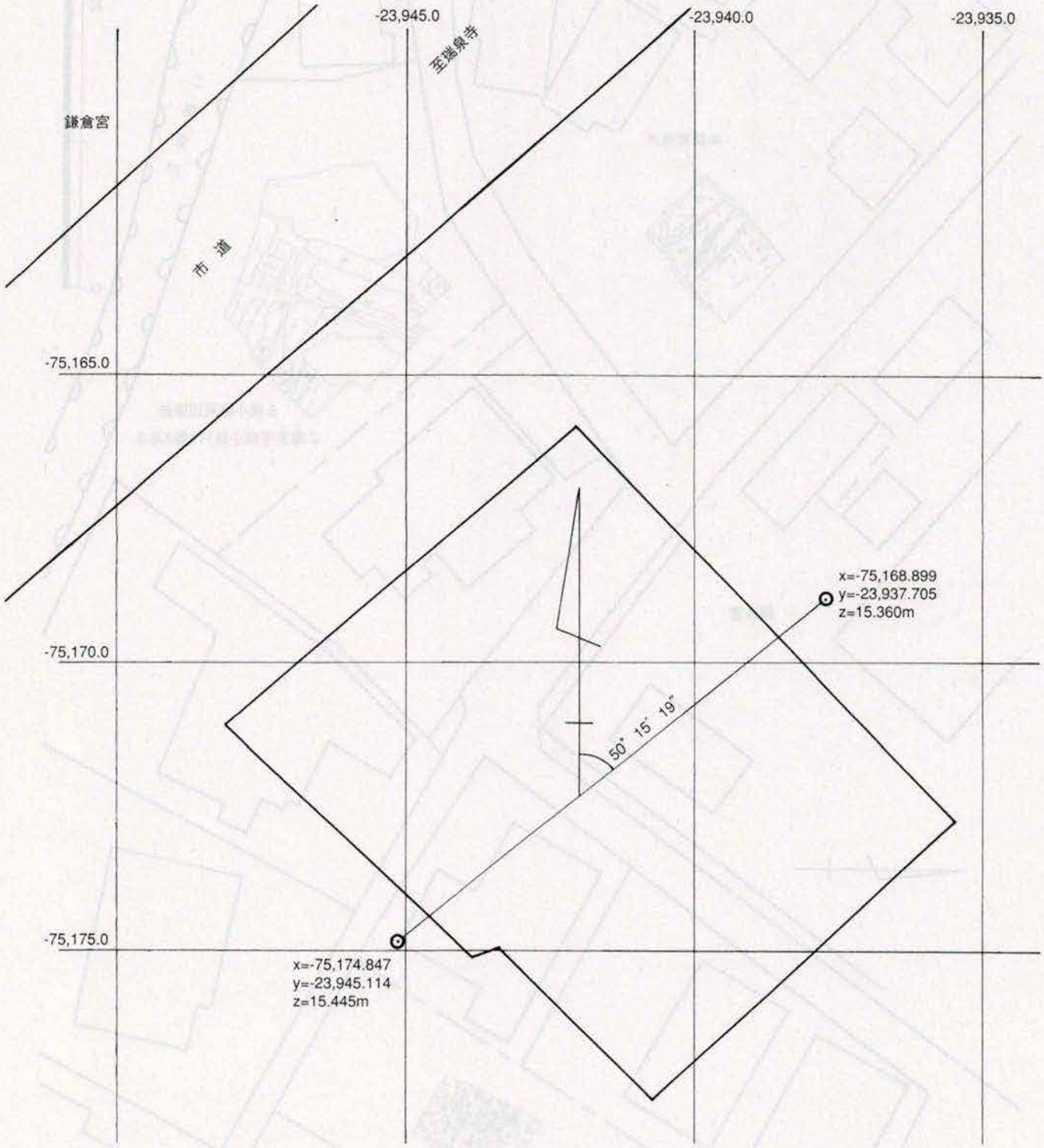


図4　調査グリッド割付図

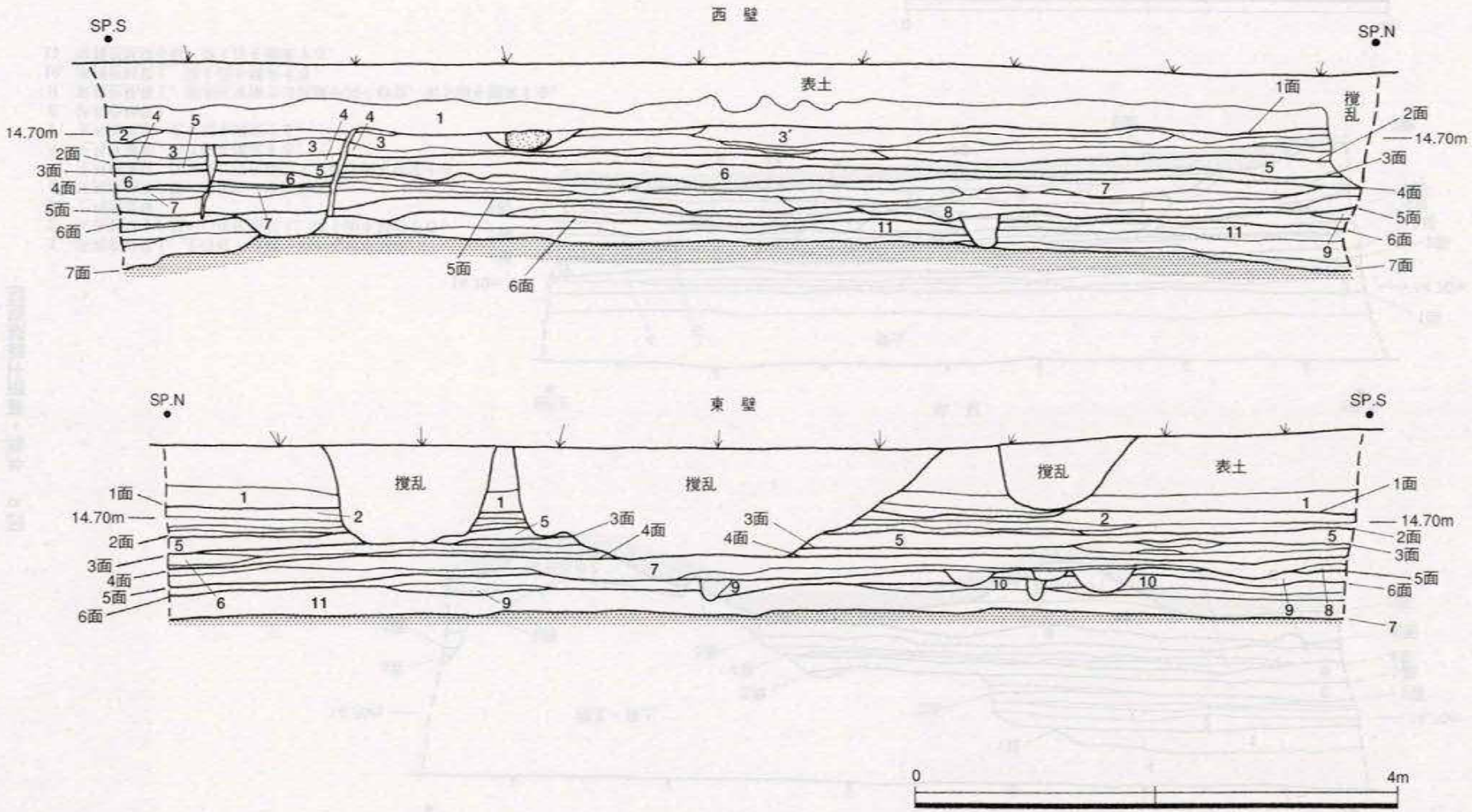
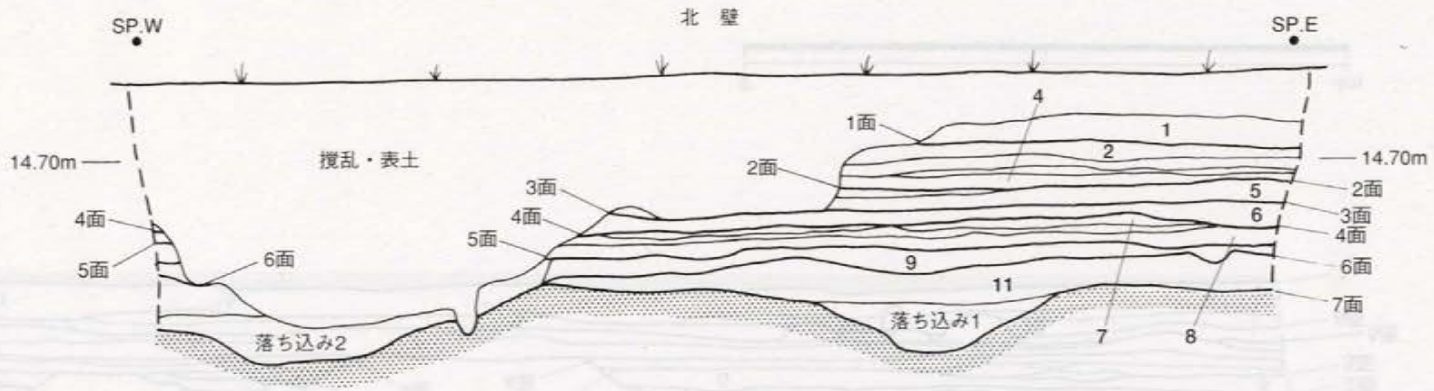
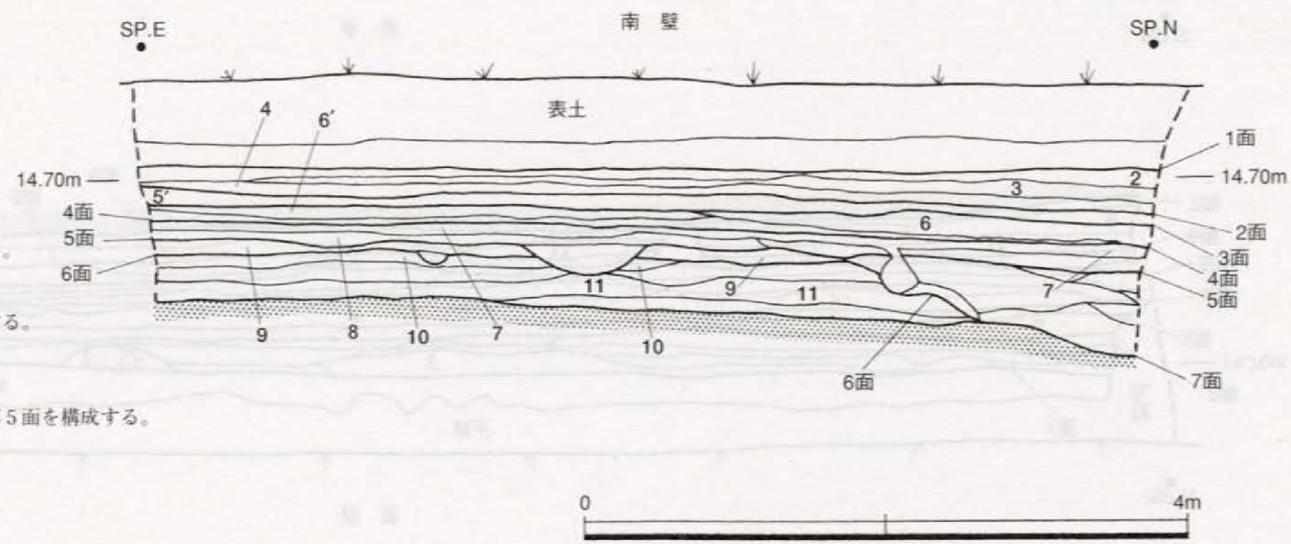


図5 西壁・東壁土層断面図





1．灰褐色粘質土。土丹粒・砂利・かわらけ片混入。
2．灰色粘質土。細かい炭化物混入。第1面を構成する。
3．土丹地業層。
4．灰褐色粘質砂層。炭化物・土丹粒混入。
5．土丹地業層。部分的に炭化物混入。第2面を構成する。
6．土丹地業層。第3面を構成する。
7．土丹地業層。第4面を構成する。
8．灰褐色砂質土。
9．黒褐色粘質土。調査区東側では色調が淡く砂質。第5面を構成する。
10．淡褐色砂質土。第6面を構成する。
11．暗褐色粘質砂層。第6面を構成する。

図6　北壁・南壁土層断面図

第３章　検出した遺構

１面（図７、図版１）

現地表から調査区の南端で60㎝程度の深度で検出した。北端でも地業面は、地表から45㎝程の深度で検出した。この面は、第２層の灰色粘質土層と第３層の土丹地業面が構成土である。細かい炭化物を含む土層で構成されるが、締まりが比較的悪く後世の攪乱が目立つ。生活面であると明確に断言できるものではなく、むしろ包含層の一部ととらえるべきものであろう。遺構もはっきりとしたものは認められなかった。

２面（図８、図版２）

１面の25～30㎝下で検出した面である。第５層の土丹地業面が構成土である。部分的に地業層中に炭化物の混入が認められる。土丹地業面が広がることから、人為的に構築された面であると考えられるがこの面に伴う遺構は検出されない。

３面（図９、図版３）

２面の15㎝程下で検出した面である。第６層の土丹地業面が構成土である。２面と同様で、人為的に構築された面であると考えられるがこの面に伴う遺構は検出されない。

４面（図10、図版３）

３面の10㎝程下で検出された面である。第７層の土丹地業面が構成土である。調査区の北西角で緩やかに面が落ち込むが遺構ではない。西壁から北に３m程の溝状遺構が延びる。

５面（図11、図版４）

４面の15㎝下で検出した面である。第９層の黒褐色粘質土層が構成土である。地山に似ている土層で人為的に盛られた土層と考えられる。常滑壺（５型式・6a型式）や青磁劃花文碗片、青白磁皿片、手捏ねかわらけ、小片のため図示はしていないが永福寺Ⅰ期の男瓦片が出土した。

４面までの様相と異なり多くの遺構を検出した。東西方向に延びる浅い溝１・２と多くの轍状の溝を確認した。溝や轍状の遺構は、真北から約50°東に振れている。北側を東西方向に延びる市道とほぼ平行している。

６面（図12、図版５）

５面の約10㎝下で検出した面である。第11層の暗褐色粘質砂層が構成土である。５面の遺構（溝・轍）は東西方向に永福寺、瑞泉寺に向かう市道とほぼ平行していたが、６面で検出確認した柱穴列（建物遺構か）の軸方位はほぼ真北で、５面の遺構とはおよそ50°程の開きがある。轍の痕跡が二階堂大路もしくは永福寺参道（境内）の一部と考えるならば、6面の柱穴列（建物遺構か）は大きく方位がずれることになる。このことから６面は鎌倉初期、永福寺の建立に伴い計画された二階堂大路が通されるより前の可能性が考えられる。遺物は手捏ねかわらけの他に土師器甕、坏、灰釉陶器が出土する。

７面（図13、図版６）

６面の約15～30㎝下で黒褐色粘質土層の地山面となる。海抜13.8～13.9m。鎌倉宮のある北側に向かう溝状の落ち込み１・２を検出した。落ち込み１は北壁から計測すると、南北の長さ約6.5m、幅約160㎝、深さ30㎝の規模である。落ち込み２も同じく北壁から計測すると、南に長さ5m、幅約2.2m、深さ30㎝の規模であった。共に遺構の性格は不明である。遺物は出土していない。

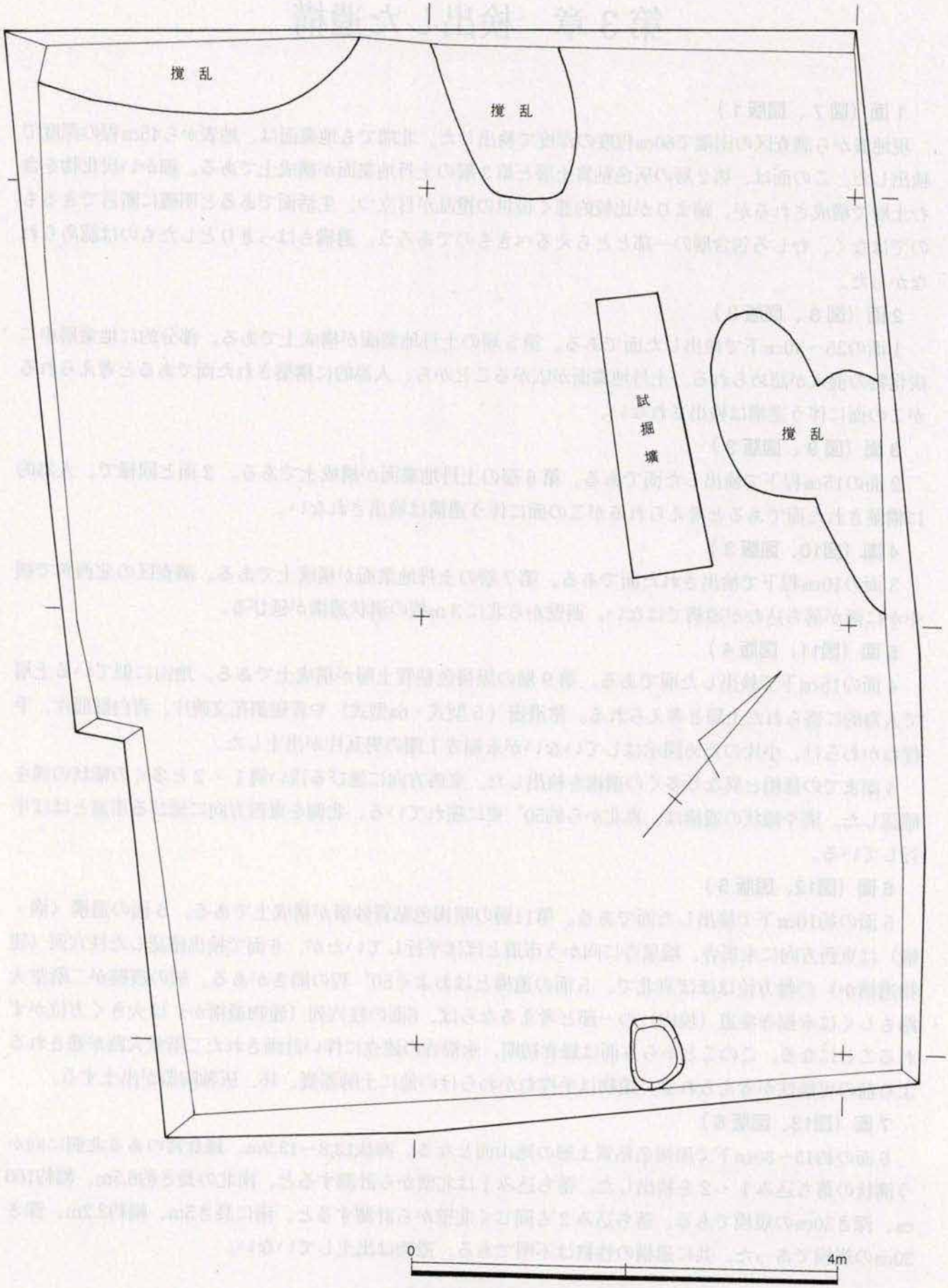


図7　1面全測図

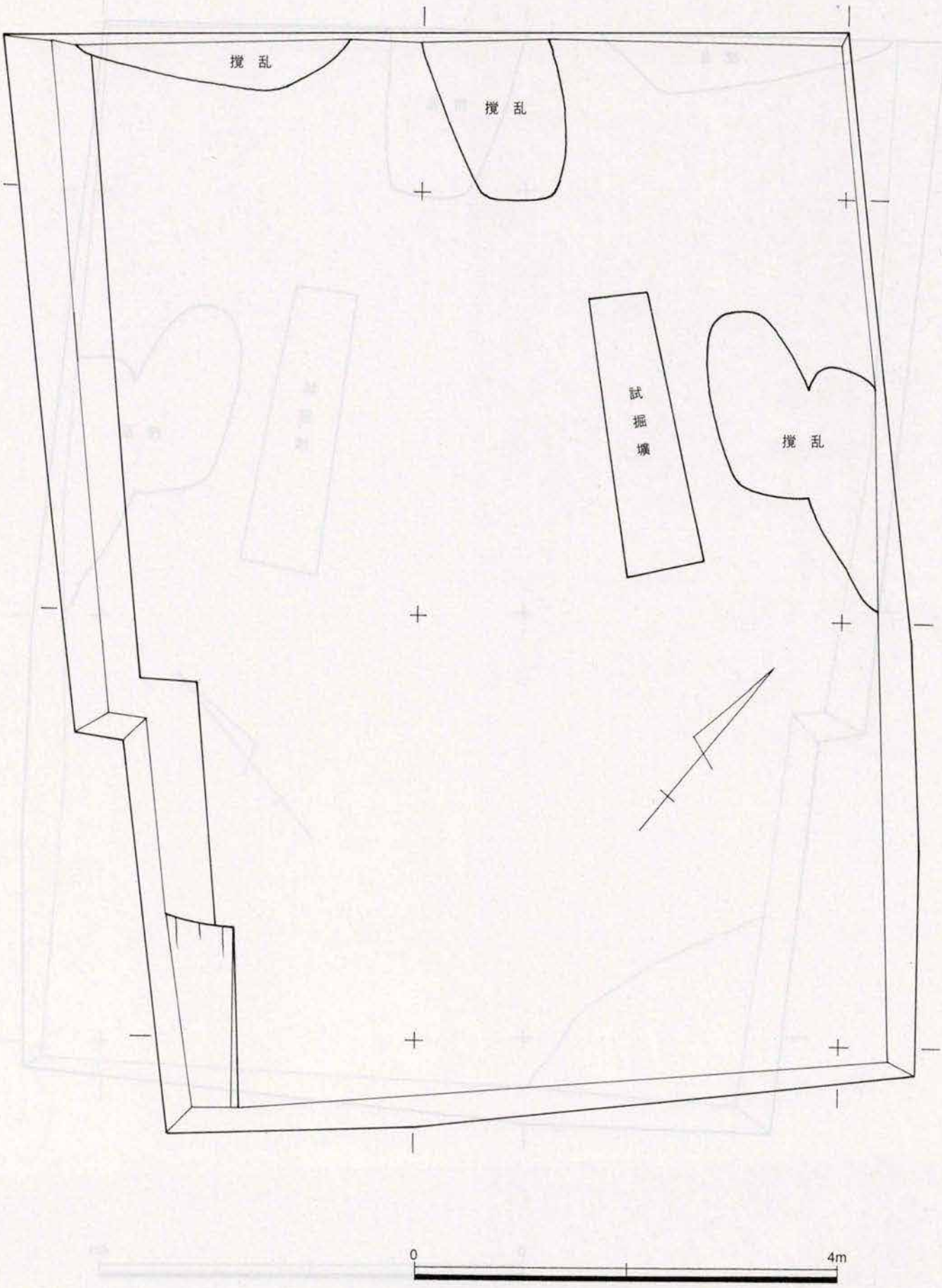


図８　２面全測図

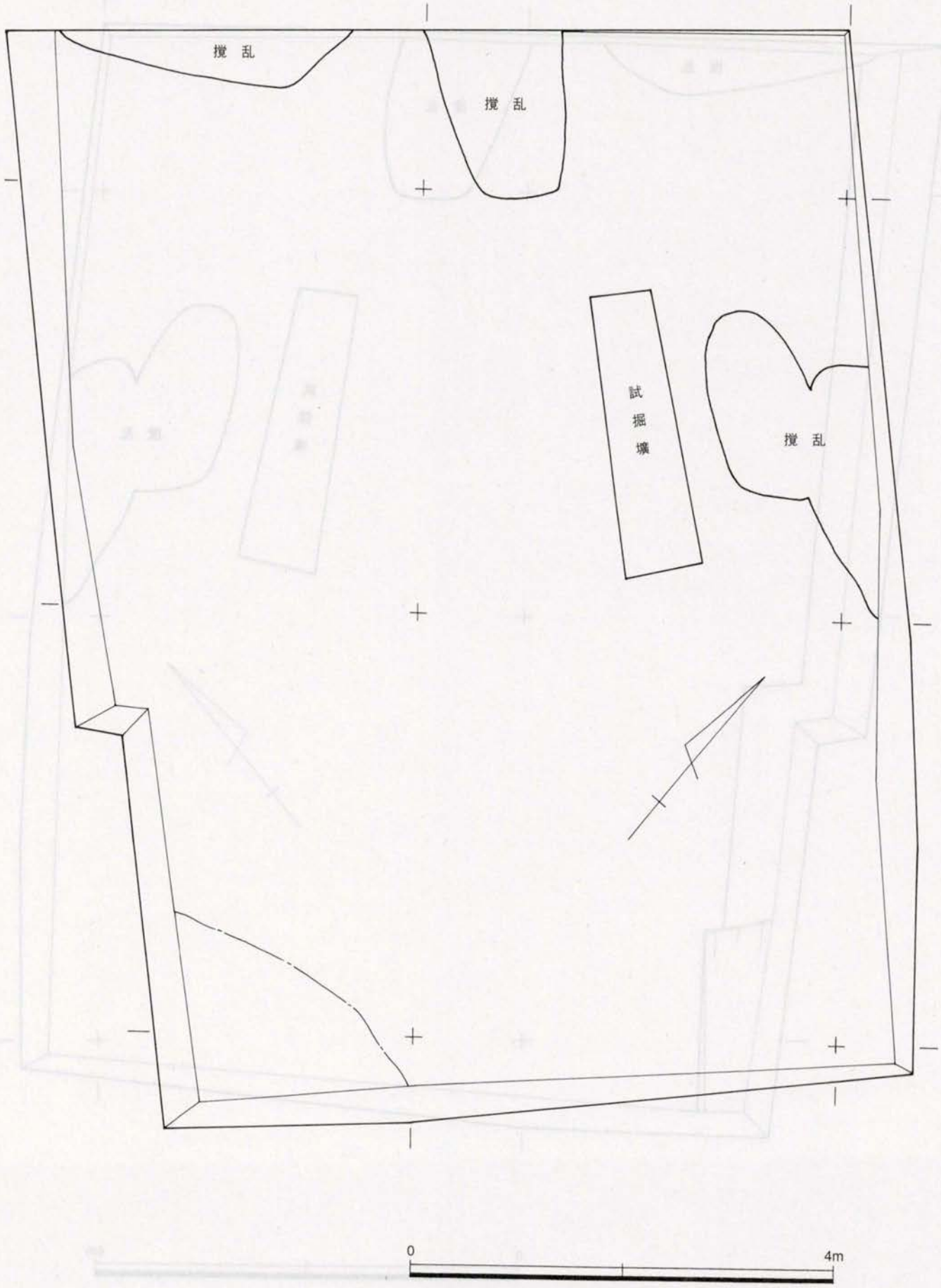


図９　３面全測図物

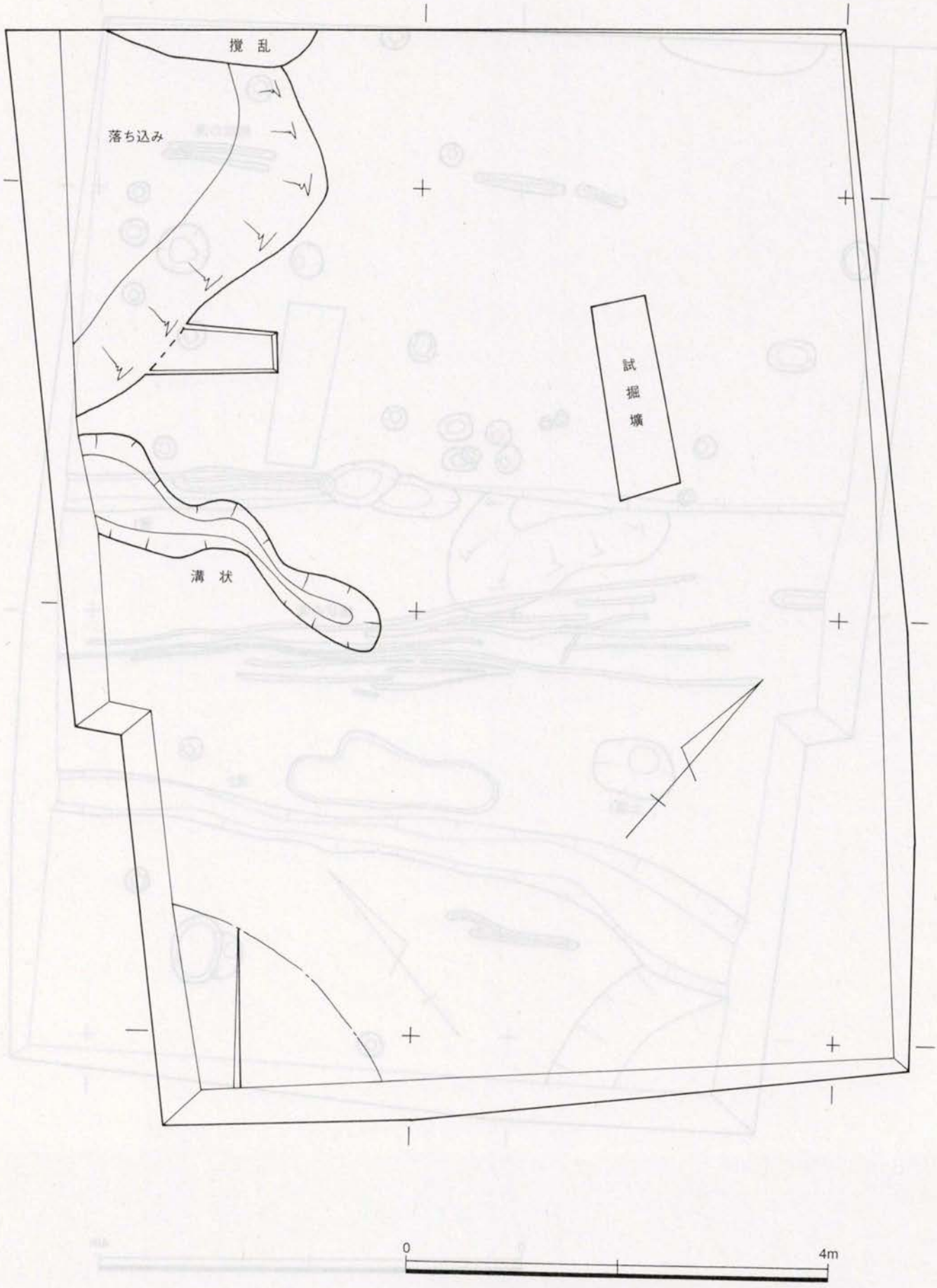


図10　4面全測図

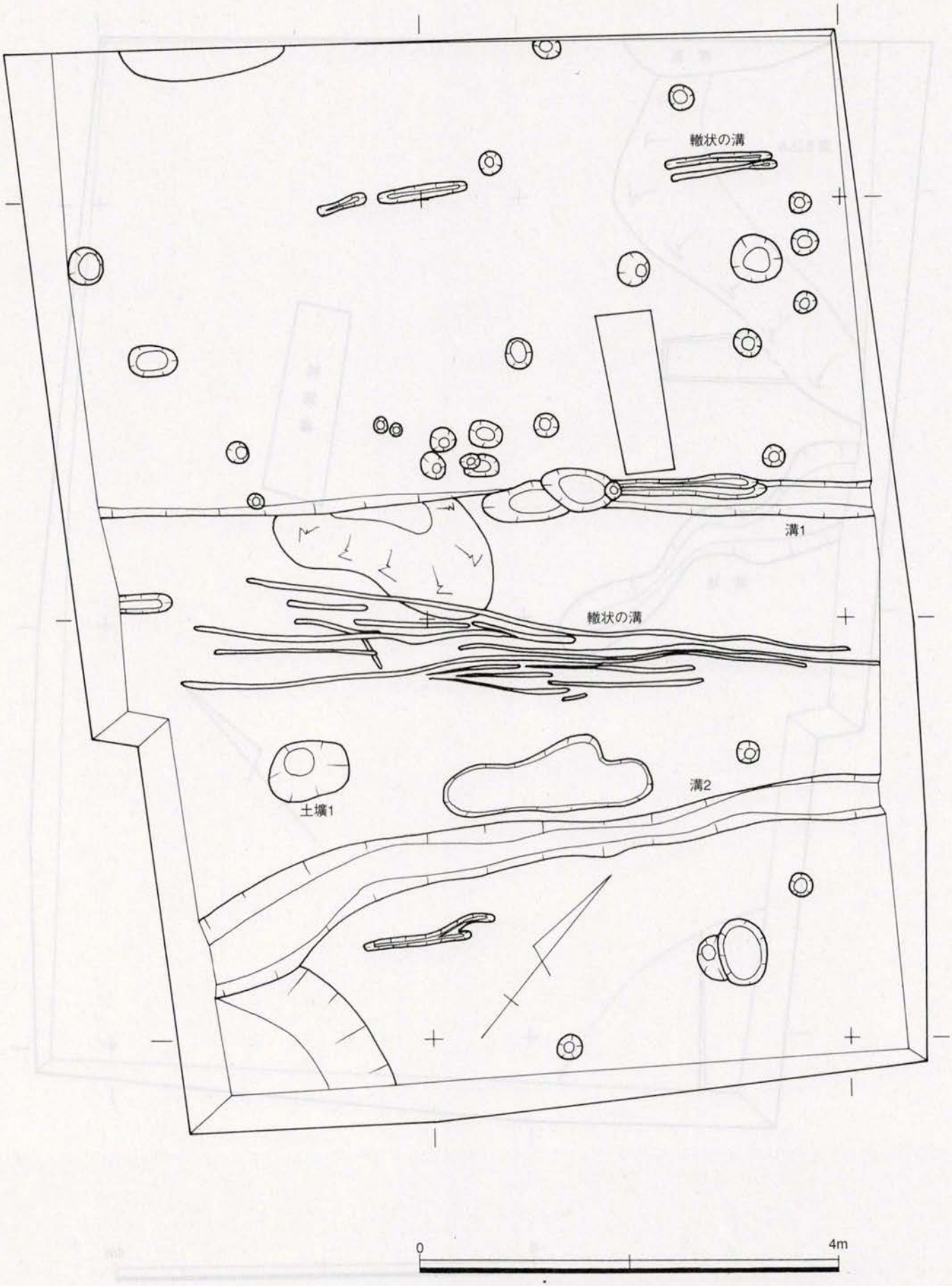


図11　5面全測図

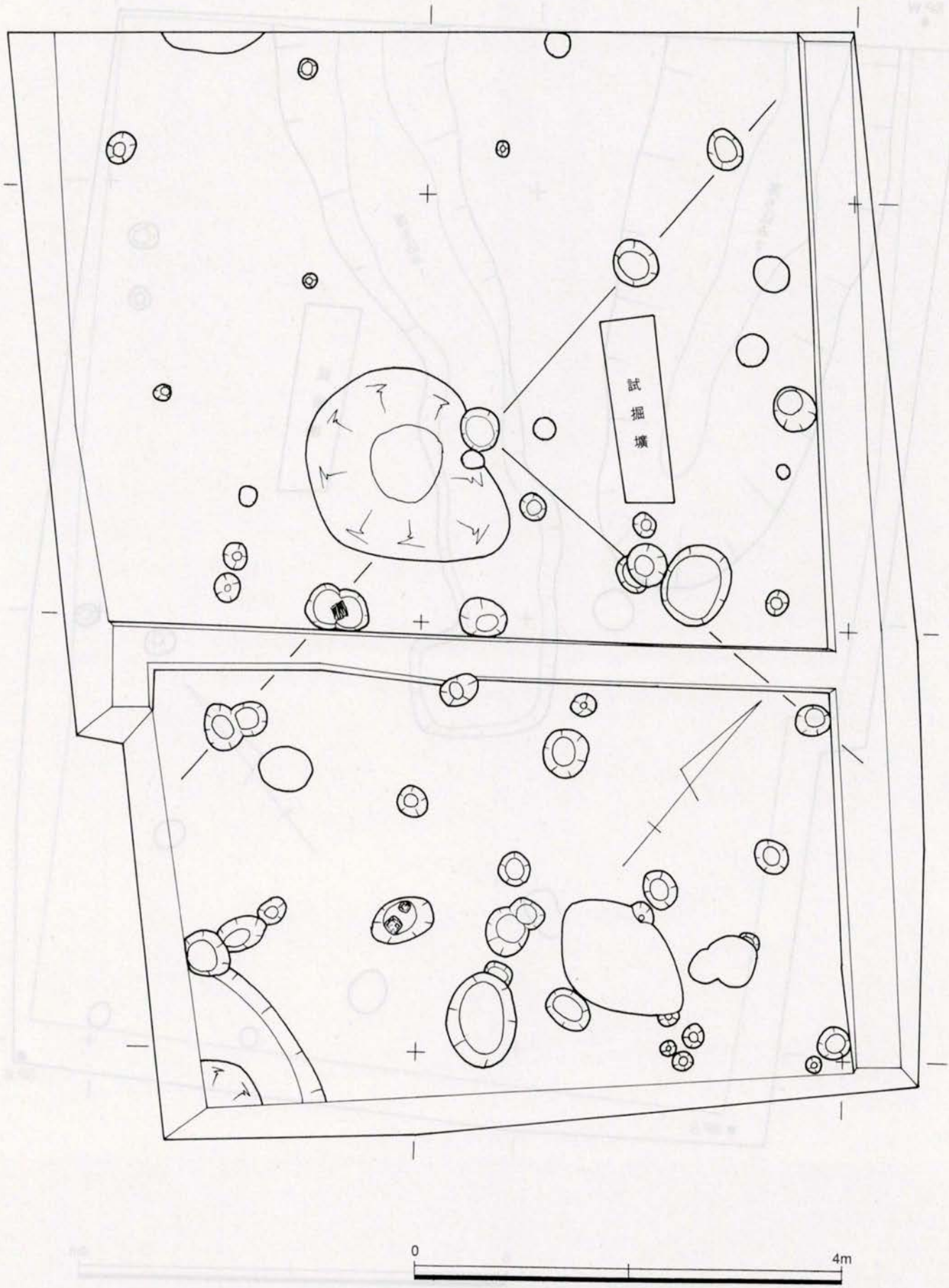


図12　6面全測図

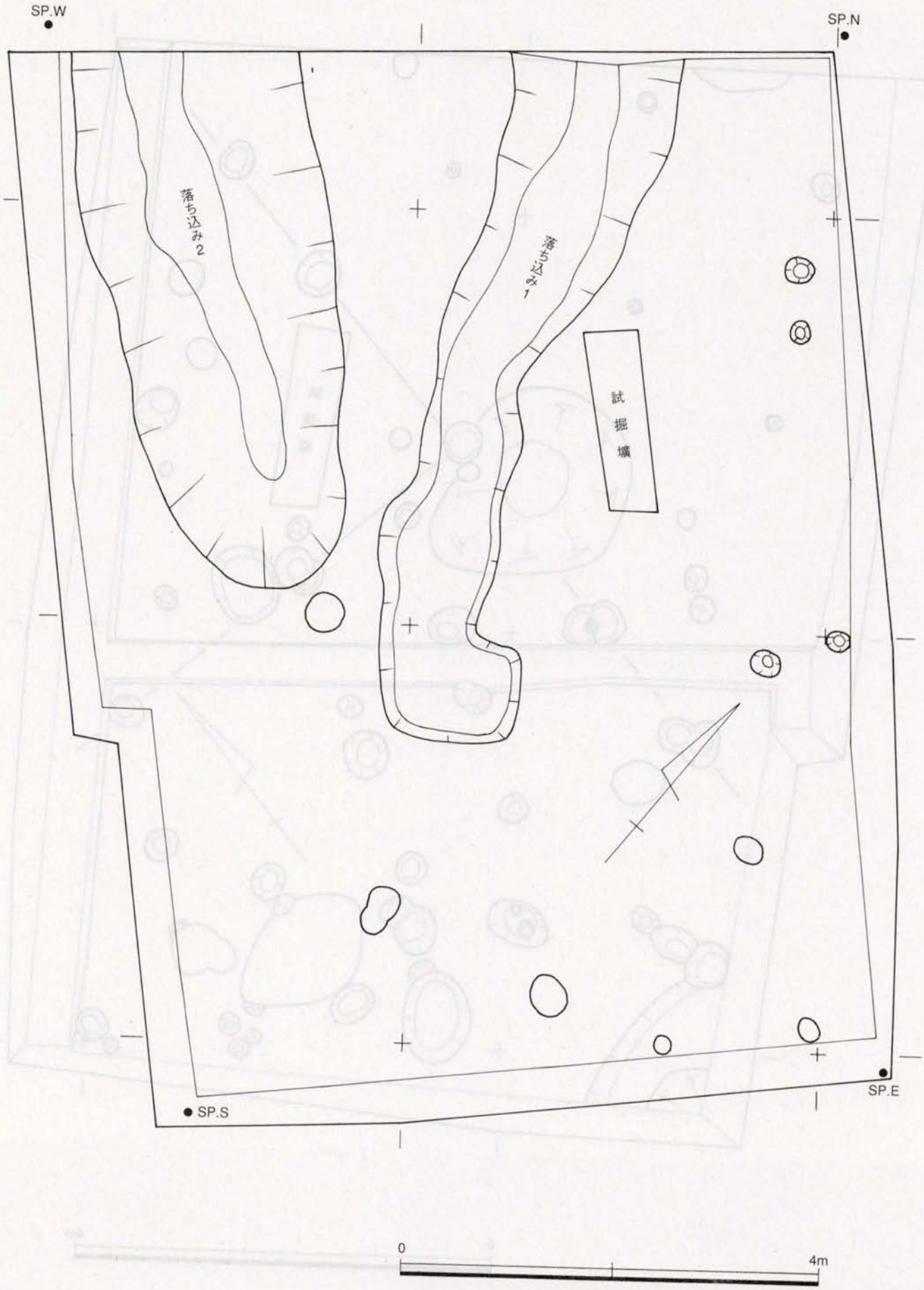


図13　7面全測図

第４章　出土した遺物

１面・２面まで・２面の遺物（図14、図版７・８）

１面で出土している舶載品はは13世紀代、常滑は14世紀代。かわらけを概観するならば、おおむね14世紀中の範疇に収まるものと考えられる。２面までで出土しているかわらけは13世紀中～14世紀前半が中心と考えられる。複弁八葉蓮華文の鐙瓦は13世紀中のものと考えられる。

３面まで・４面まで・４面の遺物（図15、図版９・10）

４面で初めて13世紀中葉の手捏ねかわらけが出土する。他に青磁香炉、青白磁香炉、手捏ね成形の白かわらけが出土している。

５面まで・６面遺構・７面遺構の遺物（図16、図版11・12）

４面の下、５面までで出土している遺物は手捏ねかわらけ、同安窯の青磁劃花文碗、常滑の甕壺で、12世紀末～13世紀前半代のものである。６面までで出土している中世遺物は、手捏ねかわらけだけである。古代遺物は土師器坏・長甕・灰釉陶器である。７面ピット１では砥石が出土しているが時期は不明である。

第５章　まとめ

遺跡地は鎌倉宮の南隣に位置している。鎌倉宮（大塔宮）の境内は東光寺跡と伝えられているが、詳細は不明である。この付近の永福寺境内の詳細も二階堂大路との取り付きを含め明らかにされていない。東光寺は永福寺の郭内と記述されていることから、永福寺の惣門の位置を含め検討する課題は多く残されている。永福寺参道でもある大倉辻から延びてくる二階堂大路は、現在の鎌倉宮南西角のあたりで１m近く地盤が高まる。現在、覚園寺ヶ谷から流れ出る覚園寺川はこの場所で二階堂大路と直角に交わり、明治15年測量図を見るとそのまま二階堂川に注いでいる。遺跡調査地より東に約180m程離れた字四ツ石付近で、かつて故赤星氏が多くの中世瓦を採集し永福寺惣門を想定している[1]。しかし、惣門・南門・中門と連なる永福寺への道筋を想定すると、あまりにも惣門と南門の距離が近すぎると思われる。三浦合戦の際に、永福寺惣門内側に陣が置かれていることを考えてると、個人的にはこの地盤が高くなるあたりに惣門が位置するのではないかと考える。永福寺郭内といわれている東光寺の位置関係からも無理のない設定だと思われる。と、すると調査地点は永福寺惣門の内側ということになろう。遺構の少ない１面から５面までに検出した平坦面や無数の轍状の溝の検出など、境内域の様相を示しているのかもしれない。大きく様相が異なるのは６面である。上層の遺構は轍状の溝を含め、推定される二階堂大路の道筋と概ねあっていると思われる。しかし６面で検出した柱穴列（建物か）の示す方位は、二階堂大路の道筋から約50°程も振れている。手捏ねかわらけのみの出土と併せ、６面は二階堂大路が通される以前のものとも考えることが出来よう。

註１　赤星直忠　1959　『中世考古学の研究』

参考文献
『鎌倉廃寺事典』有隣堂　1980年『鎌倉市史』社寺編　鎌倉市　吉川弘文館　1959年
『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会　1971年『鎌倉事典』東京堂出版　1976年

図14　1面・2面まで・2面の遺物

層位・出土地点	番号	遺物名	法量（cm）	特徴等
1面	1	かわらけ	口径（11.0）底径6.0 器高3.2	轆轤成形
	2	かわらけ	口径（13.4）底径（8.8）器高3.1	轆轤成形
	3	かわらけ	口径12.0 底径8.0 器高3.5	轆轤成形
	4	かわらけ	口径（14.6）底径8.0 器高3.7	轆轤成形
	5	かわらけ	口径（7.3）底径5.3 器高1.4	轆轤成形
	6	かわらけ	口径（7.3）底径5.7 器高1.4	轆轤成形
	7	常滑片口鉢	口径（23.4）	Ⅱ類。赤羽・中野編年7型式か。
	8	常滑甕	底径（12.6）	
	9	常滑片口鉢	底径（12.0）	Ⅰ類
	10	青白磁梅瓶	（体部小片）	景徳鎮窯
	11	白磁口兀皿	底径（5.0）	
	12	青磁蓮弁文碗	底径（4.2）	龍泉窯
	13	青磁酒会壺	（口縁部小片）	龍泉窯
2面まで	14	かわらけ	口径（4.6）底径（3.6）器高0.9	轆轤成形
	15	かわらけ	口径（7.0）底径5.3 器高1.6	轆轤成形
	16	かわらけ	口径（7.3）底径（5.8）器高1.6	轆轤成形
	17	かわらけ	口径（7.7）底径6.2 器高1.5	轆轤成形
	18	かわらけ	口径（8.2）底径（7.0）器高1.4	轆轤成形
	19	かわらけ	口径（6.7）底径（4.6）器高1.8	轆轤成形
	20	かわらけ	口径（7.6）底径（5.6）器高2.0	轆轤成形
	21	かわらけ	口径（7.0）底径（5.6）器高1.8	轆轤成形
	22	かわらけ	口径7.5 底径4.2 器高1.6	轆轤成形
	23	かわらけ	口径（6.6）底径（5.6）器高1.8	轆轤成形
	24	かわらけ	口径（8.5）底径6.2 器高2.6	轆轤成形
	25	かわらけ	口径（10.4）底径（5.9）器高3.0	轆轤成形
	26	かわらけ	口径10.6 底径5.3 器高3.3	轆轤成形
	27	かわらけ	口径（10.6）底径（6.8）器高3.5	轆轤成形
	28	かわらけ	口径12.0 底径7.6 器高3.5	轆轤成形
	29	かわらけ	口径（12.2）底径8.2 器高3.1	轆轤成形
	30	かわらけ	口径12.0 底径8.6 器高3.2	轆轤成形
	31	かわらけ	口径13.0 底径8.6 器高3.4	轆轤成形
	32	かわらけ	口径（12.3）底径（8.0）器高3.1	轆轤成形
	33	かわらけ	口径12.0 底径7.6 器高3.8	轆轤成形
	34	銭	外径2.35 方穿径0.68 厚さ0.14	皇宋通宝（初鋳年北宋1038年）か。篆書。
	35	常滑片口鉢	（口縁部小片）	Ⅰ類
	36	火鉢	（口縁部小片）	
	37	鐙瓦	（瓦當・丸瓦部片）	複弁八葉蓮花文。瓦當径16cm程度のものか。
2面	38	かわらけ	口径11.9 底径6.2 器高3.5	轆轤成形。口縁部に煤付着。

図15　3面まで・4面まで・4面遺構の遺物

層位・出土地点	番号	遺物名	法量（cm）	特徴等
3面まで	1	かわらけ	口径（6.6）底径（5.8）器高2.0	轆轤成形
	2	かわらけ	口径（12.5）底径（9.2）器高2.5	轆轤成形
4面まで	3	かわらけ	口径（9.0）器高（2.0）	手捏ね成形
	4	かわらけ	口径（9.8）器高（1.7）	手捏ね成形
	5	かわらけ	口径8.8 底径6.6 器高1.9	轆轤成形。ゆがみ顕著。
	6	かわらけ	口径（10.0）底径（7.2）器高1.5	轆轤成形
	7	白かわらけ	口径（11.6）器高（2.6）	手捏ね成形
	8	渥美壺	口径（15.0）	
	9	渥美甕	（口縁部小片）	
	10	青磁香炉	口径（13.0）	龍泉窯
	11	平瓦	厚さ2.1	凸面縄目叩き
	12	鉄製品（釘）	長さ8.0 幅0.6 厚さ0.6	
	13	鉄製品（釘）	残長4.7 幅0.4 厚さ0.3	

層位・出土地点	番号	遺物名	法量（cm）	特徴等
4面	14	かわらけ	口径（15.2）器高（3.5）	手捏ね成形
	15	青磁Ⅲ	口径（9.0）	龍泉窯
	16	弥生壺	（体部小片）	久ヶ原型式
4面落ち込み	17	土製品	（小片）	白かわらけ質。蓋のつまみ状。
	18	白かわらけ	口径（9.8）	手捏ね成形
	19	白かわらけ	口径（9.6）器高（2.6）	手捏ね成形
	20	かわらけ	口径（9.0）底径（7.4）器高1.7	轆轤成形
	21	かわらけ	口径（8.4）器高1.7	手捏ね成形
	22	かわらけ	口径（8.2）底径（6.2）器高2.0	轆轤成形
	23	かわらけ	口径9.8底径5.0器高1.9	轆轤成形
	24	かわらけ	口径9.6底径8.0器高1.9	轆轤成形
	25	かわらけ	口径（12.2）底径（5.8）器高2.8	轆轤成形
	26	かわらけ	口径12.5底径3.7	手捏ね成形
	27	かわらけ	口径（12.2）底径（8.2）器高2.9	轆轤成形
	28	かわらけ	口径11.8底径9.0器高3.3	轆轤成形
	29	かわらけ	口径12.0底径（8.8）器高3.3	轆轤成形
	30	かわらけ	口径（11.8）底径（8.6）器高3.2	轆轤成形
	31	かわらけ	口径（12.2）底径（8.6）器高2.9	轆轤成形
	32	かわらけ	口径（12.8）底径（10.0）器高3.6	轆轤成形
	33	かわらけ	（底部小片）	轆轤成形。底面に墨書あり。
	34	青磁	（体部小片）	酒会壺の蓋か。龍泉窯
	35	青磁Ⅲ	（下体部小片）	外面蓮弁文か。龍泉窯
	36	青白磁	（体部小片）	平面6角形を呈する。香炉等か。景徳鎮窯
	37	青白磁	（体部小片）	広口壺・合子等か。景徳鎮窯

図16　5面まで・6面遺構・7面遺構の遺物

層位・出土地点	番号	遺物名	法量（cm）	特徴等
5面まで	1	常滑壺	口径（10.2）	赤羽・中野編年5型式か。
	2	常滑甕	（口縁部小片）	赤羽・中野編年6a型式か。
	3	青磁劃花文碗	底径（4.4）	同安窯
	4	青磁碗	（口縁部小片）	龍泉窯
	5	青白磁Ⅲ	（底部小片）	景徳鎮窯
5面溝2	6	蓋	（口縁部小片）	
	7	かわらけ	口径9.4器高1.8	手捏ね成形
6面まで	8	かわらけ	口径（15.6）器高3.2	手捏ね成形
	9	かわらけ	口径（13.3）器高（3.3）	手捏ね成形
	10	かわらけ	底径（8.5）	轆轤成形
	11	土師坏	口径（10.4）底径（5.2）器高（3.8）	轆轤水引
	12	土師坏	口径（7.8）	
	13	土師甕	（底部小片）	2次焼成を受ける。長甕か。
	14	土師長甕	（口縁部小片）	
	15	灰釉陶器	（口縁部小片）	
	16	平瓦	厚さ2.5	凸面縄目叩き
6面土壙1	17	土師坏	口径（11.2）底径（6.6）器高（3.5）	轆轤水引
	18	土師甕	口径（18.2）	
	19	土師甕	（口縁部小片）	二次焼成を受ける。
	20	土師甕	底径7.8	
6面ピット5	21	木製品	長さ6.7幅4.9厚さ0.9	楕円を呈し板状。
7面ピット1	22	砥石	残長7.1幅3.4厚さ4.5	四面使用。

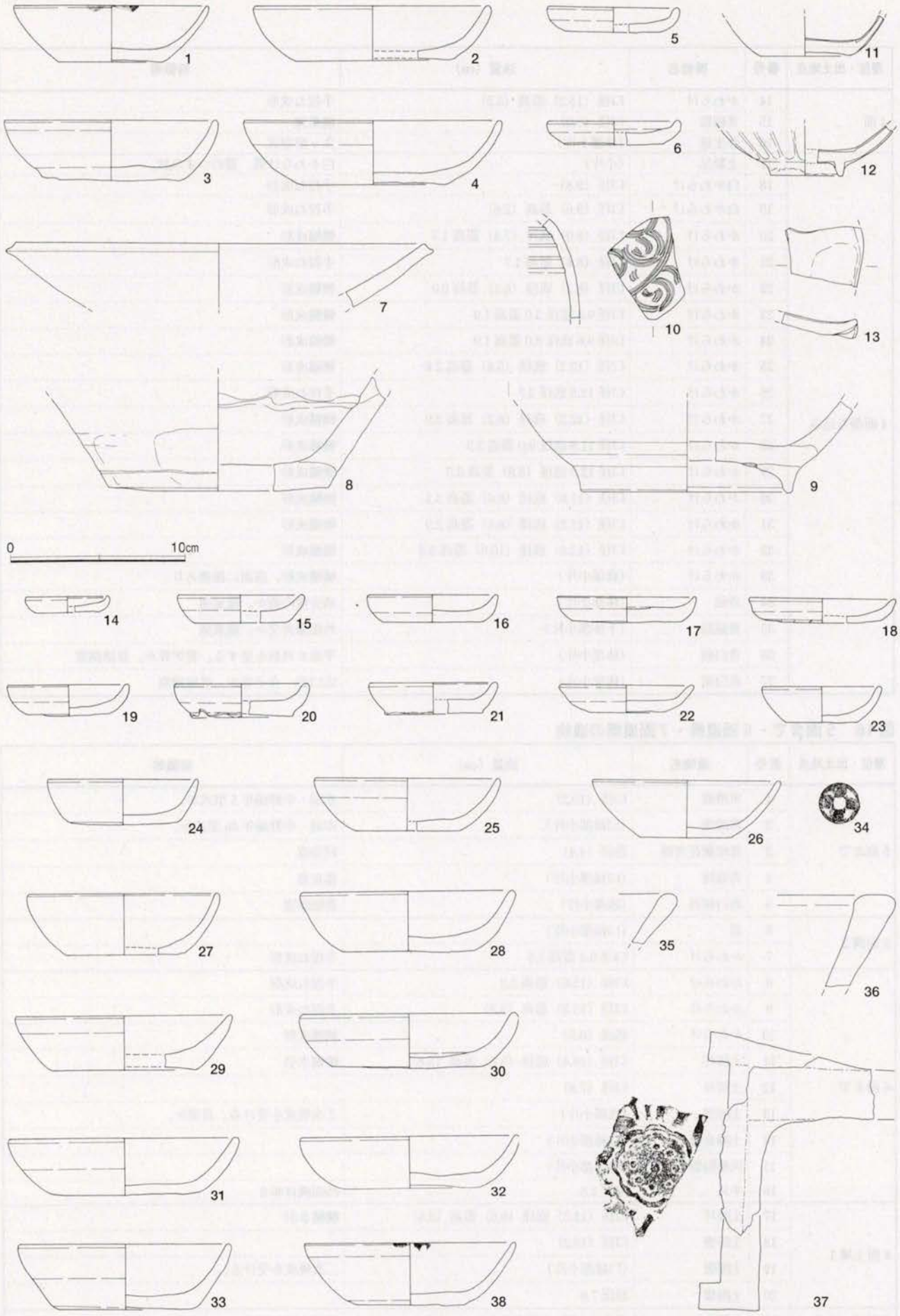


図14　1面・2面まで・2面の遺物

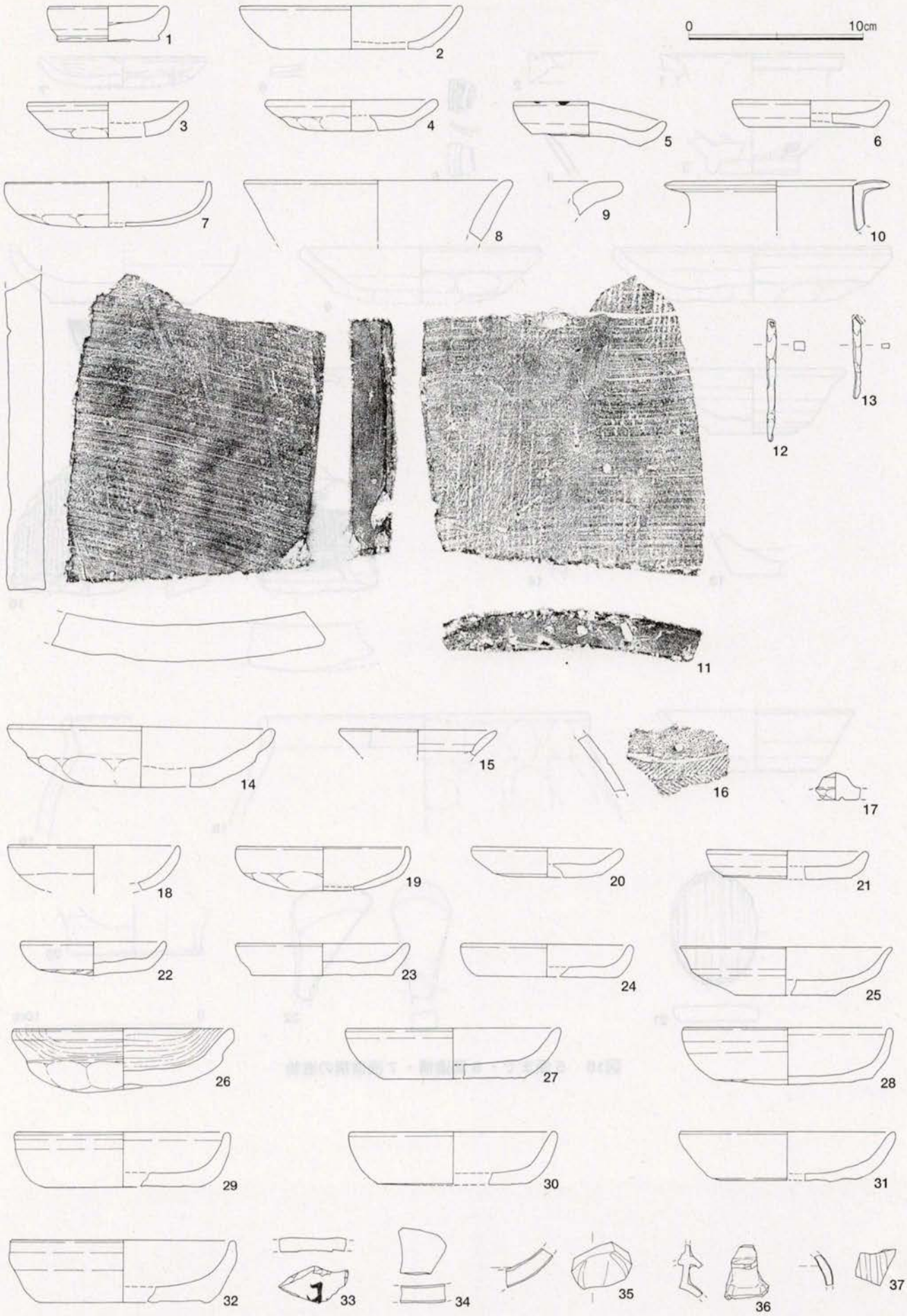


図15　3面まで・4面まで・4面の遺物

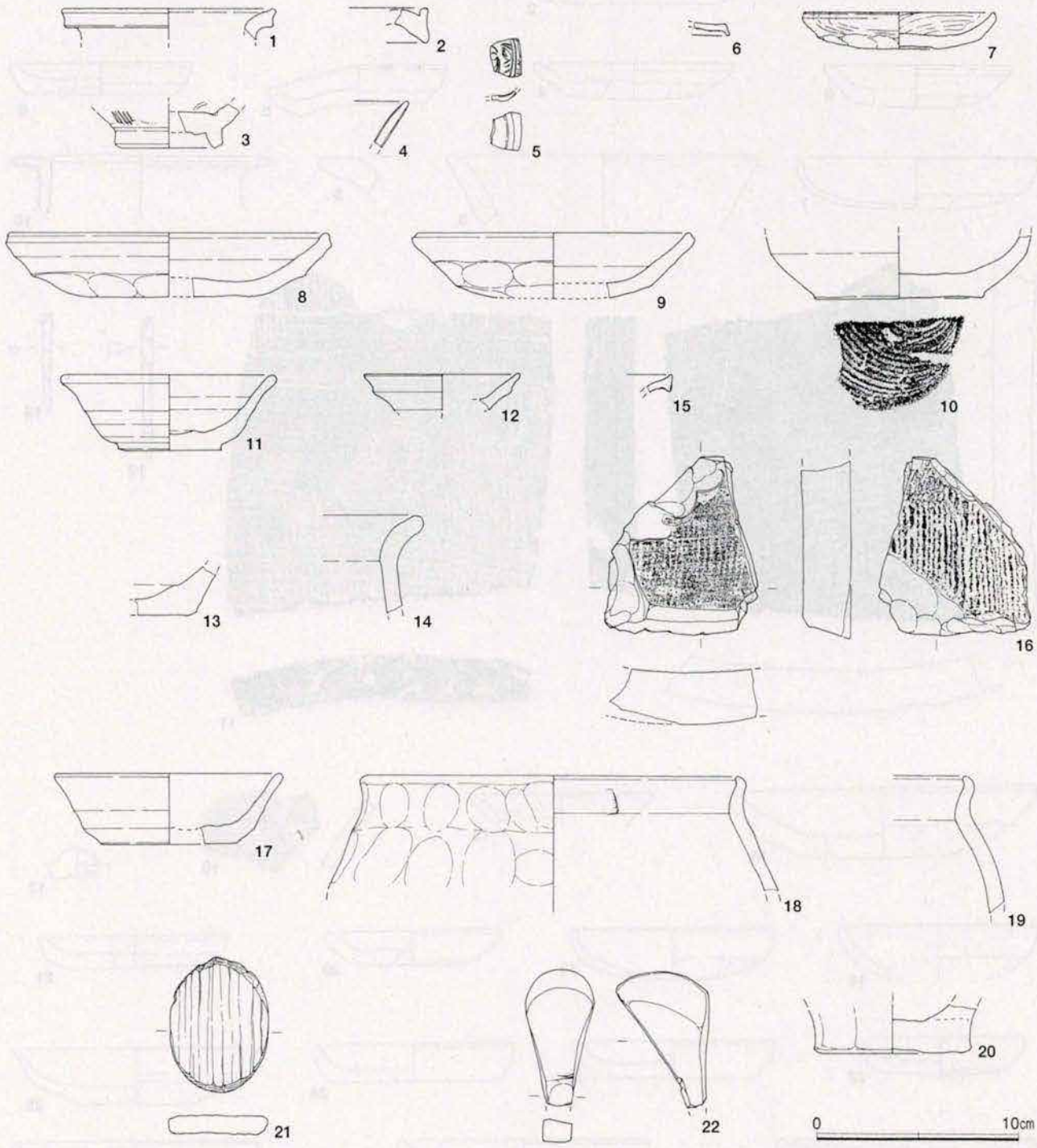
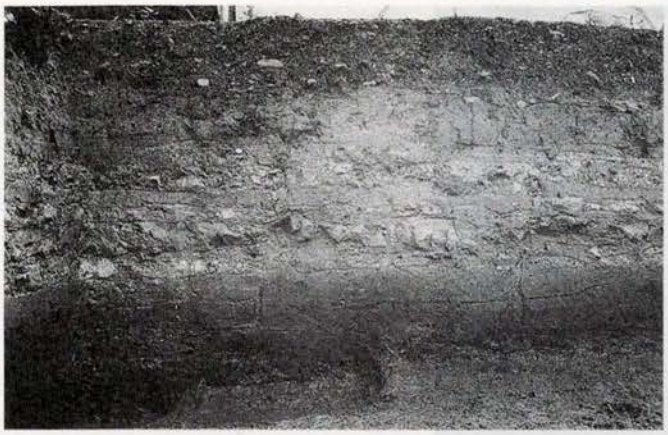
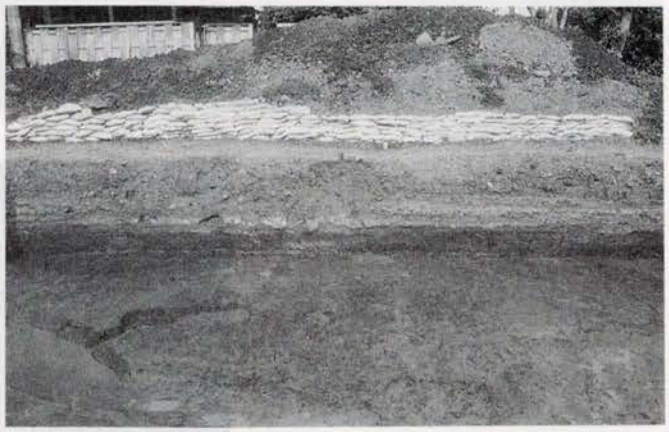


図16　5面まで・6面遺構・7面遺構の遺物

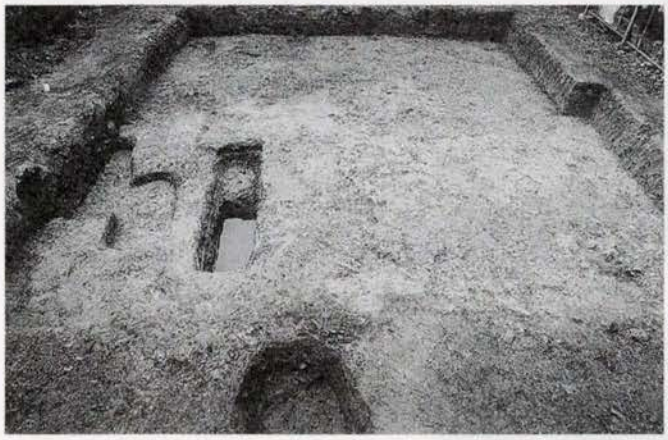
図版 1



1．西壁断面



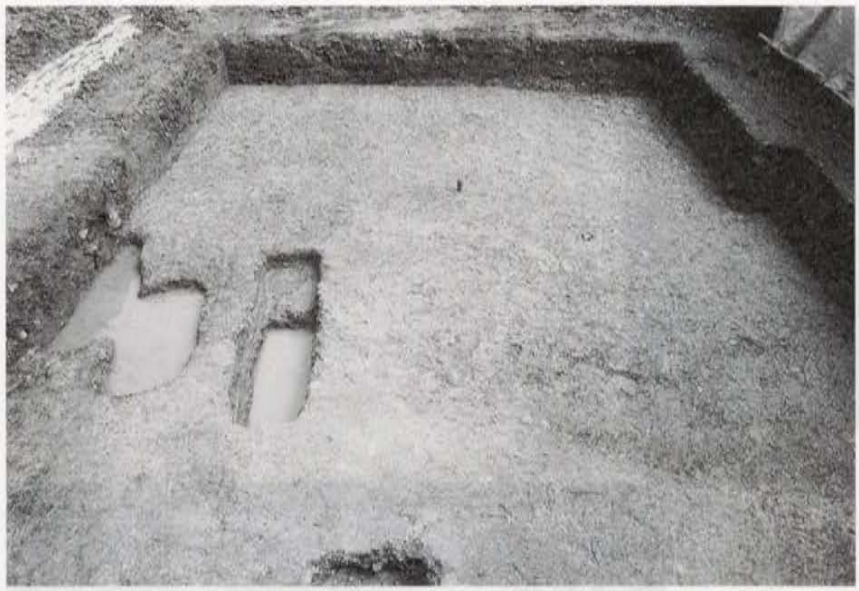
2．東壁断面



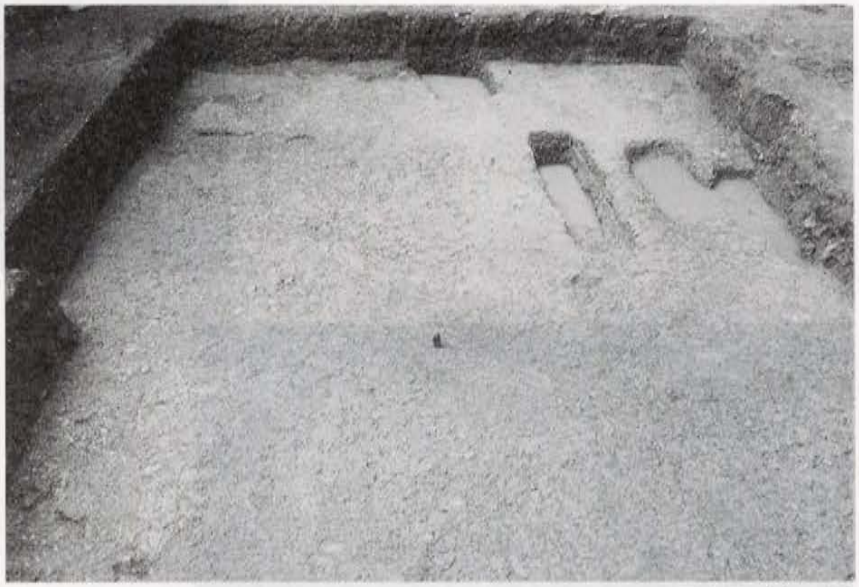
3．1面全景（北から）

4．1面出土遺物（骨）

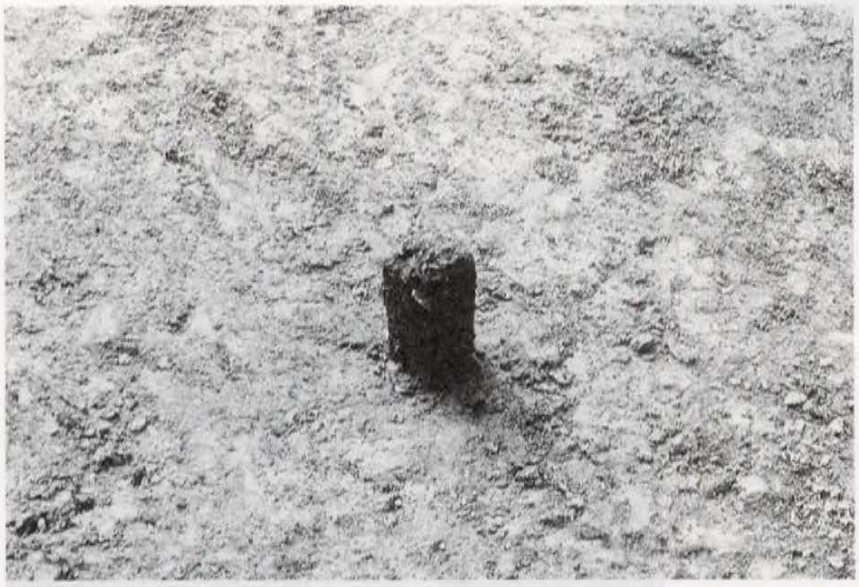
図版２



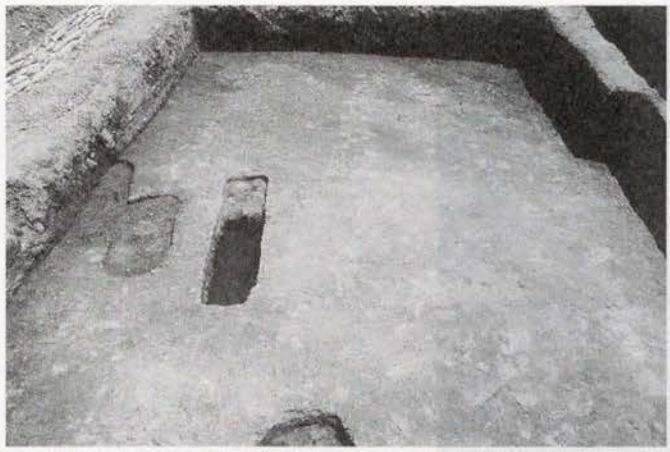
１．２面全景（北から）



２．２面全景（南から）

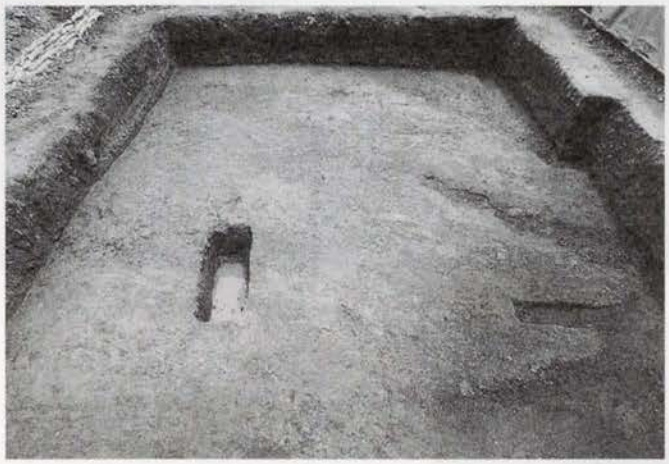


３．２面の杭

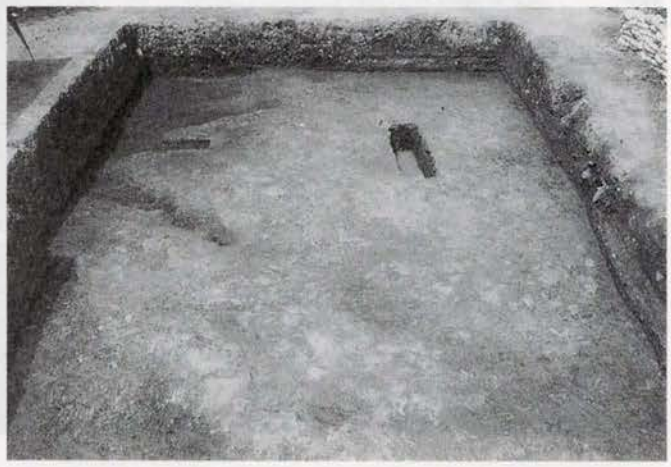


1．3面全景（北から）

2．3面全景（南から）

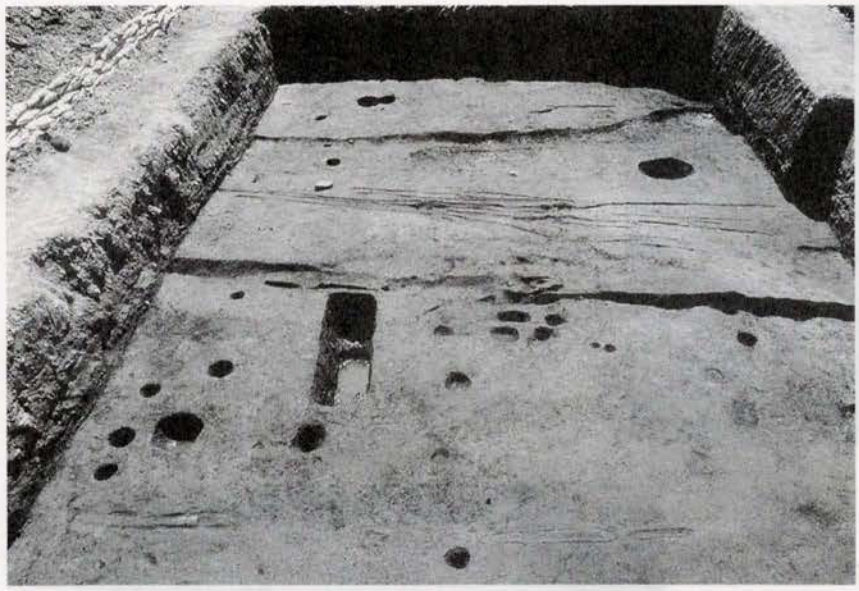


3．4面全景（北から）

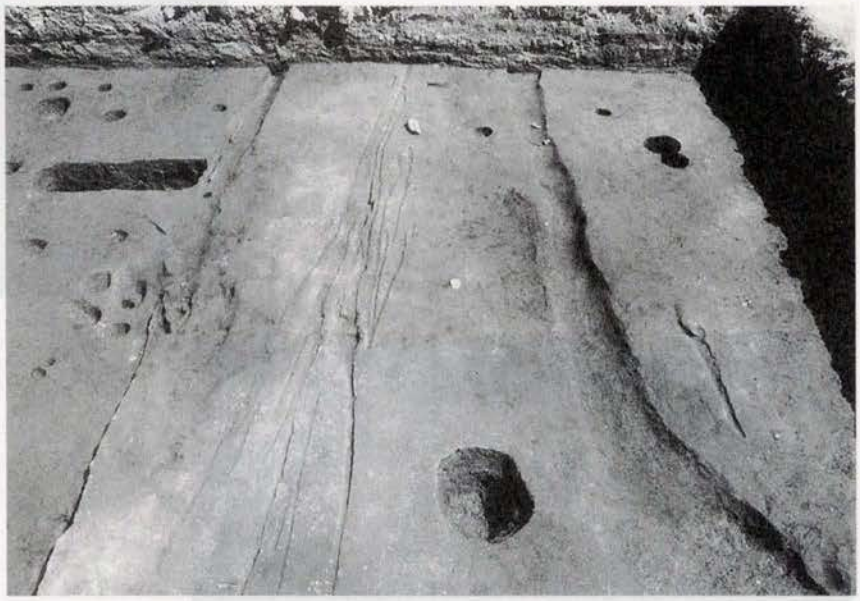


4．4面全景（南から）

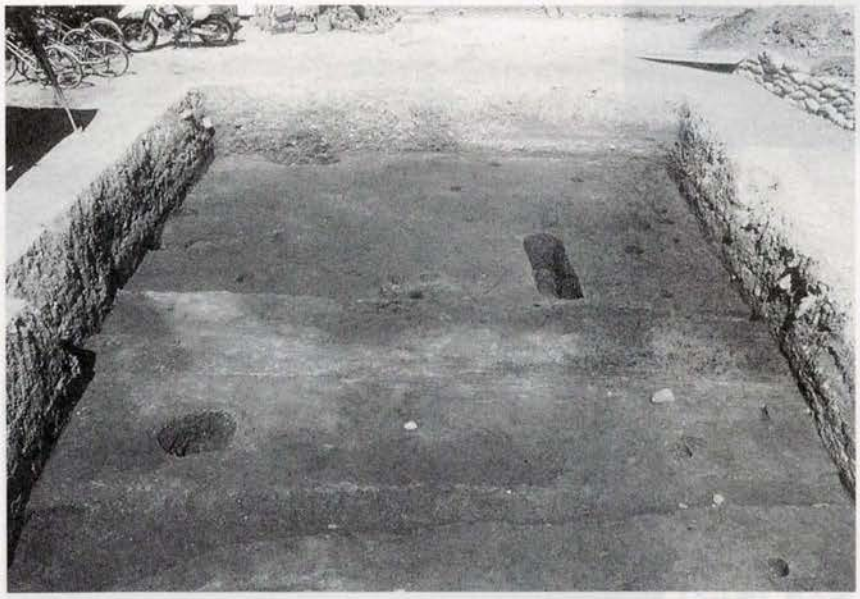
図版 4



1．５面全景（北から）



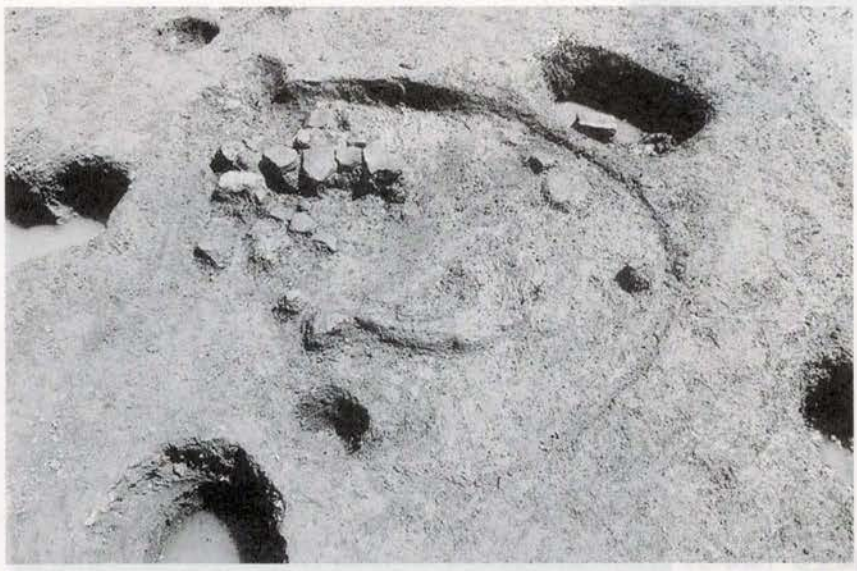
2．５面全景（西から）



3．５面全景（南から）

1．6面全景（北から）

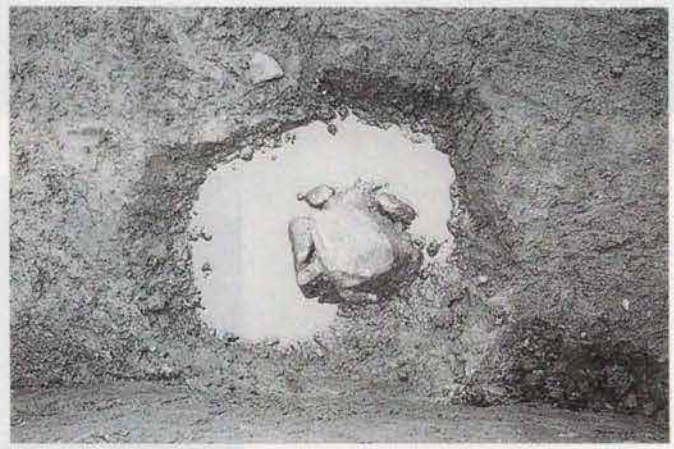
2．5面全景（西から）



3．6面土壙1

図版 6

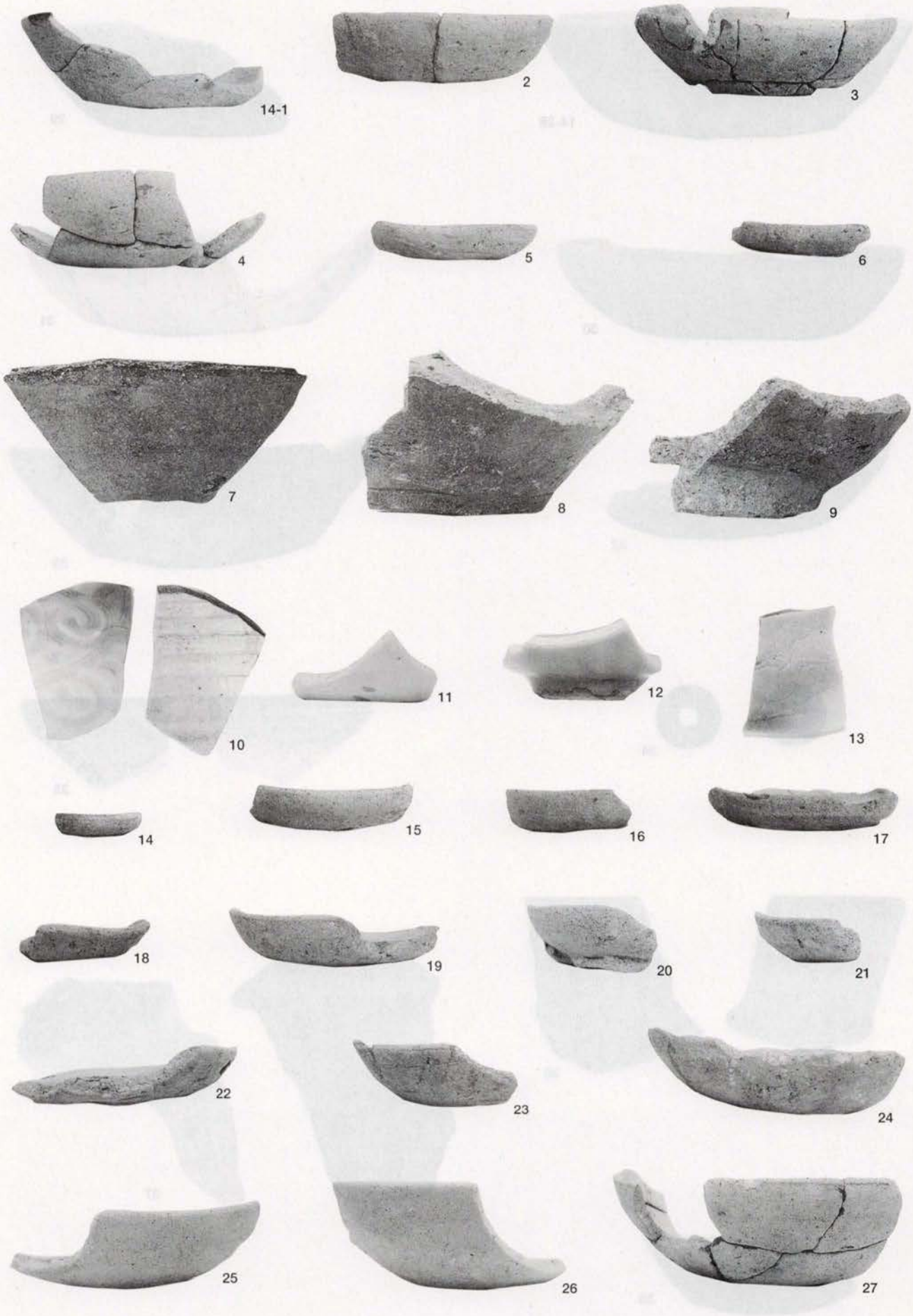
1．6面柱穴内の礎板（P-5）



2．6面柱穴内の礎石（P-3）

3．7面全景（北から）

4．7面全景（南から）


14-1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

図版 8

14-28

29

30

31

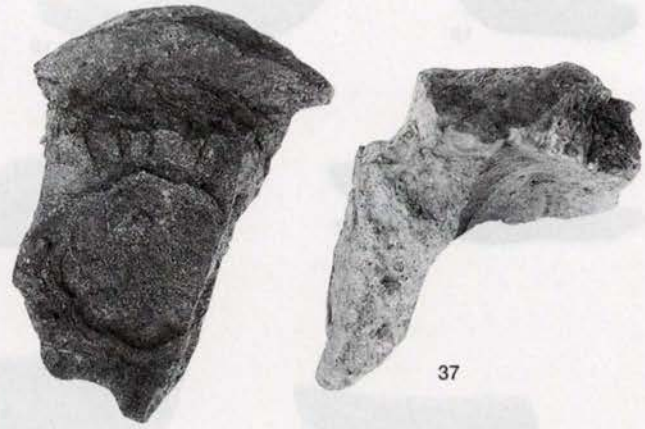
32

33

34

35

36


37

38

15-1

2

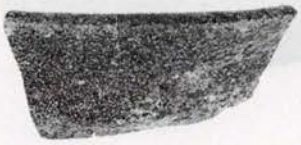
3

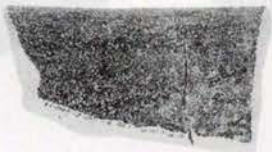
4

5

6

7




8

9

10

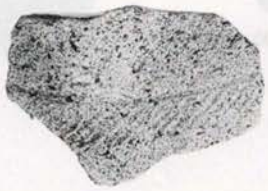
11

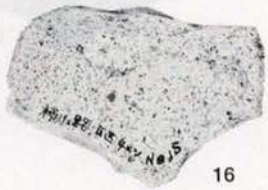
12

13

14

15




16

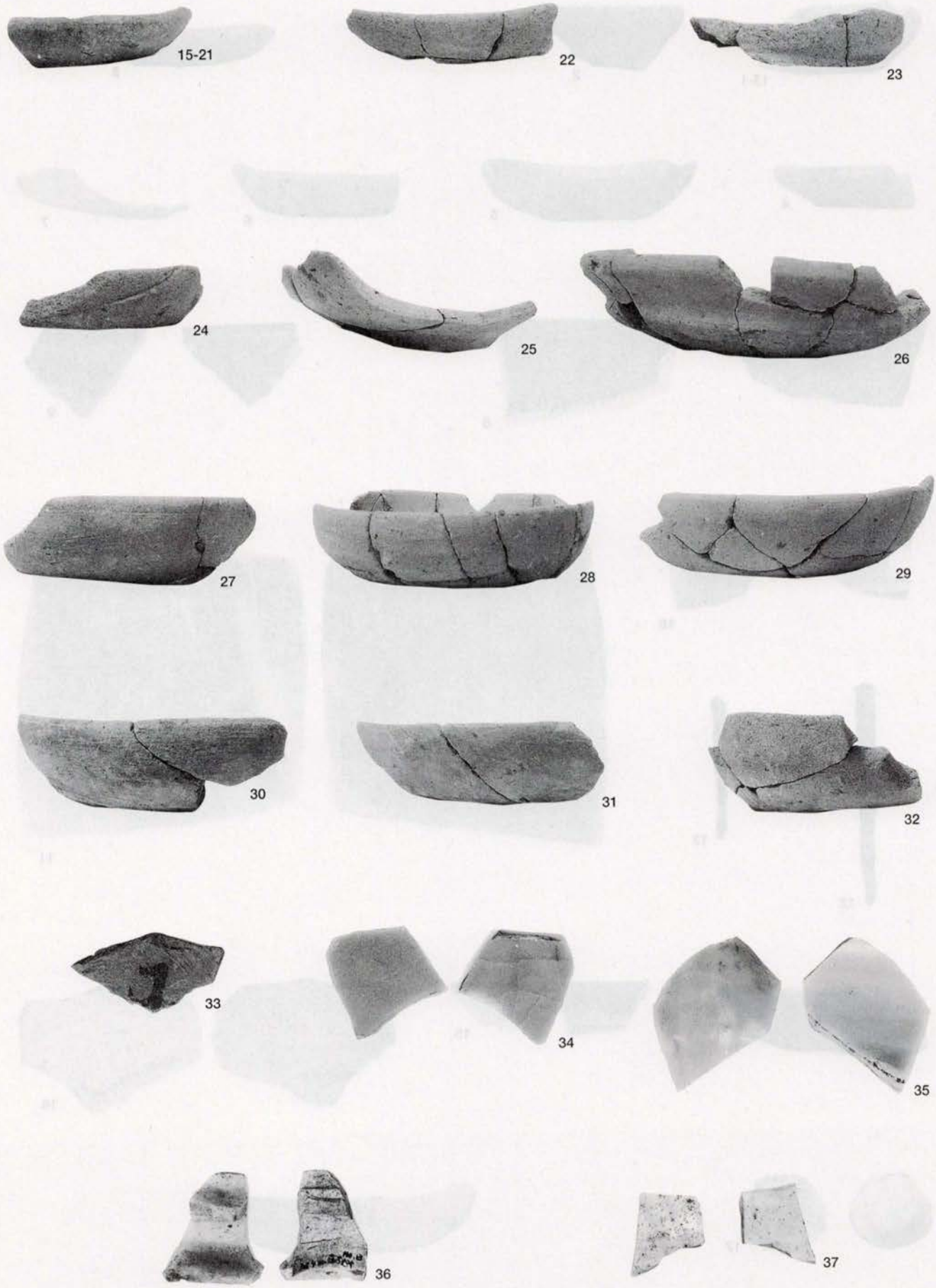
17

19

18

20

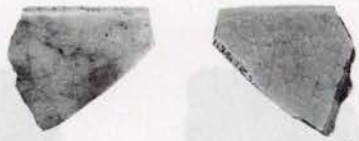
図版10



16-1

2

3


4

5

6

7

8

9

10

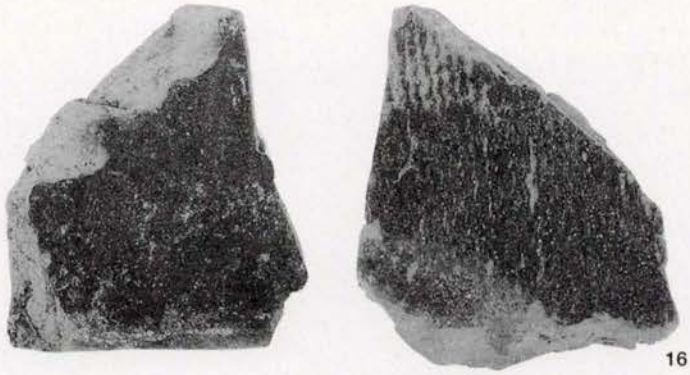
11

12

13

14

15

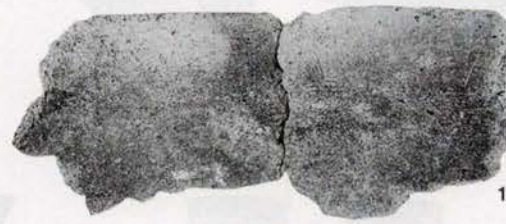

16

図版12

16-17

20

19



18

21

22

若宮大周辺遺跡群（わかみやおおしゅうへんいせきぐん）　(No.242)

御成町126番１地点

例　言

1. 本報文は、若宮大路周辺遺跡群（鎌倉市『242）内、鎌倉市御成町126番1地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、個人専用住宅の建設に先立ち平成15年10月25日から11月21日にかけて、鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は18㎡。
3. 調査体制は以下の通り。
   調　査　員　汐見一夫　小泉衣理
   調査協力　㈳鎌倉市シルバー人材センター
4. 本報文は、遺構に係わる整理作業を主に汐見が、遺物に係わる整理作業を小泉衣理が行なった。原稿執筆は第１章・第２章と第３章の遺構を汐見が、第3章の遺物を小泉が、第4章は両名討議の上汐見が文責を負い全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構を汐見が、遺物を小泉が撮影した。
5. 発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。
   ㈳鎌倉市シルバー人材センター　㈲鎌倉遺跡調査会　㈱博通　鎌倉考古学研究所
6. 本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本文目次

第１章　環境と立地 …… 67
第２章　調査の概要 …… 75
第３章　発見遺構 …… 76
第４章　出土遺物 …… 78
第５章　調査成果 …… 83

挿図・表目次

図１　若宮大路周辺遺跡群の範囲と調査地点 …… 68
図２　調査区と国土座標 …… 75
図３　遺構図 …… 76
図４　１面出土遺物 …… 78
図５　２面出土遺物 …… 78
図６　３面出土遺物 …… 79
図７　４面出土遺物 …… 79
図８　５面出土遺物（１）…… 80
図９　５面出土遺物（２）…… 81
図10　常滑窯甕押印文拓影 …… 82
表１　常滑窯甕押印文拓影 …… 82
表２　出土遺物計測表 …… 83
表３　出土遺物数 …… 84

写真図版目次

図版１　１～４面の遺構 …… 86
図版２　５面の遺構（１）…… 87
図版３　５面の遺構（２）…… 88
図版４　出土遺物 …… 89

第１章　環境と立地

若宮大路周辺遺跡群は史跡若宮大路を中心に、南北は鶴岡八幡宮社頭から現下馬四ッ角まで、東西は小町大路から今小路に亘る広範囲に及び、急速な市街化に伴い調査事例も100地点を超えている。本調査地点は遺跡地のほぼ中央西寄り、ＪＲ鎌倉駅北西指呼の位置で現況の海抜は7.0m弱を測る。

遺跡地の現況の地形は、史跡若宮大路の東側では遺跡地北東端で現況海抜10m強、東側を流下する滑川に沿う様に南に向って低くなり現二の鳥居の南のＪＲ鎌倉駅前付近に海抜６ｍ台と低い一帯があるが、ほぼ海抜７ｍ前後、現扇ヶ谷川と滑川が合流する辺りが海抜5m前後となる。史跡若宮大路の西側では、今小路の西側丘陵が迫出していることもあり、北から南及び西から東へも緩傾斜がある。北西端で海抜12m程、現二の鳥居付近は海抜7m程だが西寄りの今小路に面した辺りは海抜８ｍあり、そこから海抜４ｍ弱の現下馬四ッ角に向って北西から南東へ傾斜する。

この現況の傾斜は、概ね中世以降踏襲されてきたことが数多く為された発掘調査の成果から得られている。史跡若宮大路の東側鎌倉駅前付近一帯は、共通して方形竪穴を中心とした庶民の生活址が発見され、地点WAでは冠水したのか倉庫内から小町大路側溝へ排水を試みた様な遺構を、ＯＭＢでは滑川旧流路を発見している。方形竪穴を中心とする遺構群は史跡若宮大路の西側南端の調査地点にも共通するが、これらは砂丘上に立地し、この砂丘が遺跡地西方から流下する佐助川の南下を阻み裁許橋から裁許橋地点を経て、下馬２地点を通り現下馬四つ角南東辺りで滑川に合流する。

史跡若宮大路の西側の遺跡地では、幾つかの河川を発見し、その結果幹線道路から離れると住う人々が道路から派生する通路のみならず、自然地形＝流路に併せて居住空間を形成していることが序序に明らかになっている。中世期の扇ガ谷川を発見している瀬古邸では、東岸の町屋は河川筋に沿って立並び、ＣＸで発見した側溝を伴う道路状遺構も同軸と観られが、一方、宮田邸で発見した側溝を伴う道路遺構は、若宮大路とほぼ同軸と想われる。瀬古邸の河川は上條邸では発見されていない事から、近世に至るまでの間に中島葬儀社桜井ビル白洋舎で発見した流路に付け替えられたのであろう。長沢屋や豊嶋屋で発見した近世河川は中世期の若宮大路側溝を再利用したのであろうか、二の鳥居より南のユニオン森ビル今村酒店を経て若宮大路西沿いを流下し、郵便局南西辺りで若宮大路を横切って小町橋下を経て滑川へと合流する。

本調査地点の南西の千葉地東では、調査区の東寄りに木枠護岸を伴い南西へと流下する河川を発見し、この河川はドレメ地点を経て奴田ビル東際を暗渠となって南東へと流下する。大町橋報告書ではこの河川を仮称「御成川」としている。御成前では、東へと向きを変える「御成川」流路を発見しているが、そこから先に触れた砂丘までの一帯は調査例が無く辿り難い。参考までにこの一帯で数地点行われた確認調査では、何れも現地表ほぼ直下から遺物を殆ど含まない大型土丹塊層が1m以上堆積しているのが共通して観察され、場所に拠っては土丹層直下に砂礫層や中世基盤層を確認している。松田工務店と太陽設備でも現若宮大路と平行する河川を発見しているが、駐輪場では河川氾濫対策と看られる遺構群が指摘されており、「御成川」と同一とは考え難い。

他に遺跡地内では、加藤ビルで上層から古墳期の遺物が出土した流路が南北方向に、太陽設備では奈良・平安期の遺物が大量に出土した河川が北東から南西方向に発見している。

図１　若宮大路周辺遺跡群の範囲と調査地点

引用・参考文献
赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館.
上本進二　2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『神奈川県逗子市桟敷戸遺跡発掘調査報告書』.東国歴史考古学研究所調査研究報告第26集.227～246頁.東国歴史考古学研究所.
大河内勉　1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　ー小町一丁目1028番1地点』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団鎌倉市史編纂委員会　1979『鎌倉市史　史料編　第三』吉川弘文館.
川又隆央　2000「若宮大路周辺遺跡群(御成町123番5地点)出土の古代遺物『鎌倉考古』№44.鎌倉考古学研究所白井永二編　1976『鎌倉事典』.東京堂出版.

調査地点・報告書

地点１　松尾宣方ａ　1983「22．小町一丁目305番ロ・308番所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.小町一丁目305･308地点.1975年調査.
地点２　松尾宣方ｂ　1983「29．小町一丁目65番10～12所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.小町一丁目65番10～12地点.1977年調査.
地点３　松尾宣方ｃ　1983「34．二ノ鳥居西遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.小町一丁目66番3他.1977年調査.
地点４　松尾宣方ｄ　1983「36．本覚寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.小町一丁目302番地点.1977年調査.
地点５　松尾宣方ｅ　1983「41．小町二丁目281番所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.小町二丁目281番地点.1977年調査.
地点６　松尾宣方ｆ　1983「44．藤内定員邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会.小町一丁目319番2地点.1978年調査.
地点７　松尾宣方ｇ　1983「33．藤内定員邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ.鎌倉市教育委員会./鎌倉考古学研究所　1981『掘り出された鎌倉』.鎌倉考古学研究所.小町一丁目309番４地点.1979年調査.
地点８　河野眞知郎・斎木秀雄 他　1982「カトレヤビル新築工事に伴う中世鎌倉市街地の発掘調査報告書」『鎌倉考古学研究所調査研究報告』第１集.鎌倉考古学研究所.小町一丁目75番１地点.1979年調査.
地点９　斎木秀雄・河野眞知郎 他　1985『(推定) 藤内定員邸跡遺跡』.教育文化施設用地発掘調査団・鎌倉市教育委員会.小町一丁目891番地点.1979～80年調査.
地点10　河野眞知郎・斎木秀雄 他ａ　1982「カトレヤビル新築工事に伴う中世鎌倉市街地の発掘調査報告書」『鎌倉考古学研究所調査研究報告』第1集.鎌倉考古学研究所.小町一丁目75番１地点.1979年調査.
地点11　斎木秀雄・河野眞知郎ａ　1982「ヤノヤビル建設に伴う中世鎌倉市街地遺跡の緊急発掘調査報告」『鎌倉考古学研究所研究報告』第２集.鎌倉考古学研究所.御成町11番２地点.1979年調査.
地点12　河野眞知郎・斎木秀雄 他ｂ　1982「松秀ビル新築工事に伴う中世鎌倉市街地の発掘調査報告書」『鎌倉考古学研究所調査研究報告』第1集.鎌倉考古学研究所.小町一丁目65番21地点.1979年調査.
地点13　小町一丁目81番1地点.1980年調査.
地点14　宇田川正宏　1981「鎌倉駅西口前の中世井戸址と遺物」『鎌倉考古』5.鎌倉考古学研究所.御成町地点.1980年調査.
地点15　斎木秀雄 他　1985『諏訪東遺跡』.諏訪東遺跡調査会.御成町806番５地点.1981年調査.

地点16　斎木秀雄・河野眞知郎ｂ　1982「小林邸新築工事に伴う中世鎌倉市街地の発掘調査報告」『鎌倉考古学研究所研究報告』第２集.鎌倉考古学研究所.御成町806番９地点.1981年調査.

地点17　手塚直樹　1983『蔵屋敷東遺跡』.江ノ電鎌倉ビル発掘調査団.御成町822番２地点.1981年調査.

地点18　斎木秀雄　1982「本覚寺旧境内の発掘調査」『鎌倉考古』14・15.鎌倉考古学研究所.小町一丁目302番外地点.982年調査.

地点19　1984『神奈川県埋蔵文化財調査報告』26.神奈川県教育委員会.大町一丁目1034番2地点.1982年調査.

地点20　1984『神奈川県埋蔵文化財調査報告』26.神奈川県教育委員会.小町二丁目281番30地点.1982年調査.

地点21　小川裕久・服部実喜 他　1984『蔵屋敷遺跡』.鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会.小町一丁目103番9地点.　1982年調査.

地点22　斉木秀雄　1983『小町1丁目309番５地点発掘調査報告』.（推定）藤内定員邸跡発掘調査団.小町一丁目309番５地点.1982年調査.

地点23　馬淵和雄・大河内勉　1985『小町二丁目345番−２地点遺跡』.小町二丁目345番−２地点遺跡発掘調査団.小町二丁目345番２地点.1983年調査.

地点24　1985『神奈川県埋蔵文化財調査報告』27.神奈川県教育委員会.御成町130番６地点.1984年調査.

地点25　服部実喜・宍戸信悟　1986『千葉地東遺跡　神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』10.神奈川県立埋蔵文化財センター.御成町12番18地点.1984年調査.

地点26　1986『神奈川県埋蔵文化財調査報告』28.神奈川県教育委員会.御成町819番１地点.1984年調査.

地点27　馬淵和雄　1986「1．若宮大路周辺遺跡群　小町一丁目116番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2.鎌倉市教育委員会.小町一丁目116番地点.1985年調査.

地点28　斉木秀雄　1987『御成町228番２他地点遺跡』.千葉地東遺跡発掘調査団.御成町228番２・130番１地点.　1985年調査.

地点29　小町二丁目１番14地点.1986年調査.

地点30　1989『神奈川県埋蔵文化財調査報告』30.神奈川県教育委員会.小町二丁目1番14地点.1986年調査.

地点31　馬淵和雄　1988「2．若宮大路周辺遺跡群　由比ガ浜一丁目128番７地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4.鎌倉市教育委員会.由比ガ浜一丁目128番７地点.1986年調査.

地点32　手塚直樹・菊川英政　1989『小町一丁目120番 −1地点遺跡』.風門社ビル発掘調査団.小町一丁目120番1地点.1986年調査.

地点33　1989『神奈川県埋蔵文化財調査報告』30.神奈川県教育委員会.小町二丁目４番６地点.1986年調査.

地点34　1989『神奈川県埋蔵文化財調査報告』30.神奈川県教育委員会.小町一丁目322番２地点.1987年調査.

地点35　手塚直樹・森孝子　1999『若宮大路周辺遺跡群』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町一丁目106番1地点.1987年調査.

地点36　福田誠　1994『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団・鎌倉市教育委員会.小町一丁目67番２地点.1987年調査.

地点37　馬淵和雄　1989「7．若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目12番18地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5.鎌倉市教育委員会.小町二丁目12番18地点.1987年調査.

地点38　1990『神奈川県埋蔵文化財調査報告』31.神奈川県教育委員会.小町二丁目276番地点.1987年調査.

地点39　田代郁夫・佐藤泉　1989「5．若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目39番6他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5.鎌倉市教育委員会.小町二丁目39番6地点.1987年調査.

地点40　馬渕和雄　1997「若宮大路周辺遺跡群　由比ヶ浜一丁目123番5外地点参考資料」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11（第1分冊）.鎌倉市教育委員会.由比ガ浜一丁目118番地点.1987年調査.

地点41　1990『神奈川県埋蔵文化財調査報告』31.神奈川県教育委員会.御成町778番1地点.1988年調査.

地点42　馬渕和雄　1990「10．若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目210番他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6.鎌倉市教育委員会.雪ノ下一丁目210番地点.1988年調査.

地点43　菊川英政　1990「6．若宮大路周辺遺跡群（№242）　扇ヶ谷一丁目74番8外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6.鎌倉市教育委員会/菊川英政　1999『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.扇ガ谷一丁目74番8・10地点.1988年調査.

地点44　1990『神奈川県埋蔵文化財調査報告』32.神奈川県教育委員会.小町一丁目81番23地点.1988年調査.

地点45　斉木秀雄・汐見一夫　1991『由比ヶ浜1-117-1地点遺跡』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.由比ガ浜一丁目117番1地点.1988年調査.

地点46　田代郁夫・原廣志　1990「7．若宮大路周辺遺跡群（№242）　小町二丁目280番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6.鎌倉市教育委員会.小町二丁目280番2地点.1989年調査.

地点47　福田誠　1990「9．若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目5番23外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6.鎌倉市教育委員会.小町二丁目5番23地点.1989年調査.

地点48　菊川英政　1999『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.御成町819番1地点.1989年調査.

地点49　1991『神奈川県埋蔵文化財調査報告』33.神奈川県教育委員会.小町二丁目279番2地点.1989年調査.

地点50　1991『神奈川県埋蔵文化財調査報告』33.神奈川県教育委員会.小町二丁目4番4地点.1989年調査.

地点51　田代郁夫・原廣志　1991「2．若宮大路周辺遺跡群（№242）　鎌倉市小町二丁目69番6外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7.鎌倉市教育委員会.小町二丁目69番6地点.1989年調査.

地点52　1991『神奈川県埋蔵文化財調査報告』33.神奈川県教育委員会.小町二丁目281番1地点.1989年調査.

地点53　手塚直樹・森孝子　1999『若宮大路周辺遺跡群』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町一丁目116番4地点.1989年調査.

地点54　木村美代治　1993『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団・鎌倉市教育委員会.御成町868番地点.1990年調査.

地点55　1992『神奈川県埋蔵文化財調査報告』34.神奈川県教育委員会.御成町727番12・19地点.1990年調査.

地点56　1992『神奈川県埋蔵文化財調査報告』34.神奈川県教育委員会.小町二丁目4番19地点.1990年調査.

地点57　大河内勉　1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町

一丁目1028番1地点.1990年調査.

地点58　菊川英政　1992「3．若宮大路周辺遺跡群（№242）　小町二丁目12番15地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8.鎌倉市教育委員会/菊川英政　1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町二丁目12番15地点.1990年調査.

地点59　佐々孝・米沢容一　1993『鎌倉市早見芸術学園改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』.早見芸術学園発掘調査団・(株)四門文化財研究室.小町一丁目83番1地点.1990～91年調査.

地点60　木村美代治・福田誠 他　1992「若宮大路周辺遺跡群（№242）　御成町872番14」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8.鎌倉市教育委員会.御成町872番14地点.1991年調査.

地点61　森孝子・木村美代治　1995『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町一丁目81番8地点.1991年調査.

地点62　1993『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35.神奈川県教育委員会./大河内勉　1991「若宮大路周辺遺跡群の調査」『鎌倉考古』20.鎌倉考古学研究所.小町二丁目12番10地点.1991年調査.

地点63　松尾宣方・継 実　1993「9．若宮大路周辺遺跡群（№242）　御成町811番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9（第3分冊）.鎌倉市教育委員会.御成町811番地点.1991年調査.

地点64　1993『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35.神奈川県教育委員会.由比ガ浜一丁目120番6地点.1991年調査.

地点65　1993『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35.神奈川県教育委員会.御成町818番1地点.1991年調査.

地点66　1993『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35.神奈川県教育委員会.／斉木秀雄　1992「若宮大路周辺遺跡群（本覚寺ビル）の調査」『鎌倉考古』22.鎌倉考古学研究所.小町一丁目287番13地点.1992年調査.

地点67　斉木秀雄・伊丹まどか　1993「10．若宮大路周辺遺跡群（№242）　小町二丁目63番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9（第3分冊）.鎌倉市教育委員会.小町二丁目63番9地点.1992年調査.

地点68　佐藤仁彦・小林重子　1994「若宮大路周辺遺跡群（№242）　小町一丁目325番イ外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10（第3分冊）.鎌倉市教育委員会.小町一丁目325番イ外地点.1992年調査.

地点69　宮田眞・森孝子 他　1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町一丁目322番地点.1992年調査.

地点70　菊川英政　1994「9．若宮大路周辺遺構群（№242）　扇が谷一丁目74番地9外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10（第2分冊）.鎌倉市教育委員会.扇ヶ谷一丁目74番9地点.1993年調査.

地点71　宮田眞　1996『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町一丁目321番1地点.1993年調査.

地点72　清水菜穂・宮田眞　1995『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.由比ガ浜一丁目129番5地点.1993年調査.

地点73　馬渕和雄　1995「6．若宮大路周辺遺跡群（№242）　由比ガ浜一丁目123番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11（第1分冊）.鎌倉市教育委員会.由比ガ浜一丁目123番5地点.1994年調査.

地点74　菊川英政　1997「若宮大路周辺遺跡群（№242）　御成町788番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13（第1分冊）.鎌倉市教育委員会／菊川英政　1997『若宮大路周辺遺跡群発

掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.御成町788番3,788番5地点.1995年調査.

地点75　遠藤雅一　1998「若宮大路周辺遺跡群（№242）　由比ガ浜一丁目118番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13（第2分冊）.鎌倉市教育委員会.由比ガ浜一丁目118番7地点.1995年調査.

地点76　1994『神奈川県埋蔵文化財調査報告』39.神奈川県教育委員会.小町一丁目66番5地点.1996年調査.

地点77　原廣志・秋山哲雄　1998「若宮大路周辺遺跡群（№242）　小町二丁目28番3・5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第2分冊）.鎌倉市教育委員会.小町二丁目28番3・5地点.1996年調査.

地点78　1997『神奈川県埋蔵文化財調査報告』40.神奈川県教育委員会.／野本賢二　1999「若宮大路周辺遺跡群（小町2丁目4番9号）の調査『第7回 鎌倉市内遺跡調査·研究発表会 発表要旨』.鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会.小町二丁目4番9地点.1996年調査.

地点79　汐見一夫・川又隆央 他　1999「若宮大路周辺遺跡群（№242）　（御成町123番5地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15（第1分冊）.鎌倉市教育委員会.御成町123番5地点.1997年調査.

地点80　宮田眞・森孝子 他　1998『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町二丁目283番6地点.1997年調査.

地点81　福田誠・菊川泉 他　1999「若宮大路周辺遺跡群（№242）　（小町二丁目5番8地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15（第1分冊）.鎌倉市教育委員会/福田誠·菊川泉·神山晶子 1998『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団.小町二丁目5番8地点.1997年調査.

地点82　宮田眞・滝沢晶子　1999『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』.若宮大路周辺遺跡群発掘調査団・宮田事務所.御成町884番6地点.1997年調査.

地点83　1999『神奈川県埋蔵文化財調査報告』41.神奈川県教育委員会/原廣志　2000「(小町二丁目54番3地点)」『第8回鎌倉市内遺跡調査·研究発表会 発表要旨』.鎌倉考古学研究所.小町二丁目54番3地点.1998年調査.

地点84　高野昌巳　2000「若宮大路周辺遺跡群（№242）　鎌倉市小町一丁目81番18地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16（第1分冊）.鎌倉市教育委員会.小町一丁目81番18地点.1998年調査.

地点85　菊川英政・小林重子　2000「若宮大路周辺遺跡群（№242）　小町一丁目198番6」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16（第1分冊）.鎌倉市教育委員会.雪ノ下一丁目198番6地点.1998年調査.

地点86　齋木秀雄・降矢順子b　2000「若宮大路周辺遺跡群の調査」『第10回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』.鎌倉考古学研究所.御成町872番14地点.1999年調査.

地点87　齋木秀雄・降矢順子a　2000「若宮大路周辺遺跡群の調査　— 第84次（地点）概要報告 —」『鎌倉考古』45.鎌倉考古学研究所.小町二丁目280番3、12地点.1999年調査.

地点88　手塚直樹・野本賢二　2000「若宮大路周辺遺跡群（№242）　小町二丁目402番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17（第1分冊）.鎌倉市教育委員会.小町二丁目402番5地点.1999年調査.

地点89　宗臺秀明・宗臺富貴子　2003「若宮大路周辺遺跡群（№242）　雪ノ下一丁目200番3外地点」

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19.鎌倉市教育委員会.雪ノ下一丁目200番3外地点.2001年調査.

地点90　2003『神奈川県埋蔵文化財調査報告』45.神奈川県教育委員会.小町二丁目1番6地点.2002年調査.

地点91　2003『神奈川県埋蔵文化財調査報告』45.神奈川県教育委員会.雪ノ下一丁目198番1地点.2002年調査.

地点92　熊谷満　2003「若宮大路周辺遺跡群の調査」『第13回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』.鎌倉考古学研究所.御成町802番2外地点.2002年調査.

地点93　滝沢晶子　2004「若宮大路周辺遺跡群の調査」『第14回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』.鎌倉考古学研究所.小町二丁目283番の一部地点.2003年調査.

地点94　雪ノ下一丁目161番33の一部地点.2003年調査.

地点95　由比ガ浜一丁目127番1地点.2003年調査.

地点96　小町二丁目48番10地点.2003年調査.

地点97　御成町126番1地点.本調査地点.

地点98　小町二丁目402番9外地点.2004年調査.

地点99　御成町123番3地点地点.2004年調査.

地点100　小町三丁目425番3地点.2004年調査.

地点101　小町三丁目425番1の一部外地点.2005年調査.

地点102　由比ガ浜一丁目126番1地点.2005年調査.

地点103　由比ガ浜一丁目126番1地点.2005年調査.

第２章　調査の概要

本調査は個人専用住宅の建設に先立ち、確認調査と諸協議を経て実施された。調査地の三方は、調査に伴う残土置場と安全を兼ねて隣地境界から２mの後退距離を確保した為、実際の調査面積は18㎡程となった。確認調査の成果から現地表から約１mの海抜6.5mまでを重機に依り掘削し、その際には予想される湧水に対応するべく、埋め戻されていた確認調査壙を排水壙として現地表下1.8mまで掘り上げた。

調査に際しては、付近の４級基準点Q088とQ087を基に、調査地内に測量基準点Ａ・Ｂを設定した。それぞれの国土座標値は、Ａ（Ｘ －760.337　Ｙ －485.092）・Ｂ（Ｘ －761.164　Ｙ －485.638）であり、測量の際にはＡ→Ｂを基準として調査区内に方眼を設定することとした。

調査区壁に法面を付けた後に、遺構面の検出と精査を行い、海抜6.3mで発見した土丹敷きを第1面として記録保存した。下層への調査時には調査区壁下に排水用の側溝を細く設定したものの、降雨後は調査区全体が水没する事も一度や二度ではなく、海抜5.8mの４面調査中に東側調査区壁が崩れ、残土と共に調査区内に流れ込んでしまった。調査区内で更に土砂が流れ崩れぬ様養生し５面の精査を行ったが、降雨後に調査区が水没した後は新たな崩落土が水を含み危険な状態になった。協議の上、５面の記録保存は最低限必要な遺構の部分写真撮影に留ざるを得なかった。以下、中世基盤層までの下層の調査は断念し、確認調査壙を利用した時間と範囲の極めて限られたものとなったが、一定量の出土遺物とほぼ全体が腐植土を覆土とする落ち込みや、付近の基盤層と想われる堆積土を確認し、略測ながらも記録保存を果した。記録保存終了後は、関係各方面に連絡の上搬入した器材と出土遺物を撤収し調査終了とした。

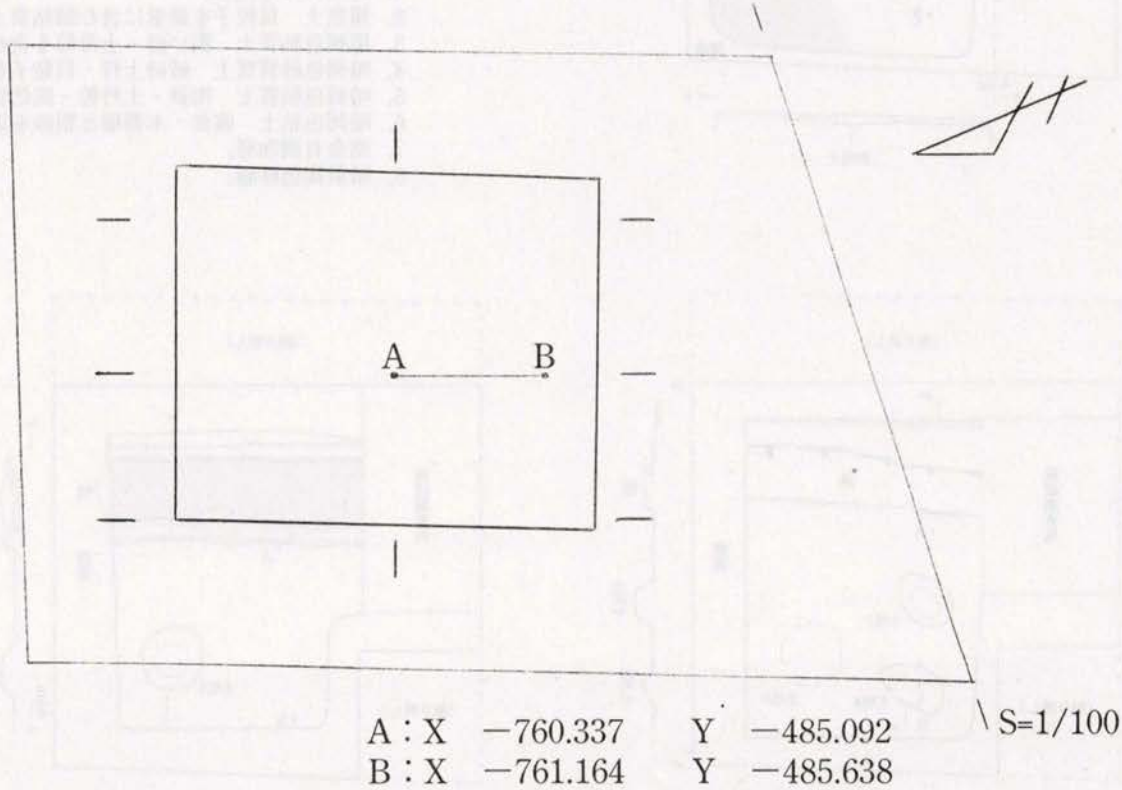
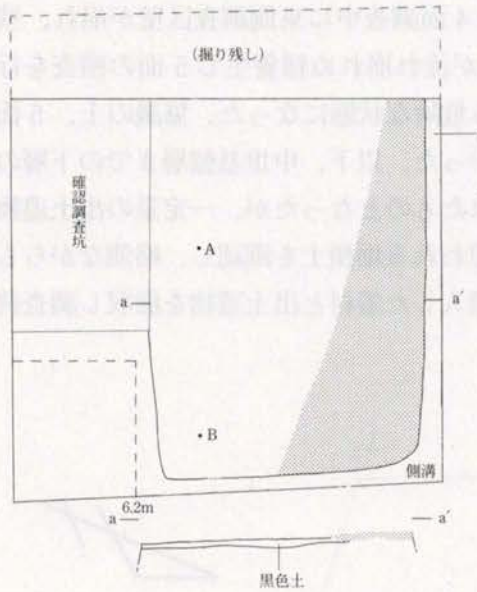


図２　調査区と国土座標

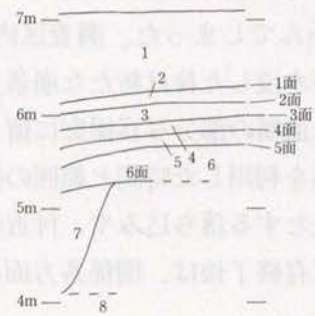
第３章　発見遺構

１面

表土掘削後の残土を取除くと、調査区東寄りに土丹敷きを発見しこの上面を１面とした。土丹敷きは南北方向で範囲は調査区外へと延びる為不明だが、調査区南端で最大幅1.9m、拳大乃至人頭大の土丹を敷詰め隙間には砂泥が堆積し、上面レベルは6.3m前後。土丹西際はほぼ直線的で側溝様の遺構は発見されず、土丹上面とほぼレベルを併せる様に締りの良い黒色土が堆積する。この黒色土は僅かに西へと傾斜し、上面で精査を試みたが遺構は何ら発見し得なかった。

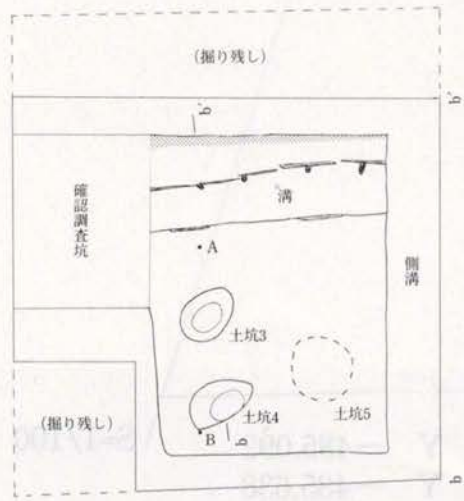


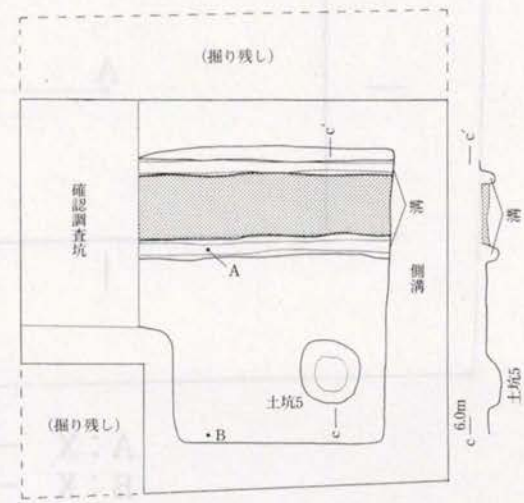
堆積土層模式図



1. 近現代の堆積土。
2. 黒色土　貝粒子を微量に含む弱粘質土。
3. 黒褐色粘質土　粗い砂・土丹粒を含む。
4. 暗褐色砂質質土　破砕土丹・貝粒子を含む。
5. 暗褐色粘質土　褐鉄・土丹粒・炭化物を含む。
6. 暗褐色粘土　腐食・木器層と粗砂を混在する。
7. 腐食有機物層。
8. 暗黄褐色砂層。

１面





３面

図３　遺構図

2面

1面の土丹敷きと黒色土を除去後、調査区全体に拡がる粗砂混じり黒褐色粘質土上面を2面とした。上面はほぼ平坦で海抜6.15m前後。面上から多くの遺物が出土したが遺構は何ら発見し得ず、下層の3面から1面に至る整地層を遺構面として捉えた可能性がある。

3面

2面を若干掘り下げると、調査区北端東西方向に土丹敷きを発見し、海抜6.0m前後の調査区南半では破砕土丹混じりの砂質粘土層が拡がるのを3面とした。発見した遺構は土丹敷き一カ所、溝1条、土坑3基。土丹敷きは発見した範囲は僅かであるが、破砕土丹を厚さ2～5㎝面上に貼付けており、南側に平行して側板を伴う溝を発見している。溝幅は45㎝内外、深さは10㎝に満たず、僅かに遺存する木材の発見状況からは、粗末な横板を打込んだ簡易な杭で内外から支える構造と観られる。土坑は何れも径30～45㎝内外の不整円形で深さは10～20㎝前後と浅い。土坑5は下層4面で発見したが、覆土や堆積土層の観察から3面の遺構の可能性がある。

4面

3面の溝検出の際、底面に拳大の土丹が確認されており、3面終了後に土丹上面まで調査区全体を掘り下げ、海抜5.8m前後の調査区南半に褐鉄・土丹粒混じりの粘質土が拡がるのを4面とした。発見した遺構は土丹敷き1カ所、溝2条、土坑1基。土丹敷きは、土丹粒乃至拳大の土丹を幅60㎝内外、層厚5～10㎝で東西方向に発見した。上面はほぼ平坦で海抜5.85m程、土丹際は部分的に腐食した横板上の木材痕が観られ、平行して溝状の窪みを両脇に発見している。溝は上幅20～30㎝内外、深さ15㎝前後と浅く、土丹際に張付く様に検出された木材痕の他は杭等の部材は発見していない。土坑5は、4面で発見しているが上層3面の遺構と思われる。

5面

4面終了後に下層に向けて掘り下げたが、前章で触れた様に、降雨と水没に拠り脆くなった調査区壁が崩落して調査区内に流れ込み、被害の拡大を防ぐ可く調査範囲を狭めて養生したものの、海抜5.5m前後の遺構面精査をした後に、含水した崩落土が調査区内に設置した土留めを圧し始め、調査区中央付近で切石・杭・板材を発見し部分的に精査した段階で、写真のみの記録保存に留め調査を断念せざるを得なかった。切石は、全て鎌倉石で40～60㎝を測る方形で、厚さは10～15㎝、軟弱な木器層直上に表面を水平する様に据えられていた。板材と杭はやや不規則な配置ながら切石を支える様に切石周囲に発見されている。

6面

5面発見の切石据え方を観察する為に、確認調査壙内を拡張する様に若干掘った際に、有機物腐食土層が大きく落込むのを発見し、北側土層断面と切石直下で掘り込み面と落込みの深さを簡易測量した。6面とした掘り込み面は締りの良好な暗褐色粘質土で海抜5.2m、有機物腐食土層は1m弱急に落込み、淡黄褐色の砂層まで達している。この砂層上面は海抜4.1mで、付近の調査例から無遺物の基盤層と思われる。

第４章　出土遺物

本章では出土した遺物について各遺構面毎に述べ、各遺物の計測値は報文末の出土遺物計測表に纏めた。

図６－１～５は１面遺構外出土遺物。概ね表土掘削と確認調査壙掘り上げ後、１面土丹敷き検出まで及び土丹敷き上面とほぼ同レベルから堆積する黒色土中のの遺物が含まれる。

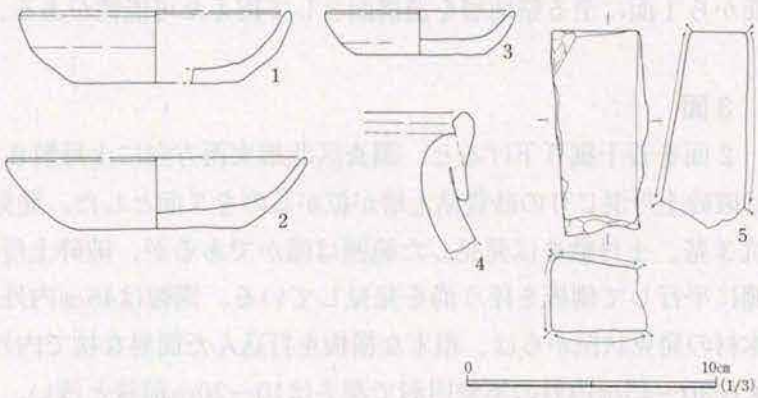


図４　１面出土遺物

１～３は糸切り底かわらけ。１は背高気味で、体部外面中位付近に強い稜をもつ。２は背低気味で器壁が薄く、開きながら立ち上がる。紛質精良胎土に近い質感である。３は小型の背低気味で内底面が広く、器壁は内弯気味に開きながら立ち上がる。４は常滑窯甕口縁部片。縁帯が垂下して頸部に接合し、折り返し部分に隙間がわずかに残る。５は天草産の中砥。砥面は表裏2面を使用。

図7－６～20は２面遺構外出土遺物。前章で触れた如く堆積土層の差異上面を、遺構面と捉えた可能性もあり、１面下から２面検出までの遺物を含めた。

６～10は小型糸切り底かわらけ。６～７は背低か背低気味で内底面が広く、厚味のある器壁は内弯気味に立ち上がり、７は口唇部をわずかに外反している。６は口唇部に打ち欠き痕がみられ、さらに煤が付着する。８～10は背高気味で、体部外面中位～下位付近に稜をもち、器壁は内弯気味もしくは開きながら立ち上がるものとにわかれる。８は口唇を尖らせて、わずかに外反する。９～10は煤が付着する。11～12は大型糸切り底かわらけ。背高気味で、薄い器壁を11は内弯気味に、12は開きながら立ち上がる。12は紛質精良胎土に近い質感である。

13は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。体部内面には使用によるキズが残る。14は白磁口兀皿底部。体部外面下位に重ね焼痕が残る。15～18は常滑窯諸製品。15～16は片口鉢Ⅰ類底部片で、共に体部内面下部に使用による摩滅痕がみられる。16は高台が剥離している。17～18は甕口縁部片。口縁の断面がＮ字

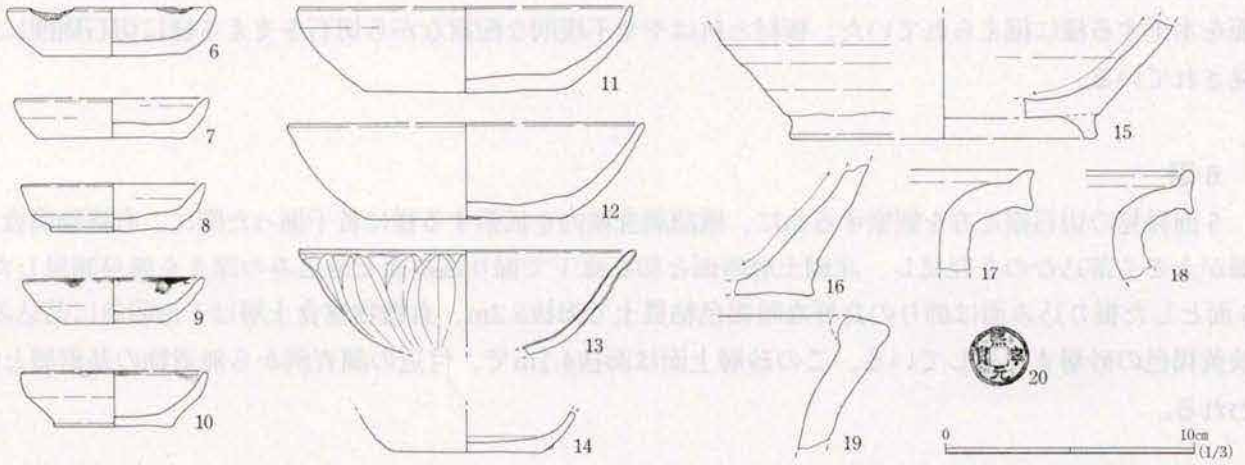


図５　２面出土遺物

状に近い形態を呈する。19は浅鉢型火鉢口縁部片。体部内外面共に横ナデ調整で、全体的に被熱している。20は北宋時代の銅銭、「熙寧元寶」で初鋳年1068年の楷書。銭の表裏面は擦れている。

図8-21～24は3面溝1出土遺物。

21～23は糸切り底かわらけ。21は小型の器高気味で、器壁は内弯しながら立ち上がる。22～23は大型の背低気味で内底面が広く、わずかに内弯しながら立ち上がる。24は瀬戸窯灰釉卸皿底部。二次焼成のために体部外面が煤けている。

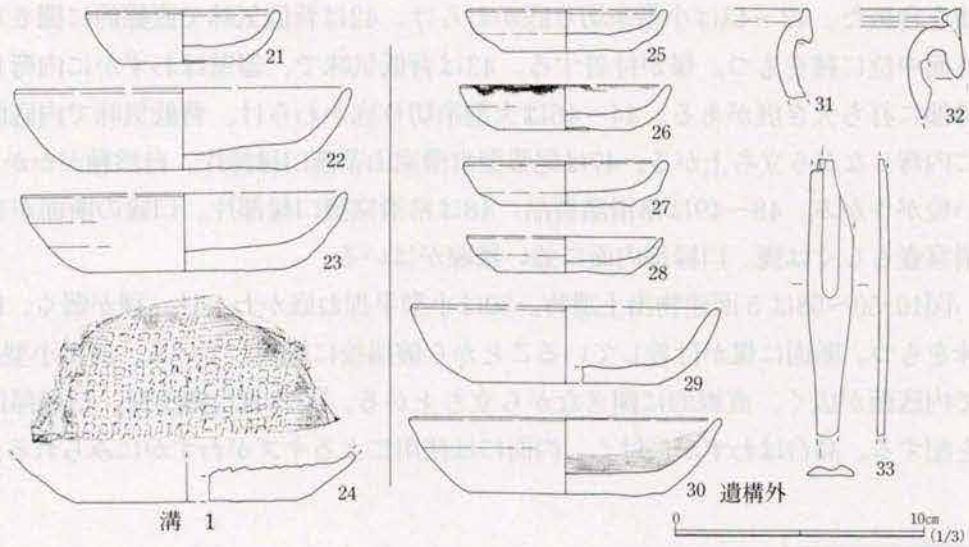


図6　3面出土遺物

図8-25～33は3面遺構外出土遺物。2面以下、3面の遺構検出までの出土遺物を含めた。25～30は糸切り底かわらけ。25～28は小型の背低か背低気味で、器壁は開きながら立ち上がり、体部外面中位の稜からやや内弯気味に立ち上がる。29～30は大型の背低気味で内底面が広く、器壁はやや内弯しながら立ち上がり、30は口唇部をわずかに外反させる。26、30は煤が付着する。

31～32は常滑窯甕口縁部片。口縁の断面がN字状を呈し、32は縁帯が下方へのびる。33は骨製品の笄。薄板状にした鹿骨を刃物で削り出し、全体的に丁寧な研磨で光沢がある。

図9-34～38は4面溝2出土遺物。34～35は小型糸切り底かわらけ。34は背低気味で、器壁は直線的に開きながら立ち上がる。35は背高気味で、薄い器壁は開きながら立ち上がり、体部外面中位の稜からわずかに外反する。口縁部に沈線のような条線が巡る。36～38は木製品類。36は表面が黒漆塗りの横櫛。歯の密土が1cm中4本と粗い。37～38は草履芯。先端は直線的に削られる。

図9-39～41は4面土壙5より出土。39は常滑窯甕口縁部片。口縁の断面がN字状を呈する。40～41は箸状木製品。

図9-42～49は4面遺構外出土遺物。3面以下、4面の遺構検出までの出土遺

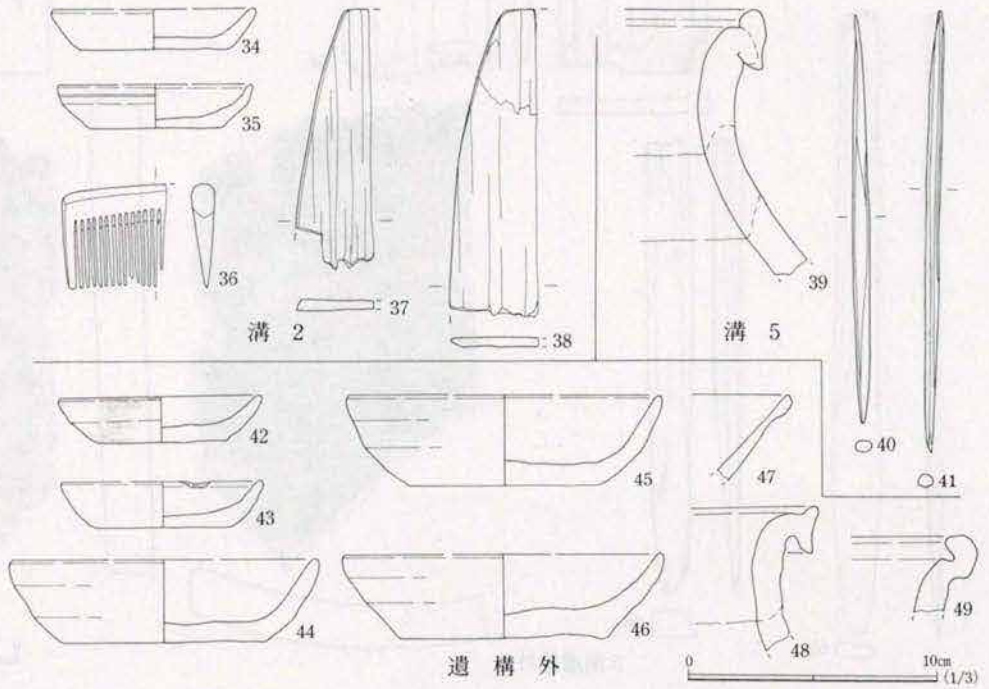


図7　4面出土遺物

物を含めた。42～43は小型糸切り底かわらけ。42は背低気味で直線的に開きながら立ち上がり、体部外面中位に稜をもつ。煤が付着する。43は背低気味で、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がる。口唇部に打ち欠き痕がある。44～46は大型糸切り底かわらけ。背低気味で内底面が広く、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がる。47は尾張型常滑窯山茶碗口縁部片。自然釉がかかる口唇部周辺の表面に白い粒がうかぶ。48～49は常滑諸製品。48は常滑窯甕口縁部片。口縁の断面がN字状を呈する。49は常滑窯壺もしくは甕。口縁部内面に強い稜線がはいる。

図10-50～58は５面建物出土遺物。50は小型手捏ね底かわらけ。稜が弱く、口唇部や底部が厚くて丸味をもつ。断面に煤が付着していることから破損後に被熱している。51は小型糸切り底かわらけ。背低で内底面が広く、直線的に開きながら立ち上がる。52は青白磁小皿。口縁部は直進し、内底面に花文を配する。高台はわずかに付く。内面には使用によるキズがわずかにみられる。53は龍泉窯系青磁鉢底

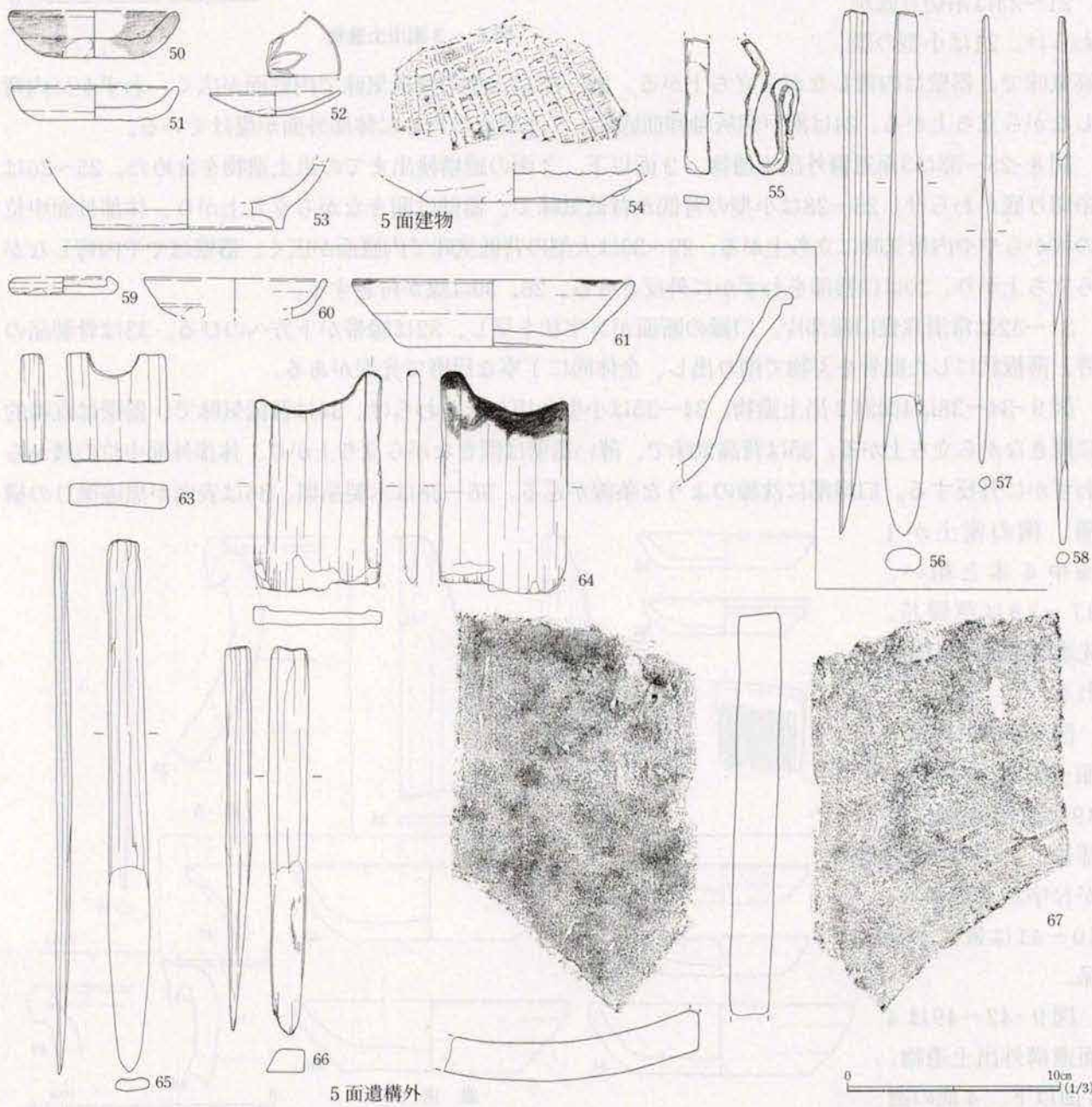


図８　５面出土遺物（１）

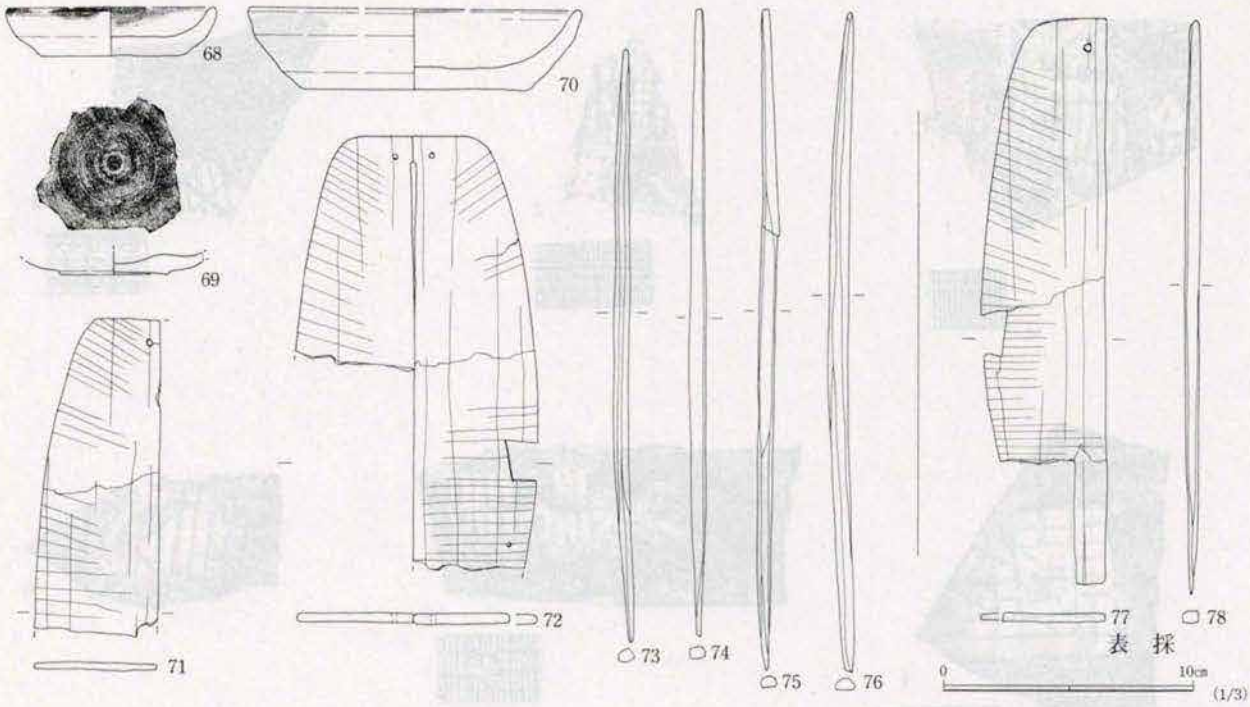


図９　５面出土遺物（２）

部片。光沢のある灰緑色の釉は、高台畳付を除いて厚くかけられている。内外面ともに使用によるキズはみられない。54は瀬戸窯灰釉卸皿底部。内底面にも黄色味がかった淡緑色の釉がハケ塗りで施される。外面体部下位に重ね焼き痕が残る。55は金属製品の掛金具。錆による摩耗が激しい。56は箆状木製品。厚味のある棒状に削られた握りの途中から平坦で巾広い削りを斜めにいれて、箆面としている。箆面には刃物痕がみられる。57～58は箸状木製品。

図10-59～67は5面遺構外出土遺物。４面以下、５面の遺構検出までの出土遺物を含めた。59は手捏ね底の内折れ白かわらけ。所謂、コースター状を呈する。60は手捏ね底白かわらけ。器壁は薄く、口縁端部は丸味をおびる。61は糸切り底かわらけ。背高気味で、器壁はやや厚味があり、外に開きながら立ち上がる。煤が付着。62は常滑窯片口鉢Ⅰ類。口唇部がつまみだされるように外側に外反する。63～64は不明木製品。63は一端を半月状に削り込み、全体的に丁寧に調整している。64は板状の一端を半月状のように削るものの、被熱によるこげのため本来の形状は不明。断面は溝状に整形されている。65～66は箆状木製品。65は扁平状の握りの途中から平坦で巾広い削りが斜めに入る。背面は、箆面の周辺のみ細かく削り、丸味を持たせている。66は台形状の握り部分の一端部を両側面から削り下し、先端を薄く尖らせている。箆面先端は使用により摩滅している。67は平瓦。凸面は斜格子目叩き痕と指頭ナデ調整を施す。

図11-68～76は6面遺構外出土遺物。前章で触れた様に、極限られた範囲内での調査に留まったが、多くの遺物を図示し得た。68～69は小型糸切り底かわらけ。68は背低気味で、器壁は内弯しながら立ち上がる。煤が付着。69は焼成が良好で、胎土は硬く焼きしまっている。内底面無調整で、中央が窪む。70は大型糸切り底かわらけ。器壁は開きながら立ち上がり、口縁部付近の稜より外反する。煤が付着。71～72は草履芯。71の端部は直線的に削られ、小孔や繊維・繊維痕が残る。72の端部は直線的に、側縁部はやや丸味をもたせて削っている。小孔や合わせ部中央は空いており、両面共に繊維痕が残る。73～76は箸状木製品。75は途中で折れている。77～78は表土採集遺物。77は草履芯。端部を直線的に、側縁部はやや丸味をもたせて削っている。小孔や繊維痕が残る。78は箸状木製品。

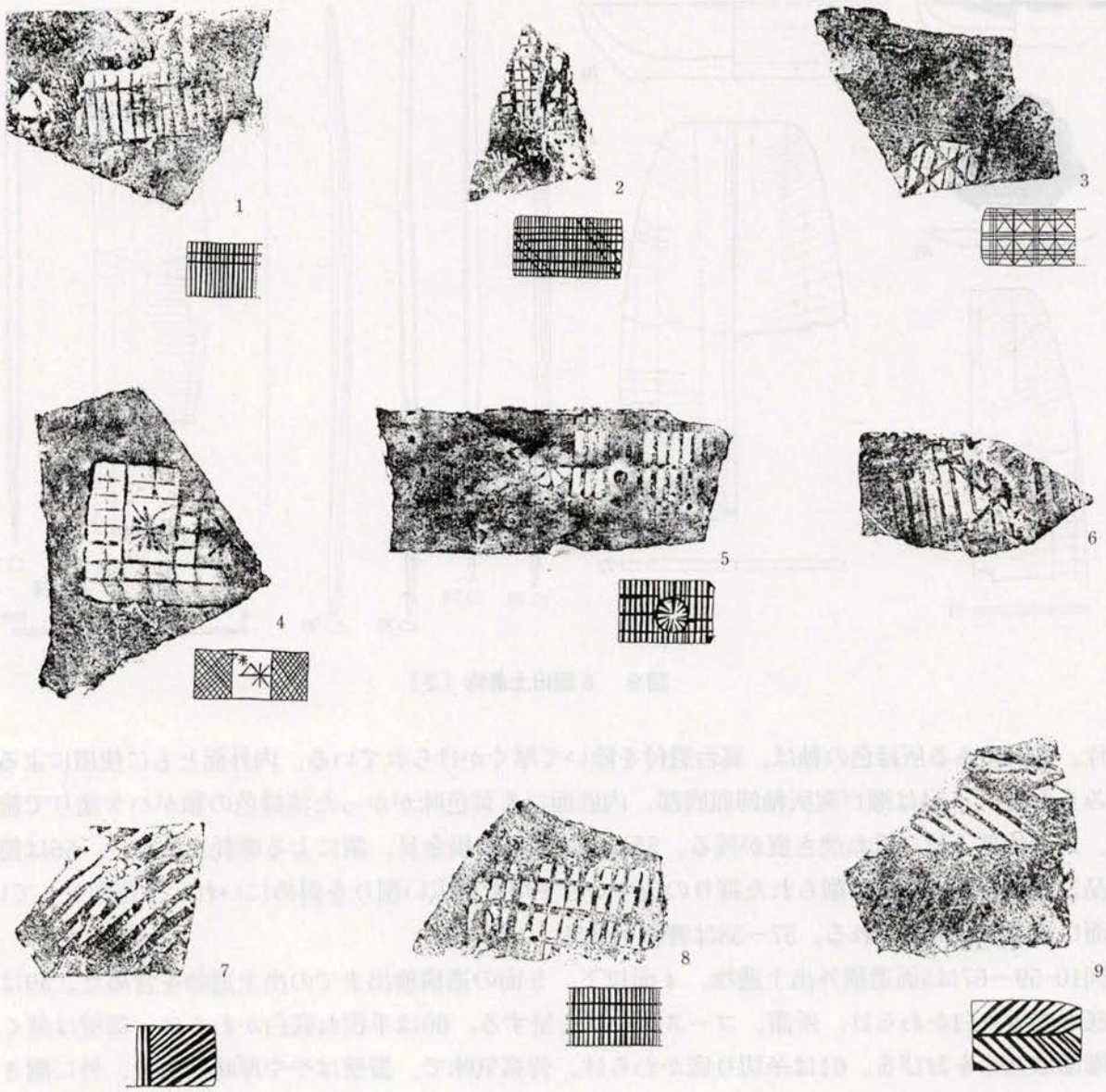


表1　常滑窯甕押印文拓影

	遺構・層位	文様
1	3面溝	格子文
2	3面上	格子文に斜線
3	4面土壙5	縦線文に対角線状斜線
4	4面溝3	格子文に花文(菊？)
5	4面上	格子文に花文(菊)
6	4面上	縦線文に対角線状斜線
7	5面構成土	斜線文
8	5面構成土	格子文
9	6面落込み	矢羽根(？)
10	6面落込み	方格に対角線状斜線

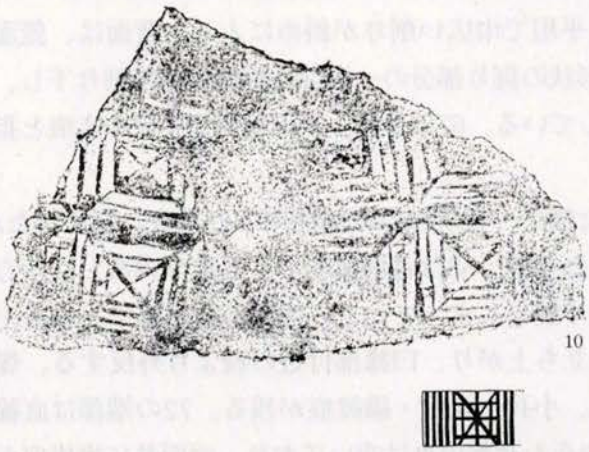


図10　常滑窯甕押印文拓影

第5章　調査成果

本調査地点は、第1章で触れた如く千葉地東で発見された河川が、蛇行することなく流下しているとすれば河川或は氾濫原の検出が予想されたが、前章までに述べた如く発見した遺構群は付近の調査例と違わず、短期間とはいえ概ね踏襲された生活域と考えられる。1・3・4面で発見した土丹敷きは、道路というよりは広範囲な敷地内或は町屋の中での通路と想われ、就中地割を示唆しているのであろが、その方向は今小路や若宮大路の軸線とはやや異なる。とすれば、本調査地点の軸方向は自然地形に影響されるとも考えられよう。地点79では中世の流路は発見して居らず、千葉地東の流路幅から観て本地点より東を流れているとは考え難いが、北西の菊川地点2箇所でもしっかりとした生活面と遺構群が報告されている。「御成川」が千葉地東より北でどの様な流路を辿っているのか興味は尽きぬが、今後の調査例を待たねばならない。

出土遺物から観ると、全体の7割近くを糸切りかわらけが占め（表２参照）、遺物から観る限りでは面における時期的な差はほとんどみられない。図示はできなかったが上層の１面から３面においては、背高で碗型を呈する「薄手丸深」に近いタイプも多くはないが出土し、４面に若干ではあるが手捏ね底かわらけも混じる。下層の常滑窯製品は概ね13世紀中後葉～14世紀初初頭の年代と思われる。 共伴遺物の舶載品は図10-76は碗Ⅹ類、口兀皿はⅢⅨ類、龍泉窯系磁器類はⅢ類とＦ期の13世紀中頃～14世紀初頭前後、瀬戸窯は底卸目皿や入子が生産地で後期の生産がないことから、他の卸皿とあわせても概ね前期後半～中期全般、常滑窯では甕口縁部の側面がＴ字状を呈するものもあったが、概ねはＮ字状を呈する第６型式～第８型式の年代観のものが出土している。これらを総括して本遺跡の年代は13世紀末～14世紀中頃と考えられる。

表２　出土遺物計測表

遺物 / 層位	かわらけ		舶載品	国内産陶器類			火鉢	瓦	石製品	
	手捏ね	糸切り		山茶碗	瀬戸	常滑			滑石	砥石
表土・採集		60				27		1	1	
1面遺構外		64	1		2	20		3		1
2面遺構		8	3			8				
2面遺構外		193(白1)			1	29	2	1		
3面遺構		84			1	7	1			
3面遺構外		296	3		3	64	2	4	2	1
4面遺構		83				42				
4面遺構外		95	2	1		43		3		
5面遺構	1	54	2		1	22				
5面遺構外	1（白）	54				23		4		
6面遺構外	1	25				4		1		
計	3	1,016	11	1	8	289	5	17	3	2
%	0.2	71.6	0.8	0.1	0.6	20.4	0.4	1.2	0.2	0.1

遺物 / 層位	木製品	金属製品		骨製品	自然遺物			近世	古代	計
		釘	銭		骨	貝	木の実			
表土・採集	7				1			32	1	130
1面遺構外										91
2面遺構					1					19
2面遺構外			1		5	1				233
3面遺構	3				3					93
3面遺構外	3			1	12		1			375
4面遺構	5				4		1			125
4面遺構外	3				7	3				144
5面遺構	5	1			1	3				80
5面遺構外	4					12				98
6面遺構外	11					20	1			31
計	41	1	1	1	34	39	3	32	1	1,419
%	2.9	0.1	0.1	0.1	2.4	2.7	0.2	2.3	0.1	95.5

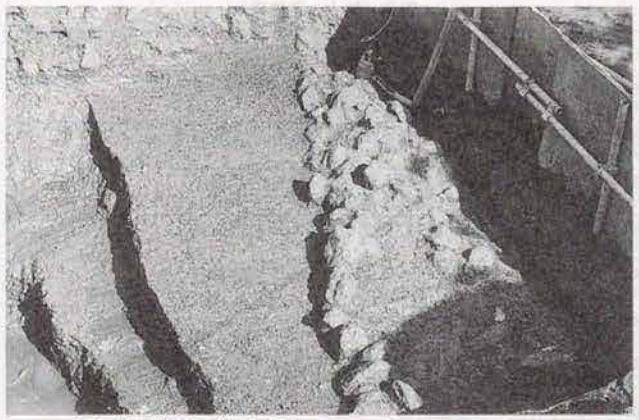
表3　出土遺物数

図番号	種別	計測値　単位 :cm （　）= 復元値　［　］= 残存値			備考（胎土・色調等）
図4-1	土器 かわらけ・糸	(10.6)	(6.6)	2.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図4-2	土器 かわらけ・糸	(11.9)	(6.2)	2.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭とナデの痕が強く残る
図4-3	土器 かわらけ・糸	7.6	5.2	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図4-4	常滑窯 甕	—	—	—	胎土・器表共に白色微砂と黒色砂を混じえる黒灰色土 降灰による自然釉がかかる 第8型式の製品
図4-5	石製品 天草産中砥	[8.1]	[3.3]	[3.2]	石目は水を含み、全体的に黒く変色している
図5-6	土器 かわらけ・糸	8.1	5.6	1.9	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部に外から内と思われる打欠き
図5-7	土器 かわらけ・糸	(7.6)	(5.0)	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図5-8	土器 かわらけ・糸	7.2	5.0	1.9	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図5-9	土器 かわらけ・糸	(7.1)	4.2	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部に煤付着
図5-10	土器 かわらけ・糸	(7.2)	(4.8)	2.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部に煤付着
図5-11	土器 かわらけ・糸	(13.3)	(8.2)	3.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図5-12	土器 かわらけ・糸	(14.2)	8.0	3.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡肌色粉質土 外底面にスノコ痕
図5-13	舶載品 青磁鎬蓮弁文碗	(6.7)	—	—	素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は不透明な灰緑色　F期の製品
図5-14	舶載品 白磁口兀皿	—	6.0	—	素地は白色弱粘質緻密土　釉は青味がかった乳白濁色
図5-15	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	—	(12.0)	—	胎土・器表共に白色小石と黒色微砂を混じえる明灰色土 第5~6型式の製品
図5-16	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	胎土・器表共に白色小石混じえる灰色土
図5-17	常滑窯 甕	—	—	—	胎土は白色微砂と黒色砂を混じえる明灰色土　器表は暗茶色 降灰による自然釉がかかる　第6型式の製品
図5-18	常滑窯 甕	—	—	—	胎土は白色微砂と黒色砂を混じえる灰色土　器表は茶褐色 降灰による自然釉がかかる　第6型式の製品
図5-19	土器質 浅鉢形火鉢	—	—	—	胎土は黒色・白色微砂を混じえる淡茶肌土 全体的に被熱の為、灰色に変色
図5-20	銅銭 北宋・熙寧元寶	2.4			初鋳年1068年　楷書
図6-21	土器 かわらけ・糸	7.6	5.0	2.0	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 表面に黒色砂粒子が付着　外底面にスノコ痕
図6-22	土器 かわらけ・糸	(13.4)	(8.0)	3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図6-23	土器 かわらけ・糸	(12.8)	(8.0)	3.1	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 表面に黒色砂粒子が付着　外底面にスノコ痕
図6-24	瀬戸窯 灰釉卸皿	—	(9.0)	—	胎土は淡黄茶色土、釉は淡黄色を薄くハケ塗り 前期後半~中期前半の製品
図6-25	土器 かわらけ・糸	(7.8)	(5.0)	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図6-26	土器 かわらけ・糸	(8.2)	(5.4)	1.75	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部に煤付着
図6-27	土器 かわらけ・糸	8.0	5.3	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図6-28	土器 かわらけ・糸	(7.7)	(5.4)	1.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図6-29	土器 かわらけ・糸	(12.2)	(7.4)	3.0	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図6-30	土器 かわらけ・糸	12.3	7.9	3.0	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる暗肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕顕著　内底面に煤付着
図6-31	常滑窯 壺	—	—	—	胎土は器表と共に白色小石と砂を混じえる暗茶色土 第6型式の製品
図6-32	常滑窯 甕	—	—	—	胎土は白色小石を混じえる黒灰色土　器表は暗茶褐色 第7型式の製品
図6-33	骨角製品 笄	[21.0]	1.8	3.5	
図7-34	土器 かわらけ・糸	(8.0)	(5.8)	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図7-35	土器 かわらけ・糸	(7.8)	(5.3)	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図7-36	木製品 横櫛	4.1	[4.2]	0.95	
図7-37	木製品 草履芯	[10.3]	[3.0]	0.5	板目材使用
図7-38	木製品 草履芯	[12.3]	[3.5]	0.4	板目材使用
図7-39	常滑窯 甕	—	—	—	胎土は白色小石を混じえる淡橙色土　器表は茶色　第6型式の製品
図7-40	木製品 箸	16.3	0.7	0.5	

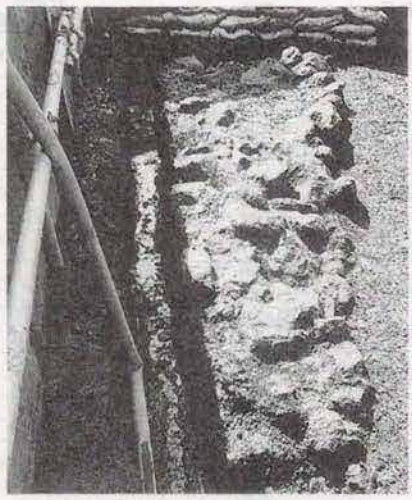
表３　出土遺物数

図番号	種別	計測値　単位:cm （　）= 復元値　［　］= 残存値			備考（胎土・色調等）
図７-41	木製品 箸	16.6	0.55	0.6	
図７-42	土器 かわらけ・糸	8.0	5.2	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕顕著　全体的に煤付着
図７-43	土器 かわらけ・糸	(7.9)	5.4	1.9	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図７-44	土器 かわらけ・糸	(12.2)	(8.2)	3.3	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内外面共に部分的に表面が剥離している
図７-45	土器 かわらけ・糸	(12.6)	(8.4)	3.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる暗肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図７-46	土器 かわらけ・糸	(12.4)	(7.6)	3.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部に煤付着
図７-47	尾張型常滑窯 山茶碗	—	—	—	胎土は器表と共に青味がかった灰色で粗い 口唇部には降灰による自然釉がかかる　第６型式の製品
図７-48	常滑窯 甕	—	—	—	胎土・器表共に白色小石と砂を混じえる黒灰色土 口唇部に降灰による自然釉がかかる　第6b~7型式の製品
図７-49	常滑窯 壺 or 甕	—	—	—	胎土は白・黒色小石を混じえる茶色土 器表は黒味がかった暗茶色土
図８-50	土器 かわらけ・手	(7.6)	(6.9)	2.2	胎土は多量の雲母、黒色微砂、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 断面に煤が付着することから破片後に被熱
図８-51	土器 かわらけ・糸	(7.9)	(5.4)	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図８-52	舶載品 青白磁小皿	(6.0)	(1.2)	1.1	素地は白色粘質緻密土　釉は不透明な薄い水色を 胴下部までかけている 細かい貫入あり
図８-53	舶載品 龍泉窯系青磁鉢	—	(8.4)	—	素地は灰色粘質緻密土　釉は灰緑色
図８-54	瀬戸窯 灰釉卸皿	—	8.1	—	胎土は淡黄色弱粘質土　釉は黄色味がかった淡緑色 前期後半~中期前半の製品
図８-55	金属製品 掛金具	[6.4]	1.2	0.4	
図８-56	木製品 箆	24.4	1.7	1.0	板目材使用
図８-57	木製品 箸	24.6	0.6	0.5	
図８-58	木製品 箸	21.0	0.55	0.5	
図８-59	土器 内折かわらけ・糸	(4.4)	(5.0)	0.8	胎土は砂粒子を含んだ白色粉質土
図８-60	土器 白かわらけ・手	(8.4)	—	—	胎土は砂粒子を含んだ白色粉質土
図８-61	土器 かわらけ・糸	(13.0)	8.2	3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図８-62	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	胎土・器表共に小石や白色砂粒子を混じる茶色土
図８-63	木製品 不明	5.0	4.55	1.05	刃物による切り込みがある。
図８-64	木製品 不明	[10.0]	5.95	0.80	切り込み部分に煤が付着
図８-65	木製品 箆	24.9	1.6	0.55	板目材使用　箆面は刃物痕や使用による摩滅痕がみられる
図８-66	木製品 箆	18.2	1.8	1.1	板目材使用
図８-67	平瓦				
図９-68	土器 かわらけ・糸	(8.4)	5.6	1.9	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部に煤付着
図９-69	土器 かわらけ・糸	—	4.4	—	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる肌色粉質土 焼成良好で硬く焼しまっている
図９-70	土器 かわらけ・糸	(13.2)	9.0	3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕　全体的に煤付着
図９-71	木製品 草履芯	[12.7]	[4.9]	0.30	板目材使用
図９-72	木製品 草履芯	[17.3]	[9.5]	0.45	板目材使用
図９-73	木製品 箸	23.5	0.6	0.5	
図９-74	木製品 箸	24.9	0.6	0.45	
図９-75	木製品 箸	26.35	0.6	0.4	
図９-76	木製品 箸	26.3	0.8	0.45	
図９-77	木製品 草履芯	[22.6]	[5.0]	0.40	板目材使用
図９-78	木製品 箸	22.8	0.65	0.45	

図版１

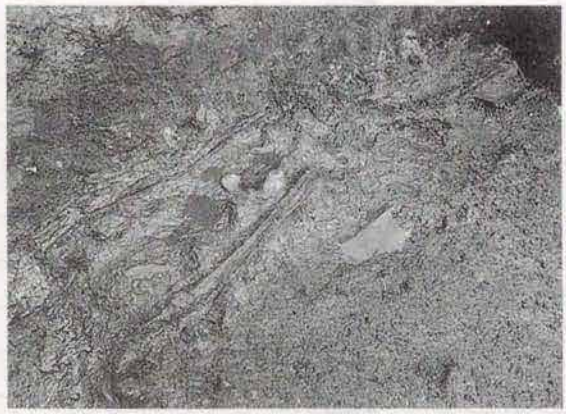


１．１面土丹敷き（南から）



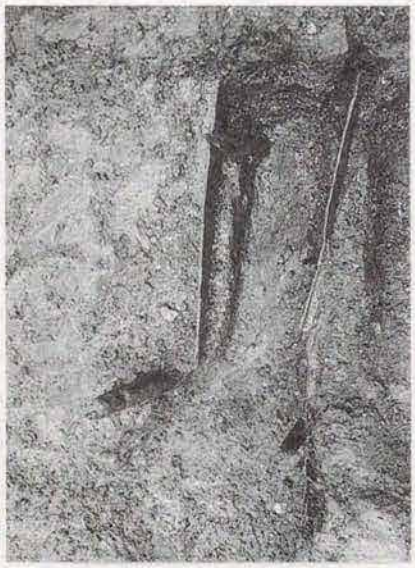
２．同左（北から）

３．３面（南から）



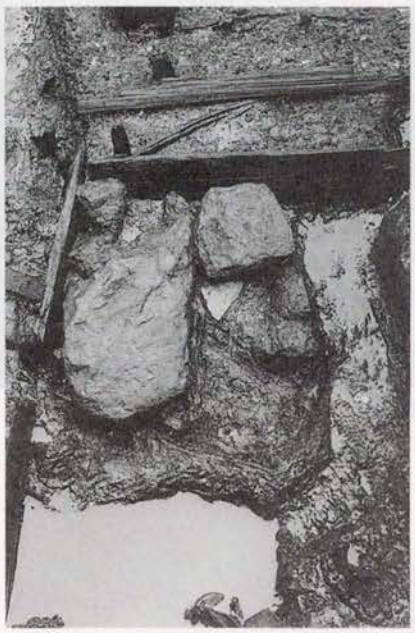
４．３面溝

５．４面（南東から）

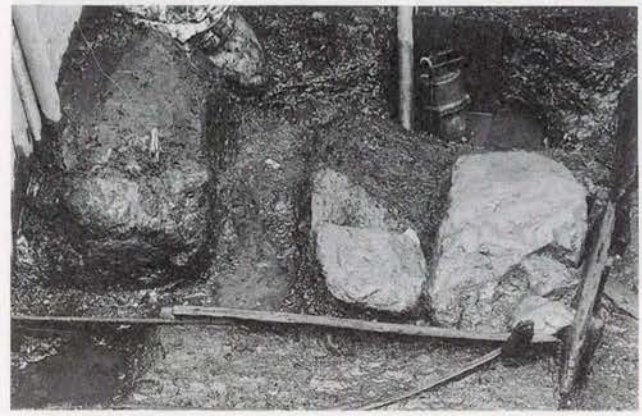


６．４面溝

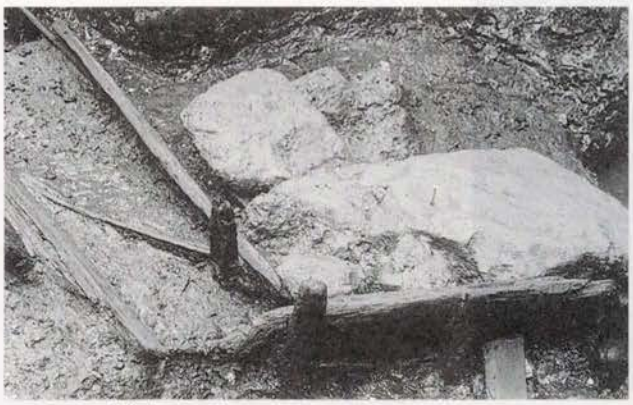
1．5面（北から）



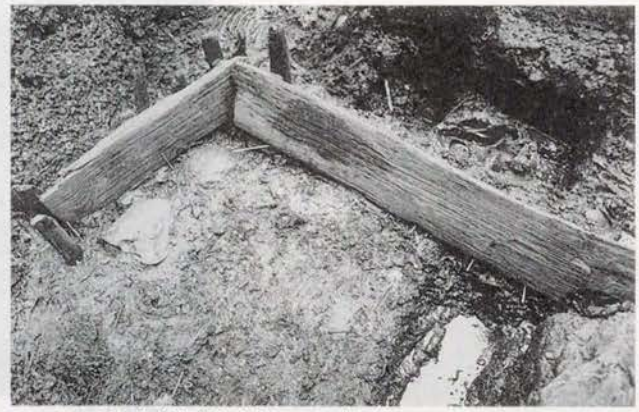
2．切石と板材（西から）



3．同左（東から）

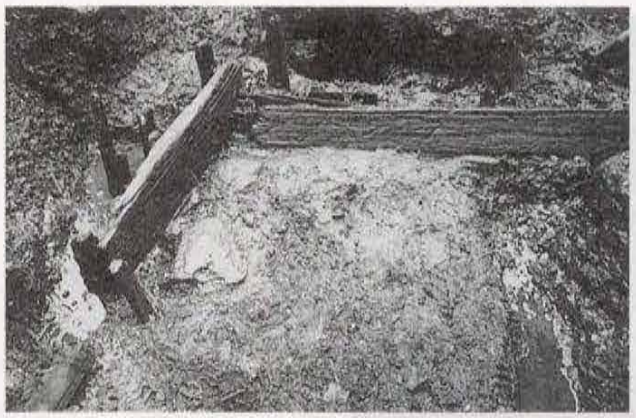


4．同上（北東から）

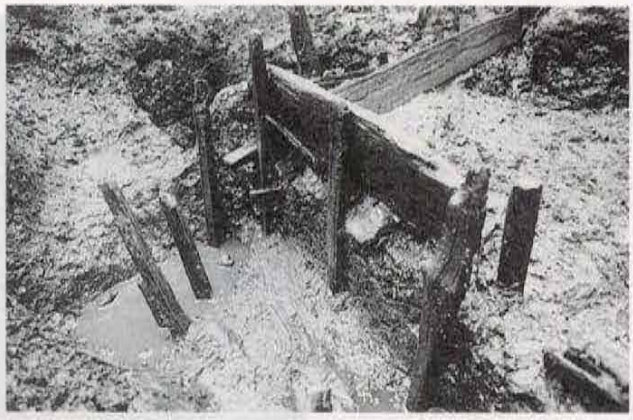


5．切石除去後板材（南西から）

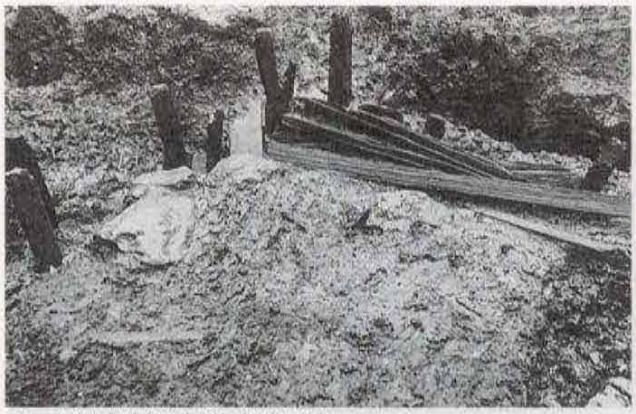
図版 3



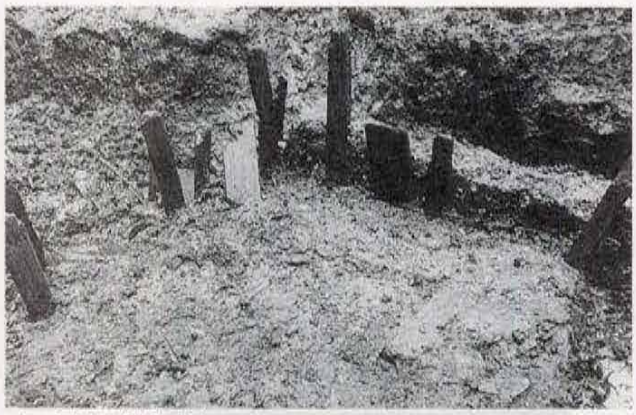
1．5面切石除去後板材（西から）



2．同左（北西から）

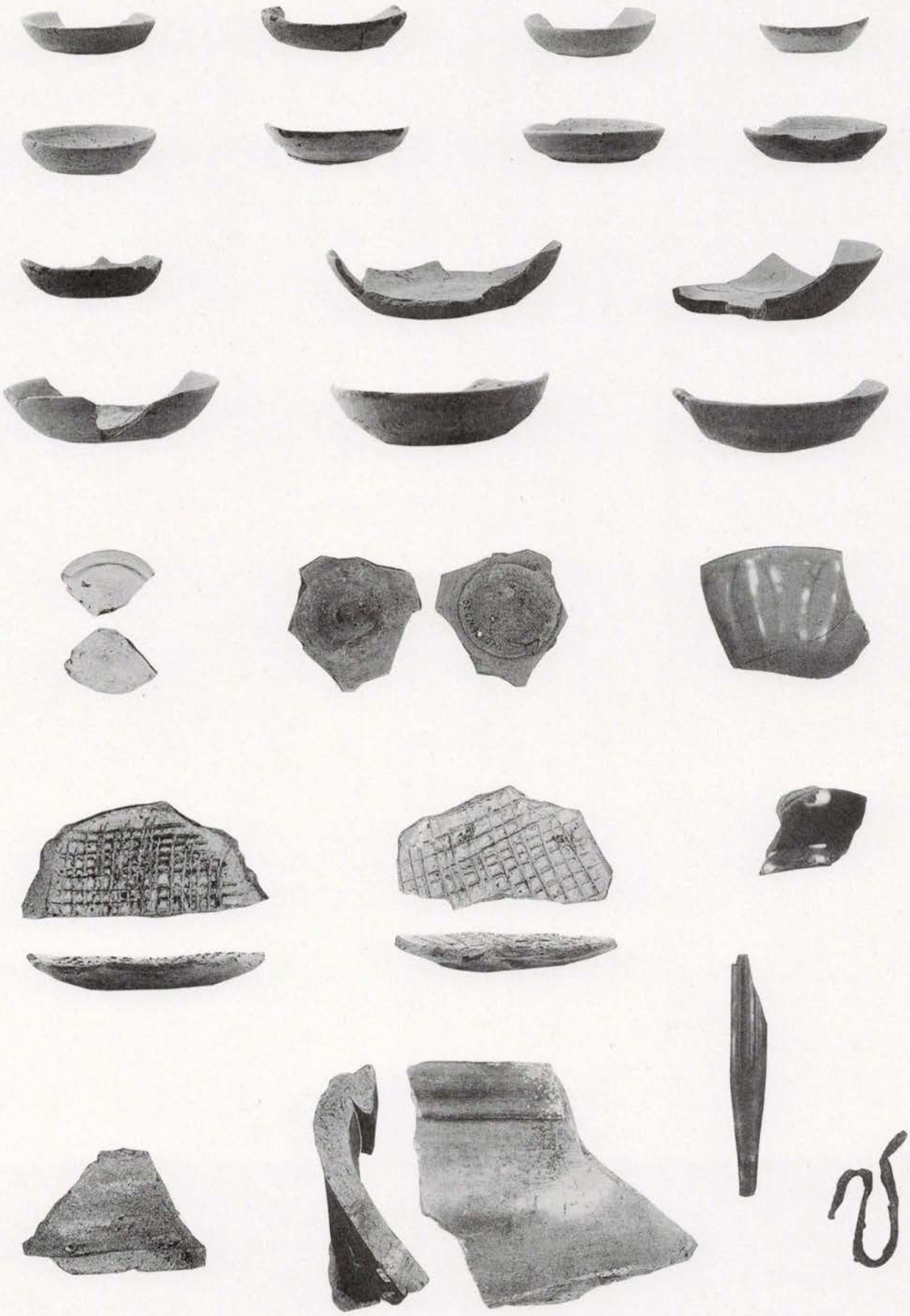


3．同上板材除去後（西から）

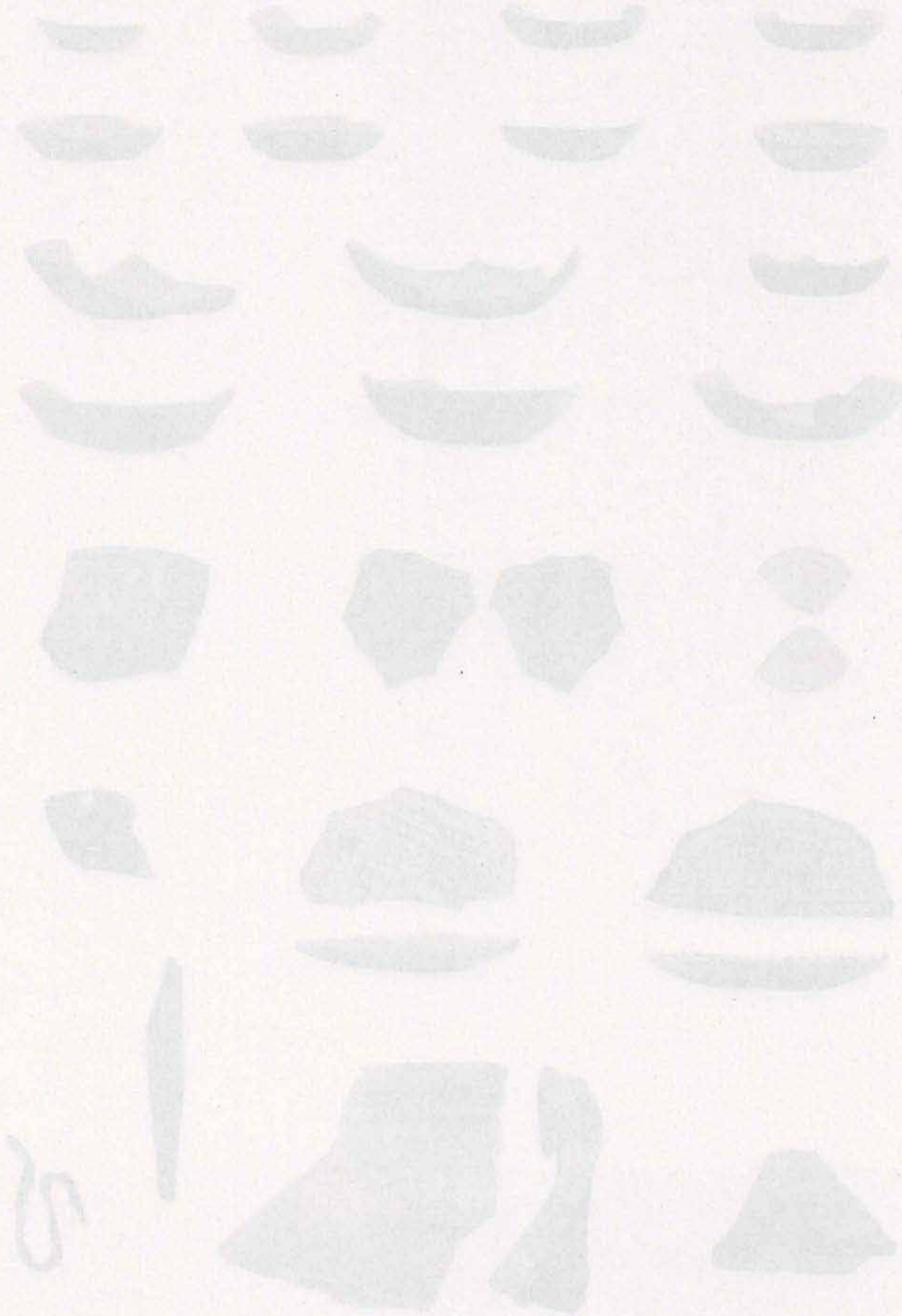


4．同左（西から）

5．堆積土砂



出土遺物



保寿院跡（ほじゅいんあと）　(No.250)

西御門一丁目922番４地点

例　言

1. 本書は、鎌倉市西御門一丁目922番４における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
   調査期間は平成16年１月９日～同年２月25日にかけて実施され、調査対象面積は76㎡である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会が保管している。遺跡の略記号はNHAである。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
   調査の主体：鎌倉市教育委員会
   調 査 担 当：宮田眞
   調　査　員：滝澤晶子
   調査補助員：安達澄代・渡辺美佐子・岩澤智和
   調査協力者：奥山利平・荻野勲・安斉三男・石井清司・川島仁司・中路正明・清水政利
   (以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター)・
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
   遺構図　１／40（遺構図の水糸高は海抜高を示す。）
   遺物実測図　１／３・１／６
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
   釉の限界線 —·—·—　使用痕の範囲 ⚲←→⚲
   調整の変化点 ———　加工痕の範囲 ⚲←-→⚲
6. 本書の執筆は第1章宮田眞・第２～４章滝澤晶子、編集は滝澤晶子が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
   遺構図版　森孝子
   遺物図版　宇賀神雅子・森孝子・高橋尚子
   遺構写真　滝澤晶子
   遺物写真　森孝子
   遺物観察表の記号　　単位はcm・〔　〕は遺存値・(　) は復元値
8. また、発掘調査に際してご理解・御協力を頂いた建築主に深く感謝の意を表する。

目　　次

本文目次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……94
第２章　調査経過・グリッド配置・基本土層……96
第３章　検出遺構と出土遺物……99
第４章　まとめ……129

図版目次

図１　遺跡周辺図……95
図２　本調査地点位置図……97
図３　グリッド配置図……98
図４　基本土層図……98
図５　１面遺構配置図……99
図６　２面遺構配置図……100
図７　３面遺構配置図……101
図８　４面遺構配置図……102
図９　５面遺構配置図……103
図10　５面　溝1・柱穴列1・土坑2・3……104
図11　６面遺構配置図……105
図12　７面遺構配置図……106
図13　８・９・10面遺構配置図……107
図14　表土層・１面・２面（1）出土遺物……110
図15　２面（2）・３面出土遺物……111
図16　４面土坑１・４面（1）出土遺物……112
図17　４面（2）・５面土坑２・３出土遺物……113
図18　５面炭層出土遺物……114
図19　５面出土遺物……115
図20　６面井戸１・６面（1）出土遺物……116
図21　６面（2）・７面建物１・土坑５出土遺物……117
図22　７面出土遺物（1）……118
図23　７面出土遺物（2）……119
図24　８面溝１・８面・９面・10面出土遺物……120

表目次

表１　遺物観察表（1）……121
表２　遺物観察表（2）……122
表３　遺物観察表（3）……123
表４　遺物観察表（4）……124
表５　遺物観察表（5）……125
表６　遺物観察表（6）……126
表７　遺物観察表（7）……127
表８　遺物観察表（8）……128

写真目次

図版１　A.　１面全景……130
　　B.　２面全景……130
　　C.　３面全景……130
図版２　A.　４面全景……131
　　B.　５面全景……131
　　C.　６面全景……131
図版３　A.　７面全景……132
　　B.　建物１……132
　　C.　建物１礎石……132
　　D.　建物１西部……132
図版4　A.　８面全景……133
　　B.　８面北部……133
　　C.　９面全景……133
　　D.　10面全景……133
図版5　A.　調査区北壁セクション……134
　　B.　トレンチ東壁セクション……134
図版6　出土遺物（1）……135
図版7　出土遺物（2）……136
図版8　出土遺物（3）……137
図版9　出土遺物（4）……138
図版10　出土遺物（5）……139
図版11　出土遺物（6）……140

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地は鎌倉市西御門一丁目992番４地点に所在する。本地点は鎌倉旧市街地を形成する平野のちょうど北奥部に当たり、東には横浜国大付属小・中学校の敷地が隣接する。目を転じて鶴岡八幡宮上宮本殿から見ると山（大臣山）を隔てて東方約200mの距離にある。また東南150mの距離には大蔵幕府跡比定地の西面となる。

調査地一帯は現在閑静な住宅地となっているが、「保寿院」という寺院があったとの伝承が残る。保寿院は鎌倉廃寺事典の言を借りると、足利尊氏室、鎌倉御所基氏の生母清江禅尼の菩提寺。清江禅尼は赤橋久時の女で、鎌倉幕府最後の執権北条宗時の妹に当たる。応安元年（1368）９月29日に他界し、遺命によって西御門の別殿を保寿院と号してここに葬った。（『空華日工集』）とある。

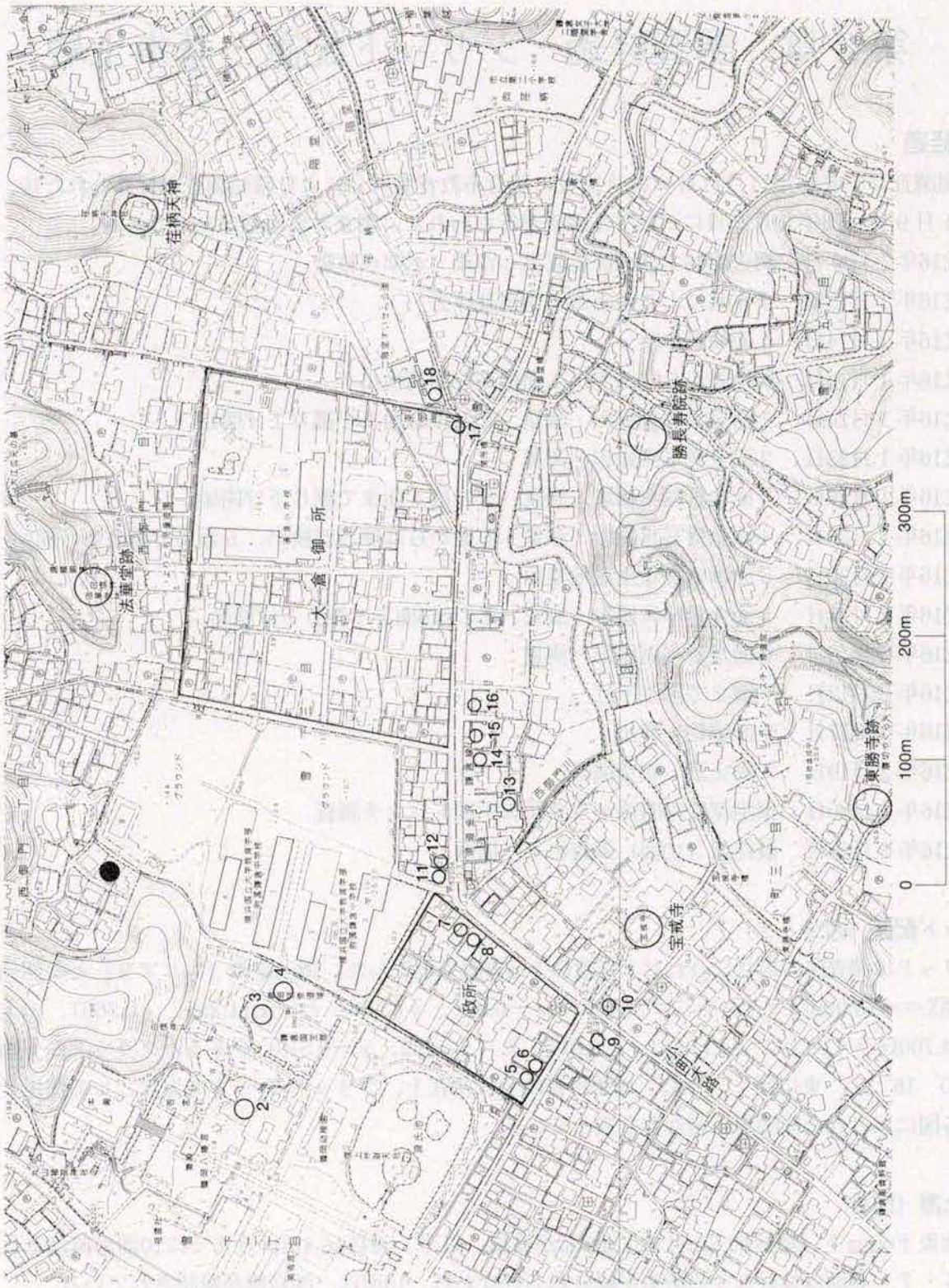
さらに、当寺の名は『空華集』および『空華日工集』に散見する。両書の著者義堂周信は貞治５年（1366）から康暦２年（1380）まで鎌倉にあり、応安（1368～74）の後半、この保寿院に近い報恩寺が開創されると、開山としてそこに住持している。『空華日工集』によると、鎌倉御所足利氏満は応安6年（1373）２月１日保寿院に参詣して、周信の貞観政要の講義を聴いた。また翌７年（1374）11月24日にも氏満は保寿院（原文は保寿寺）に参詣している。その後の史料を拾うと応永9年（1402）４月25日の「黄梅院造営規式」（黄梅院文書）署名中に（保寿　中円）とあり、これは月潭中円のことである。また永享・嘉吉（1429～43）ごろのものと思われる古教妙訓らの連署状断簡（「古教妙訓等連判状断簡」報国寺文書）に「保寿　周祖」とみえている。応永23年（1416）上杉禅秀の乱の際、満隆が最初に謀反の旗を掲げた場所は当寺である（『鎌倉公方九代記』ほか）。また『金沢文庫文書』の、年月未詳であるが、極楽寺の順忍から称名寺に当てた書状（『金沢文古文書』1003号）にも「保寿院の事調へ持参すべく候（以下欠）」とある。享徳3年（1454）の『殿中以下年中行事（成氏年中行事）』には、二月「御寺御焼香」の中頃に、他の足利氏の菩提寺と共に当寺があげられている。

当寺がいつ瑞泉寺の塔頭になったのかは明らかでない。『風土記稿』は「旧は西御門に在りしを後当山（瑞泉寺のこと）域内に移し塔頭にす」といっている。廃絶年は未詳である。

「保寿院跡」とされる本調査地付近では、これまで発掘調査の事例は無く今回の調査が皮切りなる。そういった意味で手探りな状況ではあるが調査成果には期待がよせられる。

《参考文献》

『鎌倉廃寺事典』　貫達人　川副武胤　昭和55年12月15日　有隣堂



1．本調査地点
2．鶴岡八幡宮旧境内　直会殿用地
3．　〃　鎌倉国宝館用地
4．　〃　研修道場用地
5．政所跡　雪ノ下三丁目988番地点
6．　〃　〃　987番1・2地点
7．　〃　〃　965番地点
8．　〃　〃　966番1地点
9．北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目395番地点
10．北条高時邸跡　小町三丁目426番3地点
11．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目606番1地点
12．　〃　〃　607番外地点
13．大倉南御門遺跡C地点
14．　〃　B地点
15．　〃　A地点
16．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番5地点
17．　〃　〃　字大倉耕地569番1地点
18．　〃　二階堂字荏柄38番1地点

図1　遺跡周辺図

第２章　調査経過・グリッド配置・基本土層

調査経過

発掘調査は平成15年11月11日～11月12日に鎌倉市教育委員会により確認調査が行なわれた後、平成16年１月９日～同年２月25日にかけて本調査が行なわれた。調査対象面積は76㎡である。

平成16年１月９日　調査開始。調査区位置出し作業　水準点移動
平成16年１月13日　手作業による表土および撹乱除去
平成16年１月14日　１面検出作業
平成16年１月16日　現地表から60㎝下に１面地業と礎石検出
平成16年１月21日　１面全景写真撮影・測量、その後２面まで掘り下げ開始
平成16年１月23日　２面全景写真撮影・測量
平成16年１月26日　３面全景写真撮影・測量、その後４面まで掘り下げ開始
平成16年１月29日　４面全景写真撮影・測量　４面からは礎石が検出。５面まで掘り下げ開始
平成16年１月30日　５面は良好な土丹地業面
平成16年２月５日　５面全景写真撮影・測量、その後6面まで掘り下げ開始
平成16年２月10日　６面全景写真撮影・測量
平成16年２月12日　７面まで掘り下げ
平成16年２月17日　７面建物１検出
平成16年２月19日　７面全景・航空撮影
平成16年２月20日　掘削深度の関係から８面以下はトレンチ調査
平成16年２月25日　最終面（10面）調査終了、撤収

グリッド配置（図２・３）

グリッドは調査区の形状に合わせて任意の１m方眼で配置した。国土座標（エリア９）との関係は国土座標X＝－75.090㎞ライン上にグリッド（ｘ－0.807，ｙ8.178）と（ｘ11.285，ｙ0.356）、国土座標Y＝24.700㎞ライン上に（ｘ11.281，ｙ8.817）と（ｘ5.292，ｙ－0.510）がある。グリッドのｙ軸は北から40°16′40″東に傾く。なお、本報告書内では便宜上、グリッドのy＋方向を北として使用している。各図に示された矢印が正確な北を表している。

基本土層（図4）

現地表下60㎝下、海抜20.2m付近に第1面が検出。以下、海抜18.1m付近までに10面が確認されている。５・７・８面は良好な土丹版築が繰り返し行なわれ、10面は一部岩盤が確認されている。

図２　本調査地点位置図

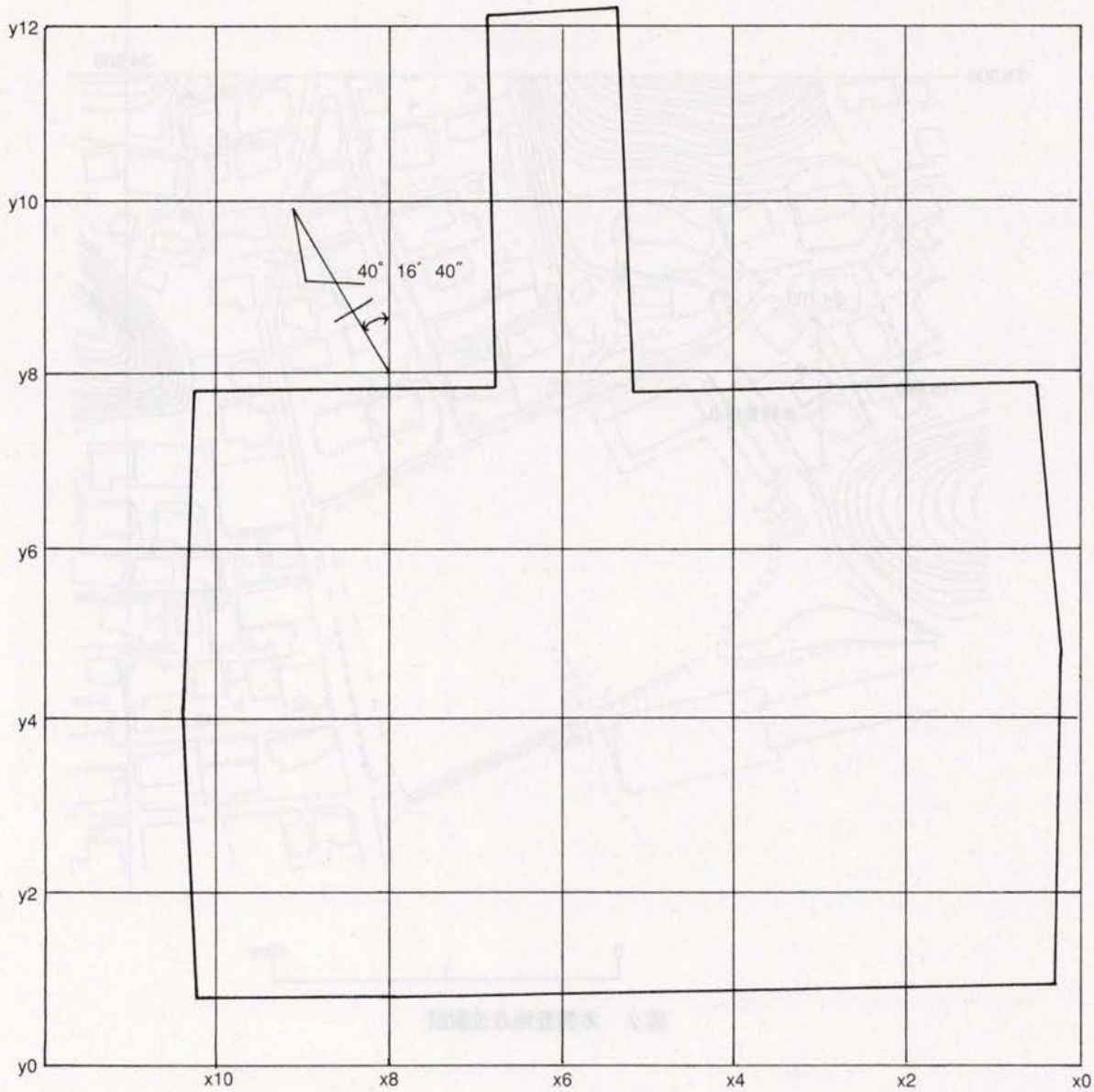


図3　グリッド配置図

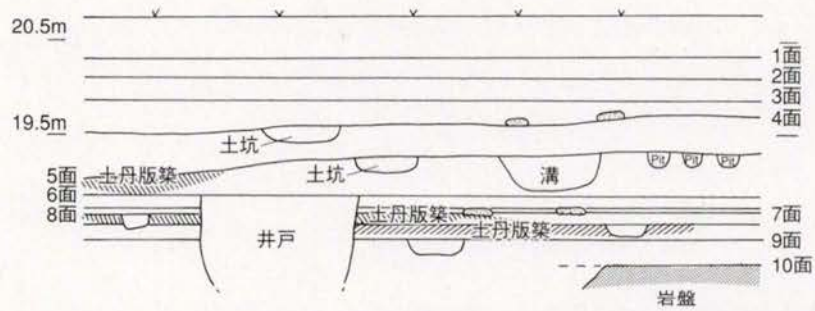


図4　基本土層図

第３章　検出遺構と出土遺物

1）検出遺構

調査区は、敷地および建物の形状の都合上、北側に一部1.5m×4.3mの張り出し部分を持つ。この張り出し部分は調査の結果、現代に大きく撹乱されていることが判明し、発掘調査は南側の9.8m×7.0mのメインの部分に限られた。

１面（図５）

１面は現地表下50㎝、海抜20.2m付近に検出されたほぼ平坦な面で、強弱があるものの、１～５㎝大の土丹で地業されている。また、面上には所々、５㎜程度の玉砂利がみられる。１面からは安山岩の礎石が３個検出された。礎石１・２・３はそれぞれグリッド（x10、y2）、（x8、y2）、（x2、y2）付近

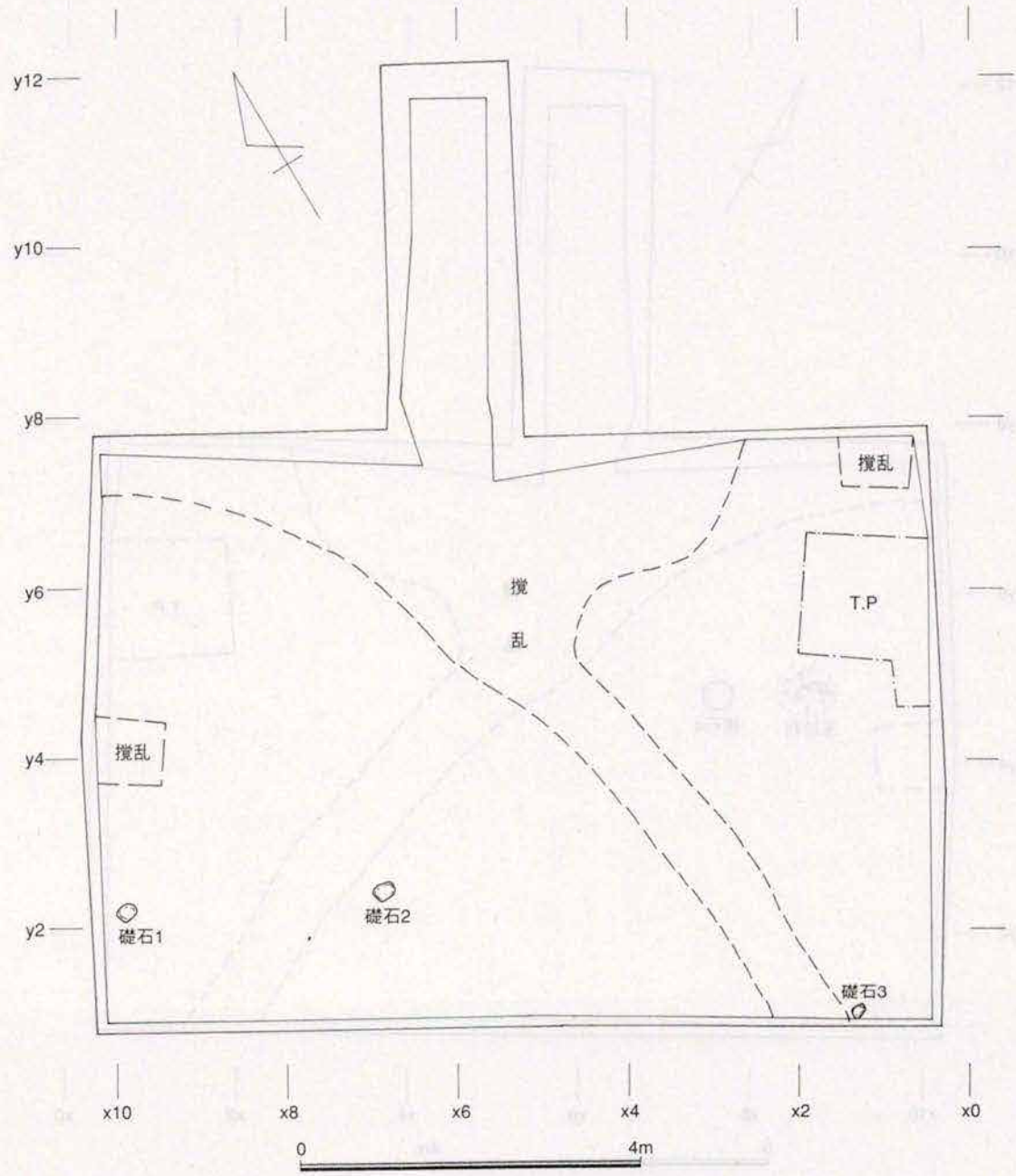


図５　１面遺構配置図

に検出した。礎石１と２は大きさが25㎝前後を測り、芯々間の距離は３ｍを測るが、同一の建物を構成するものかは不明である。礎石３は平面18㎝前後の小さい石である。

２面（図６）

２面は１面下20㎝、海抜20.0m付近に検出された。地業は弱いが、礎石４を中心として広がる面である。また、礎石４西、グリッド（x10、ｙ６）付近から玉砂利がまとまって出土している。礎石４は安山岩で、上面は平ら、直径35㎝前後の不整円形を呈し、厚さは20㎝を測る。

３面（図７）

３面は２面下20㎝、海抜19.8m付近に検出された。調査区西部はしっかりと土丹版築が施され、特に北部はかわらけ砕片が面上に敷かれている。遺構は石列１列・礎石（安山岩）２個（礎石６・７）・鎌倉石の切り石1個が検出された。

石列１はグリッド（ｘ６、ｙ２）付近に検出された南北方向の石列。土丹（泥岩）・鎌倉石・安山岩

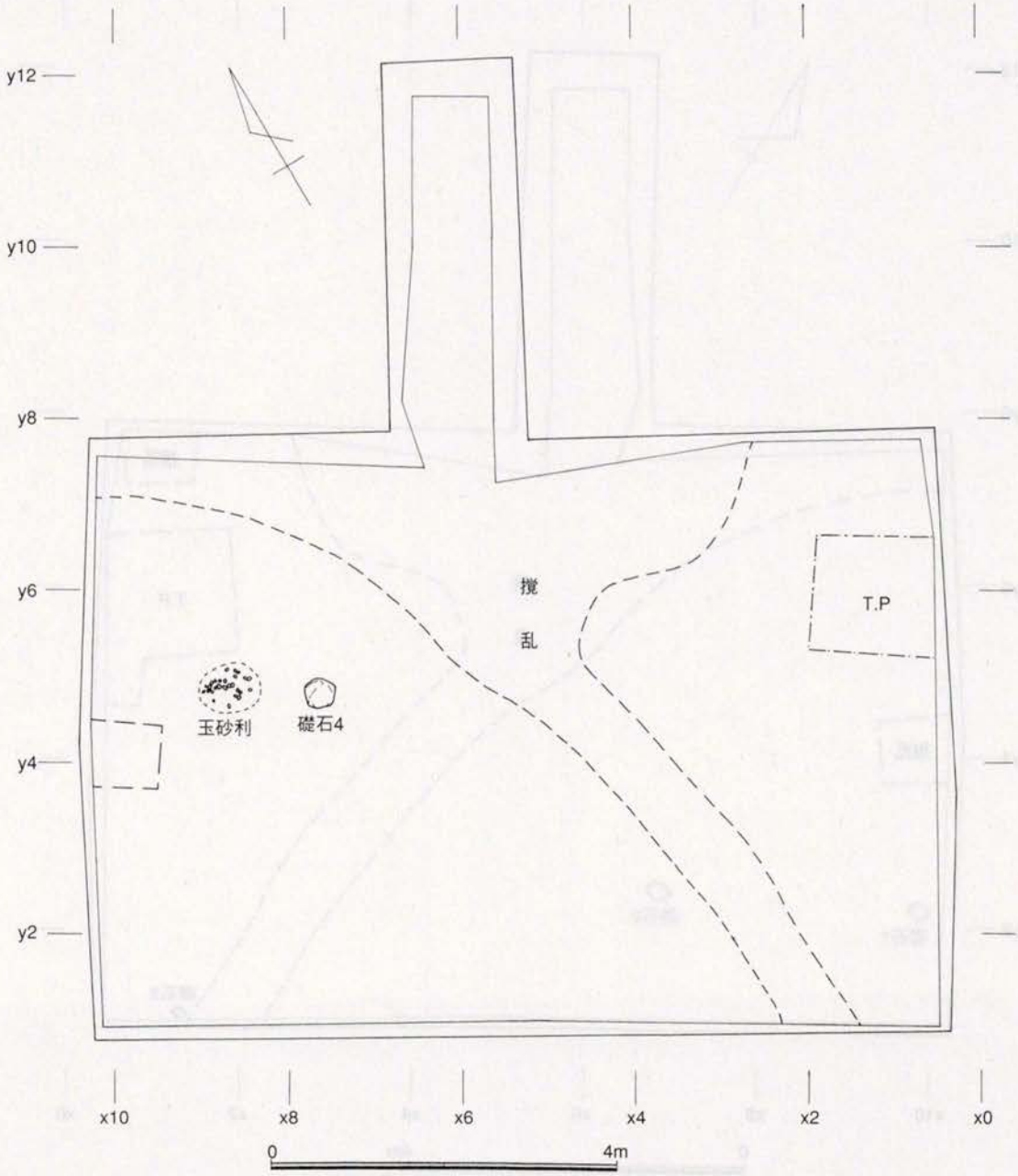


図６　２面遺構配置図

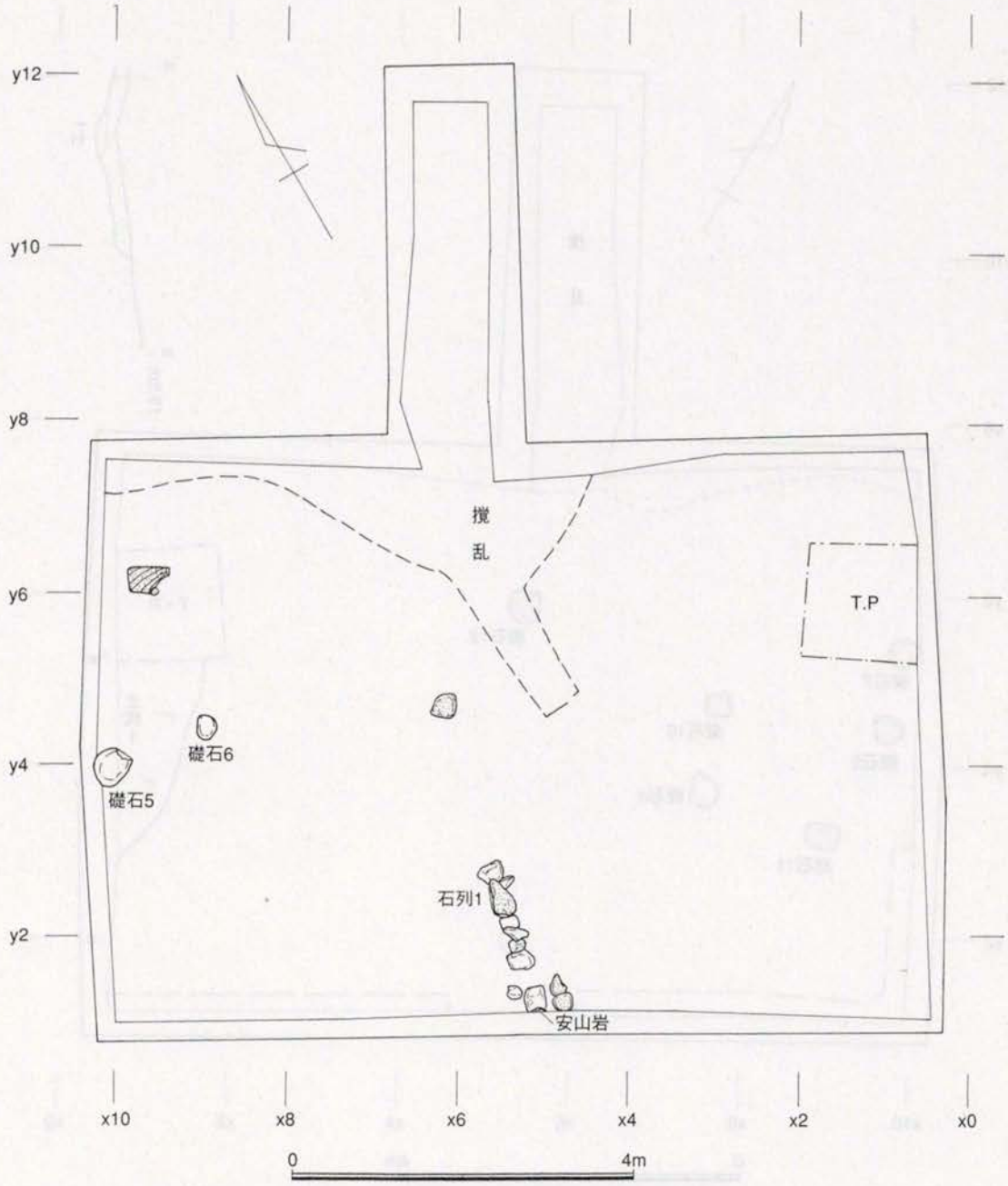


図７　３面遺構配置図

を並べているが、並べ方、石の整形共に粗雑である。南部は調査区外に続くようだ。グリッド（x６、y４）付近にある鎌倉石も含まれるか可能性がある。南北軸線方向はN－18°－Eである。

４面（図８）

４面は３面下30㎝、海抜19.5m付近に検出された。弱いが、土丹地業されている。鎌倉石４個（礎石９～12）・安山岩２個（礎石７・８）が据わった状態で検出されたが、どの組み合わせでも調査区内では並びはつかめなかった。その他にPit１口、土坑１基が検出された。土坑1はグリッド（x２、y６）付近に一部検出された。北部は試掘坑により消失。その大部分は調査区外に展開し、詳細は不明である。

５面（図９・10）

５面は４面下20㎝、海抜19.3m付近に検出された。上面には炭化物が薄い層になって広がる。厚く、良好な土丹地業がなされ、東部はさらに良い。また、調査区北東隅は浅く、落込みがある。遺構は溝1

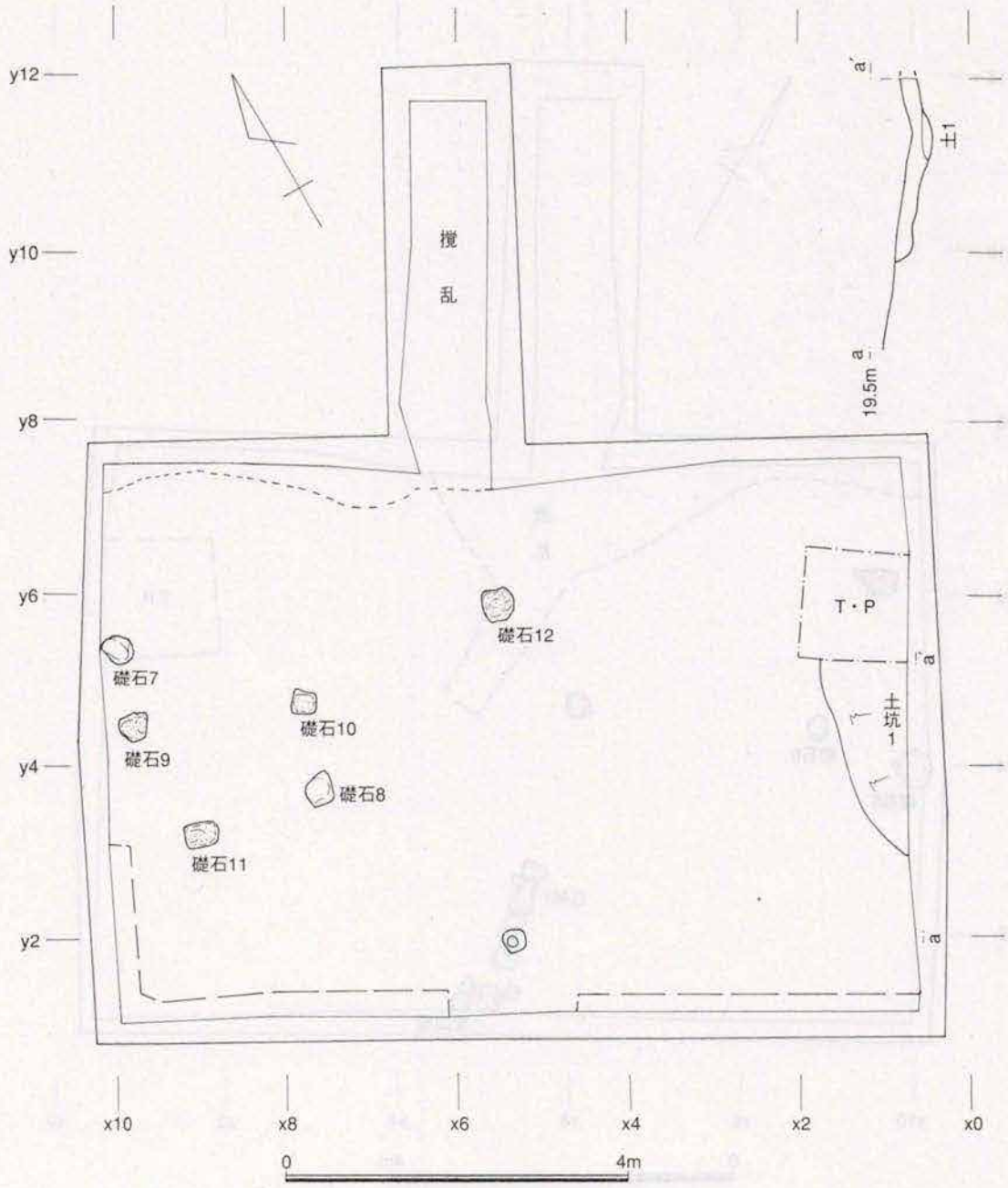


図８　４面遺構配置図

条・Pit 15口（内３口は柱穴列１を構成）・土坑２基・礎石1個（礎石13）が検出された。礎石13は安山岩であるが、１個のみの検出で全体像は不明である。

溝１（図10）

溝１はグリッド（ｘ８、ｙ６）付近に検出された南北方向の溝である。溝と言っても、極浅く、区画のようなものであろう。西岸は土丹が並べられている。南部は調査区外に続くが、北部は消失している。幅は遺存部で50㎝前後、深さは10cm前後を測る。南北軸線方向はN－18°－Eである。

柱穴列１（図10）

Pitは合計15口検出された。その内、グリッド（x10、ｙ６）付近に南北方向に３口が並んで検出された。Pit間の距離は芯々でいずれも１ｍを測る。平面形は不整円形を呈し、直径20㎝から40㎝、深さは30㎝前後を測る。その規模から言って、塀であろう。さらに調査区外北側に展開すると思われる。南北軸線方向はN－21°－Eである。

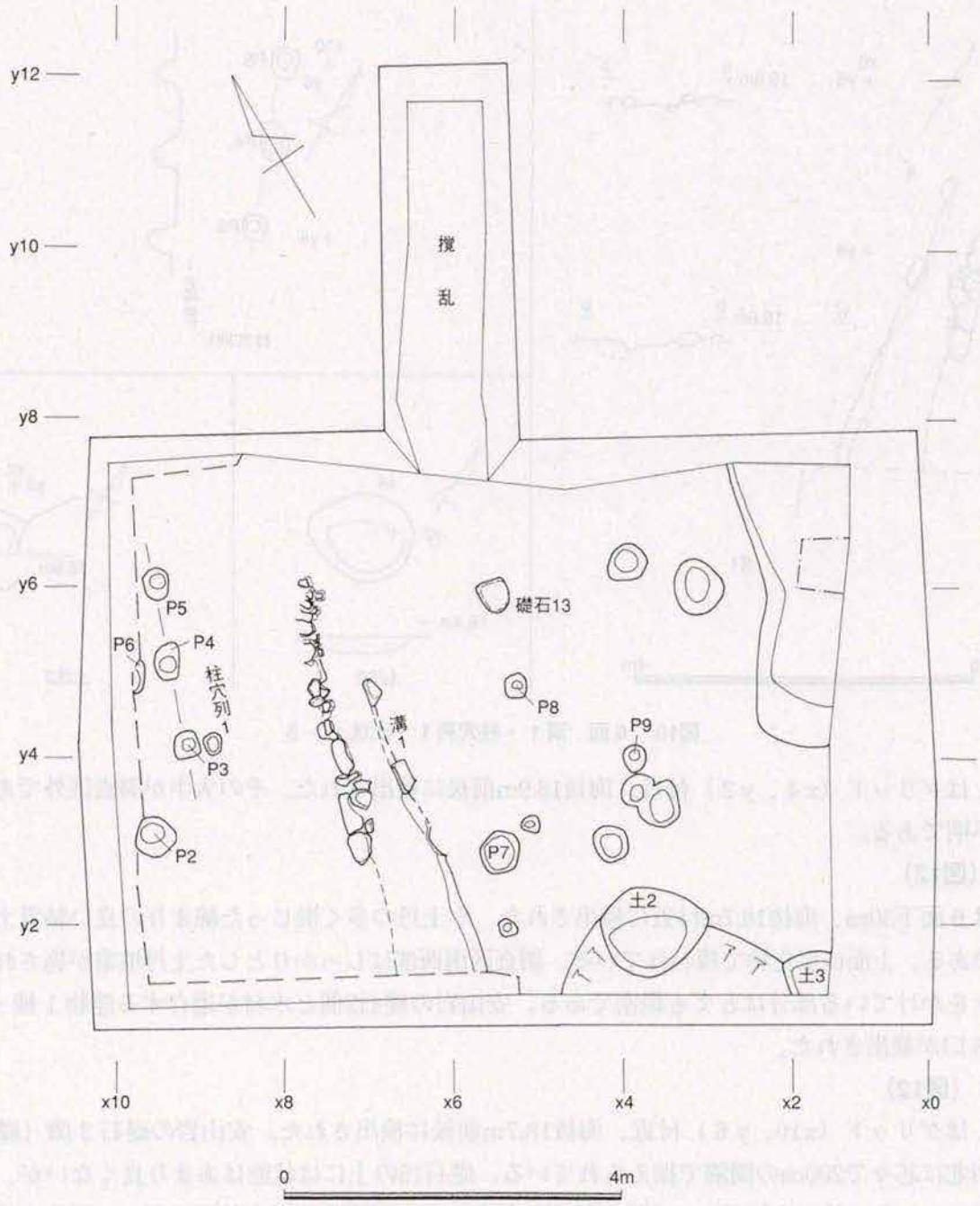


図９　５面遺構配置図

土坑２・３（図10）

土坑２はグリッド（ｘ４、ｙ２）付近、海抜19.3m前後に検出された。土坑周辺南側は緩やかに傾斜している。平面形は不整円形を呈し、東西125㎝、南北106㎝、深さは検出面から20㎝を測る。

土坑３はグリッド（ｘ２、ｙ２）付近、海抜18.8m前後に検出された。その大半は調査区外であるため詳細は不明。深さは検出面から15㎝を測る。

６面（図11）

６面は５面下30㎝、海抜19.0m付近に検出された。土丹地業された面で、上面には部分的に炭化物層が広がる。特に、グリッド（ｘ８、ｙ８）付近は南北方向に320㎝にわたって集中していた。また、グリッド（ｘ２、ｙ８）付近に、検出された鎌倉石の切り石１個は火を受け橙色に変色している。その他には鎌倉石の切り石１個・Pit１口・井戸１基が検出された。

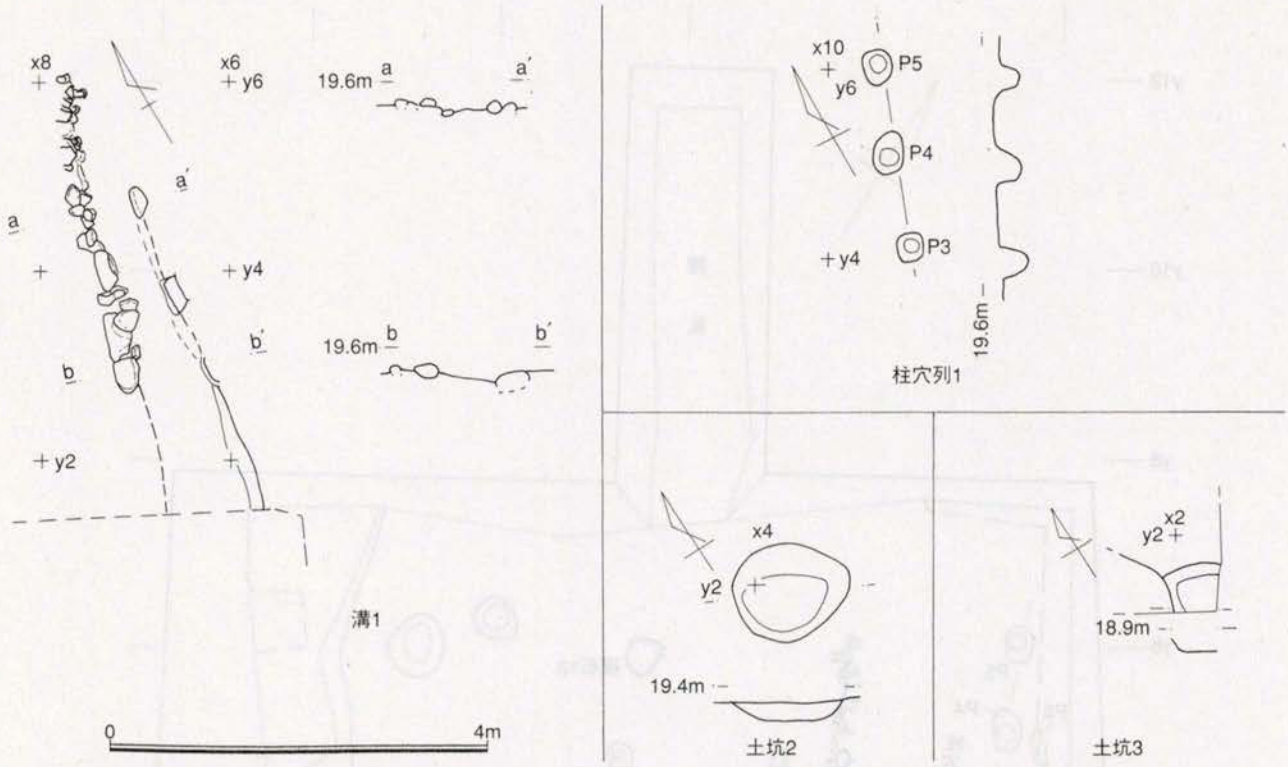


図10　5面　溝1・柱穴列1・土坑2・3

井戸1はグリッド（x4、y2）付近、海抜18.9m前後に検出された。その大半が調査区外であるため詳細は不明である。

7面（図12）

7面は6面下30㎝、海抜18.7m付近に検出された。小土丹の多く混じった締まりの良い粘質土と土丹地業面である。上面は炭化物で覆われている。調査区南西部はしっかりとした土丹地業が施され、格子のトーンをかけている部分はとても緻密である。安山岩の礎石2個と木材が遺存する建物1棟・土坑2基・Pit 8口が検出された。

建物1（図12）

建物1はグリッド（x10、y6）付近、海抜18.7m前後に検出された。安山岩の礎石2個（礎石14・15）が南北に芯々で200㎝の間隔で据えられている。礎石15の上には状態はあまり良くないが、木材が遺存していた。その他にも付近には木片が検出されているがいずれも遺存状態は悪い。建物自体はさらに調査区外に広がり、その全体像は不明である。南北軸線方向はN－27°－Eである。また、建物1の南に検出された良好な土丹版築はこの建物に付随する土間である可能性がある。版築は周囲より最大で9㎝程度高く、しっかりと平滑に仕上げられている。この版築内には礎石14・15と同じライン上に展開するPitが2口検出された。Pitは東西に並び、距離は芯々で200㎝を測る。Pit12は礎石15と芯々で120㎝に位置している。建物1の構成要素である可能性が高い。

土坑4（図12）

土坑4はグリッド（x6、y4）付近、海抜18.7m前後に検出された。平面形は不整円形を呈し、直径は100㎝前後、深さは検出面から30㎝を測る。

土坑5（図12）

土坑5はグリッド（x6、y4）付近、海抜18.7m前後に検出された。平面形は不整形を呈し、直径は125㎝前後、深さは検出面から20㎝を測る。

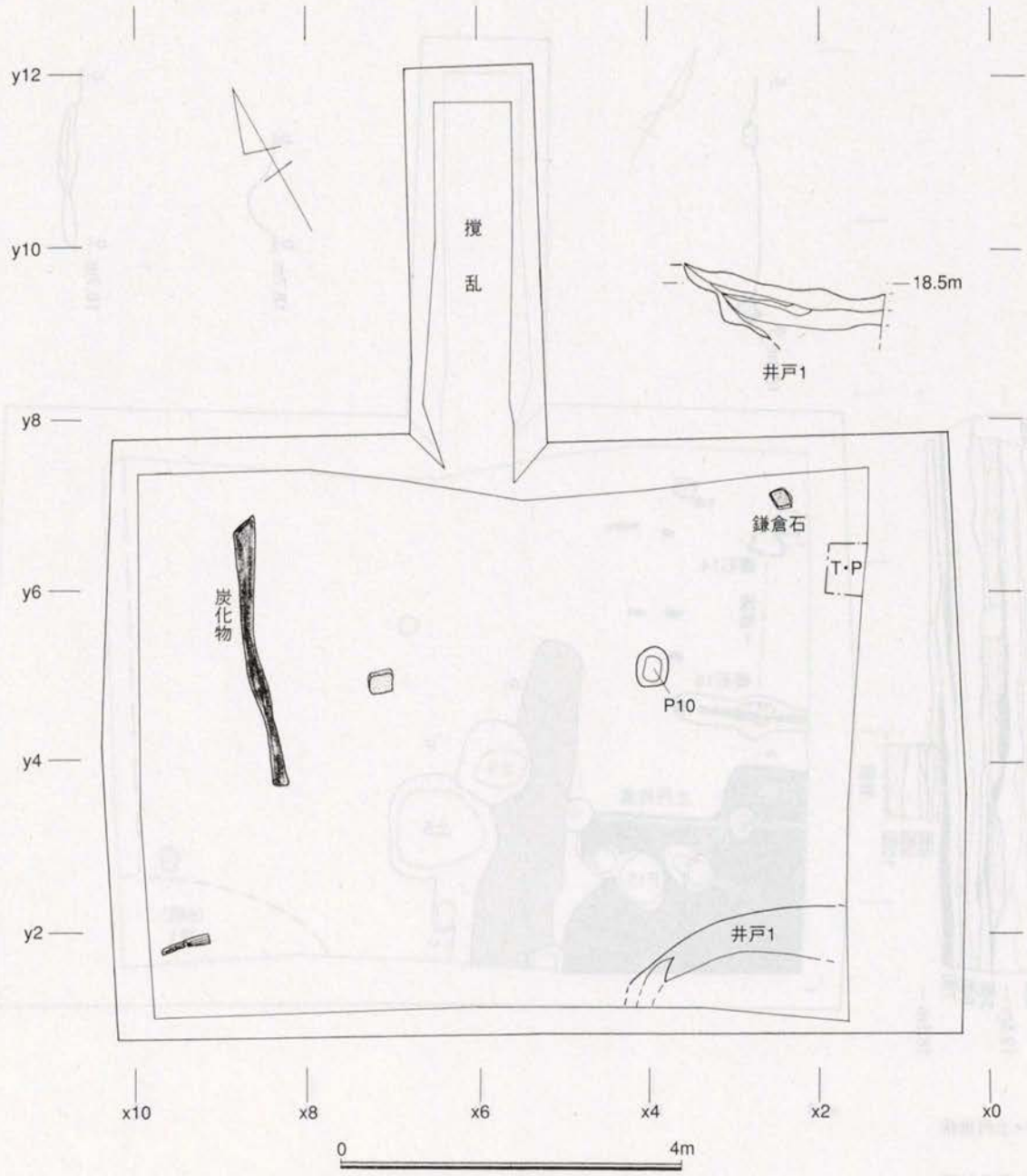


図11　6面遺構配置図

8面（図13）

8面以下は調査の安全上、調査区中央、東西方向に幅1mのトレンチ調査を実施した。8面は7面下20㎝、海抜18.5m前後に検出された。締まりの良い土丹地業面である。溝1条・Pit2口が検出された。

溝2（図13）

溝2はグリッド（x10、y4）付近、海抜18.5m前後に検出された東西方向の溝である。検出し得た全長は250㎝、西部は調査区外に延びる。上端幅は40㎝、下端幅は20㎝を測る。東西軸線方向はW－27°－Nである。

柱穴列2（図13）

柱穴列2はグリッド（x8、y4）付近、海抜18.5m前後に検出された。調査区の制限から2口しか確認されなかったため、建物の全体像は不明である。柱穴間の距離は芯々で、200㎝を測り、底面には礎

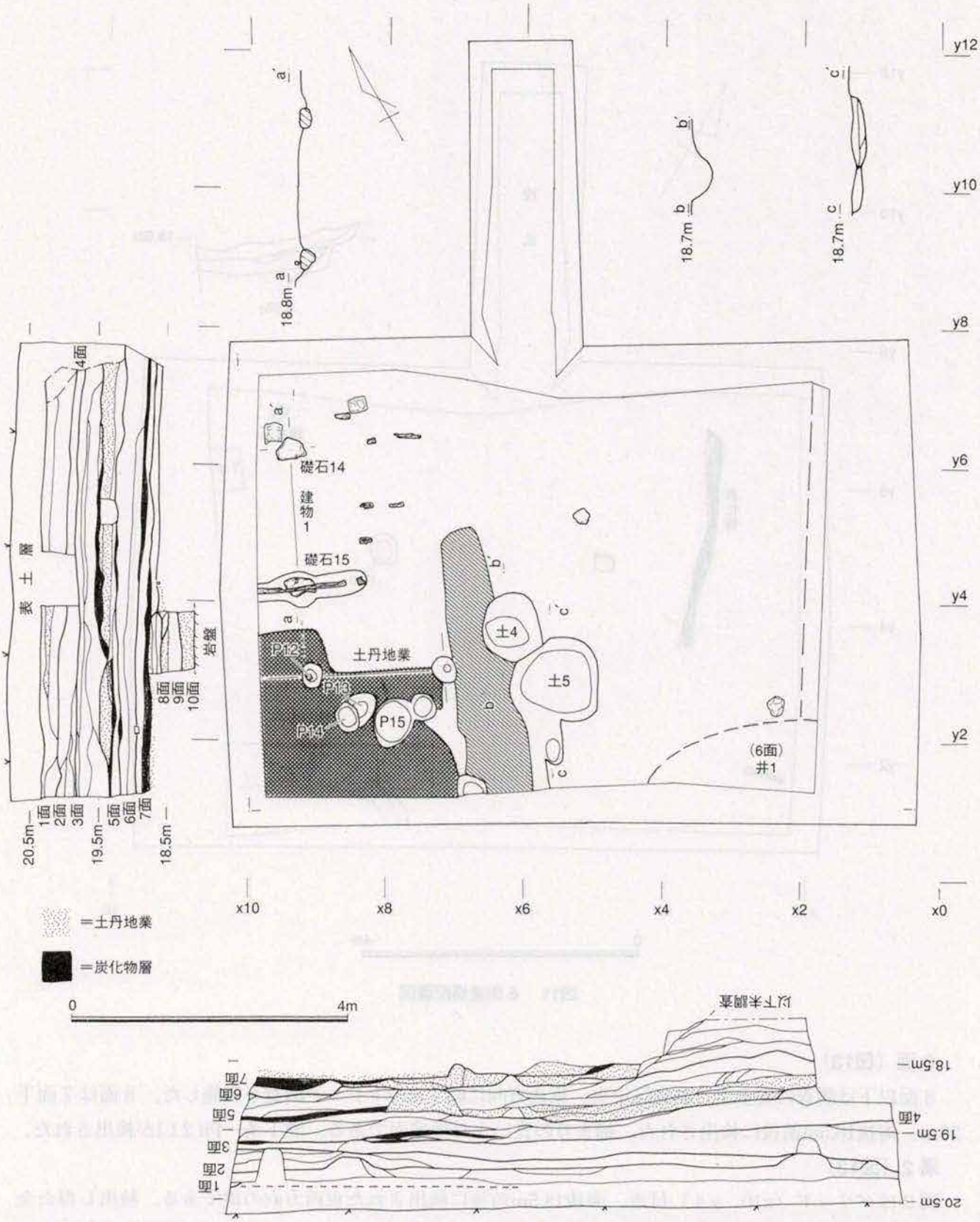


図12　7面遺構配置図

板が遺存している。東西軸線方向はW－22°－Nである。

9面（図13）

9面は8面下30㎝、海抜18.2m前後に検出された。厚さ20㎝前後の厚い土丹地業面である。土坑1

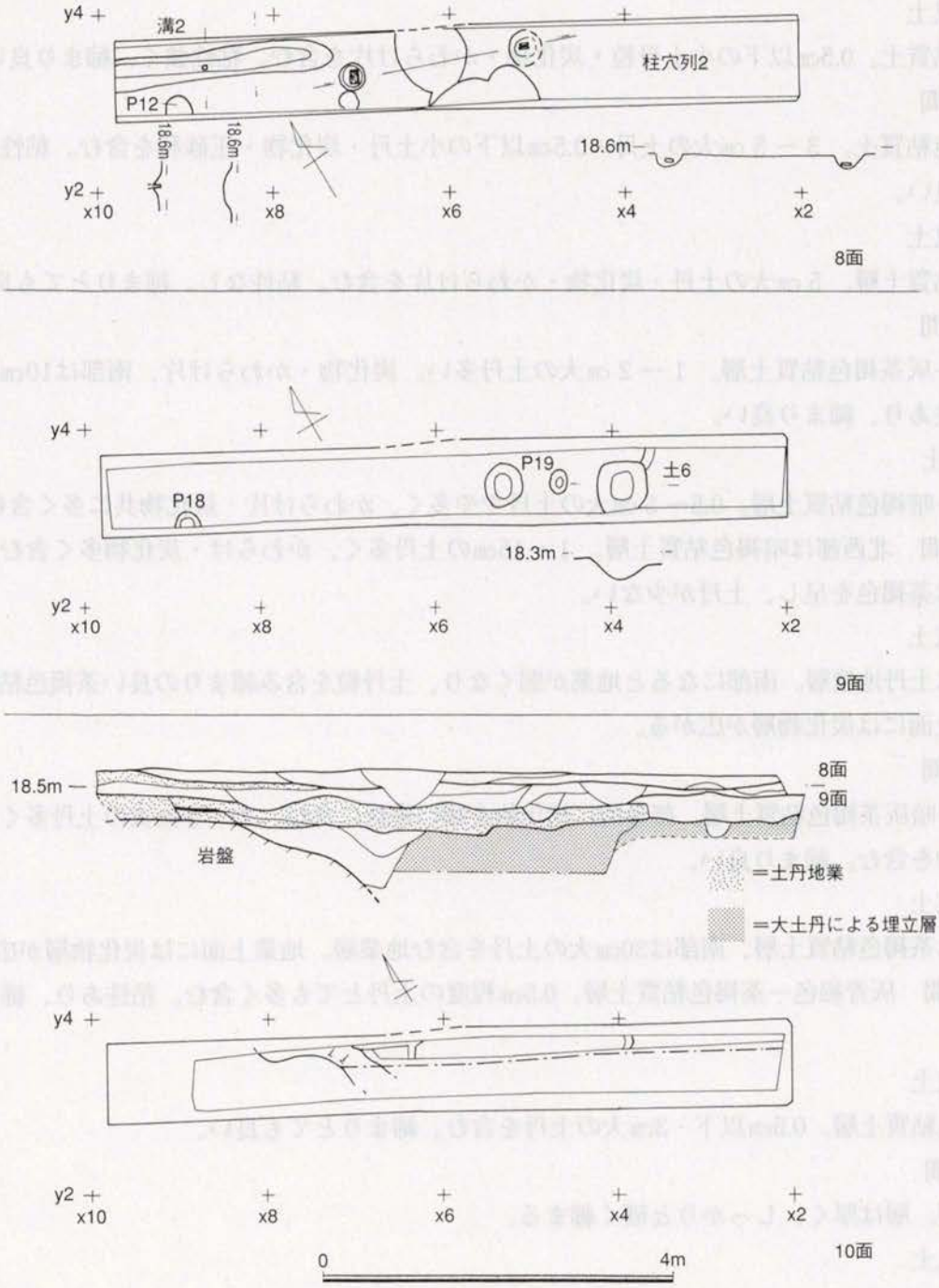


図13　8・9・10面遺構配置図

基・Pit 3 口が検出された。

土坑 6（図13）

土坑 6 はグリッド（x 4 、y 4 ）付近、海抜18.2m前後に検出された。平面形は不整円形を呈し、直径は55㎝、深さは検出面から30㎝を測る。

10面（図13）

10面は 9 面下20㎝、海抜18.0m付近に検出された岩盤および大土丹埋立層である。トレンチ調査区西部に検出された岩盤平削面に合わせた大土丹による埋立層が広がっている。調査区をさらに狭めたため、遺構は確認できなかったが、谷戸の大規模な埋立地業が確認された。

遺跡土層注記（図12・13）

・1面構成土

茶褐色粘質土。0.5cm以下の小土丹粒・炭化物・かわらけ片を含む。粘性強く、締まり良い。

・1-2面間

明茶褐色粘質土。3～5cm大の土丹・0.5cm以下の小土丹・炭化物・玉砂利を含む。粘性なし、締まりとても良い。

・2面構成土

茶褐色粘質土層。5cm大の土丹・炭化物・かわらけ片を含む。粘性なし。締まりとても良い。

・2-3面間

茶褐色～灰茶褐色粘質土層。1～2cm大の土丹多い。炭化物・かわらけ片、南部は10cm大の土丹を含む。粘性あり、締まり良い。

・3面構成土

茶褐色～暗褐色粘質土層。0.5～5cm大の土丹やや多く、かわらけ片・炭化物共に多く含む。

・3-4面間　北西部は暗褐色粘質土層。1～15cmの土丹多く、かわらけ・炭化物多く含む。締まり良い。南部は茶褐色を呈し、土丹が少ない。

・4面構成土

北西部は土丹地業層。南部になると地業が弱くなり、土丹粒を含み締まりの良い茶褐色粘質土層となる。地業上面には炭化物層が広がる。

・4-5面間

茶褐色～暗灰茶褐色粘質土層。部分的に炭化物を細い帯状に含む。1～5cm大の土丹多く、かわらけ片・炭化物を含む。締まり良い。

・5面構成土

北西部は茶褐色粘質土層、南部は30cm大の土丹を含む地業層。地業上面には炭化物層が広がる。

・5-6面間　灰青褐色～茶褐色粘質土層。0.5cm程度の土丹とても多く含む。粘性あり、締まりとても良い。

・6面構成土

灰青褐色粘質土層。0.5cm以下・3cm大の土丹を含む。締まりとても良い。

・6-7面間

炭化物層。層は厚く、しっかりと硬く締まる。

・7面構成土

良好な土丹地業。

・7-8面間

上層は黒色粘質土層。1～5cm大の土丹多く含み、粘性あり。下層は暗灰青色粘質土層。3cm大の土丹・砂質土小ブロック・炭化物・木製品・かわらけ片を含む。

・8面構成土

土丹地業。

・8-9面間

黒色粘質土層。1cm以下の小土丹粒を少量、かわらけ片・炭化物・木製品を含む。粘性あり、締まり良い。

・9面構成土

土丹地業。層は厚く、しっかりとしている。

・10面　岩盤。

南東部に向かって、岩盤は落ち込んで行くが、北西部に検出した岩盤平坦部のレベルに合わせて、大土丹による埋立地業がなされている。

2）出土遺物

遺物は13世紀前葉から15世紀代に亘るものが出土している。また、その種類も多岐に亘っている。

1面出土遺物は図14-11～18である。1面に属する遺物は13～16のように15世紀代のかわらけが出土している。図14-11・17は混入品である。

2面出土遺物は図14-19～57・図15-1～5である。15世紀前半から15世紀代のかわらけが出土している。図15-1の角火鉢は鍔が廻り、鍔の上面には花文、口縁外面には連珠文がスタンプされている。器表は黒色処理され、四隅に脚が付く。図15-3はやや粗い胎土で、口縁部が黒縁になる。

3面出土遺物は図15-6～19である。14世紀代のかわらけが出土している。図15-18は巴連珠文の軒丸瓦。

4面土坑1出土遺物は図16-1～17である。16は糸切りかわらけの小皿の体部に1ヵ所穿孔がある。17は鉄製品。おそらく火箸。4面出土遺物は図16-18～64・図17-1～20である。14世紀前半のかわらけが出土している。所謂薄手丸深タイプの大中小が確認された。図16-35は底部に1ヵ所穿孔がある。図16-55は青磁折縁鉢。外面には蓮弁文が施されている。図16-62は瀬戸の輪花型入子で、脚付き。図17-4は底部をこね鉢に転用している。図17-10は常滑すり鉢の底部。内面には6条の摺り目が施され、使用によりかなり磨滅している。図17-13は手づくねの白かわらけ。大型で、器表には内外面に薄く煤が付着している。図17-20は滑石スタンプ。文様は草花文。5面土坑2出土遺物は図17－21の鳴滝産の仕上げ砥。5面土坑3出土遺物は図17-22・23である。

5面は北部が厚く炭で覆われていた。その炭層中からの出土遺物が図18である。30は輪花型の手焙りで、器表は黒色処理され、体部には連珠巴文がスタンプされている。5面出土遺物は図19である。14世紀前半のかわらけが出土している。35の丸瓦は凸面に縄目、凹面に布目が残る。43は大型の硯。

6面井戸1出土遺物は図20-1～9である。6面出土遺物は図20-10～66・図21-1～13である。13世紀末～14世紀初頭のかわらけが出土している。図20-57は白磁の印花文碗。口兀で、緻密な花文が施されている。図20-60は合子の蓋で、釉薬の発色が悪く、黒ずんでいる。図20-61は瀬戸の蓋である。上面中央が若干窪み、底面は糸切りされている。図21-2は常滑のこね鉢。高台が付く。図21-4は渥美の壺。口縁端は外側に折り返されている。図21-12は鉄製品。厚さ1.5cmの四角い鉄板の内側が刳り貫かれている。

7面建物1礎石据え方出土遺物は図21-14の糸切りかわらけの大皿である。7面土坑5出土遺物は図21-15・16。15は糸切りかわらけの小皿、16は常滑の甕の口縁部片である。7面出土遺物は図22・23である。図22-1は手づくねかわらけ、図22-2～65は糸切りかわらけである。図22-66・67は糸切りの内折れかわらけである。67の口縁端はさほど内側に折れない。図22-76は青磁蓮弁文碗である。内面には劃花文が施されている。図22-79は双魚文鉢の魚の部分。図23-10は常滑の甕の底部を転用してこね鉢としている。図23-17は手づくねの瓦器碗。器表は黒色処理され、内面は横位に暗文が入る。図23-18は手づくねかわらけ。とりべとして使用し、口縁端には溶融物が付着している。図23-30・31はセットであろう。外底部中央には「一」と書かれている。図23-34は内側面と内底面に梅花文が描かれている。

8面以降はトレンチ調査のため遺物の出土量が少ない。8面溝1出土遺物は図24-1、鉄製釘である。8面出土遺物は図24-2～6である。2～5は糸切りかわらけ、6は青磁蓮弁文碗。7は白磁口兀碗。

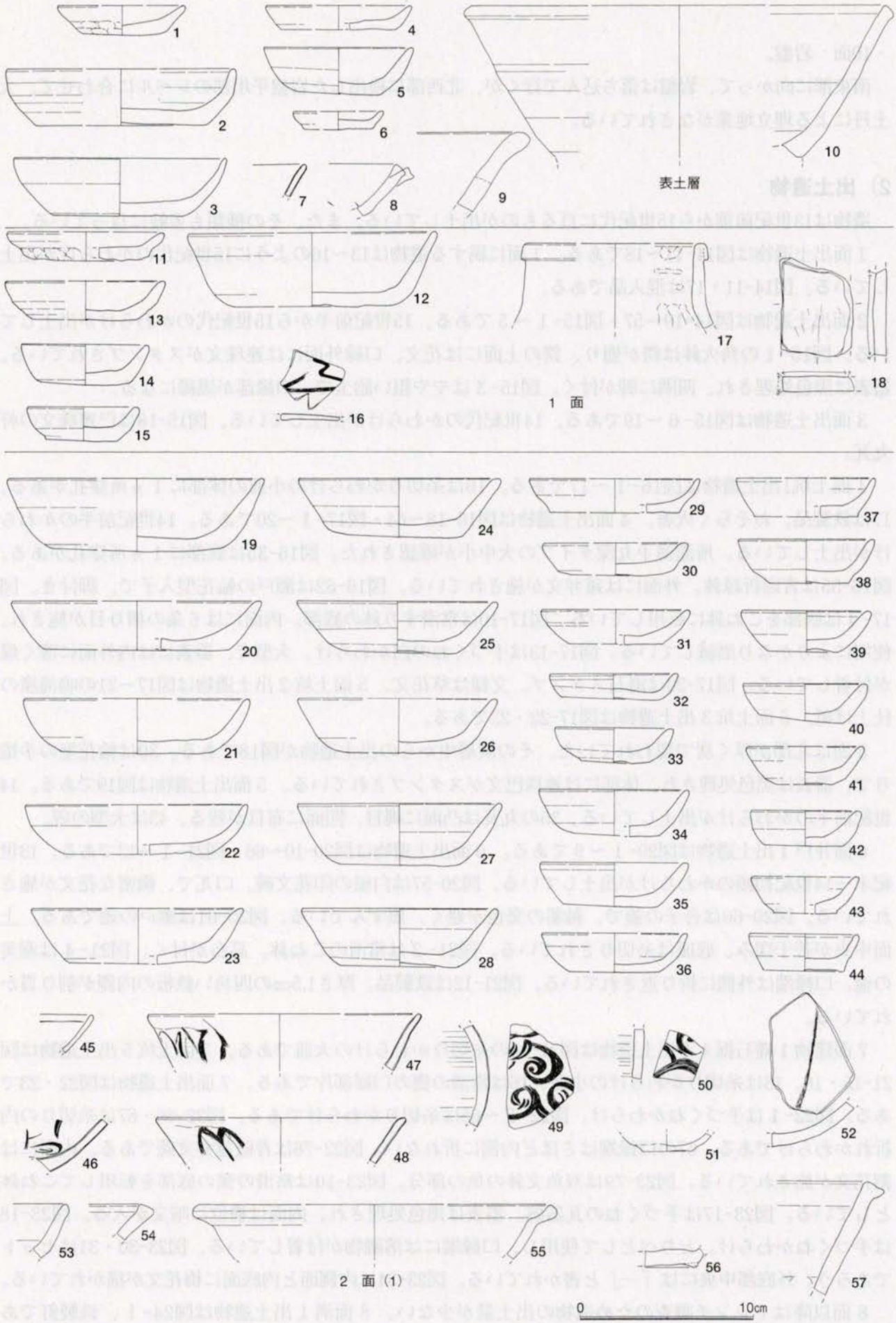


図14　表土層・1面・2面（1）出土遺物

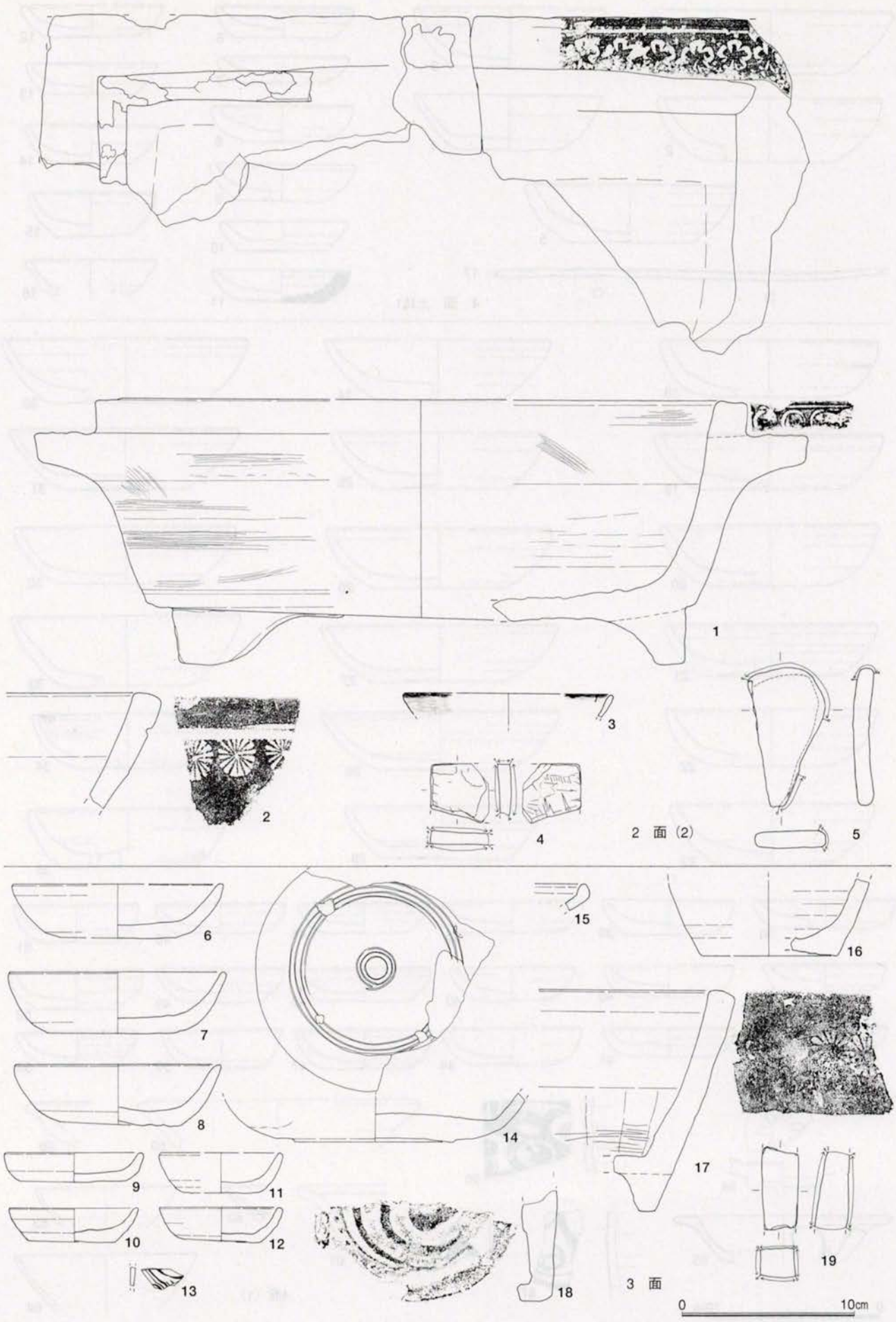


図15　2面（2）・3面出土遺物

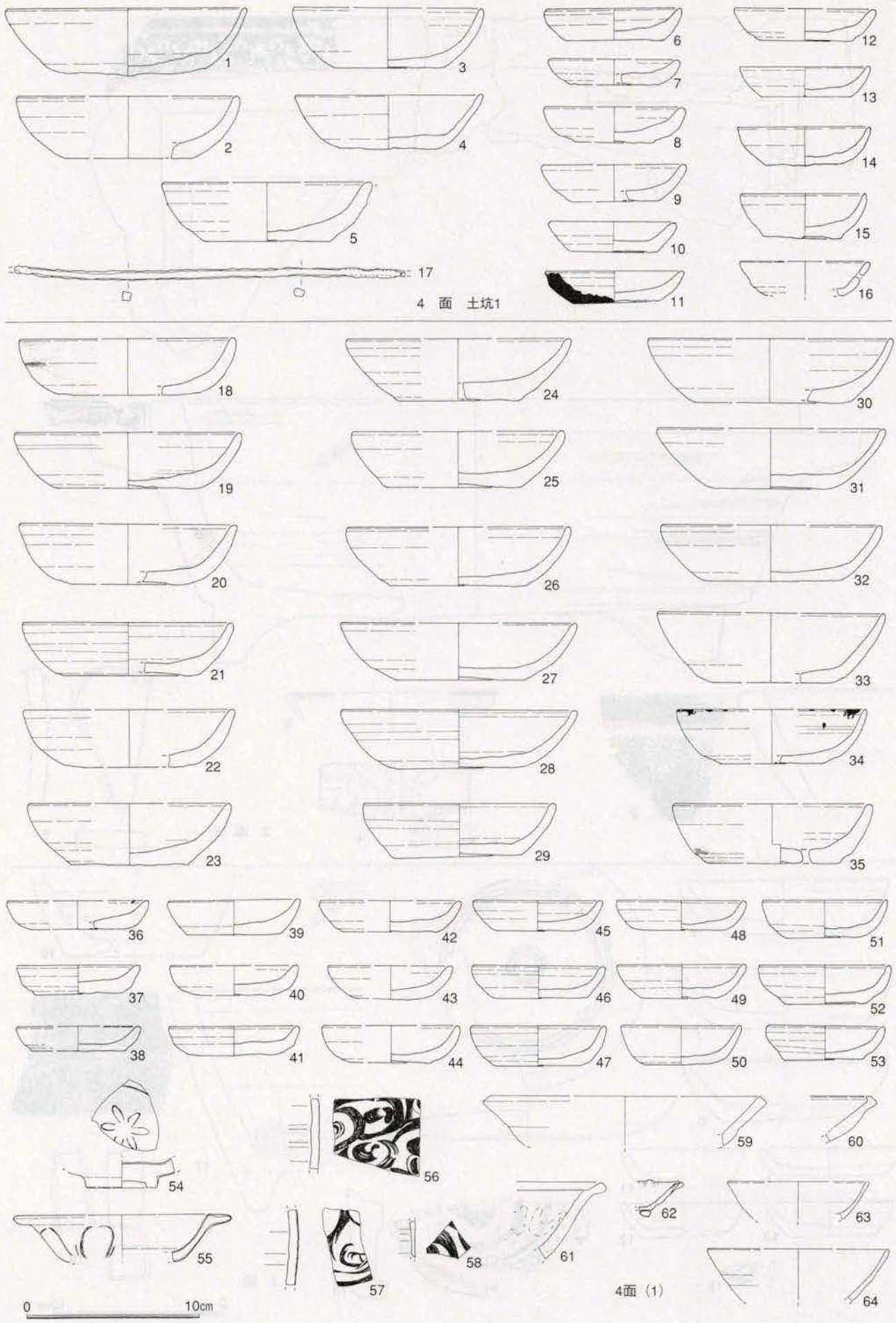


図16　4面土坑1・4面（1）出土遺物

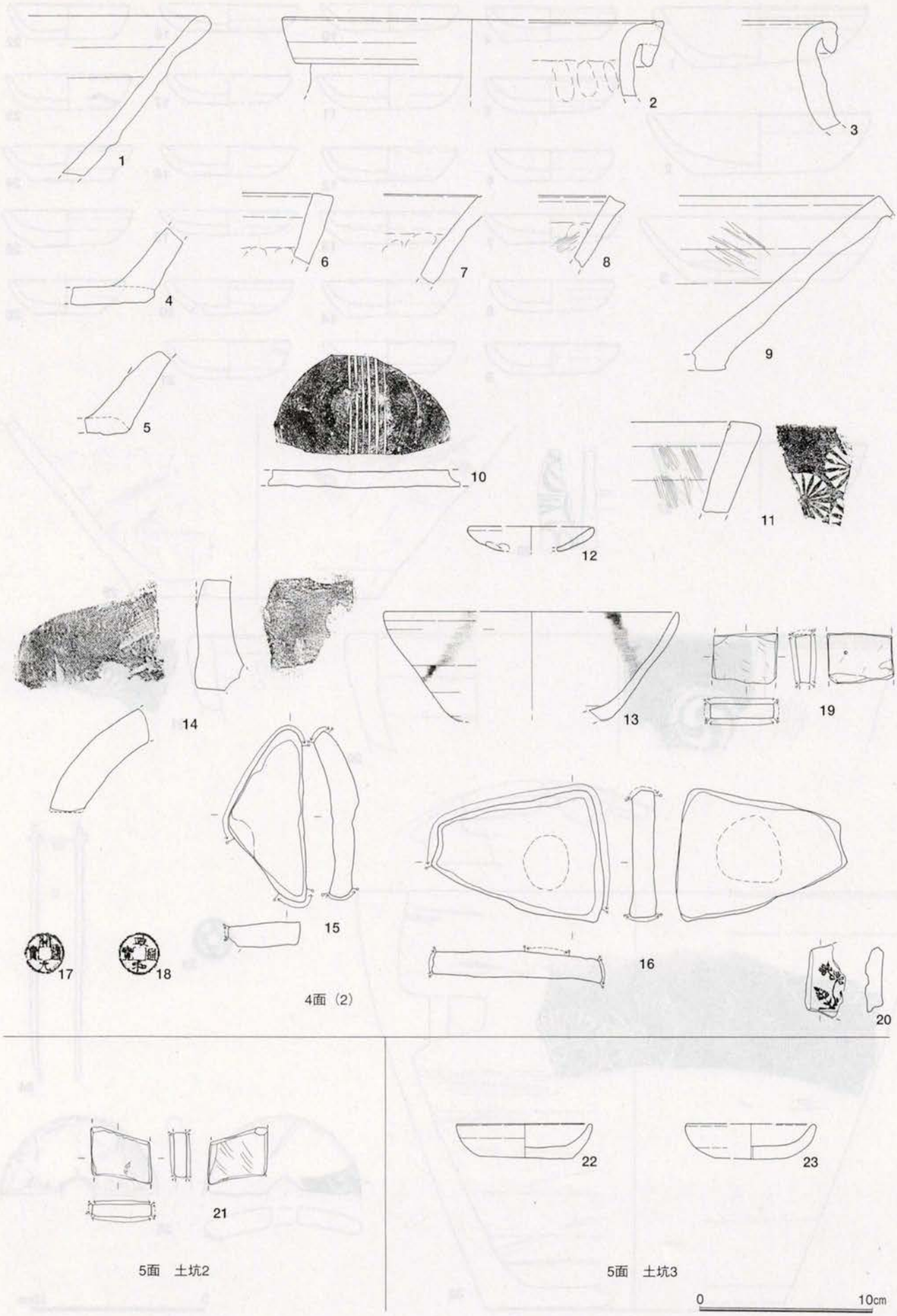


図17　4面（2）・5面土坑2・3出土遺物

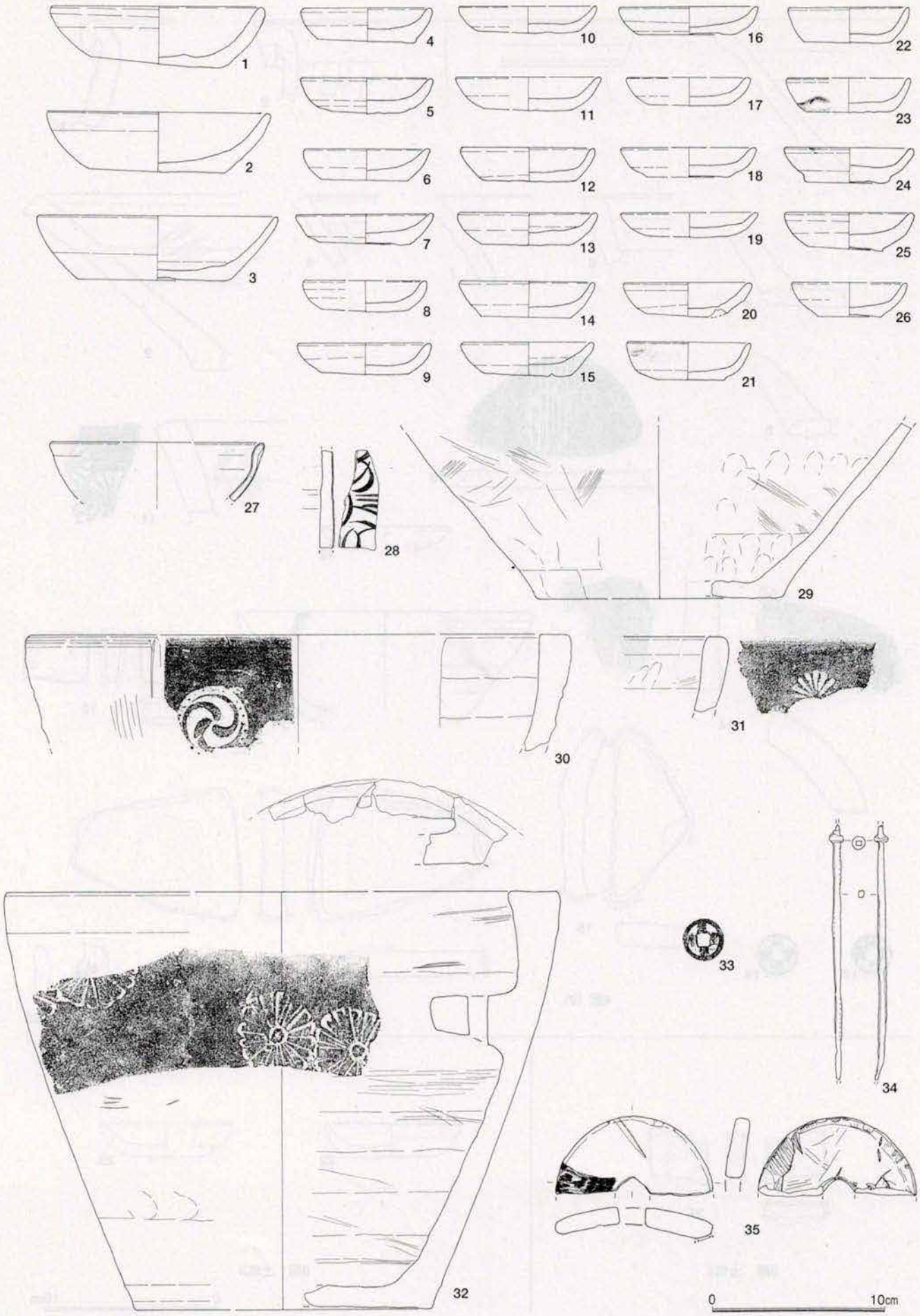


図18　5面炭層出土遺物

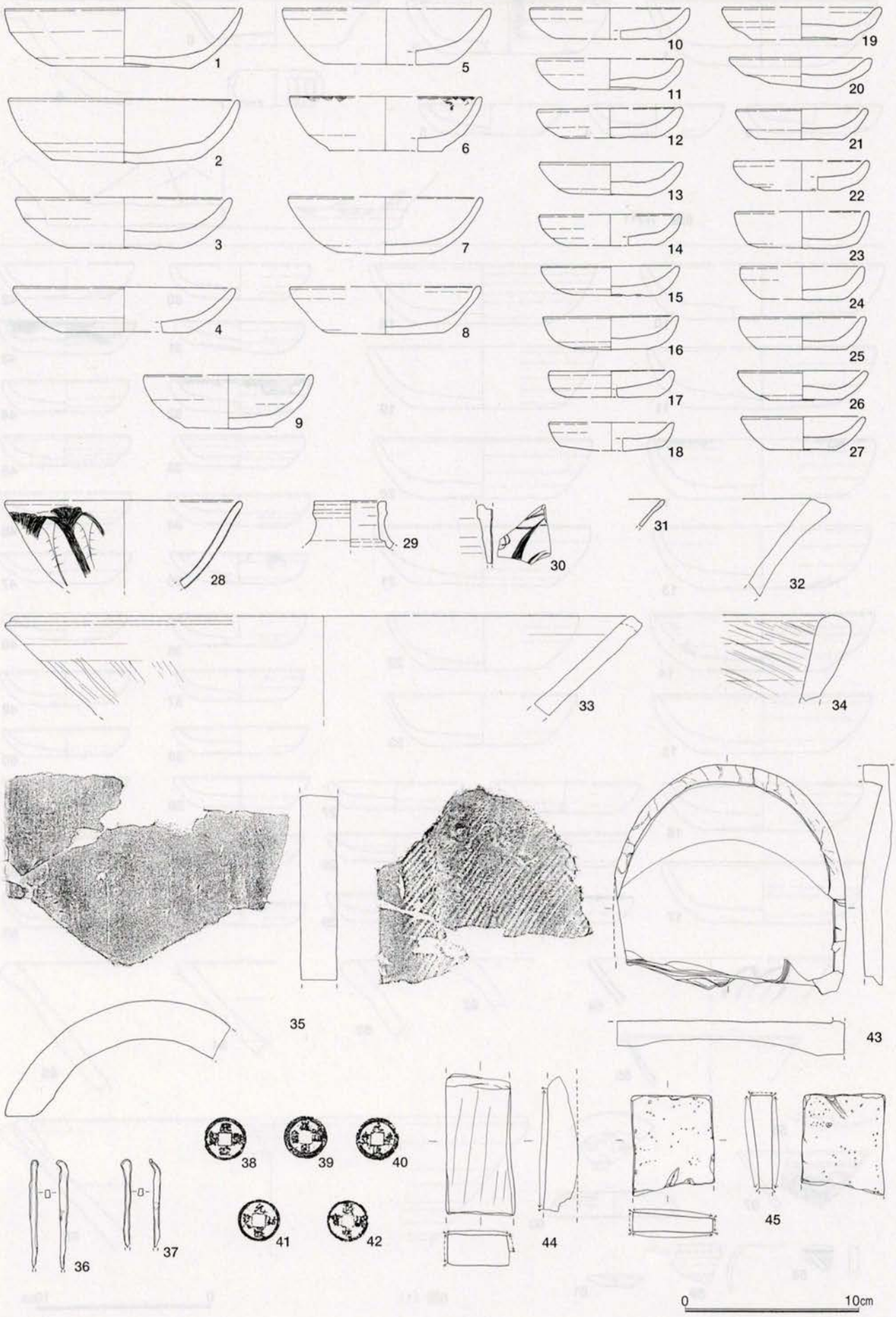

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
10cm

図19　5面出土遺物

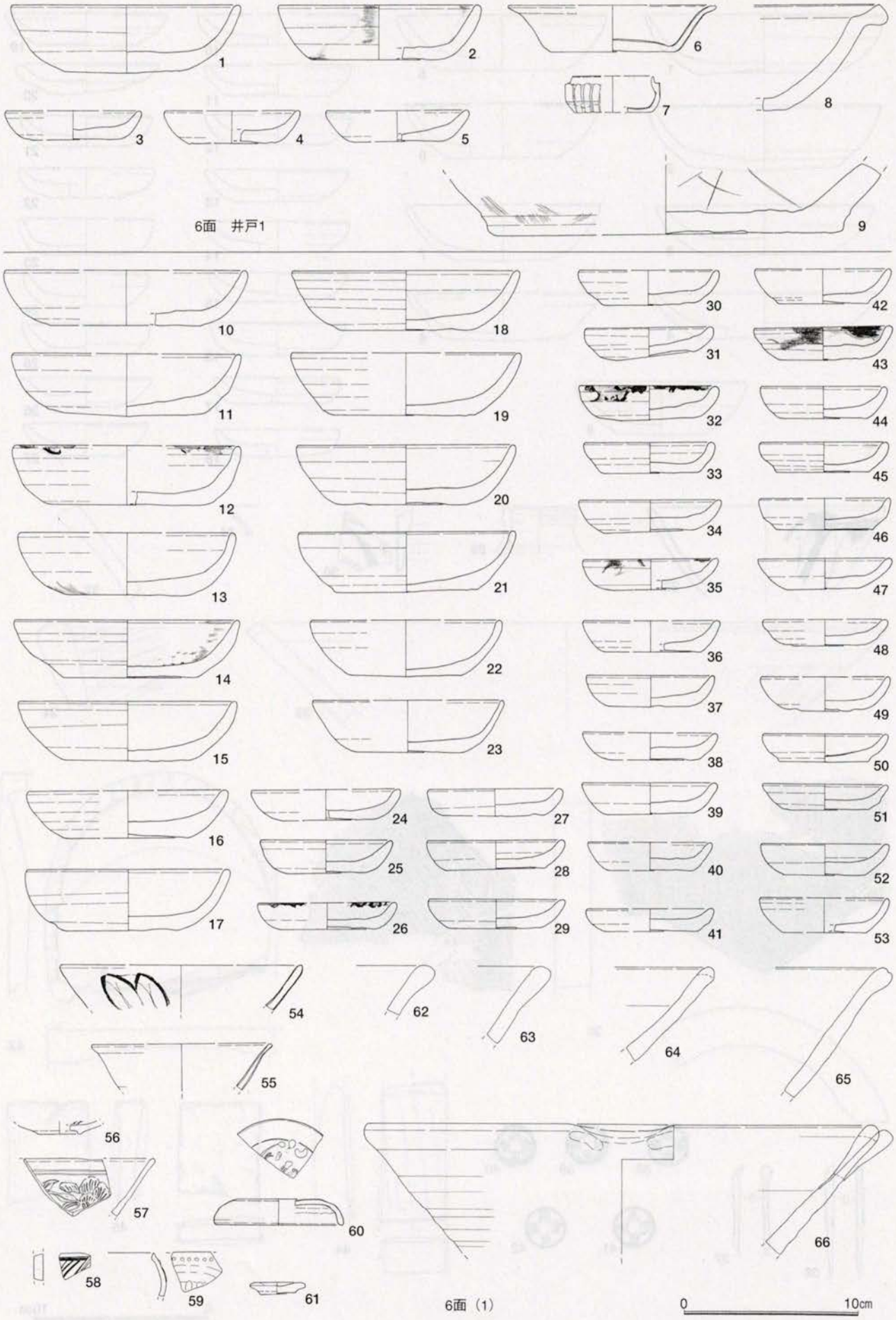


図20　6面井戸1・6面（1）出土遺物

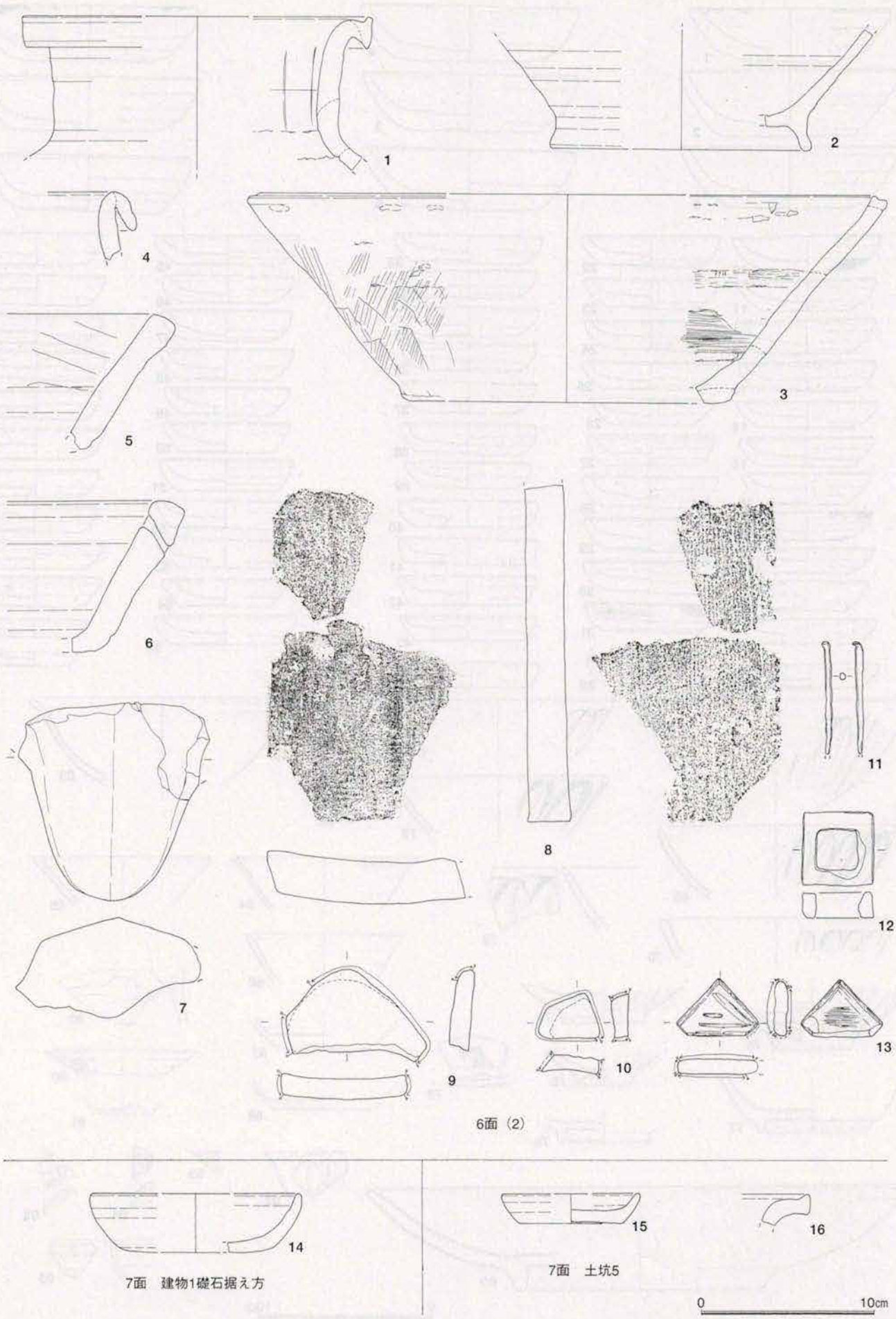


図21　6面（2）・7面建物1・土坑5出土遺物

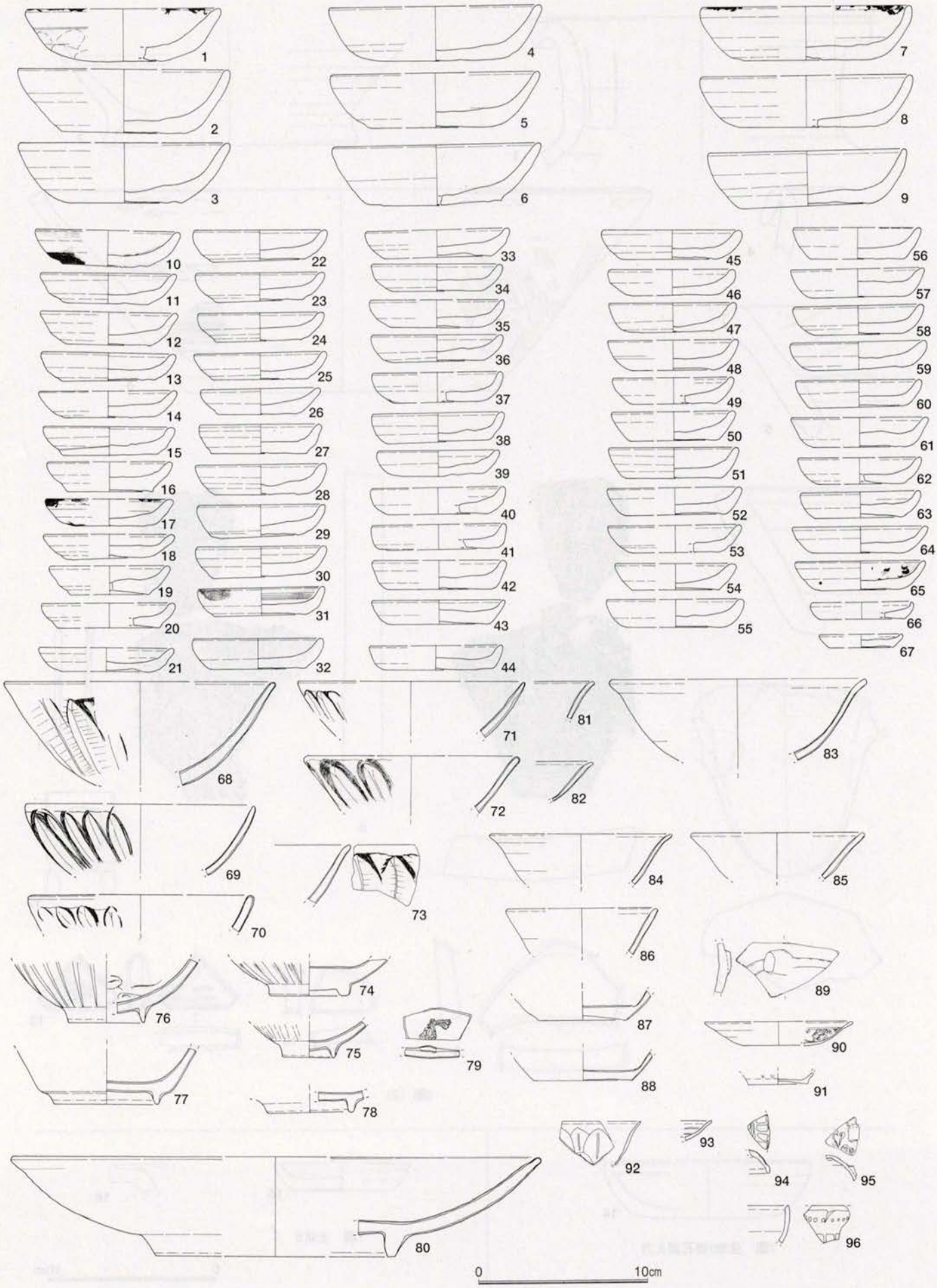


図22　7面出土遺物（1）

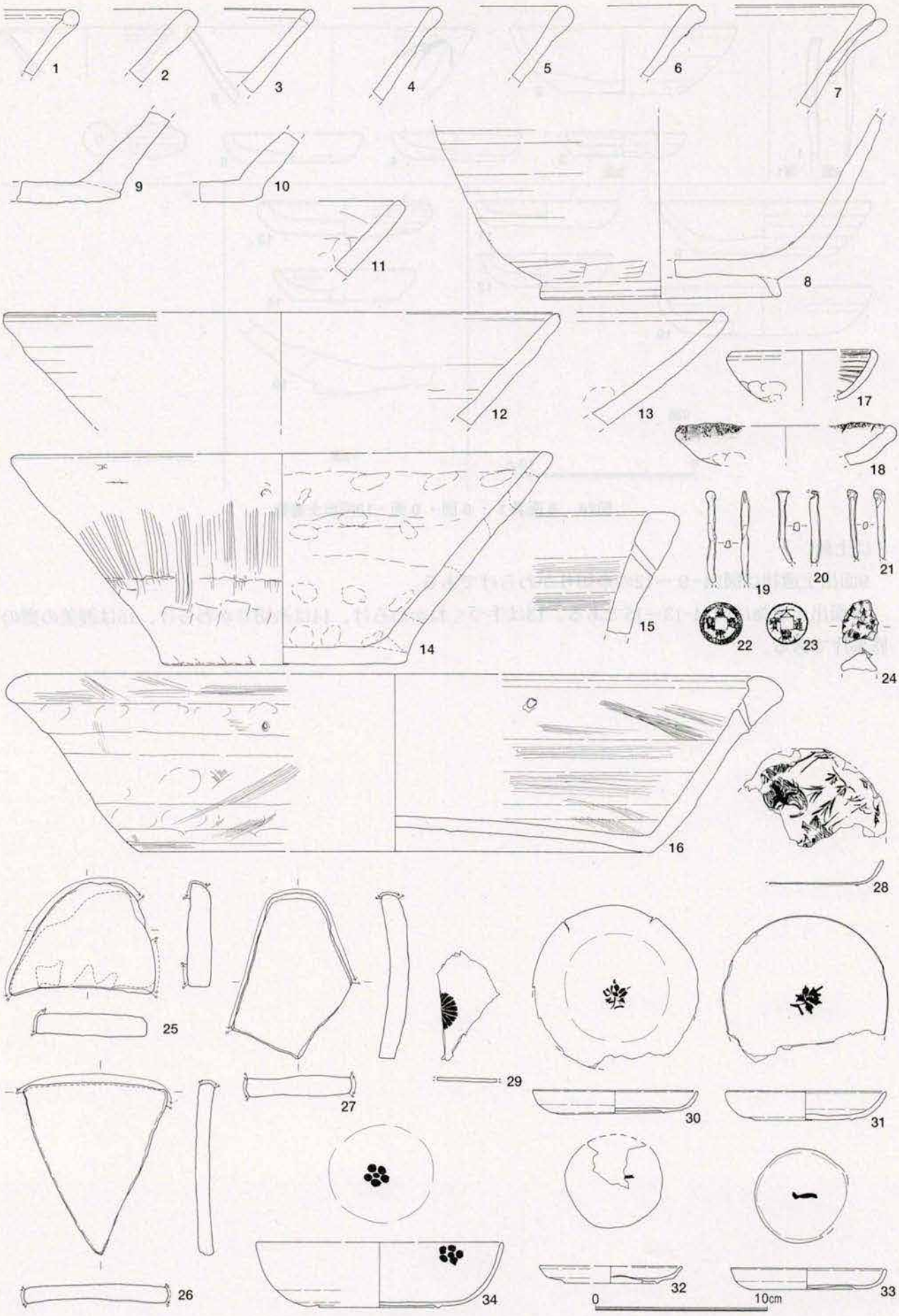

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
10cm

図23　7面出土遺物（2）

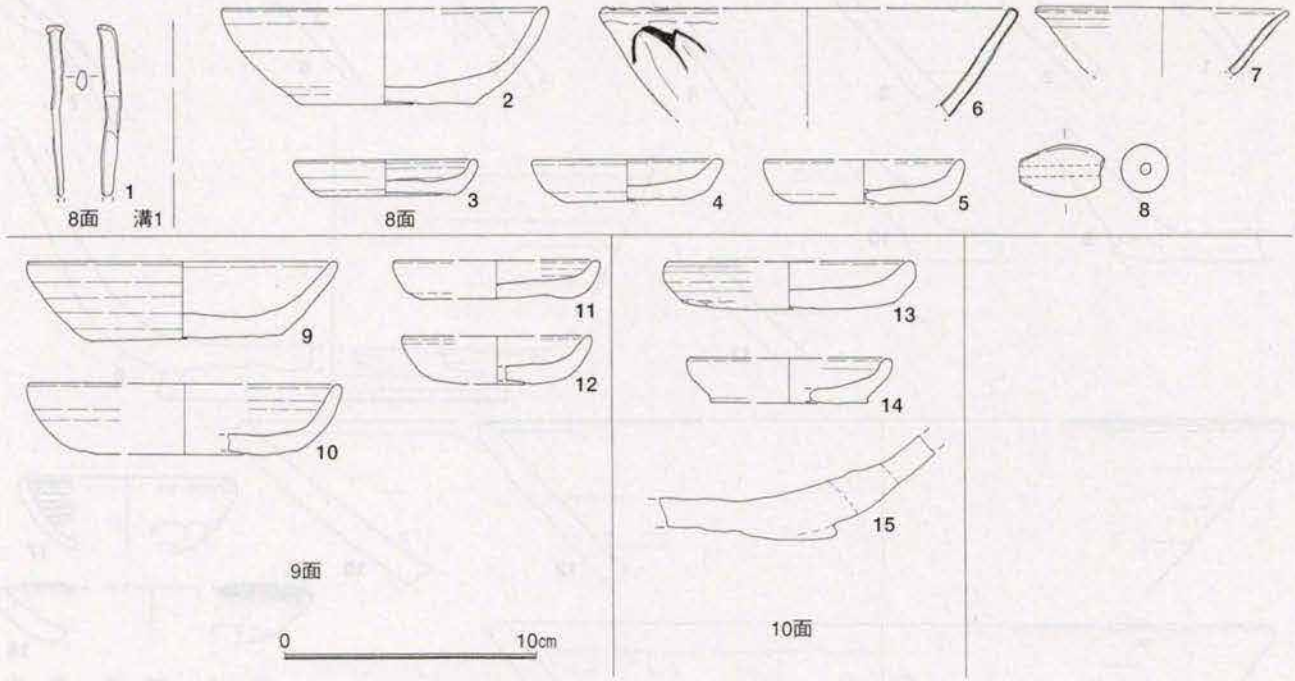


図24　8面溝1・8面・9面・10面出土遺物

8は土錘。

9面出土遺物は図24-9～12の糸切りかわらけである。

10面出土遺物は図24-13～15である。13は手づくねかわらけ、14は糸切りかわらけ、15は渥美の甕の底部片である。

表1　遺物観察表（1）

（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名 / 産地	遺物名 / 器種	口径 / 長さ	底径 / 幅	器高 / 厚さ	色調（胎土）	色調（釉 / 器表）	備考
14	1	表土層		土器	かわらけ	7.4	—	1.7	淡橙色系	—	手づくね
14	2			土器	かわらけ	(13.2)	(9.7)	3.2	肌色系	—	
14	3			土器	かわらけ	12.3	7.3	3.3	橙色系	—	
14	4			土器	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.4	肌色系	—	
14	5			土器	かわらけ	8.6	4.7	2.7	橙色系	—	
14	6			土器	かわらけ	(5.2)	(3.9)	1.0	橙色系	—	
14	7			青磁	碗	—	—	—	白褐色	灰味緑褐色	
14	8			瀬戸	おろし皿	—	—	—	白褐色	灰釉	
14	9			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	
14	10			山茶碗窯系	こね鉢	(24.7)	—	—	暗灰色	—	内：磨滅
14	11	1面		土器	かわらけ	(9.0)	—	1.7	橙色系	—	手づくね
14	12			土器	かわらけ	(14.4)	(9.0)	4.2	橙色系	—	
14	13			土器	かわらけ	(9.2)	(6.0)	2.2	橙色系	—	
14	14			土器	かわらけ	7.4	5.0	2.3	淡橙色系	—	
14	15			土器	かわらけ	6.5	4.1	2.0	橙色系	—	
14	16			緑釉	盤	—	—	—	白褐色	緑色	
14	17			瀬戸	壺	(10.8)	—	—	白褐色	灰釉	
14	18			鳴滝	仕上げ砥	〔5.3〕	4.1	0.8	—	—	
14	19	2面		土器	かわらけ	(14.8)	(9.7)	4.1	橙色系	—	
14	20			土器	かわらけ	(14.4)	(10.6)	2.8	橙色系	—	
14	21			土器	かわらけ	(13.0)	(8.7)	3.1	橙色系	—	
14	22			土器	かわらけ	(12.8)	(8.2)	2.9	橙色系	—	
14	23			土器	かわらけ	(12.2)	(7.9)	3.2	橙色系	—	
14	24			土器	かわらけ	11.7	6.6	3.3	橙色系	—	
14	25			土器	かわらけ	11.6	6.3	3.0	肌色系	—	
14	26			土器	かわらけ	(11.5)	(6.0)	3.1	肌色系	—	
14	27			土器	かわらけ	11.7	6.8	3.6	橙色系	—	
14	28			土器	かわらけ	11.3	6.6	3.3	肌色系	—	
14	29			土器	かわらけ	(9.8)	(7.4)	2.0	肌色系	—	灯
14	30			土器	かわらけ	8.6	5.4	2.6	灰色系	—	
14	31			土器	かわらけ	8.7	4.9	2.6	橙色系	—	
14	32			土器	かわらけ	(8.4)	(5.1)	1.9	淡橙色系	—	
14	33			土器	かわらけ	(8.6)	(5.4)	2.0	肌色系	—	灯
14	34			土器	かわらけ	(8.4)	(5.2)	2.2	肌色系	—	
14	35			土器	かわらけ	7.4	5.6	1.5	肌色系	—	
14	36			土器	かわらけ	6.9	4.0	2.0	橙色系	—	
14	37			土器	かわらけ	(8.0)	(6.0)	2.2	淡橙色系	—	
14	38			土器	かわらけ	7.9	4.5	2.5	肌色系	—	
14	39			土器	かわらけ	7.5	3.9	2.4	肌色系	—	
14	40			土器	かわらけ	7.2	4.9	2.2	橙色系	—	
14	41			土器	かわらけ	(6.8)	(3.2)	2.2	橙色系	—	
14	42			土器	かわらけ	6.4	4.5	2.0	淡橙色系	—	
14	43			土器	かわらけ	(6.2)	(3.6)	2.1	淡橙色系	—	
14	44			土器	かわらけ	6.3	4.6	2.1	橙色系	—	
14	45			青磁	碗	—	—	—	灰色	灰緑色	
14	46			青磁	劃花文碗	—	—	—	灰白色	灰緑色	
14	47			青磁	蓮弁文碗	(15.8)	—	—	灰色	灰青色	
14	48			青磁	蓮弁文碗	(14.4)	—	—	灰色	緑味灰色	
14	49			青白磁	梅瓶	—	—	—	白色	水青色	
14	50			青白磁	梅瓶	—	—	—	白色	灰味水青色	
14	51			褐釉	茶入れ	—	2.8	—	灰色	茶色	
14	52			緑釉	盤	—	—	—	灰色	緑色	
14	53			瀬戸	おろし皿	—	—	—	灰色	灰釉	
14	54			瀬戸	おろし皿	—	—	—	灰白色	灰釉	
14	55			瀬戸	折縁皿	(20.9)	—	—	灰白色	灰釉	
14	56			山茶碗窯系	山茶碗	—	—	—	灰色	—	
14	57			常滑	こね鉢	—	—	—	灰色	暗赤褐色	内：磨滅
15	1			瓦質	角火鉢	(37.7)	(28.9)	15.3	灰色	黒色処理	連珠文・草花文
15	2			瓦質	手焙り	—	—	—	灰色	肌色	菊花文
15	3			土器	白かわらけ	(12.2)	—	—	灰白色	黒緑	

表２　遺物観察表（2）　　（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名／産地	遺物名／器種	口径／長さ	底径／幅	器高／厚さ	色調（胎土）	色調（釉／器表）	備考
15	4			石製品	仕上げ砥	〔3.3〕	〔3.3〕	0.7	―	―	
15	5			常滑	研磨痕あり	8.1	4.1	1.0	―	―	
15	6	3面		土器	かわらけ	(12.2)	(6.7)	3.1	橙色系	―	
15	7			土器	かわらけ	12.6	7.4	3.5	淡橙色系	―	
15	8			土器	かわらけ	11.9	7.0	3.5	橙色系	―	
15	9			土器	かわらけ	8.0	6.1	1.7	橙色系	―	
15	10			土器	かわらけ	7.5	5.0	2.0	橙色系	―	
15	11			土器	かわらけ	(7.2)	(4.4)	2.3	淡橙色系	―	
15	12			土器	かわらけ	7.2	4.3	1.9	橙色系	―	
15	13			青白磁	梅瓶	―	―	―	白色	水青色	
15	14			瀬戸	鉢	―	9.2	―	白褐色	灰釉	
15	15			瀬戸	折縁鉢	―	―	―	灰白色	灰釉	
15	16			常滑	壺	―	(7.8)	―	灰色	暗赤褐色	
15	17			瓦質	手焙り	―	―	―	濃灰色	濃灰桃色	菊花文スタンプ・内：煤
15	18			瓦	軒丸瓦	―	〔11.7〕	―	白色	黒色処理	巴文
15	19			石製品	中砥	〔4.9〕	2.1	1.8	―	―	
16	1	4面	土坑1	土器	かわらけ	14.0	8.1	3.8	淡橙色系	―	
16	2			土器	かわらけ	(13.0)	(7.4)	3.6	淡橙色系	―	
16	3			土器	かわらけ	(11.0)	6.0	3.4	橙色系	―	
16	4			土器	かわらけ	10.9	5.7	3.2	橙色系	―	
16	5			土器	かわらけ	12.2	7.4	3.3	淡橙色系	―	
16	6			土器	かわらけ	8.0	5.6	1.8	橙色系	―	
16	7			土器	かわらけ	(7.6)	(5.1)	1.5	淡橙色系	―	
16	8			土器	かわらけ	(8.2)	(4.5)	2.1	淡橙色系	―	
16	9			土器	かわらけ	(8.4)	(5.0)	2.1	淡橙色系	―	
16	10			土器	かわらけ	7.5	5.1	1.7	淡橙色系	―	
16	11			土器	かわらけ	8.0	5.0	1.9	淡橙色系	―	灯
16	12			土器	かわらけ	(8.2)	5.3	1.8	淡橙色系	―	
16	13			土器	かわらけ	7.6	5.1	1.7	肌色系	―	
16	14			土器	かわらけ	7.7	4.5	2.2	橙色系	―	
16	15			土器	かわらけ	7.3	4.5	2.6	淡橙色系	―	
16	16			土器	穿孔かわらけ	(7.6)	―	―	橙色系	―	
16	17			鉄製品	不明	〔22.6〕	0.5	0.6	―	―	
16	18	4面		土器	かわらけ	(12.6)	(8.3)	3.3	肌色系	―	灯
16	19			土器	かわらけ	(13.2)	(8.2)	3.2	橙色系	―	
16	20			土器	かわらけ	(12.7)	(6.7)	3.5	淡橙色系	―	灯
16	21			土器	かわらけ	12.2	7.4	3.0	橙色系	―	
16	22			土器	かわらけ	(12.7)	(6.3)	3.4	橙色系	―	
16	23			土器	かわらけ	(11.8)	6.8	3.5	淡橙色系	―	
16	24			土器	かわらけ	(13.0)	7.9	3.4	淡橙色系	―	
16	25			土器	かわらけ	(13.6)	7.4	3.3	橙色系	―	
16	26			土器	かわらけ	(12.3)	(7.6)	3.2	淡橙色系	―	
16	27			土器	かわらけ	(12.8)	7.8	3.3	橙色系	―	
16	28			土器	かわらけ	(13.2)	(6.9)	4.0	橙色系	―	
16	29			土器	かわらけ	11.2	7.3	3.0	橙色系	―	
16	30			土器	かわらけ	(13.2)	6.7	3.5	橙色系	―	
16	31			土器	かわらけ	(13.1)	7.0	3.6	橙色系	―	
16	32			土器	かわらけ	13.7	7.2	3.5	橙色系	―	
16	33			土器	かわらけ	(14.2)	(8.9)	3.7	淡橙色系	―	
16	34			土器	かわらけ	(11.0)	(6.0)	3.2	橙色系	―	灯
16	35			土器	穿孔かわらけ	(11.6)	(7.5)	3.4	淡橙色系	―	
16	36			土器	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.7	肌色系	―	灯
16	37			土器	かわらけ	7.1	5.0	1.7	肌色系	―	
16	38			土器	かわらけ	(7.2)	(5.4)	1.4	肌色系	―	
16	39			土器	かわらけ	7.7	5.4	2.0	淡橙色系	―	
16	40			土器	かわらけ	(7.4)	(4.0)	1.7	淡橙色系	―	
16	41			土器	かわらけ	7.6	5.0	1.7	橙色系	―	
16	42			土器	かわらけ	(8.2)	(5.5)	1.8	肌色系	―	
16	43			土器	かわらけ	(7.2)	(3.7)	2.0	肌色系	―	
16	44			土器	かわらけ	(8.0)	(4.7)	2.2	橙色系	―	

表３　遺物観察表（3）　　（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名 / 産地	遺物名 / 器種	口径 / 長さ	底径 / 幅	器高 / 厚さ	色調（胎土）	色調（釉 / 器表）	備考
16	45			土器	かわらけ	7.5	4.6	1.8	橙色系	—	
16	46			土器	かわらけ	7.7	5.3	1.9	淡橙色系	—	
16	47			土器	かわらけ	7.9	5.0	2.3	淡橙色系	—	
16	48			土器	かわらけ	7.5	4.9	1.7	淡橙色系	—	
16	49			土器	かわらけ	7.5	4.8	2.0	橙色系	—	
16	50			土器	かわらけ	7.0	3.9	2.3	橙色系	—	
16	51			土器	かわらけ	7.2	4.2	2.2	橙色系	—	
16	52			土器	かわらけ	7.7	4.7	2.3	橙色系	—	
16	53			土器	かわらけ	6.8	4.5	2.0	淡橙色系	—	
16	54			青磁	劃花文碗	—	4.2	—	灰白色	青緑色	
16	55			青磁	折縁鉢	(12.7)	—	—	白色	灰緑色	
16	56			青白磁	梅瓶	—	—	—	灰白色	水青色	再火
16	57			青白磁	梅瓶	—	—	—	灰白色	水青色	
16	58			青白磁	梅瓶	—	—	—	白色	水青色	
16	59			瀬戸	おろし皿	(16.5)	—	—	灰白色	灰釉	
16	60			瀬戸	おろし皿	—	—	—	白褐色	灰釉	
16	61			瀬戸	折縁皿	—	—	—	白褐色	灰釉	
16	62			瀬戸	輪花型入子	—	—	—	白褐色	—	足付
16	63			瀬戸	入子	(8.2)	—	—	白褐色	—	
16	64			瀬戸	平碗	(10.6)	—	—	白色	灰釉	
17	1	4面		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	内：磨滅
17	2			常滑	甕	(22.0)	—	—	黒灰色	—	再火
17	3			常滑	甕	—	—	—	暗灰色	赤紫褐色	
17	4			常滑	甕	—	—	—	淡橙色	—	こね鉢に転用
17	5			常滑	甕	—	—	—	灰色	赤紫褐色	
17	6			常滑	こね鉢	—	—	—	橙色	—	
17	7			常滑	こね鉢	—	—	—	橙色	茶褐色	
17	8			常滑	こね鉢	—	—	—	橙色	橙色	
17	9			常滑	こね鉢	—	—	—	濃灰色	茶褐色	内：磨滅
17	10			常滑	すり鉢	—	—	—	灰白色	黒灰色	内：磨滅
17	11			瓦質	手焙り	—	—	—	灰白色	濃灰色	菊花文スタンプ
17	12			土器	白かわらけ	(7.3)	—	—	白褐色	—	手づくね
17	13			土器	白かわらけ	(17.0)	—	—	白褐色	—	煤付着
17	14			瓦	丸瓦	〔5.0〕	〔5.6〕	〔5.9〕	灰色	—	
17	15			常滑	研磨痕あり	9.9	4.3	1.6	—	—	
17	16			常滑	研磨痕あり	7.5	9.8	1.5	—	—	
17	17			銭	開元通寶	2.3	2.3	—	—	—	
17	18			銭	政和通寶	2.4	2.4	—	—	—	
17	19			鳴滝	仕上げ砥	〔2.9〕	3.7	0.9	—	—	
17	20			滑石製品	スタンプ	〔4.2〕	〔2.2〕	〔0.9〕	—	—	草花文
17	21	5面	土坑２	石製品	仕上げ砥	〔2.8〕	3.4	0.7	—	—	
17	22	5面	土坑３	土器	かわらけ	7.8	5.4	1.9	淡橙色系	—	
17	23			土器	かわらけ	(7.6)	(4.0)	2.0	肌色系	—	
18	1	5面炭層中		土器	かわらけ	12.4	7.5	3.3	肌色系	—	
18	2			土器	かわらけ	13.0	7.8	3.5	肌色系	—	
18	3			土器	かわらけ	14.0	8.8	3.7	橙色系	—	
18	4			土器	かわらけ	7.6	5.7	1.9	肌色系	—	
18	5			土器	かわらけ	7.7	4.0	2.0	肌色系	—	
18	6			土器	かわらけ	7.3	4.9	1.8	肌色系	—	
18	7			土器	かわらけ	8.0	5.2	1.7	肌色系	—	
18	8			土器	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.8	淡橙色系	—	
18	9			土器	かわらけ	7.7	5.0	1.8	肌色系	—	
18	10			土器	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.5	淡橙色系	—	
18	11			土器	かわらけ	(8.4)	(5.0)	1.9	肌色系	—	
18	12			土器	かわらけ	7.8	5.2	2.0	肌色系	—	
18	13			土器	かわらけ	8.1	5.0	1.9	肌色系	—	
18	14			土器	かわらけ	7.8	5.1	2.1	肌色系	—	
18	15			土器	かわらけ	7.7	5.1	1.9	肌色系	—	
18	16			土器	かわらけ	8.1	5.4	1.6	肌色系	—	

表4　遺物観察表（4）　　（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名／産地	遺物名／器種	口径／長さ	底径／幅	器高／厚さ	色調（胎土）	色調（釉／器表）	備考
18	17			土器	かわらけ	(7.2)	(4.5)	1.6	肌色系	—	
18	18			土器	かわらけ	(7.9)	(4.8)	1.7	肌色系	—	
18	19			土器	かわらけ	(8.0)	(4.5)	1.4	肌色系	—	
18	20			土器	かわらけ	7.5	—	1.9	淡橙色系	—	灯
18	21			土器	かわらけ	7.2	4.0	2.2	淡橙色系	—	
18	22			土器	かわらけ	7.0	5.0	2.0	橙色系	—	灯
18	23			土器	かわらけ	(7.2)	(4.8)	2.0	橙色系	—	灯
18	24			土器	かわらけ	7.5	4.9	2.0	肌色系	—	
18	25			土器	かわらけ	7.5	4.3	2.1	肌色系	—	
18	26			土器	かわらけ	(6.6)	3.7	2.0	淡橙色系	—	
18	27			青磁	碗	(12.4)	—	—	灰白色	緑青色	
18	28			青白磁	梅瓶	—	—	—	灰白色	灰味水青色	
18	29			常滑	甕	(14.0)	—	—	橙色	橙色	
18	30			瓦質	輪花型手焙り	(31.5)	—	—	灰桃色	黒色処理	連珠巴文
18	31			瓦質	輪花型手焙り	—	—	—	灰白色	肌色	菊花文スタンプ
18	32			瓦質	土風炉	(32.0)	—	—	淡橙色	—	上層からの混入品か？
18	33			銭	元豊通寶	2.4	2.4	—	—	—	
18	34			鉄製品	火箸	(14.7)	0.5	0.4	—	—	
18	35			滑石製品	紡錘車	(4.4)	9.1	1.2	—	—	煤付着
19	1	5面		土器	かわらけ	(12.5)	8.2	3.7	橙色系	—	
19	2			土器	かわらけ	12.9	(6.6)	2.8	肌色系	—	
19	3			土器	かわらけ	(11.2)	7.5	2.6	肌色系	—	
19	4			土器	かわらけ	(11.1)	(5.4)	3.2	橙色系	—	
19	5			土器	かわらけ	13.4	7.9	3.3	淡橙色系	—	
19	6			土器	かわらけ	13.7	(7.2)	3.2	橙色系	—	
19	7			土器	かわらけ	(12.0)	(6.5)	3.1	橙色系	—	
19	8			土器	かわらけ	(11.0)	(6.5)	2.3	橙色系	—	
19	9			土器	かわらけ	(9.8)	(5.1)	3.0	橙色系	—	
19	10			土器	かわらけ	(9.2)	(6.2)	1.8	肌色系	—	
19	11			土器	かわらけ	(8.4)	(5.7)	1.8	淡橙色系	—	
19	12			土器	かわらけ	(8.4)	(5.1)	1.7	肌色系	—	
19	13			土器	かわらけ	8.3	4.6	1.8	肌色系	—	
19	14			土器	かわらけ	(8.2)	(5.2)	1.7	橙色系	—	
19	15			土器	かわらけ	8.0	4.9	1.7	橙色系	—	
19	16			土器	かわらけ	7.8	4.3	2.0	肌色系	—	
19	17			土器	かわらけ	7.2	5.3	1.5	橙色系	—	
19	18			土器	かわらけ	(7.2)	(5.9)	1.6	肌色系	—	
19	19			土器	かわらけ	(9.2)	(5.6)	1.8	橙色系	—	
19	20			土器	かわらけ	8.2	3.8	1.7	肌色系	—	
19	21			土器	かわらけ	7.6	4.9	1.8	肌色系	—	
19	22			土器	かわらけ	(7.8)	(4.2)	1.6	肌色系	—	
19	23			土器	かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.0	肌色系	—	
19	24			土器	かわらけ	(7.2)	(4.6)	1.9	淡橙色系	—	
19	25			土器	かわらけ	7.3	5.2	1.9	淡橙色系	—	
19	26			土器	かわらけ	7.5	4.1	1.7	橙色系	—	
19	27			土器	かわらけ	7.2	3.8	1.9	淡橙色系	—	
19	28			青磁	蓮弁文碗	(13.7)	—	—	灰白色	緑灰色	
19	29			青白磁	梅瓶	(4.1)	—	—	白色	水青色	
19	30			青白磁	梅瓶	—	—	—	灰白色	水青色	
19	31			瀬戸系	山茶碗	—	—	—	灰味白褐色	—	
19	32			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	
19	33			常滑	こね鉢	(36.0)	—	—	暗橙色	—	
19	34			瓦質	手焙り	—	—	—	灰色	灰色	
19	35			瓦	丸瓦	〔10.5〕	〔13.0〕	6.1	灰色	—	縄目・布目痕
19	36			鉄製品	釘	(6.4)	0.3	0.4	—	—	
19	37			鉄製品	釘	(5.2)	0.3	0.4	—	—	
19	38			銭	天聖元寶	2.5	2.5	—	—	—	
19	39			銭	皇宋通寶	2.4	2.4	—	—	—	
19	40			銭	元豊通寶	2.4	2.4	—	—	—	
19	41			銭	元祐通寶	2.4	2.4	—	—	—	

表5　遺物観察表（5）　　（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名 / 産地	遺物名 / 器種	口径 / 長さ	底径 / 幅	器高 / 厚さ	色調（胎土）	色調（釉 / 器表）	備考
19	42			銭	政和通寶	2.3	2.4	—	—	—	
19	43			石製品	硯	〔12.9〕	13.1	1.9	—	—	
19	44			石製品	中砥	〔8.1〕	3.9	1.8	—	—	
19	45			石製品	中砥	〔5.9〕	4.6	1.3	—	—	
20	1	6面	井戸1	土器	かわらけ	13.2	6.7	3.9	淡橙色系	—	
20	2			土器	かわらけ	11.6	7.5	3.1	淡橙色系	—	灯
20	3			土器	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.7	淡橙色系	—	
20	4			土器	かわらけ	(7.8)	(4.9)	1.9	肌色系	—	
20	5			土器	かわらけ	(8.2)	(5.0)	1.8	淡橙色系	—	
20	6			白磁	口兀皿	(12.0)	7.0	2.7	白色	青味灰白色	
20	7			青白磁	合子身	(5.4)	(4.5)	2.1	白色	濃水青色	
20	8			瀬戸	折縁皿	—	—	—	灰褐色	灰釉	
20	9			常滑	甕	(19.4)	—	—	濃灰色	茶褐色	
20	10	6面		土器	かわらけ	(14.0)	(8.7)	3.2	淡橙色系	—	
20	11			土器	かわらけ	(13.2)	8.2	3.6	橙色系	—	
20	12			土器	かわらけ	(13.2)	8.8	3.4	肌色系	—	灯
20	13			土器	かわらけ	(12.6)	7.0	3.6	淡橙色系	—	灯
20	14			土器	かわらけ	(13.0)	7.7	3.3	橙色系	—	灯
20	15			土器	かわらけ	12.6	7.2	3.4	淡橙色系	—	
20	16			土器	かわらけ	(11.6)	(7.1)	2.7	肌色系	—	
20	17			土器	かわらけ	11.8	6.7	3.5	橙色系	—	
20	18			土器	かわらけ	13.1	7.8	3.5	淡橙色系	—	
20	19			土器	かわらけ	(13.2)	8.1	3.5	橙色系	—	
20	20			土器	かわらけ	12.6	7.5	3.4	橙色系	—	灯
20	21			土器	かわらけ	12.5	8.2	3.5	淡橙色系	—	
20	22			土器	かわらけ	(11.0)	6.5	3.2	肌色系	—	
20	23			土器	かわらけ	(11.0)	6.1	3.0	橙色系	—	
20	24			土器	かわらけ	(8.6)	5.3	1.7	橙色系	—	
20	25			土器	かわらけ	7.6	4.6	1.9	淡橙色系	—	
20	26			土器	かわらけ	(8.0)	5.6	1.5	橙色系	—	灯
20	27			土器	かわらけ	7.8	(5.7)	1.6	橙色系	—	
20	28			土器	かわらけ	7.9	5.7	1.6	橙色系	—	
20	29			土器	かわらけ	7.8	4.7	1.7	淡橙色系	—	
20	30			土器	かわらけ	(8.1)	5.2	2.0	淡橙色系	—	
20	31			土器	かわらけ	7.5	4.4	1.7	淡橙色系	—	
20	32			土器	かわらけ	8.1	5.5	1.9	肌色系	—	灯
20	33			土器	かわらけ	7.6	5.4	1.7	肌色系	—	
20	34			土器	かわらけ	8.2	5.1	1.8	淡橙色系	—	
20	35			土器	かわらけ	7.8	5.0	1.7	橙色系	—	灯
20	36			土器	かわらけ	(7.9)	(5.5)	1.8	淡橙色系	—	
20	37			土器	かわらけ	7.4	4.6	1.8	淡橙色系	—	
20	38			土器	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.6	橙色系	—	
20	39			土器	かわらけ	7.8	5.1	1.8	淡橙色系	—	
20	40			土器	かわらけ	(7.2)	(4.9)	1.6	淡橙色系	—	
20	41			土器	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.3	淡橙色系	—	
20	42			土器	かわらけ	(7.9)	5.0	2.0	淡橙色系	—	
20	43			土器	かわらけ	8.0	4.7	1.9	肌色系	—	灯
20	44			土器	かわらけ	7.3	4.9	1.8	橙色系	—	
20	45			土器	かわらけ	7.5	5.2	1.7	淡橙色系	—	灯
20	46			土器	かわらけ	(7.6)	5.6	1.8	淡橙色系	—	
20	47			土器	かわらけ	7.7	4.0	1.8	淡橙色系	—	
20	48			土器	かわらけ	(7.2)	4.1	1.5	橙色系	—	
20	49			土器	かわらけ	(7.4)	4.3	2.0	淡橙色系	—	
20	50			土器	かわらけ	7.2	5.0	1.6	淡橙色系	—	灯
20	51			土器	かわらけ	7.2	4.9	1.5	淡橙色系	—	
20	52			土器	かわらけ	7.4	4.7	1.8	肌色系	—	
20	53			土器	かわらけ	(7.5)	(4.7)	2.0	淡橙色系	—	
20	54			青磁	蓮弁文碗	(14.0)	—	—	灰色	緑青色	
20	55			白磁	口兀皿	(10.4)	—	—	灰白色	灰白色	

表6　遺物観察表（6）

（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名／産地	遺物名／器種	口径／長さ	底径／幅	器高／厚さ	色調（胎土）	色調（釉／器表）	備考
20	56			白磁	劃花文皿	—	(2.4)	—	白色	青味白色	
20	57			白磁	印花文碗	—	—	—	白色	青味白色	
20	58			青白磁	梅瓶	—	—	—	白色	水青色	
20	59			青白磁	小壺	—	—	—	白色	水青色	
20	60			青白磁	合子蓋	(7.4)	—	1.5	白色	水青色	
20	61			瀬戸	小壺蓋	3.3	—	0.7	灰白色	灰釉	
20	62			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰白色	—	
20	63			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	
20	64			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	濃灰色	—	
20	65			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰白色	—	内：磨滅
20	66			山茶碗窯系	こね鉢	(29.5)	—	—	灰白色	—	内：磨滅
21	1	6面		常滑	甕	(20.2)	—	—	白褐色	茶褐色	
21	2			常滑	こね鉢	—	(15.0)	—	灰色	赤褐色	内：磨滅
21	3			常滑	こね鉢	(36.8)	(19.0)	12.0	濃灰色	暗茶褐色	
21	4			渥美	壺	—	—	—	灰白色	—	再火肌荒れ
21	5			土器質	手焙り	—	—	—	赤橙色	赤橙色	
21	6			土器質	手焙り	—	—	—	赤橙色	赤橙色	内：煤
21	7			土製品	土風炉脚	—	—	—	橙色	—	上層からの混入品か？
21	8			瓦	平瓦	〔19.5〕	〔11.4〕	—	青灰色	—	縄目
21	9			常滑	研磨痕あり	4.8	8.3	1.2	—	—	
21	10			常滑	研磨痕あり	2.6	3.5	1.0	—	—	
21	11			鉄製品	釘	〔6.1〕	0.3	0.4	—	—	
21	12			鉄製品	不明	4.2	4.1	1.5	—	—	
21	13			鳴滝	仕上げ砥	3.3	4.7	0.9	—	—	
21	14	7面	建物1礎石据え方	土器	かわらけ	(12.2)	(8.6)	3.4	濃灰色	—	再火で変色
21	15	7面	土坑5	土器	かわらけ	(8.0)	5.8	1.7	淡橙色系	—	
21	16			常滑	甕	—	—	—	灰色	茶褐色	
22	1	7面		土器	手づくねかわらけ	(11.6)	—	3.1	肌色系	—	灯
22	2			土器	かわらけ	(12.6)	7.4	3.8	肌色系	—	
22	3			土器	かわらけ	(12.6)	6.8	3.5	淡橙色系	—	
22	4			土器	かわらけ	(12.6)	8.0	3.2	橙色系	—	
22	5			土器	かわらけ	(12.4)	(7.5)	3.2	橙色系	—	
22	6			土器	かわらけ	12.4	8.0	3.5	橙色系	—	
22	7			土器	かわらけ	(12.6)	8.0	3.2	橙色系	—	灯
22	8			土器	かわらけ	(12.7)	8.5	3.0	淡橙色系	—	
22	9			土器	かわらけ	11.9	8.0	3.2	橙色系	—	
22	10			土器	かわらけ	(8.6)	5.0	2.1	肌色系	—	灯
22	11			土器	かわらけ	8.0	5.0	1.8	肌色系	—	
22	12			土器	かわらけ	(8.1)	5.0	2.0	肌色系	—	
22	13			土器	かわらけ	8.0	5.4	1.6	淡橙色系	—	
22	14			土器	かわらけ	(8.2)	5.3	1.6	淡橙色系	—	
22	15			土器	かわらけ	7.8	5.6	1.7	橙色系	—	
22	16			土器	かわらけ	(7.4)	5.0	1.8	淡橙色系	—	
22	17			土器	かわらけ	(7.6)	4.2	1.6	橙色系	—	灯
22	18			土器	かわらけ	(7.8)	4.6	1.4	肌色系	—	
22	19			土器	かわらけ	(7.2)	(4.7)	1.7	橙色系	—	
22	20			土器	かわらけ	(7.9)	(6.0)	1.5	橙色系	—	
22	21			土器	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.4	肌色系	—	
22	22			土器	かわらけ	8.0	5.5	1.8	橙色系	—	
22	23			土器	かわらけ	7.7	5.0	1.7	淡橙色系	—	
22	24			土器	かわらけ	7.5	5.0	1.7	橙色系	—	
22	25			土器	かわらけ	8.0	5.6	1.6	淡橙色系	—	
22	26			土器	かわらけ	7.2	4.8	1.5	淡橙色系	—	
22	27			土器	かわらけ	7.3	5.7	1.8	橙色系	—	
22	28			土器	かわらけ	7.8	5.4	1.8	肌色系	—	
22	29			土器	かわらけ	7.6	5.2	1.9	淡橙色系	—	
22	30			土器	かわらけ	7.8	5.5	1.8	橙色系	—	
22	31			土器	かわらけ	7.6	5.4	1.6	淡橙色系	—	
22	32			土器	かわらけ	7.8	5.6	1.8	淡橙色系	—	灯
22	33			土器	かわらけ	(8.6)	(6.2)	1.6	淡橙色系	—	

表7　遺物観察表（7）

（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名／産地	遺物名／器種	口径／長さ	底径／幅	器高／厚さ	色調（胎土）	色調（釉／器表）	備考
22	34			土器	かわらけ	7.8	5.2	1.6	橙色系	—	
22	35			土器	かわらけ	(8.0)	5.5	1.7	淡橙色系	—	
22	36			土器	かわらけ	7.9	5.5	1.6	橙色系	—	
22	37			土器	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.8	橙色系	—	
22	38			土器	かわらけ	7.9	6.0	1.7	橙色系	—	
22	39			土器	かわらけ	7.3	5.2	1.5	淡橙色系	—	
22	40			土器	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.6	淡橙色系	—	
22	41			土器	かわらけ	(8.0)	(6.6)	1.5	淡橙色系	—	
22	42			土器	かわらけ	(8.0)	6.2	1.7	肌色系	—	
22	43			土器	かわらけ	8.0	5.8	1.4	淡橙色系	—	
22	44			土器	かわらけ	(7.9)	6.4	1.4	肌色系	—	
22	45			土器	かわらけ	8.4	5.8	1.7	淡橙色系	—	
22	46			土器	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.5	橙色系	—	
22	47			土器	かわらけ	7.6	5.3	1.7	淡橙色系	—	
22	48			土器	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.8	淡橙色系	—	
22	49			土器	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.5	橙色系	—	
22	50			土器	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.7	淡橙色系	—	
22	51			土器	かわらけ	7.8	6.8	1.9	肌色系	—	
22	52			土器	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.6	橙色系	—	
22	53			土器	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.6	橙色系	—	
22	54			土器	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.6	肌色系	—	
22	55			土器	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.7	橙色系	—	
22	56			土器	かわらけ	(7.6)	(5.5)	1.8	肌色系	—	灯
22	57			土器	かわらけ	(8.0)	5.5	1.7	橙色系	—	
22	58			土器	かわらけ	7.8	5.2	1.7	橙色系	—	
22	59			土器	かわらけ	8.1	5.8	1.6	淡橙色系	—	
22	60			土器	かわらけ	8.5	5.6	1.6	肌色系	—	
22	61			土器	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.8	肌色系	—	
22	62			土器	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.6	肌色系	—	
22	63			土器	かわらけ	7.2	5.2	1.5	橙色系	—	
22	64			土器	かわらけ	8.0	5.5	1.6	淡橙色系	—	
22	65			土器	かわらけ	7.8	4.7	1.7	淡橙色系	—	灯
22	66			土器	内折れかわらけ	(6.2)	(5.0)	1.0	淡橙色系	—	
22	67			土器	内折れかわらけ	(5.0)	(3.8)	0.8	淡橙色系	—	
22	68			青磁	蓮弁文碗	(16.1)	—	—	灰色	青緑色	
22	69			青磁	蓮弁文碗	(13.7)	—	—	灰白色	青緑色	
22	70			青磁	蓮弁文碗	(13.5)	—	—	灰白色	青緑色	
22	71			青磁	蓮弁文碗	(13.4)	—	—	灰白色	青緑色	
22	72			青磁	蓮弁文碗	(12.8)	—	—	灰白色	青緑色	
22	73			青磁	蓮弁文碗	—	—	—	灰白色	青緑色	
22	74			青磁	蓮弁文碗	—	4.8	—	灰白色	青緑色	
22	75			青磁	蓮弁文碗	—	3.3	—	灰色	青緑色	
22	76			青磁	蓮弁文碗	—	4.6	—	灰白色	青緑色	内：劃花文
22	77			青磁	折腰鉢	—	6.2	—	灰白色	青緑色	
22	78			青磁	折腰鉢	—	5.2	—	灰白色	灰味緑色	
22	79			青磁	双魚文鉢	—	—	—	灰白色	青緑色	
22	80			青磁	鉢	(31.4)	(14.2)	6.0	灰白色	青緑色	
22	81			白磁	口兀碗	—	—	—	灰白色	灰色	
22	82			白磁	口兀碗	—	—	—	白色	灰白色	
22	83			白磁	口兀碗	(15.3)	—	—	白色	灰白色	
22	84			白磁	口兀碗	(10.9)	—	—	白色	灰白色	
22	85			白磁	口兀碗	(10.4)	—	—	白色	青味白色	
22	86			白磁	口兀皿	(9.0)	—	—	灰白色	灰白色	
22	87			白磁	口兀皿	—	5.1	—	灰色	青味灰白色	
22	88			白磁	口兀皿	—	5.9	—	灰白色	青味白色	
22	89			白磁	耳付壺	—	—	—	灰白色	白色	
22	90			白磁	印花文口兀皿	(8.8)	(4.0)	1.4	白色	白色	
22	91			白磁	小壺	—	3.5	—	白色	白色	
22	92			青白磁	印花文碗	—	—	—	白色	白色	

表8　遺物観察表（8）

（　）は復元

図	番号	層位	遺構	製品名 / 産地	遺物名 / 器種	口径 / 長さ	底径 / 幅	器高 / 厚さ	色調（胎土）	色調（釉 / 器表）	備考
22	93			青白磁	皿	—	—	—	灰白色	水青色	
22	94			青白磁	合子蓋	—	—	—	白色	濃水青色	
22	95			青白磁	水注	—	—	—	白色	緑味白色	
22	96			青白磁	小壺	—	—	—	白色	水青色	
23	1	7面		山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	
23	2			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	内：磨滅
23	3			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰白色	—	
23	4			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰白色	—	
23	5			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	
23	6			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰白色	—	
23	7			山茶碗窯系	こね鉢	—	—	—	灰色	—	
23	8			山茶碗窯系	こね鉢	—	14.0	—	灰白色	—	内：磨滅
23	9			常滑	甕	—	—	—	濃灰色	橙色	
23	10			常滑	甕	—	—	—	灰色	赤褐色	転用こね鉢、内：磨滅
23	11			常滑	こね鉢	—	—	—	濃灰色	赤褐色	
23	12			常滑	こね鉢	(32.2)	—	—	濃灰色	赤褐色	
23	13			常滑	こね鉢	—	—	—	濃灰色	赤褐色	
23	14			常滑	こね鉢	(31.3)	(31.3)	12.2	濃灰色	濃灰色	内：磨滅
23	15			瓦質	手焙り	—	—	—	濃灰色	—	
23	16			瓦質	手焙り	(45.0)	(30.0)	10.3	肌色	黒色処理	
23	17			瓦器	手づくね碗	(8.8)	—	—	灰白色	黒色処理	内：横位暗文
23	18			土製品	とりべ	(12.8)	—	—	—	溶融物付着	
23	19			鉄製品	釘	〔5.3〕	0.3	0.4	—	—	
23	20			鉄製品	釘	〔4.2〕	0.3	0.5	—	—	
23	21			鉄製品	釘	〔4.0〕	0.2	0.4	—	—	
23	22			銭	皇宋通寶	2.4	2.4	—	—	—	
23	23			銭	大観通寶	2.4	2.4	—	—	—	
23	24			石製品	火打石	2.5	2.1	〔1.0〕	—	—	
23	25			常滑	研磨痕あり	6.0	8.4	1.4	—	—	
23	26			常滑	研磨痕あり	10.0	8.3	0.8	—	—	
23	27			常滑	研磨痕あり	9.5	6.1	1.2	—	—	
23	28			漆器	皿	—	—	1.4	—	黒漆地に朱漆	鶴と草花
23	29			漆器	皿	—	—	—	—	黒漆地に朱漆	菊花文
23	30			漆器	皿	9.6	6.0	1.3	—	黒漆地に朱漆	草花文・裏：「一」
23	31			漆器	皿	9.3	5.6	1.6	—	黒漆地に朱漆	草花文・裏：「一」
23	32			漆器	皿	(8.3)	(5.3)	1.0	—	黒漆	無文
23	33			漆器	皿	9.0	6.8	1.2	—	黒漆	無文
23	34			漆器	椀	(14.3)	6.8	3.8	—	黒漆地に朱漆	梅文
24	1	8面	溝1	鉄製品	釘	〔7.8〕	0.4	0.7	—	—	
24	2	8面		土器	かわらけ	(13.0)	6.8	3.8	橙色系	—	
24	3			土器	かわらけ	7.3	5.3	1.4	橙色系	—	
24	4			土器	かわらけ	7.6	4.7	1.7	淡橙色系	—	
24	5			土器	かわらけ	(8.0)	5.8	1.7	橙色系	—	
24	6			青磁	蓮弁文碗	(16.6)	—	—	灰色	緑青色	
24	7			白磁	口兀碗	(10.0)	—	—	白色	灰白色	
24	8			土製品	土錘	3.4	2.1	1.8	肌色	—	
24	9	9面		土器	かわらけ	12.4	7.5	3.1	淡橙色系	—	
24	10			土器	かわらけ	(12.5)	(8.0)	2.8	淡橙色系	—	
24	11			土器	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.5	肌色系	—	
24	12			土器	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.9	淡橙色系	—	
24	13	10面		土器	手づくねかわらけ	(10.0)	—	1.9	橙色系	—	
24	14			土器	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.8	橙色系	—	
24	15			渥美	甕	—	—	—	灰色	—	

第4章　まとめ

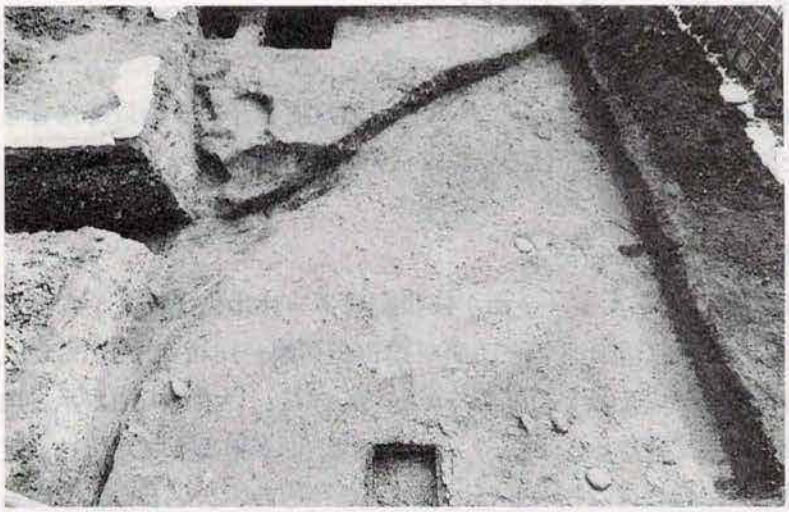
今回の調査では合計10面に及ぶ生活面が検出された。ただし、調査面積の限界と、8面以降はさらに面積の少ないトレンチ調査となったため、個々の面における広範な様相を窺い知る事は不可能であった。

そこで、ここでは今回の調査結果を概観してみる事に留める。

10枚の生活面は大きく4期に分かれるようである。1～2面が15世紀前半～15世紀代・3～5面が14世紀前半～14世紀代・6面が13世紀末～14世紀初頭・7～10面が13世紀初頭～13世紀中葉である。第10面の様相からは13世紀初頭に大規模な埋立造成を施した事が分かる。その後、いずれの面も土丹地業面で、短期間に作りかえられている様子が見て取れる。さらに、15世紀代の面が検出された事は、足利氏との関連上なんら矛盾が無い。発見された遺構は建物の並びはつかめないものの、礎石と成り得る石材が主で、柱穴は礎石建物の補助か塀などの付属物であるようだ。また、遺構の軸線方向はほぼ同じ数値を示している。これらはこの場所の使用目的が時代を経てもさほど変化がなかった事を現していると言えよう。また、第1章で述べられているように、この一帯は保寿院跡とされている。また、大倉幕府跡比定地とも隣り合っている。今回の調査ではこの地が「保寿院」であったかどうかを示す発見は得られなかったが、多数回に渡って丁寧な地業がなされている事や、礎石が多く発見された事はこの地点の特徴と捉えることができ、今後の調査研究に多少なりとも方向性を持たせる成果と言えよう。

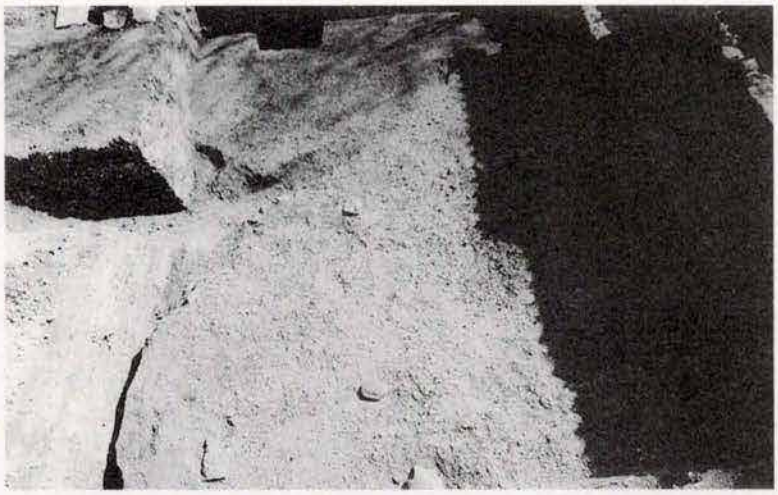
〈参考文献〉
『鎌倉事典』　白井永二編　東京堂出版　平成4年

図版 1

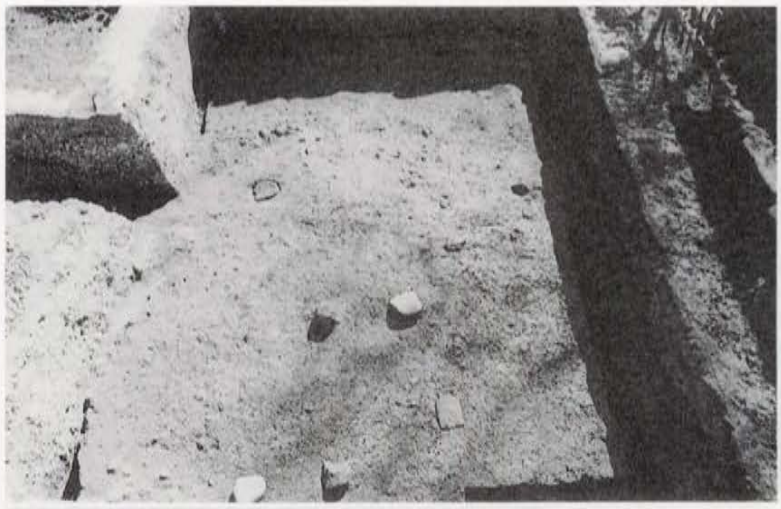


◀ A. 1 面全景（北より）

2 面全景（北より）B. ▶

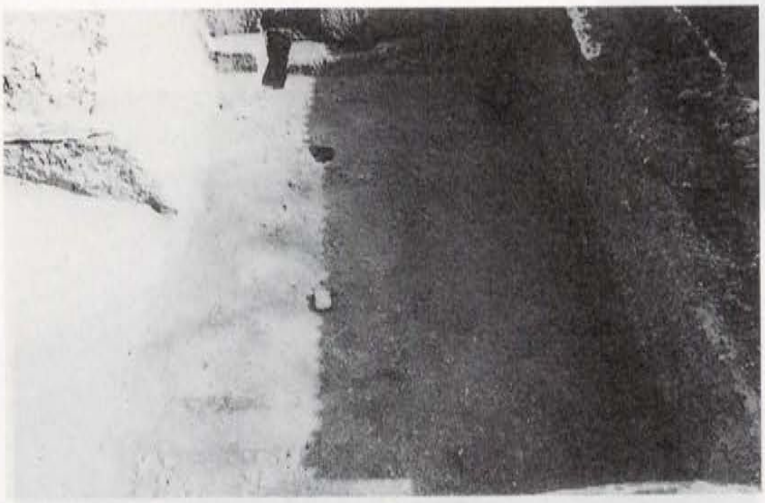


◀ C. 3 面全景（北より）



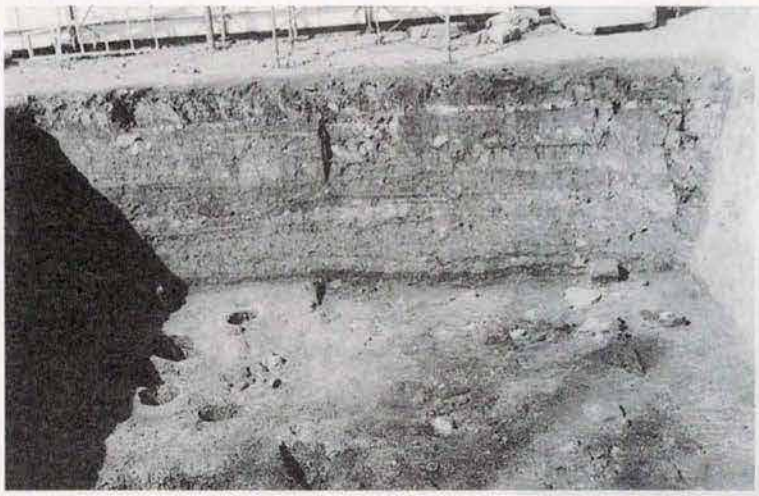
▲A. 4面全景（北より）

▲B. 5面全景（北より）



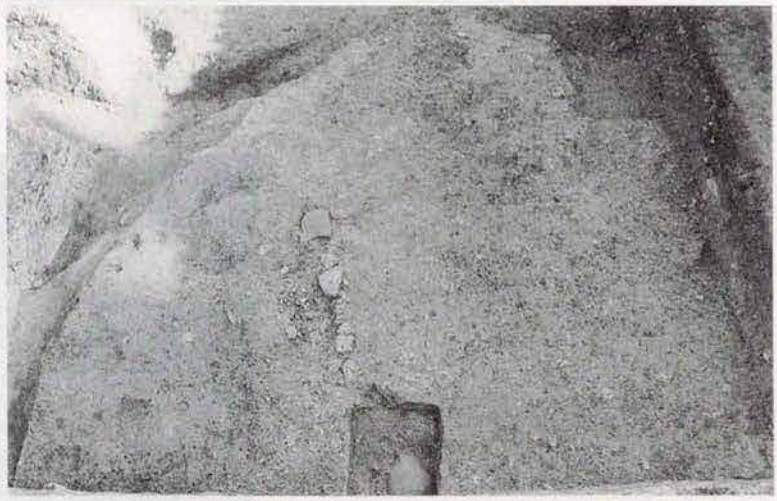
▲C. 6面全景（北より）

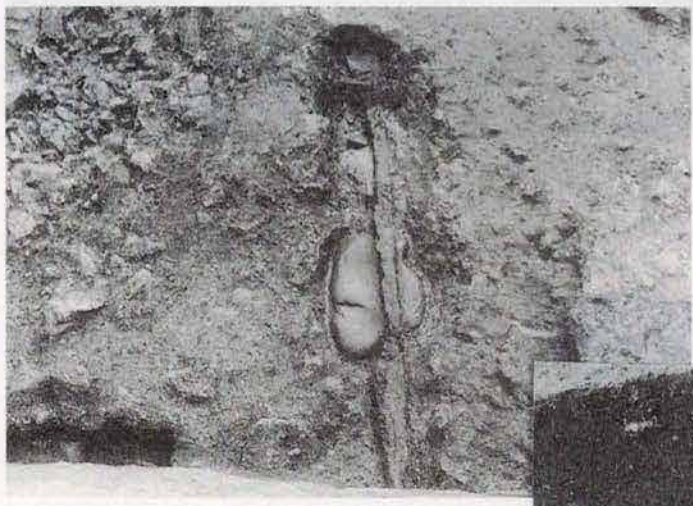
図版 3



◀ A. 7 面全景（南より）

建物 1（南より）B. ▶





◀ C. 建物 1 礎石（南より）

建物 1 西部 D. ▶

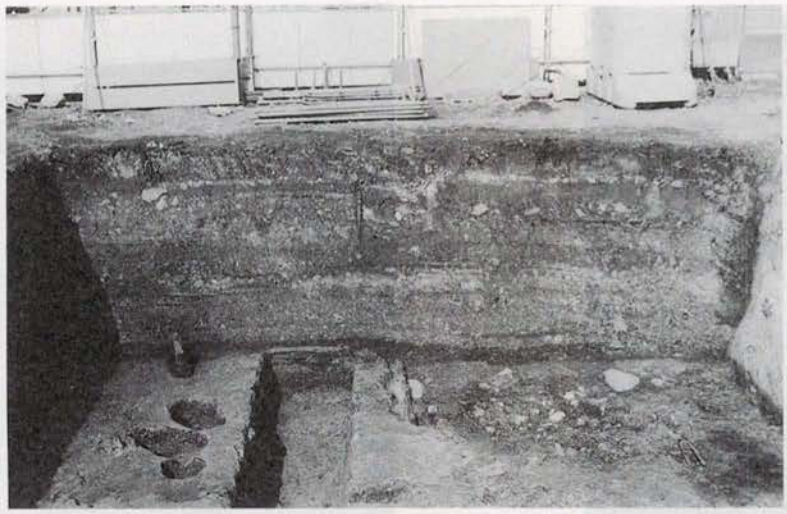
▲A. 8面全景（南より）

▲B. 8面 北部

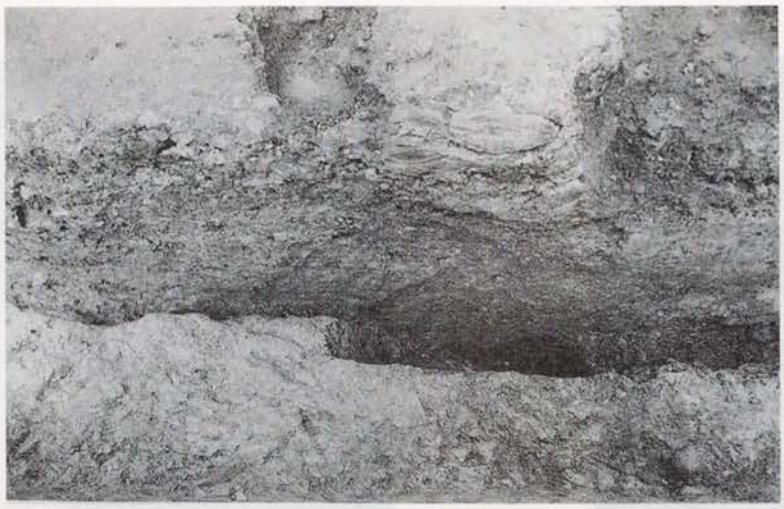
▲C. 9面全景（北より）

▲D. 10面全景（南より）

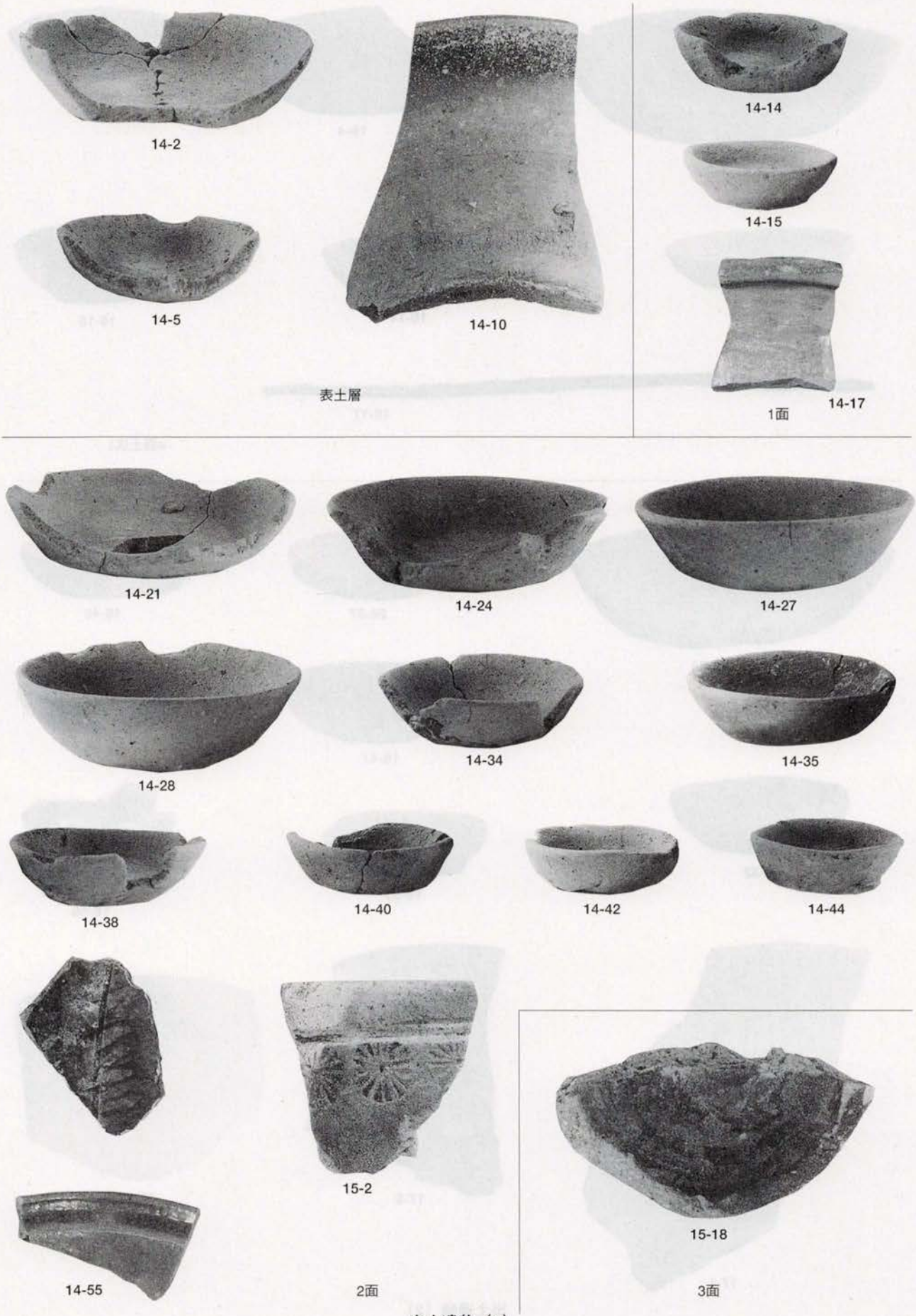
図版 5



▲A. 調査区北壁セクション（9面まで）



▲B. トレンチ東壁セクション（9面～10面まで）


14-2
14-5
14-10
表土層
14-14
14-15
14-17
1面
14-21
14-24
14-27
14-28
14-34
14-35
14-38
14-40
14-42
14-44
15-2
14-55
2面
15-18
3面

出土遺物（1）

図版 7

16-1

16-4

16-10

16-11

16-14

16-15

16-17

4面土坑1

16-24

26-37

16-46

16-47

16-48

16-52

16-53

16-55

17-1

17-9

17-13

4面

出土遺物（2）

18-1

18-15

18-24

18-34

18-30

18-35

5面炭層

19-1

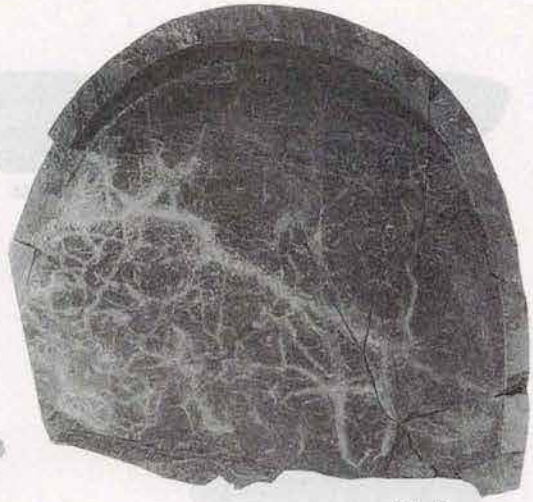
19-13

19-29

19-2

19-16

19-17


5面

19-43

19-3

19-20

20-1

6面井戸1

20-6

20-7

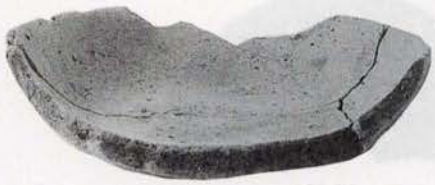
20-8

出土遺物（3）

図版 9

20-15

20-18



20-20

20-21

20-25

20-28

20-32

20-34

20-43

20-45

20-57

20-60

21-1

6面

21-3

出土遺物（4）

22-5

22-9

22-14

22-15

22-22

22-23

22-24

22-26

22-30

22-31

22-38

22-39

22-45

22-58

22-60

22-64

22-69

22-72

22-74

22-75

22-76

22-83

22-84

7面

出土遺物（5）

図版11

23-8

23-16

23-31

23-33

23-34

7面

24-3

24-4

8面

24-8

出土遺物（6）

円覚寺門前遺跡（えんかくじもんぜんいせき）　(No.287)

山ノ内松岡1377番６地点

例　言

1. 本報は、円覚寺門前遺跡（No.287）内に所在する鎌倉市山ノ内字松岡1377番６地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、平成16年１月20日～同年３月13日にかけて、鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は49.30㎡である。
3. 現地での調査体制は、以下の通りである。
   担　当　者：浜野浩美
   調　査　員：伊丹まどか、八重畑ちか子
   調査補助員：松原康子、岩崎卓治、須佐仁和、栂岡渓音
   調査作業員：秋田公祐、足達越郎、牛島道夫、大戸迫　猛、藤枝正義、渡辺輝彦、沼上三代治（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 遺構図面合成・トレース、遺物実測・トレース、出土遺物写真撮影、版下作成および報告書作成は、宗基秀明と宗基富貴子が行った（現地での遺構写真撮影は伊丹まどかが行った）。
5. 本文中に掲げた挿図は、基本的に遺構を１/60、出土遺物を１/３で示した。これ以外の縮尺を含めて、各挿図には縮尺率を示した。
6. ここに掲げた挿図、写真を含む埋蔵文化財発掘に関わる出土品等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本文目次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境…… 145

第２章　調査の概要…… 146
　第１節　調査の経緯…… 146
　第２節　測量基準点の設置…… 146
　第３節　堆積土層と発見された生活面 …… 147

第３章　発見された遺構と遺物…… 149
　第１節　第４面…… 149
　第２節　第３面…… 149
　第３節　第２面…… 151
　第４節　第１面…… 154

第４章　まとめ…… 162

挿図目次

図１　調査地点位置図…… 144
図２　調査区設定図 …… 146
図３　第４面全測図と土層図 …… 148
図４　第４面遺構出土遺物…… 149
図５　第３面全測図 …… 150
図６　第３面遺構出土遺物…… 150
図７　第３面下出土遺物 …… 150
図８　第２面全測図 …… 151
図９　第２面井戸２…… 152
図10　第２面遺構出土遺物…… 153
図11　第２面下出土遺物 …… 153
図12　第１面全測図 …… 154
図13　第１面遺構出土遺物…… 155
図14　第１面下出土遺物 …… 156
図15　第１面上出土遺物 …… 157
図16　撹乱壙出土遺物…… 158

表目次

１　遺物観察表（1）～（3）…… 159

写真図版目次

図版１　Ⅱ区第４面全景　第３面全景　第１面全景· 163
図版２　第１面井戸１　第２面井戸２
　　井戸２枠内近景　井戸２枠内出土曲物…… 164
図版３　出土遺物　かわらけ　香炉　土鍋　瓦…… 165
図版４　出土遺物　火鉢　常滑窯製品
　　瀬戸窯製品…… 166
図版５　出土遺物　搬入磁器　木製品　銭…… 167

図１　調査地点位置図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡は、鎌倉の旧市内から小袋坂を北へ超えたJR横須賀線北鎌倉駅の西方一帯を指す。JR北鎌倉駅は、弘安五（1282）年に無学祖元を開山とし、北条時宗が創建した瑞鹿山円覚興聖禅寺（円覚寺）の境内西端にある。北鎌倉駅のすぐ南方には、円覚寺総門前の白鷺池がある。この白鷺池は貞治二（1363）年以前、おそらくは鎌倉末期頃に作成された円覚寺境内絵図に、形こそ異なるものの描かれている。絵図によれば、白鷺池の西方前面を鎌倉から武蔵へと向かう山ノ内道が南北に延びる。この円覚寺門前を抜ける山ノ内道に対して、総門前面から白鷺池を取り囲みつつ、山ノ内道を西方へと越えて囲い込んだ下馬門とされる木戸が設けられている。円覚寺参詣者は、この下馬門より徒にて境内へと進む。他方、騎乗にて山ノ内道を進むには、下馬門を西に迂回する馬道を通ることになる。貞治二年以前の絵図は円覚寺の寺域を定めたものだが、寺域と隣接地との境に記入された上杉重能の花押は、馬道を越えた西方の丘陵地に捺されている。鎌倉末期の円覚寺は、山ノ内道のはるか西方にまで広がっていたことがわかる。当時の円覚寺の寺域はかなり広かった。

こうした円覚寺一帯を現在の埋蔵文化財行政では、山ノ内道を下敷きにしたと考えれている円覚寺白鷺池前を通る県道横浜鎌倉線の東方を円覚寺旧境内遺跡として、県道より西方を円覚寺門前遺跡とする。これは、鎌倉末期に描かれたと思われる円覚寺境内絵図とは多少異なるが、絵図の山ノ内道西方に描かれている町屋らしき地域を門前町と捉えることによる。

今回調査を行った地点は円覚寺寺域の北端、十王堂から西方へと入り込む谷戸の出口付近で、円覚寺境内絵図では町屋の描き込まれている地点に相当する。

今回の調査地点の周囲では、これまでに主に３地点で発掘調査が行われている（図１）。挿図１中の１番地点（円覚寺旧境内遺跡、山ノ内瑞鹿山509番１）では、13世紀後半から末までの火災面が４枚発見され、出土遺物の多くは火災面に挟まれた３つの層から出土している。出土遺物の年代観と円覚寺年譜を参考として、発掘報告書は火災面を弘安四（1281）年、弘安五（1282）年、弘安十（1287）年、正応三（1290）年としている。ただ、円覚寺の火災はこの後も正和五（1316）年、文保二（1318）年、応安六（1373）年と続いているので、発見された４つの火災面が弘安四年から正応三年までの可能性は高いが、断定することはできない。年代比定根拠の一つとなった資料が最上層火災面上から出土した常滑の甕であったため、甕の長期間使用を想定すれば、発見された最後の火災層が正和五年である可能性も残されている。こうした留保を残しつつも調査成果は、弘安元（1278）年の円覚寺の選地と起工以前の調査地周辺は、水田面の広がる地域であり、境内絵図は弘安十年もしくは正応三年の火災の後に描かれたものであろうとしている。

挿図１中の２番は、現在の馬道と県道との間に、石組みで土塁状に残されている高まりで行われた遺構確認調査地点である。2001年11月より2002年３月にかけて土塁に縦長の坑を幾本も掘って、土塁の構築年代と下馬門との関連を探った。その結果は、公表されていないが、調査途上に実見したかぎりでは、この土塁は中世まで遡るものではなさそうで、近世後期以前の土層は平坦であったと見うけられた。また、調査されたかぎりでの土層中に下馬門を想定させる遺構もなかったようだ。円覚寺門前町図の山ノ内道と馬道の間に記入された築地も確認調査の対象となったような土塁ではなかったのであろう。また、同図の馬道と山ノ内道が北側で交わる位置に描かれた石塔は、現在も調査地点南方のやはり県道と馬道の合流地点に位置している。

他方、挿図１中の３番、山ノ内字松岡1344番地点では、山ノ内道に接する直前の中世馬道が発見さ

れた。そして、当時は馬道に伴う土塁のなかったことが確認された。

菊川英政　1997「円覚寺旧境内遺跡（No.434）山ノ内字瑞鹿山509番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成９年度発掘調査報告』第１分冊、317～410頁。
宗臺秀明・宗臺富貴子　2005「円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字松岡1344番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告』第２分冊、343～419頁。
滝沢晶子　2007「円覚寺門前遺跡（No. 287）山ノ内字松岡1377番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　平成18年度発掘調査報告』第１分冊。

第２章　調査の概要

第１節　調査の経緯

調査地点となった鎌倉市山ノ内字松岡1377番６地点における個人専用住宅の新築にともない、鎌倉市教育委員会は同地が円覚寺門前遺跡となっていることを前提に、平成16年11月18～19日にかけて建築予定範囲内の地下に埋蔵文化財の有無とその深さを明らかにする確認調査を実施した。その結果、現地表下45㎝以下から175㎝までに３枚の中世生活面を確認した。鎌倉市教育委員会は、当該建築工事で中世遺構が壊されるとの認識に基づいて、建設工事に先立って建設予定地内での埋蔵文化財発掘調査が必要とし、浜野浩美を担当者として、鎌倉市教育委員会が翌平成16年１月20日から３月13日にかけて現地での発掘調査を実施した。

調査は、建築予定範囲全域を対象としたが、発掘による土置場確保のために調査範囲を第Ⅰ区と第Ⅱ区に二分し、北側の第Ⅰ区より調査を始めた。

確認調査の結果を参考に本調査では、上層より下層に向けて順次調査を行なっが、確認調査より多い４枚の生活面を確認し、調査した。しかし思いの外、現地表土が厚く、また部分的に深くまで入り込んでおり、最上層の第１面は本来の状態を失っていた。また、発掘で発見された生活面は、東から西に向けて傾斜ないしは段を作り、平坦なものではなかった。

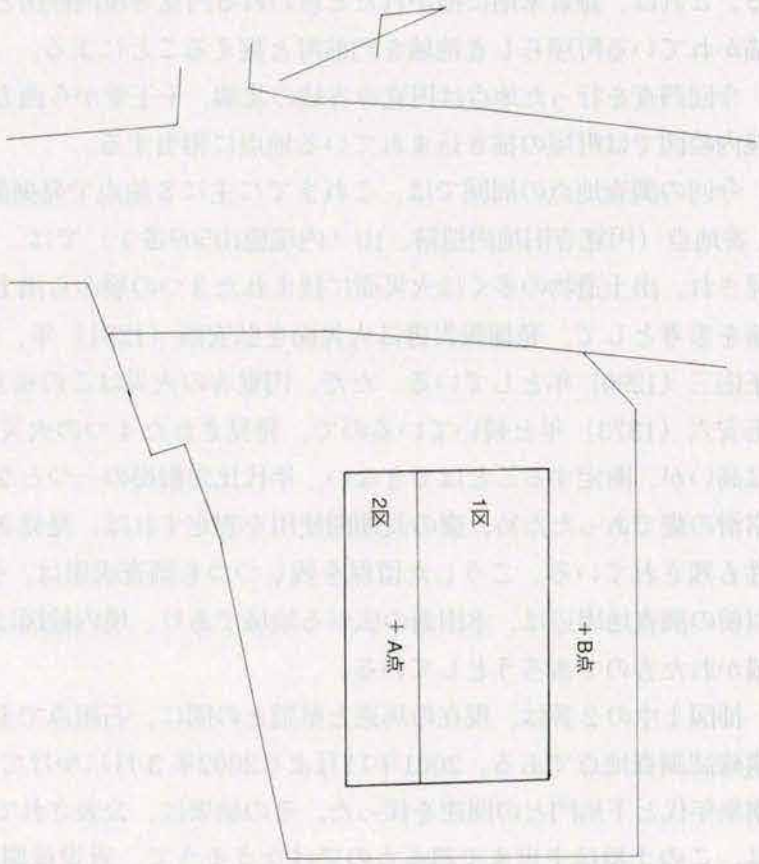


図２　調査区設定図

第２節　測量基準点の設置（図２）

発掘調査で発見された遺構を国土座標に位置づけるため、測量基準点を調査地点内に移動させ、それを用いて、発見された遺構や調査範囲を随時記録した。調査地点に設けた基準点は調査区の中央にA

点、第Ⅰ区の北外にB点を設けた。設置した基準点の国土座標値は、次のとおりである。基準杭A点 X：−73831,695　Y：−26042,222　B点はこれから108°15′50″で5ｍの距離に位置する。

第３節　堆積土層と発見された生活面（図3）

以下は、調査地点に設定された調査区の南北の壁に観察できた土層堆積状況である。調査区に観察できた各土層は、粘質土と砂粒や砂質泥岩礫を交えた砂質土を基調とする。このうち、現地表下80㎝の湧水位より下方に残る還元した青灰色土の他は、泥岩礫の黄褐色を呈する。

生活面が初めて築かれた第４面は、腐植土を交える黒褐色の砂混じり粘質土の第２層の上面が利用されている。より下層の第１層は、砂と粘質土が交互に薄く堆積する青灰色砂質土である。この第１層と第２層は自然堆積層と考えられるが、砂と粘土が交互に堆積しながら全体に砂分が多い土質は、河川の氾濫堆積土と思われる。現在、調査地の北方で東西流する西瓜川と南北流する小袋川が合流しているが、これらの河川で運ばれた土砂が当地の地盤と地形を形成したと考えられる。第２層上面の海抜高は、南東の18.85ｍから北西の18.42ｍへと緩やかに下る。

第４面の上に堆積する泥岩粒子と炭化物を多く交えて堅く絞まる暗褐色弱粘質土の第３層から第４層が、第３面を構成する。第４層の方が炭化物を多めに混入する。生活面の海抜高は、やはり南東が19.05ｍと最も高く、北西の18.9ｍに向けて緩やかに下る。

第３面上の第５層と第６層が第２面を構成する。下層の第５層は泥岩粒子を交える暗褐色粘質土で、その上に泥岩粒子を交える砂質土の第６層が堅く地業される。第２面の海抜高は南東の19.2ｍから緩やかに北西に向けてけ下るが、調査区のほぼ中ほどから北西部は第１面からの掘り込みで壊されて本来の生活面を失っている。

第２面上に堆積する第７～第９層が第１面を構成する。下層の土ほど粘性の強い泥岩粒子と炭化物を交える土層で、第９層では堅く絞まった砂質土になる。また、調査区の北西部が広範囲に深さ30㎝ほどに掘り込まれて、そこに泥岩小礫を交えた砂質土が堅く版築されている（第10～12層）。版築の上面からは第１面の柱穴が掘り込まれているため、この版築は道路などではなくて建物の三和土であった可能性がある。第1面の海抜高は19.65ｍ前後と思われるが、調査区西部から北部が近現代の掘り込みで大きく壊されていて、その付近では不明となっている。

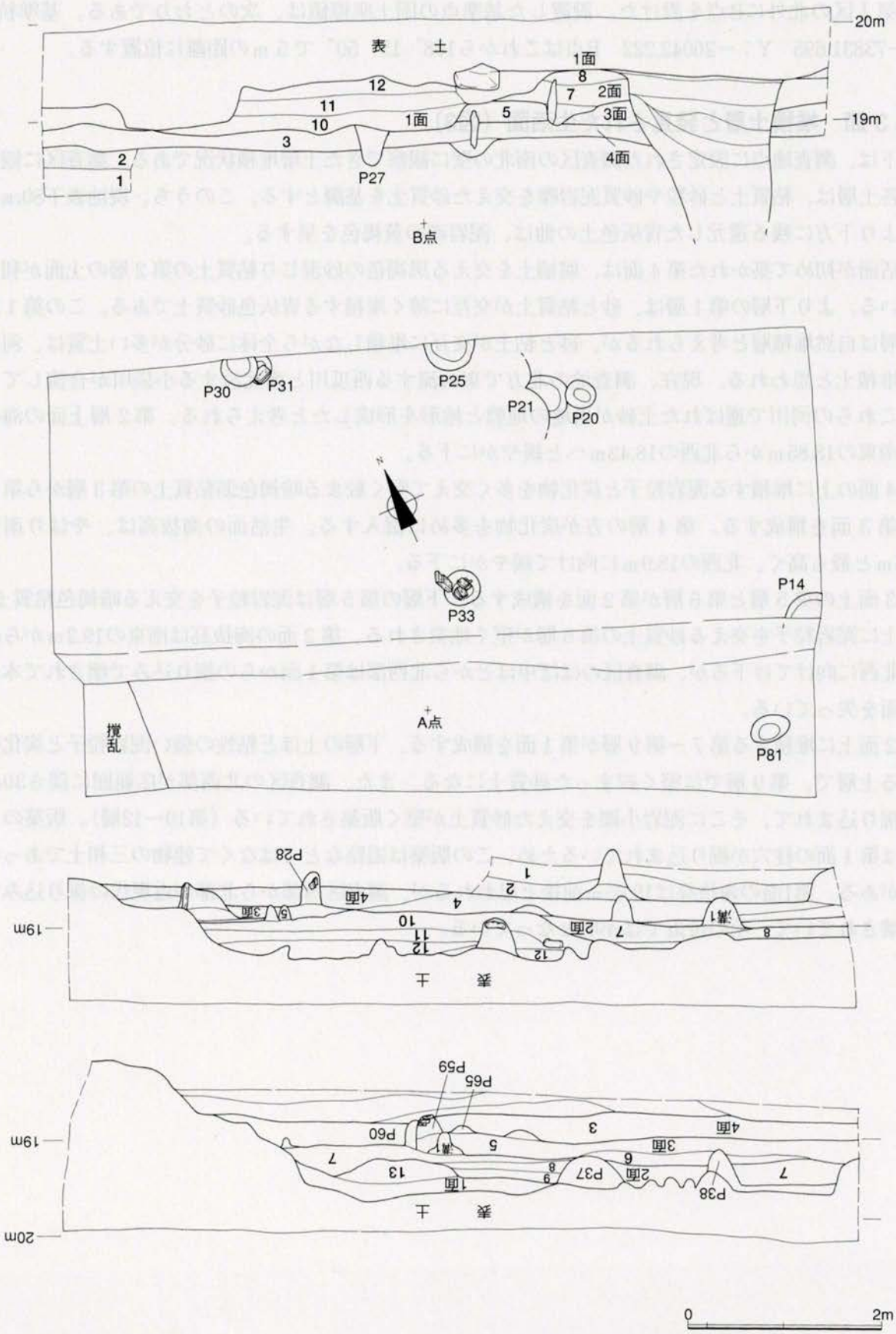


図３　第４面全測図と土層図

第３章　発見された遺構と遺物

以下には、調査で発見された遺構と遺物を下層の第4面から上層の生活面へと向けて順次記述する。

第１節　第４面

最下面の第４面に８口のピットを確認したが、その内の２口に礎板の遺存を確認した。ピット30ないし31と25、それに33が直角に位置するが、これだけの数からの柱並びを確定できない。各ピットの底面海抜は、ピット30が18.554ｍ、ピット31の礎板上面が18.626ｍ、ピット25が18.652ｍ、ピット21が18.698ｍ、ピット20が18.694ｍ、ピット14が18.644ｍ、ピット33の礎板上が18.674ｍ、ピット81が18.664ｍであった。

ピット31出土遺物（図４－１）

図４－１は平瓦。凹面は砂目痕、凸面は格子目叩き痕が残る。

ピット21出土遺物（図４－２）

図４－２は「元豊通寶」。錆や摩滅が少なく、銭名が明瞭に残る。

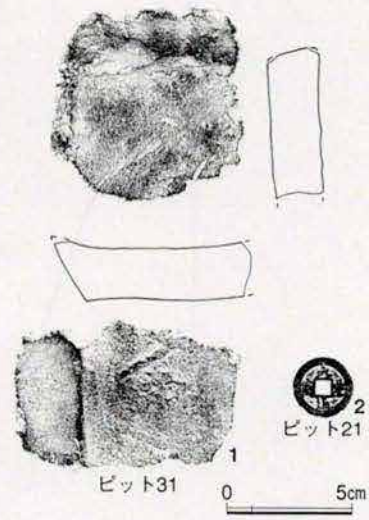


図４　第４面遺構出土遺物

第２節　第３面

第３面でも礎板を設置した数多くの柱穴を発見した。その他に、柱穴を確認できずに礎板だけを発見した例もある。また、楕円形の土壙も発見したが、切り合った複数の柱穴を一度に掘り上げてしまった可能性が残る。これら遺構の多くを発見した地域は調査区の東半分で、生活面の下がっているまたは上層生活面に壊されている西側では遺構をほとんど確認できなかった。

礎板や柱穴群の中に建物を復元できる並びを確認できないが、それでもいくつかの並びを想定し、挿図上に破線と一点破線で示した。各柱間は190㎝から200㎝を測るものの、その並びは調査区内に３口までしか認めることができない。そのため、あくまで想定として示した。また、破線と一点破線で示した並びは互いにその並び方位が異なっている。一点破線で示したピット22または23・19・58の並びは、N－20°－E、破線のピット22または23・16・63と礎板はN－8°－Eである。

柱並びを想定した柱穴の礎板上面の海抜高は、以下の通りである。ピット22が18.714ｍ、ピット23が18.799ｍ、ピット19が18.814ｍ、ピット58が18.844ｍ、ピット16が18.844ｍ、ピット63が18.974ｍ、ピット101が18.80ｍ、ピット65が18.774ｍである。

柱穴の底面や礎板上面の海抜高は、ほぼ一定の18.80～18.85ｍに揃っている。建物の可能性は高いであろうが、上述のように確定できない。

調査区中央南端に位置する不正楕円形の土壙57は、深さ7㎝の浅い窪みである。土壙内には特徴的な覆土堆積を特に認められず、傾斜する生活面での互層堆積を誤って掘り上げたと思われる。南に接する深さ11㎝の矩形の窪みも同様である。

ピット19出土遺物（図６－１）

図６－１はかわらけ。背低で、内底面が広く、器壁は内弯しながら直立するように立ち上がる。

ピット77出土遺物（図６－２）

図６－２はかわらけ。背低で、内底面が広く、薄い器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部下よりわず

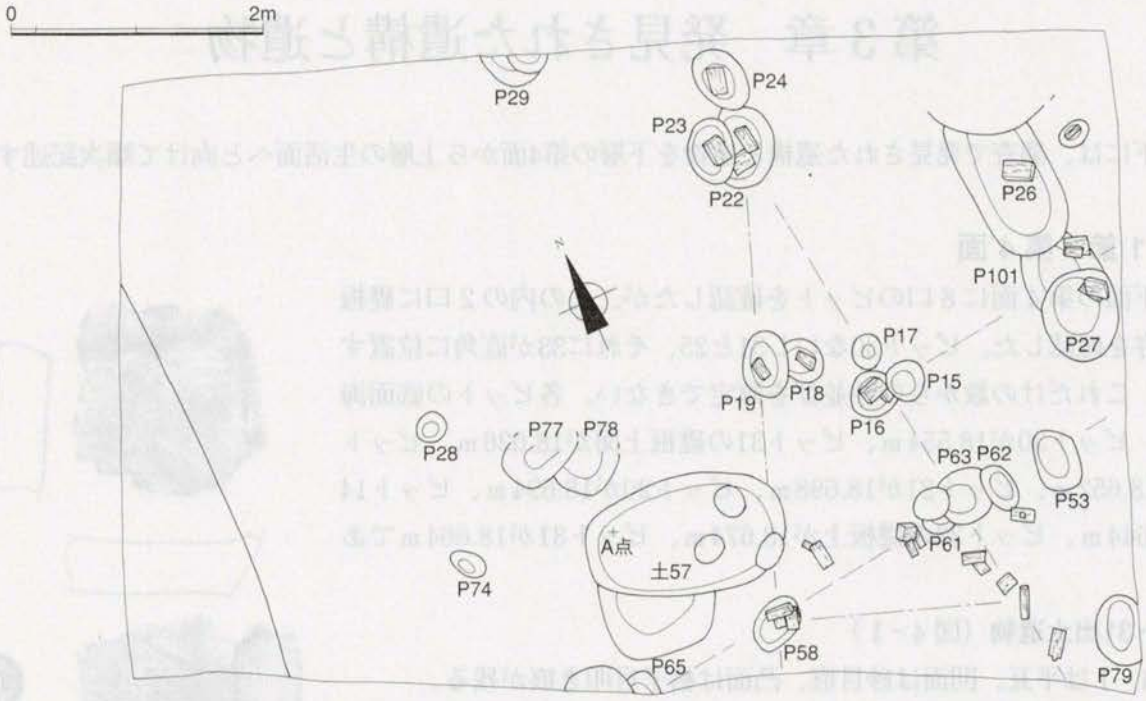


図５　第３面全測図

かに外反する。

ピット63出土遺物（図６－３）

図６－３はかわらけ。背高で、側面観碗型を呈するが、器壁は厚めである。

ピット53出土遺物（図６－４）

図６－４は白磁口兀皿。内外面ともに使用によるキズがわずかに残る。また、口縁部付近には煤が付着する。

土壙57出土遺物（図６－５）

図６－５は13世紀後半から14世紀初頭の瀬戸灰釉花瓶である。破損断面には漆継ぎによる補修痕が見られる。

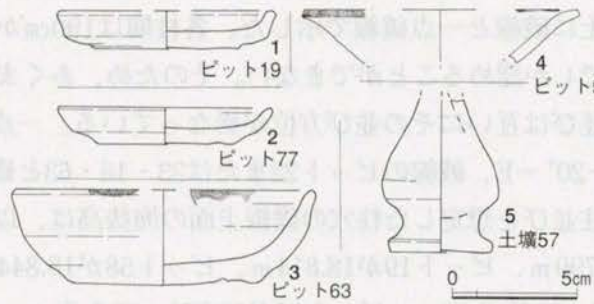


図６　第３面遺構出土遺物

第３面下出土遺物（図7）

図７－１～２はかわらけ。１は背低で、薄めの器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部下よりわずかに外反する。２は背高で、器壁は薄く、側面観碗型を呈する。３は13世紀初頭の常滑片口鉢Ⅱ類である。体部内面中より下方は使用による摩滅痕が残る。４は漆椀。復元口径は17.4㎝であったが、歪みもあり不安である。体部内外面ともに黒色漆を塗った後、赤色漆により24弁と16弁の菊花スタンプ文と手描きによる不明文で施文される。

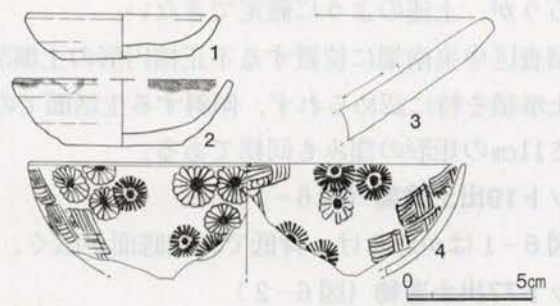


図７　第３面下出土遺物

第３節　第２面

大きく傾斜する第１面に壊されて、調査区北西部の遺構の大方が失われている。発見された遺構の多くは調査区の南部に位置する。発見された遺構は溝が１条に井戸が１基、それに礎板を備えた柱穴と礎板の確認できないピット15口と礎板のみを確認したのが3ヶある。また、溝１は調査区の南東部を北東から南西へと斜めに位置している。調査区を設定した地域の生活領域の方向性を示しているかもしれない。破線で示した第3面の柱穴並びとその方向性が類似する。

溝１

北東から南西へと下る傾斜を示すが、それの高低差はわずかである。調査区北東端で19.344ｍ、調査区南端で19.294ｍで、どちらの方向に排水が行われたのか定かではない。溝幅は一定せず、50㎝から28㎝で、やや蛇行しながら北東から南西へ向けて細くなる。溝の深さは、調査区南壁の堆積土層で26㎝を確認できる。覆土は黒褐色の弱粘質土で、埋没中の水流で運ばれた鉄分の沈着を示す褐鉄が見られる。

溝１出土遺物（図10-12）

図10-12は15世紀前半の常滑片口鉢Ⅱ類である。口縁部下は幅の狭い強い横ナデにより調整される。体部内面中位より下方には使用による摩滅痕が残る。

井戸2

調査区の北西に発見された井戸である。この付近は段差を持つ上層の第１面の掘り下げで、本来の第２面が失われたが、深くまで掘り込まれた井戸跡は壊されずに残っていた。

確認できた掘り込み位置は海抜18.75ｍで、そこから下方へ162㎝までの掘り方を残していた。掘り方は南北184㎝、東西198㎝のほぼ矩形の掘り込みに、南北171㎝、東西121㎝のやはり矩形の底面をもつ。この掘り方内に、底面から22㎝上方に下端を設置する外法で一辺98㎝の木製井戸枠を設置している。井戸枠は、側板のほかに下端と支柱を一部残す隅柱式と思われる。四隅の隅柱にほぞで等間隔に枠組みを

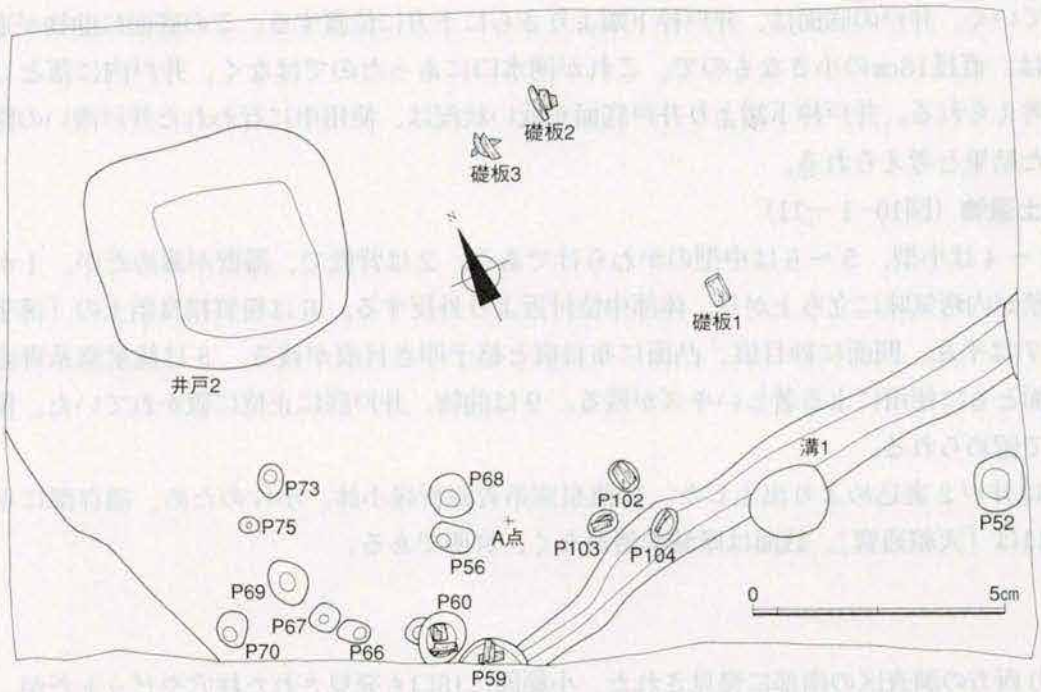


図８　第２面全測図

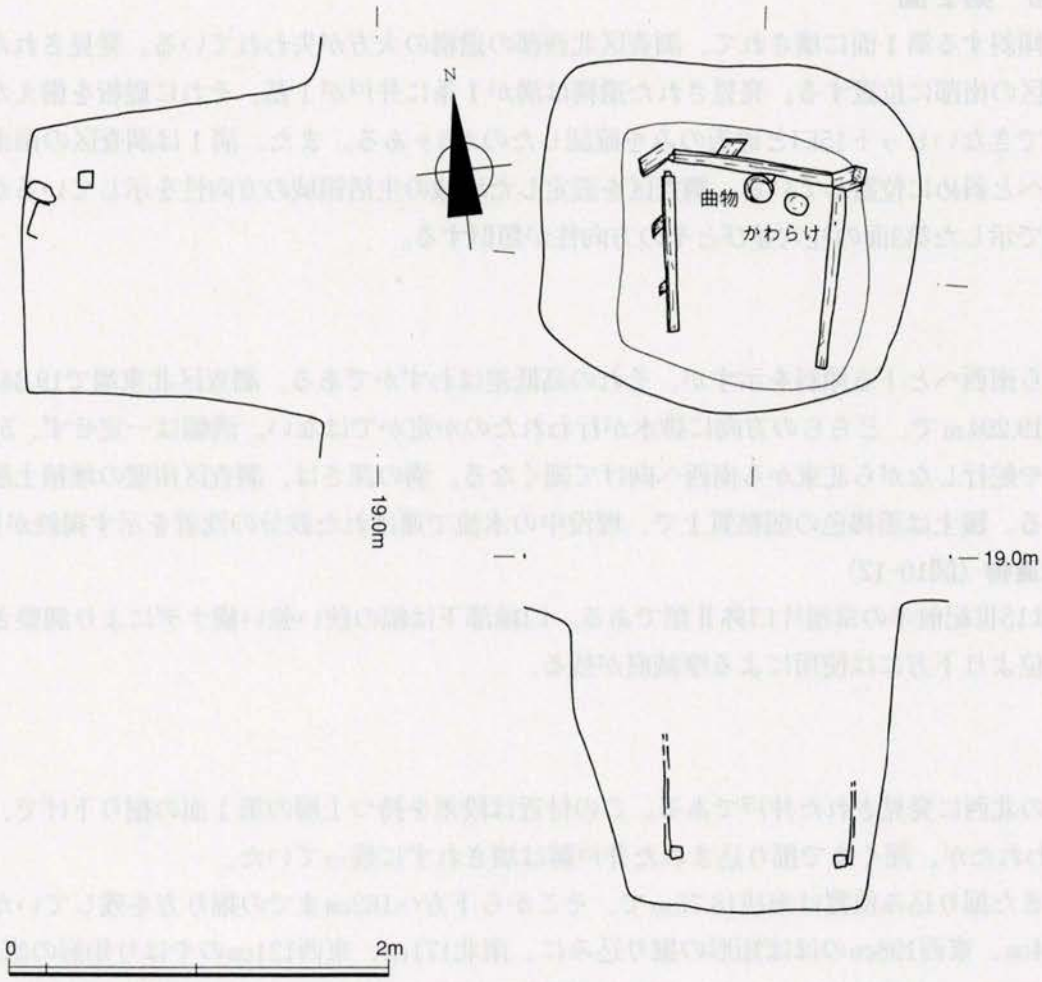


図9　第2面井戸2

組み上げていく。井戸の底面は、井戸枠下端よりさらに下方に位置する。この底面に曲物が遺存していた。曲物は、直径18㎝の小さなもので、これが湧水口にあったのではなく、井戸内に落としてしまったものと考えられる。井戸枠下端より井戸底面が低い状況は、使用中に行われた井戸浚いの際に枠内を掘り下げた結果と考えられる。

井戸2出土遺物（図10-1～11）

図10-1～4は小型、5～6は中型のかわらけである。2は背低で、器壁が薄めだが、1から5はいずれも器壁が内弯気味に立ち上がり、体部中位付近より外反する。6は粉質精良胎土の「薄手丸深」型である。7は平瓦。凹面に砂目痕、凸面に布目痕と格子叩き目痕が残る。8は龍泉窯系青磁劃花文皿か。内外面ともに使用による著しいキズが残る。9は曲物。井戸底に正位に置かれていた。側板は二重で、桜皮で留められる。

10～11は井戸2裏込めより出土した。10龍泉窯系青磁折縁小鉢。小片のため、遺存部にキズは見られない。11は「天禧通寶」。銭面は摩滅や錆がなく、鮮明である。

柱穴群

溝1より西方の調査区の南部に発見された。小範囲に15口も発見された柱穴やピットだが、建物の柱並びを想定できない。掘り込み内部に礎板の設置された柱穴の礎板上海抜高は、ピット59が18.884m、

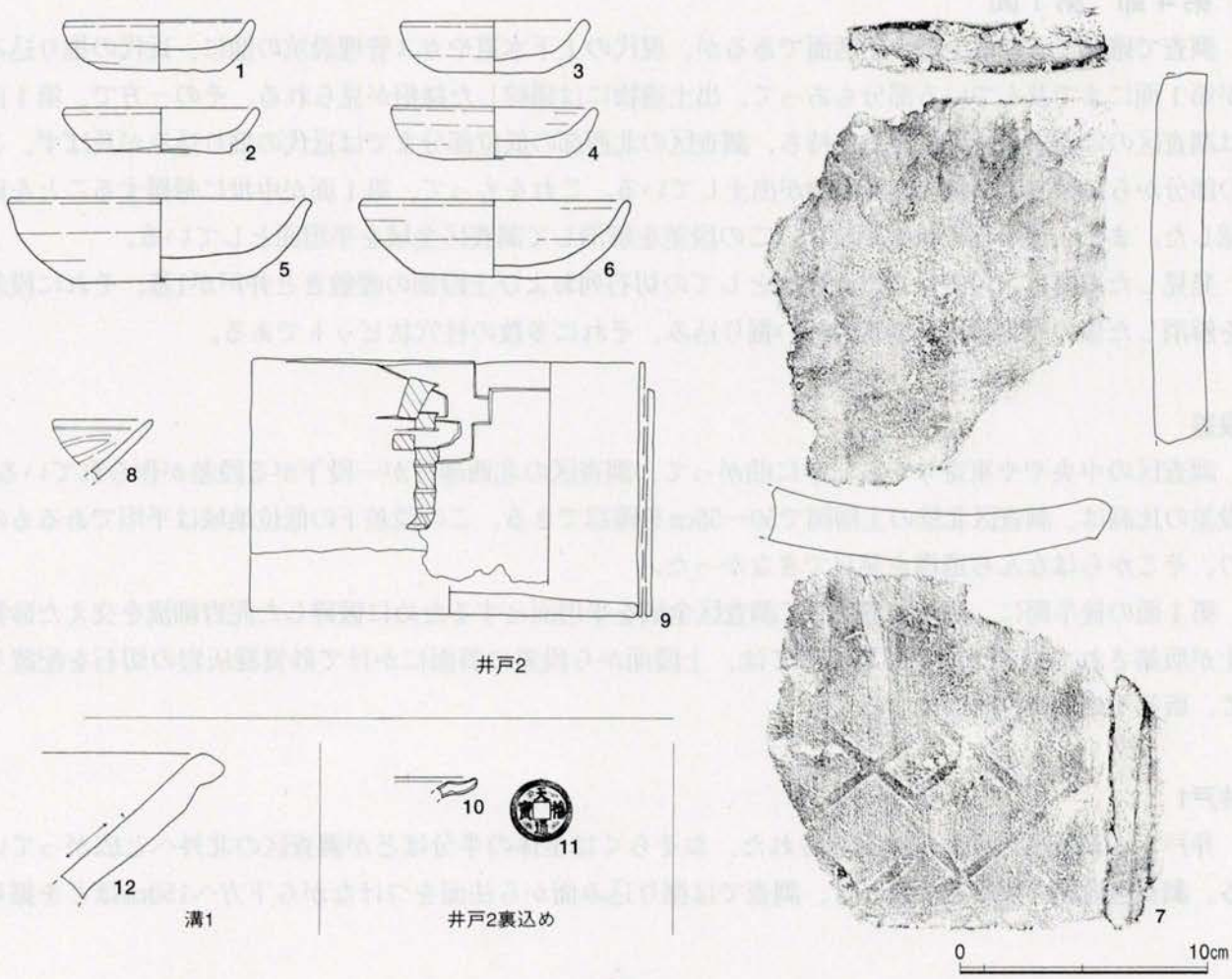


図10　第２面遺構出土遺物

ピット60が18.994ｍ、ピット102が19.054ｍ、ピット103が19.04ｍ、ピット104が同じく19.04ｍである。また、掘り込みを失って礎板だけが確認された礎板１の上面が19.034ｍ、同じく礎板2が18.99ｍ、礎板３が18.874ｍである。礎板3を除いては、ほぼ19ｍ前後に礎板の上面が設置されていて、同一または同時期の建物を造っていた可能性を捨てきれない。

第２面下出土遺物（図11）

図11－１は14世紀後半から15世紀初頭の瀬戸灰釉折縁深皿である。遺存部の体部外面は露胎。体部内面は刷毛塗りが薄く残る。２は白磁皿。体部外面中位より下方は露胎で飛びカンナによる調整痕が残る。内外面ともに使用によるキズは見られないが、口縁部付近に煤が付着する。また、口縁部の欠損部分にも煤が観察できることから、口縁部がわずかに破損しても継続使用されていたものであろう。３は「咸平元寶」。摩滅や錆も少なく銭名は明瞭に残る。

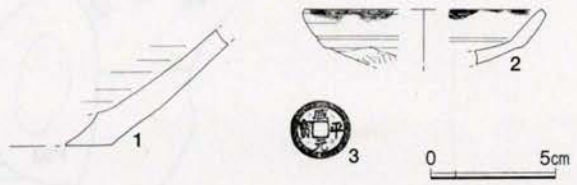


図11　第２面下出土遺物

第４節　第１面

調査で確認できた最上層の生活面であるが、現代の上下水道やガス管埋設坑の他に、近代の掘り込みが第１面にまで及んでいる部分もあって、出土遺物には錯綜した様相が見られる。その一方で、第１面は調査区のほぼ中央付近に段差を持ち、調査区の北西部の低位部分までは近代の掘り込みが及ばず、この部分からは確実に中世に遡る遺物が出土している。これをもって、第１面が中世に帰属することを確認した。また、第１面の後半期には、この段差を解消して調査区全域を平坦面としている。

発見した遺構は、段差付近の土留めとしての切石列および上段部の礫敷きと井戸が1基、それに段差を解消した後の平坦面に土壙状の浅い掘り込み、それに多数の柱穴状ピットである。

段差

調査区の中央やや東寄りからＬ字に曲がって、調査区の北西部分が一段下がる段差が作られている。段差の比高は、調査区北壁の土層図で50～55㎝を確認できる。この段差下の低位地域は平坦であるものの、そこからはなんら遺構を発見できなかった。

第１面の後半期に、段差を解消して調査区全域を平坦面とするために破砕した泥岩細流を交えた砂質土が版築されている。版築にあたっては、上段面から段差の斜面にかけて砂質凝灰岩の切石を配置して、版築土の流失を防いでいる。

井戸1

井戸１が調査区の北東隅に発見された。おそらくは全体の半分ほどが調査区の北外へと広がっている。調査区北壁の崩落を懸念して、調査では掘り込み面から法面をつけながら下方へ150㎝ほどを掘り

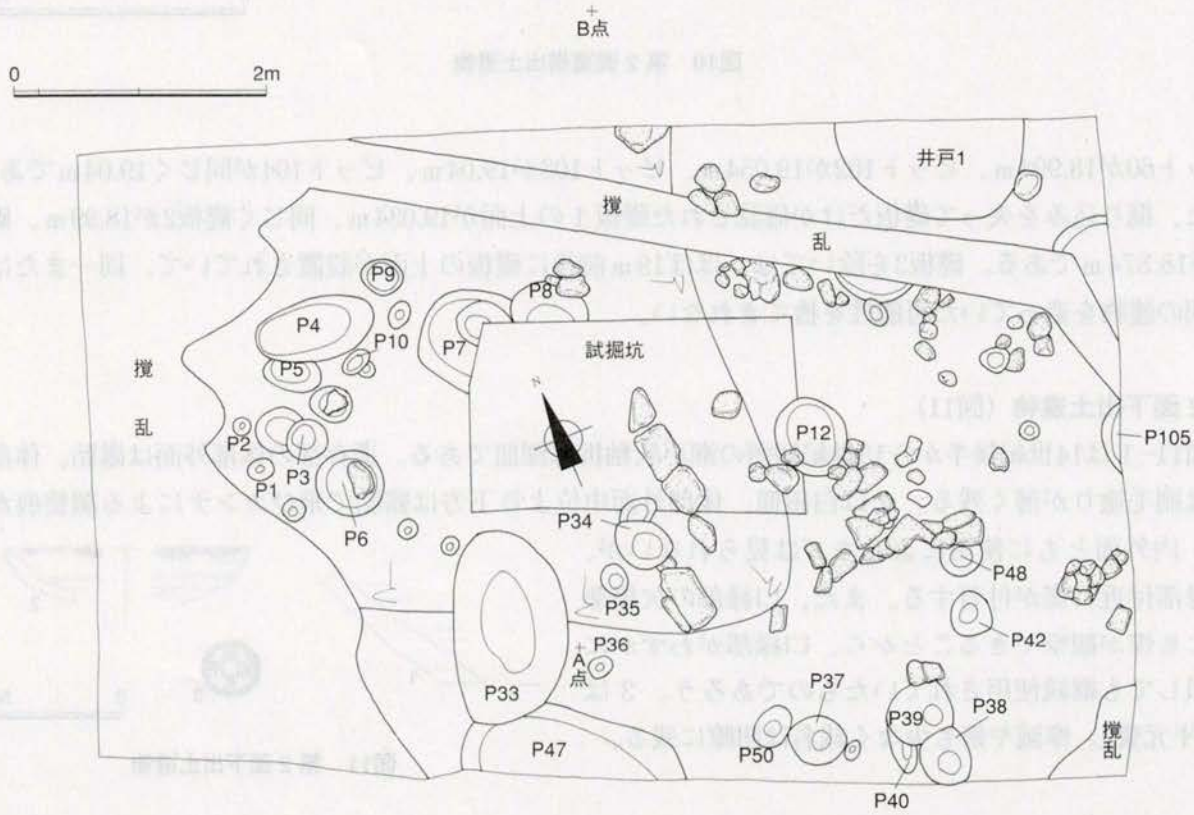


図12　第１面全測図

下げたところで以下の調査を断念した。また、法面をつけながらの掘り上げであったため、掘り込みの中央付近に残されていたであろう井戸枠も確認できなかった。調査区の北壁土層図には、井戸１の掘り方、すなわち裏込め土の堆積しか示せなかった。

井戸１出土遺物（図13-１）

図13-１は連歯下駄。全長21.3㎝、原形を大きく変えてはいないであろう遺存幅は７㎝程を測る。後ろ穴の位置も考え合わせると、一部破損後に再利用のために加工された可能性がある。上下端は小穴が穿孔され、木釘が遺存している小穴も見られるが、何のための穿孔なのかは不明である。２は15世紀末の瀬戸天目茶碗。器壁は薄く、小天目碗の可能性がある。黒色釉を施釉した後、口縁部周辺にのみ茶色を呈する鉄釉が施釉される。

柱穴・ピット群

段差を解消した第１面後半期の平坦面から、数多くのピットや底面に砂質凝灰岩を設置した柱穴を発見した。しかし、それらに建物を復元想定させる並びを認めることはできなかった。また、礎石を配置したピット６を含めて、すべてのピットの深さは15㎝に満たないものばかりで、柱を固定するには充分ではないように考えられる。これらのピットや柱穴を利用した構築物は、簡易な小屋掛けであったと思われる。

ピット12出土遺物（図13-３）

図13-３はかわらけ。背低で、器壁は直線的に大きく開きながら立ち上がる。

ピット33出土遺物（図13-４～８）

図13-４～６はかわらけ。４は背高で、口径に対して底径がとても小さく、器壁は直線的に開きながら立ち上がるが、体部中位より外反気味である。５は背高気味で、薄めの器壁は内弯しながら立ち上がり、口縁部下より大きく外反する。６は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部中位より大きく外反する。７は15世紀中頃の瀬戸鉄釉縁釉小皿である。体部外面中位より下方と体部内面下位から内底面にかけては露胎である。内底面外周に付着する焼成時の融着痕は平らにするなどの調整はなされない。８は15世紀中頃の瀬戸灰釉折縁深皿である。

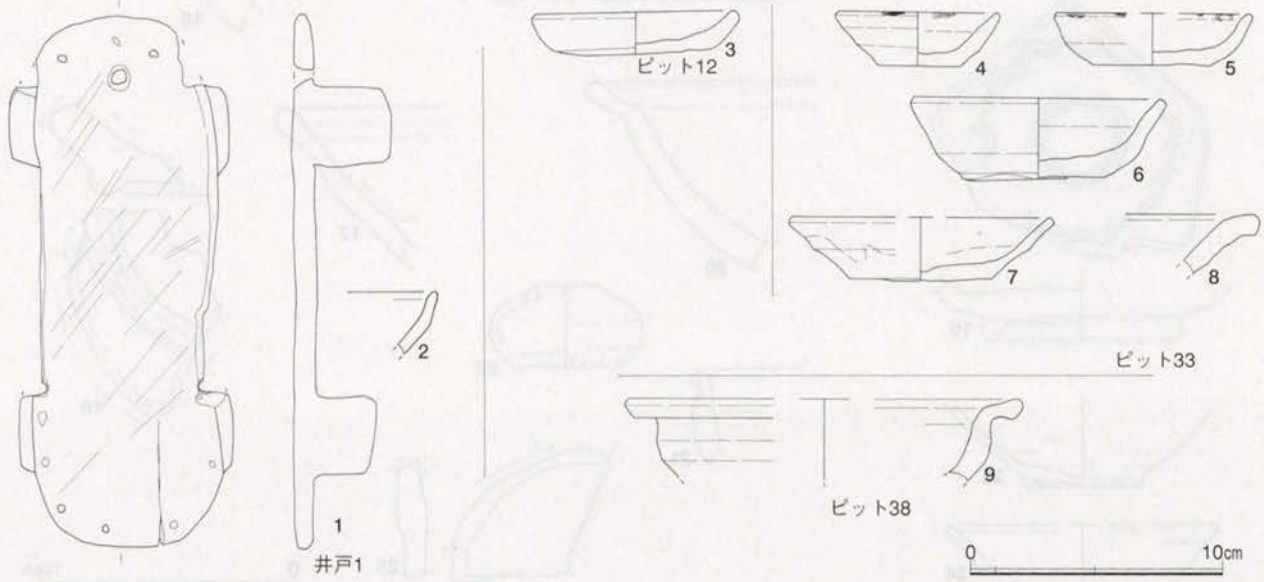


図13　第１面遺構出土遺物

ピット38出土遺物（図13-９）

図13-９は14世紀中頃の瀬戸灰釉底卸目皿か。口縁端部から体部内面上位にかけては破片の状態で火を受け、釉が剥落する。

第１面下出土遺物（図14）

図14-１～12はかわらけ。１～６と９は背高か背高気味で、薄い器壁は内弯気味に立ち上がり、体部中位付近より外反する。10と11は背高で、器壁は体部下位より大きく外反させながら立ち上がる。７～８と12は口径と底径の差が小さく、厚い器壁は直立気味に立ち上がり、体部中位付近より外反する。13は羽釜。14は14世紀後半の常滑甕。15～16は14世紀代の常滑片口鉢Ⅱ類。15は体部内面下位から内底面にかけては使用による摩滅痕が残る。16は小片のため、遺存部に使用痕は見られない。17は片口鉢Ⅰ類。体部内面中位より下方は使用による摩滅痕が残る。18は片口鉢Ⅰ類を転用した研削材である。体部内面は片口鉢として使用していた際の摩滅痕が著しく残る。右から下側面は縦と横方向の、左側面は縦方向のみの研磨痕が残る。19は14世紀前半の瀬戸灰釉高台付きの盤類か皿類である。外底面は糸切り

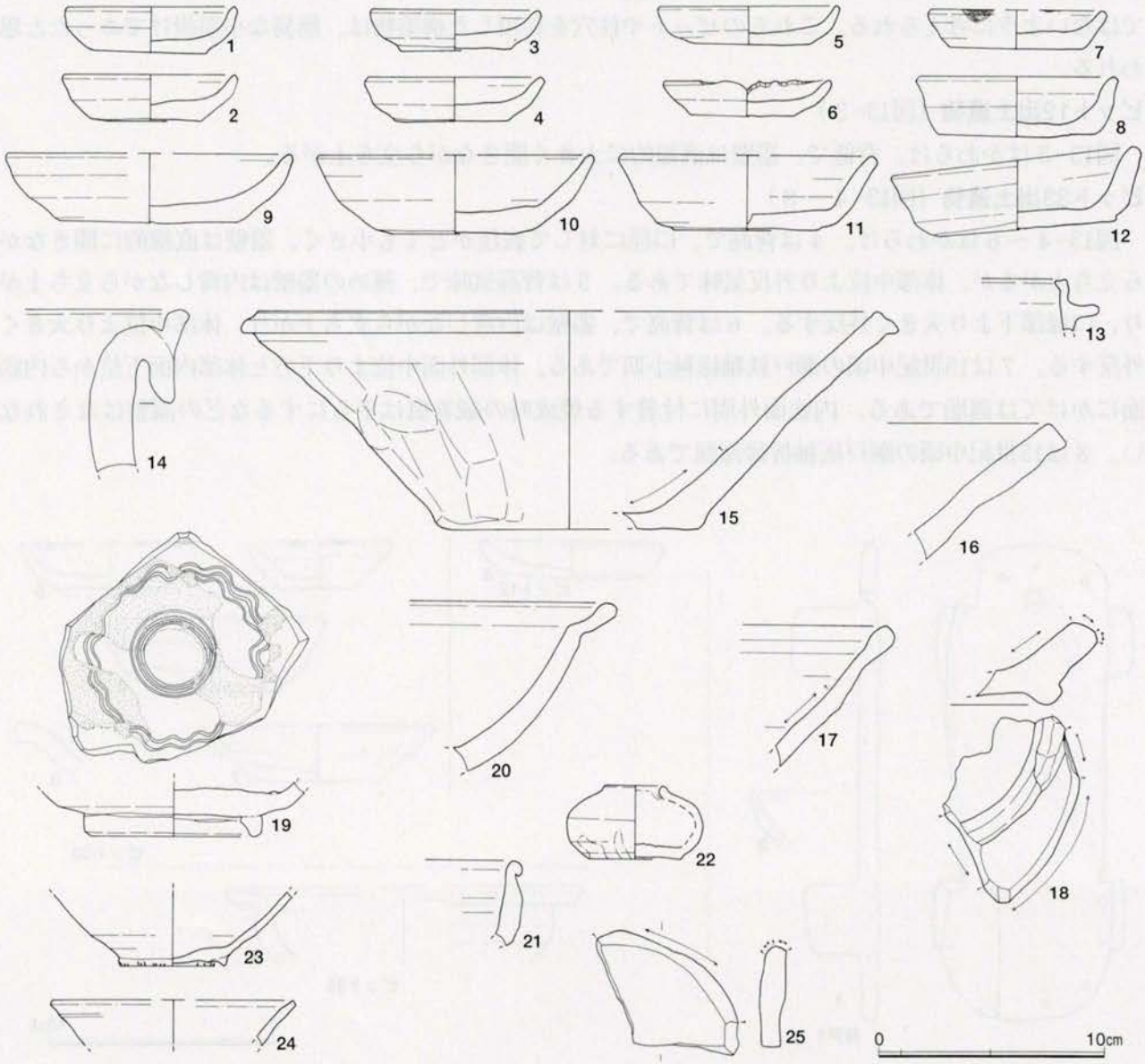


図14　第１面下出土遺物

痕が残り、付高台は雑に成形される。畳付端部から底裏にかけては露胎である。内外面ともに強い二次焼成を受けるが、内底面の図中アミをかけた部分のみに特に強い二次焼成が見られることから本製品の上に別の製品が重なった状態で火を受けた可能性がある。20は14世紀前半の瀬戸灰釉折縁深皿である。21は13世紀前半の瀬戸灰釉卸皿。わずかに遺存する外底面はヘラ調整されている。22は14世紀前半の瀬戸鉄釉合子である。完形で出土した。外底面は糸切り痕が残り、また焼成時の融着痕が残るが、平らにするなどの調整はなされていない。23は13世紀中頃の東濃型山茶碗。使用痕はない。24は白磁口兀皿。内外面ともに使用による著しいキズが残る。25は片口鉢Ⅰ類を転用した研削材である。

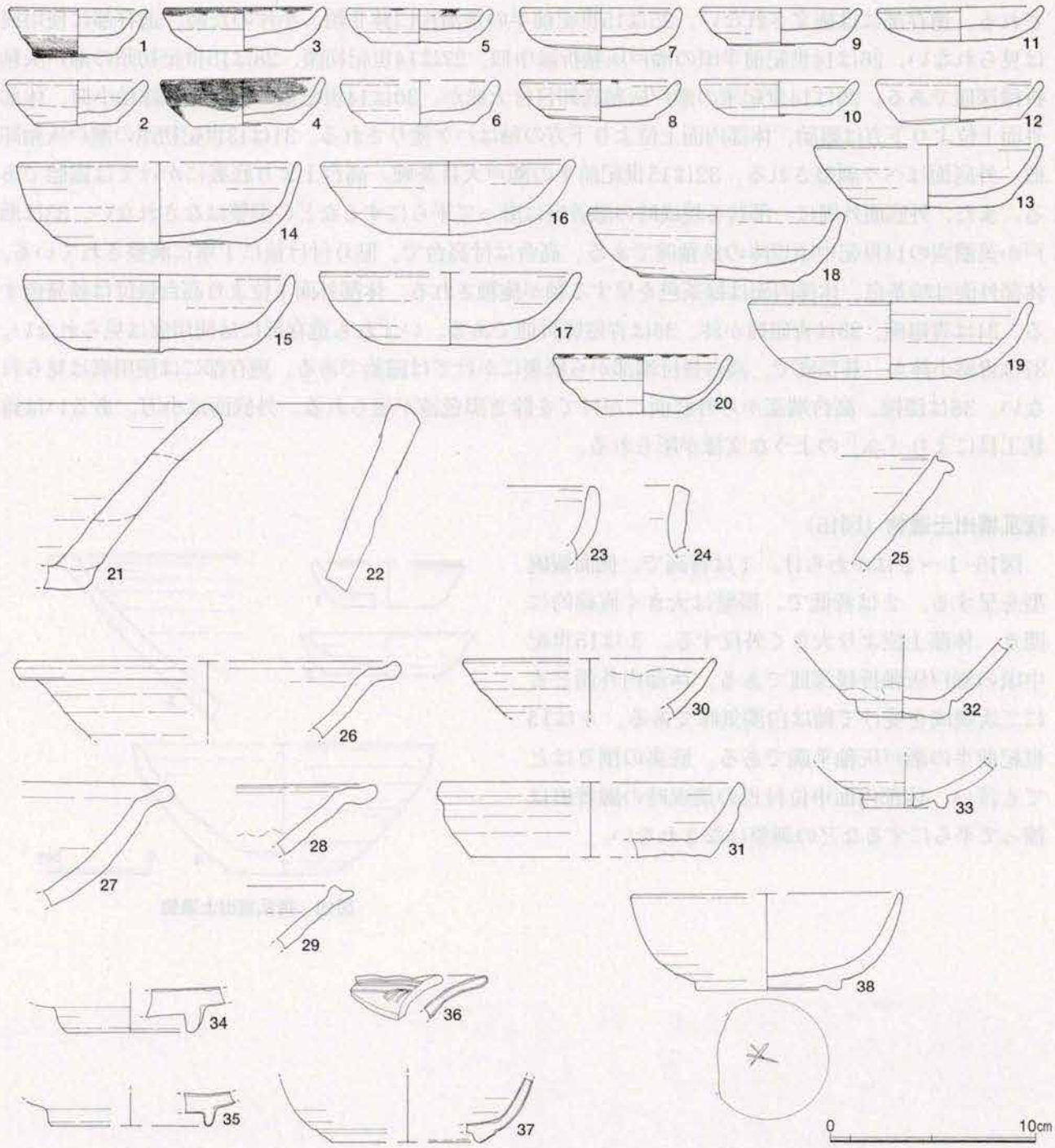


図15　第１面上出土遺物

第１面上出土遺物（図15）

図15-１～19はかわらけ。１～２は背高で、口径に対して底径がとても小さく、器壁は直線的に開きながら立ち上がるが、体部中位より外反する。３～８と18～19は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部中位付近より外反する。９～12と16～17は背低気味で、薄い器壁は直線的に開きながら立ち上がり、体部上位よりわずかに外反する。13は中型かわらけ。背高で、薄い器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部下よりわずかに外反する。14～15は背高で、器壁は直立気味に立ち上がる。20は轆轤成形の白かわらけ。背高で、側面観碗型を呈する。口縁部付近は煤が付着する。21～22は浅鉢形火鉢。22の体部内外面上位より下方は二次焼成により器表がはぜる。23～24は瓦質香炉。23の口唇部から体部外面にかけては横方向のヘラミガキにより黒色処理される。体部内面は指頭による横ナデにより調整される。遺存部には施文されない。25は15世紀前半の常滑片口鉢Ⅱ類。小片のため、遺存部に使用痕は見られない。26は14世紀前半頃の瀬戸灰釉折縁中皿。27は14世紀初頭、28は15世紀初頭の瀬戸灰釉折縁深皿である。29は14世紀末の瀬戸灰釉底卸目付大皿か。30は14世紀末の瀬戸灰釉縁釉小皿。体部外面上位より下方は露胎、体部内面上位より下方の釉はハケ塗りされる。31は13世紀初頭の瀬戸灰釉卸皿。外底面はヘラ調整される。32は15世紀前半の瀬戸天目茶碗。高台上より底裏にかけては露胎である。また、外底面外周に一部残る焼成時の融着痕は磨って平らにするなどの調整はなされない。33は瀬戸か美濃窯の14世紀中頃以降の鉄釉碗である。高台は付高台で、貼り付け後に丁寧に調整されている。体部外面は暗茶色、体部内面は緑茶色を呈する釉が施釉される。体部外面下位より高台畳付は鉄発色する。34は青磁碗、35は青磁皿か鉢、36は青磁腰折皿である。いずれも遺存部には使用痕は見られない。37は青磁小鉢か。碁笥底で、高台畳付端部から底裏にかけては露胎である。遺存部には使用痕は見られない。38は漆椀。高台端部から外底面にかけてを除き黒色漆が塗られる。外底面は小刀、あるいは錐状工具により「△」のような文様が彫られる。

撹乱壙出土遺物（図16）

図16-１～２はかわらけ。１は背高で、側面観碗型を呈する。２は背低で、器壁は大きく直線的に開き、体部上位より大きく外反する。３は15世紀中頃の瀬戸灰釉折縁深皿である。体部内外面ともに二次焼成を受けて釉は白濁気味である。４は15世紀前半の瀬戸灰釉平碗である。底裏の削りはとても浅い。体部内面中位付近の焼成時の融着痕は擦って平らにするなどの調整はなされない。

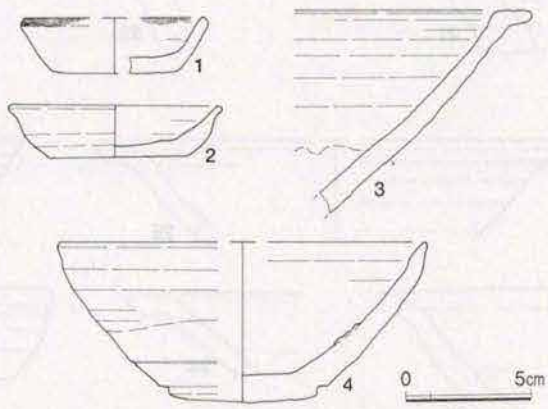


図16　撹乱壙出土遺物

表1　遺物観察表（1）

（　）は復元

図版番号		出土地	種　別	法量（cm）			備　　考
				口径	底径	器高	
4	1	第4面ピット31	平瓦				胎土は白針、白色砂を含む暗灰色弱砂質土
4	2	第4面ピット21	銭	外縁外径2.45/2.42銭厚0.18			「元豊通寶」鋳不足により小孔あり
6	1	第3面ピット19	かわらけ	(8.3)	(5.8)	1.5	黒色・白色微砂、白針、雲母を含む淡茶色弱粉質土
6	2	第3面ピット77	かわらけ	(8.3)	(5.6)	1.45	黒色・白色微砂、白針、雲母を少量含む肌色弱粉質土
6	3	第3面ピット63	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.8	黒色・白色微砂、白針、雲母を含む橙色弱粉質土
6	4	第3面ピット53	白磁口兀皿	(10.3)			素地は明灰色弱粘質緻密土　釉は緑味乳白色を呈する
6	5	第3面土壙57	瀬戸灰釉花瓶		4.0		胎土は明灰色弱粘質緻密土　釉は黄緑色を呈する
7	1	第3面下	かわらけ	7.4	5.3	1.7	黒色微砂、白針を含む肌色弱粉質土
7	2	第3面下	かわらけ	(8.5)	4.8	2.75	黒色・白色微砂、白針、雲母を多く含むザラザラした橙色粉質土
7	3	第3面下	片口鉢Ⅰ類				胎土は明灰色緻密土
7	4	第3面下	漆椀	(17.4)			黒色漆を塗った後、赤色漆のスタンプ施文
10	1	第2面井戸2	かわらけ	7.5	5.0	2.0	黒色・白色微砂を含む暗肌色弱粉質土
10	2	第2面井戸2	かわらけ	7.8	5.7	1.75	黒色・白色微砂、白針を含む肌色弱粉質土
10	3	第2面井戸2	かわらけ	7.4	4.6	2.05	黒色・白色微砂を含む肌色弱粉質土
10	4	第2面井戸2	かわらけ	8.1	5.9	2.1	黒色微砂、雲母を多く含む肌色粉質土
10	5	第2面井戸2	かわらけ	12.0	7.3	3.35	黒色・白色微砂、白針、雲母を含む橙色弱粉質土
10	6	第2面井戸2	かわらけ	10.7	6.5	3.1	混入物の少ない橙色粉質精良土
10	7	第2面井戸2	平瓦				胎土は白色粗砂を多く含む淡紅色～暗灰色土
10	8	第2面井戸2	青磁劃花文皿？				素地は灰色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色
10	9	第2面井戸2	曲物	15.7	16.3	10.3	
10	10	第2面井戸2裏込め	青磁折縁小鉢				素地は明灰色粘質緻密土　釉は暗めの青緑色を呈する
10	11	第2面井戸2裏込め	銭	外縁外径2.59/2.59銭厚0.14			「天禧通寶」
10	12	第2面溝1	常滑片口鉢Ⅱ類				胎土は白色微～小石を多く含む暗橙色土
11	1	第2面下	瀬戸灰釉折縁深皿				黄白色弱粘質緻密土　釉は二次焼成を受け、白濁気味の灰緑色を呈する
11	2	第2面下	白磁皿	(9.5)			素地は白色弱粘質緻密土　釉は緑味乳白色を呈する
11	3	第2面下	銭	外縁外径2.48/2.46銭厚0.15			「威平元寶」
13	1	第1面井戸1	下駄	全長21.3　遺存幅7.0			
13	2	第1面井戸1	瀬戸小天目茶碗				胎土は淡黄色弱粘質緻密土　釉は黒色釉を施釉後に茶色釉を施釉
13	3	第1面ピット12	かわらけ	7.8	6.4	1.7	黒色微砂、白針、雲母片を多く含む淡橙色弱砂質土
13	4	第1面ピット33	かわらけ	6.2	3.3	2.15	黒色・白色微砂、雲母片、白針を多く含む橙色粉質土
13	5	第1面ピット33	かわらけ	(7.6)	4.7	2.1	黒色・白色微砂、白針を多く含む橙色粉質土
13	6	第1面ピット33	かわらけ	9.7	5.7	3.2	黒色微砂、白針を多めに含むザラザラした橙色粉質土
13	7	第1面ピット33	瀬戸鉄釉緑釉小皿	(10.1)	5.7	2.5	胎土は明灰～淡黄色弱粘質緻密土　釉は茶色
13	8	第1面ピット33	瀬戸灰釉折縁深皿				胎土は黄味明灰色緻密土　釉は淡黄緑色
13	9	第1面ピット38	瀬戸灰釉底卸目皿 or 折縁中皿	(15.3)			胎土は明灰色弱粘質緻密土　釉は黄緑色
14	1	第1面下	かわらけ	7.4	5.3	2.0	黒色・白色微砂、白針、雲母片を多めに含む肌色弱砂質土
14	2	第1面下	かわらけ	7.6	4.9	2.05	黒色・白色微砂、白針、雲母片を多めに含む暗肌色弱砂質土
14	3	第1面下	かわらけ	7.3	5.0	1.8	雲母片、白針、黒色微砂を多めに含む暗橙色弱粉質土
14	4	第1面下	かわらけ	7.6	5.1	1.95	黒色・白色微砂を含むザラザラした橙色粉質土
14	5	第1面下	かわらけ	7.8	5.3	1.75	黒色・白色微砂、白針、雲母を多めに含む淡肌色弱砂質土
14	6	第1面下	かわらけ	7.2	4.6	1.55	黒色微砂、雲母、白針を含む淡茶色粉質土
14	7	第1面下	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.75	黒色・白色微砂を多く含む暗肌色弱砂質土
14	8	第1面下	かわらけ	8.5	6.9	2.7	黒色・白色微砂、雲母、白針を多く含むザラザラした肌色粉質土
14	9	第1面下	かわらけ	(12.5)	7.9	3.1	黒色・白色微砂、白針を多めに含む橙色粉質土
14	10	第1面下	かわらけ	(12.1)	(6.8)	3.5	黒色・白色微砂、雲母片、白針を含む暗橙色粉質土
14	11	第1面下	かわらけ	(11.1)	(6.6)	3.35	黒色・白色微砂、白針、雲母片を多めに含む橙色粉質土

表２　遺物観察表（2）　　（　）は復元

図版番号		出土地	種　別	法量（cm）			備　　考
				口径	底径	器高	
14	12	第１面下	かわらけ	10.5	8.2	3.1	黒色・白色微砂、雲母、白針を多く含むザラザラした肌色粉質土
14	13	第１面下	羽釜				胎土は黒色微砂、白色微粒、雲母片を含むザラザラした淡紅色土
14	14	第１面下	常滑甕				胎土は白色微～小石を多めに含む暗灰色土　器表は茶色を呈する
14	15	第１面下	常滑片口鉢Ⅱ類	(27.5)	(12.0)	9.6	胎土は白色微～小石を多く含む粗い暗灰色土　器表は茶～暗橙色を呈する
14	16	第１面下	常滑片口鉢Ⅱ類				胎土は白色小石を多く含む暗灰色土　器表は茶色を呈する
14	17	第１面下	片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微粒～小石を多く含む粗い灰色土
14	18	第１面下	転用研削材				片口鉢Ⅰ類転用　胎土は白色微粒～小石を多く含む灰色土
14	19	第１面下	瀬戸灰釉高台付盤 or 底卸目皿		7.9		胎土は明灰色弱粘質緻密土　釉は黄緑色か
14	20	第１面下	瀬戸灰釉折縁深皿				胎土は淡黄色弱粘質緻密土　釉は淡黄緑色を呈する
14	21	第１面下	瀬戸灰釉卸皿				胎土は茶灰色粘質土　釉は不安定な薄灰色
14	22	第１面下	瀬戸鉄釉合子	2.5	4.1	3.35	胎土は淡黄色弱粘質土　釉は暗灰緑～暗茶色
14	23	第１面下	東濃型山茶碗		4.8		胎土は白色粘質緻密土
14	24	第１面下	白磁口兀皿	(10.7)			素地は白色弱粘質緻密土　釉は乳白色
14	25	第１面下	転用研削材				片口鉢Ⅰ類転用　胎土は白色小石を多く含む粗い灰色土
15	1	第１面上	かわらけ	6.5	4.2	2.35	黒色・白色微砂、白針を多めに含むザラザラした淡茶色粉質土
15	2	第１面上	かわらけ	6.5	4.1	2.3	黒色微砂、白針を多めに含む淡橙色弱砂質土
15	3	第１面上	かわらけ	7.7	4.9	2.1	黒色・白色微砂、白針、雲母片を多く含むザラザラした肌色粉質土
15	4	第１面上	かわらけ	7.8	5.0	2.3	黒色微砂を多く含む肌色弱砂質土
15	5	第１面上	かわらけ	6.8	5.0	1.6	黒色微砂を多めに含む肌色粉質土多く含む淡橙色弱砂質土
15	6	第１面上	かわらけ	(7.4)	5.4	2.2	雲母片、黒色微砂を多めに含む橙色粉質土
15	7	第１面上	かわらけ	7.7	5.3	2.0	黒色・白色微砂、白針、雲母片を多く含むザラザラした橙色粉質土
15	8	第１面上	かわらけ	7.6	5.4	2.0	黒色・白色微砂、白針、雲母片を多く含むザラザラした橙色粉質土
15	9	第１面上	かわらけ	7.5	5.25	1.8	黒色・白色微砂、白針を多く含む橙色砂質土
15	10	第１面上	かわらけ	7.4	5.0	1.75	黒色微砂を多めに含む肌色粉質土
15	11	第１面上	かわらけ	7.8	4.7	1.6	黒色・白色微砂、白針を含む肌色弱粉質土
15	12	第１面上	かわらけ	7.8	5.9	2.1	黒色微砂を多めに含む肌色粉質土多く含む淡橙色砂質土
15	13	第１面上	かわらけ	(10.9)	6.6	3.1	黒色・白色微砂、雲母片を少量含む橙色弱粉質土
15	14	第１面上	かわらけ	(13.6)	9.0	4.0	黒色微砂、白針、雲母を含む橙色粉質土
15	15	第１面上	かわらけ	13.0	8.1	3.8	黒色・白色微砂、白針、雲母片を多く含むザラザラした橙色粉質土
15	16	第１面上	かわらけ	12.0	6.2	3.6	黒色微砂、雲母片、白針を多めに含むザラザラした淡橙色粉質土
15	17	第１面上	かわらけ	(12.5)	(6.6)	3.5	黒色・白色微砂、雲母片を含む橙色弱粉質土
15	18	第１面上	かわらけ	12.2	7.6	3.3	黒色・白色微砂、雲母片、白針を含む淡橙色粉質土
15	19	第１面上	かわらけ	13.5	7.2	3.8	黒色・白色微砂を少量含む肌色粉質土
15	20	第１面上	白かわらけ	8.5	4.0	2.9	白色微粒を多く含む白色弱粉質土
15	21	第１面上	浅鉢形火鉢				胎土は白色、および黒色粗砂を含む灰色砂質土
15	22	第１面上	浅鉢形火鉢				胎土は白色粗砂を多く含む灰色土　器表は黒色を呈する
15	23	第１面上	瓦質香炉				胎土は灰色瓦質土
15	24	第１面上	瓦質香炉				胎土は淡紅色瓦質土
15	25	第１面上	常滑片口鉢Ⅱ類				胎土は白色微粒～小石を多く含む暗灰色土　器表は明茶色を呈する
15	26	第１面上	瀬戸灰釉折縁中皿	(12.3)			胎土は明灰色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色
15	27	第１面上	瀬戸灰釉折縁深皿				胎土は淡黄色弱粘質緻密土　釉は淡黄緑色
15	28	第１面上	瀬戸灰釉折縁深皿				胎土は灰黄色弱粘質土　釉は濃灰緑色
15	29	第１面上	瀬戸灰釉底卸目付大皿？				胎土は明灰色弱粘質土　釉は濃緑色
15	30	第１面上	瀬戸灰釉緑釉小皿	(12.4)			胎土は明灰色弱粘質土　釉は透明な淡緑色を呈する
15	31	第１面上	瀬戸灰釉卸皿	(14.5)	(11.6)	3.7	胎土は明灰色粘質緻密土　釉は淡緑色

表３　遺物観察表（3）　　（　）は復元

図版番号		出土地	種　別	法量（cm）			備　　考
				口径	底径	器高	
15	32	第１面上	瀬戸天目茶碗		4.5		胎土は明灰色弱粘質土　釉は暗茶～黒色
15	33	第１面上	瀬戸か美濃鉄釉碗		4.2		胎土は明灰色弱粘質緻密土　釉は茶～緑茶色を呈する
15	34	第１面上	青磁碗		(6.7)		素地は灰色弱粘質土　釉は白濁した暗草緑色
15	35	第１面上	青磁皿 or 鉢		(8.1)		素地は白色弱粘質土　釉は白濁した暗草緑色
15	36	第１面上	青磁腰折皿				素地は灰色弱粘質緻密土　釉は暗草緑色
15	37	第１面上	青磁小鉢？		(7.2)		素地は白色弱粘質緻密土　釉は淡青緑色
15	38	第１面上	漆椀	(13.1)	(7.2)	4.7	黒色漆は塗られるが施文は見られない
16	1	撹乱壙	かわらけ	(7.1)	(5.0)	2.2	白針、黒色微砂、白色微砂を多く含む淡橙色粉質土
16	2	撹乱壙	かわらけ	8.2	5.6	2.1	雲母片を多く含む淡茶色弱粉質土
16	3	撹乱壙	瀬戸灰釉折縁深皿				胎土は淡黄色弱粘質土　釉は濃灰緑色
16	4	撹乱壙	瀬戸灰釉平碗	(14.5)	5.9	6.4	胎土は粗めの淡黄色弱粘質土　釉は濃黄緑色

第4章　まとめ

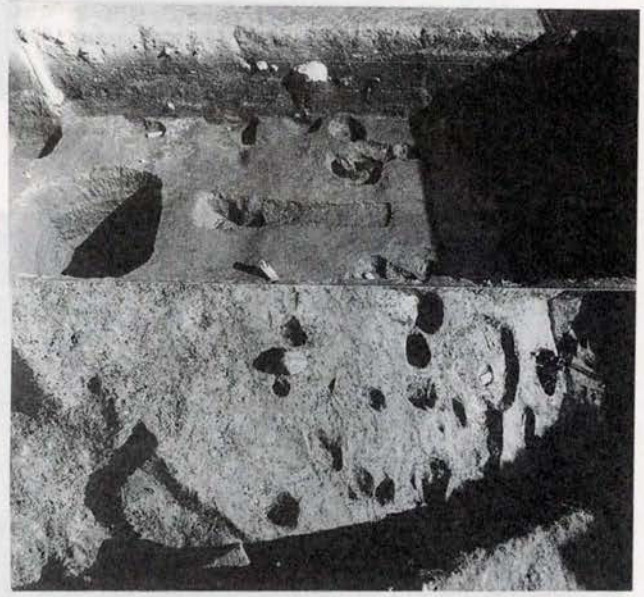
円覚寺門前、とくに円覚寺寺域の北限と想定される十王堂橋付近から西方へと入り込む谷戸の出口に今回の調査地点は位置する。貞治二(1363)年の『円覚寺文書』目録に記載されている円覚寺境内絵図の調査地点付近と考えらられるあたりには、町屋が描き込まれている。本来ならば、こうした絵図に見られる町家を確認できるものと思われたが、非常に小範囲であった今回の調査ではそれとわかる町家跡を認めることができなかった。それでも第2面に発見された溝と柱穴の並びは、調査地点において、何らかの敷地分割の機能が働いていたことを示していた。これをもって、今回の成果とすべきであろう。

次に遺跡地の年代を考えてみる。第4面と第3面ではいずれの生活面からもかわらけに「薄手丸深」型が見られず、図示したかわらけの器型はむしろ年代的に古めの様相を呈している。しかしながら、第3面土壙からは13世紀後半～14世紀初頭の瀬戸花瓶が出土していることから、第4面と第3面には大きな年代差はなく、13世紀後半から14世紀初頭に相次いで造成されたと考えられる。第2面のかわらけは完全に大中小に分化し、中型かわらけに「薄手丸深」型が見られる。第2面の溝からは15世紀前半の常滑片口鉢Ⅱ類、あるいは第2面下からは15世紀初頭の瀬戸折縁深Ⅲが出土している。このことから、第2面は第4・3面に引き続いて造成され、15世紀前半までの年代が考えられよう。第1面では小型かわらけに背高で、口径に対して底径がとても小さく、器壁は直線的に開きながら立ち上がる新しい器型が見られる。また、15世紀末から16世紀代に見られるような口径と底径の差が小さく、厚い器壁は直立気味に立ち上がる器型のかわらけも出土していることから、第1面は15世紀後半以降までと考えられる。

本遺跡地では4枚の生活面が検出されたが、第2面と第1面から出土した遺物の量に対して第4面と第3面出土の遺物は少なかった。この遺物出土量の違いは、本遺跡地が第2面以降の15世紀以降にむしろ繁栄したことを示しているものと思われる。

図版 1

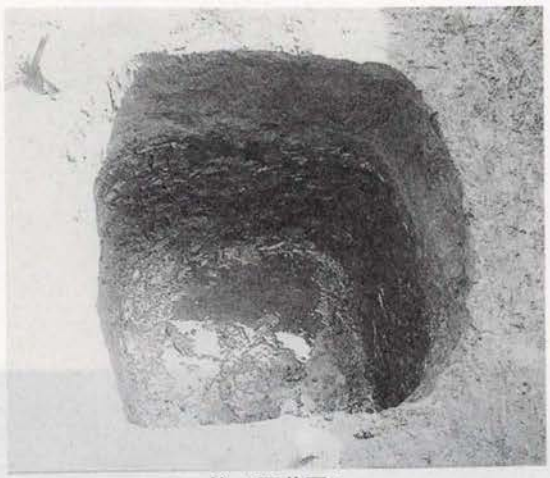
Ⅱ区第 4 面全景



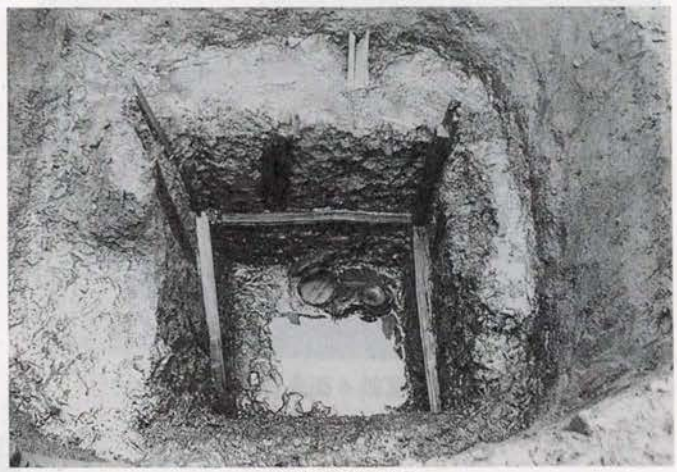
第 3 面全景

第 1 面全景

図版 2



第 1 面井戸 1

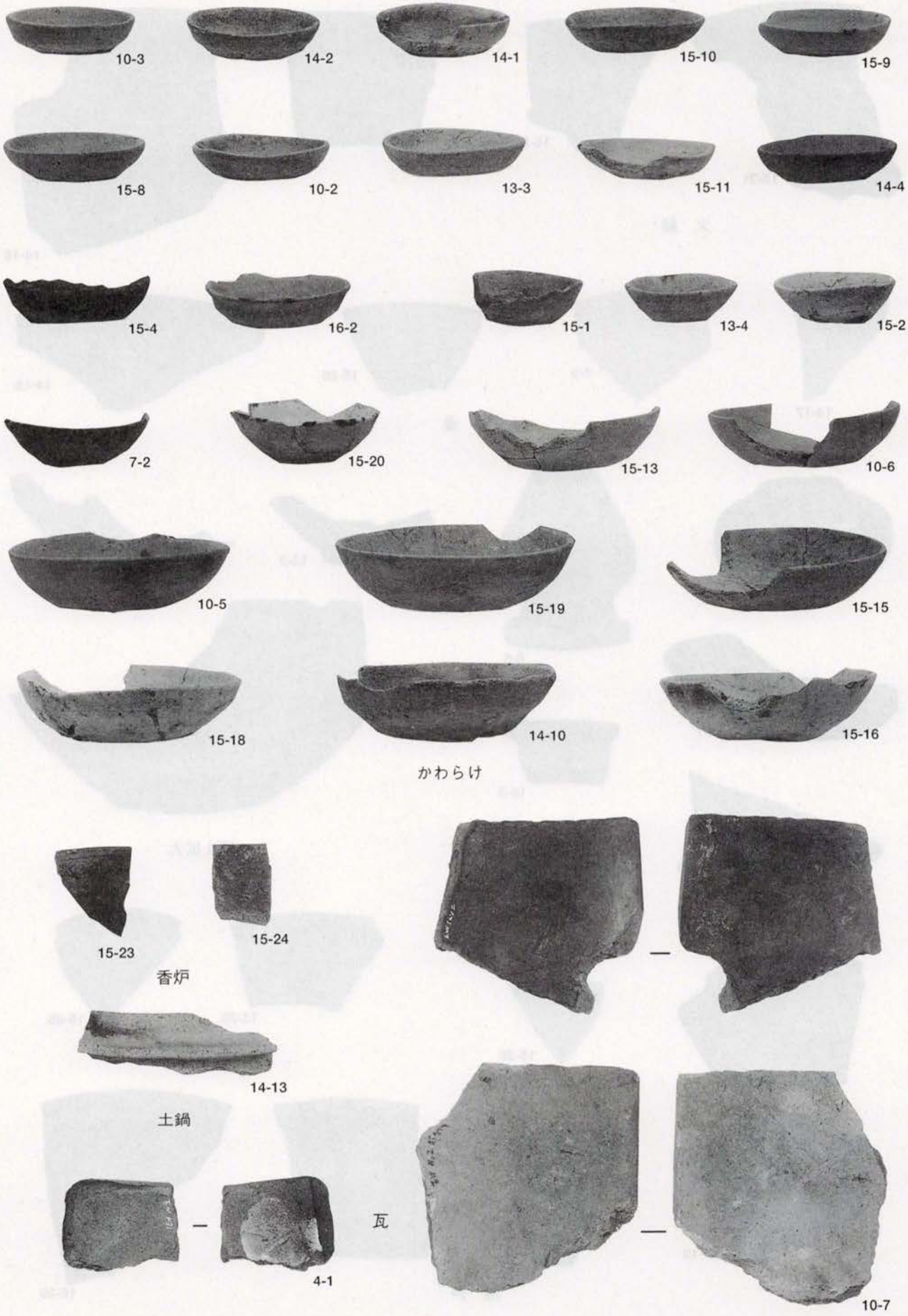


第 2 面井戸 2

井戸 2 枠内近景

井戸 2 枠内出土曲物

図版 3


10-3
14-2
14-1
15-10
15-9
15-8
10-2
13-3
15-11
14-4
15-4
16-2
15-1
13-4
15-2
7-2
15-20
15-13
10-6
10-5
15-19
15-15
15-18
14-10
15-16
かわらけ
15-23
15-24
香炉
14-13
土鍋
4-1
瓦
10-7

図版 4

15-21

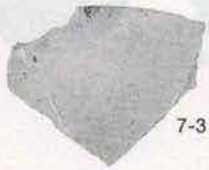
15-22

14-14

14-15

火 鉢

14-17


7-3

15-25

14-16

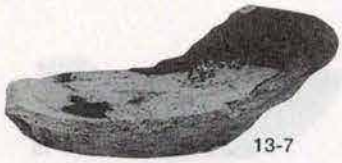
常 滑

14-22

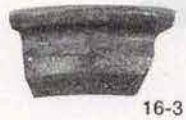
6-5

13-2

16-4


13-7

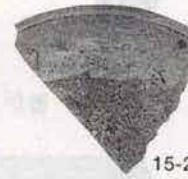
同上拡大


16-3

14-23

13-8

15-28

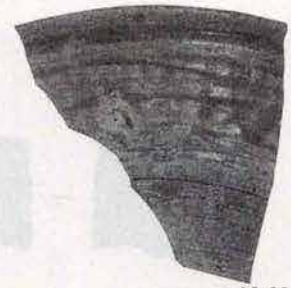

15-26

15-26

14-19

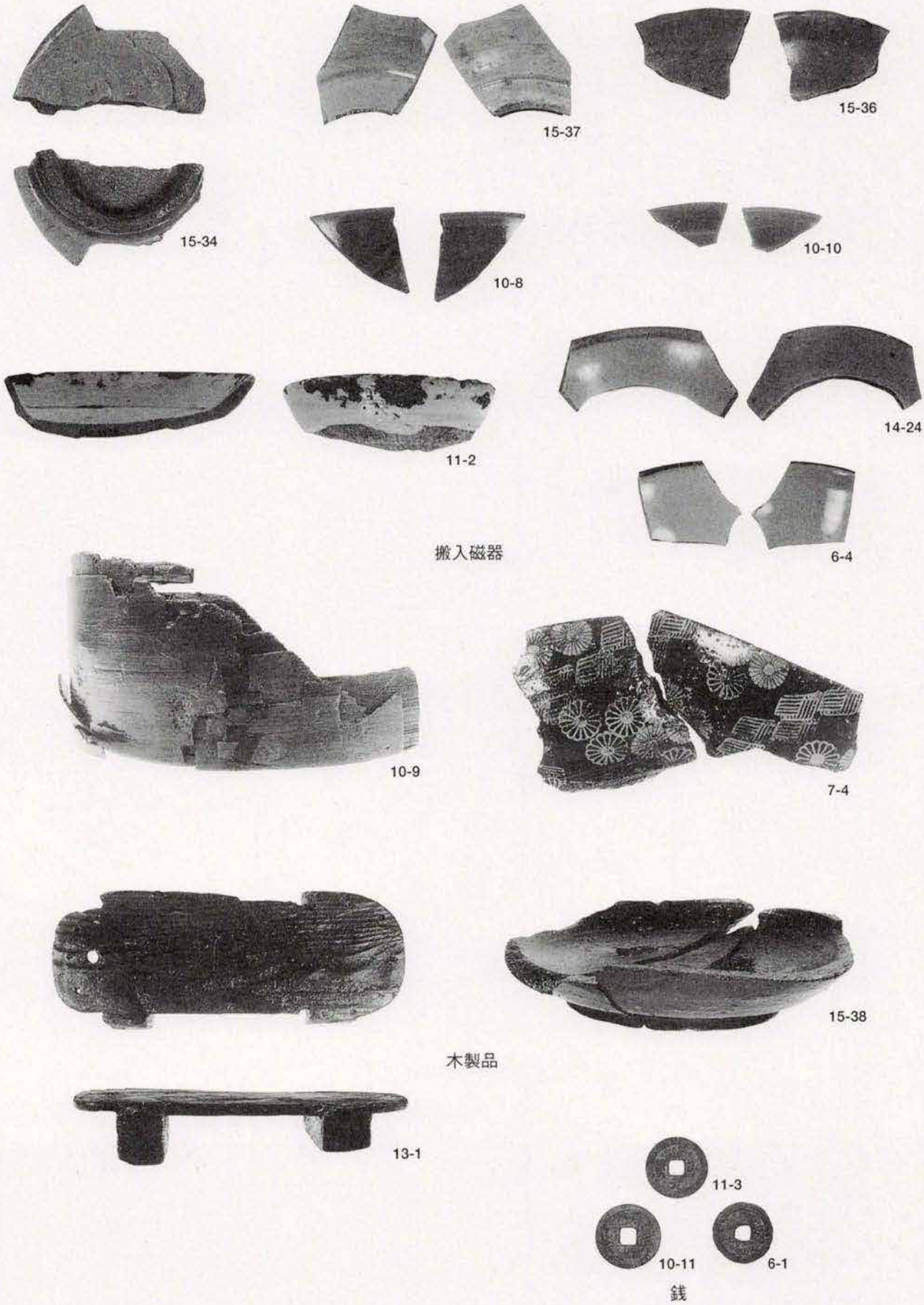
15-27

14-20


16-30

瀬 戸

図版 5


15-37
15-36
15-34
10-8
10-10
11-2
14-24
6-4
搬入磁器
10-9
7-4
15-38
木製品
13-1
11-3
10-11
6-1
銭

若宮大路周辺遺跡群　(No.242)

わかみやおおじしゅうへんいせきぐん

小町二丁目402番９ほか地点

例　言

1. 本報は、若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳№242）内・小町二丁目402番９ほかにおける個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査は平成４年３月10日から、同年５月18日まで実施された。調査対象面積は約191㎡。
3. 調査体制は以下の通り

　　担　当　者　　伊丹まどか
　　調査主任　　馬淵和雄
　　調　査　員　　宇都洋平・沖元道・鍛冶屋勝二・古田土俊一・鈴木弘太・本城裕・松原康子
　　調査協力者　　天野隆男・石井清司・奥山利平・川島仁司・篠原敏夫・清水政利・田島道夫・田口康雄
　　協力機関　　（株）斉藤建設・（社）鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所

4. 本報の執筆は第１章を馬淵、第２章を伊丹・鍛冶屋、第３章を伊丹、第４章を馬淵の指導の下に伊丹・宇都がおこなった。
5. 本報の作成に関わる遺物実測・トレース・図版作成は、松原・鍛冶屋・宇都・伊丹・鈴木・本城がおこなった。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を馬淵・鈴木・沖元・古田土が、遺物を鍛冶屋が撮影した。
7. 凡例

　　図版縮尺　　全測図：１/80　遺構図：１/60　遺物図：１/３
　　遺構図版　　遺構レベルは海抜を示す。
　　本報の遺構番号および名称は現地確認時のものをそのまま使った。したがって数字の順列は新旧を表現せず、また名称は性格を代表しない。
　　本報中の「東西南北」は、鶴岡八幡宮を北に見立てた便宜上の呼称である。
　　本報中の「泥岩」は三浦・葉山層のいわゆる「土丹」
　　「土師器皿T種」は「手づくね成形のかわらけ」
　　「土師器皿R種」は「ろくろ成形のかわらけ」

8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表する。
秋山哲雄・安達澄子・Richard L Wilson・太田美智子・岡陽一郎・小野正敏・河野眞知郎・菊川英政・五味文彦・鈴木絵美・高橋信義・野本賢二・原廣志・韓盛旭・松尾宣方・宮田眞・Paul Wadden

目　　次

第１章　調査地点の概観 …… 172
　1. 位置と地勢 …… 172
　2. 歴史的環境 …… 172
第２章　調査の概要 …… 182
　1. 調査にいたる経緯と経過 …… 182
　2. 堆積土層 …… 185
第３章　発見された遺構と遺物 …… 186
　第１節　概要 …… 186
　第２節　各説 …… 186
　　1. 第４面の遺構と遺物 …… 186
　　2. 第３面の遺構と遺物 …… 188
　　3. 第２面の遺構と遺物 …… 196
　　4. 第１面の遺構と遺物 …… 208
第４章　まとめと考察 …… 240
　第１節　まとめ …… 240
　　1. 遺構にいて …… 240
　　2. 出土遺物について …… 241
　　3. 変遷と年代 …… 242
　第２節　考　察
　　若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目402番９ほか地点）第２面検出の柱穴列について …… 244

図版目次

図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡……173
図2　近隣の調査成果……176
図3　調査区設定図……182
図4　土層堆積図……183
図5　第4面遺構全図、同出土遺物……186
図6　土坑19・21・溝21、同出土遺物……187
図7　第3面遺構全図……188
図8　第3面ピット出土遺物……189
図9　柱穴列A、同出土遺物……189
図10　溝19・20、溝19出土遺物……190
図11　溝15c・17、溝17出土遺物……192
図12　第3面ピット出土遺物（1）……193
図13　第3面ピット出土遺物（2）……194
図14　第3面面上、同構成土出土遺物……195
図15　第2面遺構全図……196
図16　柱穴列D・溝10、同出土遺物……197
図17　柱穴列B、同出土遺物……198
図18　溝16、同出土遺物……199
図19　溝18周辺 土坑・ピット出土遺物……201
図20　ピット179、同出土遺物……202
図21　土坑13、同出土遺物（1）……203
図22　土坑13出土遺物（2）……204
図23　土坑11・ピット168、同出土遺物……204
図24　溝12、同出土遺物……205
図25　柱穴列C……206
図26　溝15a、同出土遺物……206
図27　溝15b、同出土遺物……207
図28　第2面ピット出土遺物……208
図29　第2面面上・第2面構成土出土遺物……209
図30　第1面遺構全図……210
図31　道路1・2出土遺物……211
図32　道路2覆土出土遺物……212
図33　溝2・7、同出土遺物……212
図34　土師器集中出土1、同遺物……213
図35　溝9・ピット267、同出土遺物……214
図36　溝6、同出土遺物……215
図37　溝1・11・13、溝11・13出土遺物……217
図38　溝1出土遺物……218
図39　土坑1・3・4・7・10、ピット154・155・162、同出土遺物……219
図40　1面ピット出土遺物……220
図41　第1面面上・第1面構成土出土遺物……221
図42　トレンチ1～4出土遺物……222
図43　表採遺物……223
図44　遺構変遷図……242
図45　事例……245

表目次

表1　出土遺物法量表（1）……224
表2　出土遺物法量表（2）……225
表3　出土遺物法量表（3）……226
表4　出土遺物法量表（4）……227
表5　出土遺物法量表（5）……228
表6　出土遺物法量表（6）……229
表7　出土遺物法量表（7）……230
表8　出土遺物法量表（8）……231
表9　出土遺物法量表（9）……232
表10　出土遺物法量表（10）……233
表11　出土遺物法量表（11）……234
表12　出土遺物法量表（12）……235
表13　出土遺物法量表（13）……236
表14　出土遺物法量表（14）……237
表15　出土遺物法量表（15）……238
表16　出土遺物計量表……239

写真目次

図版1－1　調査地点鳥瞰……250
1－2　第1面全景……250
図版2－1　第2面全景……251
2－2　第3面全景……251
図版3－1　道路1、溝2・7（東から）……252
3－2　溝1　頭骨出土状況（西から）……252
3－3　溝1（南から）……252
3－4　p.217（北から）……252
3－5　土師器皿集中出土状況（西から）……252
3－6　溝11・13（南から）……252
図版4－1　高麗青磁出土状況……253
4－2　土坑13（北から）……253
4－3　柱穴列D、東西列（東から）……253
4－4　柱穴列D（北から）……253
図版4－5　溝12（南から）……253
4－6　溝15a内　側板検出状況（西から）……253
図版5－1　溝20（東から）……254
5－2　溝15c・17（南から）……254
5－3　土坑19・21（南から）……254
5－4　土坑19　白磁玉縁碗出土状況（西から）……254
5－5　溝21（南から）……254
図版6－1　南壁西半部土層堆積（小町大路側溝）……255
6－2　東壁北半部土層堆積……255
6－3　東壁中央部土層堆積……255
6－4　東壁南半部土層堆積……255
6－5　北壁西半部土層堆積……255
6－7　北壁東半部土層堆積……255

第１章　調査地点概観

１．位置と地勢

鎌倉中心部は、鶴岡八幡宮から海に向かって真っ直ぐ伸びる若宮大路を基軸として、それにほぼ平行した東西２本の南北大路、および直交する何本かの東西大路と小路（「辻子」か）により区画される。神奈川県遺跡台帳に「若宮大路周辺遺跡群」（鎌倉市№242）として登録されている遺跡は、鶴岡八幡宮前面の若宮大路両側を除いてほぼその中心に位置し、北はおおむね八幡宮前面の並びから南は六地蔵・下馬四ツ角・大町四ツ角まで、東西は滑川から今小路までおよぶ。調査地点はこの遺跡の東北域にあり、「小町大路」と呼ばれる南北道路に面している。鶴岡八幡宮前の「横大路」を東に行くと突き当たる宝戒寺前から、220mほど南にある。現在の地番は鎌倉市小町二丁目402番ほか。滑川を越えた東の山麓には鎌倉幕府終焉の地として知られる東勝寺跡があり、そこから下ってきた道が小町大路に突き当たる場所から110mほど南下した位置になる。「北条小町邸」という登録名（№282）のつけられた方形区画南東角に対面する場所でもある。

調査地点を地勢上からみれば、およそ次のようになる。鎌倉東辺、横浜市との境の朝比奈山中に源を発した滑川は、現在の浄明寺から二階堂付近にかけて狭隘な谷を開析したあと、大倉の辺から南に向きを変え、市内中心部の沖積平野を形成しつつ相模湾に流れ込む。中流域から下流域では左岸（南側）の山裾を削り、右岸に河岸段丘を形成する。調査地点は沖積平野のほぼ入口付近東寄りの滑川右岸に位置する。川までは約130mある。現況の標高は前面の小町大路面で9.4m前後、中世期には、削平されて詳細は不明だが、大体8.2～8.5m程度であったと推測される。現況で西の若宮大路よりほぼ80cm高い。

この一帯の調査成果については図2に示しておいたので参照してほしい

２．歴史的環境

縄文～古墳時代

縄文海進期、鎌倉市街地はほぼ全域が水面下であったと考えられる。次第に乾陸化する縄文時代前期以後、二階堂や大倉の山裾で遺物が採集されるようになるが、全体にきわめて乏しい。上本進二によれば、当初鎌倉中心部の沖積平野中心部を流れていた古滑川が、現在の位置に近い東の山裾に流路を変えるのは縄文晩期以降だという（上本2000）。これを裏付けるように近年おこなわれた地点116の発掘調査で、縄文晩期頃との年代測定値の得られた河川もしくは河跡湖が確認されている（馬淵ほか1992）。

調査地点一帯で人の生活痕跡が明瞭になるのは弥生時代中期後半からである。この時期以降、大倉から二階堂にかけて大規模な集落が形成され（馬淵1998・1999）、当地点付近でも中世期の堆積土中からしばしば中期後半～後期の土器が出土する。

古墳時代の集落は、周辺山稜部や海岸部・二階堂付近の平坦な微高地で発見されており、海岸には古墳群もあったとされる（下向原古墳群）。調査地点付近では、当該期遺物の採集は珍しくないものの、まだ例がない。大倉北方の山裾では後期の横穴墓が存在する。地点24での花粉分析でイネ科のプラントオパールが析出されていることから、この一帯で水田耕作がおこなわれていた可能性がある。

律令期～平安時代前期

律令時代の鎌倉は、『相摸国封戸租交易帳』に相摸（模）国八郡のひとつとして現われる（『正倉院文書』正集十八『神奈川県史　資料編』１-58）。本地点から西約900mの今小路西遺跡御成小学校地点の調査では、「コ」の字形に配置された大型掘立柱建物群が発見され、また兵士（防人）用備蓄米の付札とおぼしい木簡も出土していることから、鎌倉郡衙と推測されている（河野ほか1991）。現在の鎌倉

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図１調査地点名

若宮大路周辺遺跡群

1．小町二丁目402番９ほか（本地点）
2．小町一丁目305番ロ・308番（1975斉木秀雄調査、未報告）
3．小町一丁目65番10～12（1977松尾宣方調査、未報告）
4．小町一丁目66番３ほか（1977宮田真調査、未報告）
5．小町一丁目302番（1977斉木調査、未報告）
6．小町二丁目281番（1977宮田調査、未報告）
7．小町一丁目319番２（1978斉木調査、未報告）
8．小町一丁目309番４（1979斉木調査、未報告）
9．小町一丁目75番１（斉木1982『鎌倉考古学研究所調査研究報告第１集　小町１丁目75番地１号地点　カトレヤビル新築工事に伴う中世鎌倉市街地の発掘調査報告書』）
10．小町一丁目891番（斉木1985『（推定）藤内定員邸跡遺跡　鎌倉市新中央公民館用地内遺跡の発掘調査報告書』）
11．小町一丁目75番１（９に同じ）
12．御成町11番２（斉木1982『鎌倉考古学研究所研究報告第２集　（附編）御成町11-２番地地点　ヤノヤビル建設に伴う中世鎌倉市街地遺跡の緊急発掘調査報告』）
13．小町二丁目65番21（河野真知郎ほか1982『鎌倉考古学研究所調査研究報告第1集　小町２丁目65番地21号地点　松秀ビル新築工事に伴う中世鎌倉市街地の発掘調査報告書』）
14．御成町806番５（斉木1985『諏訪東遺跡　―鎌倉市御成町806番所在 中世遺跡の発掘調査報告書―』）諏訪東遺跡調査委員会
15．御成町806番９（斉木1982『鎌倉考古学研究所研究報告第２集　御成町806-３番地地点　小林邸新築工事に伴う中世鎌倉市街地の発掘調査報告』）
16．御成町822番２（手塚直樹1983『蔵屋敷東遺跡　江ノ電鎌倉ビル建設工事に伴う中世市街地遺跡の発掘調査概報』）江ノ電鎌倉ビル発掘調査団
17．小町一丁目302番ほか（1982斉木調査、未報告）
18．大町一丁目1034番２（1982松尾調査、未報告）
19．小町二丁目281番30（1982玉林美男調査、未報告）
20．小町一丁目103番９（服部実喜ほか1984『蔵屋敷遺跡　日本国有鉄道鎌倉駅舎改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査』）鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会

21. 小町一丁目309番５（斉木1983『小町1丁目309番5地点発掘調査報告　松風堂ビル建設に伴う中世遺跡（推定藤内定員邸跡）の発掘調査報告書』（推定）藤内定員邸跡発掘調査団
22. 小町二丁目345番２（馬淵和雄1985『小町二丁目345番−２地点遺跡　雪ノ下教会改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』）小町二丁目345番−２地点遺跡発掘調査団
23. 御成町130番６（1984松尾調査、未報告）
24. 御成町12番18（服部1986『千葉地東遺跡　鎌倉県税事務所建設工事にともなう鎌倉市御成町遺跡の調査』）神奈川県立埋蔵文化財センター
25. 御成町819番１（1984玉林調査、未報告）３
26. 小町一丁目116番（馬淵1986『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』２所収）鎌倉市教育委員会
27. 御成町228番２・130番１（斉木1987『御成町228番−２他地点遺跡　片岡ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』）千葉地東遺跡発掘調査団
28. 小町二丁目１番14（1986福田誠調査、未報告）
29. 小町二丁目１番14（1986福田調査、未報告）
30. 由比ケ浜一丁目128番７（馬淵1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』４所収）
31. 小町一丁目120番１（手塚1989『小町一丁目120番−１地点遺跡　風門社ビル建設に伴う発掘調査報告』）風門社ビル発掘調査団
32. 小町二丁目４番６（1986田代郁夫調査、未報告）３
33. 小町一丁目322番２（1987菊川英政調査、未報告）
34. 小町一丁目106番１（手塚ほか1999『若宮大路周辺遺跡群　＜小町1丁目106番１他地点−第１次＞＜小町１丁目116番４他地点−第２次＞』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
35. 小町一丁目67番２（福田1994『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉市小町一丁目67番２地点』）鎌倉市教育委員会
36. 小町二丁目12番18（馬淵1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』５所収）
37. 小町二丁目276番（1987原廣志調査、未報告）
38. 小町二丁目39番６（田代郁夫1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』５所収）
39. 由比ガ浜一丁目118番（馬淵1997「若宮大路周辺遺跡群（Mo.242）由比ヶ浜一丁目123番５外地点」（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11）所収）
40. 御成町778番１（1988田代調査、未報告）
41. 雪ノ下一丁目210番（馬淵1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』６所収）
42. 扇ガ谷一丁目74番８·10（菊川1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』６所収）
43. 小町一丁目81番23（1988田代調査、未報告）
44. 由比ガ浜一丁目117番（汐見一夫ほか1991『由比ヶ浜１−117−１地点遺跡　若宮大路周辺遺跡群・堀口ビル建設に伴う緊急発掘調査報告書』）
45. 小町二丁目280番２（田代1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』６所収）
46. 小町二丁目５番23（福田1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』６所収）
47. 御成町819番１（菊川1999『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書（御成町819番1地点）』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
48. 小町二丁目279番２（1989田代調査、未報告）
49. 小町二丁目4番４（1989原調査、未報告）
50. 小町二丁目69番６（原ほか1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』７所収）
51. 小町二丁目281番１（1989原調査、未報告）
52. 小町一丁目116番４（手塚ほか1999『若宮大路周辺遺跡群　＜小町1丁目106番１他地点−第１次＞＜小町1丁目116番４他地点−第２次＞』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
53. 御成町868番（木村美代治ほか1993『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉駅西口第２自転車駐車場及び（仮称）鎌倉市在宅福祉サービスセンター建設に伴う研究発掘調査報告書』）鎌倉市教育委員会
54. 御成町727番12·19（1990木村調査、未報告）
55. 小町二丁目４番19（1990原調査、未報告）
56. 小町一丁目1028番１（大河内勉1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　小町一丁目1028番１地点』）
57. 小町二丁目12番15（菊川1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』８所収）
58. 小町一丁目83番１（佐々孝ほか1993『鎌倉市早見芸術学園改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』）（株）四門
59. 御成町872番14（木村1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』８所収）
60. 小町一丁目81番８（宮田ほか1995『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉市小町一丁目81番８地点　大和証券鎌倉支店建設用地一・二次調査』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
61. 小町二丁目12番10（1993大河内調査、未報告）
62. 御成町811番（田代ほか1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』９所収）
63. 由比ガ浜一丁目120番６（1991原調査、未報告）
64. 御成町818番１（1991松尾調査、未報告）
65. 小町一丁目287番13（1992斉木調査、未報告）
66. 小町二丁目63番９（斉木1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』９）
67. 小町一丁目325番イ外（佐藤仁彦1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10所収）
68. 小町一丁目322番（宮田ほか1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉市小町１丁目322番地点　鎌倉スポーツクラブ用地』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団）
69. 扇ヶ谷一丁目74番９ほか（菊川1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10所収）
70. 小町一丁目321番１（宮田ほか1996『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　小町一丁目321番１　鎌倉警察署構内』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
71. 由比ガ浜一丁目129番５（宮田ほか1995『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　由比ケ浜一丁目129番５地点』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
72. 由比ガ浜一丁目123番５（馬淵1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11所収）
73. 御成町788番３、788番５（菊川1997『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13所収）
74. 由比ガ浜一丁目118番７（継実ほか1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13所収）
75. 小町一丁目66番５（1996原調査、未報告）
76. 小町二丁目28番３・５（原1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14所収）
77. 小町二丁目４番９（1996手塚調査、未報告）
78. 御成町123番５（汐見1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15所収）
79. 小町二丁目283番６（宮田ほか1998『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉市小町２丁目283番６他２筆　豊嶋屋店舗用地』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

80. 小町二丁目5番8（福田1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』15所収）
81. 御成町884番6（宮田ほか1999『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』）若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
82. 小町三丁目455番4（1999原調査、未報告）
83. 小町二丁目54番3（1999原調査、未報告）
84. 小町一丁目81番18（宮田ほか2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16所収）
85. 雪ノ下一丁目198番6（菊川2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16所収）
86. 御成町872番14（1999斉木調査、未報告）
87. 小町二丁目280番3、12（1999斉木調査、未報告）
88. 小町二丁目402番5（野本賢二ほか2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17所収）
89. 雪ノ下一丁目200番3ほか（宗臺ほか2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19所収）
90. 小町二丁目1番6（2002汐見調査、未報告）
91. 雪ノ下一丁目198番1（2002斉木調査、未報告）
92. 御成町802番2外（斉木ほか2005『若宮大路周辺遺跡群　御成町802番2ほか』）
93. 小町二丁目283番の一部（2003宮田調査）
94. 雪ノ下一丁目161番33の一部（馬淵ほか2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22所収）

北条高時邸跡（No.281）

95. 小町三丁目426番3地点（原1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12所収）

政所跡（No.247）

96. 雪ノ下三丁目987番1・2地点（手塚ほか1991『政所跡』政所跡発掘調査団）
97. 雪ノ下三丁目966番1地点（手塚ほか1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8所収）
98. 雪ノ下三丁目965番1地点（手塚ほか1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8所収）
99. 雪ノ下三丁目988番（手塚ほか1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9所収）
100. 雪ノ下三丁目970番2ほか地点（野本健二ほか1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15所収）
101. 雪ノ下三丁目971番6地点（1997手塚調査、未報告）
102. 雪ノ下三丁目989番4地点（宗臺2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17所収）

北条小町邸跡（No.282）

103. 雪ノ下一丁目432番2地点（1977松尾調査、未報告）
104. 雪ノ下一丁目371番-1地点（馬淵1985『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番-1地点発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会）
105. 雪の下一丁目372番-7地点（馬淵1985『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1所収）
106. 雪ノ下一丁目374番2地点（玉林1986『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2所収）
107. 雪ノ下一丁目419番3地点（玉林1987『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3所収）
108. 雪ノ下一丁目432番2地点（菊川1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5所収）
109. 雪ノ下一丁目395番地点（菊川1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5所収）
110. 雪ノ下一丁目369番外地点（田代1990、未報告）
111. 雪ノ下一丁目369番地点（瀬田ほか1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7所収）
112. 雪ノ下一丁目377番7地点（馬淵ほか1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12所収）
113. 雪ノ下一丁目370番1地点（土屋浩美1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14所収）
114. 雪ノ下一丁目369番1地点（原1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14所収）
115. 雪ノ下一丁目367番1・368番1地点（宮田ほか2000『北条小町邸跡（泰時·時頼邸）　—鎌倉市雪ノ下一丁目367番1・368番1—医療法人養生院介護老人保護施設かまくらシルバーホーム用地』北条小町邸跡発掘調査団）
116. 雪ノ下一丁目400番1地点（馬淵2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18所収）
117. 雪ノ下一丁目440番の一部（馬淵2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19所収）
118. 雪ノ下一丁目407番3の一部地点（原2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21所収）

北条時房・顕時邸跡（No.278）

119. 雪ノ下一丁目267番1地点（1978斉木調査、未報告）
120. 雪ノ下一丁目233番9他地点（馬淵1987『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3所収）
121. 雪ノ下一丁目273番ロ地点（原1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4所収）
122. 雪ノ下一丁目274番2地点（原1988『北条時房・顕時邸跡鎌倉市雪ノ下一丁目274番2地点発掘調査報告書』北条時房・顕時邸跡発掘調査団）
123. 雪ノ下一丁目271番-1地点（原1989『北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目271番-1地点発掘調査報告書』北条時房・顕時邸跡発掘調査団）
124. 雪ノ下一丁目265番3地点（田代ほか1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6所収・同1999『東国歴史考古学研究所調査研究報告第24集　北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番3地点—中世都市鎌倉中心域の調査—』東国歴史考古学研究所
125. 雪ノ下一丁目268番3地点（1990原調査、未報告）
126. 雪ノ下一丁目272番地点（宗臺1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14所収・同1997『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
127. 雪ノ下雪ノ下一丁目273番イ地点（瀬田ほか1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15所収・同1999『北条時房・顕時邸跡（No.278）』北条時房・顕時邸跡発掘調査団/鎌倉遺跡調査会）
128. 雪ノ下一丁目271番3地点（馬淵2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16所収）
129. 雪ノ下一丁目271番4地点（馬淵2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16所収）
130. 雪ノ下一丁目264番4地点（福田誠ほか2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21所収）

宇津宮辻子幕府（No.239）

131. 小町二丁目354番2地点（1977松尾調査、未報告）
132. 小町二丁目366番1地点（1990手塚調査、未報告）
133. 小町二丁目354番12外地点（田代1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9所収）
134. 小町二丁目354番（1992・1993田代調査　未報告）
135. 小町二丁目389番1地点（佐藤仁彦1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12所収）
136. 小町二丁目361番1地点（原ほか1997『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13所収・同1996『宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書　小町二丁目361番1地点』宇津宮辻子幕府跡発掘調査団
137. 小町二丁目373番1の一部地点（1998原調査、未報告）

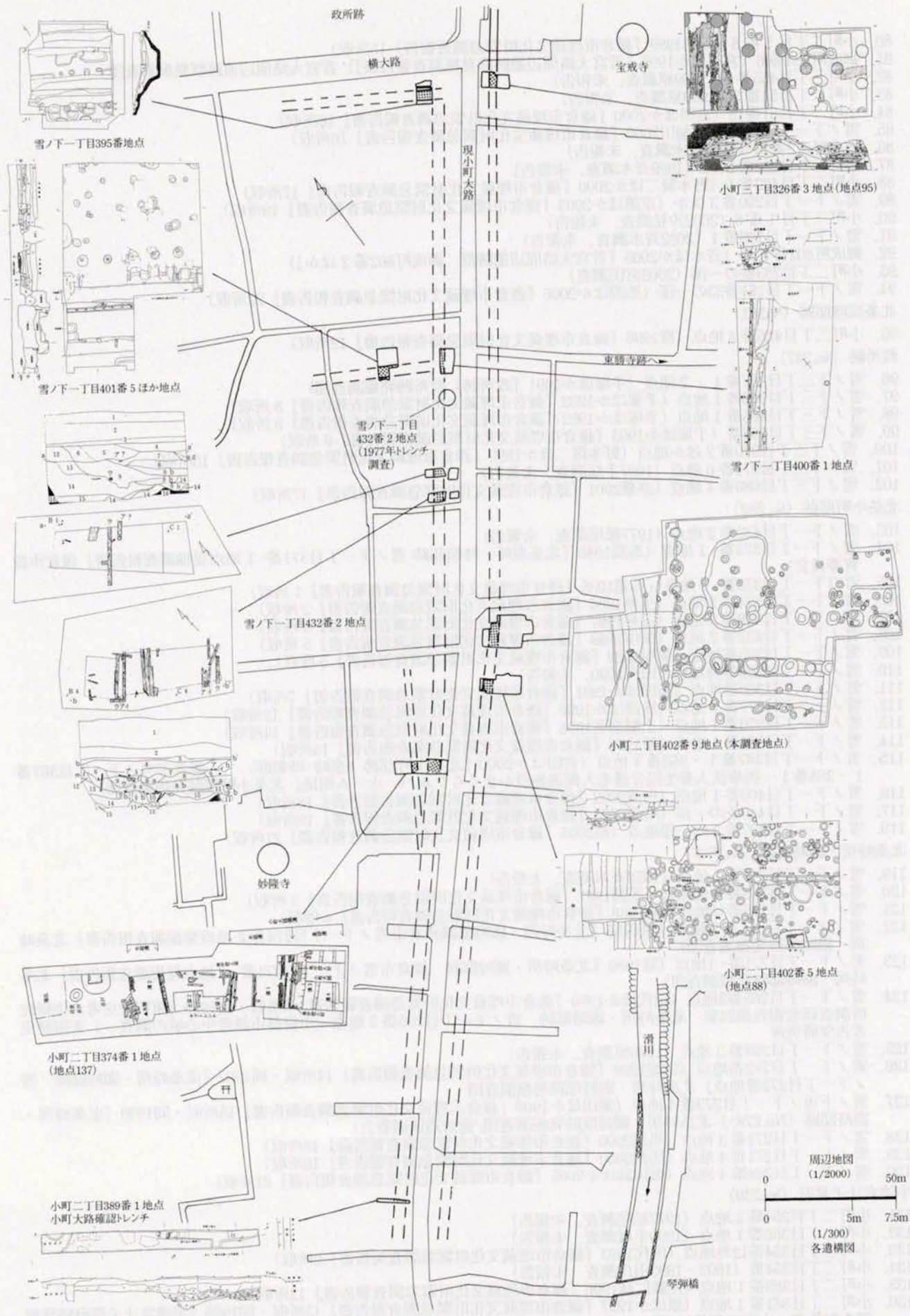

政所跡
横大路
宝戒寺
現小町大路
雪ノ下一丁目395番地点
小町三丁目326番3地点(地点95)
雪ノ下一丁目401番5ほか地点
東勝寺路へ
雪ノ下一丁目
432番2地点
(1977年トレンチ
調査)
雪ノ下一丁目400番1地点
雪ノ下一丁目432番2地点
小町二丁目402番9地点(本調査地点)
妙隆寺
小町二丁目402番5地点
(地点88)
小町二丁目374番1地点
(地点137)
滑川
小町二丁目389番1地点
小町大路確認トレンチ
琴弾橋
周辺地図
(1/2000)
0
50m
0
5m
7.5m
(1/300)
各遺構図

図2　近隣の調査成果

市内中心部は郡内ではおそらく鎌倉郷にあたり、調査地点はその東域に位置していたとみてよい。この時代、南の海岸沿いに大化元年（645）から宝亀二年（771）まで東海道が通っていた。また、北の山際にも、現在の北鎌倉から鶴岡八幡宮辺を通過して東京湾側の六浦に抜ける道（「六浦道」＝県道金沢鎌倉線）が存在していたと推測される（馬淵1994）。両者の中間に位置しているのが鎌倉郡衙であり、したがって現在の今小路の前身となる道がこの当時からあったと考えられる。東海道は、当時その終点であった常陸国府に向け、馳水海（はしりみずのうみ）（横須賀市走水付近の浦賀水道）から房総に渡った。しかし、宝亀二年（771）の五畿七道制改編で常陸国に替わって武蔵国が東海道に編入されるにともない、海道は鎌倉・三浦半島を外れ相模原を抜けるようになる。それ以降おそらく馳水海も海路としては衰退していったであろう。代わって次第に港として発展していったのが六浦津だったと考えられる。

鎌倉には広範囲に集落が存在していたようで、市街地のほぼ全域で当該期の遺物が採集され、竪穴住居や掘立柱建物の検出例も漸増している。本地点から西南約200mの地点134では石帯部材の駝尾も出土しているので（未報告、調査者継実示教）、この近辺でも律令の官吏の往来があったことがわかる。地点112では盤状坏も発見されている（馬淵1996）。

平安時代後期

鎌倉郡衙は、報告書によれば「10世紀のある時点」で終末を迎える（河野ほか1990）。代わって鎌倉を領したのは、桓武平氏貞盛流であった。この一統は、10世紀末頃に相模介となった平維将に始まる。11世紀半ば、維将の孫直方は女婿の源頼義に所領の鎌倉を譲る。康平六年（1063）「秋八月」、頼義は源氏の氏神である石清水八幡宮を鎌倉由比郷に勧請した。このことは頼義がみずからの本拠を鎌倉に定めたということであり、鎌倉は名実ともに源氏のものとなった。頼義の居館は『保暦間記』慶長古活字本（和泉書院『校本　保暦間記』）によればのちの大倉幕府の地にあったともいうが、確実ではない。

12世紀中葉、鎌倉を統べていたのは源義朝であった。彼の居館は現在の寿福寺にあり（『吾妻鏡』正治二年閏2月12・13日条）、現在「六浦道（路）」と呼ばれる東の朝比奈からきた道は、大倉の辺から、ほぼ直線的にその門前に到達した（馬淵2002）。平安時代末期、この道の要所は三浦一族が固めていたとされる。調査地点もこの道から至近の位置にあるので、何らかの影響下にあった可能性は高い。

平安時代末期の鎌倉にはかなりの数の寺社があり、12世紀初頭までに都市神の勧請もおこなわれているので、このころすでにかなりの集住形態が形成されていたことが推測できる（野口1993・馬淵1994）。市内のいくつかの地点からは、若宮大路と異なる軸線を持つ平安後期の溝の検出が相次いでおり、また鎌倉幕府以前に属する遺物の出土も珍しいことではない。

鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北の鶴岡八幡宮と政所跡比定地は北約220m、東側には幕府終焉の地である東勝寺、南西には宇津宮辻子幕府跡比定地（嘉禄元年＝1225以降）がある（文中「比定地」としたのは鎌倉市教育委員会による遺跡名称）。北の至近距離にある宝戒寺はもと北条高時邸と伝える場所である（「足利尊氏寄進状案」『鎌倉市史　史料編』1-413）。そして当遺跡前面から北西一帯は北条氏の小町邸跡とも「若宮大路幕府」跡ともいわれる場所である。以下、『吾妻鏡』によってこの付近の状況をみてみよう。嘉禄元年（1225）7月11日に北条政子が死ぬと、前年第三代執権に就任したばかりの泰時はただちに「御所」移転を計画した。10月3日に計画が群議され、翌4日に候補地を巡検、12月にははやくも宇津宮辻子に新御所が完成し、20日には将軍九条頼経移徙の儀がおこなわれた。これにより政治の中心が大倉の地から若宮大路一帯に移行すると同時に、町割りの基本軸が古代以来の東西軸（山内道～六浦道）から南北軸に移行した。11年後の嘉禎二年（1236）、幕府と持仏堂などを「若宮大路東頰」に新造する（三月廿日条）。その場所については議論がある。本地点とも関連す

秋山哲雄によれば、建保元年（1213）頃遺跡名称「北条小町邸跡」（以下「」付きでこの呼称を使う場合は神奈川県遺跡台帳上でのものとする）の方形区画北半部に泰時亭、宝戒寺の場所に義時亭があり、嘉禄元年に幕府が宇津宮辻子に移転した後は、嘉禎二年の幕府再移転まで方形区画全体を泰時亭が占めるようになる。この年、「若宮大路東頬」へ再移転した後、遺跡地は三つに分割される。すなわち南側に幕府、北側に経時亭、その間に泰時亭がある。秋山は、宝治元年（1247）以後経時亭および泰時亭は合わせて重時に相伝され、一方宝戒寺の地が得宗亭となるという。秋山は時宗以後の「北条小町邸跡」方形区画については、南半部に幕府を想定し、北域は不明としている（秋山1996）。

調査地点南方約50mの地点137では小町大路側溝とみられる大溝が発見された（原1998）。その大溝のすぐ脇に軸線がそれよりも西に振れる、若宮大路にほぼ平行した別の溝も検出されており、ここからは「三丈　せきのやまの□□　宗近」と書かれた木簡が出土した。この人名木簡は従来若宮大路側溝からのみ出土していたもので、幕府が公共事業を御家人に課役として割り当てた工事区間の表示札と考えられている。若宮大路に平行した軸線をもつ小町大路脇の溝が何であるか、議論が必要だが、木簡の理解が正しければ若宮大路以外の道路側溝も公共事業としておこなわれた可能性を示唆している。なお小町大路東側側溝が地点95・88で検出されており（原1996・野本2001）、道幅を推定することが可能になりつつある。

鎌倉時代の小町大路沿いには有力な武士が多く住んでいた。『吾妻鏡』によれば、建久二年（1191）3月4日丑の刻「小町大路辺」から失火、強い南風に煽られて北へ燃え移り、幕府（大倉）や鶴岡八幡宮神殿・廻廊・経所を灰燼に帰さしめ、鶴岡馬場本の塔婆にいたってようやく鎮まった。この間、北条義時（江間殿）・相模守大内惟義・村上判官（基国）の館はもとより、小町大路沿いにあったらしい比企右衛門尉（能員）・同藤内（朝宗）・佐佐木三郎・法橋昌寛・新田四郎・工藤小次郎・佐貫四郎以下人屋数十宇が焼亡した。火は大路西側には移らなかったようなので、これらはすべて東側の屋敷ということになる。御家人屋敷を列挙する『吾妻鏡』のこの記述のうち最初の３人は幕府顕官で、なかでも義時を筆頭に挙げるのは地位を慮ったものだろう。大内惟義・村上基国の両名の館は、するとおそらくその周辺にあったのであり、延焼の順に挙げられたのではないかもしれない。しかし他の御家人名は、あるいは延焼の順に沿った可能性があろう。

南北朝時代

南北朝時代の本地点付近の様子はあまりよくわかっていないが、日蓮宗中山門流の鎌倉における拠点叡昌山妙隆寺は調査区西南の至近位置にある。

妙隆寺は小町大路西側にある日蓮宗寺院で、「日蓮辻説法跡」との石碑の立つ場所の北（八幡宮方向）100mほどにある。一帯は鎌倉幕府の有力御家人であった千葉常胤の子孫胤貞（1288～1336）の故地（別邸か）と伝え、一般に「千葉屋敷」とも呼ばれている。胤貞は下総に広く保有する領地を積極的に経営し、自家とその氏寺である下総中山法華経寺の勢力を固めた人物である。胤貞が祖先追福のため至徳二年（1385）七堂伽藍をととのえ、中山法華経寺の日英上人を開山にむかえたという。しかし、胤貞はすでに建武三年（1336）に没しているので、これはのちの付会ということになる。以後妙隆寺は鎌倉における中山門流の拠点となった。

室町時代以後

調査地点南約400mの小町大路東側には商業の神である蛭子（ひるこ）神社があり、さらに南の「大町四ツ角」近くには町衆の信仰を集めた八雲神社がある。室町時代から戦国時代にかけて、一帯は町衆の往来する賑やかな場所であったようである（藤木1993）。

「小町大路」について

本地点の面している南北街路が「小町大路」であるのは間違いない。小町大路は、先に述べた北の山際と南の海岸沿いを通る2本の東西幹線道路を結ぶ南北道の1本であり、早くから開けていたと考えるのが自然であろう。治承四年（1180）12月12日、頼朝が街並み改造に着手した（「閭巷直路。村里授号」）とき、あらためて整備されこの名称が付されたと考える。しかし、「小町大路」がどこからどこまでを指すかについては議論がある。要点を整理しておきたい。

「小町大路」の史料上の初出は『吾妻鏡』建久二年（1191）三月四日条で、この日丑刻「小町大路辺」で失火があり、強い南風にあおられて北条義時邸（現宝戒寺か）をはじめ御家人らの「人屋」数十宇が焼け、鶴岡八幡宮や幕府も炎上した。このとき600～700m南の比企能員邸（現妙本寺）も燃えているので、小町大路一帯は軒並み罹災したことがわかる。調査地点も確実に火に被われたはずである。

小町大路にかかわっては、「口」とついた地名が3箇所にみえる。まず北では、宝戒寺門前の交差点が「白幡谷口」として、貞和四年（1348）十一月一日付「恵鎮書状」に出てくる（「宝戒寺文書」『鎌倉市史史料編』1-421）。この交差点には石塔が立っていたといわれ、「塔ノ辻」と呼ばれていた（『新編鎌倉志』）。ニノ鳥居から東に出たところが「小町口」で、蛭子神社に突き当たる丁字路がそれである（『吾妻鏡』建長四年四月一日条など）。そして「米町口」の地名が、『吾妻鏡』建暦三年（1213）五月二日条の和田合戦の記事に「若宮大路米町口」とみえる。高柳光寿は「小町口」について若宮大路ニノ鳥居の東脇のように解釈している（高柳1959、286頁）。しかし、建長四年四月一日条には将軍・親王宗尊鎌倉「下向」の際の路次として「中下馬橋東行。経小町口。入御相州御亭。」とあるから、道筋からいってその先の丁字路とみるべきであろう。宝戒寺前の「塔ノ辻」といい、「小町口」といい、いずれも小町大路にある名称ということになる。「米町口」について高柳は「小町口」と同様若宮大路から米町に出る道、すなわち若宮大路下馬四ツ角東脇、としているが（高柳1959、267頁）、他の二地点と同じく「米町口」もまた小町大路の道筋にある名称と考えるのが自然であろう。なお先の建暦三年五月二日条に「又米町辻大町大路等之切処合戦」とあり、「米町辻」とは現在の「大町四ツ角」のこととしか考えられないので、結局「米町口」と「米町辻」とは同一場所とみなければならない。

さて、これら「口」のついた地名は、いずれも鎌倉中核部の東側縁辺に位置する。若宮大路西側の南北街路である今大（小）路には、「口」のついた場所は史料に現われない。「口」とは幕府など鎌倉中核施設を意識の主格に置いた呼称だろう。しかし「小町大路」がどこからどこまでかという点については、いまだ確定的ではなく、そのことが、名称上の対比性が感じられる「大町大路」の位置についても不明確にしている。まずは簡単にこれまでの説をみておこう。

貞享二年（1685）完成の『新編鎌倉志』「巻之七」に、「小町は、若宮小路の東より南へ折て行（(ママ)）、夷堂橋の間を云。」とある（『大日本地誌大系』本）。ここにいう「小町」は、地区の名称と通りの名称の両様にとれはっきりしないが、これを信じるとすれば現在の宝戒寺門前の交差点から現本覚寺の門前（夷堂）付近まで、ということになる。『新編相模国風土記稿』も同様で、小町の「通衢（つうく）」を「小町大路」、大町の通衢を「大町大路」とする。これらによれば、「小町大路」と「大町大路」は連続した一本の南北通りということになる。しかしこれに史料的裏付けはなく、地誌編纂時点の地域呼称に従っただけの可能性もある。高柳光寿は『鎌倉市史　総説編』でこれを誤りとして、小町大路を横大路宝戒寺交差点前から材木座九品寺付近までとし、大町大路を西の六地蔵交差点から北東の下馬四ツ角を経て東の名越山裾まで通じた東西道（旧国道134号線）とする（高柳1959）。

この点について田代郁夫は、『吾妻鏡』にみられる「小町大路」のさまざまな記事を検討した上で、この名称がいずれも幕府付近の鎌倉中枢域にしか現われないとして、高柳説を否定し、『新編相模国風土記稿』を支持している。すなわち小町大路と大町大路は南北に連なった1本の道だとし、その境を

『風土記稿』のいう夷堂橋とした（田代1998）。『吾妻鏡』の関連記事を掲出しておく。

建久二年（1191）三月四日　「南風烈。丑尅小町大路辺失火。」

この火事で北条義時以下の人屋数十宇が焼亡し、鶴岡八幡宮や幕府等も罷災した。

建保五年（1217）四月五日　「陰入夜。小町大路騒動。是式部大夫家人成田次郎与奥州住人深沼五郎闘争。」

式部大夫は北条泰時であり、その家人成田次郎と奥州住人深沼五郎がいさかいを起こしたらしい。

寛喜二年〈1230〉十二月九日　「亥尅。竹御所。入御干営中。是御嫁娶之儀也。起楚忽。為密儀之間。非晴儀。且被用御輿。経小町大路。入御於南門。」

妙本寺境内北域に住む竹御所が、四代将軍九条頼経との婚礼で小町大路を経て将軍御所に南門から入った。このときの将軍御所は宇津宮辻子なので、その南門といえば小町口から若宮大路に向かって少し入ったあたりということになる。妙本寺は小町口の180mほど南側にあり、両者の位置関係から、少なくとも小町口からいくらか南に下ったあたりまでは小町大路と呼ばれていたことがわかる。おそらくやはり夷堂橋までそう呼ばれていたのであろう。

文暦二年（1235）六月二十九日　「依可有明王院〈五大尊堂〉。供養。将軍家為御参堂出御。（中略）御出於南門。小町大路北行。塔辻東行。」

将軍藤原頼経が五大堂の供養に出るのに、幕府（宇津宮辻子御所）南門を出て小町大路を北行した。この「塔辻」とは「白幡谷口」（現在の宝戒寺前交差点）のことである。

建長四年（1252）四月十四日　「将軍家始御参鶴岳之八幡宮。（略）。路次。小町大路北行。政所西行。到鳥居南下御。」

将軍となった親王宗尊が初めて鶴ケ岡八幡宮に参拝したときの記事。当時は若宮大路「東頰」に幕府があったが（若宮大路御所）、やはり小町大路に出て北行している。

建長五年（1253）正月三日「（前略）。経小町大路。入御相州南門。（後略）。」

将軍家年始の椀飯の後、御行始として北条時頼第に出御したときの記事である。掲出記事以前に、将軍家の南門より出たとあり、小町大路を経て時頼邸南門にいたっている。

以上の記事では、たしかに田代のいうように「小町大路」は幕府などのある鎌倉中核部北域にしか現われない。しかしこの点は、記事の対象がこの付近にあることが理由かも知れず、決定的な証左とはなりえまい。一方「大町大路」の呼称は、先に挙げた『吾妻鏡』建暦三年（1213）五月二日条の和田合戦の記事に一度だけみえる。「於米町辻大町大路等之切処合戦」の「切処」とは戦の際の要所、といったほどの意味であろう。

注目されるのは『吾妻鏡』に5回出てくる「町大路」という呼称である。正元二年（1260）三月二十一日条に、時頼たちの一行が町大路を南行して御所の東門に入る、という記事があるので、少なくともこの「町大路」は「小町大路」と同じ場所を指している。先の和田合戦の時には、若宮大路や名越、大倉などと並び防衛の地域単位として「町大路」が出てくる（建暦三年五月三日条）。なぜ「小町大路」といわず、「町大路」というのだろうか。容易に想像できるのは、「町大路」とは小町と大町両方の大路の総称ではないか、ということであろう。正元二年三月二十一日条は、両者を厳密に区別せずに呼んだだけではないか。こうしてみると、田代のいうように、小町大路と大町大路が連続した南北道である可能性は低くない。しかし、その場合重大な疑問が残る。

現況では下馬四ツ角交差点東北角で建物により寸断されているためわかりにくくなっているが、かつて、東は名越の現安国論寺から西は笹目の現御成中学校門前にいたる東西の直線道路があった。この道は若宮大路と下馬四ツ角交差点でほぼ直交する。下馬四ツ角から南西に伸びて六地蔵にいたる道はおそ

らく古来の幹線道（律令時代の東海道か）の名残であろうし、四ツ角から東もおそらく古街道を踏襲したものであろう。しかし、この東西の直線道のうち、とくに若宮大路から西の御成中学門前までの西半分は、おそらく鎌倉時代になって整備もしくはあらたに敷設されたものに違いない。この東西道路は西の山裾から東の山裾まで鎌倉平坦部を横断する唯一のものである。今小路と交差する地点には今も「塔ノ辻」の地名を残す。ここにも先の宝戒寺前と同様、石塔が立っていたという（『新編鎌倉志』）。宝戒寺前が鬼門で、こちらが裏鬼門と認識されていたのであろう。このことは明らかに、「鎌倉中」でもこの道路が空間を分かつ重要な境界線であったことを示している。当然、相応の大路名が与えられていたとみるべきであろう。『吾妻鏡』にみえる東西道としては、もうひとつ、「車大路」が知られている。上記の直線道路をこれに比すべきであろうか。しかし後述する理由により、それも無理といわざるをえない。田代のいうように大町大路を南北の通りだとすると、結局、この道に与えられるべき名称がなくなるのである。それは考えにくいことではないか。

次に「車大路」についてみてみよう。

『吾妻鏡』安貞二年（1238）十月十五日条に、将軍頼経が方違のため御家人小山下野入道生西（朝政）の「車大路家」に行ったとある。家は子の長村に伝領される。建長四年（1252）五月十七日に将軍・親王宗尊の方違がそこに定められた。家は時頼邸の正南にあるという（同日条）。この場合の「正南」とは、若宮大路を子午線に見立ててのことである。またこの家は「若宮大路家」とも呼ばれている（嘉禎二年－1236－四月四日条・文応元年－1260－十一月二十二日条）。時頼邸は若宮大路の東側にある。「若宮大路家」というからには、小山邸は若宮大路の東側に面しているとみなければなるまい。

これらの記事が示すのは、高柳がいうように（高柳1959、271頁）、小山家が若宮大路と車大路の交差点北東角に位置するということである。仮に御成中学校門前から名越安国論寺までの東西道路を車大路に充てるとすると、下馬四ツ角交差点北東角に相当する。ところがこの一帯は滑川にほど近く、筆者はかつて試掘したことがあるが、中世期は河川敷であった。大路東側の米町を描いた、明応六年（1497）頃成立の有名な『善宝寺寺地図』にも、扇カ谷川と滑川との合流地点としてここが描かれている。要するに、小山氏のような大身の武士の居館が確保できるような空間はここには存在しない。この事実は、御成中学校門前から名越安国論寺までの直線道路を車大路に比定するのが無理であることを示している。すると、結局のところこの道には名前がないことになる。繰り返すが、市街地の西の山裾から東の山裾にいたる唯一の大路にして、それはいかにも不自然なことではなかろうか。

これ以上の詳細は別項に譲るが、いずれにしてもこのように「大町大路」が確定しない以上、「小町大路」の範囲についてもいまだ決められないのである。

【引用・参考文献は第４章末尾に一括】

（馬淵）

第２章　調査の概要

１．調査にいたる経緯と経過

本調査は、個人住宅の建築申請に伴い発掘調査を実施した。調査期間は、平成4年3月10日から同年５月18日である。表土は重機により約20～40㎝排除し、これより以下は人力による掘削、排土処理を行い、遺構の検出・遺物発見を実施、測量・写真撮影等の記録保存を行なった。排土は場内処理した。

調査に際して、調査区の形状に沿って任意に測量用の基本軸を設定し、これをもとに５ｍ毎に方眼を割り付けた。東西軸は算用数字、南北軸にはアルファベットを付している。任意で設けた基準点には鎌倉市４級基準点を基に国土座標軸を算出して与えた（図２）。なお調査軸（アルファベット軸）は磁北から36°25′東に振れる。

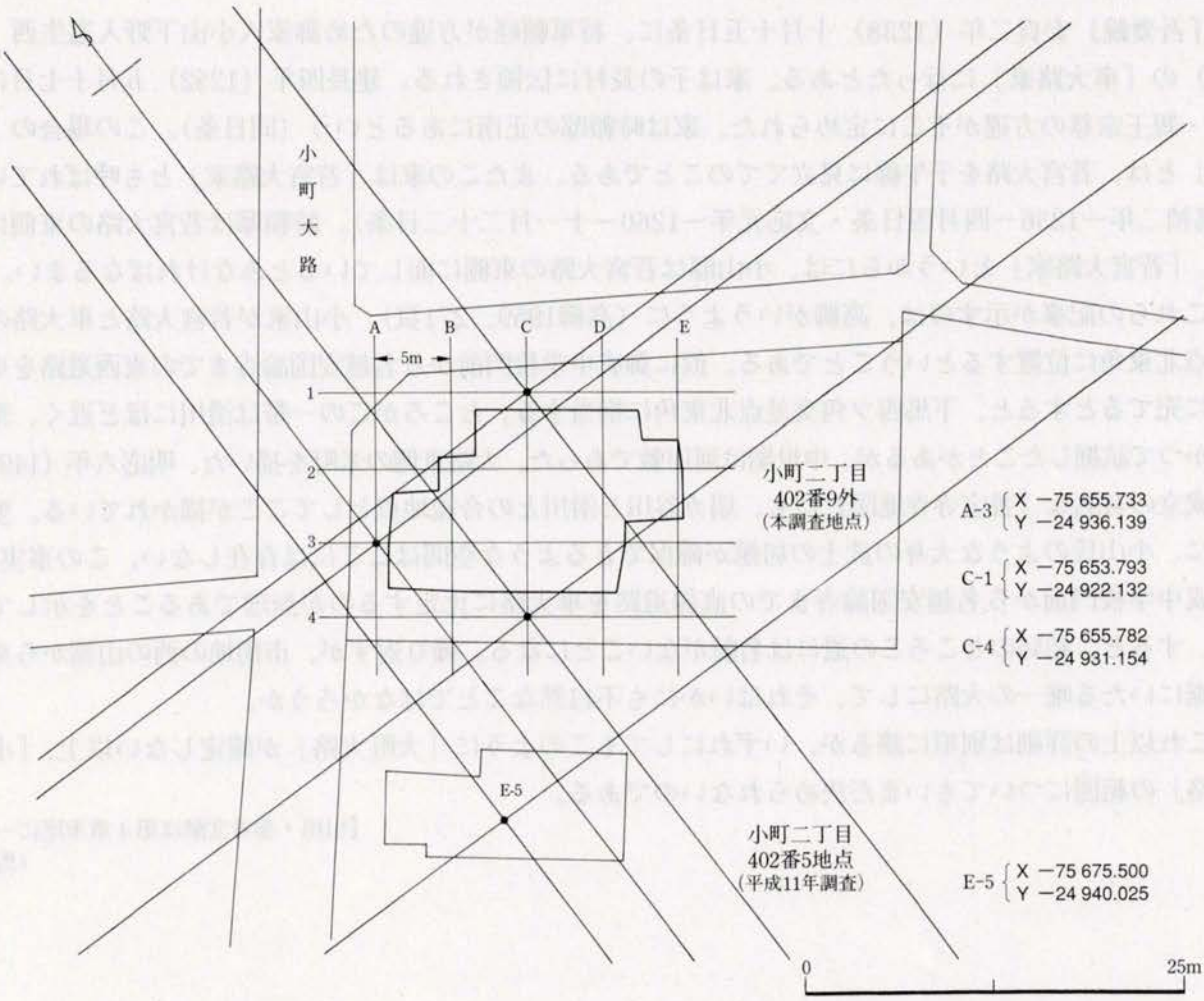


図３　調査区設定図

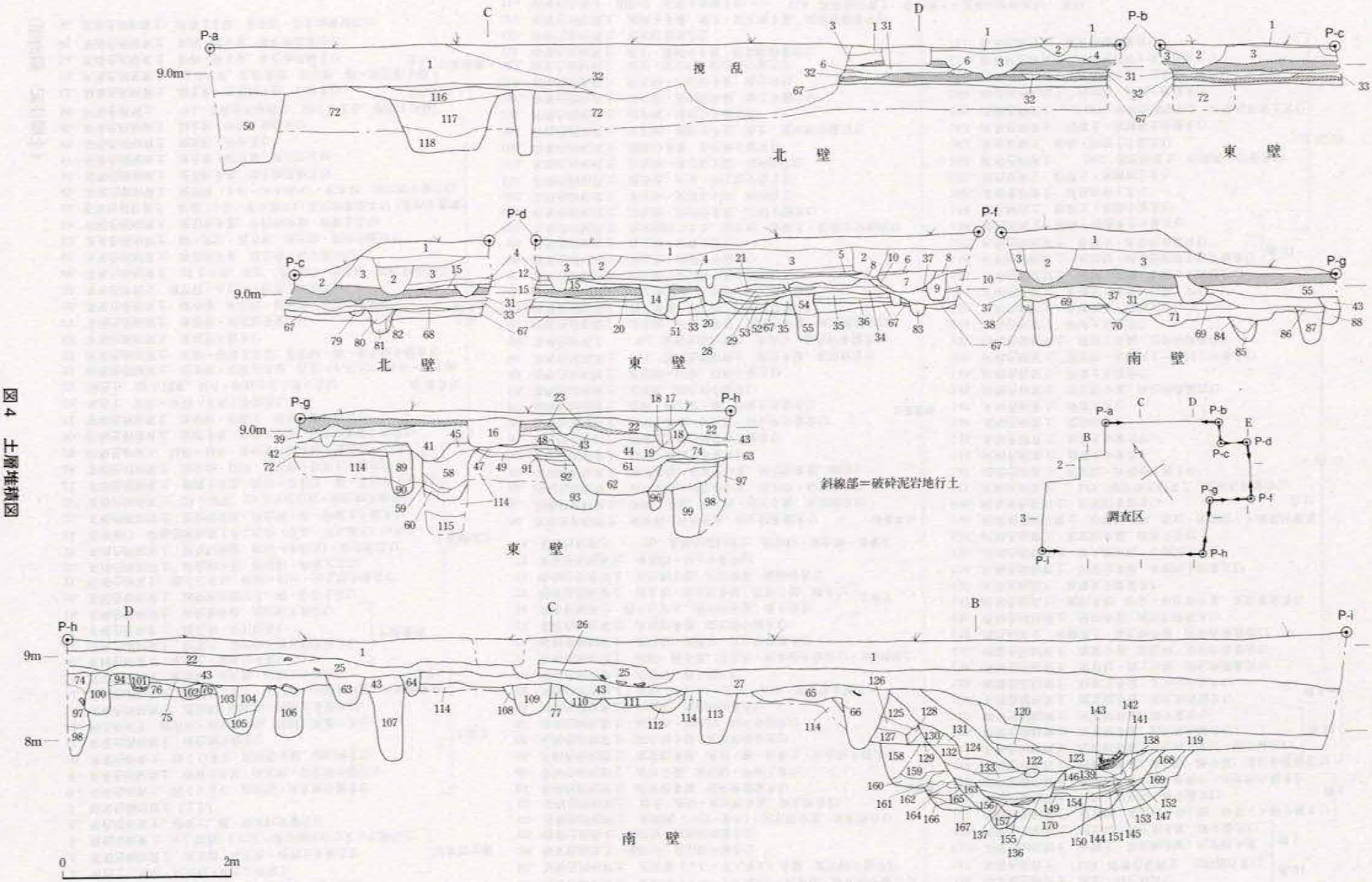


図4　土層堆積図

1．表土　2．泥岩塊による根固め（近・現代）

3．褐色土　泥岩・泥岩粒・礫含む砂質土
4．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物・砂質土多量含む
5．褐色弱粘質土　4と同質。4に比べ泥岩細粒がつまった地行土
（中世包含層）

6．褐色弱粘質土　砂質土、礫・泥岩粒少量含む
7．暗褐色弱粘質土（土7）
8．茶褐色粘質土　固くしまる。泥岩粒・炭化物少量含む
9．茶褐色弱粘質土　砂質土多量、泥岩粒・炭化物少量含む
10．茶褐色砂質土　固くしまる。泥岩粒少量、炭化物含む。
11．暗褐色弱粘質土　炭化物少量含む
12．褐色砂質土　泥岩粒・炭化物少量、粘質土微量に含む
13．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物・砂質土多量含む
14．茶褐色弱粘質土　脆弱なしまり。泥岩粒・粘質土少量、炭化物微量含む
15．茶褐色砂質土　泥岩粒・炭化物・粘質土少量含む
（1面上）

16．茶褐色砂質土　粘質土・褐鉄分少量含む
17．茶褐色弱粘質土　砂質土、炭化物・泥岩粒微量含む
18．茶褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒含む
19．茶褐色弱砂質土　炭化物多量、泥岩粒少量含む
（1面遺構）

20．茶褐色弱粘質土　細粒泥岩地行土、礫・砂質土含む
21．灰褐色砂質土　固くしまる。貝砂・貝片・炭化物少量含む
22．茶褐色弱粘質土　炭化物少量、泥岩粒・砂質土含む
23．茶褐色弱粘質土　炭化物微量、泥岩（小石大）・泥岩粒含む
24．泥岩地行　暗褐色弱粘質土中に泥岩（小石～半人頭大）つまる
25．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物・礫・砂質土少量含む
26．茶褐色弱粘質土　25と同質。25より泥岩粒・炭化物少量含む
27．茶褐色弱粘質土　砂質土多量、泥岩・泥岩粒・礫・炭化物少量含む
（1面構成土）

28．茶褐色弱粘質土　炭化物・貝砂・泥岩粒・砂質土少量含む
29．灰褐色砂質土　貝砂・貝片・炭化物、泥岩粒少量含む
（1面下）

30．灰褐色弱粘質土　貝砂多量、砂質土少量、炭化物微量、礫含む
31．暗褐色弱粘質土　泥岩粒・砂質土・貝砂・礫多量含む
32．褐色土　貝片・貝砂・砂質土多量含む
33．褐色土　32と同質。貝片・砂質土より多く含む　（微量含む）
34．暗褐色弱粘質土　泥岩粒・粘質土多量、泥岩（小石大）・貝砂・炭化物
35．灰褐色弱粘質土　貝砂・粘質土多量、泥岩粒・礫・炭化物少量含む
36．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量含む
37．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物多量含む
38．茶褐色弱粘質土　礫多量、泥岩粒・炭化物・砂質土少量含む
39．茶褐色砂質土　泥岩粒・炭化物・粘質土少量含む
40．茶褐色弱粘質土　37と同質。泥岩（小石大）・泥岩粒・炭化物多量含む
41．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物・礫少量含む
42．茶褐色弱粘質土　礫・泥岩・泥岩粒、炭化物・貝砂少量含む
43．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物少量、砂質土含む
44．茶褐色弱粘質土　泥岩（小石～半人頭大）、炭化物微量含む（道路状遺構）
45．茶褐色弱粘質土　泥岩塊（小石～半人頭大）・泥岩粒、炭化物少量含む
46．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物微量含む
47．茶褐色弱粘質土　炭化物・礫少量、泥岩粒含む
48．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・泥岩含む
49．暗褐色弱粘質土　炭化物・砂質土微量含む
（2面構成土）

50．灰褐色砂質土　51．茶褐色弱粘質土　固くしまる。粘質土少量含む
52．暗褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒少量、貝砂含む
53．灰褐色弱粘質土　35と同質。貝砂多量、炭化物・礫・泥岩粒少量含む
54．茶褐色弱粘質土　貝砂・礫多量、炭化物微量含む
55．茶褐色弱粘質土　貝砂・礫少量、炭化物微量含む
56．茶褐色弱粘質土　砂質土多量、泥岩粒・炭化物微量含む
（2面遺構）

57．茶褐色弱粘質土　泥岩塊（小石～半人頭大）・泥岩粒、炭化物少量含む
58．茶褐色弱粘質土　泥岩塊（小石～半人頭大）多量、泥岩粒少量含む
59．暗褐色粘質土　褐鉄分、泥岩粒少量含む
60．暗褐色粘質土　褐鉄分、泥岩粒微量含む
61．茶褐色弱粘質土　泥岩塊（小石～拳大）・泥岩粒少量、炭化物含む
62．茶褐色弱粘質土　焼土・泥岩・泥岩粒少量、炭化物含む
63．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物微量含む
64．茶褐色弱粘質土　泥岩少量、泥岩粒・砂質土含む
65．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、泥岩・礫・砂質土・炭化物少量含む
66．暗褐色弱粘質土　炭化物少量、泥岩粒微量含む
67．暗褐色弱粘質土　炭化物・褐鉄分・貝片少量含む
68．茶褐色弱粘質土　泥岩粒、炭化物少量含む
69．茶褐色弱粘質土　泥岩（小石大）・貝片・貝砂、炭化物少量含む
70．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・礫少量含む
71．茶褐色弱粘質土　貝砂・礫多量、炭化物・泥岩粒少量含む
（2面遺構）

72．暗褐色弱粘質土　泥岩粒・褐鉄分・炭化物微量含む
73．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物少量含む
74．黄褐色粘質土　固くしまる。泥岩粒多量、焼土含む
75．暗褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒多量、泥岩少量、礫含む
（2面下）

76．暗褐色弱粘質土　炭化物少量、泥岩微量、褐鉄分含む
77．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・焼土少量含む
78．黒褐色粘質土　79．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物・砂質土
（3面構成土）

80．茶褐色弱粘質土　炭化物・貝片多量、炭化物微量含む　（多量含む）
81．茶褐色弱粘質土　砂質土多量、炭化物・貝片少量、泥岩粒含む
82．茶褐色弱粘質土　貝片多量、炭化物少量、泥岩粒・粘質土含む
83．灰褐色弱粘質土　貝砂多量、砂質土少量、炭化物微量、礫含む
84．暗褐色弱粘質土　貝砂・砂質土多量含む
85．暗褐色弱粘質土　砂質土多量、褐鉄分少量含む
86．茶褐色弱粘質土　砂質土多量、泥岩粒・炭化物少量含む
87．茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・礫・砂質土少量含む
88．茶褐色弱粘質土　泥岩粒、炭化物少量含む
89．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・泥岩、貝砂少量含む
90．茶褐色弱粘質土　91．茶褐色弱粘質土　泥岩少量、泥岩粒含む
92．茶褐色砂質土　93．暗褐色弱粘質土　褐鉄分、泥岩粒微量含む
94．暗褐色弱粘質土　炭化物・砂質土多量、泥岩粒少量、焼土微量含む
95．暗褐色弱粘質土　焼土多量、炭化物、泥岩粒微量含む
96．暗褐色弱粘質土　炭化物少量、泥岩粒・焼土微量含む
97．暗褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒少量、礫含む
98．暗褐色弱粘質土　炭化物・褐鉄分少量含む
99．暗褐色弱粘質土　炭化物・砂質土含む
100．茶褐色弱粘質土　泥岩細粒つまる。炭化物・砂質土・粘質土少量含む
101．暗褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒多量、泥岩少量含む
102．茶褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒少量、砂岩含む
103．茶褐色弱粘質土　礫多量、泥岩・炭化物少量含む
104．茶褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒少量、褐鉄分含む
105．暗褐色弱粘質土　褐鉄分多量、炭化物少量含む
106．暗褐色弱粘質土　炭化物・褐鉄分多量、焼土・泥岩粒少量含む
107．暗褐色弱粘質土　泥岩塊・褐鉄分多量含む
108．茶褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒多量、焼土少量含む
109．茶褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒多量、焼土含む
110．暗褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物少量含む
111．暗褐色弱粘質土　泥岩・褐鉄分少量、泥岩粒微量含む
112．暗褐色弱粘質土　泥岩粒微量含む
113．暗褐色弱粘質土　褐鉄分多量、焼土・炭化物少量、泥岩粒微量含む
114．暗褐色粘質土　褐鉄分、砂質土微量含む ―― 115．茶褐色粘質土　砂利質土・黄褐色砂粒含む　地山

116．暗茶褐色粘質土　泥岩・炭化物含む
117．黒褐色粘質土　118．暗褐色粘質土　土師器片含む
（溝21）

119．茶褐色弱粘質土　砂質土・炭化物多量、泥岩粒少量
120．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物多量、礫少量含む
（溝1）

121．茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩粒・炭化物・砂質土・礫少量含む
122．暗褐色弱粘質土　褐鉄・炭化物・礫少量含む
123．暗褐色弱粘質土　粘性強。炭化物・砂質土・泥岩粒少量含む
（溝6）

124．茶褐色弱粘質土　砂質土多量、泥岩粒・礫少量、炭化物微量含む
125．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物・泥岩・礫少量含む
126．暗褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物少量含む
127．暗褐色弱粘質土　泥岩粒多量、礫少量含む
（溝12）

128．茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量、炭化物微量含む
129．暗褐色弱粘質土　粘質土多量、泥岩粒少量含む
（溝8）

130．茶褐色弱粘質土　泥岩粒・焼土少量、炭化物微量含む
131．暗褐色弱粘質土　褐鉄少量、炭化物・泥岩粒微量含む
132．黒色粘質土　有機質土・炭化物少量、泥岩粒微量含む
133．暗褐色弱粘質土　褐鉄多量、泥岩粒微量含む
134．暗褐色粘質土　褐鉄多量、砂岩・炭化物少量、泥岩微量含む
135．灰褐色粘質土　有機質土微量含む
136．灰褐色弱粘質土　砂質土多量、有機質土微量含む
137．灰褐色弱粘質土　拳大泥岩塊・有機質土微量
138．灰褐色粘質土　泥岩粒少量、砂質土含む
139．暗茶褐色弱粘質土　砂質土多量、泥岩・泥岩粒・土師器片微量含む
140．暗茶褐色粘質土　泥岩粒多量含む
141．灰褐色砂質土　142．暗灰褐色砂質土　泥岩粒微量含む
143．暗褐色砂質土　泥岩粒・灰褐色土塊含む
144．灰褐色粘質土　砂質土少量含む
145．茶褐色砂質土　粘質土少量含む
146．茶褐色砂質土　泥岩粒含む
147．灰褐色粘質土　砂質土含む
148．灰褐色粘質土　泥岩粒少量、炭化物微量含む
149．灰褐色粘質土　砂質土多量含む
150．灰褐色粘質土　泥岩粒・有機質土・砂質土少量含む
151．灰褐色弱粘質土　砂質土多量、泥岩粒微量含む
152．灰褐色粘質土　砂質土少量含む
153．灰褐色粘質土　有機質土・砂質土含む
154．灰褐色砂質土　有機質土微量、粘質土含む
155．灰褐色弱粘質土　砂質土多量、有機質土少量含む
（溝15）

156．灰褐色弱粘質土　泥岩粒・暗褐色粘質土塊少量含む
157．灰褐色弱粘質土　砂質土・泥岩粒多量含む
（溝17）

158．黒色粘質土　褐鉄・有機質土少量含む
159．黒色砂質土　粘質土・褐鉄少量含む
160．黄褐色砂質土　黒色粘質土含む
161．黒色粘質土　砂質土・有機質土含む
162．黄褐色砂質土　163．黒色粘質土　有機質土少量含む
164．黒色粘質土　褐鉄・砂質土少量含む
165．灰褐色砂質土　粘質土・有機質土多量含む
166．黄褐色砂質土　167．暗褐色弱粘質土　灰褐色砂質土含む
168．暗茶褐色粘質土　泥岩粒・砂質土微量含む
169．暗茶褐色粘質土　灰褐色砂質土塊多量、泥岩粒少量含む
170．暗青灰色砂質土　灰褐色砂質土塊多量含む
171．灰褐色粘質土　青灰色塊多量含む
（土坑19）

（土層注記　鍛冶屋）

2．堆積土層

調査区北・南・東壁で確認した土層堆積図から堆積状況を上層より説明する（図３・４）。本調査地点における地表の海抜高は約9.5mである。第1面までは、調査区の東側で約20㎝。西側では約50～100㎝と西に行くほど表土が厚く堆積し、均一でない。西側は、中世後期以降に大きく削り取られ、粘性の強い砂質土に覆われている様子を確認した。畑地もしくは水田となっていたのかもしれない。調査区東側は、表土直下に中世遺物包含層を検出したが、調査区の西側が削平を受けていたこと、生活面としては希薄な層であったため、取りのぞき第1面を検出した。第1面は、調査区南側で、破砕泥岩によって地行された道路遺構の発見とともに、時期的には重複するがピット・土坑・溝など比較的良好に遺構を発見している。

第１面構成土は、炭化物・泥岩粒・少量の砂質土・貝砂と粗く砕いた泥岩を含む茶褐色粘質土である。（海抜９、20m）第1面構成土は約20㎝の厚さで堆積していた。同時期の遺構として報告しているが、Dライン以東、３ライン以北の調査区の凸部で発見した一部遺構は第1面上層の遺構である。Dライン以西は近世以降の削平により、上層の遺構を発見できなかった。

第２面は、第1面で発見した道路遺構下層から大型の柵列あるいは築地跡を想像させる大型の土坑による柱穴列を発見している。第２面構成土は炭化物・褐鉄・泥岩粒・貝砂少量と破砕泥岩を含む茶褐色弱粘質土が10～20㎝の厚さで堆積していた（海抜８、90m）。

第３面は、上層遺構に壊され、一部のみ破砕泥岩による地行が残る。溝・土坑・柱穴等の遺構を発見したが、短期間に生活面が何度か作り変えられている。第３面構成土は、炭化物・褐鉄・泥岩粒・貝砂・微量の焼土を含む茶褐色粘質土が約20㎝の厚さで堆積していた（海抜約８、70m）。

第３面構成土を取りのぞき中世基盤層と呼ばれる、褐鉄・微量の砂質土を含む暗褐色粘質土層の上面で発見した遺構を第４面とした（海抜８、40m）。溝・ピット・倒木址とともに、上層で発見した小町大路側溝下層から窪地を発見している。第4面検出後、調査区北壁沿いにトレンチを設置し、下層の遺構の確認、土層堆積の観察をおこなった。

鎌倉市街地遺跡での発掘調査の特徴として、表土から掘り下げて、堆積した土層の変化を観察し各層で遺構を発見・検出するが、それぞれの層で短期間に生活面の作り替えがおこなわれ、発見した遺構の全てが、同一の生活面の遺構とはいえない。本調査においても、第１面から第４面に分けて生活面を提示したが、各面の中で遺構の新旧が見られる。それぞれの関係については、本文および図面を参照していただきたい。

（伊丹）

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　概　要

本調査では、重機による表土掘削を行なった後、人力によって４面にわたる遺構面を検出した。調査によって発見した遺構と遺物を、下層より順に報告している。個別に、遺構図面を提示しなかったものについては文章中に（長軸×短軸×深さcm）で計測値を記した。他の遺構に切られるなどして、正確な遺構の形状が不明の場合は計測値に「？」が付してある。

第２節　各　説

1. 第４面の遺構と遺物

第４面検出レベルは海抜約8.4mを測る。第４面は、中世基盤層と考えられる暗褐色粘質土の堆積層上面で、土坑２基・溝１条・ピット11穴を検出した。調査区の東で土坑２基を検出しているが、風倒木址と思われるため説明を省いている（図５）。出土遺物は少量であり、発見した遺構も希薄であった。本調査地の北部、大倉から二階堂にかけては、弥生時代中期以降の遺構が発見され、調査地周辺でも当該期の遺物が発見、採集される為、調査区北壁際にトレンチを設け、第４面下層の状況を観察したが、中世基盤層が厚く堆積しており、中世以前の遺構・遺物の発見はできなかった。

土坑19（図６）

南北に長軸を持つ土坑状の窪み。調査区外に遺構が延びており、現況で長軸約390cm、短軸で約330cm、深さ約85cmを測る。南に遺構が延びることを南壁土層断面で確認している。土層の堆積状況から人

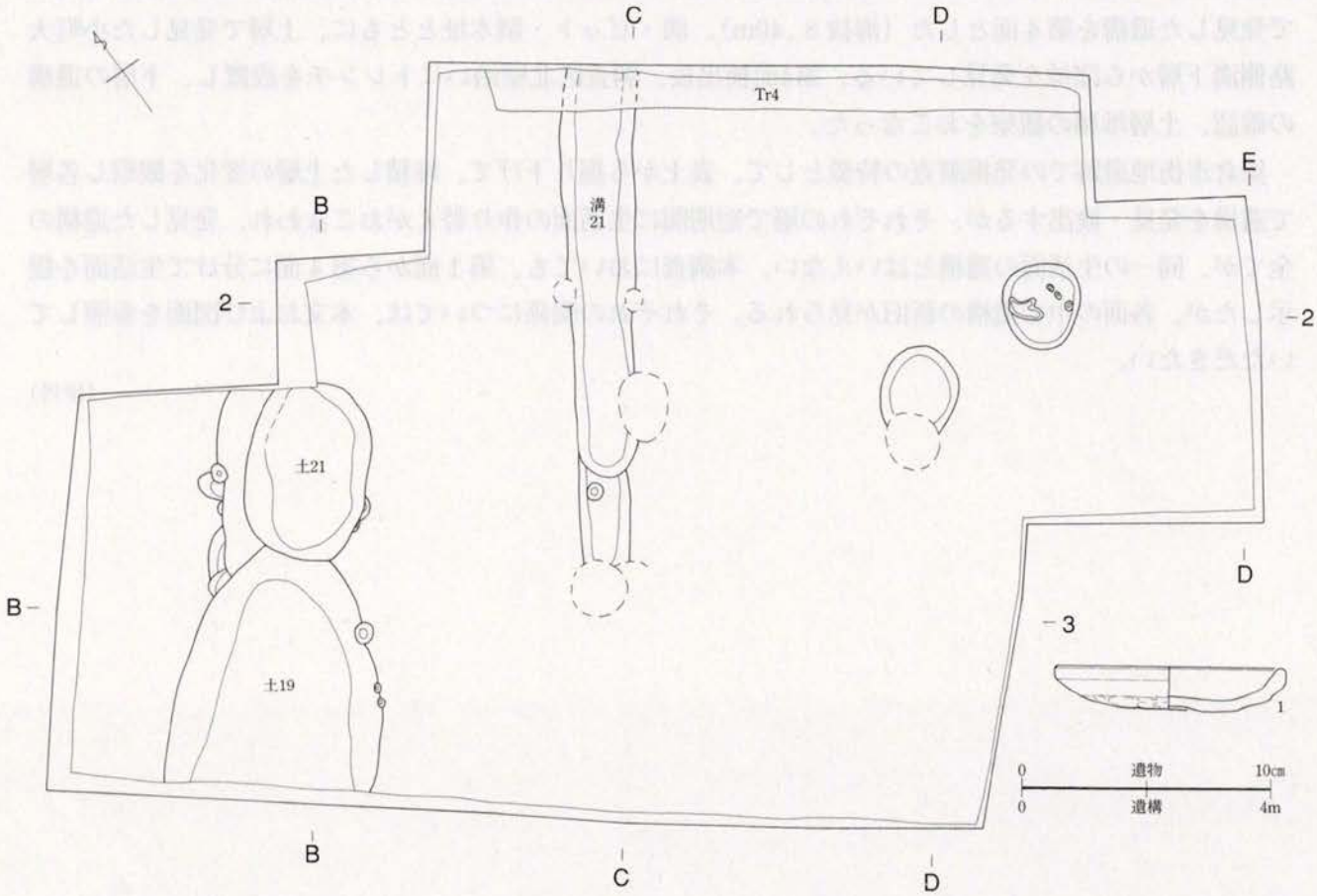


図５　第４面遺構全図、同出土遺物

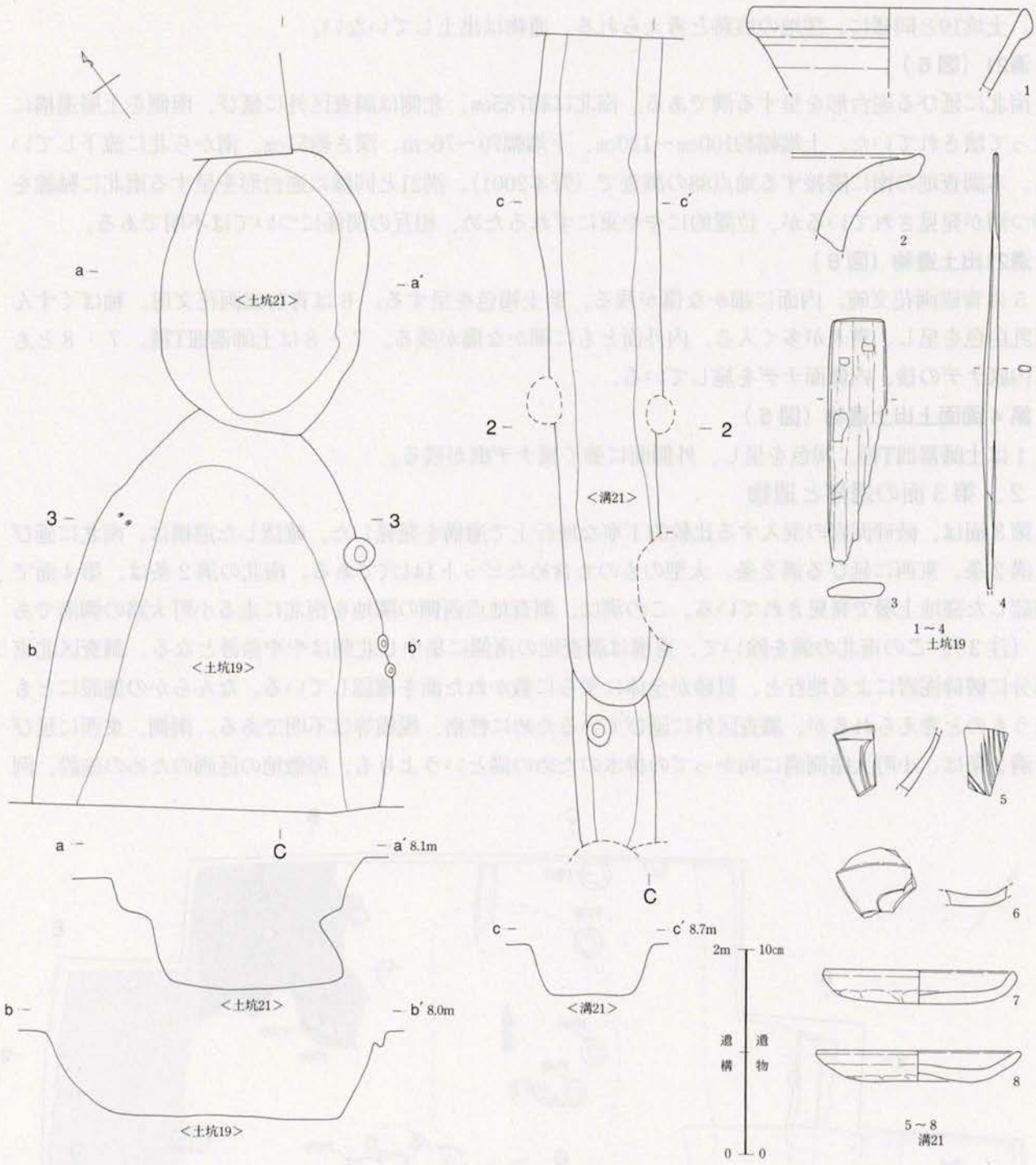


図６　土坑19・21・溝21、同出土遺物

為的な遺構ではなく、この地点が水路になっていたために窪地として残った跡であると考える。西側の遺構側壁に杭状の木の棒が２本立っていたが、土坑19にともなうものかは不明。

土坑19出土遺物（図６）

１は白磁玉縁碗。胎土、褐色を呈し粘性弱い。やや厚めに施釉され、外側面釉に気泡が入る。遺構底面で確認した（注１）。平面図上に位置表記。２は渥美甕口縁部。胎土黒褐色を呈し、白色粒をわずかに含む。３は木製品・用途不明。４は箸状木製品。

土坑21（図６）

土坑状の窪み。長軸で280㎝、短軸で200㎝、深さ120㎝を測る。遺構北側を僅かに調査区に切られ

る。土坑19と同様に、窪地の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

溝21（図６）

南北に延びる逆台形を呈する溝である。南北に約785㎝、北側は調査区外に延び、南側を上層遺構によって壊されていた。上端幅約100㎝～120㎝、下端幅70～76cm、深さ約51㎝。南から北に流下している。本調査地の南に隣接する地点88の調査で（野本2001）、溝21と同様に逆台形を呈する南北に軸線を持つ溝が発見されているが、位置的にやや東にずれるため、相互の関係については不明である。

溝21出土遺物（図６）

５は青磁画花文碗。内面に細かな傷が残る。胎土褐色を呈する。６は青白磁画花文皿。釉はくすんだ乳白色を呈し、貫入が多く入る。内外面ともに細かな傷が残る。７・８は土師器皿T種。７・８ともに内底ナデの後、内側面ナデを施している。

第４面面上出土遺物（図５）

１は土師器皿T種。褐色を呈し、外側面に強く横ナデ痕が残る。

２．第３面の遺構と遺物

第３面は、破砕泥岩の混入する比較的丁寧な地行上で遺構を発見した。確認した遺構は、南北に延びる溝２条。東西に延びる溝２条。大型のものも含めたピット144穴である。南北の溝２条は、第４面で確認した窪地上層で発見されている。この溝は、調査地点西側の隣地を南北に走る小町大路の側溝である（注３）。この南北の溝を除いて、遺構は調査地の南側に集中し北側はやや希薄となる。調査区北東部分に破砕泥岩による地行と、貝砂が全体に平らに敷かれた面を確認している。なんらかの施設にともなうものと考えられるが、調査区外に延びているために性格、規模等は不明である。南側、東西に延びる溝２条は、小町大路側溝に向かっての排水のための溝というよりも、屋敷地の区画のための施設、例

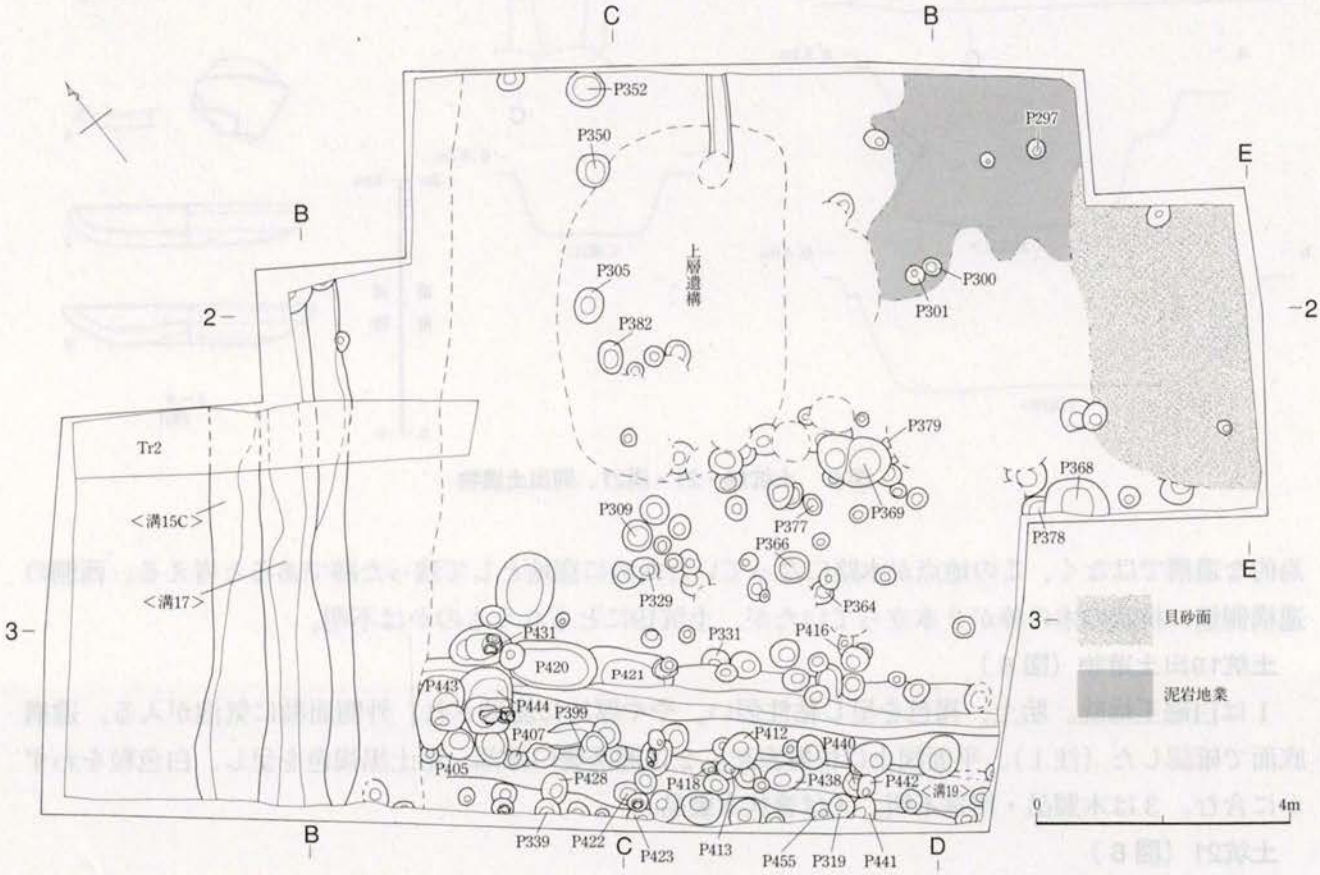


図７　第３面遺構全図

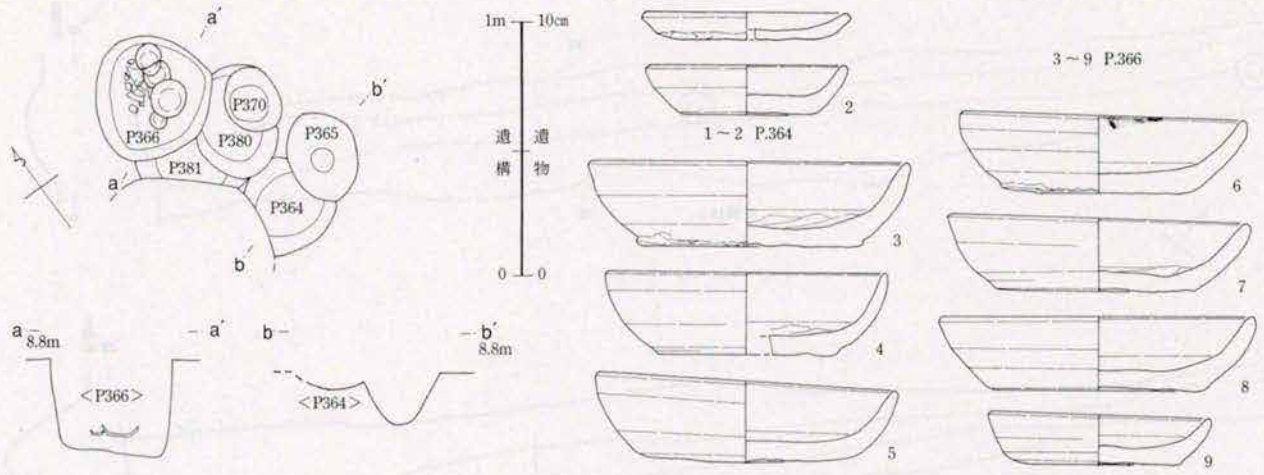


図８　第３面ピット出土遺物

えば塀、あるいは柵などを立てていたのではないかと思われる。溝20あるいは溝19にともなうのではないかと考えられる、関連する柱穴の発見を心がけたが、遺構の重複が激しく、それぞれの関係を明らかにすることができなかった。第3面検出レベルは8.7m。

ピット364（図８）

幅約39㎝、深さ12㎝を測る。遺構の大部分を上層の遺構によって壊されていたが、ほぼ円形を呈する浅いピットの底面に重なって土師器皿が出土している。

ピット364出土遺物（図８）

１は土師器皿T種。２は土師器皿R種。

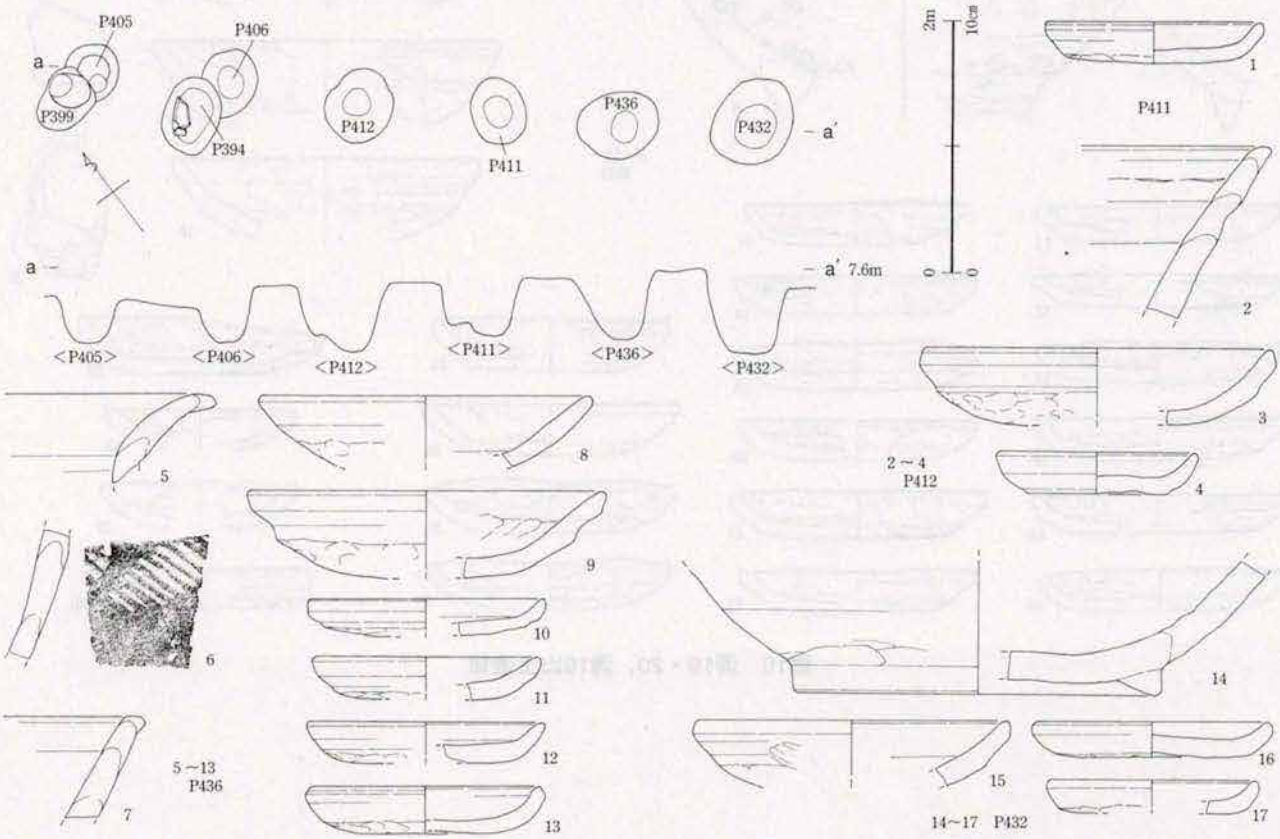


図９　柱穴列A、同出土遺物

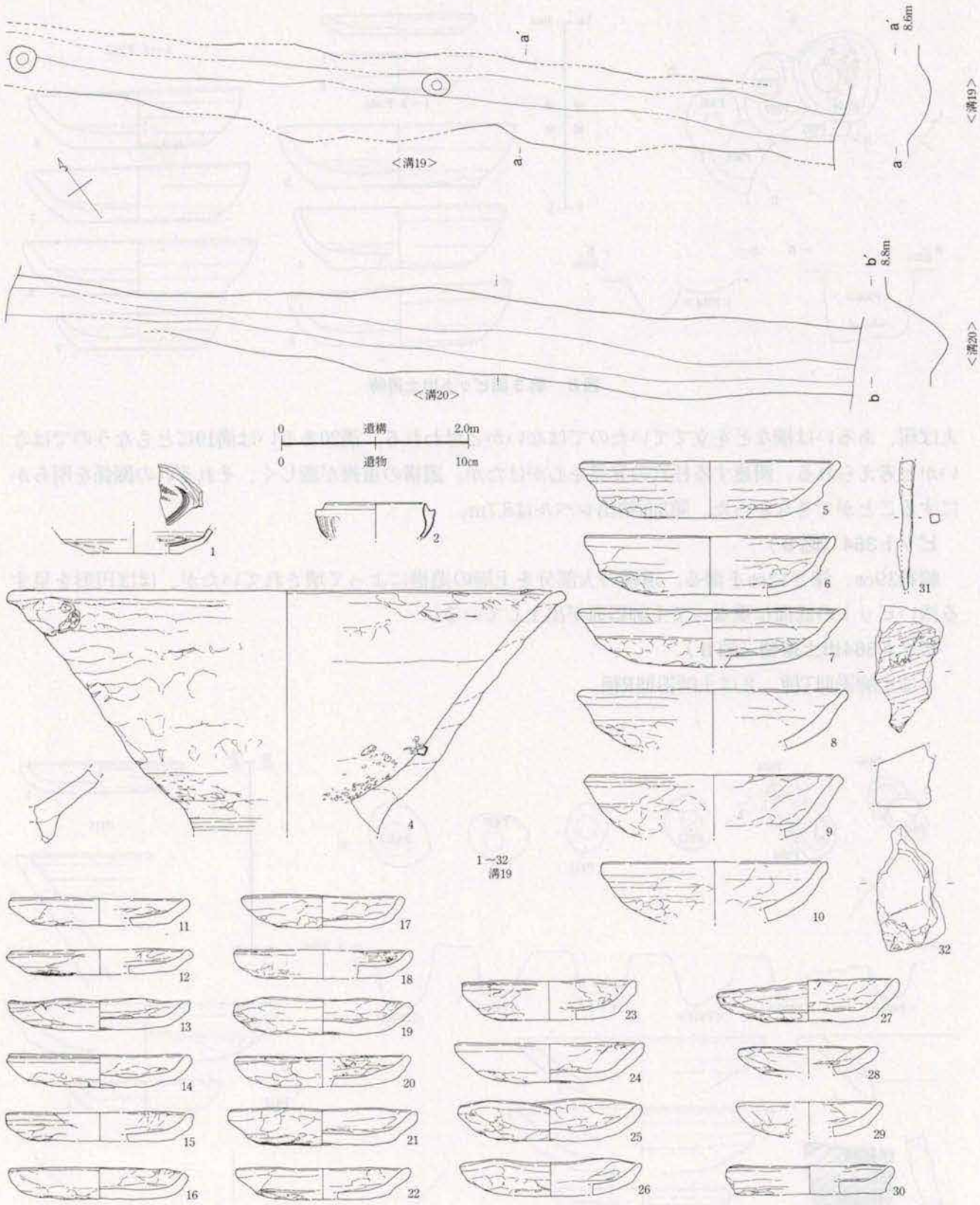


図10　溝19・20、溝19出土遺物

ピット366（図８）

長軸で50㎝、短軸で47㎝、深さ37㎝。遺構底面近くのレベルで、土師器皿がまとまって発見された。１穴のピットから出土する量としてはかなり多い量であるが、意図的に埋めたかは不明。

ピット366出土遺物（図８）

３～７は土師器皿R種。実測点数は7点だが、他に破片で土師器皿R種。大・32点、小７点が出土した。

柱穴列A（図９）

調査区南側、溝19上層で発見した。柵列の柱穴と考えている。後述する溝20にともなうと考えられる。それぞれのピット内の覆土は茶褐色弱粘質土。泥岩粒、炭化物を多く含む締まりの良い土。ほぼ円形を呈し、ピット下端の海抜数値も一定している。ピット411・412は覆土内に柱材の抜き痕残る。柱穴の規模からみて、堅固な大型の柵、あるいは塀が構築されていたと思われる。柱穴列の、それぞれのピットの計測値は、ピット432（72×60×68、5㎝）ピット436（67×55×54㎝）ピット411（54×44×58、5㎝）ピット412（59×58×67、5㎝）ピット406（55×45×46㎝）ピット405（44×42×45㎝）

柱穴列A出土遺物（図９）

１はピット411出土。土師器皿T種２～４はピット412出土。２は常滑こね鉢Ⅱ類。胎土淡褐色を呈し、白色粒、小石粒多く混入。３は土師器皿T種。4は土師器皿R種。５～13はピット436出土。５は渥美甕・口縁部片。胎土、灰色を呈し石英粒を混入。６は常滑甕胴部片。７は常滑こね鉢Ⅱ類・口縁部片。８～13は土師器T種。14～17はピット432出土。14は常滑こね鉢Ⅰ類。付高台。畳付に籾殻痕残る。15～17は土師器皿T種。

溝19・20（図10）

調査区南で発見した東西に延びる溝である。ほぼ平行に走るが、前述した柱穴列Aは溝19を切り、溝20にともなうと考えている。溝20と19は時期差がある。溝20が新しい。溝19は上端幅約68～102㎝、下端幅約20～29㎝、深さ26㎝。東端が調査区外に延びており、遺存する長さで約913㎝。溝底面に、ピット2穴を確認したが、溝にともなうものかどうかは不明。流下方向は東から西。溝20は上端幅約41～91㎝、下端幅約11～34㎝、深さ68㎝、東端が調査区外に延びており、遺存長で約923㎝を測る。流下方向は東から西。溝20は上層をピット等の遺構に壊されていたために、帰属する出土遺物を発見できなかった。

溝19出土遺物（図10）

１は青磁櫛掻文皿。胎土は灰色を呈する。内面に弧状文が配される。外側面下部に煤付着。２は青白磁合子身。胎土灰白色を呈し堅緻。外側面に蓮弁文。３・４は常滑こね鉢Ⅰ類。３は底部片。内側面に摩滅痕あり。胎土灰色を呈し長石を含む。外側面下部、ヘラによる整形。４は胴部片。内側面・内底部に摩滅痕あり。胎土褐色を呈し、小石粒・白色粒・砂分を含む。５～30は土師器皿T種。31は不明滑石製品。制作途中か。32は鉄製品釘。

溝15C・17（図11）

小町大路東側の側溝である。２条の溝に分けて提示しているが、溝17は浚渫の際に掘り込んだものと考えられ、同一の遺構と考えている。調査区の西側にはこの溝とほぼ平行に小町大路が走っている。小町大路では、これまでの調査で両側に逆台形の掘り方に箱型の木枠を持った側溝が発見されており、馬淵和雄は、暫定値ながら、大路幅を16mと推定している（馬淵2002）。溝15Cは上端幅262～216㎝、下端幅101～156㎝、深さ64㎝。調査区外に遺構が延びているため、遺存する長さで826㎝を測る。溝17は上端幅80～106㎝、下端幅28～54㎝、深さ45㎝。溝15Cと同様調査区外に遺構が延びているが、現況で長さ816㎝。

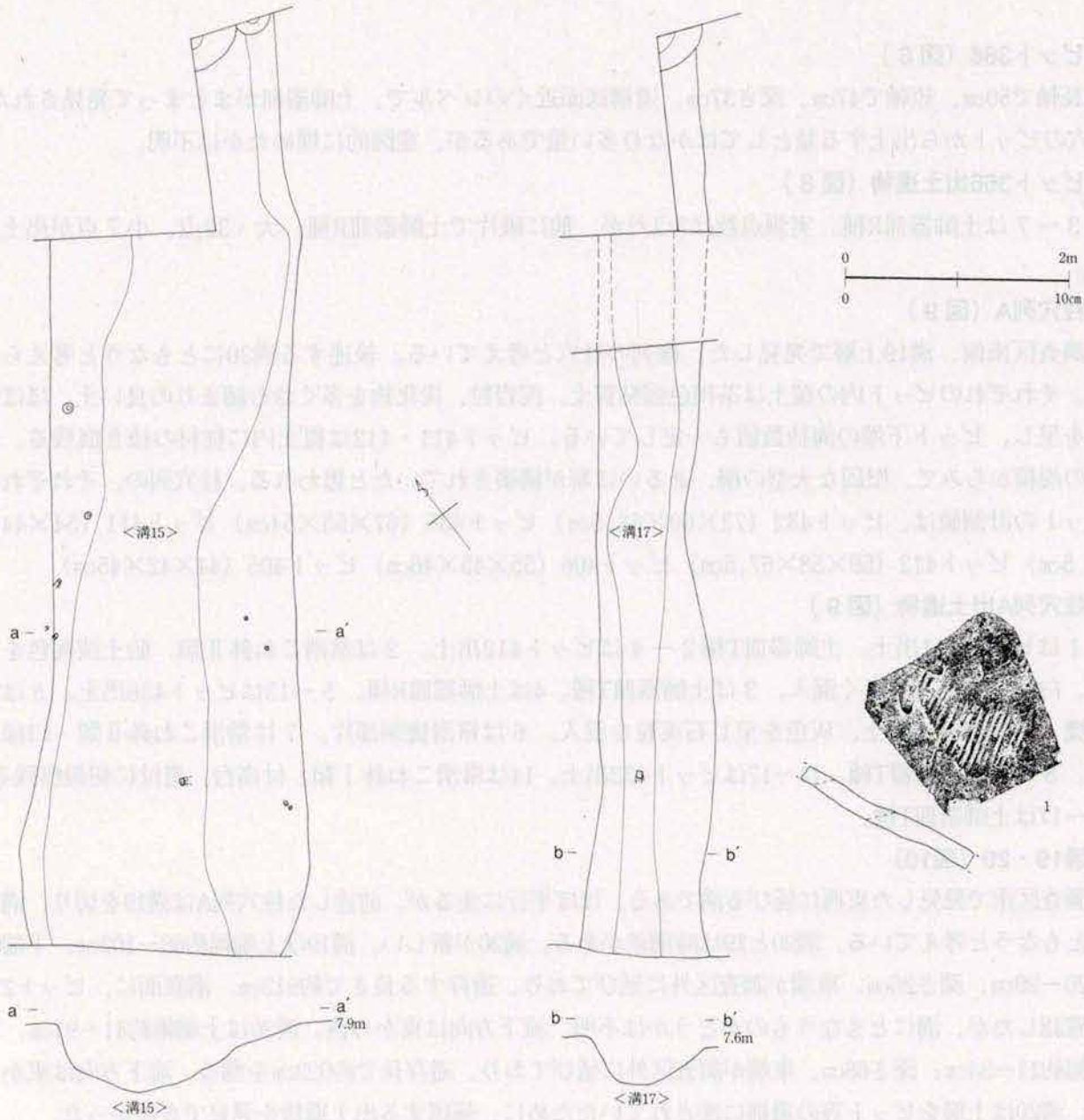


図11　溝15c・17、溝17出土遺物

溝17出土遺物（図11）

1は常滑甕胴部片。胎土褐色を呈し、小石粒・白色粒が混入する。焼成良好。外面叩き文。

第3面ピット出土遺物（1）（図12）

個別に図示していないが、第3面の遺構から出土した遺物である。それぞれの遺構の位置は全体図に参照。遺構の計測値は出土遺物の観察記録の後に（長軸×短軸×深さcm）で示した。1はピット297出土。土師器皿R種（30×30×50cm）。2はピット300出土。土師器皿R種（30×27×22cm）。3はピット301出土。滑石鍋片。断面周囲に摩滅痕残る。用途は不明だが、道具として転用か。（32×31×45cm）。4・5はピット305出土。土師器皿T種（59×41×36cm）。6・7はピット309出土。土師器皿R種。7は小石粒が多く混入し、雑な整形である（48×44×35cm）。8・9はピット下に二条の沈線。外面二次焼成を受け、煤が付着。口縁部、やや内湾する（18×18×22cm）。10・11はピット329出土。土師器皿R種（43×37×18cm）。12はピット331出土。土師器皿R種。器壁薄く、やや内湾する（60×44×15cm）。13・14・15はピット339出土。13は青磁碗。内面画花文。素地は淡灰色を呈し、内面に使用痕残る。外面に

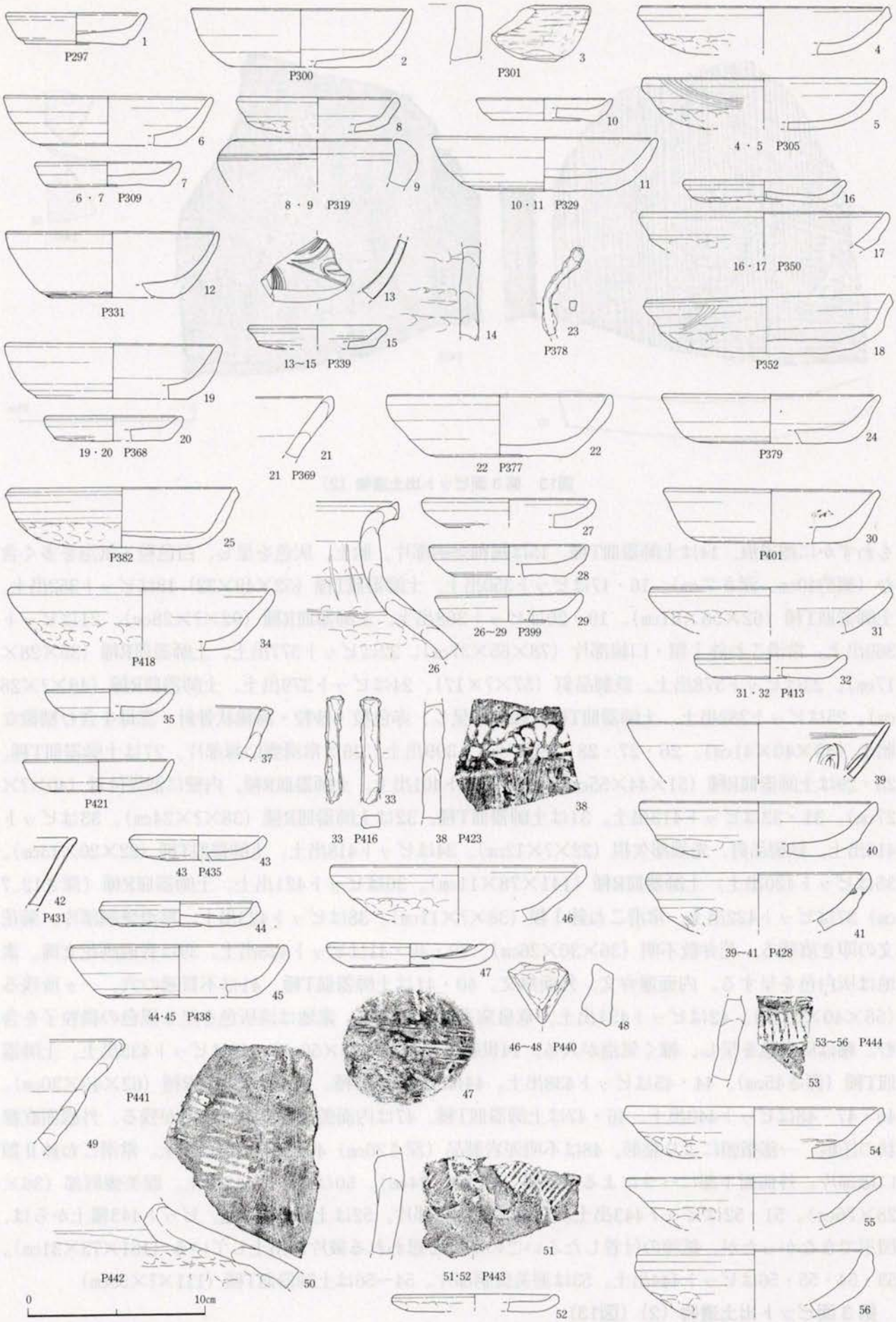


図12　第３面ピット出土遺物（1）

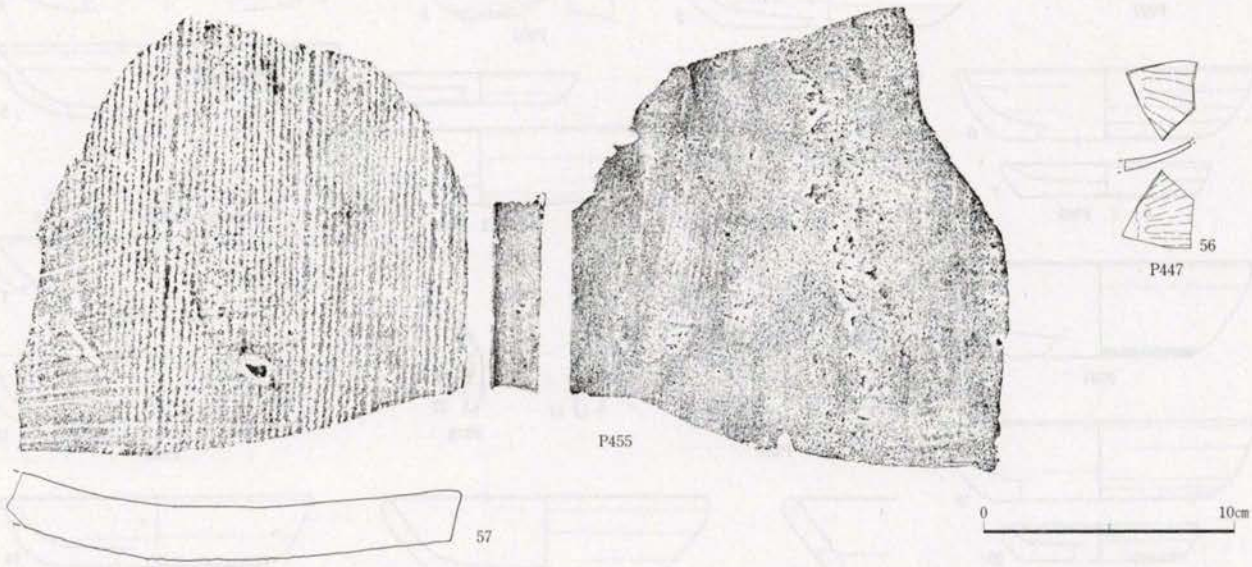


図13　第３面ピット出土遺物（2）

もわずかに擦過痕。14は土師器皿T種。15は褐釉甕胴部片。胎土、灰色を呈し、白色粒・気泡を多く含む（幅約40cm、深さ７cm）。16・17はピット350出土。土師器皿T種（52×49×32）18はピット352出土。土師器皿T種（62×56×61cm）。19・20はピット368出土。土師器皿R種（92×?×28cm）。21はピット369出土。常滑こね鉢Ⅰ類・口縁部片（78×65×37cm）。22はピット377出土。土師器皿R種（35×28×17cm）。23はピット378出土。鉄製品釘（57×?×17）。24はピット379出土。土師器皿R種（48×?×26cm）。25はピット382出土。土師器皿T種。褐色を呈し、赤色粒・砂粒・海綿状骨針・雲母を含む精緻な胎土（59×40×41cm）。26・27・28・29はピット399出土。26は常滑甕口縁部片。27は土師器皿T種。28・29は土師器皿R種（51×44×55cm）。30はピット401出土。土師器皿R種。内壁に油煤付着（40×?×27cm）。31・32はピット413出土。31は土師器皿T種。32は土師器皿R種（38×?×24cm）。33はピット416出土。鉄製品釘。先端部欠損（22×?×12cm）。34はピット418出土。土師器皿T種（22×20×13cm）。35はピット420出土。土師器皿R種（141×78×11cm）。36はピット421出土。土師器皿R種（深さ12、7cm）37はピット422出土。常滑こね鉢Ⅰ類（38×?×11cm）。38はピット423出土。常滑甕胴部片。菊花文の叩き痕残る。花弁数不明（36×30×26cm）。39・40・41はピット428出土。39は青磁画花文碗。素地は灰白色を呈する。内面蓮弁文。外面無文。40・41は土師器皿T種。41は不貫通の穴、一ヶ所残る（56×40×51cm）。42はピット431出土。竜泉窯系青磁無文碗。素地は淡灰色を呈し黒色の微粒子を含む。釉は灰緑色を呈し、細く気泡が入る。14世紀後半（35×28×50cm）。43はピット435出土。土師器皿T種（深さ45cm）。44・45はピット438出土。44は土師器皿T種。45は土師器皿R種（62×40×30cm）。46・47・48はピット440出土。46・47は土師器皿T種。47は内面弧を描くように傷が残る。外底面直線状の圧痕。一部指頭により整形。48は不明泥岩製品（深さ20cm）49はピット441出土。常滑こね鉢Ⅱ類口縁部片。外側面下部にヘラによる整形痕（44×?×24cm）。50はピット442出土。渥美甕肩部（36×28×76cm）。51・52はピット443出土。51は渥美甕胴部片。52は土師器皿T種。ピット443覆土からは、図示できなかったが、鉱滓の付着したふいごの羽口と思われる破片が出土している（161×73×31cm）。53・54・55・56はピット444出土。53は渥美甕胴部片。54～56は土師器皿T種（111×?×53cm）

第３面ピット出土遺物（2）（図13）

56・57はピット455出土56は青白磁皿。内外面伴に型押しによる蓮華文。胎土は灰色を呈し、精緻。

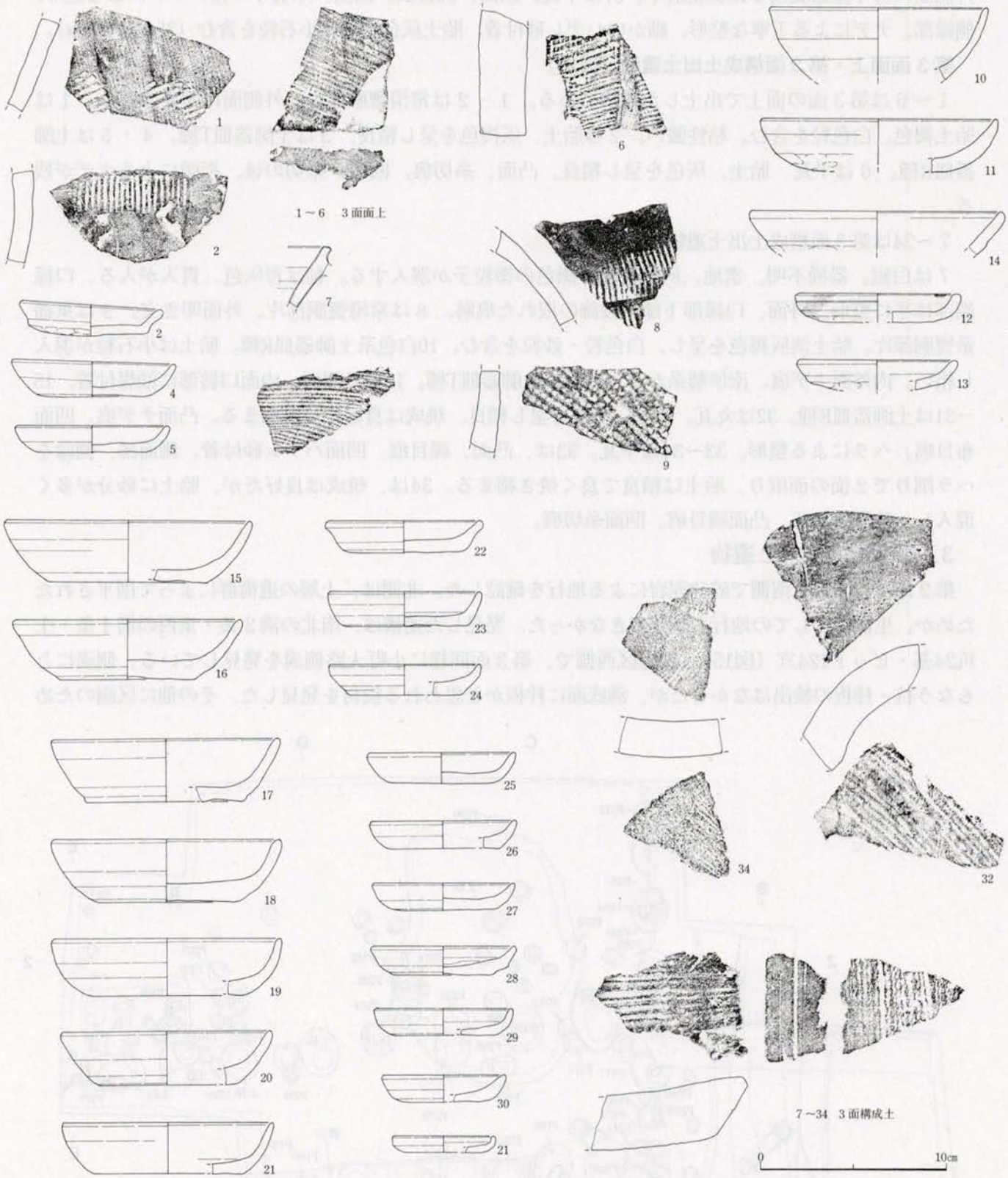


図14　第３面面上、同構成土出土遺物

外側面に薄く擦過痕残る13世紀前半。57は平瓦。凸面、縄目痕。凹面、糸切りの後、ナデによる整形。側縁部、ナデによる丁寧な整形。細かいハナレ砂付着。胎土灰色を呈し小石粒を含む（35×?×45cm）。

第３面面上・第３面構成土出土遺物（図14）

１～６は第３面の面上で出土した遺物である。１・２は常滑甕胴部片。外側面に叩き文残る。１は胎土褐色。白色粒を含む。粘性強い。２は胎土、灰褐色を呈し精良。３は土師器皿T種。４・５は土師器皿R種。６は平瓦。胎土、灰色を呈し精良。凸面、糸切痕。凹面、糸切の後、指頭によるナデが残る。

７～34は第３面構成土出土遺物である。

７は白磁。器種不明。素地、灰色を呈し黒色の微粒子が混入する。釉は青灰色。貫入が入る。口縁端部は平に整形。外面、口縁部下部に装飾の取れた痕跡。８は常滑甕胴部片。外面叩き文。９は東播系甕胴部片。胎土淡灰褐色を呈し、白色粒・砂粒を含む。10白色系土師器皿R種。胎土は小石粒が混入し粗い。内外面ナデ痕。南伊勢系か？11～14は土師器皿T種。12は外側面、内面口唇部に油煤付着。15～31は土師器皿R種。32は丸瓦。胎土、灰色を呈し精良。焼成は良好で焼き締まる。凸面ナデ痕。凹面布目痕。ヘラによる整形。33～34は平瓦。33は、凸面、縄目痕。凹面ハナレ砂付着。側面部、側縁をヘラ削りで２面の面取り。胎土は精良で良く焼き締まる。34は、焼成は良好だが、胎土に砂分が多く混入し、軟質である。凸面縄目痕。凹面糸切痕。

３．第２面の遺構と遺物

第２面は、調査区南側で破砕泥岩による地行を確認した。北側は、上層の遺構群によって削平されたためか、生活面としての地行を確認できなかった。発見した遺構は、南北の溝３条・東西の溝１条・土坑24基・ピット124穴（図15）。調査区西側で、第３面同様に小町大路側溝を発見している。側溝にともなう杭・枠板の検出はなかったが、溝底面に枠板かと思われる板材を発見した。その他に区画のため

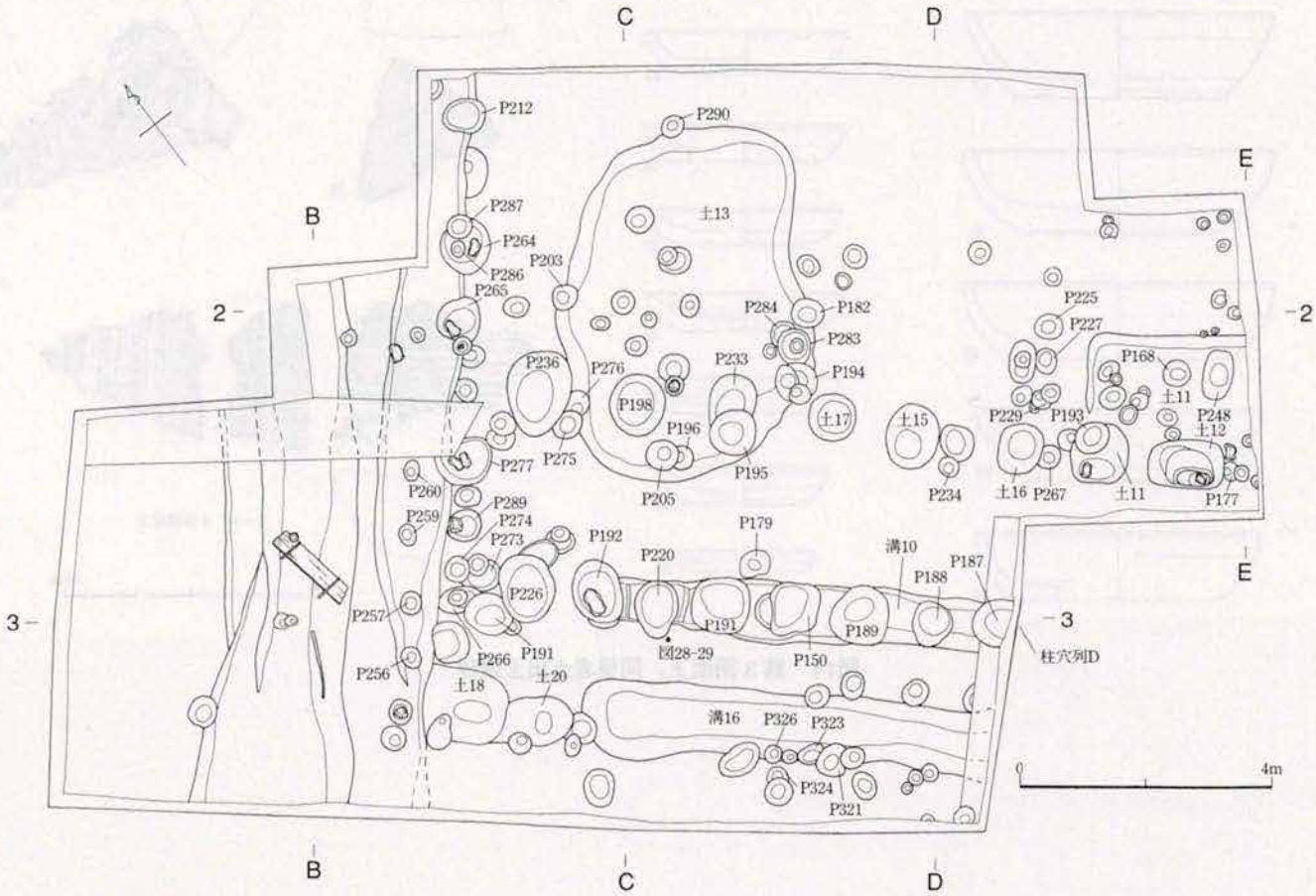


図15　第２面遺構全図

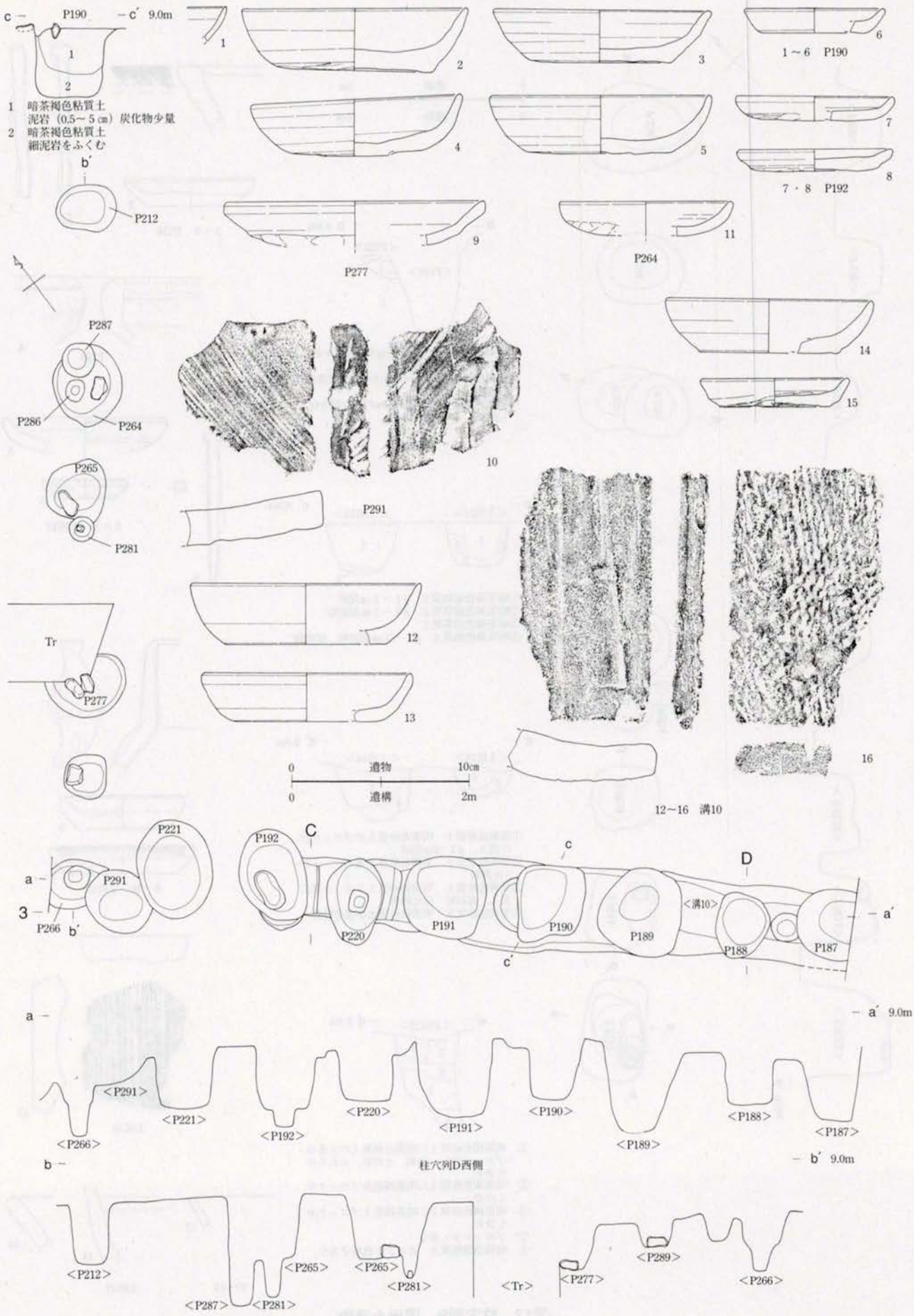


図16　柱穴列D・溝10、同出土遺物

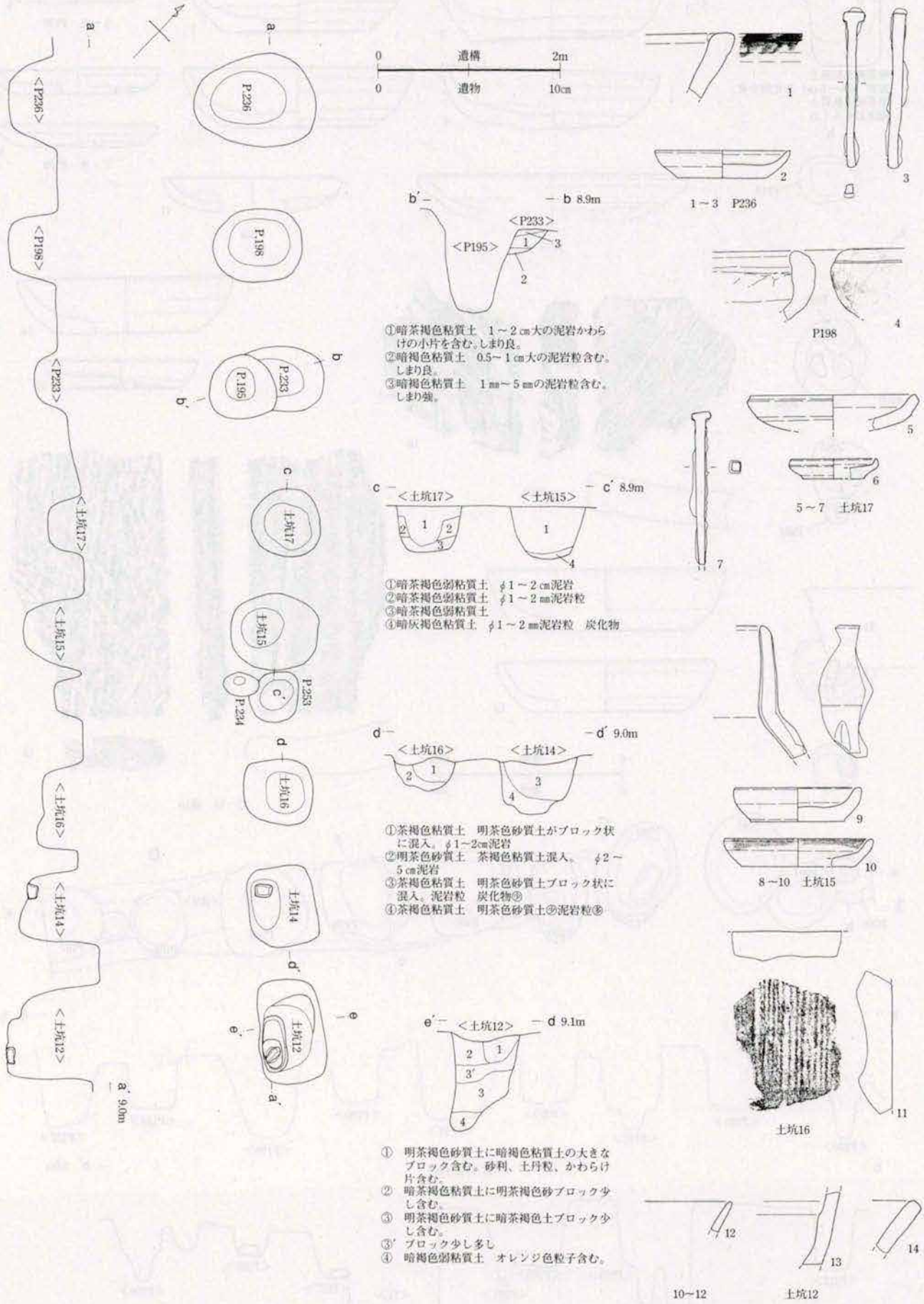


図17 柱穴列B、同出土遺物

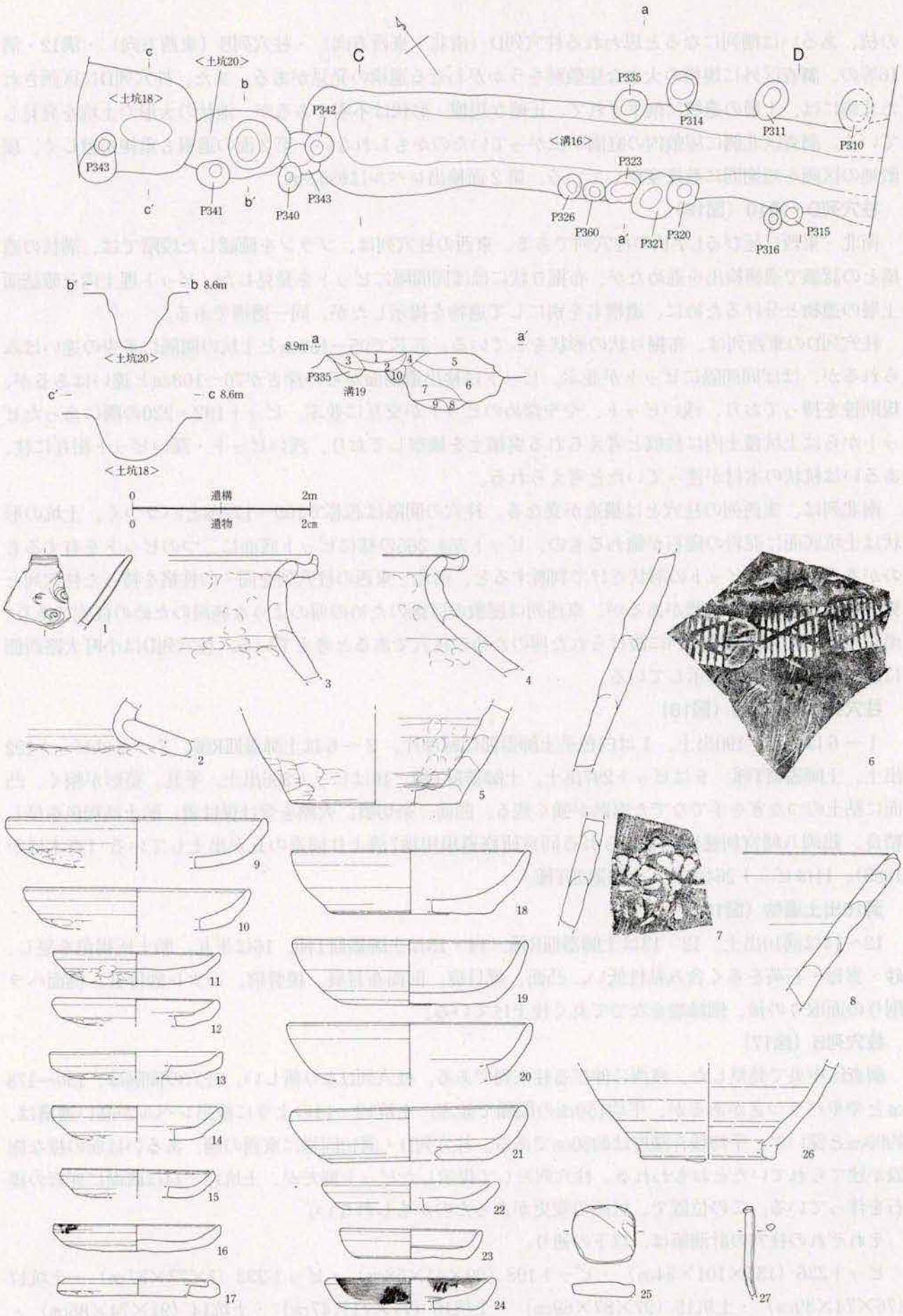


図18　溝16、同出土遺物

の杭、あるいは柵列になると思われる柱穴列D（南北・東西方向）・柱穴列B（東西方向）・溝12・溝16等の、調査区外に規模の大きな屋敷跡をうかがわせる遺構の発見がある。また、柱穴列Dに区画された北側には、上層の遺構に削平されて、正確な規模・形状は不明であるが、池状の大形の土坑を発見している。調査区北側に屋敷内の庭園が広がっていたのかもしれない。第２面の遺構も重複が激しく、屋敷地の区画を短期間に数度変更している。第２面検出レベルは約8.9m。

柱穴列D・溝10（図16）

南北・東西に延びるL字状の柱穴列である。東西の柱穴列は、プランを確認した段階では、溝状の遺構との認識で遺構検出を進めたが、布掘り状にほぼ同間隔にピットを発見した。ピット埋土内と確認面上層の遺物と分けるために、遺構名を別にして遺物を提示したが、同一遺構である。

柱穴列Dの東西列は、布掘り状の形状をしている。芯芯で95～130㎝と土坑の間隔に多少の違いはみられるが、ほぼ同間隔にピットが並ぶ。ピットは検出遺構面からの深さが70～108㎝と違いはあるが、規則性を持っており、浅いピット、やや深めのピットが交互に並ぶ。ピット192・220の隣にあったピットからは土坑覆土内に柱痕と考えられる腐植土を観察しており、浅いピット・深いピット相互に柱、あるいは杭状の木材が建っていたと考えられる。

南北列は、東西列の柱穴とは構造が異なる。柱穴の間隔は芯芯で100～172㎝とバラつく。土坑の形状は土坑底面に泥岩の礎石が備わるもの、ピット264·265の様にピット底面に二つのピットを有するものがある。単純にピットの形状だけで判断すると、南北・東西の柱穴列を同一の性格を持った柱穴列と見做すことに若干の躊躇があるが、東西列は屋敷の区画のための塀のような施設のための柱穴であり、南北列は小町大路側溝沿いに設けられた塀のための柱穴であると考えている。柱穴列Dは小町大路西側に建つ屋敷地の南限を示している。

柱穴列D出土遺物（図16）

１～６はピット190出土。１は白色系土師器皿口縁部片。２～６は土師器皿R種。７・８はピット192出土。土師器皿T種。９はピット297出土。土師器皿T種。10はピット266出土。平瓦。整形が粗く、凸面に粘土のつなぎを手でなでた痕跡が強く残る。凹面、糸切痕。火熱を受け煤付着。胎土淡褐色を呈し精良。鶴岡八幡宮創建期と考えられる同宮研修道場用地7溝より同系の瓦が出土している（斉木ほか1983）。11はピット264出土。土師器皿T種。

溝10出土遺物（図16）

12～14は溝10出土。12・13は土師器皿R種。14・15は土師器皿T種。16は平瓦。胎土灰褐色を呈し、砂・雲母・石英を多く含み粘性低い。凸面、縄目痕。凹面布目痕。摸骨痕。ハナレ砂付着。側面ヘラ削りの面取りの後、側縁端をなでて丸く仕上げている。

柱穴列B（図17）

調査区中央で発見した、東西に伸びる柱穴列である。柱穴列Dより新しい。柱穴の間隔は、130～178㎝とややバラつきがあるが、平均150㎝の間隔で並ぶ。土坑12・14のように検出レベルが高い遺構は、約90㎝と深いが、平均残存深度は約50㎝である。柱穴列D・溝10同様に東西の柵、あるいは塀の様な施設が建てられていたとおもわれる。柱穴列として提示したピット群だが、土坑12・14は底面に泥岩の礎石を伴っている。この位置で、区画の変更があったのかもしれない。

それぞれの柱穴の計測値は、以下の通り。

ピット236（135×101×54㎝）・ピット198（99×41×58㎝）・ピット233（?×73×37㎝）・土坑17（76×74×39㎝）・土坑15（97×87×69㎝）・土坑16（77×71×47㎝）・土坑14（91×74×86㎝）・土坑12（118×70×104㎝）・ピット253（55×54×29㎝）・ピット195（73×72×99㎝）

柱穴列B出土遺物（図17）

1～3はピット236出土。1は瓦質火鉢。口縁端部から外側面に廻る浅い沈線上部まで黒色系漆を桼漆している。胎土灰褐色を呈し、白色粒・雲母を含む。2は土師器皿R種。3は鉄製品・釘。4はピット198出土。不明土器。灰褐色を呈し、雲母を含む粉っぽい胎土。口唇部外縁に沈線が廻る。外側面に煤痕付着。4面ピット319から同種・同型の不明土器が出土している。5～7は土坑17出土。5は土師器皿T種。6は土師器皿R種。黒色粒子を含む。7は鉄製品。釘。8～10は土坑15出土。8は青磁酒会壺胴部・口縁部片。口縁端部は露胎。胎土は灰色を呈し、気泡が混じる。釉は青緑色を呈し、わずかに貫入が入る。9・10は土師器皿R種。10は内外面・口唇部に煤痕付着。11は土坑16出土。平瓦。凸面、縄目痕。灰色を呈し雲母・白色粒を含む。12～14は土坑12出土。12は無文青磁皿口縁部片。胎土褐色を呈する。釉は灰青緑色を呈する。13は白磁四耳壺、胴部片。胎土灰白色を呈し、粘性弱い。14は常滑こね鉢Ⅰ類。胎土、白色粒を含み粘性弱い。

溝16（図18）

柱穴列Dの南で発見した長楕円形の土坑である。溝底面に、柱穴などのピットを発見することはできなかったが、溝10同様に屋敷地の区画のための遺構と考えている。調査区壁の土層観察によれば、溝10より新しい。上端幅95～118cm、下端幅35～67㎝、深さ67センチ、長さ656㎝を測る。

溝16出土遺物（図18）

1は竜泉窯系青磁画花文碗。胎土灰白色を呈する。釉は灰緑色、内外面に細かな貫入が入る。2は渥美甕頸部片。胎土暗灰色。3・4は常滑甕口縁部片。3は胎土灰褐色を呈し、長石・石英を含む。肩部に降灰あり。4は胎土灰褐色を呈し、長石・石英を含む。口縁部、肩部に降灰あり。5は常滑・三筋壺。胎土灰色を呈し白色粒混入。外面下部ヘラ削り。6・7は常滑甕胴部片。6は変わり格子の叩き文。7は菊花の叩き文。弁数不明。8は常滑こね鉢Ⅱ類。胎土淡橙色を呈し、砂粒・小石粒・石英を含む。外面下部ヘラ削り。内面下部磨耗痕残る。9～17は土師器皿T種。18～24は土師器皿R種。24は内外面ともに油煤が残る。25は、土師器皿T種の底部片加工品。平面・側面ともに磨耗。26は須恵器・壺底部片。胎土灰色を呈し精緻。硬く焼き締まる。27は鉄釘。

溝16周辺土坑・ピット出土遺物（図19）

1・2はピット321出土。1は土師器皿T種。2は鉄製品釘。(57×47×18㎝)。3はピット326出土。渥美甕口縁部片。胎土灰色を呈し、白色粒を含む。(29×25×10㎝)。4～6は土坑20出土。4は土師器皿T種。5は土師器皿R種。6は鉄製品釘。7・8は土坑18出土。7は渥美甕胴部片。胎土暗灰色を呈し、白色粒を含む。8は土師器皿R種。

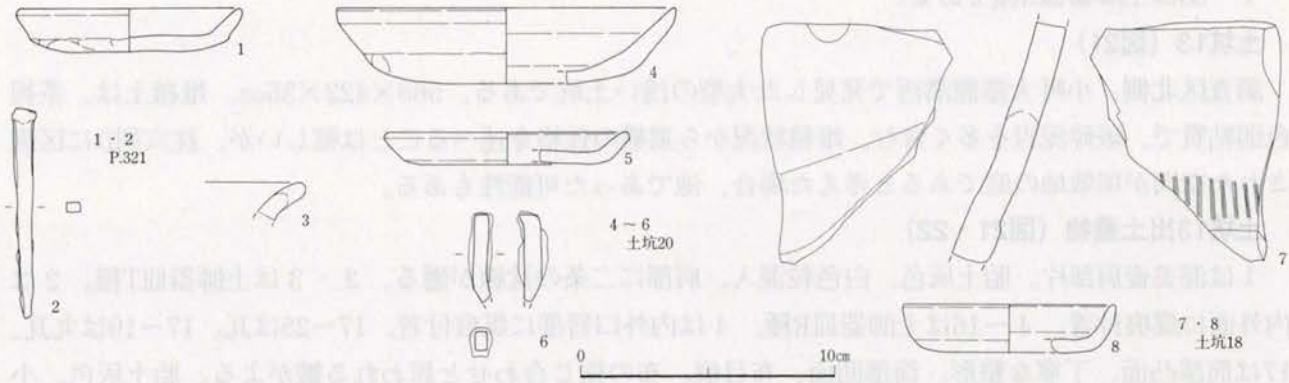


図19　溝18周辺 土坑・ピット出土遺物

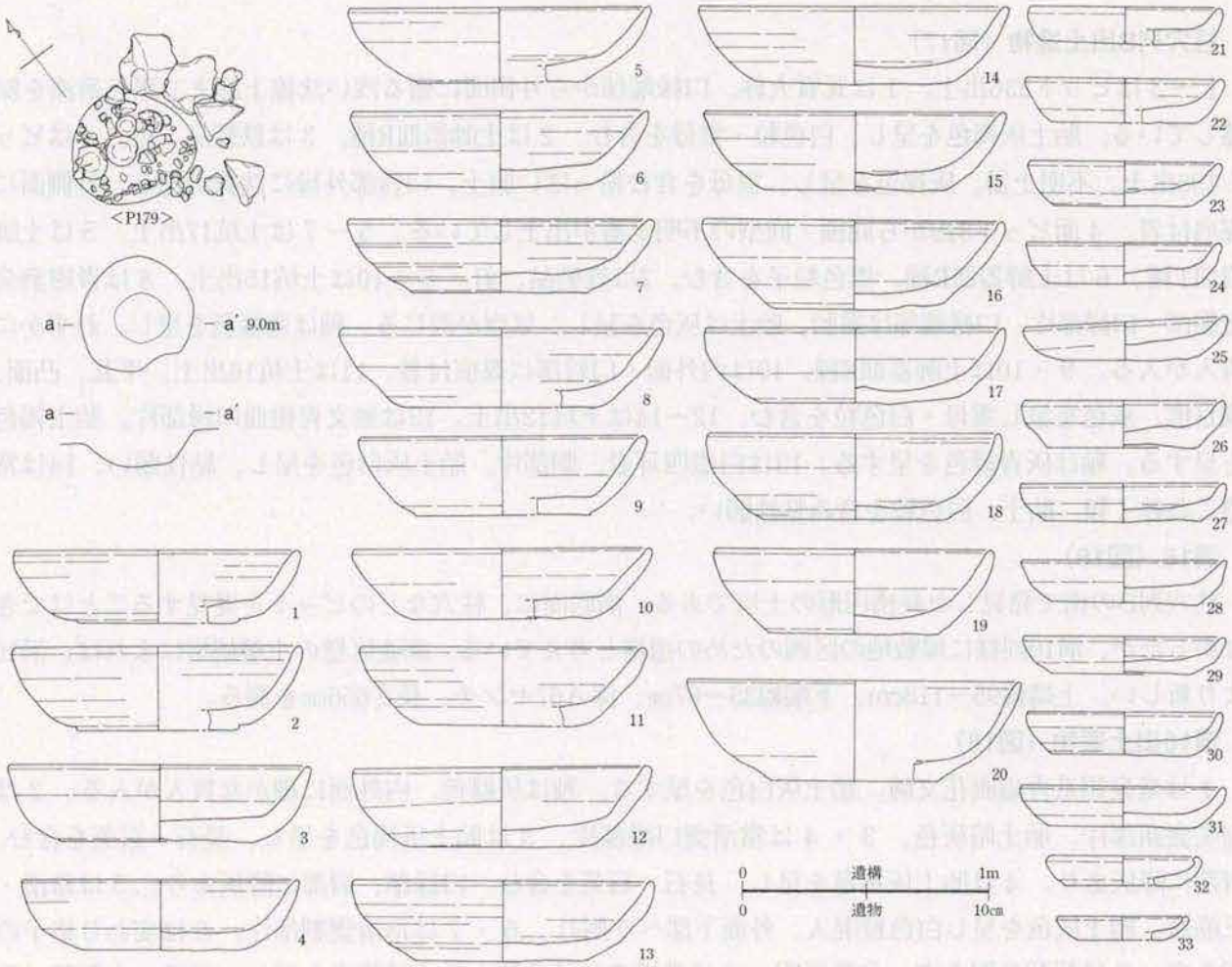


図20　ピット179、同出土遺物

ピット179（図20）

ピット覆土内に土師器皿がまとまって出土した。図示した土師器皿はR種のみ33点であるが、実測できなかった破片には土師器皿R種（大323点）土師器皿R種（小20点）土師器皿T種（大７点）砕片のため、種別不明な土師器皿126点。瓦器火鉢１点が出土している。ピット179は柱穴列Dに切られる形で発見している。ピット上層、周囲は破砕泥岩が堆積していた。出土した土師器皿は、埋土の観察から、同時期に埋められたと思われるが、土師器の形状は一様ではない。長軸95㎝・短軸90㎝・深さ30㎝を測る。

ピット179出土遺物（図20）

１～33は土師器皿R種である。

土坑13（図21）

調査区北側、小町大路側溝西で発見した大型の浅い土坑である。568×422×35㎝。堆積土は、茶褐色弱粘質で、破砕泥岩を多く含む。堆積状況から遺構の性格を述べることは難しいが、柱穴列Dに区画された空間が屋敷地の庭であると考えた場合、池であった可能性もある。

土坑13出土遺物（図21・22）

１は渥美壺肩部片。胎土灰色。白色粒混入。肩部に二条の沈線が廻る。２・３は土師器皿T種。２は内外面に煤痕付着。４～16は土師器皿R種。４は内外口唇部に煤痕付着。17～25は瓦。17～19は丸瓦。17は筒部凸面、丁寧な整形。筒部凹面、布目痕。布の綴じ合わせと思われる皺がよる。胎土灰色。小石粒混入。細かな気泡が入る。18は筒部凸面布目痕をヘラによってナデ消している。筒部凹面布目痕。

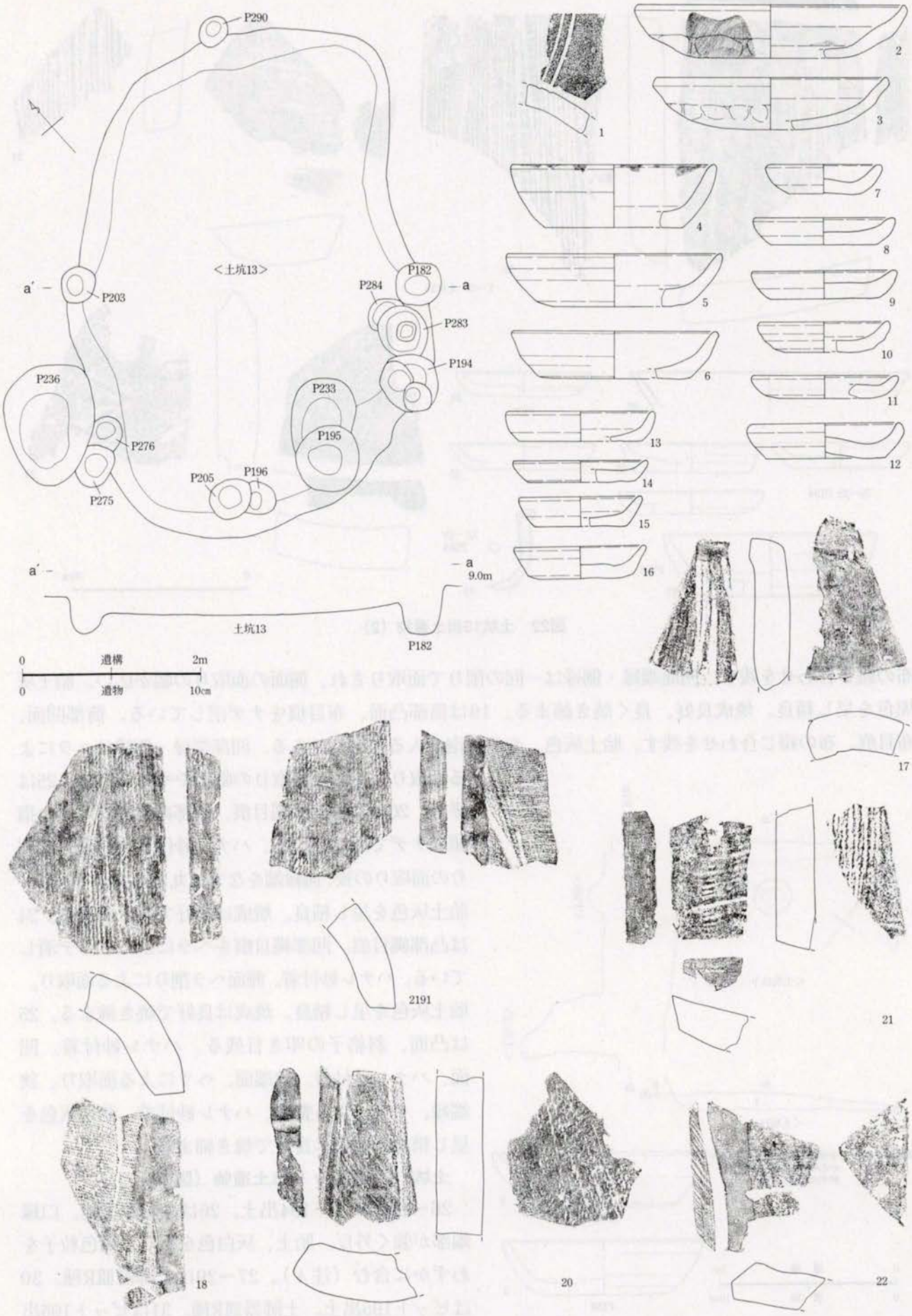


図21　土坑13、同出土遺物（1）

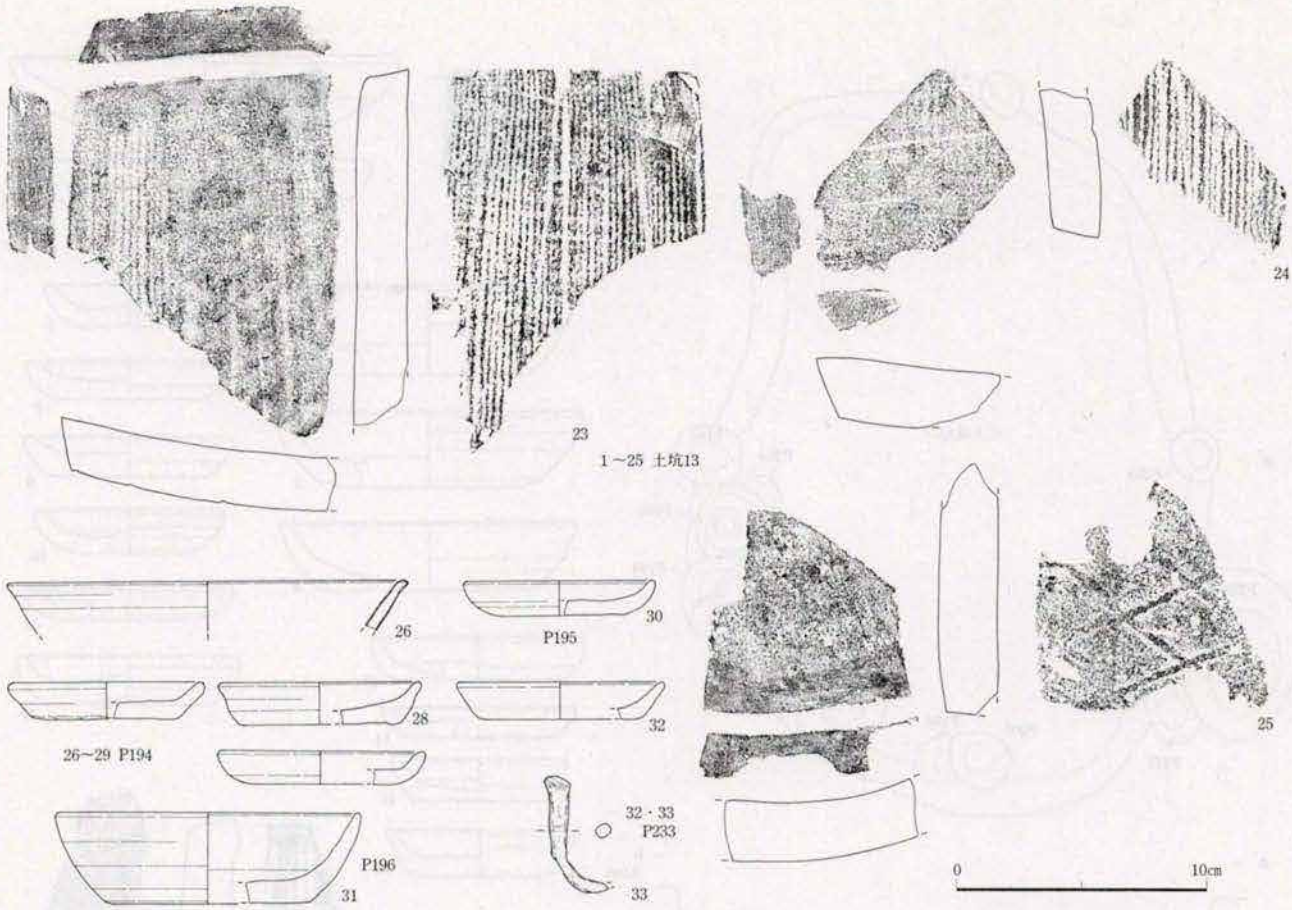


図22　土坑13出土遺物（2）

布の綴じ合わせを残す。凹面端縁・側縁は一回の削りで面取りされ、側面の面取りの幅が広い。胎土灰黒色を呈し精良。焼成良好、良く焼き締まる。19は筒部凸面、布目痕をナデ消している。筒部凹面、布目痕。布の綴じ合わせを残す。胎土灰色。やや気泡が入るが精良である。凹部端縁・側縁はヘラによる面取り。側面の面取りの幅はやや狭い。20～25は平瓦。20～23は凸部縄目痕。凹部縄目痕をヘラか指頭のナデで消している。ハナレ砂付着。側面ヘラ削りの面取りの後、側縁端をなでて丸く仕上げている。胎土灰色を呈し精良。焼成は良好で焼き締まる。24は凸部縄目痕。凹部縄目痕をヘラによってナデ消している。ハナレ砂付着。側面ヘラ削りによる面取り。胎土灰色を呈し精良。焼成は良好で焼き締まる。25は凸面、斜格子の叩き目残る。ハナレ砂付着。凹面、ハナレ砂付着。狭端面、ヘラによる面取り。狭端縁、ナデによる整形。ハナレ砂付着。胎土灰色を呈し精良。焼成は良好で焼き締まる。

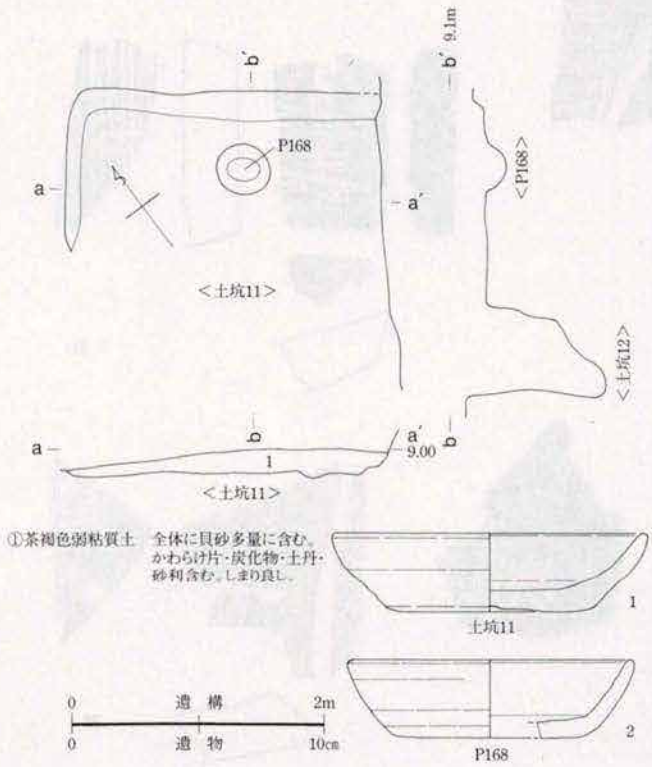


図23　土坑11・ピット168、同出土遺物

土坑13周辺ピット出土遺物（図22）

26～29はピット194出土。26は白磁端反碗。口縁端部が強く外反。胎土、灰白色を呈し、黒色粒子をわずかに含む（注４）。27～29は土師器皿R種。30はピット195出土。土師器皿R種。31はピット196出土。土師器皿R種。32・33はピット233」出土。32

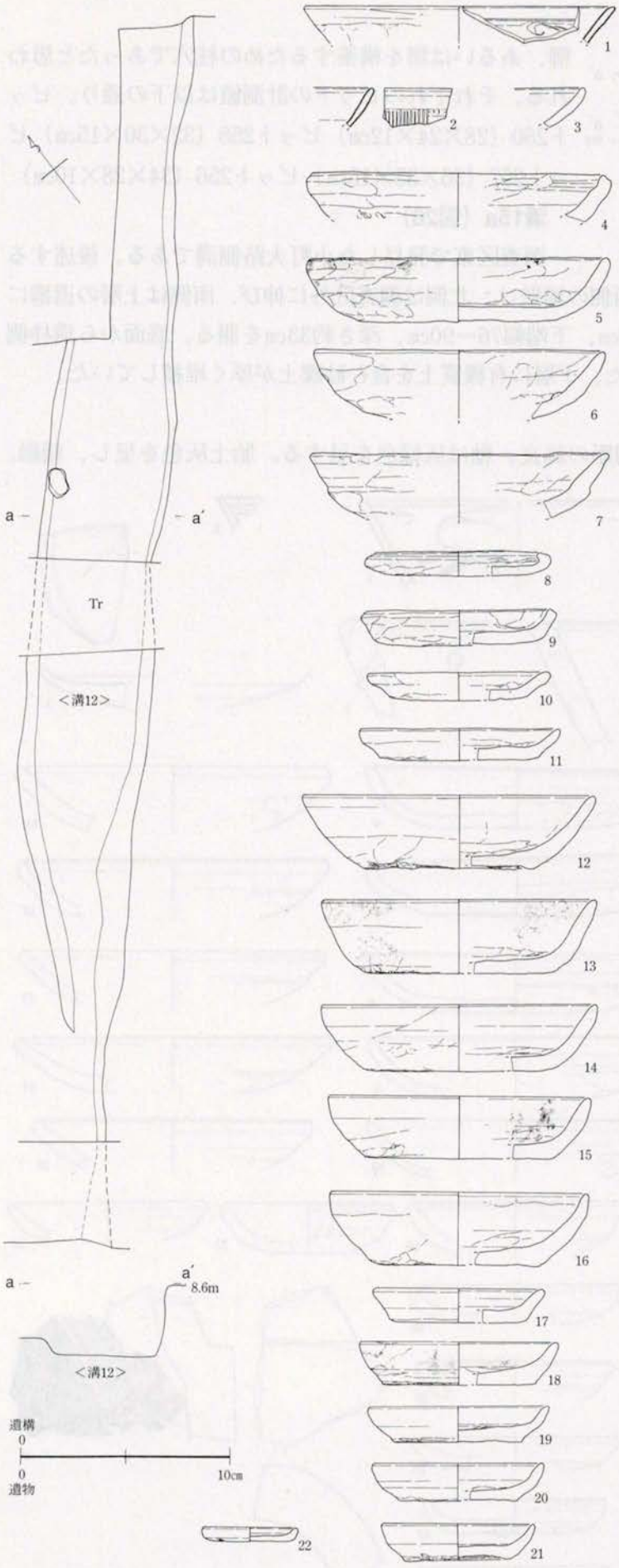


図24　溝12、同出土遺物

は土師器皿R種。33は鉄釘。

土坑11・ピット168（図23）

土坑11は、調査区西側で発見した竪穴状の遺構である。覆土は貝砂を多く含む茶褐色弱粘質土が堆積していた。南北軸・東西軸ともに調査区外に延びてしまっているため遺存している幅で南北の上端幅は303㎝、下端幅は265㎝。東西の上端幅は249㎝、下端幅で240㎝を測る。深さは20㎝と浅い。ピット168は、土坑11底面で発見したピットである。長軸42㎝、短軸40㎝、深さ15㎝を測る、ほぼ円形の遺構である。

土坑11・ピット168出土遺物（図23）

1は土坑11出土。2はピット168出土。ともに土師器皿R種である。

溝12（図24）

南北方向の溝である。柱穴列Dの南北方向の柱穴に切られる。調査区外に遺構が延びているために、遺存している長さで1175㎝。上端幅50～121㎝、下端幅22～92㎝、深さ72㎝を測る。南側は上層の遺構に壊されてしまっていたが、上端幅約120㎝の箱型を呈する溝である。

溝12出土遺物（図24）

1は青磁画花文碗。外側面蓮弁文。内側面、口縁部下部に1条の沈線。片切彫による施文。胎土、灰色を呈し精緻。2は青磁櫛掻文碗。胎土灰白色を呈し、精緻。施釉に斑がある。3は白色系土師器皿。胎土灰白色を呈し、軟質。4～11は土師器皿T種。12～22は土師器皿R種。

柱穴列C（図25）

溝12底面で発見した柱穴列である。ほぼ円形を呈するピットが南北に並ぶ。ピット260より北側でのピットの並びは、調査区北端で1穴発見しているが、溝12底面に規則性を持った並びを発見することはできなかった。溝12に伴い、

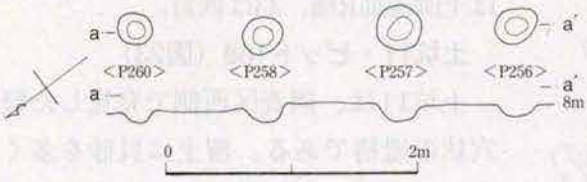


図25　柱穴列C

柵、あるいは塀を構築するための柱穴であったと思われる。それぞれのピットの計測値は以下の通り。ピット260（28×24×12cm）ピット258（32×30×15cm）ピット257（36×35×15cm）ピット256（34×28×10cm）

溝15a（図26）

調査区東で発見した小町大路側溝である。後述する溝15bと、東側の溝壁を共有しているが、西側の溝壁は、北側は調査区外に伸び、南側は上層の遺構に削平を受け壊されている。上端幅143～150cm、下端幅76～90cm、深さ約33cmを測る。底面から溝枠側板の可能性のある板材が出土している。また、下層に有機質土を含む砂礫土が厚く堆積していた。

溝15a出土遺物（図26）

1は竜泉窯系青磁画花文碗。内面、片切彫の施文。釉は灰緑色を呈する。胎土灰色を呈し、精緻。

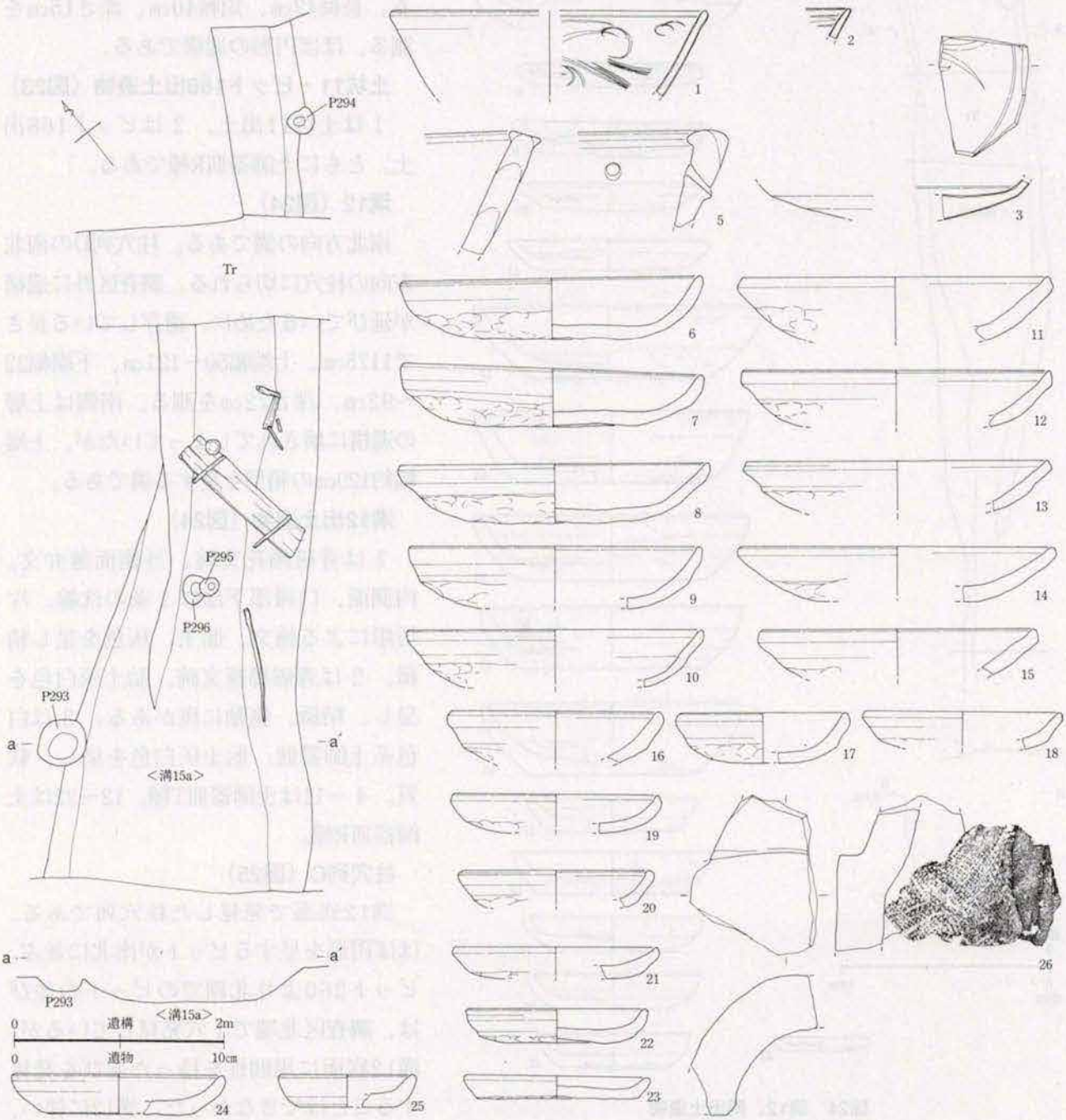


図26　溝15a、同出土遺物

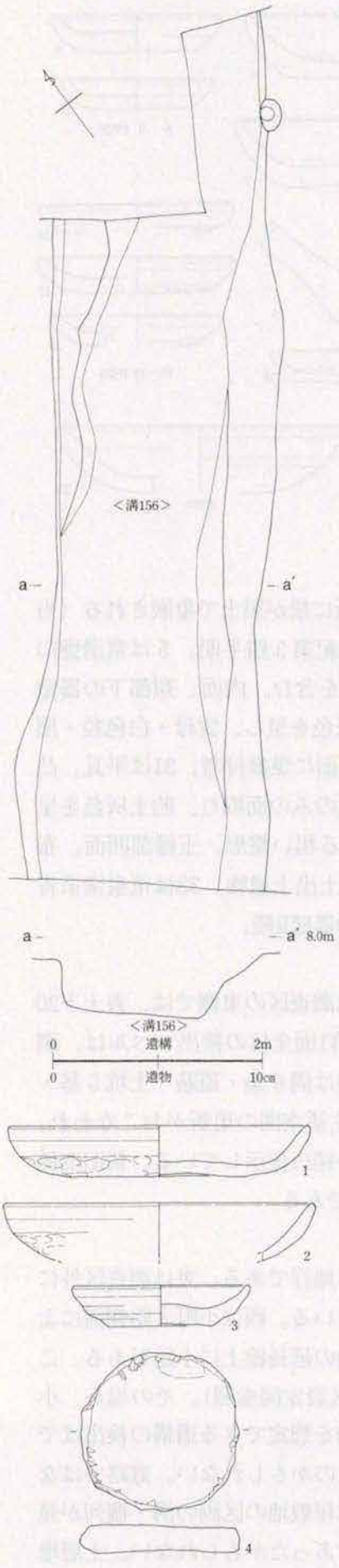


図27　溝15b、同出土遺物

内面擦痕残る。2は竜泉窯系青磁画花文碗。口縁部片。内面、片切彫の施文。胎土、灰色を呈し釉は緑灰色。内外面ともに磨耗している。3は竜泉窯系青磁画花文皿。体部中位で屈曲する。内底面に片切彫で施文。胎土は灰白色を呈し、釉は青緑色を呈する。内面に細かな傷がつき、内底面の釉が剥離する。使用痕か。12世紀中～後半であろう。4は常滑こね鉢Ⅱ類。胎土は灰白色を呈し、長石・石英・小石粒を含む。内面磨耗痕残る。5は瓦器火鉢。口縁下部に、内面から外面に穿孔している。器表は灰黒色を呈する。胎土淡橙色を呈し、白色粒・雲母を含む。6～23は土師器皿T種。24・25は土師器皿R種。26は丸瓦。胎土、淡橙色を呈し、白色粒・小石粒が混入。焼成は良好で、良く焼き締まる。筒部凸面はナデによる丁寧な整形。筒部凹面には布目痕が残る。玉縁部と筒部の段差は1.2センチを測る。凹面端縁・側縁は2回の削りで面取りをし、側面の面取りの幅が広い。

溝15b（図27）

溝15aと同様に小町大路側溝である。ほぼ箱型を呈する。土層の堆積状況からみて、浚渫、もしくは掘り直しであろう。側溝西側の下端の形状が北側で一部不安定になる。また、壁板の裏込めとして埋められていたものか、溝西壁は灰色の粘質土が堆積し、下端が不整形になるのは側溝の枠板を抜き取ったからかもしれない。上端幅198～240㎝。下端幅133～187㎝、深さ約65㎝を測る。

溝15b出土遺物（図27）

1・2は土師器皿T種。3は土師器皿R種。4は土師器皿R種の底部を円形に加工している。用途不明。内外面、側面ともに磨耗した痕跡はない。

第2面ピット出土遺物（図28）

遺構図は個別に図示していない。1はピット177出土。土師器皿R種。2～5はピット193出土。2は土師器皿T種。3は土師器皿R種。4はふいごの羽口。5は鉄製品・釘。6はピット225出土。土師器皿R種。7はピット227出土。土師器皿R種。8・9はピット229出土。土師器皿R種。10はピット234出土。土師器皿R種。11・12はピット248出土。土師器皿R種。13はピット273出土。土師器皿R種。14はピット274出土。土師器皿T種。15～19はピット323出土。15は常滑甕底部片。胎土灰色を呈し、黒色粒・砂を含む。外面下位に刷毛目痕。内底面に降灰。16～18は土師器皿T種。19は土師器皿R種。20はピット324出土。土師器皿T種。

第2面面上・第2面構成土出土遺物（図29）

1～32は第2面面上出土遺物。1は竜泉窯系青磁無文碗口縁部片。胎土灰色を呈し、白色粒含む。釉は不透明な灰青色を呈し、気泡が多く混じる。14世紀後半。2は青白磁梅瓶底部片。胎土灰白色を呈する。高台削り出し。3は青磁碗底部片。胎土灰白色を呈し、黒色粒含

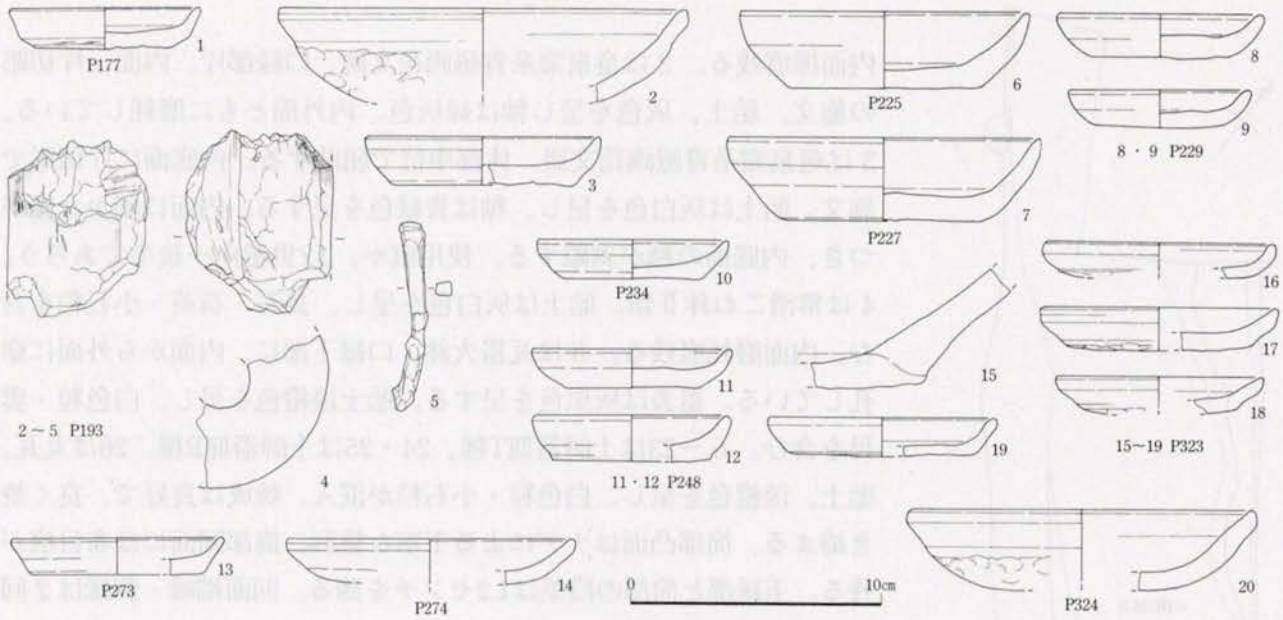


図28　第２面ピット出土遺物

む。高台削り出し。４は高麗青磁象嵌老松瓶子。器壁は下部が厚い。外面に松が黒土で象嵌される（当該品は幹の下部）。内面に轆轤目が顕著。韓盛旭氏の示教によれば、13世紀第３四半期。５は常滑甕口縁部。口縁部、内外に厚い降灰。胎土灰色を呈し、長石・黒色粒・気泡を含む。内面、頚部下の器壁は火熱のためか著しく剥離している。６は常滑こね鉢Ⅰ類底部片。胎土灰色を呈し、雲母・白色粒・黒色粒含む。７～18は土師器皿T種。19～30は土師器皿R種。21・24は内外面に煤痕付着。31は平瓦。凸面、縄目痕。凹面、縄目痕をナデ消している。ハナレ砂付着。側面、1面のみの面取り。胎土灰色を呈し、小石粒・長石を含み軟土。32は丸瓦玉縁部。玉縁部凸部、ヘラによる粗い整形。玉縁部凹面、布目痕。側面ヘラによる面取り。面取りの幅は狭い。33～53は第２面構成土出土遺物。33は竜泉窯系青磁蓮弁文碗。胎土灰白色を呈する。35～46は土師器皿T種。47～53は土師器皿R種。

４．第１面の遺構と遺物

重機によって表土を掘削した後、遺構を確認した。遺構の検出レベルは調査区の東側では、表土下20㎝、西側では大きく削平を受けており表土下50～100㎝である。ただし第1面全体の検出レベルは、調査区西で発見した溝以東は、ほぼ平坦な検出レベルである。発見した遺構は溝６条・道路・土坑５基・柱穴157穴。下層で確認した遺構面と同様に、第１面も比較的短期間に生活空間の更新がおこなわれ、遺構の重複がみられる。調査区東側の凸部分は、上層の生活面と遺構を一緒に提示している。新旧関係については、報告を参照していただきたい。第１面検出レベルは約9.2mである。

道路１・２（図30・31）

調査区南側で発見した、比較的大きな破砕泥岩を使用した東西に延びる地行である。東は調査区外に延びているため全形を確認できないが、明らかに屋敷地の境界に位置している。西は小町大路側溝によって途絶えるが、大路を挟んだ先には、やや南にずれながらもほぼ同一軸の延長線上に小路がある。これらのことから、本址が道路である可能性は高いと判断した（図２調査区設定図参照）。その場合、小町大路側溝を渡る手段があってよい。今回の調査では「橋」などの構造物を想定できる遺構の検出はできなかったが、「板橋」や「桁橋」のような略式の小規模な橋が架かっていたのかもしれない。道路ではないと仮定した場合、第３・２面の報告で述べたように、この地行の下層は屋敷地の区画の溝・柵列が発見されており、同様に屋敷地、および屋敷地内を区画するための空閑地であったかもしれない。土層堆積は図３・４を参照。

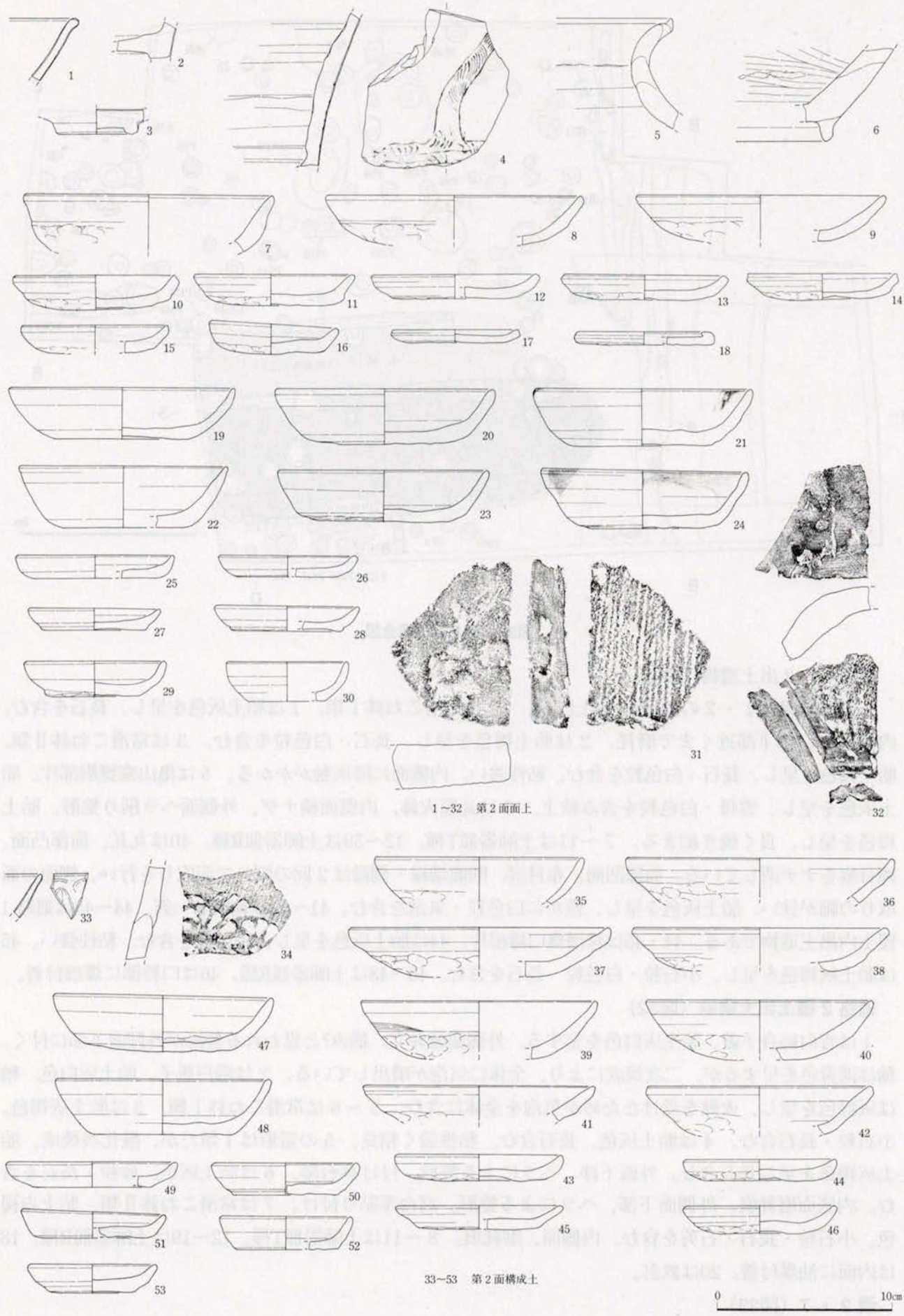


図29　第２面面上・第２面構成土出土遺物

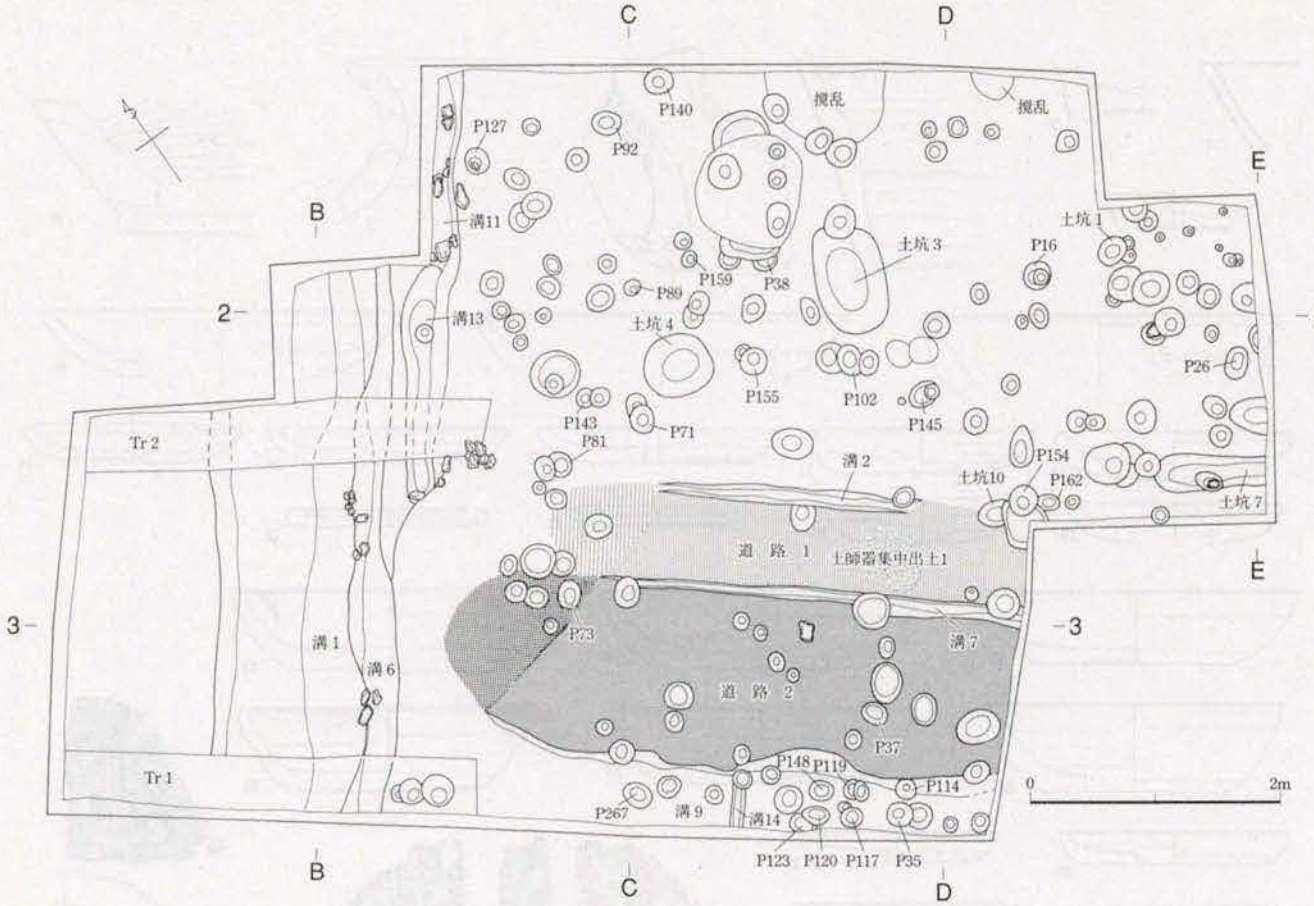


図30　第１面遺構全図

道路１・２出土遺物（図31）

１～43は道路１・２の面上から出土。１・２は常滑こね鉢Ⅰ類。１は胎土灰色を呈し、長石を含む。内側面、口縁下部近くまで磨耗。２は胎土褐色を呈し、長石・白色粒を含む。３は常滑こね鉢Ⅱ類。胎土褐色を呈し、長石・白色粒を含む。粘性強い。内側面に降灰釉がかかる。５は亀山窯甕胴部片。胎土灰色を呈し、雲母・白色粒を含み軟土。６は瓦器火鉢。内側面横ナデ、外側面ヘラ削り整形。胎土褐色を呈し、良く焼き締まる。７～11は土師器皿T種。12～39は土師器皿R種。40は丸瓦。筒部凸面、縄目痕をナデ消している。筒部凹面、布目痕。凹面端縁・側縁は２回の削りで面取りを行い、側面の面取りの幅が狭い。胎土灰色を呈し、僅かに白色粒・気泡を含む。41～43は鉄製品・釘。44～48は道路１覆土内出土遺物である。44・45は常滑甕口縁部片。44は胎土灰色を呈し、白色粒を含む。粘性強い。45は胎土灰褐色を呈し、小石粒・白色粒・長石を含む。46～48は土師器皿R種。46は口唇部に煤痕付着。

道路２覆土出土遺物（図32）

１は青白磁合子蓋。胎土灰白色を呈する。外側面蓮弁文。摘み?と思われる装飾が外側面下部に付く。釉は淡青色を呈するが、二次焼成により、全体に気泡が噴出している。２は瀬戸瓶子。胎土灰白色。釉は灰緑色を呈し、火熱を受けたためか気泡を全体に含む。３～６は常滑こね鉢Ⅰ類。３は胎土灰褐色。小石粒・長石含む。４は胎土灰色。長石含む。粘性強く精良。５の器形はⅠ類だが、酸化炎焼成。胎土灰褐色を呈し長石含む。外面下部、ヘラによる整形。付け高台部。６は胎土灰色。砂粒・長石を含む。内底面磨耗痕。外側面下部、ヘラによる整形。高台部貼り付け。７は常滑こね鉢Ⅱ類。胎土赤褐色。小石粒・長石・石英を含む。内側面、磨耗痕。８～11は土師器皿T種。12～19は土師器皿R種。18は内面に油煤付着。20は鉄釘。

溝２・７（図33）

道路１・２とした、破砕泥岩の地行層上面で発見した。溝２・７は、堆積土が近似しており、灰茶

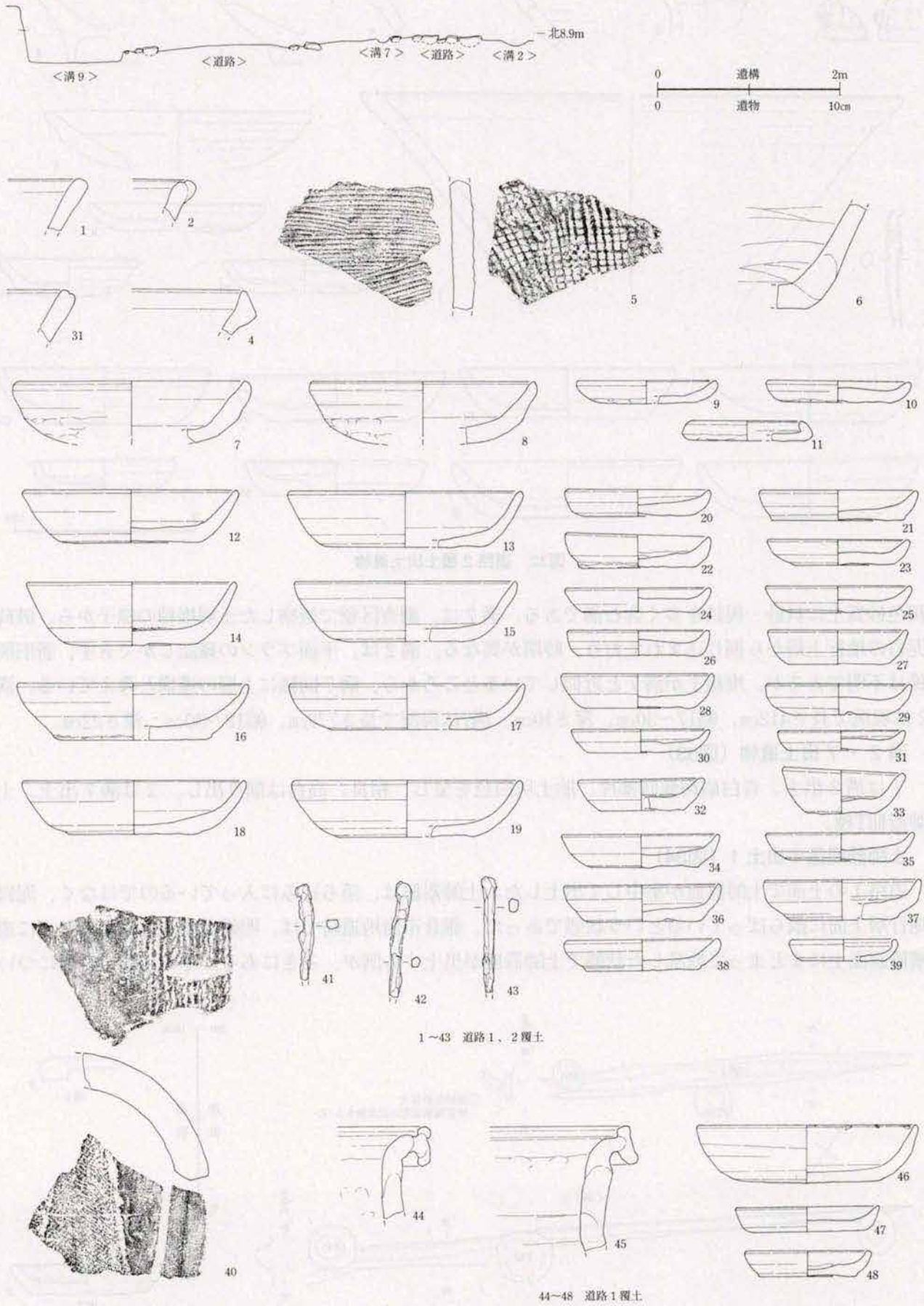


図31 道路1・2出土遺物

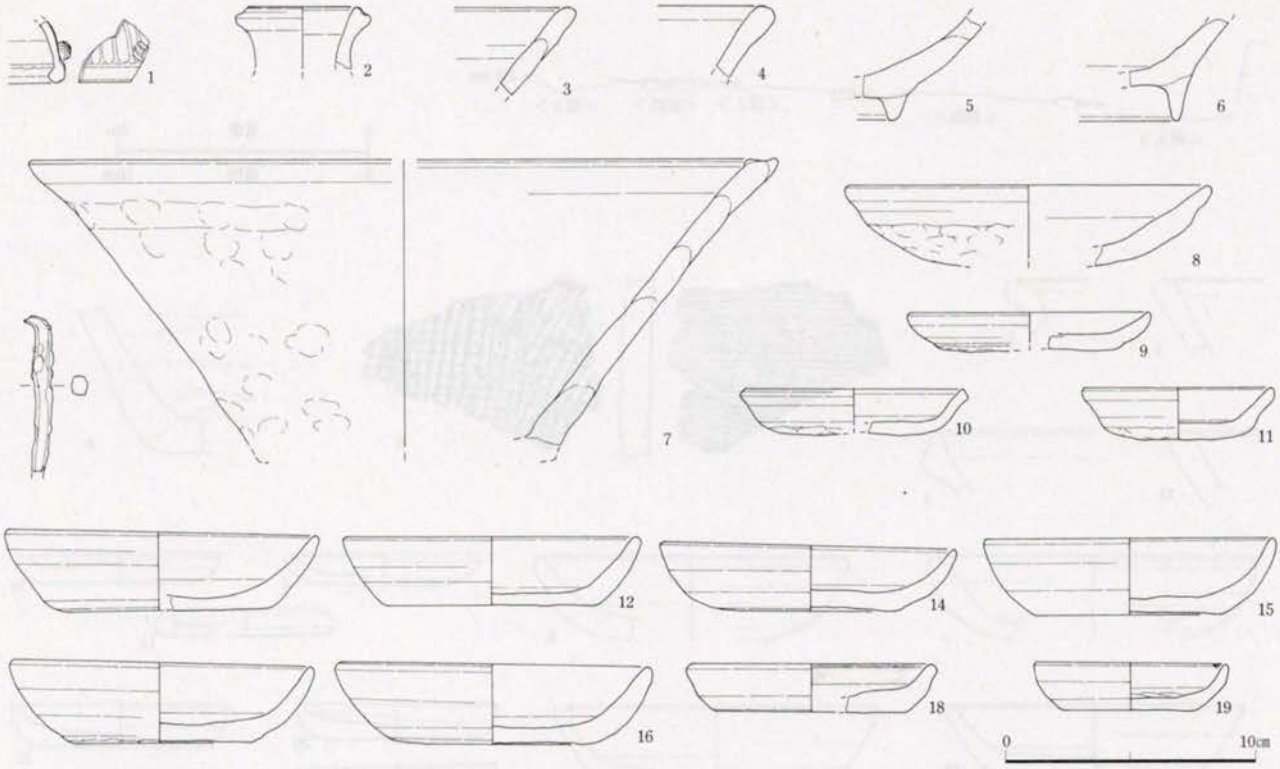


図32　道路２覆土出土遺物

褐色砂質土に貝砂・褐鉄を多く含む溝である。溝７は、調査区壁で観察した土層堆積の様子から、破砕泥岩の地行上層から掘り込まれており、時期が異なる。溝２は、平面プランの確認しかできず、新旧関係は不明であるが、堆積土が溝７と近似しているところから、溝７同様に上層の遺構と考えている。溝２は現況で長さ412㎝、幅17～30㎝、深さ10㎝。溝7は現況で長さ772㎝、幅12～30㎝、深さ22㎝。

溝２・７出土遺物（図33）

１は溝２出土、青白磁梅瓶底部片。胎土灰白色を呈し、精良。高台は削り出し。２は溝７出土、土師器皿T種。

土師器皿集中出土１（図34）

道路１の上面で土師器皿が集中して出土した。土師器皿は、落ち込みに入っているのではなく、泥岩地行層上面に散らばっているという状態であった。鎌倉市街地遺跡では、明確な掘り込みを持たずに遺構確認面上にまとまって散乱した状態で土師器皿が出土する例が、ときにある。その目的・性格につい

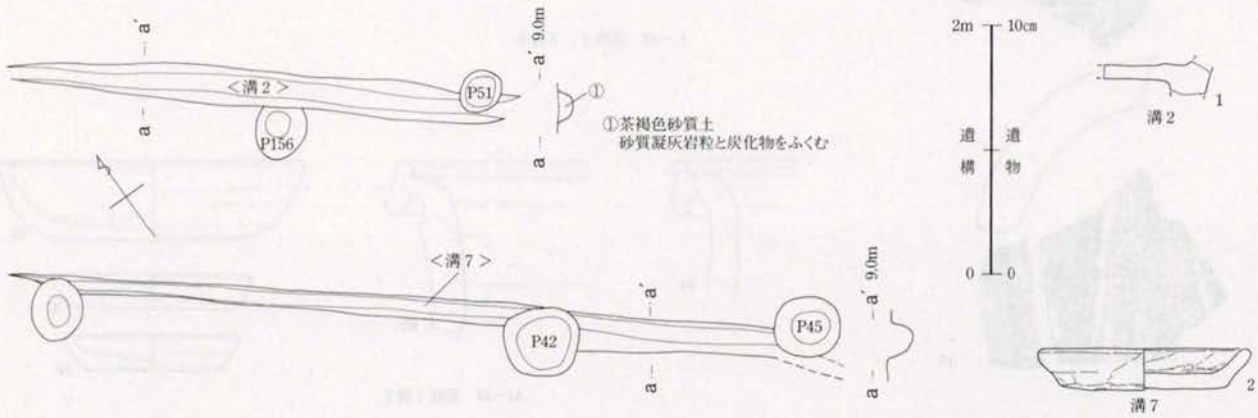


図33　溝２・７、同出土遺物

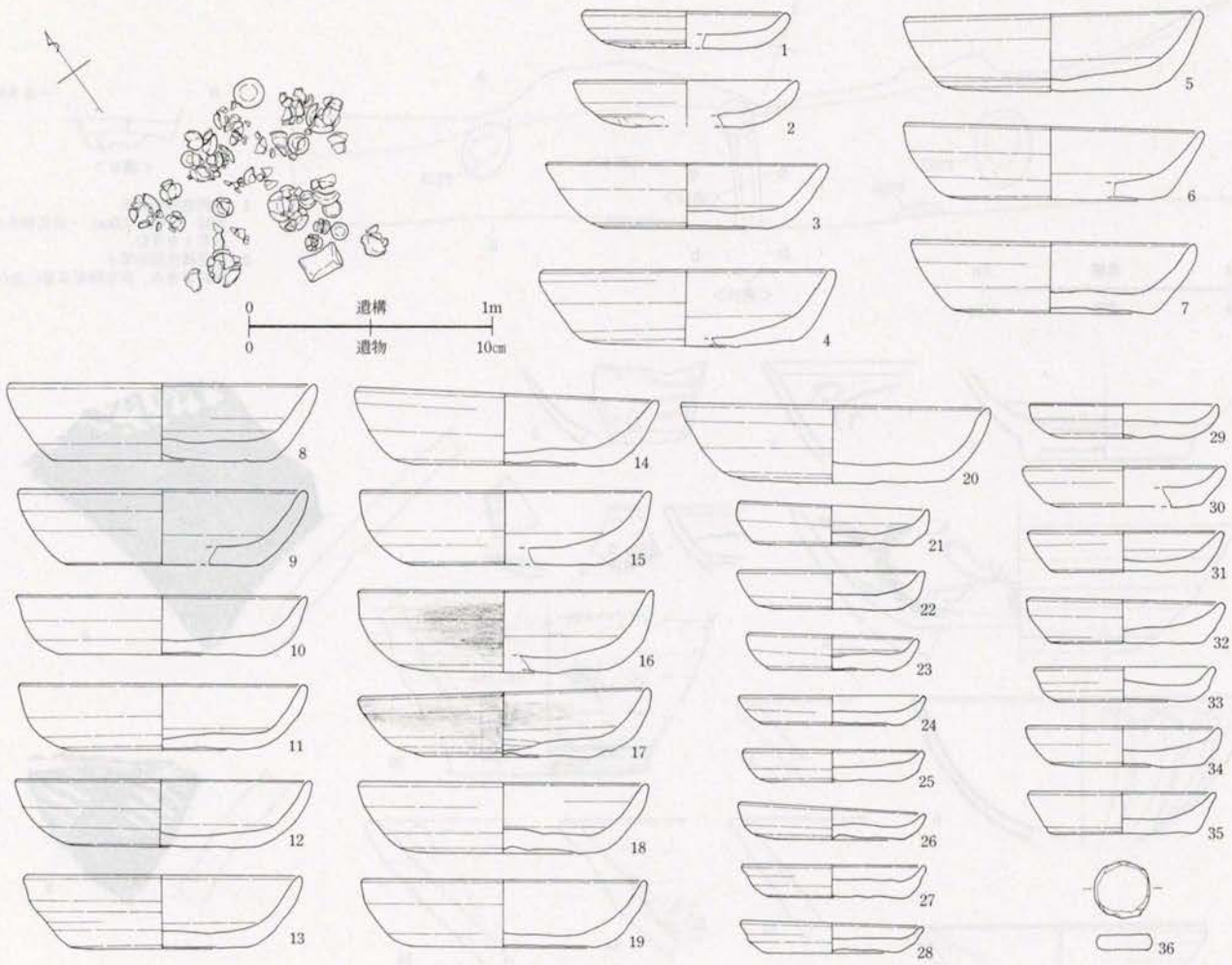


図34　土師器集中出土１、同遺物

ては、現在のところ「廃棄」であるのか「埋納」であるのか、一概に決められない。本地点で発見された土師器皿集中出土1は、土師器皿に混じって炭があったこと、正位置（内面を上にして）に置かれた土師器皿が多かったことなどから、道路地行にともなう地鎮などの儀式の際に埋め込まれた可能性もあるが、不明である。

土師器皿集中出土１遺物（図34）

１・２は土師器皿T種。３～35は土師器皿R種。16・17は内外面ともに油煤付着。36は土師器皿R種の底部転用品。円盤状に加工している。図示した遺物点数は35点であるが、他に破片で、土師器皿R種（大86点・小26点）土師器皿T種（大２点）渥美甕胴部片1点が出土している。

溝９（図35）

調査区南側で発見した東西に延びる溝である。上層を近世以降に削平され、遺構の形状を明確に検出することが出来なかった。道路１・道路２の破砕泥岩による地行に伴う遺構である。遺構底面は、平坦であり、上端からの掘り込みも深いところで25cmと浅い溝である。

溝９・ピット267出土遺物（図35）

１～46は溝９出土遺物である。１は竜泉窯青磁壺底部片。胎土灰色を呈し、精良。高台部・外底部、露胎。２～４は竜泉窯画花文碗。２は口縁部片。外面無文。胎土暗灰色。釉は濃い緑色を呈す。内面擦過傷残る。３は胴部片。胎土灰色。内面擦過傷残る。４は胴部片。外面無文。胎土は暗灰色を呈する。内外面ともに細かく貫入が入る。５は同安窯系青磁櫛描文碗。胎土灰色。外側面に焼成前の傷が残

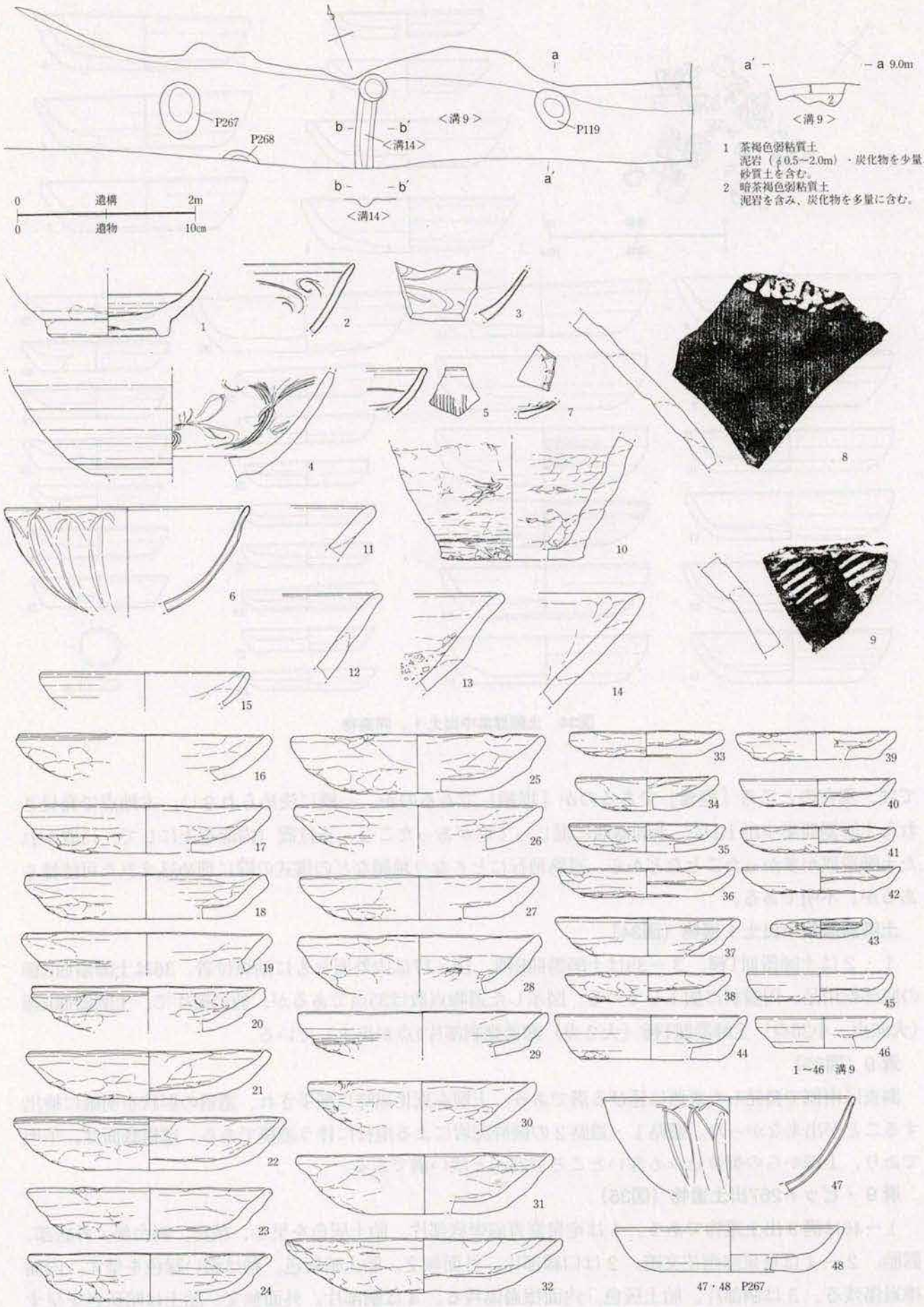


図35 溝9・ピット267、同出土遺物

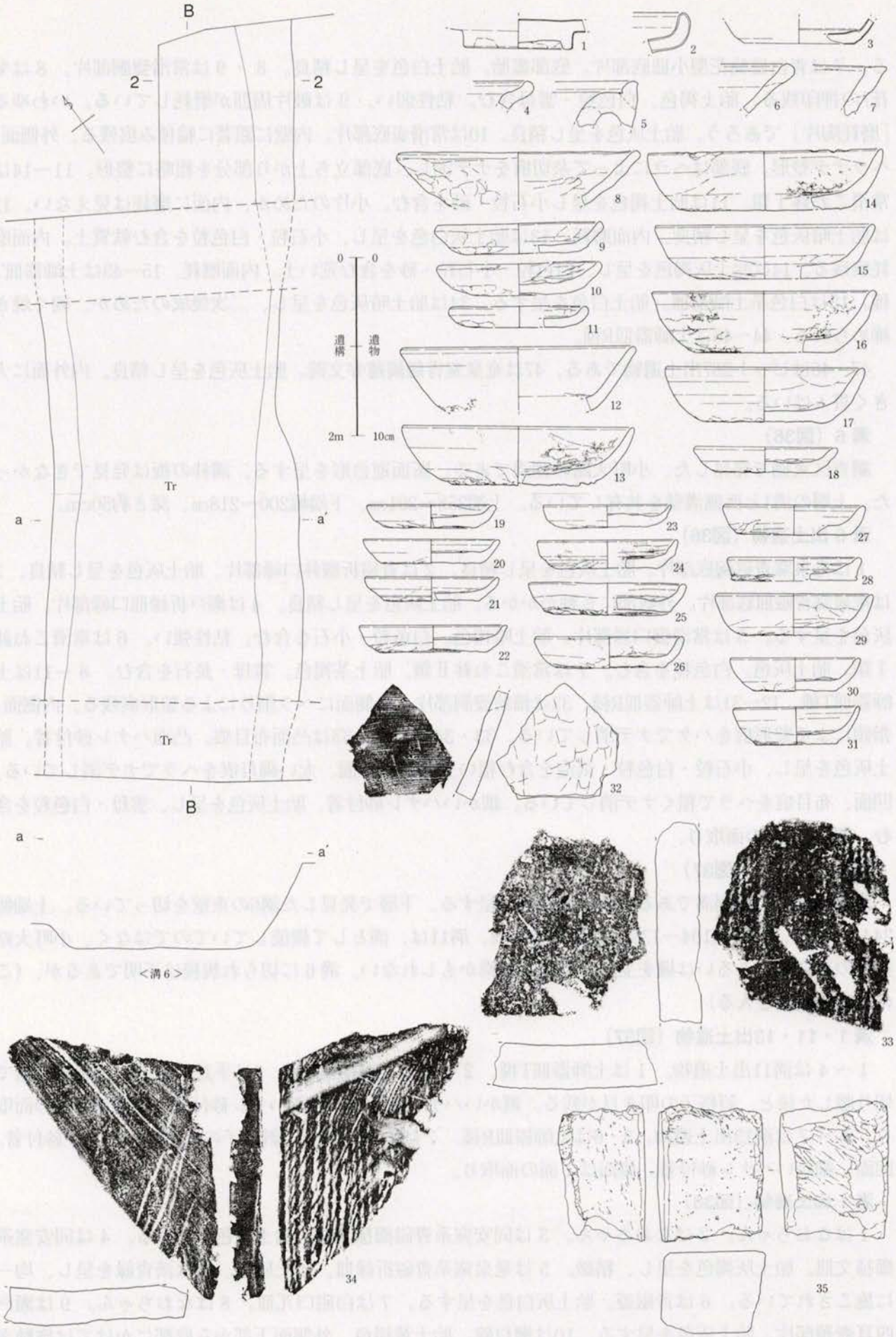


図36　溝6、同出土遺物

る。7は青白磁輪花型小皿底部片。底部露胎。胎土白色を呈し精良。8・9は常滑甕胴部片。8は菊花?の押印残る。胎土褐色。白色粒・雲母含む。粘性弱い。9は破片周囲が磨耗している。いわゆる「磨耗陶片」であろう。胎土灰色を呈し精良。10は常滑壷底部片。内壁に顕著に輪積み痕残る。外側面、ヘラナデ整形。底部はヘラによって糸切痕をナデ消し、底部立ち上がり部分を粗略に整形。11～14は常滑こね鉢Ⅰ類。11は胎土褐色を呈し小石粒・砂を含む。小片のためか、内面に磨耗は見えない。12は胎土暗灰色を呈し精良。内面磨耗。13は胎土灰白色を呈し、小石粒・白色粒を含む軟質土。内面磨耗痕残る。14は胎土灰褐色を呈し、白色粒・小石粒・砂を含む荒い土。内面磨耗。15～43は土師器皿T種。15は白色系土師器皿。胎土白色を呈する。34は胎土暗灰色を呈し、二次焼成のためか、硬く焼き締められる。44～46は土師器皿R種。

47・48はピット267出土遺物である。47は竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗。胎土灰色を呈し精良。内外面に大きく貫入はいる。

溝6（図36）

調査区東側で発見した、小町大路の側溝である。断面逆台形を呈する。溝枠の板は発見できなかった。上層の溝1と西側溝壁を共有している。上端258～291㎝、下端幅200～218㎝、深さ約50cm。

溝6出土遺物（図36）

1は竜泉窯青磁碗底部片。胎土灰色を呈し精良。2は青磁折腰鉢口縁部片。胎土灰色を呈し精良。3は竜泉窯青磁皿底部片。外底部にも釉がかかる。胎土灰色を呈し精良。4は瀬戸折縁皿口縁部片。胎土灰色を呈する。5は常滑甕口縁部片。胎土暗褐色。白色粒・小石を含む。粘性強い。6は常滑こね鉢Ⅰ類。胎土灰色。白色粒を含む。7は常滑こね鉢Ⅱ類。胎土茶褐色。雲母・長石を含む。8～11は土師器皿T種。12～31は土師器皿R種。32は備前甕胴部片。外側面にヘラ削りによる整形痕残る。内側面、指頭による整形痕をハケでナデ消している。33・34は平瓦。33は凸面布目痕。凸面ハナレ砂付着。胎土灰色を呈し、小石粒・白色粒・気泡を含む粗い土。34は凸面、太い縄目痕をヘラでナデ消している。凹面、布目痕をヘラで粗くナデ消している。細かいハナレ砂付着。胎土灰色を呈し、雲母・白色粒を含む。側面は1面の面取り。

溝1・11・13（図37）

溝1は小町大路側溝である。断面逆台形を呈する。下層で発見した溝6の東壁を切っている。上端幅244～204㎝、下端幅104～133㎝、深さ約65㎝。溝11は、溝として機能していてのではなく、小町大路側溝の東に塀、あるいは柵を立てるための遺構かもしれない。溝6に切られ規模は不明であるが、（この部分原稿続き入る）

溝1・11・13出土遺物（図37）

1～4は溝11出土遺物。1は土師器皿T種。2・3は土師器皿R種。4は平瓦。凸面、粘土板を紐で切り離した後と、斜格子の叩き目が残る。細かいハナレ砂付着。凹面ハナレ砂付着。側面は1面の面取り。5～7は溝13出土遺物。5・6は土師器皿R種。7は平瓦。凸面、斜格子の叩き痕。ハナレ砂付着。凹面、細かいハナレ砂付着。側面は1面の面取り。

溝1出土遺物（図38）

1はなおちゃん。2はなおちゃん。3は同安窯系青磁櫛掻文皿。胎土灰色を呈する。4は同安窯系櫛掻文皿。胎土灰褐色を呈し、精緻。5は竜泉窯系青磁折縁皿。胎土灰色。釉は淡青緑を呈し、均一に施こされている。6は青磁蓋。胎土灰白色を呈する。7は白磁口兀皿。8はなおちゃん。9は瀬戸四耳壺頸部片。胎土灰色を呈する。10は瀬戸碗。胎土黄褐色。外側面下部から底部にかけては施釉されていない。11・12は瀬戸碗。11は胎土灰色。火熱を受けたためか、釉は乳白色に白濁する。12は胎

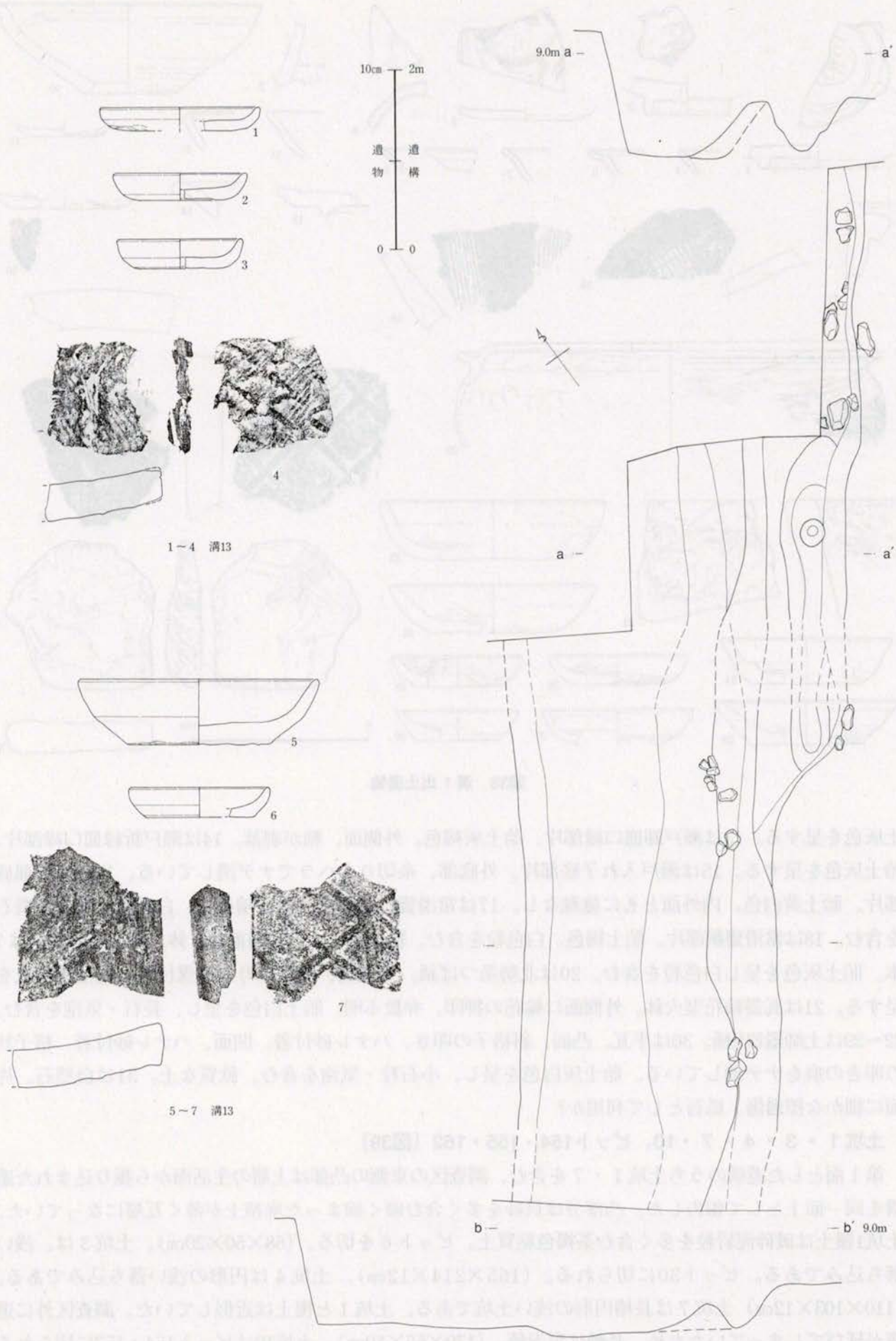


図37　溝1・11・13、溝11・13出土遺物

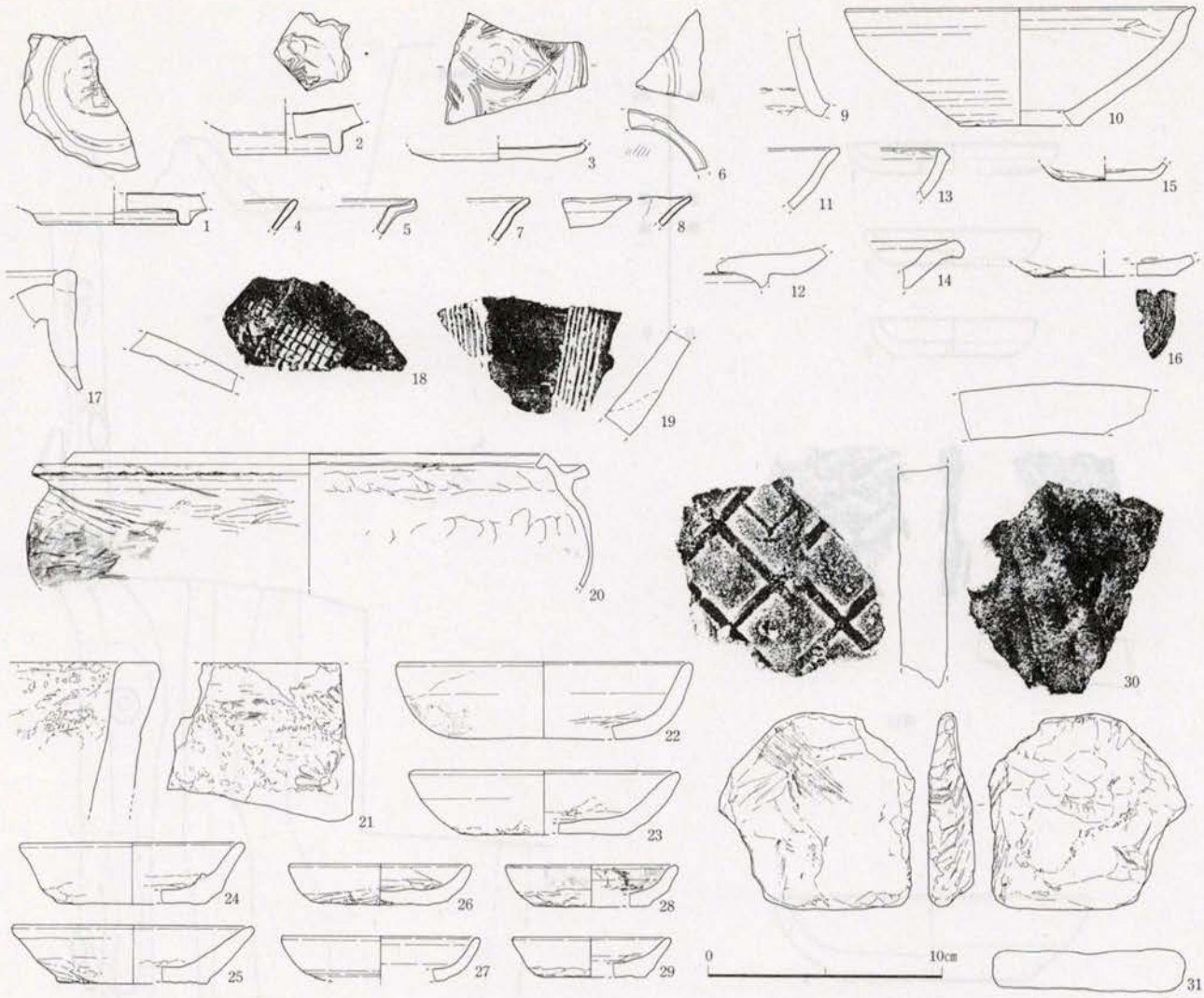


図38　溝１出土遺物

土灰色を呈する。13は瀬戸卸皿口縁部片。胎土灰褐色。外側面、釉が剥落。14は瀬戸折縁皿口縁部片。胎土灰色を呈する。15は瀬戸入れ子底部片。外底部、糸切りをヘラでナデ消している。16は瀬戸皿底部片。胎土黄白色。内外面ともに施釉なし。17は常滑甕口縁部片。胎土暗褐色。白色粒・雲母・長石を含む。18は常滑甕胴部片。胎土褐色。白色粒を含む。粘性弱い。19は備前すり鉢。すり目の単位は７本。胎土灰色を呈し白色粒を含む。20は北勢系つば鍋。外側面、つばより下に煤付着。胎土黄白色を呈する。21は瓦器輪花型火鉢。外側面に輪花の押印。弁数不明。胎土白色を呈し、長石・気泡を含む。22～29は土師器皿R種。30は平瓦。凸面、斜格子の叩き。ハナレ砂付着。凹面、ハナレ砂付着。格子状の叩きの痕をナデ消している。胎土灰白色を呈し、小石粒・気泡を含む。軟質な土。31は自然石。片面に細かな擦過傷。砥石として利用か?

土坑１・３・４・７・10、ピット154・155・162（図39）

第１面とした遺構のうち土坑１・７を含む、調査区の東側の凸部は上層の生活面から掘り込まれた遺構を同一面上として報告した。凸部分は貝砂を多く含む硬く締まった堆積土が薄く互層になっていた。土坑1覆土は破砕泥岩粒を多く含む茶褐色粘質土。ピット６を切る。(68×50×20㎝)。土坑３は、浅い落ち込みである。ピット30に切られる。(165×214×12㎝)。土坑４は円形の浅い落ち込みである。(110×103×12㎝) 土坑７は長楕円形の浅い土坑である。土坑１と覆土は近似していた。調査区外に遺構が延びてしまっていたため、長軸は現況値。(170×55×10㎝)。土坑10はピット154・157に切られる浅い土坑である。長軸は現況値。(45×40×10㎝)。ピット154は土坑10・ピット157を切る浅い落ち込

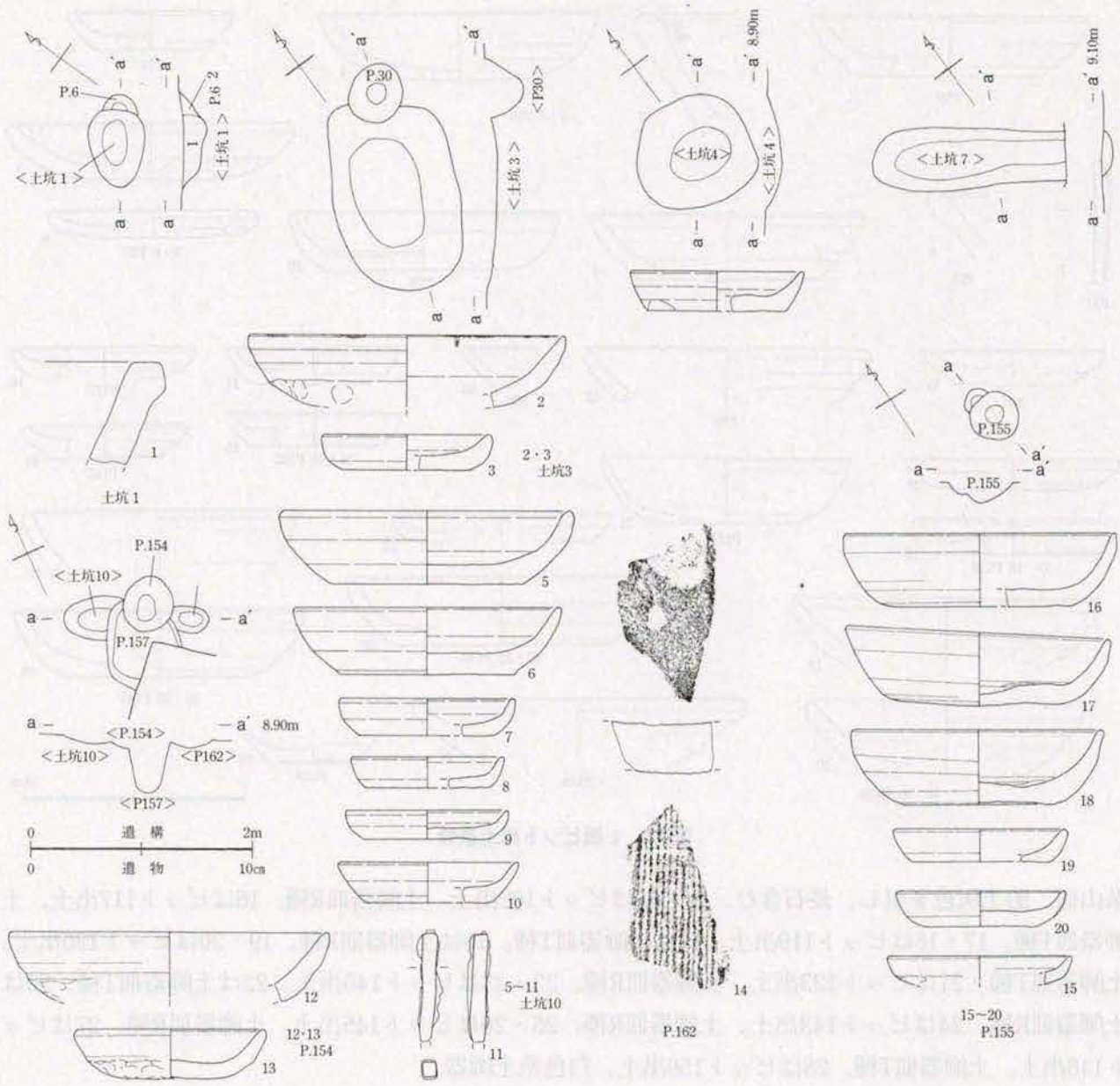


図39　土坑１・３・４・７・10、ピット154・155・162、同出土遺物

みである。(45×52×７㎝) ピット155の覆土は破砕泥岩粒を多く含む。柱穴である。(43×43×18㎝)。ピット162はピット154・157に切られる浅い遺構である。長軸は現況値。(35×25×10㎝)。

土坑１・３・４・７・10、ピット154・155・162出土遺物（図39）

１は土坑１出土。土器火鉢。胎土赤褐色を呈する。２・３は土坑３出土。２は土師器皿T種。３は土師器皿R種。４は土坑４出土。土師器皿R種。５～11は土坑10出土。５～10は土師器皿R種。11は鉄製品・釘。12・13はピット154出土。土師器皿T種。14はピット162出土。平瓦。凸面縄目痕。細かいハナレ砂付着。凹面細かいハナレ砂付着。胎土褐色を呈し、雲母・白色粒を含む。硬く焼き締まる。15～20はピット155出土。15は土師器皿T種。16～20は土師器皿R種。１面ピット出土遺物（図40）個別に遺構図面は図示していない。１はピット16出土。土師器皿R種。２・３はピット26出土。２は土器火鉢。内面器壁が剥落している。胎土灰橙色を呈する。３は土師器皿R種。４はピット34出土。土師器皿R種。５・６はピット35出土。土師器皿T種。７はピット37出土。鉄製品・釘。８は常滑こね鉢Ⅰ類。胎土褐色を呈し、白色粒・長石含む。９はピット71出土。土師器皿R種。10はピット73出土。土師器皿R種。11はピット81出土。土師器皿R種。12はピット89出土。土師器皿T種。13はピット92出土。東遠

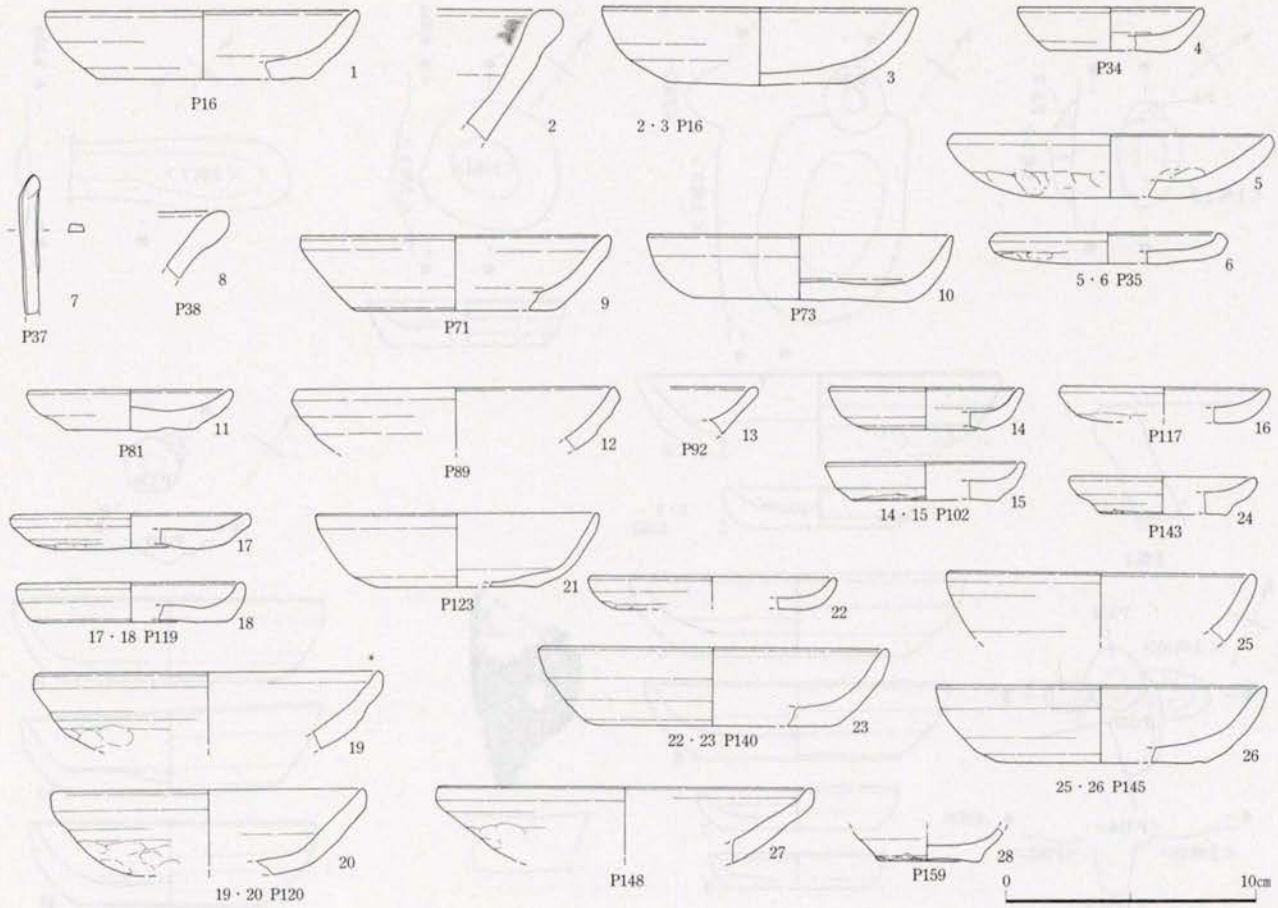


図40　1面ピット出土遺物

系山皿。胎土灰色を呈し、長石含む。14・15はピット102出土。土師器皿R種。16はピット117出土。土師器皿T種。17・18はピット119出土。17は土師器皿T種。18は土師器皿R種。19・20はピット120出土。土師器皿T種。21はピット123出土。土師器皿R種。22・23はピット140出土。22は土師器皿T種。23は土師器皿R種。24はピット143出土。土師器皿R種。25・26はピット145出土。土師器皿R種。27はピット148出土。土師器皿T種。28はピット159出土。白色系土師器。

第1面面上・第1面構成土出土遺物（図41）

1～14は第1面面上から出土した遺物である。1は同安窯系青磁皿口縁部片。内底面に釉が厚く溜まる。胎土灰色を呈し精良だが、気泡を含む。2は同安窯系青磁画花文碗口縁部片。胎土灰色を呈し精良。3は青白磁梅瓶胴部片。胎土白色。4は瀬戸おろし皿口縁部片。胎土褐色。5は瀬戸皿。胎土褐色を呈し精良。6・7は常滑甕口縁部片。6は胎土暗灰色。長石・小石粒を含む。7は胎土暗灰色。長石を含む。粘性強い。8～10は土師器皿T種。11は土師器皿R種。12は丸瓦。筒部凸面、わずかに布目痕残る。筒部凹面、布目痕残る。胎土灰橙色。小石粒・長石・気泡を含む粗い土。13は平瓦。凸面布目痕残る。胎土橙色を呈し精良。硬く焼き締まる。側面ヘラによる面取り。14は木製品。用途不明。棒状の先端部・側面が火熱を受け炭化している。15～40は第1面構成土から出土遺物した遺物である。15～17は土師器皿T種。18～38は土師器皿R種。39は須恵器蓋。胎土暗灰色を呈する。蓋上面に自然釉が厚くかかる。40は仕上げ砥。鳴滝産。両面、使用痕跡あり。側面切り出し痕残る。

トレンチ1～4出土遺物（図42）

1～11はトレンチ1出土。1は瀬戸・瓶子底部片。胎土淡灰色。火熱を受けたためか外側面、釉が剥離している。2は瀬戸・太鼓胴の香炉口縁部片。口縁部、水平面と外側面、口縁下部に『○』の押印。押印直径は外縁で1.4㎝。外側面は押印の下に沈線が1条廻る。押印・沈線ともに雑な仕上げ。胎

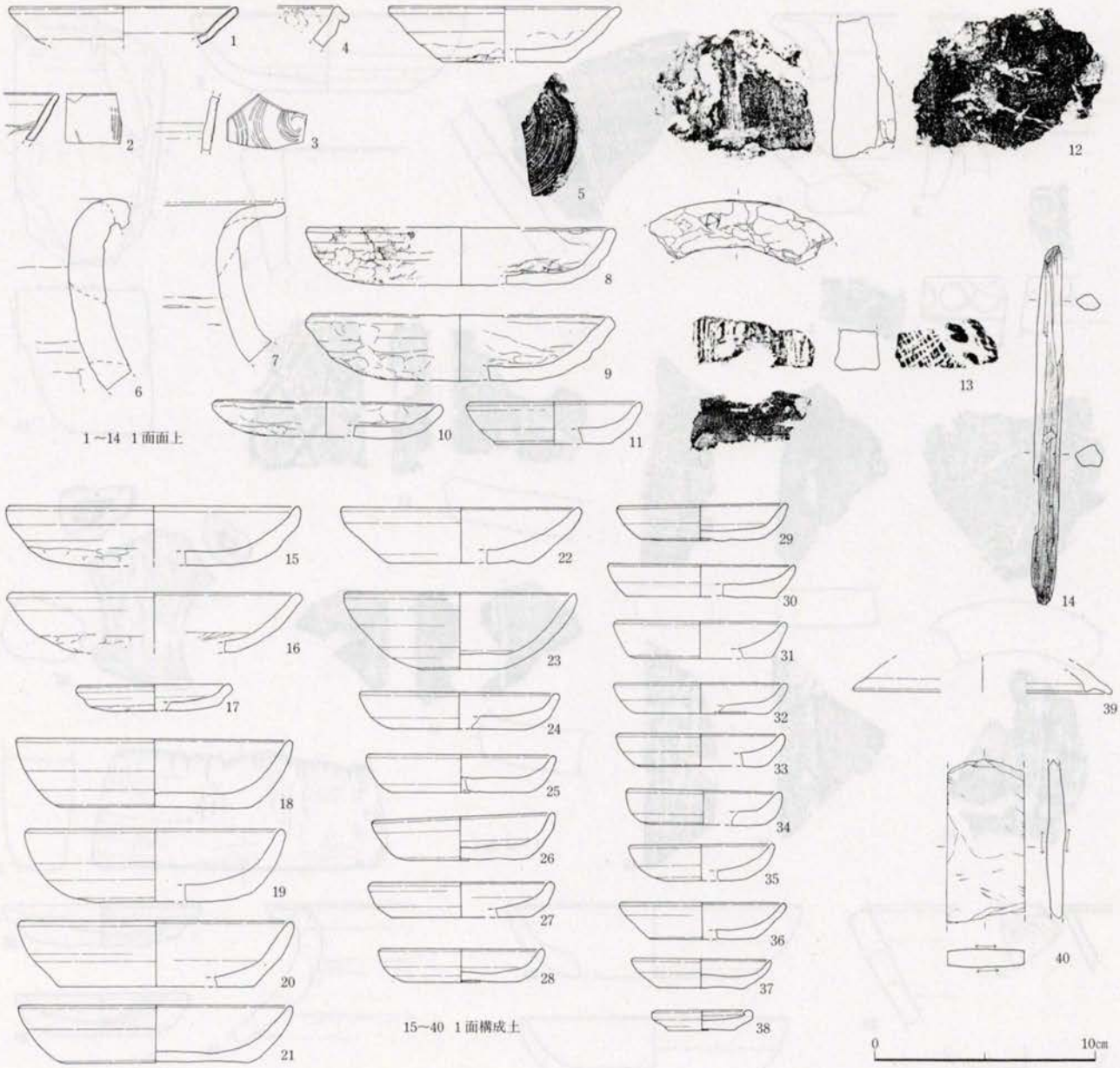


図41　第１面面上・第1面構成土出土遺物

土灰白色を呈する。３は瀬戸・碗。胎土黄灰白色を呈する。釉は透明で全体に貫入が入る。４は渥美甕口縁部片。胎土灰色を呈し精緻。５は常滑甕口縁部片。胎土灰色。長石を含む。６は常滑こね鉢Ⅱ類底部片。胎土灰色。長石・気泡を含む。内面磨耗痕あり。７は備前すり鉢底部片。すり目の単位は10本。胎土灰色。白色粒・小石粒混入。外側面中位に沈線が３本廻る。８は土師器皿R種。９は瓦器火鉢。胎土灰橙色。白色粒・黒雲母を含む。10は丸瓦。筒部凸面に縄目叩き締めを行った後ヘラによる整形。筒部凹面は布目痕残る。胎土灰色を呈し、白色粒・小石粒・気泡を含む。粗悪な胎土。11～14は平瓦。11は凸面、ヘラによるナデ。凹面ヘラによるナデ。ハナレ砂付着。胎土褐色を呈し、白色粒をわずかに含む。精良。12は凸面縄目痕、凹面糸切痕残る。胎土灰色を呈し精良。焼成は良好で良く焼き締まる。13は凸面ハナレ砂付着。格子目の叩き痕。側面ヘラ削りの面取りの後、側縁端をナデて丸く仕上げる。凹面布目痕をナデ消している。ハナレ砂付着。胎土は灰橙色を呈し、小石粒・雲母・気泡を多く含む軟質な土。14は凸部、丁寧な整形。凹部、布目痕をナデ消している。胎土褐色。小石粒・石英・長石を含み軟質。焼成は良好。15は中砥。天草産。16は鹿角・加工品。加工途上の製品ではなく、鹿角先端部を加工材として切り取った残りだと思われる。17は木製品・下駄・歯。18～33は

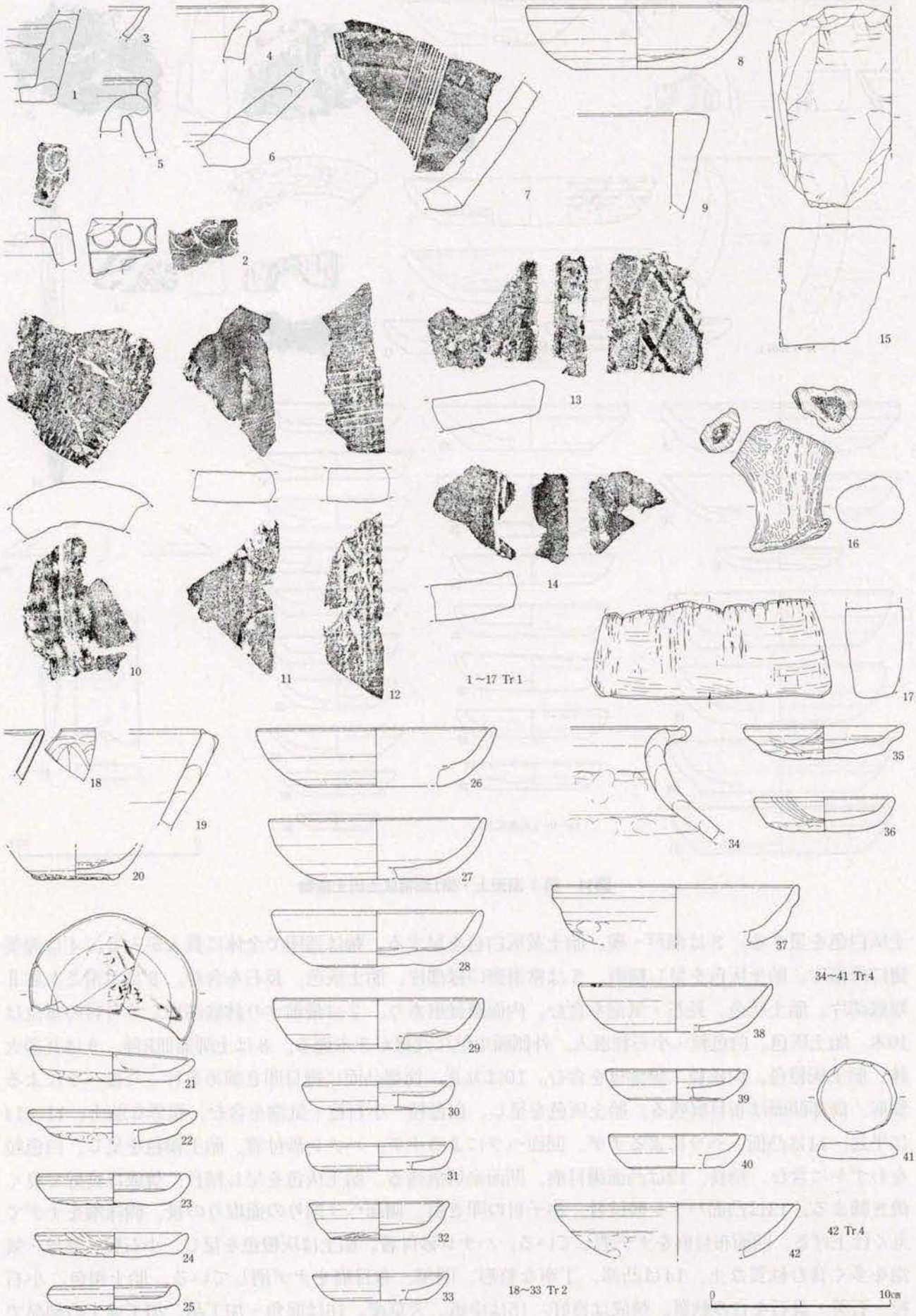


図42　トレンチ１～４出土遺物

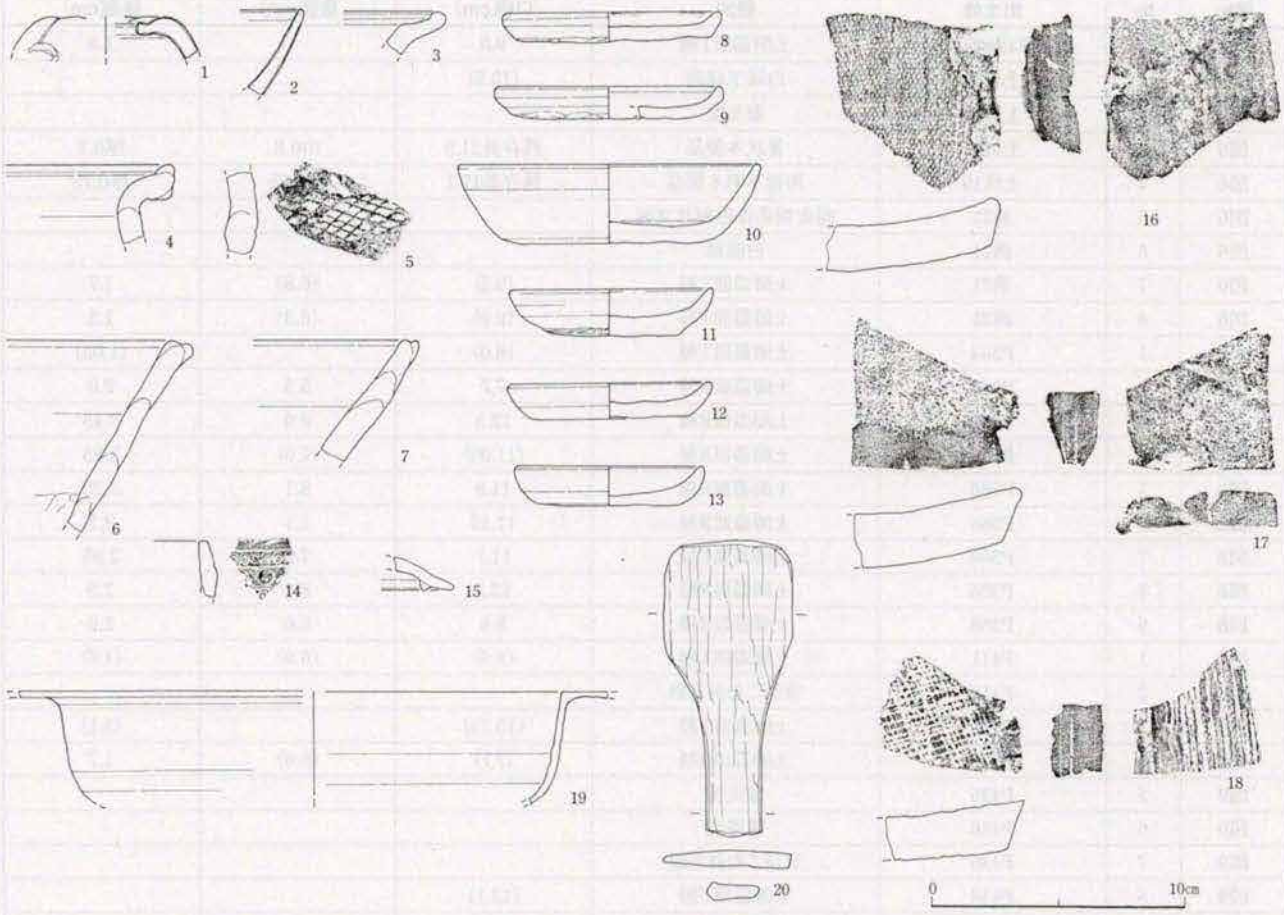


図43　表採遺物

トレンチ２出土。18は竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗・口縁部片。胎土灰白色。気泡を含む。19は常滑こね鉢Ⅱ類・口縁部片。20は北部系山茶碗底部片。付高台。畳付に籾殻痕付着。内底面にも籾殻痕あり。重ね焼きの痕跡であろう。21～25は土師器ⅢT種。21は内底面に墨書あり。二重の三角形の内に「東」という文字は判読できるが、その他は不明。26～33は土師器ⅢR種。34～41はトレンチ３出土。34は常滑甕口縁部片。胎土灰褐色。白色粒・小石粒を含む。粘性強い。35～37は土師器ⅢT種。38～40は土師器ⅢR種。41は土師器ⅢT種の底部の転用品。円盤状に加工。42はトレンチ4出土。土師器ⅢT種。

表採遺物（図43）

１は青磁瓜形水注。胎土灰白色を呈する。外側に把手の痕跡あり。２は竜泉窯画花文碗口縁部片。釉は灰色を呈する。内面、口縁部下に薄く沈線が廻る。３は瀬戸折縁鉢。胎土黄白色。器表は灰釉をハケ塗り。4は常滑甕口縁部片。胎土暗灰色。長石・石英を含む。5は常滑甕胴部片。６・７は常滑こね鉢Ⅱ類口縁部片。６は、胎土灰色。長石・石英を含む。7は胎土褐色。長石・気泡を含む。内面に細かい降灰。８・９は土師器ⅢT種。10～13は土師器ⅢR種。14は瓦器香炉。口縁株に2条の沈線で区画した内側に巴文の押印。貼り付け珠文。雷文の押印。胎土灰色を呈する。火熱を受けたためか、器表が剥離する。15は須恵器坏の蓋。胎土灰色。16～18は平瓦。16は、凸面ハナレ砂付着。凹面、布目痕。側面ヘラ削りの面取りの後、側縁端をナデて丸く仕上げる。胎土灰色。長石小石粒を含む。17は凸面ハナレ砂付着。ヘラによる整形。凹面ハナレ砂付着。側縁部ヘラによる整形。胎土は灰色。石英・気泡を含む。焼成良好で、硬質。18は凸面縄目痕残る。凹面布目痕。側縁ヘラによる整形。胎土は赤褐色を呈し、精良。焼成は良好で硬質である。19は鉄製品・鍋。20は木製品・杓子か。

【引用・参考文献は第4章末に一括】（伊丹）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図5	1	第4面面上	土師器皿T種	9.0		1.8
図6	1	土坑19	白磁玉縁碗	(13.5)		
図6	2	土坑19	渥美甕			
図6	3	土坑19	箸状木製品	残存長21.5	巾0.8	厚0.3
図6	4	土坑19	用途不明木製品	残存長12.1	巾2.85	厚0.75
図6	5	溝21	同安窯系青磁劃花文碗			
図6	6	溝21	白磁皿			
図6	7	溝21	土師器皿T種	(9.2)	(6.8)	1.7
図6	8	溝21	土師器皿T種	(9.9)	(5.3)	1.5
図8	1	P364	土師器皿T種	(8.0)		(1.05)
図8	2	P364	土師器皿R種	7.7	5.5	2.0
図8	3	P366	土師器皿R種	12.5	9.0	3.45
図8	4	P366	土師器皿R種	(11.05)	(7.0)	3.25
図8	5	P366	土師器皿R種	11.8	8.1	3.25
図8	6	P366	土師器皿R種	11.15	7.1	3.1
図8	7	P366	土師器皿R種	11.7	7.9	2.95
図8	8	P366	土師器皿R種	12.3	8.6	2.9
図8	9	P366	土師器皿R種	8.6	6.6	2.0
図9	1	P411	土師器皿T種	(8.6)	(6.8)	(1.7)
図9	2	P412	常滑こね鉢Ⅱ類			
図9	3	P412	土師器皿T種	(13.75)		(3.1)
図9	4	P412	土師器皿R種	(7.7)	(5.6)	1.7
図9	5	P436	渥美甕			
図9	6	P436	常滑甕			
図9	7	P436	常滑こね鉢Ⅱ類			
図9	8	P436	土師器皿T種	(13.1)		
図9	9	P436	土師器皿T種	(14.1)		
図9	10	P436	土師器皿T種	(9.25)		
図9	11	P436	土師器皿T種	(8.8)		
図9	12	P436	土師器皿T種	(9.3)		
図9	13	P436	土師器皿T種	(9.05)		1.9
図9	14	P432	常滑こね鉢Ⅰ類			(14.2)
図9	15	P432	土師器皿T種	(12.0)		
図9	16	P432	土師器皿T種	(9.2)		1.45
図9	17	P432	土師器皿T種	(8.2)		
図10	1	溝19	竜泉窯系青磁劃花文皿		(5.0)	
図10	2	溝19	青白磁合子身	(5.4)		
図10	3	溝19	常滑こね鉢Ⅰ類			
図10	4	溝19	常滑こね鉢Ⅱ類	(30.0)		残存高30.0
図10	5	溝19	土師器皿T種	(13.6)		3.0
図10	6	溝19	土師器皿T種	(13.2)		
図10	7	溝19	土師器皿T種	(14.2)	(7.0)	3.1
図10	8	溝19	土師器皿T種	(14.2)		
図10	9	溝19	土師器皿T種	(13.6)		
図10	10	溝19	土師器皿T種	(12.0)		
図10	11	溝19	土師器皿T種	(9.4)	(6.2)	
図10	12	溝19	土師器皿T種	(9.5)	(8.0)	
図10	13	溝19	土師器皿T種	(9.6)	(5.0)	1.6
図10	14	溝19	土師器皿T種	(9.6)	(5.0)	1.8
図10	15	溝19	土師器皿T種	(9.9)	(8.0)	1.5
図10	16	溝19	土師器皿T種	9.3		1.7
図10	17	溝19	土師器皿T種	8.4	5.0	2.2
図10	18	溝19	土師器皿T種	(9.4)	(6.0)	1.5
図10	19	溝19	土師器皿T種	9.4		2.0

表1　出土遺物法量表（1）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図10	20	溝19	土師器皿T種	(9.2)	(5.0)	1.7
図10	21	溝19	土師器皿T種	10.0	6.0	2.0
図10	22	溝19	土師器皿T種	(9.2)	(5.0)	1.7
図10	23	溝19	土師器皿T種	(9.2)	(5.0)	2.1
図10	24	溝19	土師器皿T種	(10.0)	(6.0)	2.1
図10	25	溝19	土師器皿T種	9.6	5.4	2.3
図10	26	溝19	土師器皿T種	(9.6)	(5.0)	2.0
図10	27	溝19	土師器皿T種	9.6		2.3
図10	28	溝19	土師器皿T種	(7.4)		3.0
図10	29	溝19	土師器皿T種	(7.8)		1.8
図10	30	溝19	土師器皿T種	(8.6)	(7.6)	1.5
図10	31	溝19	釘	残存長7.0	巾0.5	厚0.5
図10	32	溝19	不明滑石製品	残存長6.8	残存巾3.4	残存高3.5
図11	1	溝17	常滑甕			
図12	1	P297	土師器皿R種	(7.9)	(5.8)	1.8
図12	2	P300	土師器皿R種	(12.55)	(8.4)	3.2
図12	3	P301	滑石鍋			厚1.6
図12	4	P305	土師器皿T種	(13.9)		
図12	5	P305	土師器皿T種	(13.5)		
図12	6	P309	土師器皿R種	(11.7)	(8.1)	2.8
図12	7	P309	土師器皿R種	(8.1)	(7.1)	1.4
図12	8	P319	土師器皿T種	(9.0)		
図12	9	P319	土器碗	(9.1)		
図12	10	P329	土師器皿R種	(7.55)	(5.8)	1.25
図12	11	P329	土師器皿R種	(12.6)	(8.0)	3.1
図12	12	P331	土師器皿R種	(12.0)	(7.3)	3.65
図12	13	P339	竜泉窯系青磁劃花文碗			
図12	14	P339	土師器皿T種	(7.8)		
図12	15	P339	褐釉甕			
図12	16	P350	土師器皿T種	(9.05)		1.2
図12	17	P350	土師器皿T種	(13.95)		
図12	18	P352	土師器皿T種	13.8		3.2
図12	19	P368	土師器皿R種	(12.1)	(8.7)	3.15
図12	20	P368	土師器皿T種	(7.65)		
図12	21	P369	常滑こね鉢I類			
図12	22	P377	土師器皿R種	(12.6)	(8.1)	3.6
図12	23	P378	釘	残存長5.5	巾0.6	厚3.5
図12	24	P379	土師器皿R種	(12.3)	(8.5)	2.8
図12	25	P382	土師器皿T種	12.85		3.4
図12	26	P399	常滑甕			
図12	27	P399	土師器皿T種	(9.4)		1.6
図12	28	P399	土師器皿R種	(8.8)	(6.4)	1.8
図12	29	P399	土師器皿R種	8.2	6.4	1.6
図12	30	P401	土師器皿R種	(12.2)	(8.2)	3.0
図12	31	P413	土師器皿T種	(13.55)		
図12	32	P413	土師器皿T種	(8.45)		(1.35)
図12	33	P416	釘	残存長6.1	巾1.0	厚0.7
図12	34	P418	土師器皿T種	(14.9)		(3.55)
図12	35	P420	土師器皿R種	(7.2)	(4.7)	1.55
図12	36	P421	土師器皿R種	(8.3)	(5.55)	1.8
図12	37	P422	常滑こね鉢I類			
図12	38	P423	常滑甕			
図12	39	P428	竜泉窯系青磁劃花文碗	(14.85)		
図12	40	P428	土師器皿T種	(13.8)		(3.1)

表2　出土遺物法量表（2）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図12	41	P428	土師器皿T種	(12.4)		
図12	42	P431	竜泉窯系青磁無文碗			
図12	43	P435	土師器皿T種	(7.3)		(1.45)
図12	44	P438	土師器皿T種	(8.8)		1.4
図12	45	P438	土師器皿R種	(12.0)	(8.2)	3.0
図12	46	P440	土師器皿T種	(14.2)		
図12	47	P440	土師器皿T種	9.1		1.3
図12	48	P440	不明土丹製品			
図12	49	P441	常滑こね鉢Ⅱ類			
図12	50	P442	渥美甕			
図12	51	P443	渥美甕			
図12	52	P443	土師器皿T種	(9.05)		
図12	53	P444	渥美甕			
図12	54	P444	土師器皿T種	(14.6)		
図12	55	P444	土師器皿T種	(14.35)		
図12	56	P444	土師器皿T種	(12.8)		
図13	57	P447	青白磁皿			
図13	58	P445	平瓦			厚2.1
図14	1	3面面上	常滑甕			
図14	2	3面面上	常滑甕			
図14	3	3面面上	土師器皿T種	7.5		1.7
図14	4	3面面上	土師器皿R種	8.7	6.0	1.9
図14	5	3面面上	土師器皿R種	(7.1)	(6.0)	1.45
図14	6	3面面上	平瓦			厚2.6
図14	7	3面構成土	白磁			
図14	8	3面構成土	常滑甕			
図14	9	3面構成土	亀山系甕			
図14	10	3面構成土	白色系土師器皿R種	(11.7)		
図14	11	3面構成土	土師器皿T種	(12.7)		
図14	12	3面構成土	土師器皿T種	(8.3)		1.6
図14	13	3面構成土	土師器皿T種	(8.4)		
図14	14	3面構成土	土師器皿T種	(13.6)		
図14	15	3面構成土	土師器皿R種	(13.1)	(8.6)	3.3
図14	16	3面構成土	土師器皿R種	(12.2)	(7.3)	3.25
図14	17	3面構成土	土師器皿R種	(12.3)	(8.6)	3.45
図14	18	3面構成土	土師器皿R種	(12.2)	(8.3)	3.4
図14	19	3面構成土	土師器皿R種	(12.2)	(8.4)	3.15
図14	20	3面構成土	土師器皿R種	(11.3)	(7.6)	2.9
図14	21	3面構成土	土師器皿R種	(11.4)	(7.8)	2.8
図14	22	3面構成土	土師器皿R種	(8.1)	5.9	1.8
図14	23	3面構成土	土師器皿R種	(8.05)	(6.8)	1.9
図14	24	3面構成土	土師器皿R種	(8.05)	(6.05)	1.7
図14	25	3面構成土	土師器皿R種	(7.9)	(5.1)	1.7
図14	26	3面構成土	土師器皿R種	(7.7)	(5.8)	1.5
図14	27	3面構成土	土師器皿R種	(7.55)	(5.6)	1.5
図14	28	3面構成土	土師器皿R種	(7.55)	(5.4)	1.6
図14	29	3面構成土	土師器皿R種	(7.3)	(6.0)	1.45
図14	30	3面構成土	土師器皿R種	(6.6)	(4.0)	1·5
図14	31	3面構成土	内折土師器皿R種	(5.4)	(4.2)	0.9
図14	32	3面構成土	丸瓦			厚2.4~2.5
図14	33	3面構成土	平瓦			厚3.0~3.1
図14	34	3面構成土	平瓦			厚2.0
図16	1	P190	白色系土師器皿T種			
図16	2	P190	土師器皿R種	12.75	8.8	3.5

表3　出土遺物法量表（3）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図16	3	P190	土師器皿R種	12.3	8.15	3.05
図16	4	P190	土師器皿R種	11.8	7.7	3.2
図16	5	P190	土師器皿R種	(12.3)	(8.3)	3.3
図16	6	P190	土師器皿R種	(7.85)	(5.9)	1.4
図16	7	P192	土師器皿T種	(8.85)	(3.0)	1.4
図16	8	P192	土師器皿T種	(8.6)	(5.0)	1.25
図16	9	P277	土師器皿T種	(14.7)		
図16	10	P291	平瓦			厚1.8~2.1
図16	11	P264	土師器皿T種	(9.2)	(3.9)	2.0
図16	12	溝10	土師器皿R種	(13.05)	(9.4)	3.5
図16	13	溝10	土師器皿R種	(11.85)	(8.4)	2.8
図16	14	溝10	土師器皿R種	(11.55)	(8.1)	3.1
図16	15	溝10	土師器皿R種	8.4	6.2	1.7
図16	16	溝10	平瓦			厚1.9~2,3
図17	1	P236	土器火鉢			
図17	2	P236	土師器皿R種	(7.5)	(4.9)	1.6
図17	3	P236	釘	残存長13.0	巾0.5	厚0.7
図17	4	P198	焙烙			
図17	5	土坑17	土師器皿T種	(9.2)		
図17	6	土坑17	土師器皿R種	(4.8)	(3.4)	1.1
図17	7	土坑17	釘	残存長8.5	巾0.5	厚0.5
図17	8	土坑15	竜泉窯系青磁酒会壺			
図17	9	土坑15	土師器皿R種	(7.0)	(5.2)	1.9
図17	10	土坑15	土師器皿R種	(8.4)	(7.0)	1.9
図17	11	土坑16	平瓦			厚1.4~1.9
図17	12	土坑12	竜泉窯系青磁碗			
図17	13	土坑12	白磁四耳壺			
図17	14	土坑12	常滑こね鉢I類			
図18	1	溝16	竜泉窯系青磁劃花文碗			
図18	2	溝16	渥美甕			
図18	3	溝16	常滑甕			
図18	4	溝16	常滑甕			
図18	5	溝16	常滑三筋壺			(9.5)
図18	6	溝16	常滑甕			
図18	7	溝16	常滑甕			
図18	8	溝16	常滑こね鉢II類			
図18	9	溝16	土師器皿T種	(14.45)		
図18	10	溝16	土師器皿T種	(12.65)		
図18	11	溝16	土師器皿T種	(9.3)		1.75
図18	12	溝16	土師器皿T種	(9.15)		
図18	13	溝16	土師器皿T種	(9.55)		(1.55)
図18	14	溝16	土師器皿T種	(9.5)		
図18	15	溝16	土師器皿T種	(8.5)		
図18	16	溝16	土師器皿T種	(9.3)		1.6
図18	17	溝16	内折土師器皿T種	(8.2)		1.0
図18	18	溝16	土師器皿R種	(13.3)	(9.0)	3.6
図18	19	溝16	土師器皿R種	12.9	9.1	3.7
図18	20	溝16	土師器皿R種	(13.7)		
図18	21	溝16	土師器皿R種	(12.8)	(9.0)	3.0
図18	22	溝16	土師器皿R種	(9.7)	(7.5)	1.65
図18	23	溝16	土師器皿R種	(7.85)	(6.3)	1.7
図18	24	溝16	土師器皿R種	(9.4)	(7.1)	1.8
図18	25	溝16	土師器皿転用品	長3.6	幅3.35	厚0.8
図18	26	溝16	瀬戸無釉鉢			

表4　出土遺物法量表（4）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図18	27	溝16	釘	残存長5.2	幅0.5	厚0.4
図19	1	P321	土師器皿T種	(8.8)	(5.6)	1.7
図19	2	P321	釘	長8.6	巾0.6	厚0.4
図19	3	P326	渥美甕			
図19	4	土坑20	土師器皿T種	(13.4)	(11.4)	3.0
図19	5	土坑20	土師器皿T種	(10.1)	(9.0)	1.4
図19	6	土坑20	釘	残存長3.5	巾0.8	厚0.7
図19	7	土坑18	渥美甕			
図19	8	土坑18	土師器皿R種	(8.4)	(7.0)	1.9
図20	1	P179	土師器皿R種	(11.5)	(6.5)	3.0
図20	2	P179	土師器皿R種	(11.7)	(6.6)	3.5
図20	3	P179	土師器皿R種	(12.2)	(8.0)	3.1
図20	4	P179	土師器皿R種	(11.4)	(7.0)	2.9
図20	5	P179	土師器皿R種	(12.2)	(7.0)	3.1
図20	6	P179	土師器皿R種	(12.0)	(7.5)	3.0
図20	7	P179	土師器皿R種	(12.4)	(7.2)	2.95
図20	8	P179	土師器皿R種	(13.0)	(8.2)	3.3
図20	9	P179	土師器皿R種	(11.6)	(7.0)	3.2
図20	10	P179	土師器皿R種	(12.0)	(7.6)	2.9
図20	11	P179	土師器皿R種	(11.45)	(6.7)	3.3
図20	12	P179	土師器皿R種	12.0	7.0	3.2
図20	13	P179	土師器皿R種	(12.1)	(7.0)	3.4
図20	14	P179	土師器皿R種	(12.5)	(7.85)	3.3
図20	15	P179	土師器皿R種	(12.2)	(7.6)	3.1
図20	16	P179	土師器皿R種	(12.2)	(7.2)	3.6
図20	17	P179	土師器皿R種	(12.1)	(8.3)	3.1
図20	18	P179	土師器皿R種	(11.8)	(7.4)	3.5
図20	19	P179	土師器皿R種	(11.2)	(6.9)	3.5
図20	20	P179	土師器皿R種	(13.6)	(6.8)	4.1
図20	21	P179	土師器皿R種	(7.75)	(6.8)	1.55
図20	22	P179	土師器皿R種	(8.0)	(5.8)	1.8
図20	23	P179	土師器皿R種	(7.8)	(5.8)	1.8
図20	24	P179	土師器皿R種	(7.8)	(6.0)	1.8
図20	25	P179	土師器皿R種	(8.2)	(6.0)	1.5
図20	26	P179	土師器皿R種	(8.1)	(6.2)	1.9
図20	27	P179	土師器皿R種	(8.3)	(6.4)	1.6
図20	28	P179	土師器皿R種	8.3	5.9	1.8
図20	29	P179	土師器皿R種	8.2	5.2	1.6
図20	30	P179	土師器皿R種	7.9	5.5	1.75
図20	31	P179	土師器皿R種	(8.25)	(6.0)	1.65
図20	32	P179	内折土師器皿R種	(5.9)	(4.7)	1.2
図20	33	P179	内折土師器皿R種	(5.2)	(3.45)	1.0
図21	1	土坑13	渥美壺			
図21	2	土坑13	土師器皿T種	(15.2)	(9.2)	3.0
図21	3	土坑13	土師器皿T種	(13.2)	(12.0)	3.0
図21	4	土坑13	土師器皿R種	(11.4)	(7.8)	3.55
図21	5	土坑13	土師器皿R種	(12.2)	(8.7)	3.0
図21	6	土坑13	土師器皿R種	(11.5)	(8.6)	2.75
図21	7	土坑13	土師器皿R種	(6.3)	(4.0)	1.7
図21	8	土坑13	土師器皿R種	(7.9)	(6.0)	1.5
図21	9	土坑13	土師器皿R種	(8.2)	(6.2)	1.6
図21	10	土坑13	土師器皿R種	(7.2)	(5.8)	1.8
図21	11	土坑13	土師器皿R種	(8.2)	(6.0)	1.3
図21	12	土坑13	土師器皿R種	(8.4)	(6.8)	2.0

表5　出土遺物法量表（5）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図21	13	土坑13	土師器皿R種	(8.3)	(7.0)	1.7
図21	14	土坑13	土師器皿R種	(7.6)	(6.1)	1.6
図21	15	土坑13	土師器皿R種	(6.9)	(6.2)	1.7
図21	16	土坑13	土師器皿R種	(7.4)	(6.0)	1.6
図21	17	土坑13	丸瓦			厚2.1~2.5
図21	18	土坑13	丸瓦			厚2.4~2.6
図21	19	土坑13	丸瓦			厚2.2~2.4
図21	20	土坑13	平瓦			厚2.1~2.7
図21	21	土坑13	平瓦			厚2.0~2.3
図21	22	土坑13	平瓦			厚2.1~2.2
図22	23	土坑13	平瓦			厚1.9~2.2
図22	24	土坑13	平瓦			厚2.3~2.5
図22	25	土坑13	平瓦			厚2.3~2.6
図22	26	P194	白磁端反碗	(15.6)		
図22	27	P194	土師器皿T種	(7.35)	(6.0)	1.5
図22	28	P194	土師器皿R種	(7.75)	(6.4)	1.7
図22	29	P194	土師器皿R種	(8.05)	(5.85)	1.35
図22	30	P195	土師器皿R種	(7.3)	(5.0)	1.4
図22	31	P196	土師器皿R種	(12.0)	(8.0)	3.7
図22	32	P233	土師器皿R種	(8.1)	(6.4)	1.5
図22	33	P233	釘	残存長5.9	巾0.7	厚0.6
図23	1	土坑11	土師器皿R種	(12.3)	(8.4)	3.3
図23	2	P168	土師器皿R種	(11.1)	(7.5)	3.1
図24	1	溝12	竜泉窯系青磁劃花文碗	(14.8)		
図24	2	溝12	同安窯系青磁碗			
図24	3	溝12	白色系土師器皿R種			
図24	4	溝12	土師器皿T種	(14.0)		
図24	5	溝12	土師器皿T種	(14.2)	(9.4)	(3.1)
図24	6	溝12	土師器皿T種	(13.8)		
図24	7	溝12	土師器皿T種	(14.0)		
図24	8	溝12	土師器皿T種	(8.0)	(7.0)	(1.3)
図24	9	溝12	土師器皿T種	(9.6)	(6.8)	(1.7)
図24	10	溝12	土師器皿T種	(8.6)	(6.4)	1.3
図24	11	溝12	土師器皿T種	(9.4)	(6.4)	1.5
図24	12	溝12	土師器皿R種	(12.8)	(7.0)	3.6
図24	13	溝12	土師器皿R種	(13.0)	(9.0)	3.5
図24	14	溝12	土師器皿R種	(13.0)	(9.0)	3.3
図24	15	溝12	土師器皿R種	(12.4)	(9.0)	3.0
図24	16	溝12	土師器皿R種	(12.2)	(7.8)	3.5
図24	17	溝12	土師器皿R種	(8.0)	(6.2)	1.7
図24	18	溝12	土師器皿R種	(9.4)	(7.4)	2.1
図24	19	溝12	土師器皿R種	(8.4)	(6.2)	1.7
図24	20	溝12	土師器皿R種	(8.0)	(5.6)	1.8
図24	21	溝12	土師器皿R種	7.4	5.0	1.9
図24	22	溝12	土師器皿R種	(4.4)	(4.2)	0.7
図26	1	溝15a	竜泉窯系青磁劃花文碗	(15.0)		
図26	2	溝15a	竜泉窯系青磁劃花文碗			
図26	3	溝15a	竜泉窯系青磁劃花文皿			
図26	4	溝15a	常滑こね鉢Ⅱ類			
図26	5	溝15a	瓦器火鉢			
図26	6	溝15a	土師器皿T種	14.2		3.0
図26	7	溝15a	土師器皿T種	14.2		2.8
図26	8	溝15a	土師器皿T種	(14.7)		2.8
図26	9	溝15a	土師器皿T種	(13.9)		

表6　出土遺物法量表（6）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図26	10	溝15a	土師器皿T種	(14.05)		
図26	11	溝15a	土師器皿T種	(14.55)		
図26	12	溝15a	土師器皿T種	(14.7)		
図26	13	溝15a	土師器皿T種	(14.4)		
図26	14	溝15a	土師器皿T種	(14.9)		
図26	15	溝15a	土師器皿T種	(13.1)		
図26	16	溝15a	土師器皿T種	(9.8)		
図26	17	溝15a	土師器皿T種	(7.8)		
図26	18	溝15a	土師器皿T種	(9.2)		
図26	19	溝15a	土師器皿T種	(9.6)		
図26	20	溝15a	土師器皿T種	(8.85)		
図26	21	溝15a	土師器皿T種	(9.65)		
図26	22	溝15a	土師器皿T種	(8.4)		
図26	23	溝15a	土師器皿T種	8.6	7.8	1.1
図26	24	溝15a	土師器皿R種	(9.85)	(7.0)	1.95
図26	25	溝15a	土師器皿R種	(6.3)	(5.2)	1.6
図26	26	溝15a	丸瓦			厚2.6~2.9
図27	1	溝15b	土師器皿T種	(14.2)	(8.4)	2.45
図27	2	溝15b	土師器皿T種	(14.75)		
図27	3	溝15b	土師器皿R種	8.25	5.0	1.95
図27	4	溝15b	土師器皿R種転用円盤	長7.5	巾7.8	厚1.3
図28	1	P177	土師器皿R種	(7.4)	5.4	1.65
図28	2	P193	土師器皿T種	(16.2)		
図28	3	P193	土師器皿R種	(9.15)	(7.2)	1.9
図28	4	P193	鞴羽口	径(8.6)	孔径(2.4)	
図28	5	P193	釘	長(7.7)	巾0.7	厚0.6
図28	6	P225	土師器皿R種	(11.5)	(7.8)	(3.1)
図28	7	P227	土師器皿R種	12.4	7.6	3.6
図28	8	P229	土師器皿R種	(8.0)	(5.3)	1.7
図28	9	P229	土師器皿R種	(7.2)	(5.0)	1.5
図28	10	P234	土師器皿R種	7.4	5.4	1.55
図28	11	P248	土師器皿R種	(7.8)	(5.2)	1.5
図28	12	P248	土師器皿R種	(7.3)	(6.3)	(1.85)
図28	13	P273	土師器皿R種	(8.3)	(6.8)	(1.5)
図28	14	P274	土師器皿T種	(11.4)		
図28	15	P323	常滑甕			
図28	16	P323	土師器皿T種	(8.9)		
図28	17	P323	土師器皿T種	(9.1)	(5.2)	1.7
図28	18	P323	土師器皿T種	(8.1)		
図28	19	P323	土師器皿R種	(8.9)	(7.1)	1.55
図28	20	P324	土師器皿T種	(13.4)		
図29	1	2面面上	竜泉窯系青磁無文碗			
図29	2	2面面上	青白磁梅瓶			
図29	3	2面面上	竜泉窯系青磁碗		4.0	
図29	4	2面面上	高麗青磁瓶子			
図29	5	2面面上	常滑甕			
図29	6	2面面上	常滑捏こねI類			
図29	7	2面面上	土師器皿T種	(14.15)		
図29	8	2面面上	土師器皿T種	(14.5)		
図29	9	2面面上	土師器皿T種	(14.1)		
図29	10	2面面上	土師器皿T種	9.0	4.2	2.0
図29	11	2面面上	土師器皿T種	9.0	4.8	1.8
図29	12	2面面上	土師器皿T種	(9.15)	(6.6)	1.4
図29	13	2面面上	土師器皿T種	(9.05)	(5.6)	1.45

表7　出土遺物法量表（7）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図29	14	2面面上	土師器皿T種	8.4	4.5	1.5
図29	15	2面面上	土師器皿T種	(8.2)		
図29	16	2面面上	土師器皿T種	7.15	1.9	1.75
図29	17	2面面上	土師器皿T種	(7.1)	(5.6)	0.75
図29	18	2面面上	内折土師器皿T種	(7.6)	(5.0)	0.75
図29	19	2面面上	土師器皿R種	(12.7)	(7.75)	2.9
図29	20	2面面上	土師器皿R種	(12.35)	(7.9)	3.1
図29	21	2面面上	土師器皿R種	12.2	8.2	3.25
図29	22	2面面上	土師器皿R種	(11.8)	(7.6)	3.55
図29	23	2面面上	土師器皿R種	11.8	8.0	3.0
図29	24	2面面上	土師器皿R種	11.5	8.0	3.4
図29	25	2面面上	土師器皿R種	(8.8)	(7.0)	1,3
図29	26	2面面上	土師器皿R種	(7.7)	(5.9)	1.2
図29	27	2面面上	土師器皿R種	(7.3)	(5.9)	1.2
図29	28	2面面上	土師器皿R種	(8.0)	(6.3)	1.4
図29	29	2面面上	土師器皿R種	7.8	5.4	2.0
図29	30	2面面上	土師器皿R種	(6.8)	(4.35)	2.3
図29	31	2面面上	平瓦			厚2.2~2.5
図29	32	2面面上	丸瓦			厚1.5~1.8
図29	33	2面構成土	竜泉窯系青磁蓮弁文碗			
図29	34	2面構成土	常滑甕			
図29	35	2面構成土	白色系土師器皿T種	(11.8)		
図29	36	2面構成土	土師器皿T種	(15.05)		
図29	37	2面構成土	土師器皿T種	(14.7)	(7.0)	2.85
図29	38	2面構成土	土師器皿T種	(14.2)		
図29	39	2面構成土	土師器皿T種	(13.3)		
図29	40	2面構成土	土師器皿T種	(12.7)		
図29	41	2面構成土	土師器皿T種	(12.85)		
図29	42	2面構成土	土師器皿T種	(12.6)		
図29	43	2面構成土	土師器皿T種	(9.3)	(5.0)	1.6
図29	44	2面構成土	土師器皿T種	(8.5)	(6.0)	1.35
図29	45	2面構成土	土師器皿T種	(9.25)	(4.3)	1.4
図29	46	2面構成土	土師器皿T種	(8.4)	(4.6)	1.55
図29	47	2面構成土	土師器皿R種	12.2	8.6	3.2
図29	48	2面構成土	土師器皿R種	(12.1)	(7.19)	3.2
図29	49	2面構成土	土師器皿R種	(9.4)	(6.75)	1.6
図29	50	2面構成土	土師器皿R種	(8.05)	(5.9)	2.0
図29	51	2面構成土	土師器皿R種	7.95	6.8	1.55
図29	52	2面構成土	土師器皿R種	(7.85)	(6.0)	1.9
図29	53	2面構成土	土師器皿R種	(7.0)	(4.9)	1.65
図31	1	道路1·2面上	常滑こね鉢Ⅰ類			
図31	2	道路1·2面上	常滑こね鉢Ⅰ類			
図31	3	道路1·2面上	常滑こね鉢Ⅱ類			
図31	4	道路1·2面上	魚住こね鉢			
図31	5	道路1·2面上	亀山甕			
図31	6	道路1·2面上	瓦器火鉢			
図31	7	道路1·2面上	土師器皿T種	(12.5)		
図31	8	道路1·2面上	土師器皿T種	(12.1)		
図31	9	道路1·2面上	土師器皿T種	(7.5)	(3.0)	1.3
図31	10	道路1·2面上	土師器皿T種	(7.8)	(6.0)	1.3
図31	11	道路1·2面上	内折土師器皿T種	(6.0)	(6.4)	1.1
図31	12	道路1·2面上	土師器皿R種	(11.7)	(7.6)	2.9
図31	13	道路1·2面上	土師器皿R種	(12.7)	(8.8)	3.6
図31	14	道路1·2面上	土師器皿R種	(11.3)	(7.1)	3.5

表8　出土遺物法量表（8）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図31	15	道路1·2面上	土師器皿R種	(12.0)	(7.9)	3.3
図31	16	道路1·2面上	土師器皿R種	(12.5)	(8.6)	3.1
図31	17	道路1·2面上	土師器皿R種	(12.8)	(8.9)	2.5
図31	18	道路1·2面上	土師器皿R種	(12.1)	(7.3)	3.0
図31	19	道路1·2面上	土師器皿R種	(12.3)	(8.0)	3.2
図31	20	道路1·2面上	土師器皿R種	7.75	6.3	1.45
図31	21	道路1·2面上	土師器皿R種	(8.5)	(7.3)	1.7
図31	22	道路1·2面上	土師器皿R種	7.8	6.4	1.8
図31	23	道路1·2面上	土師器皿R種	7.7	5.8	1.4
図31	24	道路1·2面上	土師器皿R種	(7.8)	(6.3)	1.3
図31	25	道路1·2面上	土師器皿R種	7.9	6.2	1.5
図31	26	道路1·2面上	土師器皿R種	(7.6)	(6.55)	1.4
図31	27	道路1·2面上	土師器皿R種	(7.0)	5.8	1.9
図31	28	道路1·2面上	土師器皿R種	(7.1)	(6.1)	1.85
図31	29	道路1·2面上	土師器皿R種	7.8	5.1	1.7
図31	30	道路1·2面上	土師器皿R種	(7.5)	(5.3)	1.3
図31	31	道路1·2面上	土師器皿R種	(6.8)	5.8	1.1
図31	32	道路1·2面上	土師器皿R種	(6.5)	(4.5)	1.7
図31	33	道路1·2面上	土師器皿R種	6.5	4.0	2.4
図31	34	道路1·2面上	土師器皿R種	8.5	6.1	1.85
図31	35	道路1·2面上	土師器皿R種	8.0	6.0	1.5
図31	36	道路1·2面上	土師器皿R種	(8.4)	(6.3)	2.0
図31	37	道路1·2面上	土師器皿R種	(8.4)	(6.2)	2.2
図31	38	道路1·2面上	土師器皿R種	(8.2)	(6.2)	1.7
図31	39	道路1·2面上	内折土師器皿R種	(5.6)	(4.5)	1.2
図31	40	道路1·2面上	丸瓦			厚1.8~2.0
図31	41	道路1·2面上	釘	残存長5.3	巾0.5	厚0.6
図31	42	道路1·2面上	釘	残存長6.3	巾0.5	厚0.5
図31	43	道路1·2面上	釘	残存長6.3	巾0.5	厚0.7
図31	44	道路1覆土	常滑甕			
図31	45	道路1覆土	常滑甕			
図31	46	道路1覆土	土師器皿R種	11.9	8.0	3.3
図31	47	道路1覆土	土師器皿R種	(7.8)	(6.3)	1.4
図31	48	道路1覆土	土師器皿R種	(6.8)	(5.3)	1.5
図32	1	道路2覆土	青白磁合子蓋			
図32	2	道路2覆土	瀬戸瓶子	(4.3)		
図32	3	道路2覆土	常滑こね鉢Ⅰ類			
図32	4	道路2覆土	常滑こね鉢Ⅰ類			
図32	5	道路2覆土	常滑こね鉢Ⅰ類			
図32	6	道路2覆土	常滑こね鉢Ⅰ類			
図32	7	道路2覆土	常滑こね鉢Ⅱ類	(29.7)		
図32	8	道路2覆土	土師器皿T種	(14.2)		
図32	9	道路2覆土	土師器皿T種	(9.5)	(5.0)	1.6
図32	10	道路2覆土	土師器皿T種	(8.6)	(5.6)	1.8
図32	11	道路2覆土	土師器皿T種	(7.4)	(3.0)	2.1
図32	12	道路2覆土	土師器皿R種	12.25	8.6	3.2
図32	13	道路2覆土	土師器皿R種	(11.5)	(8.4)	2.8
図32	14	道路2覆土	土師器皿R種	11.5	7.0	2.65
図32	15	道路2覆土	土師器皿R種	(11.45)	(7.6)	3.1
図32	16	道路2覆土	土師器皿R種	11.85	7.6	3.2
図32	17	道路2覆土	土師器皿R種	12.3	8.1	3.2
図32	18	道路2覆土	土師器皿R種	(9.4)	(7.5)	1.9
図32	19	道路2覆土	土師器皿R種	7.5	5.3	1.9
図32	20	道路2覆土	釘	残存長6.2	0.7	0.8

表9　出土遺物法量表（9）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図33	1	溝2	青白磁梅瓶			
図33	2	溝7	土師器皿T種	(8.2)	(6.6)	1.7
図34	1	土師器集中出土1	土師器皿T種	(8.3)	(5.0)	1.5
図34	2	土師器集中出土1	土師器皿T種	(9.0)	(4.6)	1.9
図34	3	土師器集中出土1	土師器皿R種	(11.35)	(7.05)	2.7
図34	4	土師器集中出土1	土師器皿R種	11.8	8.85	3.05
図34	5	土師器集中出土1	土師器皿R種	12.0	8.8	3.15
図34	6	土師器集中出土1	土師器皿R種	12.15	8.55	3.0
図34	7	土師器集中出土1	土師器皿R種	11.6	8.3	2.9
図34	8	土師器集中出土1	土師器皿R種	(12.5)	(9.0)	3.2
図34	9	土師器集中出土1	土師器皿R種	(11.7)	(8.15)	3.1
図34	10	土師器集中出土1	土師器皿R種	(11.8)	(8.3)	2.4
図34	11	土師器集中出土1	土師器皿R種	11.65	8.5	2.75
図34	12	土師器集中出土1	土師器皿R種	12.1	7.8	2.75
図34	13	土師器集中出土1	土師器皿R種	11.25	7.7	3.0
図34	14	土師器集中出土1	土師器皿R種	12.15	9.0	3.0
図34	15	土師器集中出土1	土師器皿R種	(11.75)	(8.3)	3.05
図34	16	土師器集中出土1	土師器皿R種	11.9	8.9	3.35
図34	17	土師器集中出土1	土師器皿R種	11.8	7.7	2.7
図34	18	土師器集中出土1	土師器皿R種	(11.7)	(8.5)	2.95
図34	19	土師器集中出土1	土師器皿R種	(11.5)	(8.05)	2.75
図34	20	土師器集中出土1	土師器皿R種	12.6	8.85	3.25
図34	21	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.7	6.4	1.6
図34	22	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.5	6.05	1.5
図34	23	土師器集中出土1	土師器皿R種	6.9	5.4	1.4
図34	24	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.55	5.9	1.2
図34	25	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.25	6.05	1.85
図34	26	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.5	6.2	1.4
図34	27	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.4	5.8	1.3
図34	28	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.45	5.5	1.25
図34	29	土師器集中出土1	土師器皿R種	(7.65)	(5.1)	1.45
図34	30	土師器集中出土1	土師器皿R種	(8.0)	(6.3)	1.7
図34	31	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.9	6.3	1.7
図34	32	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.9	6.5	1.8
図34	33	土師器集中出土1	土師器皿R種	(7.3)	(5.9)	1.4
図34	34	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.7	6.3	1.7
図34	35	土師器集中出土1	土師器皿R種	7.55	6.1	1.75
図34	36	土師器集中出土1	土師器皿R種転用円盤	長2.3	巾2.2	厚0.7
図35	1	溝9	竜泉窯系青磁壺		高台径(6.6)	
図35	2	溝9	竜泉窯系青磁劃花文碗			
図35	3	溝9	竜泉窯系青磁劃花文碗			
図35	4	溝9	同安窯系青磁劃花文碗			
図35	5	溝9	同安窯系青磁劃花文碗			
図35	6	溝9	竜泉窯系青磁蓮弁文碗	(14.0)		
図35	7	溝9	青白磁小皿			
図35	8	溝9	常滑甕			
図35	9	溝9	磨耗陶片か			
図35	10	溝9	常滑壺	(8.0)		
図35	11	溝9	常滑こね鉢I類			
図35	12	溝9	常滑こね鉢I類			
図35	13	溝9	常滑こね鉢I類			
図35	14	溝9	常滑こね鉢I類			
図35	15	溝9	白色系土師器皿T種	(11.8)		
図35	16	溝9	土師器皿T種	(14.4)		

表10　出土遺物法量表（10）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図35	17	溝9	土師器皿T種	(13.8)	(7.0)	2.7
図35	18	溝9	土師器皿T種	(14.0)	(7.8)	2.6
図35	19	溝9	土師器皿T種	(14.0)		
図35	20	溝9	土師器皿T種	(13.2)		
図35	21	溝9	土師器皿T種	(13.6)	(5.6)	2.8
図35	22	溝9	土師器皿T種	(15.0)	(9.8)	3.1
図35	23	溝9	土師器皿T種	(13.6)	(7.4)	2.9
図35	24	溝9	土師器皿T種	(13.6)	(8.6)	2.7
図35	25	溝9	土師器皿T種	(14.2)	(5.8)	3.3
図35	26	溝9	土師器皿T種	(14.0)		
図35	27	溝9	土師器皿T種	(13.6)	(7.0)	2.5
図35	28	溝9	土師器皿T種	(13.6)		
図35	29	溝9	土師器皿T種	(14.2)		
図35	30	溝9	土師器皿T種	(13.0)		
図35	31	溝9	土師器皿T種	(14.6)	(6.0)	3.5
図35	32	溝9	土師器皿T種	(15.6)	(7.0)	3.1
図35	33	溝9	土師器皿T種	(9.0)	(5.6)	1.45
図35	34	溝9	土師器皿T種	(8.0)	(3.4)	1.9
図35	35	溝9	土師器皿T種	(8.8)	(6.4)	1.2
図35	36	溝9	土師器皿T種	(10.0)	(7.0)	1.7
図35	37	溝9	土師器皿T種	(10.4)	(6.2)	2.2
図35	38	溝9	土師器皿T種	(9.7)	(5.8)	1.6
図35	39	溝9	土師器皿T種	(9.0)	(7.0)	1.6
図35	40	溝9	土師器皿T種	(9.0)	(6.6)	1.55
図35	41	溝9	土師器皿T種	(9.0)	(5.8)	1.4
図35	42	溝9	土師器皿T種	(9.0)	(6.0)	1.5
図35	43	溝9	内折土師器皿T種	5.0	3.0	1.3
図35	44	溝9	土師器皿R種	(10.8)	(9.2)	2.5
図35	45	溝9	土師器皿R種	(8.2)	(6.6)	1.6
図35	46	溝9	土師器皿R種	(7.6)	(5.8)	1.8
図35	47	P267	竜泉窯系青磁蓮弁文碗	(14.2)		
図35	48	P267	土師器皿R種	(12.8)	(7.9)	2.55
図36	1	溝6	竜泉窯系青磁碗		高台径(6.0)	
図36	2	溝6	竜泉窯系青磁折縁鉢			
図36	3	溝6	竜泉窯系青磁小皿		(6.2)	
図36	4	溝6	瀬戸折縁皿			
図36	5	溝6	常滑甕			
図36	6	溝6	常滑こね鉢I類			
図36	7	溝6	常滑こね鉢II類			
図36	8	溝6	土師器皿T種	(13.6)		
図36	9	溝6	土師器皿T種	(9.2)	(6.0)	1.7
図36	10	溝6	土師器皿T種	(9.2)	(5.0)	1.9
図36	11	溝6	土師器皿T種	(7.6)	(5.0)	1.2
図36	12	溝6	土師器皿R種	(13.0)		
図36	13	溝6	土師器皿R種	(13.0)	(9.6)	3.4
図36	14	溝6	土師器皿R種	(13.2)	(8.6)	3.3
図36	15	溝6	土師器皿R種	(12.4)	(9.6)	3.1
図36	16	溝6	土師器皿R種	(12.4)	(8.0)	3.5
図36	17	溝6	土師器皿R種	(11.0)	(7.0)	3.1
図36	18	溝6	土師器皿R種	(8.0)	(5.8)	1.5
図36	19	溝6	土師器皿R種	(7.2)	(5.0)	1.4
図36	20	溝6	土師器皿R種	(7.6)	(5.8)	1.4
図36	21	溝6	土師器皿R種	(7.4)	(5.4)	1.3
図36	22	溝6	土師器皿R種	(8.2)	(6.0)	1.5

表11　出土遺物法量表（11）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図36	23	溝6	土師器皿R種	(7.2)	(4.8)	1.3
図36	24	溝6	土師器皿R種	(7.8)	(5.6)	2.1
図36	25	溝6	土師器皿R種	(8.8)	(7.2)	1.9
図36	26	溝6	土師器皿R種	(8.4)	(6.0)	1.7
図36	27	溝6	土師器皿R種	(7.8)	(6.6)	1.7
図36	28	溝6	土師器皿R種	(7.4)	(7.2)	1.4
図36	29	溝6	土師器皿R種	(8.8)	(5.8)	2.4
図36	30	溝6	土師器皿R種	(7.2)	(4.6)	1.9
図36	31	溝6	土師器皿R種	(7.0)	(4.6)	2.1
図36	32	溝6	備前甕			
図36	33	溝6	平瓦			厚2.4~2.5
図36	34	溝6	平瓦			厚1.8~2.0
図36	35	溝6	荒砥	残存長7.8	残存巾6.0	厚4.6
図37	1	溝11	土師器皿T種	(8.85)	(5.0)	1.3
図37	2	溝11	土師器皿R種	(7.2)	(5.0)	1.55
図37	3	溝11	土師器皿R種	(6.85)	(5.3)	1.6
図37	4	溝11	平瓦			厚2.1
図37	5	溝13	土師器皿R種	(13.2)	(7.9)	3.65
図37	6	溝13	土師器皿R種	(7.7)	(6.1)	1.7
図37	7	溝13	平瓦			厚2.2
図38	1	溝1	竜泉窯系青磁碗		高台径(6.2)	
図38	2	溝1	竜泉窯系青磁碗		高台径(4.5)	
図38	3	溝1	同安窯系青磁皿		(5.0)	
図38	4	溝1	竜泉窯系青磁碗			
図38	5	溝1	竜泉窯系青磁折縁皿			
図38	6	溝1	竜泉窯系青磁蓋			
図38	7	溝1	白磁口兀皿			
図38	8	溝1	白磁角坏			
図38	9	溝1	瀬戸壺			
図38	10	溝1	瀬戸碗	(14.8)	(5.2)	5.0
図38	11	溝1	瀬戸碗			
図38	12	溝1	瀬戸碗			
図38	13	溝1	瀬戸卸皿			
図38	14	溝1	瀬戸折縁皿			
図38	15	溝1	瀬戸皿		(3.8)	
図38	16	溝1	瀬戸皿		(6.0)	
図38	17	溝1	常滑甕			
図38	18	溝1	常滑甕			
図38	19	溝1	備前すり鉢			
図38	20	溝1	北勢系鍔釜	(20.0)		
図38	21	溝1	瓦器火鉢			
図38	22	溝1	土師器皿R種	(12.4)	(7.6)	3.3
図38	23	溝1	土師器皿R種	(11.4)	(7.0)	2.8
図38	24	溝1	土師器皿R種	(9.4)	(6.4)	2.6
図38	25	溝1	土師器皿R種	(10.2)	(6.4)	2.5
図38	26	溝1	土師器皿R種	7.8	5.8	1.9
図38	27	溝1	土師器皿R種	(8.4)		
図38	28	溝1	土師器皿R種	(7.2)	(5.0)	1.8
図38	29	溝1	土師器皿R種	(6.6)	(4.6)	1.7
図38	30	溝1	平瓦			厚2.1
図38	31	溝1	すり石	長8.5	巾8.4	厚1.6~2.0
図39	1	土坑1	土器火鉢			
図39	2	土坑3	土師器皿T種	(14.2)		
図39	3	土坑3	土師器皿R種	(7.4)	(5.8)	1.6

表12　出土遺物法量表（12）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図39	4	土坑4	土師器皿R種	(7.6)	(6.4)	1.8
図39	5	土坑10	土師器皿R種	(13.0)	(8.6)	3.3
図39	6	土坑10	土師器皿R種	(12.0)	8.0	3.1
図39	7	土坑10	土師器皿R種	(7.8)	(6.2)	1.7
図39	8	土坑10	土師器皿R種	(6.8)	(5.8)	1.4
図39	9	土坑10	土師器皿R種	(7.2)	(5.6)	1.3
図39	10	土坑10	土師器皿R種	(8.0)	(7.6)	1.4
図39	11	土坑10	釘	残存長5.1	巾1.0	厚1.0
図39	12	P154	土師器皿T種	(14.35)		
図39	13	P154	土師器皿T種	(8.4)	(3.4)	2.2
図39	14	P162	平瓦			厚2.2
図39	15	P155	土師器皿T種	(8.2)		
図39	16	P155	土師器皿R種	(12.15)	(8.3)	3.3
図39	17	P155	土師器皿R種	11.8	7.9	3.4
図39	18	P155	土師器皿R種	11.15	7.1	3.35
図39	19	P155	土師器皿R種	(7.6)	(6.4)	1.5
図39	20	P155	土師器皿R種	(7.5)	(5.2)	1.6
図40	1	P16	土師器皿R種	(12.4)	(8.4)	2.7
図40	2	P26	土器火鉢			
図40	3	P26	土師器皿R種	(12.45)	(7.2)	3.1
図40	4	P34	土師器皿R種	(7.25)	(4.95)	1.7
図40	5	P35	土師器皿T種	(12.6)	(5.4)	2.55
図40	6	P35	土師器皿T種	(8.85)	(7.5)	1.2
図40	7	P37	釘	残存長5.5	巾0.7	厚0.4
図40	8	P38	常滑こね鉢I類			
図40	9	P71	土師器皿R種	(12.3)	(8.2)	2.95
図40	10	P73	土師器皿R種	12.1	8.6	2.55
図40	11	P81	土師器皿R種	(8.1)	4.9	1.6
図40	12	P89	土師器皿T種	(12.6)		
図40	13	P92	東遠系山皿			
図40	14	P102	土師器皿R種	(7.6)	(4.7)	1.7
図40	15	P102	土師器皿R種	(7.75)	(5.7)	1.55
図40	16	P117	土師器皿T種	(8.15)		
図40	17	P119	土師器皿T種	(9.3)	(5.4)	1.4
図40	18	P119	土師器皿R種	(8.75)	(7.75)	1.55
図40	19	P120	土師器皿T種	(13.5)		
図40	20	P120	土師器皿T種	(12.25)		
図40	21	P123	土師器皿R種	(11.0)	(6.3)	2.9
図40	22	P140	土師器皿T種	(9.55)	(7.2)	1.3
図40	23	P140	土師器皿R種	(13.6)	(9.9)	3.15
図40	24	P143	土師器皿R種	(7.25)	(5.0)	1.5
図40	25	P145	土師器皿R種	(12.05)		
図40	26	P145	土師器皿R種	(13.05)	(8.4)	3.1
図40	27	P148	土師器皿T種	(14.7)		
図40	28	P159	白色系土師器皿R種		4.0	
図41	1	1面面上	同安窯系青磁皿			
図41	2	1面面上	同安窯系青磁碗			
図41	3	1面面上	青白磁梅瓶			
図41	4	1面面上	瀬戸卸皿			
図41	5	1面面上	瀬戸皿	(10.6)	(5.8)	2.5
図41	6	1面面上	常滑甕			
図41	7	1面面上	常滑甕			
図41	8	1面面上	土師器皿T種	(14.0)	(11.6)	2.7
図41	9	1面面上	土師器皿T種	(14.0)	(7.2)	3.0

表13　出土遺物法量表（13）

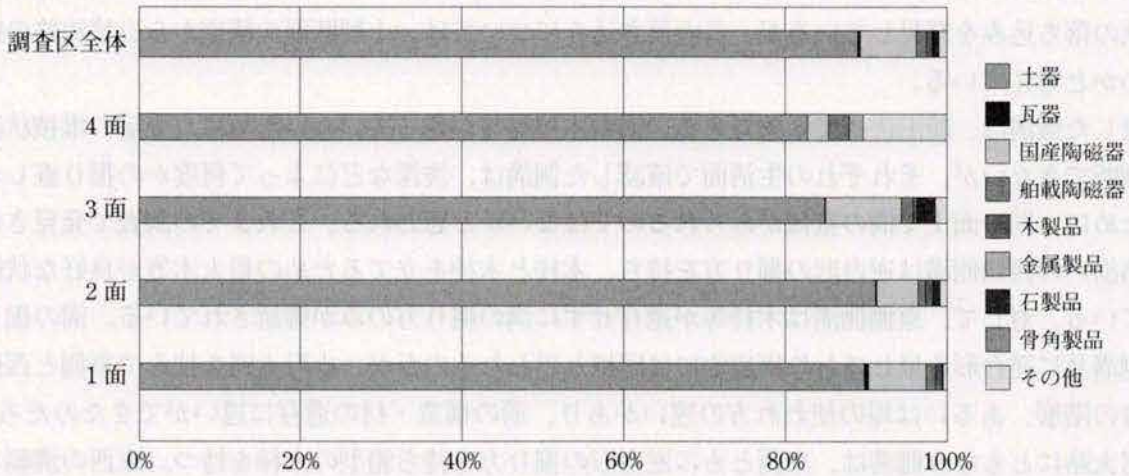
図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図41	10	1面面上	土師器皿T種	(10.2)	(7.4)	1.6
図41	11	1面面上	土師器皿R種	(7.8)	(5.4)	1.9
図41	12	1面面上	平瓦			厚2.0~2.3
図41	13	1面面上	軒平瓦			厚1.8~2.1
図41	14	1面面上	棒状木製品	残存長19.4	巾1.2	厚0·9
図41	15	1面構成土	土師器皿T種	(13.2)	(7.0)	2.75
図41	16	1面構成土	土師器皿T種	(13.05)		
図41	17	1面構成土	土師器皿T種	(6.7)	(3.7)	1.2
図41	18	1面構成土	土師器皿R種	(12.5)	(9.0)	3.2
図41	19	1面構成土	土師器皿R種	(11.55)	(7.6)	3.35
図41	20	1面構成土	土師器皿R種	(12.4)	(9.0)	3.0
図41	21	1面構成土	土師器皿R種	(12.3)	(8.9)	2.7
図41	22	1面構成土	土師器皿R種	(10.8)	(6.5)	2.6
図41	23	1面構成土	土師器皿R種	(10.4)	3.9	3.5
図41	24	1面構成土	土師器皿R種	(8.85)	(6.3)	1.7
図41	25	1面構成土	土師器皿R種	(8.4)	(6.5)	1.8
図41	26	1面構成土	土師器皿R種	8.1	6.1	2.05
図41	27	1面構成土	土師器皿R種	(8.1)	(6.5)	1.6
図41	28	1面構成土	土師器皿R種	(7.3)	(5.2)	1.5
図41	29	1面構成土	土師器皿R種	7.75	5.6	1.7
図41	30	1面構成土	土師器皿R種	(8.4)	(6.9)	1.5
図41	31	1面構成土	土師器皿R種	(7.6)	(6.55)	1.7
図41	32	1面構成土	土師器皿R種	(7.7)	(6.2)	1.4
図41	33	1面構成土	土師器皿R種	(7.4)	(6.0)	1.55
図41	34	1面構成土	土師器皿R種	(6.85)	(5.65)	1.6
図41	35	1面構成土	土師器皿R種	(6.3)	(4.4)	1.7
図41	36	1面構成土	土師器皿R種	(7.45)	(4.9)	1.7
図41	37	1面構成土	土師器皿R種	(6.35)	(4.4)	1.3
図41	38	1面構成土	内折土師器皿R種	(4.2)	(3.0)	0.95
図41	39	1面構成土	須恵器蓋	(11.8)		
図41	40	1面構成土	鳴滝産仕上砥	残存長7.5	巾3.5	厚0.8
図42	1	Tr 1	瀬戸瓶子			
図42	2	Tr 1	瀬戸太鼓胴香炉			
図42	3	Tr 1	瀬戸碗			
図42	4	Tr 1	渥美甕			
図42	5	Tr 1	常滑甕			
図42	6	Tr 1	常滑こね鉢Ⅱ類			
図42	7	Tr 1	常滑すり鉢			
図42	8	Tr 1	土師器皿T種	(12.2)	(7.3)	3.55
図42	9	Tr 1	瓦器火鉢			
図42	10	Tr 1	丸瓦			厚2.3
図42	11	Tr 1	平瓦			厚1.6
図42	12	Tr 1	平瓦			厚1.9
図42	13	Tr 1	平瓦			厚1.9
図42	14	Tr 1	平瓦			厚2.0
図42	15	Tr 1	天草産中砥	残長(11.2)	巾(6.0)	厚6.6
図42	16	Tr 1	鹿角加工品			
図42	17	Tr 1	下駄	残高5.5	巾(13.5)	厚3.3
図42	18	Tr 2	竜泉窯系青磁蓮弁文碗			
図42	19	Tr 2	常滑こね鉢Ⅱ類			
図42	20	Tr 2	北部系山茶碗		(4.8)	
図42	21	Tr 2	土師器皿T種	9.1		1.7
図42	22	Tr 2	土師器皿T種	(9.3)		
図42	23	Tr 2	土師器皿T種	(8.2)		1.85

表14　出土遺物法量表（14）

図No.	No.	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
図42	24	Tr 2	土師器皿T種	(8.3)		1.4
図42	25	Tr 2	土師器皿T種	(8.2)		1.85
図42	26	Tr 2	土師器皿R種	(13.15)	(8.3)	3.3
図42	27	Tr 2	土師器皿R種	(12.05)	(6.3)	3.5
図42	28	Tr 2	土師器皿R種	(11.6)	7.2	3.15
図42	29	Tr 2	土師器皿R種	(11.6)	(9.1)	3.5
図42	30	Tr 2	土師器皿R種	(8.25)	(6.1)	1.6
図42	31	Tr 2	土師器皿R種	(8.05)	(7.1)	1.55
図42	32	Tr 2	土師器皿R種	(7.6)	(4.5)	2.2
図42	33	Tr 2	土師器皿R種	(7.5)	(5.2)	1.5
図42	34	Tr 3	常滑甕			
図42	35	Tr 3	土師器皿T種	(8.8)		1.85
図42	36	Tr 3	土師器皿T種	(7.65)		1.95
図42	37	Tr 3	土師器皿T種	(13.7)		
図42	38	Tr 3	土師器皿R種	(10.9)	(6.8)	2.7
図42	39	Tr 3	土師器皿R種	(7.7)	(5.7)	1.75
図42	40	Tr 3	土師器皿R種	(7.4)	(5.6)	1.9
図42	41	Tr 3	土師器皿T種転用円盤			厚4.3~4.5
図42	42	Tr 4	土師器皿T種	(13.7)		
図43	1	表採	竜泉窯系青磁瓜形水注	(12.5)		
図43	2	表採	竜泉窯系青磁碗			
図43	3	表採	瀬戸折縁鉢			
図43	4	表採	常滑甕			
図43	5	表採	常滑甕			
図43	6	表採	常滑こね鉢Ⅱ類			
図43	7	表採	常滑こね鉢Ⅱ類			
図43	8	表採	土師器皿T種	(8.4)		(1.15)
図43	9	表採	土師器皿T種	(8.4)		(1.3)
図43	10	表採	土師器皿R種	(11.8)	(7.2)	(3.2)
図43	11	表採	土師器皿R種	(7.9)	(5.2)	(1.9)
図43	12	表採	土師器皿R種	(7.9)	(6.0)	(1.5)
図43	13	表採	土師器皿R種	(7.3)	(5.5)	(1.6)
図43	14	表採	瓦器香炉			
図43	15	表採	須恵器蓋			
図43	16	表採	平瓦			
図43	17	表採	平瓦			
図43	18	表採	平瓦			
図43	19	表採	鉄鍋	内径(19.8)	残高(4.5)	厚(0.3)
図43	20	表採	杓子状木製品	長(11.9)	巾(5.1)	厚(0.7)

表15　出土遺物法量表（15）

	1面		2面		3面		4面		調査区全体	
土師器皿R種	2542	69.40%	1823	60.95%	429	38.34%	10	8.62%	5258	60.65%
土師器皿T種	739	20.17%	901	30.12%	516	46.11%	85	73.28%	2437	28.11%
白色系土師器皿	4	0.11%	1	0.03%	3	0.27%		0.00%	8	0.09%
土器	4	0.11%	2	0.07%	2	0.18%	1	0.86%	11	0.13%
瓦器	18	0.49%	4	0.13%	1	0.09%		0.00%	27	0.31%
北部系山茶碗	1	0.03%		0.00%	1	0.09%		0.00%	4	0.05%
南部系山茶碗		0.00%		0.00%	1	0.09%		0.00%	1	0.01%
東遠系山皿	1	0.03%		0.00%		0.00%		0.00%	1	0.01%
常滑	226	6.17%	141	4.71%	83	7.42%	2	1.72%	519	5.99%
渥美	8	0.22%	9	0.30%	11	0.98%	1	0.86%	31	0.36%
瀬戸	21	0.57%	3	0.10%	7	0.63%		0.00%	39	0.45%
亀山	1	0.03%		0.00%	1	0.09%		0.00%	2	0.02%
魚住	1	0.03%		0.00%		0.00%		0.00%	1	0.01%
備前	2	0.05%		0.00%	1	0.09%		0.00%	3	0.03%
瓦	10	0.27%	17	0.57%	4	0.36%		0.00%	39	0.45%
土製品	1	0.03%	3	0.10%	2	0.18%		0.00%	7	0.08%
青磁同安窯系	4	0.11%	1	0.03%		0.00%	1	0.86%	6	0.07%
青磁竜泉窯系	17	0.46%	11	0.37%	4	0.36%		0.00%	35	0.40%
青磁	9	0.25%	2	0.07%	5	0.45%		0.00%	22	0.25%
高麗青磁		0.00%	1	0.03%		0.00%		0.00%	1	0.01%
青白磁	7	0.19%	2	0.07%	2	0.18%		0.00%	17	0.20%
白磁	6	0.16%	9	0.30%	3	0.27%	2	1.72%	22	0.25%
褐釉		0.00%	1	0.03%	2	0.18%		0.00%	3	0.03%
鉄製品	30	0.82%	28	0.94%	6	0.54%		0.00%	65	0.75%
木製品	1	0.03%	3	0.10%		0.00%	2	1.72%	9	0.10%
石製品	3	0.08%	23	0.77%	25	2.23%		0.00%	61	0.70%
骨角製品		0.00%		0.00%		0.00%		0.00%	1	0.01%
動物遺存体	2	0.05%	1	0.03%	2	0.18%		0.00%	5	0.06%
古代以前土器	5	0.14%	5	0.17%	8	0.71%	12	10.34%	34	0.39%
総計	3663	100.00%	2991	100.00%	1119	100.00%	116	100.00%	8669	100.00%



※実測遺物・カウント用遺物はその大小を問わず一点と計算する。

表16　出土遺物計量表

第4章　まとめと考察

第1節　まとめ

本調査地点の西側に接して南北に延びる小町大路は、北は鶴岡八幡宮前を東西に走る横大路に突き当たる辺りが境と推定され。南は本覚寺門前夷堂橋まで（『新編鎌倉志』、田代1998）、あるいは「大町四ツ角」、あるいは材木座海岸近くの九品寺辺り（高柳1959）かとされており、正確な南限は不明である（この点の詳細は本報第１章参照）。鎌倉市街地の中心を、鶴岡八幡宮を基点に南北に走る若宮大路と小町大路に挟まれた空間は、「北条義時亭」・「宇津宮辻子御所」・「若宮大路御所」といった、政治の中枢を担っていた屋敷地が広がる。本調査地点は小町大路の東側に位置し、近接した北側には、現在「宝戒寺」となる位置に「北条義時小町亭」があったとされる。また、調査地点と宝戒寺域のほぼ中心を東西に走る道の東奥には、「東勝寺」が位置している。『吾妻鏡』建久二年（1191）３月４日条にみえる、小町大路辺」から幕府（大倉）や鶴岡八幡宮まで焼けた火事の記事には、義時のほか、相模守大内惟義・村上判官（基国）ら幕府幹部の館はもとより、比企右衛門尉（能員）・同藤内（朝宗）・佐佐木三郎・法橋昌寛・新田四郎・工藤小次郎・佐貫四郎ら有力御家人の館が、小町大路の東側に並んでいたことがうかがえる。本調査地点の屋敷地当主を比定する史料は残っていないが、北条得宗邸にも卑近で、政治的に枢要な人物が居住していた一角であったことは確かであろう。

１．遺構について

本調査では、第１面から第４面までの４面に分けて生活面を調査した。それぞれの生活面は遺構の重複があり、短期間に生活面上に造り替えがおこなわれたことが窺える。調査区西側では、第３面から第１面まで小町大路の側溝を確認している。これまでの調査成果から、小町大路の東西には側溝が伴うことが確認され（注１）、小町大路の東西幅も暫定ではあるが16mと推定されている（馬淵2002）。本調査地点で発見した側溝は、他の地点で確認した側溝と同様に逆台形の掘り方を持つが、溝の木枠はいずれの面でも遺存しておらず、確認できなかった。最終面の第4面では、第３面で発見した側溝下層ですり鉢状の落ち込みを発見しているが、この落ち込みについては、土層断面の観察から自然流路の痕跡ではないかと考えている。

発見した側溝は、新旧併せて６条である。溝の木枠材等が残っていないために、土層の堆積状況からしか判断できないが、それぞれの生活面で確認した側溝は、浚渫などによって何度かの掘り直しが行われたために、同一面上で溝の重複がみられるのではないかと思われる。これまでの調査で発見された小町大路沿いの西側側溝は逆台形の掘り方を持ち、木枠と木枠を立てるための根太木等が良好な状態で遺存している。対して、東側側溝は木枠等が遺存せずに溝の掘り方のみが確認されている。溝の掘り方は東西側溝共に逆台形を呈しており構造的には同様と思われるのだが、小町大路を挟んで東側と西側では居住者の階層、あるいは場の使われ方の違いがあり、溝の構造・材の遺存に違いができたのだろうか。

若宮大路にともなう側溝は、東西ともに逆台形の掘り方を持ち箱型の木枠を持つ。東西の溝幅などの規模にも東西溝で差がないことが調査成果からわかっている。小町大路は、道幅は若宮大路のほぼ半分となり、規模としては小さくなるが、大路南方に米町、材木座といった繁華な町屋地域を持ち、通り沿い西は、「宇津宮辻子御所」以来、御所が続く一帯となる。北に抜けると横大路から六浦道へとつながり、朝比奈の切り通しを抜け六浦津へと結ばれる。小町大路は、若宮大路に比べて規模は縮小されるが、幕府の政治・経済を支える機能を持った道であったと思われ、若宮大路側溝と同様に、当時は小町大路側溝も東西双方に木枠をともなう構造を持っていたと思われる。

調査区の南側では、第１面から第３面まで小町大路側溝に直交するように溝、柵列の柱穴等、屋敷地の区画を意図した遺構を発見した。第３面では、東西に伸びる溝２条と重複するピットを確認している。溝19はピットの重複が激しく、ともなう柱穴列を確認出来なかったが、溝19の北に並行する溝20は、溝にともなう柱穴列を確認した。柵、あるいは塀の構造は不明である。

第２面では、南北・東西にL字状に並ぶ柱穴列Dを確認した。東西の柱穴列は布掘りの構造を持ち、堅牢な塀であったと思われる。小町大路側溝に沿った南北の柱穴列は東西とは異なる柱穴立ての、やや脆弱な構造をしている。側溝に面した塀が簡易的であったとは考えられないが、通りに面する部分が防御的な構えを持たず、隣地との境を強固にしているように感じられる。絵巻などの資料を見ると、武家の館は、館周囲を溝（堀）で囲い板塀をめぐらしている。鎌倉市御成小学校校庭の発掘調査でも、敷地を土塁（築地塀）・塀で囲み、敷地内にも溝や塀を設け、母屋とは別に倉庫、厩、庭等があったことが分かっている（河野ほか1990）。柱穴列Dは、屋敷地区画の南限を示していると思われ、調査区内柱穴列Dの区画の北側には、庭園のような空間が広がる。その空間地には、浅い、大型の土坑13がある。土坑13は苑池の可能性もある。

柱穴列Dの北側で、土坑13を切って東西方向に伸びる柱穴列Bを発見している。これは、柱穴列Dを廃棄した跡に使用された柵列（塀）である。布掘り構造を捨て、やや簡易的な造りとなる。

第３面で確認した溝19・20上層で、溝16を発見している。L字の区画の柱穴列Dの東西方向の柱穴列（柵・塀）に伴う、長楕円の土坑列と考えている。第３面、第２面ともに、屋敷地南限となる溝、柱穴列の北側は遺構が疎らとなり、建物址を検出することもなく、空閑地が広がる。第１面では、区画の遺構として、柵列（塀）ではなく、道路状の破砕泥岩を使った地行を発見した。破砕泥岩の南側に、浅い溝（溝９）が並行するが、柵列（塀）をともなわない。本文でも触れたが、この破砕地行が道路であったと仮定した場合、小町大路側溝を渡るための「橋」を推定させる遺構を確認することは出来なかった。「板橋」のような簡易的な橋を使用していたのかもしれない。破砕地行は、西側を近世以降に攪乱され、地行が希薄となるが、小町大路側溝際まで続いていたと考えられる。側溝東側で確認した、溝11・13は、側溝に沿って立てられた柵（塀）であった可能性もあり、道路と柵（塀）によって区画は第１面の時代まで継承されたようである。第１面では調査区の北側部分が・第３・２面と一変し、ピットが多く重複するが、建物址の柱穴と考えられるピットの並びを確認することはできなかった。

注

１．小町大路側溝を検出した地点は以下の通り

東側側溝：小町二丁目402番５地点（野本2001）・小町三丁目426番３地点（原1996）

西側側溝：雪ノ下一丁目400番地点（馬淵2002）・雪ノ下一丁目432番２地点（菊川1989）・小町二丁目374番１地点（原1998）・小町二丁目389番１地点（原ほか1996）・小町一丁目325番イ外地点（佐藤ほか1994）

２．出土遺物について

本調査で出土した遺物は、テンバコ数にして26箱である。土師器皿・舶載磁器（高麗青磁・青磁・白磁・青白磁・褐釉）・国産陶磁器（瀬戸・常滑・亀山・渥美・東播・備前）・瓦器・瓦・石製品（砥石・滑石鍋転用品）・鉄製品（釘・鉄鍋）・土鍋・土製品・ふいごの羽口・木製品・漆器・鉱滓・銭・貝・骨（獣骨・人骨・加工途上の獣骨）。中世以前の遺物としては須恵器（坏・蓋）・土師器（坏・甕）・弥生土器（台付き甕）である。採集した遺物のほとんどは土師器皿であるが、表１に現れるように、第４面では、土師器皿T種が主体となる。第３面になると、やや土師器皿R種とT種の破片数が拮抗する。第２面では、２対１の割合で土師器皿R種が主体となり、第１面では３対１の割合で土師器皿R種が主体と図44　遺構変遷図なるといった傾向がみえる。調査面積に比して遺物出土量は少ない。調査した部分が屋敷地の庭であったか、あるいは主要な場を外れていたせいかもしれない。

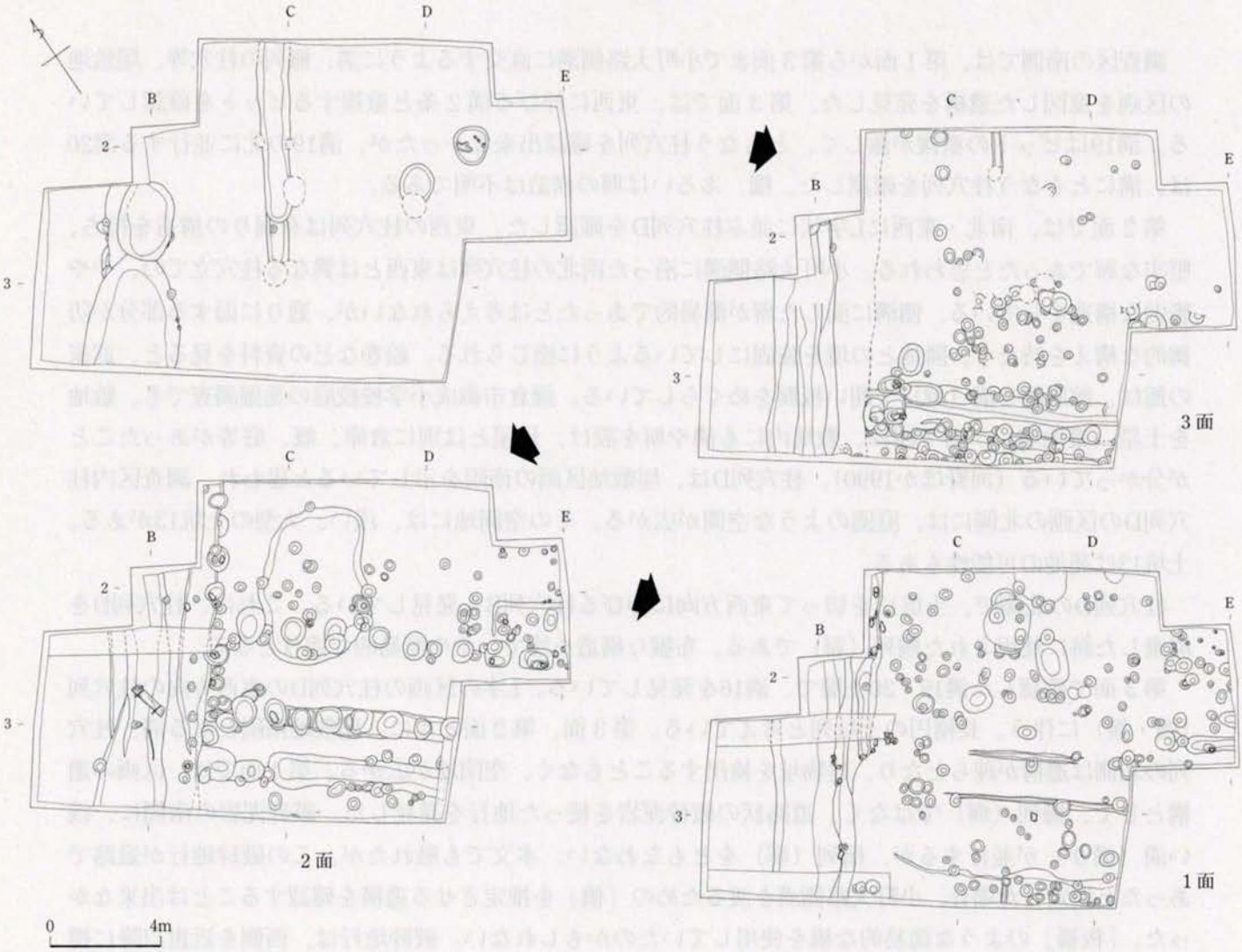


図44　遺構変遷図

小町大路側溝の西側は中世後期に基盤層まで削平されたらしく、出土遺物の大半が15世紀以降に属するものであった。鎌倉市域にしばしば認められるこの状況は、鎌倉府廃絶後の鎌倉にやはり大きな変化があったことを示すものにほかなるまい。

【引用・参考文献は本章末に一括】

（1・2伊丹）

3. 変遷と年代

本調査では、4枚の生活面を確認した。遺跡の開始時期は中世最下層の第4面であり、第1面にいたって中世が終わったあと、調査区西端の小町大路面に中世後期～近世層を残すほかは、大部分で近・現代層となる。以下では1面から4面までの中世面、および第二章で簡単に触れた中世後期～近世面に、それぞれ時系列に沿って第1期以下第5期までの名称を付し、変遷を追うとともに、年代を与えることを試みたい。

第1期

最下層の第4面で発見した遺構からは調査地点の性格は掴めなかった。小町大路側溝に相当する位置には、溝というほどには整備されていない、小川のような流路がある。治承四年の源頼朝による街路改修以前のものとすべきであろう。また、流路と同時期の遺構は乏しく、人跡は薄い。調査地点自体は鎌倉初期から有力武士が居住していたと推定される場所である。したがってこの状況は、該期がそれ以

前、すなわち平安時代後期から末期に主体を持っていることを示している。全体に遺構が乏しい中で、流路に平行して、幅1m強で逆台形をした溝がある。整った形状をもち、頼朝の整備以後のものである可能性が高いが、層位的には最も古く、鎌倉時代でもせいぜいごく初期と考えほかはない。すなわち該期は大きくみて12世紀のうちに収まるだろう。

第2期

第3面に入ると、小町大路側溝は整備され、調査区の南域には東西に走る溝が現れる。このあたりには、さらにいくつかの柱穴が群集する。東西溝の延長上、小町大路を越えた先には、小町地区を分かつ小路がある（「大学辻子」もしくは「呪師勾当辻子」であろう）。この街割りは明らかに鎌倉時代以後のものである。調査区内に北側の境界らしき遺構は見当たらず、かえってあらたに細い溝が北に延びようとしている。また、東側の一角に貝粉混じりの砂層が敷かれているのは、調査区外の以東に建物が存在していることを暗示している。これらのことが示すのは、調査区が広い敷地の南西寄りの一部であって、中心域は北東にあるということである。調査区北半部で遺構が疎らなのは、庭のような空閑地であるからだろう。当然調査地点は武家屋敷の一角とみてよい。年代は、出土遺物からみてこれも鎌倉時代初期から前期に属する。おそらく12世紀末から13世紀前半の早い時期とみたい。

第3期

第2面は4期の変遷の中でもっとも濃密に生活痕のうかがえる時期である。小町大路側溝に臨んで柱を密に揃えた塀があり、屋敷南辺もやはり柱並びにより同様の塀が構築されている。この南側塀の柱は、根方を相互に固定したいわゆる布掘り構造をもつ堅牢なものである。前代に空閑地であった調査区北半の平坦部には、不整形の落ち込みが設けられている。位置と形状からいっておそらく苑地であろう。この状況も前代同様、ここが広い屋敷地の南西の一隅に過ぎないことを示している。地割り自体は前代から継承され、空間利用のあり方も踏襲されている。出土遺物年代に3面とさほどの隔絶があるわけではなく、布掘り柱穴列が他の鎌倉の検出例ではおおむね鎌倉時代前期までに多いことからみても、この一群を鎌倉時代前期からそう降らせるわけにもいかない。とすれば、大きく鎌倉時代前期から中期にかけてのもの、すなわち13世紀前半（半ば以前）ごろに相当しよう。

第4期

第1面は、小町大路沿いと南辺に前代まで存在した堅牢な塀が消滅し、柱穴には建造物を想定できるような連繋性も認められない。広範に上部を削られているので詳細は把握しがたいが、全体としてやや散漫になった印象は免れない。しかし、大路沿いの北半には、粗略ながらも礎石建ちの塀が残り、南側には破砕泥岩を敷いた道がなお存在する。この時期もやはり、調査地点は大きな区画の南西角に当るとみてよかろう。南の境界標識（道）の位置はほぼ変わらないが、区画内の状況は前代の居住者と隔絶があったことを推測させる。ただ、その性格については資料不足といわねばならない。年代的には鎌倉時代後期～末期、13世紀後半から14世紀前半のかなり長い時期にわたるのではないか。

第5期

わずかに小町大路面にのみ残る層である。粘性の強い砂質土層で、畑地か水田耕土のように見える。15世紀以後鎌倉が頽勢に入る中で、小町大路も次第にその重要性を損ねていき、削り取られ幅員を狭めていくに任せるしかなかったのであろう。

（馬淵）

第２節　考　察

若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目402番９ほか地点）第２面検出の柱穴列について

宇都洋平

1

本調査地点第２面では小町大路の側溝にほぼ平行・直交したかたちで柱穴列Dが検出されている。この柱穴列は14穴の柱穴により構成されており、東側は調査区外に延びている。またこの柱穴列は、東西方向のP.192からP.187までの７穴が柱穴と柱穴の間に溝がはしるいわゆる布掘り状になっている。本稿では現在までに鎌倉で検出された事例を紹介しつつ、若干の考察を加えたい（注1）。

2

事例１　若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目402番５地点（野本2001）

本調査地点のすぐ南側に位置する。当調査地点では塀として布掘り状遺構が検出されている（注2）。遺構は東西５穴、南北３穴のカギの手状を呈する。東西柱穴列の東側及び南北柱穴列の南側は調査区外に延びており、全長は不明であるが、確認できた長さは東西約５m、南北約3.8m。柱穴の平面は不整円形や楕円形を呈し、深さは確認面から溝部分が約20cm、柱穴部分が約35cmあり、軸線は検出された小町大路の側溝と考えられる溝とほぼ直交・平行している。遺構の年代は図示されているものが渥美窯製品のすり鉢１点のみであるが、報告書によれば土師器皿T種がR種の５倍ほど出土し、また渥美窯製品が常滑窯製品の７倍出土しているとのことであり、概ね13世紀中頃の年代が推定できる。

事例２　宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目354番12外地点（田代ほか1993）

当調査地点は国庫補助事業分と調査団の二つに分かれており、この内宇津宮幕府跡発掘調査団が発掘した文に布掘り状の遺構が検出されている。しかし報告書が刊行されていないために、この遺構についての仔細は不明である。よって国庫補助分に掲載された調査団分の全体図を参考にしつつ、検討していきたいと思う。

布掘り状遺構は調査区のほぼ中央で東西方向に検出されており、若宮大路に直交する軸線をもつ。この布掘り状遺構は柱穴11穴で構成されており、長さは調査区外に延びているために全長は不明であるが、調査区内で11.9m確認できる。幅は概ね70～80cm、柱穴の平面は不整方形を主としている。柱穴の芯々距離は１m～1.3mほどであり、溝・柱穴の深さは不明である。遺構の年代は報告書が刊行されていないために不明であるが、国庫補助事業分の報告書に記載されている13世紀中～後半との年代が考えられている建物1に切られている。以上のことから年代として鎌倉時代前半ごろが推定できる。

事例３　笹目遺跡　笹目町330番-１地点（大河内1991）

Ⅰ区第１面より布掘り柱穴列として検出されている。報告書によると第２面で検出されたが、土層堆積の確認により第１面に帰属するものと判明したとある。よって報告書に記載してある実測数値より、実際の遺構の深度はあったものと考えられる。検出された布掘り柱穴列は東西９穴、南北２穴のカギの手状を呈する。東西柱穴列の西側及び南北柱穴列の北側は調査区外に延びており、全長は不明ながら、確認された長さでは東西7.8m、南北1.1mを測る。柱穴の平面は隅丸方形を呈し、径は45～65cm、深さは溝部分が第２面より5～15㎝、柱穴部分が30～50㎝である。

この布掘り柱穴列の東西西側は先にも述べたように調査区外に延びているが、西側には3～4mに山裾がせまっている。調査担当者はこの山裾まで遺構が続く可能性があるとして、遺構の形状から板壁が造られ、その内側には何らかの施設が存在した可能性を指摘している（注3）。また遺構の年代は14世紀前葉を中心とした14世紀中葉頃までの年代と報告されている。

事例４　高徳院周辺遺跡　長谷一丁目290-１地点（宗臺ほか1989）

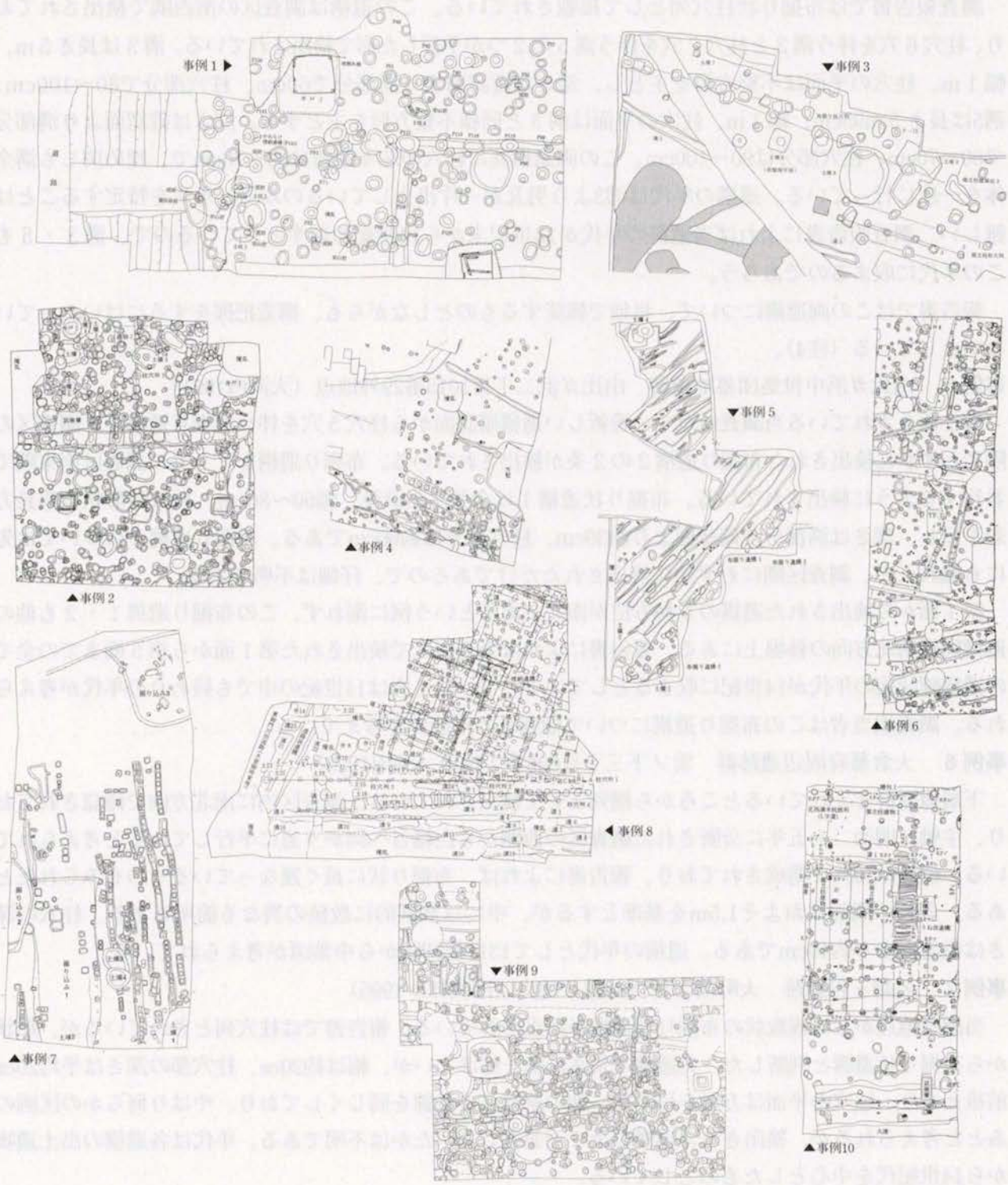


図45　事例

調査報告書では布掘り状柱穴列として掲載されている。この遺構は調査区の南西隅で検出されており、柱穴6穴を伴う溝3と柱穴7穴を伴う溝5の2つが平行した形で検出されている。溝3は長さ5m、幅1m、柱穴の平面は不整方形を主とし、深さは確認面より溝部分で60cm、柱穴部分で80～100cm、溝5は長さ5m95cm、幅1m、柱穴の平面は溝3と同様不整方形を主とする。深さは確認面より溝部分で60～70cm、柱穴部分は90～100cm。この両遺構共に柱穴の芯々距離は60～70cmで、埋め戻しも溝全体を一度に行っている。遺構の年代は溝3より男瓦が一片出土しているのみで、年代を特定することは難しい。調査報告書によれば当遺跡の年代が13世紀末から14世紀の前半としているので、溝3・5もこの年代に収まるのであろう。

報告書ではこの両遺構について、単独で機能するものとしながらも、構造把握をするにはいたっていないとしている（注4）。

事例5　由比ガ浜中世集団墓地遺跡　由比ガ浜二丁目1015番29外地点（大河内1991）

第1面とされている当調査地点で一番新しい遺構確認面から柱穴5穴を伴う布掘り遺構1と調査区の隅でわずかに検出された布掘り遺構2の2条が検出されている。布掘り遺構1・2共に調査区南東隅で並行するように検出されている。布掘り状遺構1は全長7m前後、幅50～80cm、柱穴の形状は略長方形を呈し、深さは溝部分で確認面より約30cm、柱穴部分は約60cmである。布掘り遺構2については先にも触れたが、調査区隅にわずかに検出されただけであるので、仔細は不明である。

第1面から検出された遺構の主軸方位が南北であるという例に漏れず、この布掘り遺構1・2も他の遺構同様南北方向の軸線上にある。報告書によれば当調査区で検出された第1面から第5面までの全ての遺構確認面の年代が14世紀に収まるとしているので、第1面は14世紀の中でも終わりの年代が考えられる。調査担当者はこの布掘り遺構について柵列址の可能性を考えている。

事例6　大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目606番1地点（菊川1993）

下層遺構群とされているところから柵列として検出されている。調査区内に南北方向で確認されており、主軸は明治二十五年に分断された調査区の西側から白幡谷へ向かう道に平行していると考えられている。柵列は19穴で構成されており、報告書によれば、布掘り状に長く連なっているものもみられたとある。各柱の間隔はおよそ1.5mを基準とするが、中には変則的に数値の異なる箇所もある。柱穴の深さは確認面から約40cmである。遺構の年代として13世紀初頭から中葉頃が考えられている。

事例7　名越ヶ谷遺跡　大町四丁目1880番6地点（田代ほか1995）

当調査地点からは複数状の布掘り状遺構が検出されている。報告書では柱穴列とされているが、形状から布掘り状遺構と判断した。各遺構の長さに統一性はないが、幅は約20㎝、柱穴部の深さは平均20㎝前後とあり、柱穴の平面は方形を呈する。他の遺構とも軸線を同じくしており、やはり何らかの区画のあとと考えられるが、検出された遺構の全てが並存していたかは不明である。年代は各遺構の出土遺物から14世紀代を中心としたものとしている。

事例8　大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番1地点（馬淵1993）

当調査地点では柱穴列1と柱穴列5とされているものが布掘り状遺構である。柱穴列1は検出された二階堂大路側溝に並行するように東西方向で検出されている。検出された26の柱穴のうち、14穴が布掘り状を呈す。柱穴の形状は円筒形で径が1mを超し、深さは一番深いもので確認面より1m強のものがある。柱間の寸法は約1.5m。

柱穴列5は二階堂大路側溝より若干西にふれたかたちで検出されている。柱穴列5は事例1～7のような一列の柱穴列の間を溝がはしる形状とは異なり、二つの柱穴間を溝がはしり、それが連なって一つの遺構に形成されたかたちをとる。検出された長さは約19m、柱穴間の幅は2m前後。年代は柱穴列1を

鎌倉時代初期、柱穴列５を鎌倉時代中期以降としている。

事例９　大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番５地点（馬淵1998・1999）

当調査地点からは事例８で検出された柱穴列５と同様のものが調査区北側で六浦道と考えられる県道金沢鎌倉線に平行したかたちで検出されている。一つの布掘り状遺構の柱穴の間隔は２m前後、柱穴の深さは50㎝から１mの間に収まる。隣接する布掘り状遺構との間隔は平均109.4㎝であり、調査者は築地の基底部の可能性を指摘している。年代は鎌倉時代前期としている。

事例10　政所跡　雪ノ下三丁目988番地点（手塚ほか1993）

調査地点では第２面とされている遺構確認面から畝状遺構として検出されている。報告書によると図示はできなかったが、この畝状の遺構の両端が若干深くなっていたとのことであり、事例８や９と同様の形状であった事が考えられている。確認された大半の遺構同様現在の横大路の軸線とほぼ同じである。畝ひとつの確認幅は東西約1.4m、南北20～30cm、深さは約10cm。この畝状遺構の検出された第2面の年代は13世紀第２四半期～第３四半期とあり、畝状遺構はこの第２面の中でも最古の遺構とされている。

3

以上鎌倉で検出された布掘り状遺構及びその他の地域の検出事例を挙げてみたが、検出事例からみると、建物にともなう布掘り状遺構は検出されていないという共通点がある。

布掘りが遺構として数多く検出され始めるのは古墳時代からであり、近世に至るまで建物や区画施設に伴う遺構として検出されている。また現代の建物の基礎工事においても布掘りが行われていることは周知の通りであろう。しかし、今回の事例でみてきたように、中世鎌倉においては建物にともなう布掘りは検出されていない（注5）。

このことから中世鎌倉においては区画を目的とした施設にのみ使用されたことが考えられる。布掘りを採用する理由として、連なる柱穴列から伸びる柱同士の補強の意味があり、一時的な区画に使用される柵などには用いられず、恒久的とまではいわないまでもある程度の期間使用されても強度を保てる板塀などに使用されたと考えられる。

しかしながら、本調査地点で検出された柱穴列Dは、小町大路に平行した南北方向においては布掘りをともなってはおらず、また若宮大路の側溝に面した柱穴列も布掘りはともなってはいない。若宮大路や小町大路の側溝に面した柱穴列は屋敷の外郭施設の可能性がある。これらの施設はそれこそ恒久的な区画施設であるのにもかかわらず布掘りをおこなっていないのはどのような意味合いがあるのか。現段階においては不明といわざるをえない。

板塀が利用されていた事例を文献上から探してみると、『吾妻鏡』建暦三年（1213）五月二日条に

> （前略）先園幕府南門并相州御第西北両門、相州雖被候幕府、留守壮士等有義勢各切夾板、以其隙為矢石之路攻戦（後略）
>
> （吉川弘文館『国史大系』本）

とあり、相州（北条義時）の屋敷と軍勢が通ることのできる大路を隔てるものが板塀であることが分かる。また貞応元年（1222）九月廿二日条には同じく義時の屋敷の坤角に放火があったとの記述がある。築地塀ならば放火は難しいと思われるので、おそらく木製の塀であったのであろう。次に事例８・９・10で検出されたような形状のものについてであるが、布掘りによって繋がっている柱穴同士が列で並ばないために板塀などは考えにくく、事例８の報告書に記載されているように、『蒙古襲来絵詞』の安達泰盛邸にみられるような築地塀などが考えられる。以上布掘り状遺構の検出事例と若干の考察を加えてみた。だが大路に面する柱穴列に布掘りを行っていない理由について、本論では言及できなかった。ま

た北条氏の屋敷跡と考えられる伊豆の国市御所之内遺跡など他の地域からも、塀の可能性が指摘されている布掘りをともなった柱穴列が検出されている（池谷ほか2002）。今後これら他の地域を含め、さらなる検討をしたいと思う。

注

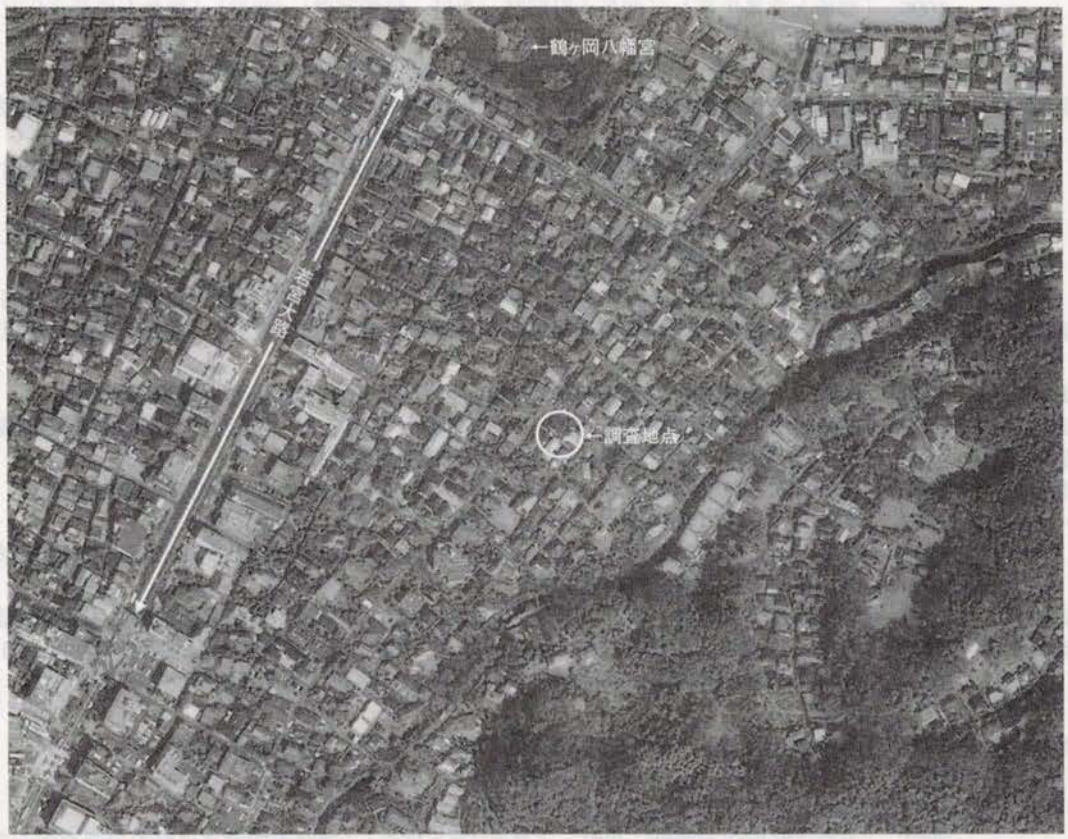
1．各事例の年代観は報告書による。
2．担当者は溝部分を雨落ちの溝である可能性も指摘している。
3．報告書では忌垣のようなものであったとの推測がなされている。
4．溝３・５のすぐ北側にはほぼ直交したかたちで柱穴列が検出されており、この柱穴列との関係性を視野にいれて考えるのであれば、この溝３・５は区画をあらわす遺構と考えられる。
5．今小路西遺跡（御成小学校内）の古代Ⅱ期とされている東柵は布掘りであり、この時期までには少なくとも鎌倉に布掘りの技法が伝わっていたことが分かる。

【引用・参考文献は本章末に一括】

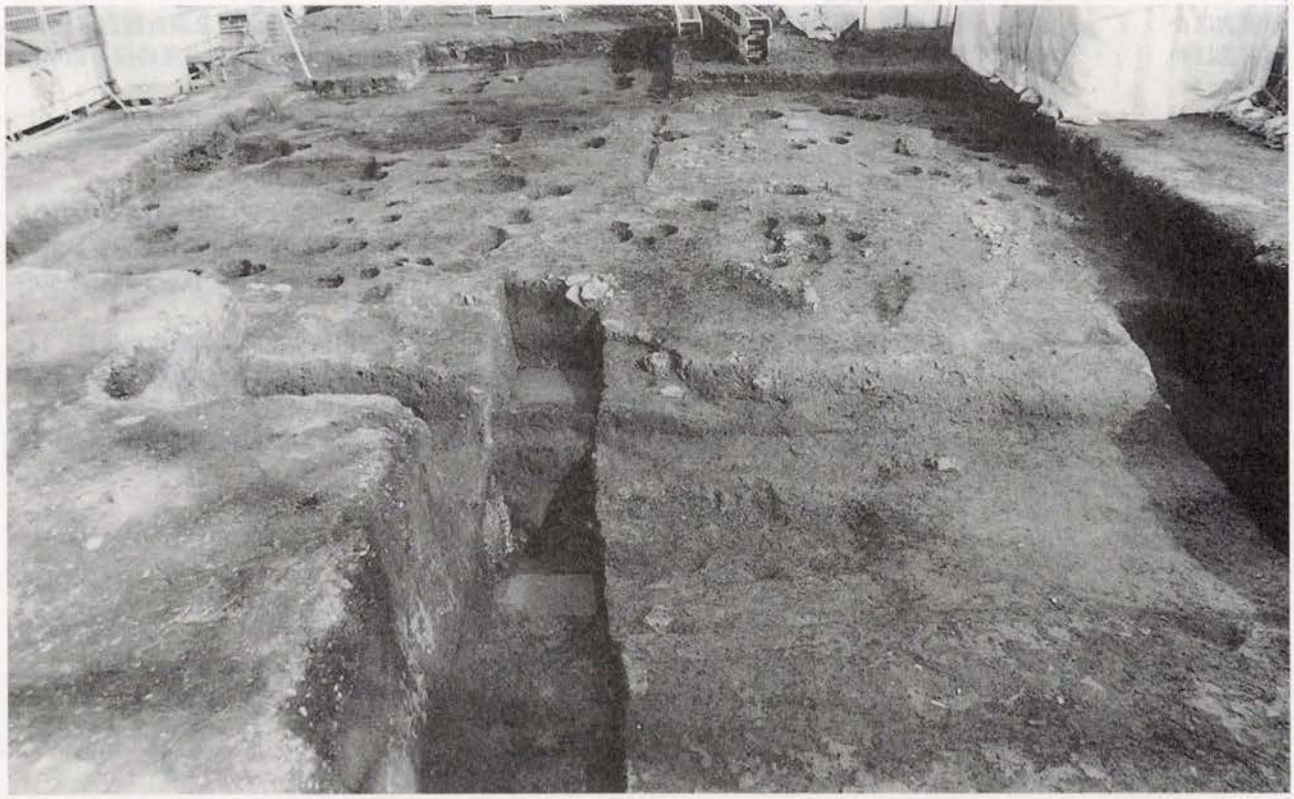
引用・参考文献（本書全体に共通、発行者が鎌倉市教育委員会単独の場合はこれを略す）

秋山哲雄　1996　「御所と北条氏亭」（「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）」特論）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
秋山哲雄　1997　「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編第9号
池谷初恵ほか　2002　『史跡北条氏邸跡発掘調査報告Ⅰ　御所之内遺跡第13次発掘調査報告』韮山町教育委員会
大河内勉　1991　『笹目遺跡発掘調査報告書』　笹目遺跡発掘調査団
大河内勉　1991　「由比ガ浜中世集団墓地遺跡　由比ガ浜二丁目1015番29外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7
岡陽一郎　2005　「中世都市鎌倉の成立と変貌」『中世都市研究11　交流・物流・越境』新人物往来社
岡陽一郎　2006　「鎌倉の変容」『鎌倉時代の考古学』高志書院
菊川英政　1993　「大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目606番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
斉木秀雄ほか　1983　『鶴岡八幡宮境内　研修道場用地発掘調査報告書』鎌倉市鶴岡八幡宮・研修道場用地発掘調査団
斉木秀雄ほか　1993　『国指定史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書』Ⅶ　史跡若宮大路遺跡発掘調査団
斎木秀雄ほか　1999　『北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目273番イ地内）』7　北条時房・顕時邸跡発掘調査団
宗臺秀明ほか　1989　『長谷1丁目290-1地点遺跡』高徳院周辺遺跡発掘調査団
宗臺秀明ほか　1997　『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
須藤博史・貫達人　1963　「宇津宮辻子幕府の位置について」『鎌倉』11　鎌倉文化研究会
瀬田哲夫　1991　「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目369番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7
高柳光寿　1959　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
田代郁夫ほか　1993　「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目354番12外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
田代郁夫ほか　1995　「名越ヶ谷遺跡　大町四丁目1880番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11
田代郁夫　1998　「大町大路と小町大路—中世都市の中の「町」と「路」」『湘南考古学同好会々報』73　湘南考古学同好会
手塚直樹ほか　1993　「政所跡　雪ノ下三丁目988番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
貫達人　1989　「第二章　古代・中世の鎌倉」『鎌倉市史　近世通史編』吉川弘文館
野口実　1993　「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45（財）古代学協会
野本賢二　2001　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目402番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
原廣志　1996　「北条高時邸跡　小町三丁目426番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
原廣志　1998　「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会・市教委
原廣志ほか　1988　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目273番ロ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4
原廣志ほか　1988　『北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目274番2地点発掘調査報告書』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
福田誠ほか　2005　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目264番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21
藤井恵介・玉井哲雄　1995　『建築の歴史』中央公論社
藤木久志　1993　「中世鎌倉の祇園会と民衆」『神奈川地域史研究』11号　神奈川地域史研究会
馬淵和雄ほか　1987　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目233番9ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
馬淵和雄　1993　「大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
馬淵和雄　1994　「武士の都　鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社
馬淵和雄　1998　「大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
馬淵和雄　1999　『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番5地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄　2002　「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18
馬淵和雄ほか　1996　「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
松尾剛次　1993　『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館

図版 1

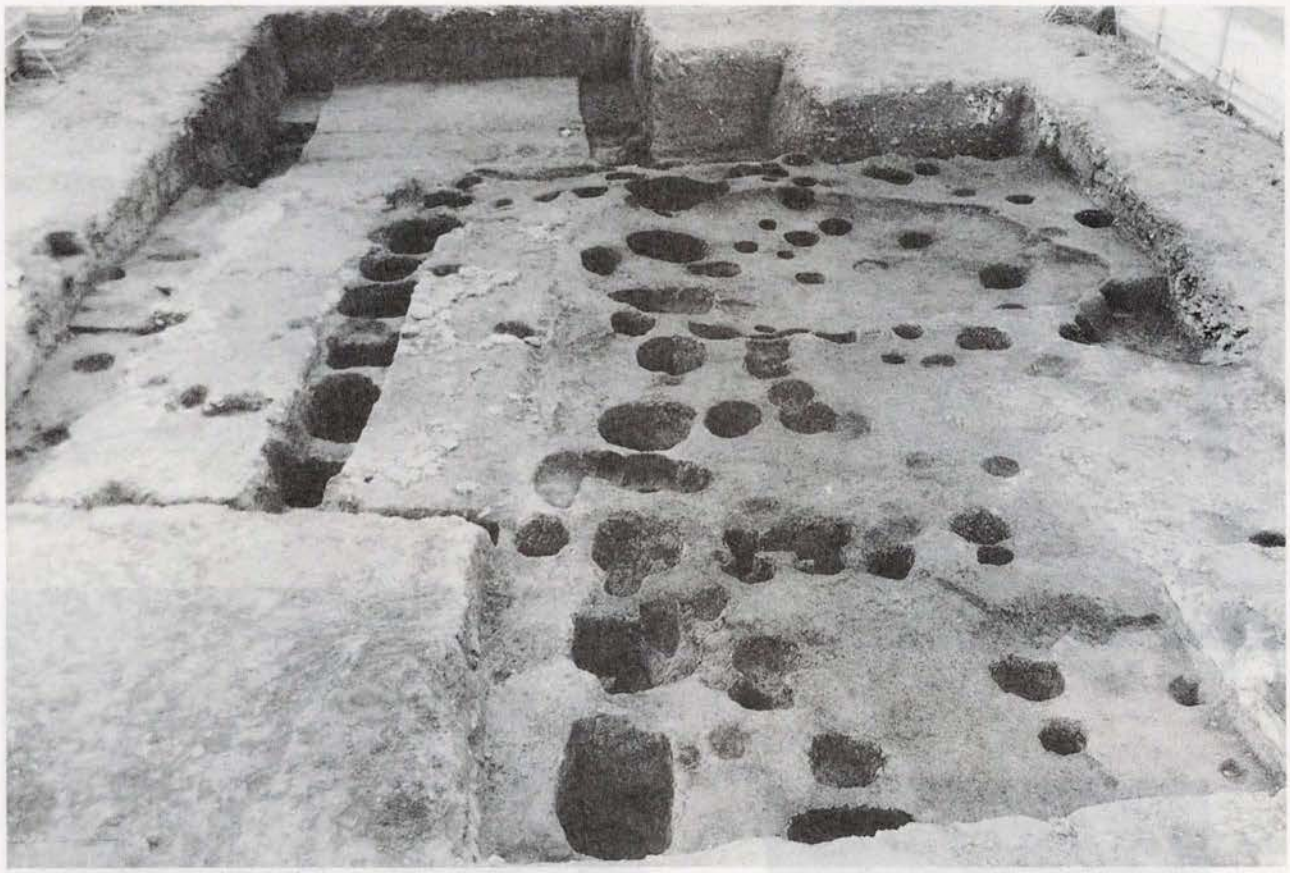


1．調査地点鳥瞰



2．第 1 面全景

図版 2



1．第 2 面全景

2．第 3 面全景

図版３

１．道路１・溝２・７（東から）

４．P127（北から）

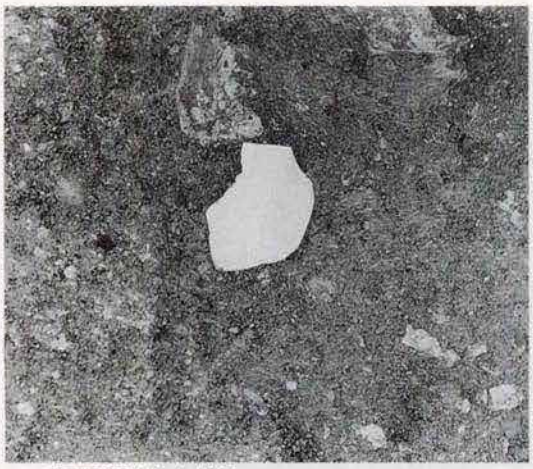
２．溝１頭骨出土状況（西から）

５．土師器皿集中出土状況（西から）

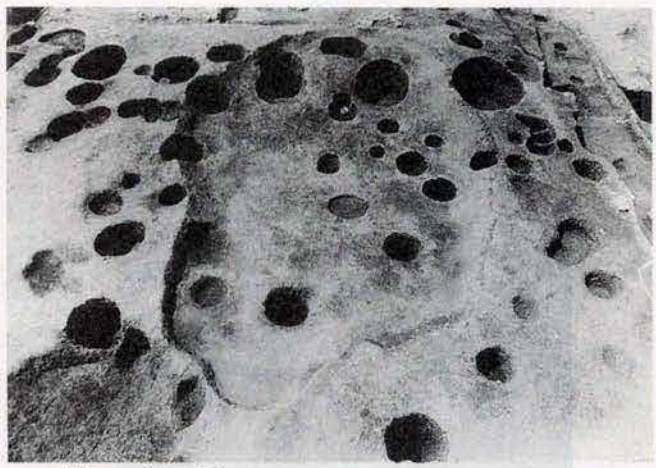
３．溝１（南から）

６．溝11・13（南から）

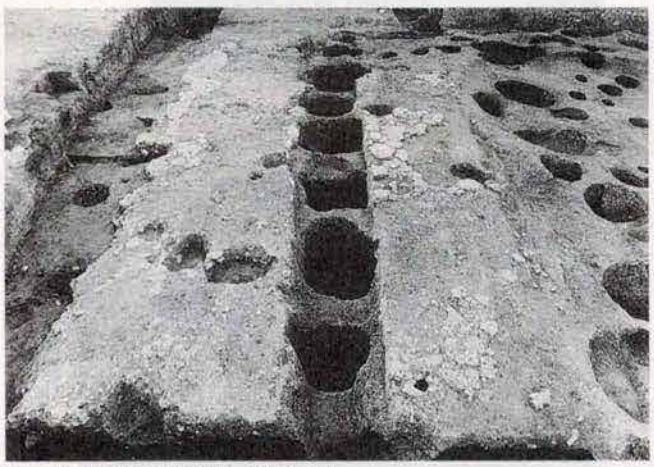
図版 4



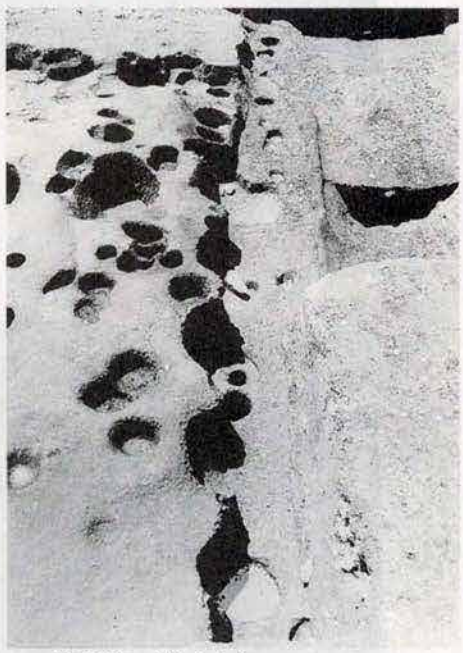
1．高麗青磁出土状況



2．土坑13（北から）

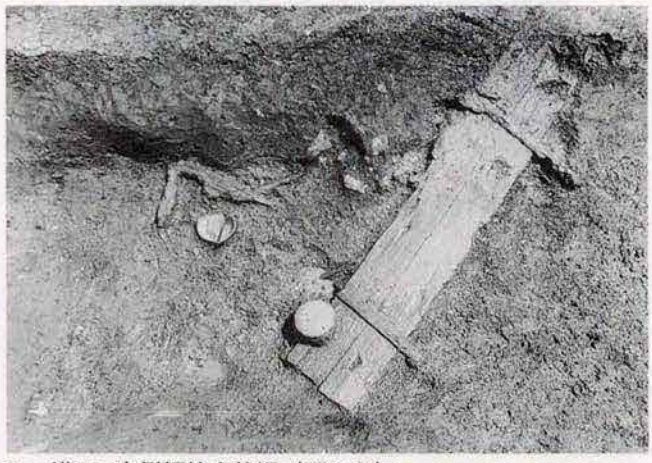


3．柱穴列D・東西列（東から）



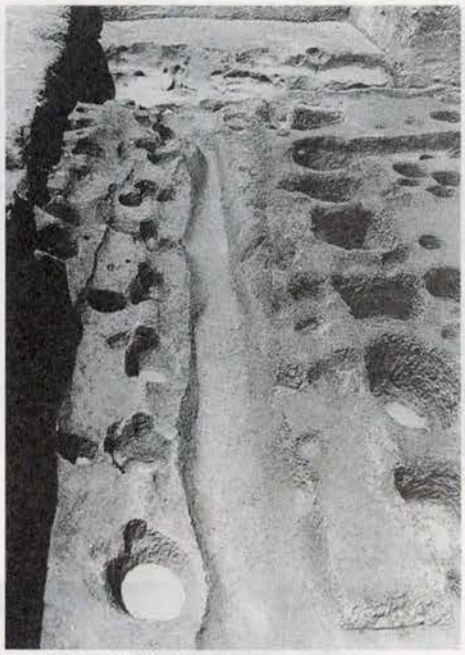
4．柱穴列D（北から）

5．溝12（南から）



6．溝15a内側板検出状況（西から）

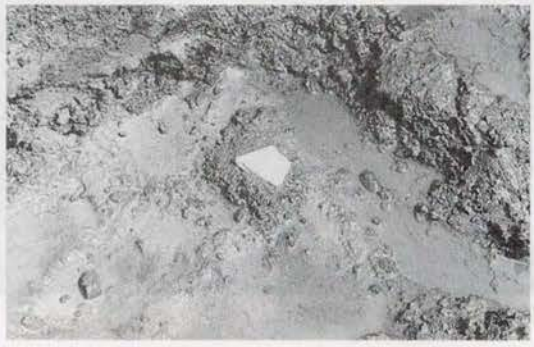
図版 5



1．溝20（東から）

2．溝15C・17（南から）

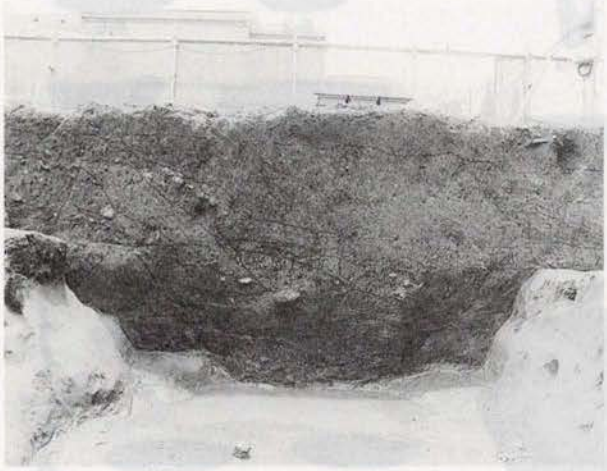
3．土坑19・21（南から）



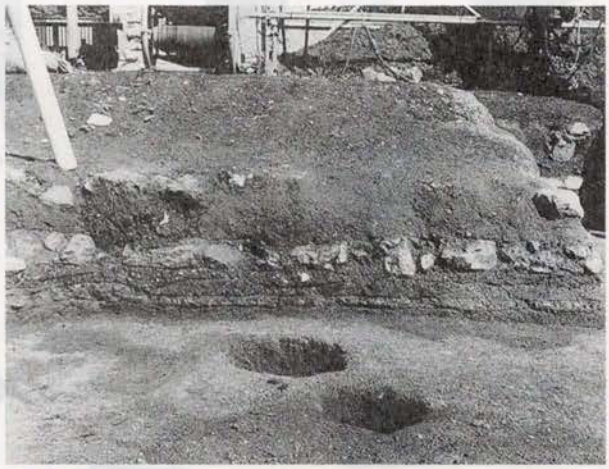
4．土坑19白磁玉緑磁出土状況（西から）

5．溝21（南から）

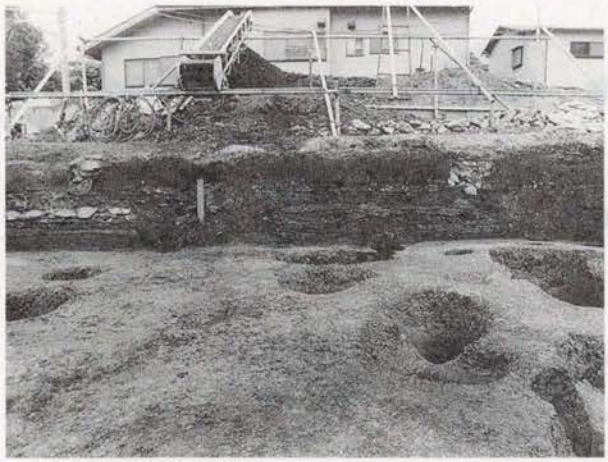
図版 6



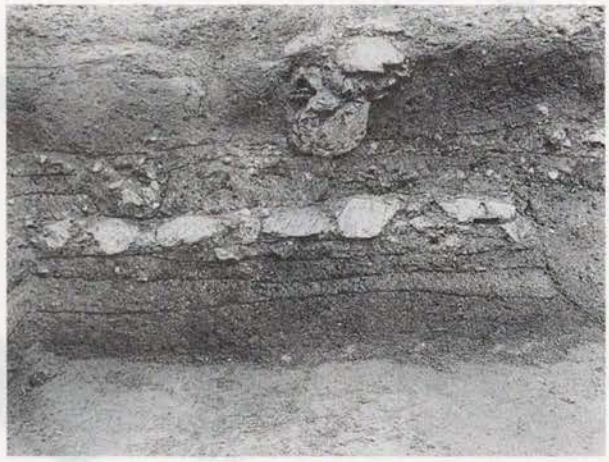
1．南壁西半部土層堆積（小町大路側溝）



2．東壁北半部土層堆積

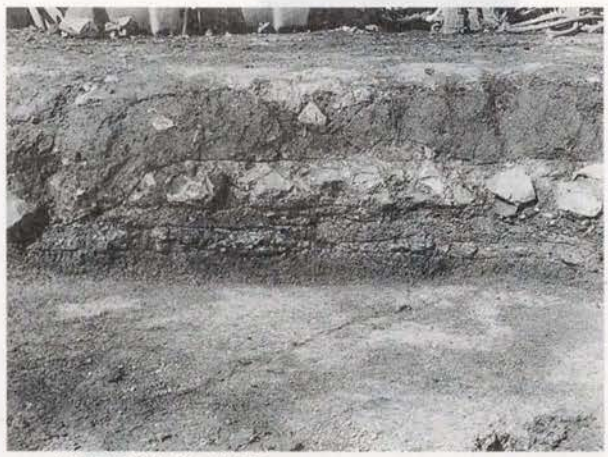


3．東壁中央部土層堆積

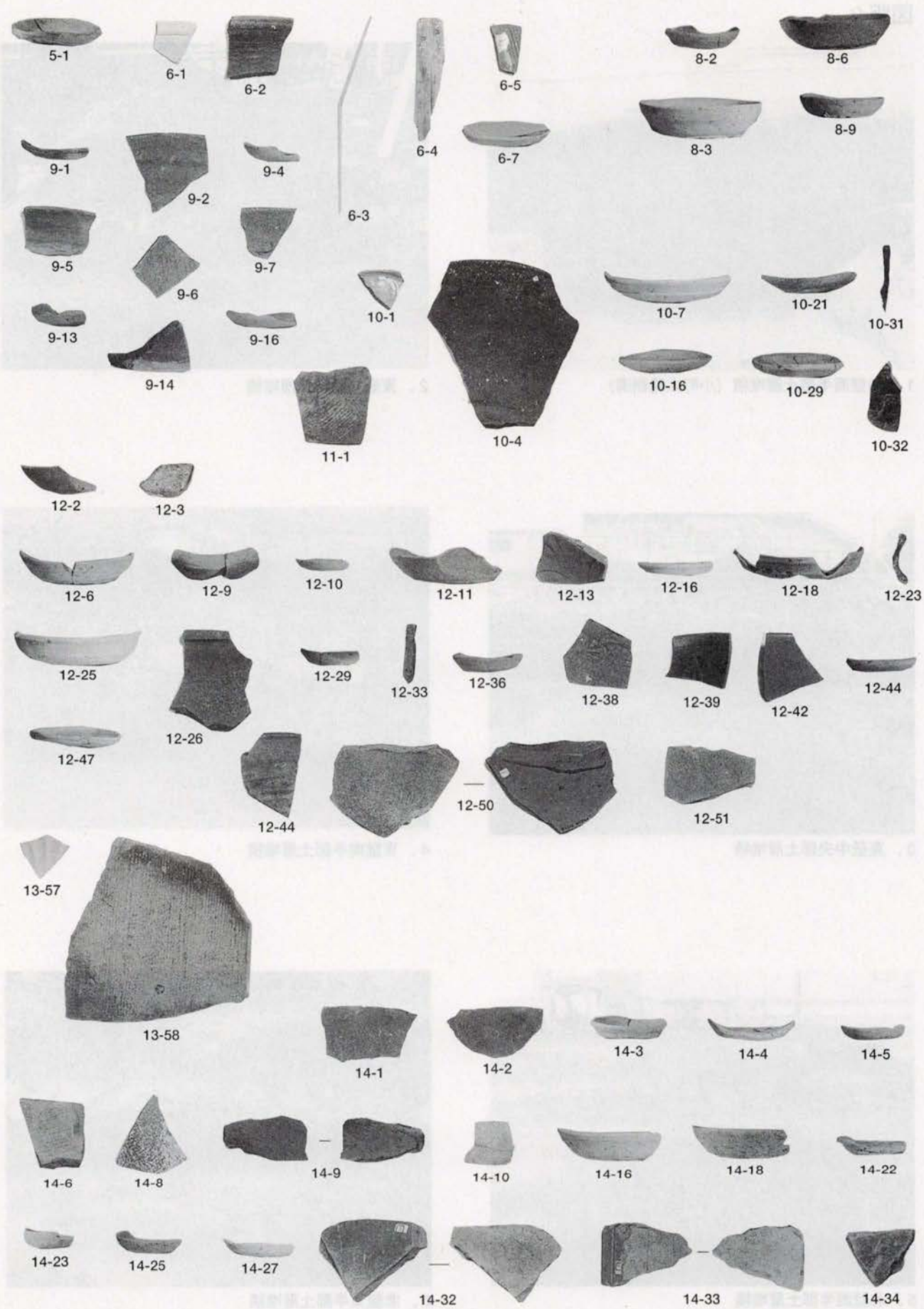


4．東壁南半部土層堆積

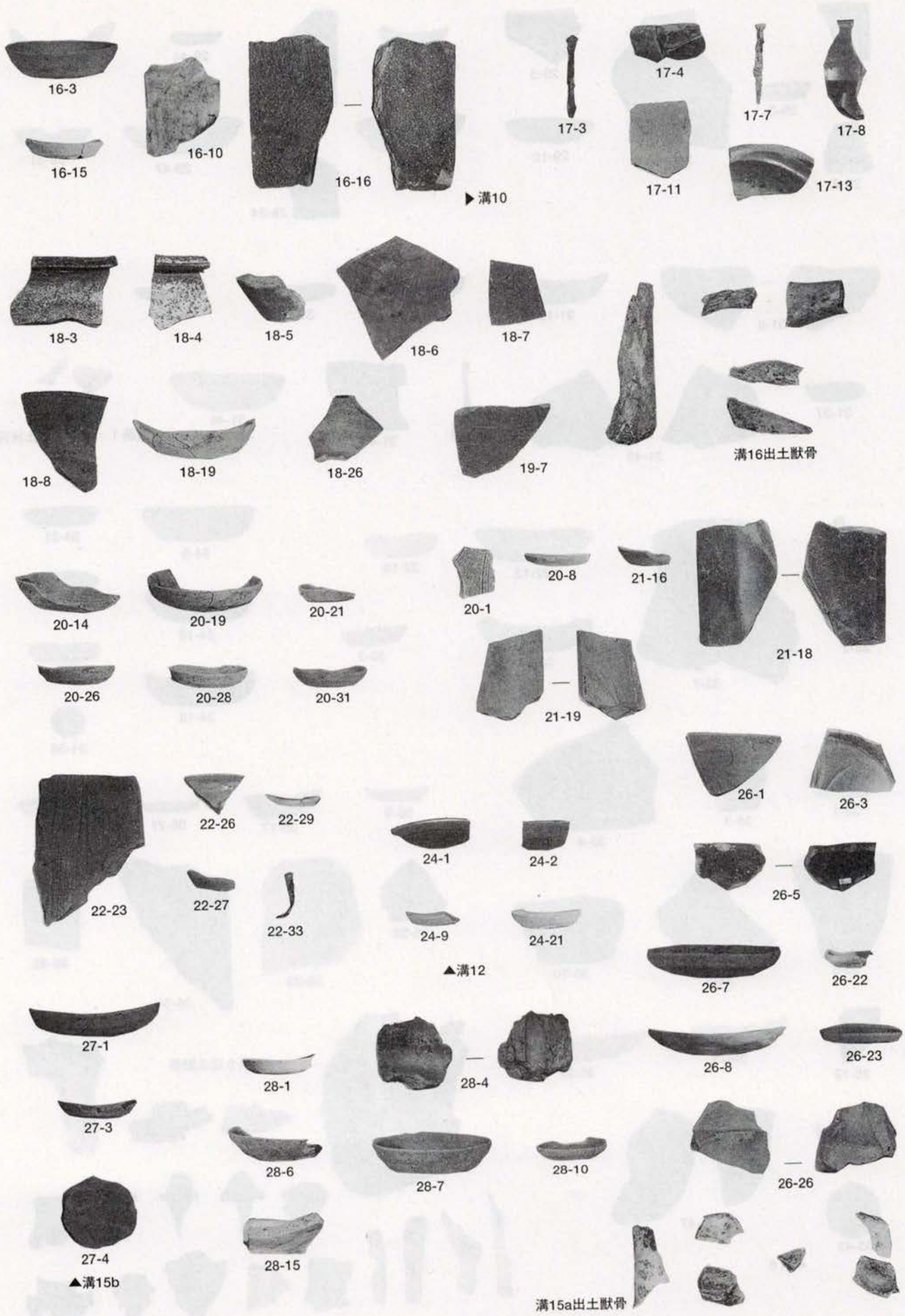
5．北壁西半部土層堆積



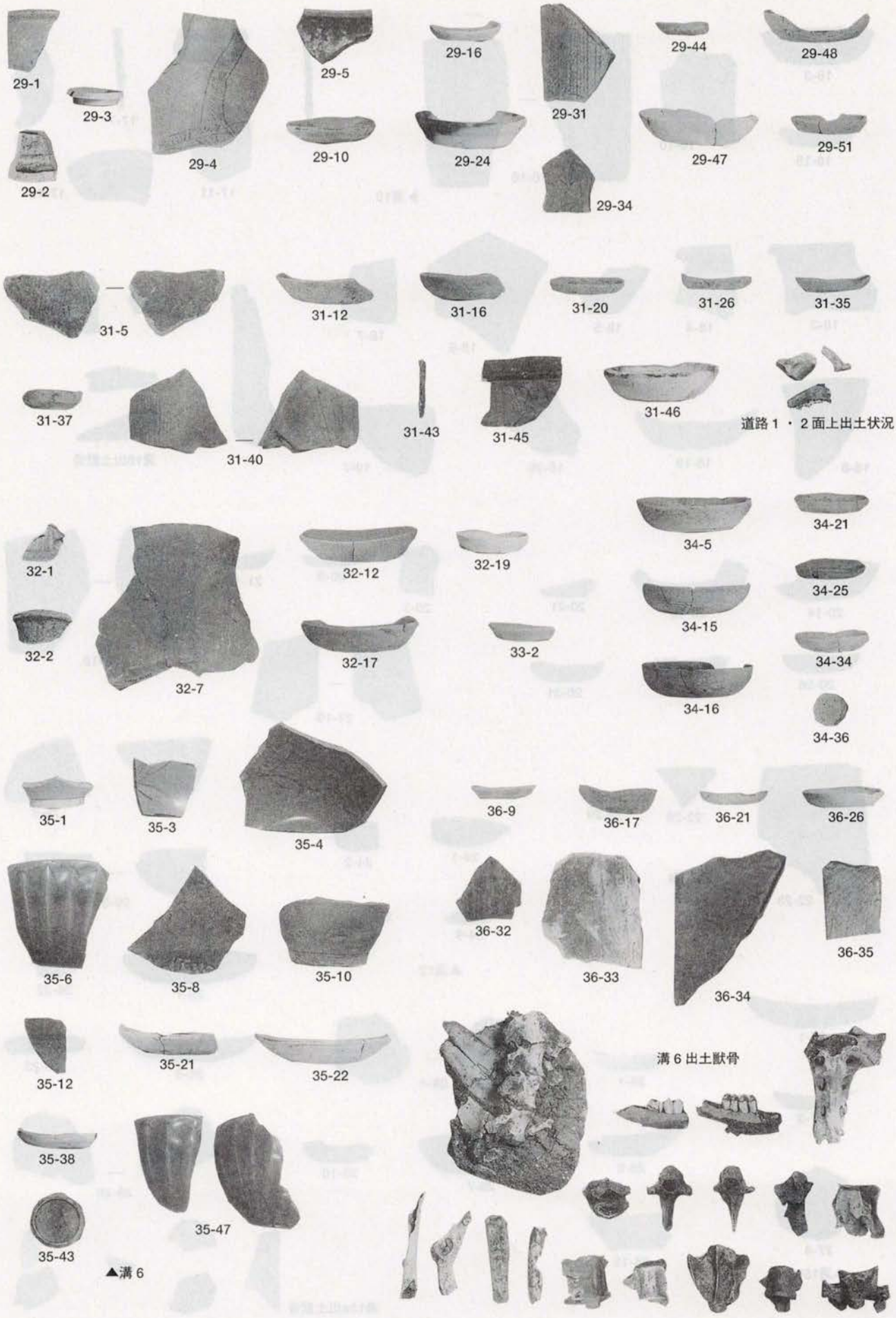
6．北壁東半部土層堆積


5-1
6-1
6-2
6-3
6-4
6-5
6-7
8-2
8-6
8-3
8-9
9-1
9-2
9-4
9-5
9-6
9-7
9-13
9-14
9-16
10-1
10-4
10-7
10-21
10-31
10-16
10-29
10-32
11-1
12-2
12-3
12-6
12-9
12-10
12-11
12-13
12-16
12-18
12-23
12-25
12-26
12-29
12-33
12-36
12-38
12-39
12-42
12-44
12-47
12-44
12-50
12-51
13-57
13-58
14-1
14-2
14-3
14-4
14-5
14-6
14-8
14-9
14-10
14-16
14-18
14-22
14-23
14-25
14-27
14-32
14-33
14-34

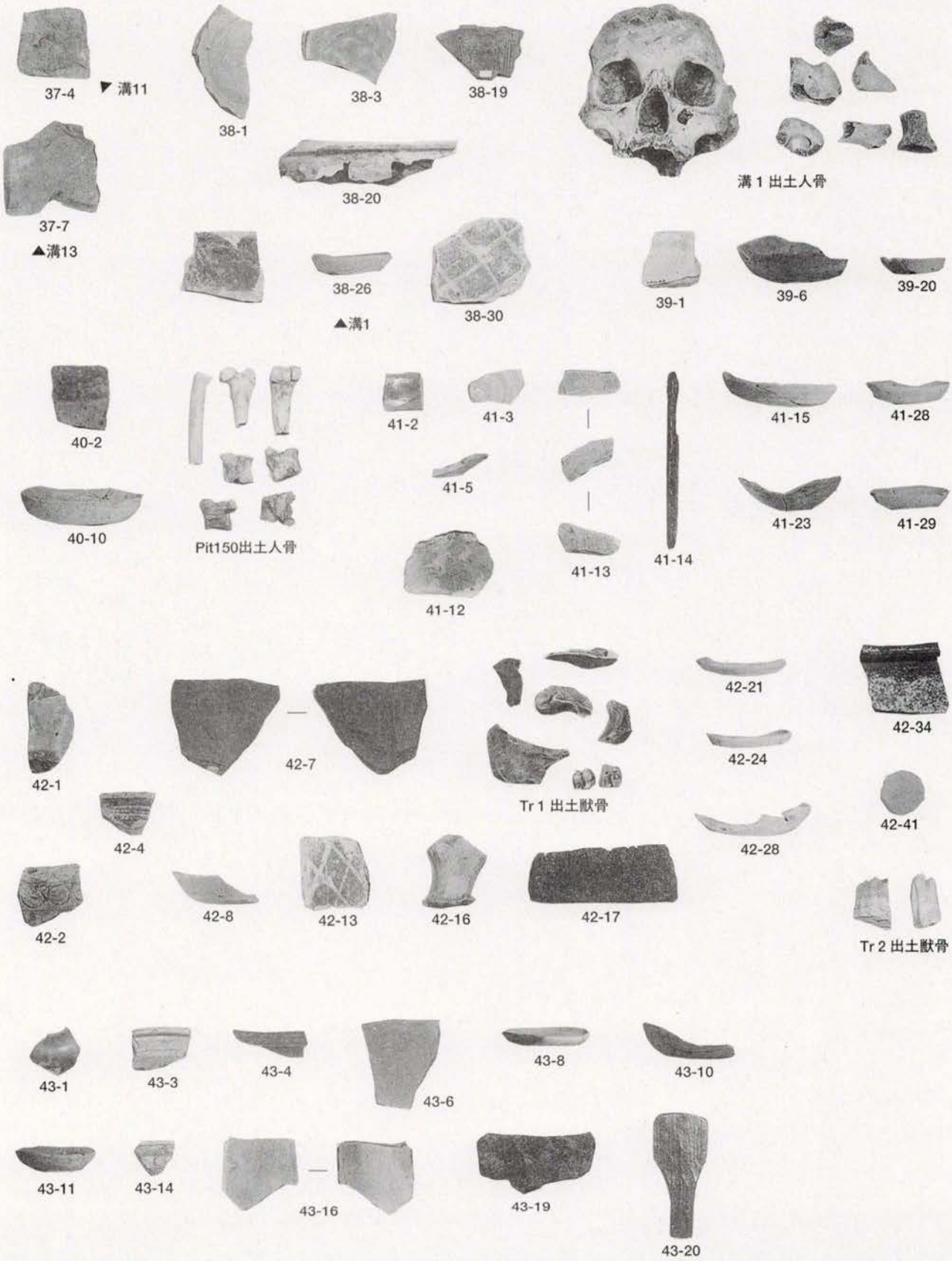
図版 7　出土遺物（1）


16-3
16-15
16-10
16-16
▶溝10
17-3
17-4
17-7
17-8
17-11
17-13
18-3
18-4
18-5
18-6
18-7
18-8
18-19
18-26
19-7
溝16出土獣骨
20-14
20-19
20-21
20-1
20-8
21-16
21-18
20-26
20-28
20-31
21-19
26-1
26-3
22-26
22-29
22-23
22-27
22-33
24-1
24-2
24-9
24-21
▲溝12
26-5
26-7
26-22
27-1
28-1
28-4
26-8
26-23
27-3
28-6
28-7
28-10
26-26
27-4
▲溝15b
28-15
溝15a出土獣骨

図版 8　出土遺物（2）


29-1
29-3
29-4
29-5
29-16
29-44
29-48
29-31
29-2
29-10
29-24
29-47
29-51
29-34
31-5
31-12
31-16
31-20
31-26
31-35
31-37
31-40
31-43
31-45
31-46
道路１・２面上出土状況
32-1
32-12
32-19
34-5
34-21
34-25
32-2
32-7
32-17
33-2
34-15
34-34
34-16
34-36
35-1
35-3
35-4
36-9
36-17
36-21
36-26
35-6
35-8
35-10
36-32
36-33
36-34
36-35
35-12
35-21
35-22
溝６出土獣骨
35-38
35-47
35-43
▲溝６

図版９　出土遺物（3）


37-4
▼溝11
38-1
38-3
38-19
38-20
37-7
▲溝13
溝1出土人骨
38-26
▲溝1
38-30
39-1
39-6
39-20
40-2
40-10
Pit150出土人骨
41-2
41-3
41-5
41-12
41-13
41-14
41-15
41-28
41-23
41-29
42-1
42-4
42-2
42-7
42-8
42-13
42-16
42-17
Tr 1 出土獣骨
42-21
42-24
42-28
42-34
42-41
Tr 2 出土獣骨
43-1
43-3
43-4
43-6
43-8
43-10
43-11
43-14
43-16
43-19
43-20

図版10 出土遺物（4）

図版10 (a) 陣屋土師 0T類図

材木座町屋遺跡（ざいもくざまちやいせき）　(No.261)

材木座一丁目921番５外地点

例　言

1. 本報は「材木座町屋遺跡（№261）」内、鎌倉市材木座一丁目921番５外地点における、個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成16年６月17日から６月30日まで実施した。調査面積は10.50㎡である。
3. 調査体制は以下の通りである。
   調査担当者：齋木秀雄
   調　査　員：押木弘己、根本睦子、鯉渕義紀
   調査作業員：安斉三男、北島清一、小口照男、田島道夫
4. 出土遺物の整理･報告書の作成は以下の分担で行った。
   執筆・編集：齋木秀雄、降矢順子
   実測・トレース：鯉渕義紀、村松彩美、加藤千尋
   図 版 作 成：降矢順子、加藤千尋、村松彩美
5. 本報告に使用した写真は遺構を齋木･根本･鯉渕が、遺物を三ツ橋正夫が撮影した。また、測量軸の移動･設定は押木弘己が行った。

目　次

本文目次

第1章　遺跡概観……265
第1節　調査地の位置と歴史的環境……265
第2節　周辺の調査……266
第3節　堆積土層……266
第4節　調査軸の設定……268

第2章　検出された遺構と遺物……268
第1節　1面の遺構と遺物……268
第2節　2面の遺構と遺物……271
第3節　3面の遺構と遺物……274
第4節　4面の遺構と遺物……277
第5節　古代の遺物……278

第3章　まとめ……279
第1節　周辺の地形……279

図版目次

図1　調査地点と周辺の遺跡……265
図2　堆積土層……267
図3　調査軸設定図……267
図4　1面全体図……268
図5　1面遺構……269
図6　1面遺構……270
図7　1面出土遺物……270
図8　2面全体図……271
図9　2面遺構……272
図10　2面遺構出土遺物……273
図11　3面全体図……275
図12　3面遺構・遺物……275
図13　3面出土遺物……276
図14　4面全体図……276
図15　4面遺構……277
図16　4面出土遺物……277
図17　古代遺物……278

写 真 目 次

図版１．１．元八満宮（南から）……280
２．石清水井（南から）……280
３．調査区設定状況（南東から）……280
４．1面全景（東から）……280
５．1面遺構28（ピット）（南から）……280
６．1面礎石①東西エレベーション（南東から）……280
７．2面全景（北から）……280
８．2面遺構32完掘状況（西から）……280
図版２．１．2面遺構32完掘状況（南から）……281
２．2面遺構32かわらけ出土状況（北西から）……281
３．2面30、31（西から）……281
４．3面遺構34、42、54東西セクション（南から）……281
５．3面全景（東から）……281
６．3面全景（南から）……281
７．3面34?漆器出土状況（南西から）……281
８．3面遺構43、45、49……281
図版３．１．3面遺構42全景（南から）……282
２．3面遺構42下層貝殻出土状況（南東から）……282
３．南壁セクション飛砂堆積状況（北から）……282
４．3面遺構55（溝）北壁セクション（南から）……282
５．3面遺構55（溝）南側木組検出状況（南から）……282
６．3面遺構42、56北壁セクション（南から）……282
７．最終確認面全景（東から）……282
８．最終確認面全景（東から）……282
図版４．出土遺物（1）……283
図版５．出土遺物（2）……284
図版６．出土遺物（3）……285

第１章　調査概観

第１節　調査地点の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市材木座一丁目921番５外にあり、材木座町屋遺跡の範囲内に含まれる。「材木座町屋遺跡」の範囲は北が横須賀線線路、西が滑川の東岸、東が幾つかの遺跡範囲と接しながら光明寺辺り、南が材木座の海岸部までの広大な面積を含んでいる。

現況に沿って説明すると、海抜7.20m前後の大町四つ角から逆川に向かって下り、逆川に架かる魚町橋辺りで海抜4.0m前後になる。魚町橋から横須賀線の踏み切りに向かっては上り勾配で、踏み切り辺りの海抜は８m前後である。横須賀線からはまた下り勾配になり、すぐ右手に「元八幡入り口」の標識と小道がある。調査地点はこの小道から材木座海岸に向かって２軒目にあたり、地表面レベルは6.20m前後を測り、道路よりやや低い。調査地点から90mほど南には横須賀海軍に水道を運ぶために造られた「水道路」があり、この辺りの地表面は6.50m前後である。調査地点と水道路の間には西に曲がって鎌倉ヒロ病院、滑川の閻魔橋を経て屈曲しながら若宮大路の旧浜の大鳥居前に至る道路（以下、バス通りという）がある。地表レベルは本地点南の曲がり角で6.50m前後、そこから緩やかに下ってヒロ病院前で4.40m前後、若宮大路旧鳥居前で4.50mほどである。調査地点は、現地形で見ると材木座三丁目一帯

図１　調査地点と周辺の遺跡

に広がる海抜３mから４mの低地北側の微高地に位置している。

調査地点周辺の歴史的環境を見ると、本地点から北に向かって横須賀線踏切を越えたすぐ左手には辻の薬師堂がある。もと長善寺の本尊であった薬師如来と日光・月光・十二神将を安置している。長善寺は古義真言宗で医王山長善寺と号し、名越の字御嶽にあったが大町・辻町に遷ったという。本堂は今の横須賀線の線路辺りにあったが開通に当たって取り払われたという。寺伝には染谷時忠の建立といい、元亀年中（1570～73）の創建とされる。しかし、『相模国風土記稿』では元亀は神亀（724～729)の誤りであろうとされている。なお、染谷時忠は神亀年中まで鎌倉に居住したとされる、鎌倉の始祖的人物で、生没年不詳である。屋敷は甘縄神明社南の長者久保にあったと伝わる。現在、鎌倉青年団の建立した「染谷時忠邸跡の碑」は鎌倉文学館前の交差点から江ノ電由比ヶ浜駅に向かう道路中程にある。

調査地点西には源頼義が康平六年（1063)に岩清水八幡宮を勧請した由比若宮がある。由比若宮は源義家が永保元年（1081）に修復を加え、源頼朝は治承元年（1180）にこの社を、現在地である小林郷北山に遷して、鶴岡八幡宮を創建している。現在も鶴岡八幡宮の境外末社で元八幡の名称で親しまれている。不確定要素もあるが、頼朝が鎌倉に入る以前からの生活が考えられる地域である。

第２節　周辺の調査

本地点と横須賀線との間ではあまり調査がされていないが、前出のバス通り沿いでは調査例が増加している。最も早く調査された、本地点西90mのバス通り南側に位置する材木座一丁目114番３地点（図中地点２、７）では現地表4.80m前後で、海抜3.40m前後に中世基盤層の黄褐色砂層が堆積し、その上の遺構確認面から土坑、井戸、溝などが確認され、13世紀前半から14世紀の年代が考えられている。次いで調査された、道路を挟んだ北側に位置する材木座1-890-７地点（図中地点３、16-１）では中世地山が3.5m前後で確認され、14世紀代を中心とする遺構が確認されている。地点３の250m西の材木座一丁目910番地点（図中地点４）では13世紀前半から始まる道路、溝、方形土坑等の中世遺構群と８世紀頃の大型掘立柱建物が確認されている。

地点３の道路を挟んだ南側では連続して３箇所（地点５～地点７）の調査が実施されている。いずれも13世紀前半から生活が始まり、地点５では15世紀のかわらけがまとまって廃棄された土坑が確認されている。遺跡範囲内東端近くに位置する材木座二丁目217番６外地点（地点８、11-２）では、14世紀の生活面が中心であるが、本地点に類似する飛砂が7.4m前後で確認され、その下の遺構覆土から13世紀前半の京都系手づくねかわらけなどが出土している。また、土師器や須恵器も出土しており、遺構は確認されていないものの、中世以前の生活も十分に考えられる。

試掘調査の地点９では現地表6.0m前後で、40㎝程の現代造成土を除くと白褐色砂層になり、15世紀のかわらけが出土する土坑が確認されている。この砂層は中世の地山より下で確認される土層であり、中世地山以上の堆積はすべて失われていることになる。地点10では海抜5.80m前後の黄白色砂層まで削平を受け、その後横須賀線にあわせた造成が行われていることが確認できている。

第３節　堆積土層

本地点では、約１mの間で７層の堆積土を確認した。中世の包含層を細分しないと以下の通りになる。堆積土はきわめて特徴的で、第５層の砂層（飛砂）をはさんで上下に中世遺物の包含層と遺構が存在し、その下には中世以前の包含層が堆積している。この堆積は、由比ガ浜地域の調査で確認される状況と似ている。由比ガ浜地域では、飛砂の堆積は13世紀前半頃と考えられており、本地点でもそれと整合するような遺物の出土が認められる。

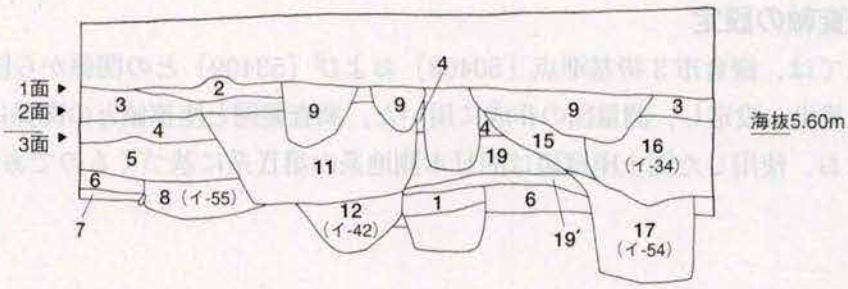
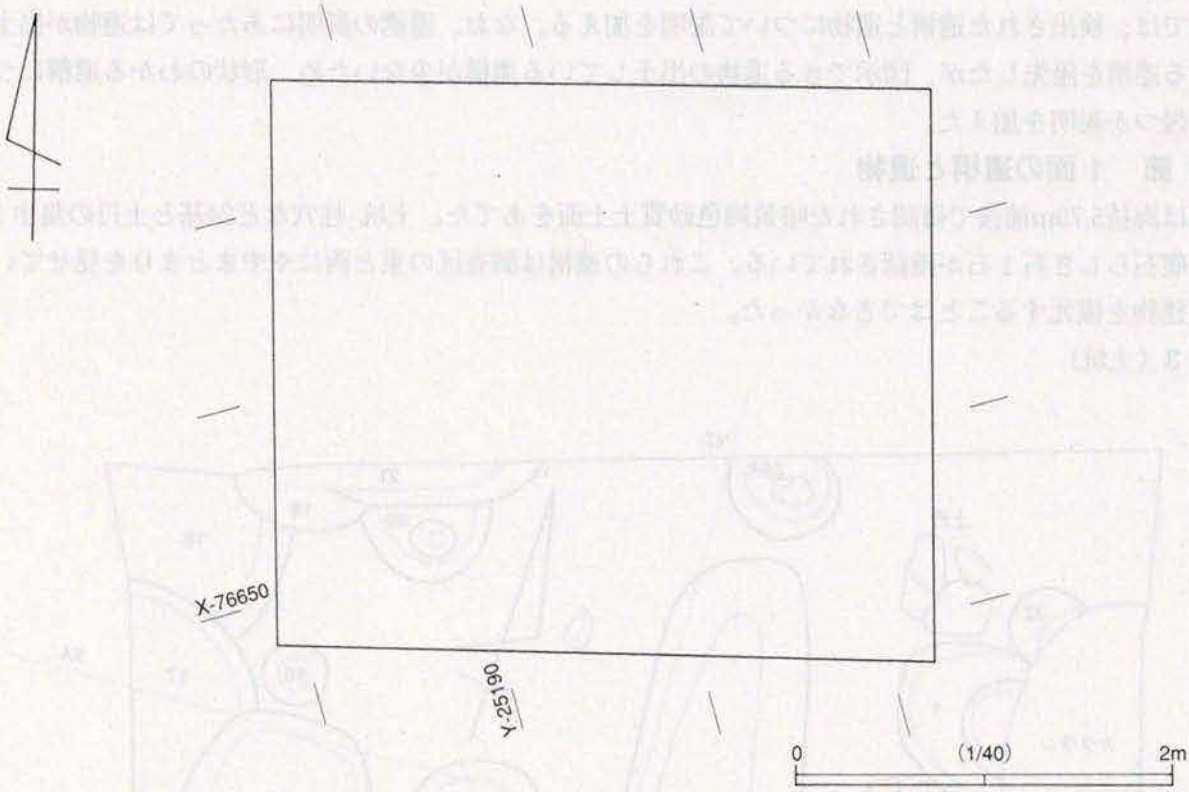


図２　堆積土層



土説

1．造成土
2．暗褐色砂質土　φ5㎜以下の土丹粒少々含む。粘性、締りあり。
3．暗褐色砂質土　φ5㎜以下の土丹粒、炭化物含む。粘性、締りやや弱い。
4．暗褐色砂質土　砂粒子細かく、貝殻細片少々含む。粘性、締り弱い。
5．暗黄褐色砂質土　上層より砂粒子荒く、貝殻細片、炭化物微量含む。粘性なし、締あり。
6．暗褐色砂質土　貝殻細片含む。粘性なし、締りあり。
7．黒褐色砂質土　きめ細かい砂粒、締りあり。
8．暗褐色砂質土　貝殻細片、木片含む。粘性なし、締りあり。（造55）
9．暗褐色粘質土　φ1㎝以下の土丹粒。砂質土、炭化物を含む。粘性、締りあり。
10．暗褐色砂質土　上層に土丹粒少々、下層に貝殻細片、炭化物含む。
11．暗褐色砂質土　貝殻細片多く、炭化物、細かい土丹粒含む。
12．暗褐色砂質土　青土丹粒少量含む。木片上層に含む（造桶42）
13．暗褐色砂質土　黄褐色砂多く含み、締りあり。
14．暗褐色砂質土　黒味帯びる。水分を多く含む。締りあり。
15．暗灰褐色砂質土　やや粗砂、細かい土丹粒微量、締りあり。
16．暗褐色粘質土　15層の砂混入、貝殻細片微量締り弱い。（造34）
17．暗褐色砂質土　木片、貝殻細片少量含む。砂粒きめ細かい粘性あまりなく締りあり。（造54）

図３　調査軸設定図

第１層　表土・造成土

第２層　近世耕作土。海抜5.90m。

第３層　遺構覆土・生活面

第４層　やや黄色を帯びた暗褐色砂層。砂の版築面か。5.70m。１面

第５層　黄褐色砂層。飛砂、13世紀前半の堆積か。5.60m。２面

第６層　暗褐色砂質土。貝殻細片と中世遺物を含む。5.40m。３面

第７層　黒褐色砂質土。中世以前の遺物を含む。中世地山。5.30m。４面

第４節　調査軸の設定

調査に当たっては、鎌倉市３級基準点〔50408〕および〔53409〕との関係から国土座標軸に基づいた調査基準軸を算出・設定し、測量図の作成に用いた。調査範囲と座標値との関係は、図３に示したとおりである。なお、使用した国土座標値は旧日本測地系の第Ⅸ系に基づくものである。

第２章　検出された遺構と遺物

本章では、検出された遺構と遺物について説明を加える。なお、遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先したが、図示できる遺物の出土している遺構が少ないため、形状のわかる遺構については幾つか説明を加えた。

第１節　１面の遺構と遺物

１面は海抜5.70m前後で確認された暗黄褐色砂質土上面をあてた。土坑･柱穴など24基と土丹の集中３箇所、礎石らしき石１石が確認されている。これらの遺構は調査区の東と西にややまとまりを見せているが、建物を復元することはできなかった。

遺構３（土坑）

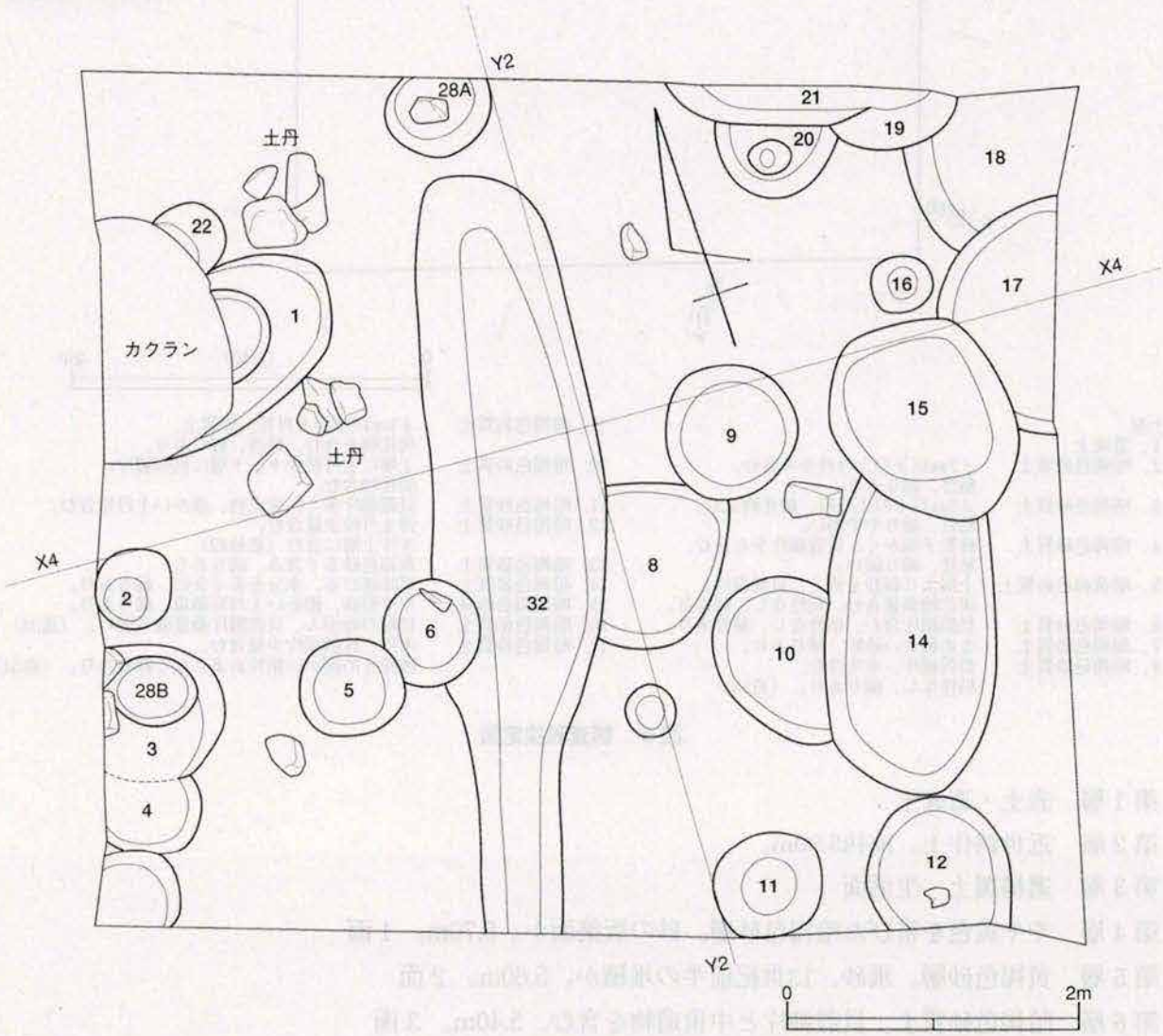


図４　１面全体図

調査区の北壁際で検出された。一部は調査区外に延びる。２基の遺構が切りあっているように見えたが、区別はできなかった。平面形は円形ないし楕円形で、確認規模は東西50㎝、南北43㎝、深さ28㎝、底面レベル5.46mを測る。

出土遺物は少なく、図-１、２の２点が図示できた。１は黒縁瓦器質碗の口縁部から体部片、２は滑石で作られた上半身の人形で、侍烏帽子が表現されている。図示した遺物のほかに常滑甕片１点、かわらけ糸切り大皿55ｇ、打ち欠きかわらけ皿１点、瓦片１点が出土している。

遺構11

調査区の南東部x2、y2で検出された。平面形はほぼ円形で東西40㎝、南北43㎝、深さ22㎝、底面レベル4.79mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構14

調査区東側のx3、y2辺りで検出され、北側を遺構15に壊されている。平面形は南北方向に長い楕円形で、確認規模は東西60㎝、南北112㎝、深さ10㎝、底面レベル4.88mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構15

調査区東側のx3、y3辺りで検出された。南で遺構14の一部を壊し、北で遺構17を壊している。平面形は不整楕円形で、確認規模は東西74㎝、南北61㎝、深さ11㎝、底面レベル4.86mを測る。遺構確認中に図　に示した銅鏡が出土しているが、出土地点が本址と遺構17の切り合い部で層位が明確でなかったため、面上出土遺物に含めた。したがって、本址には図示できる出土遺物はない。

遺構35（土坑）遺構32

調査区中央南から北に向かって延びる溝状土坑で、北は調査区内で収束し、南は調査区外に延びている。確認規模は東西長2.70mで、南は狭いが北ではやや膨らんで幅が広い。上幅は北側部分で70㎝弱、南で28㎝、深さは北で17㎝、南で13㎝、底面レベルは北で4.63m、南で4.74mを測る。流れていた方向は、調査区内のレベルではつかめないが、溝状土坑であれば流れが無いので良いのかもしれない。　出土遺物は比較的多いが、図３～７の５点が図示できたにとどまった。３～６はかわらけ皿、３は小皿で口縁部全体に煤が付着して灯明皿として使用された痕跡を残している。４～６は大皿。７は加工痕のある動物骨。図示した遺物のほかに龍泉窯青磁蓮弁文碗片1点、青磁合子蓋１点、常滑壺２点、常滑甕

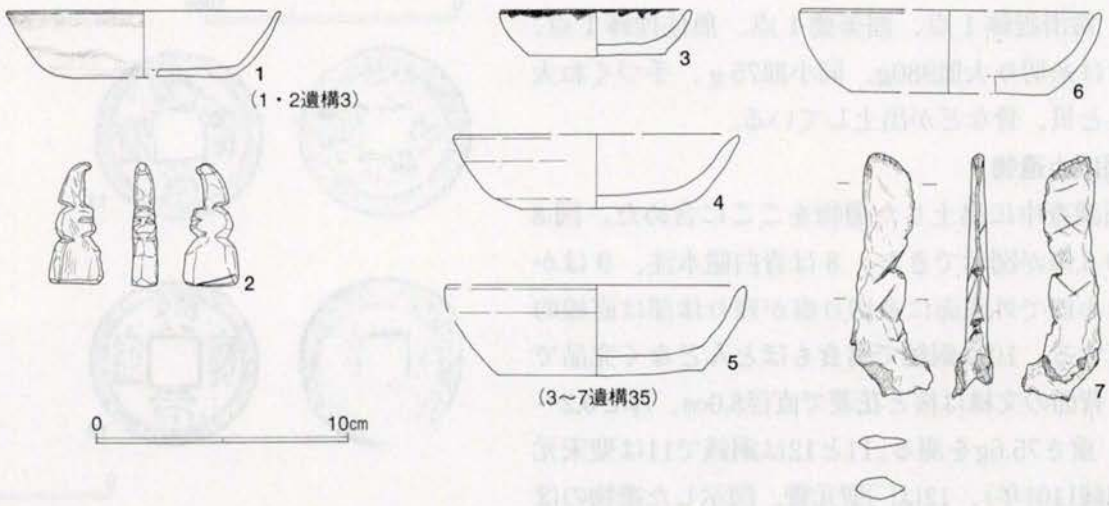


図５　１面遺構

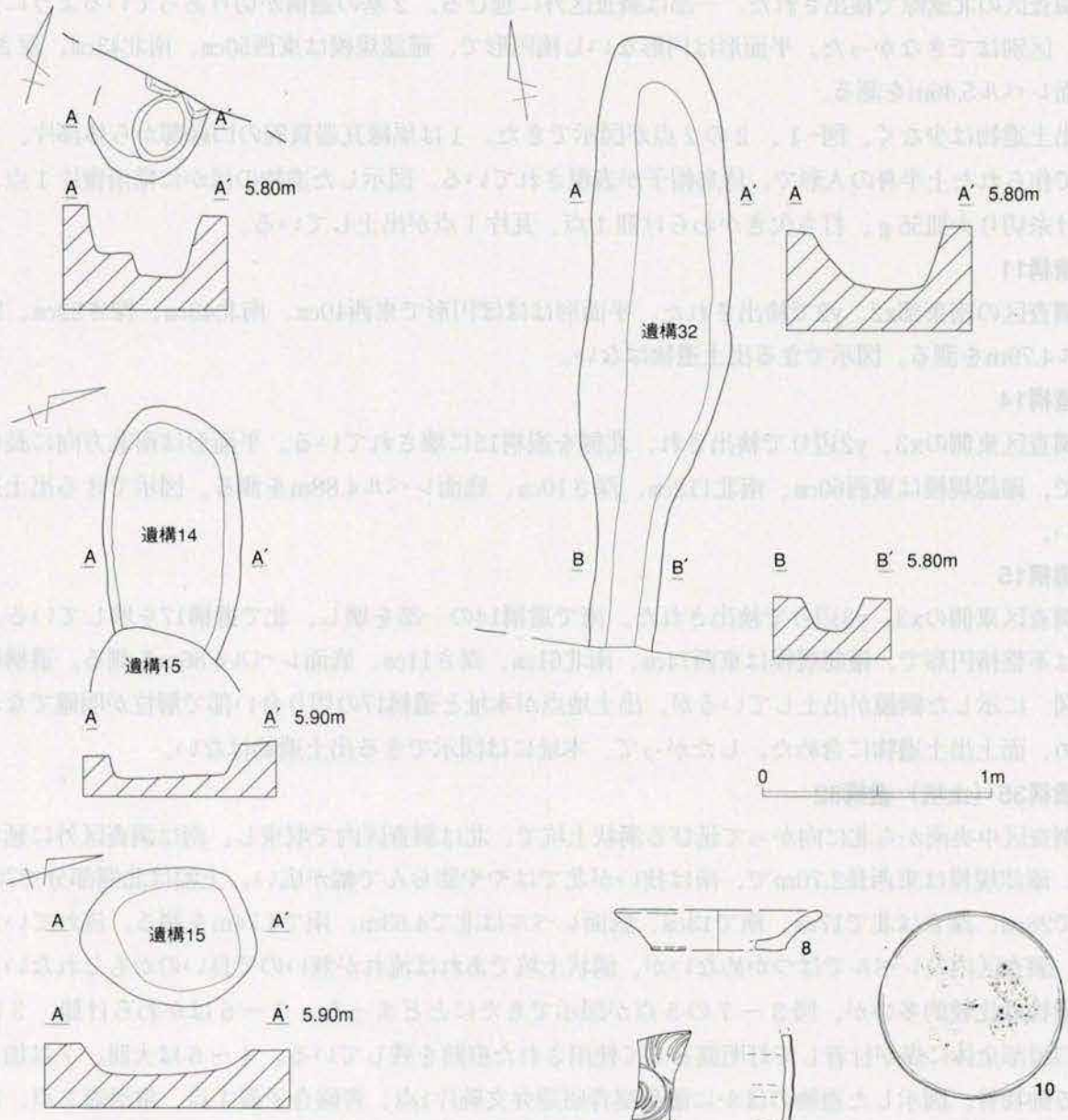


図6　1面遺構

図7　1面出土遺物

10点、常滑捏鉢1点、渥美甕1点、魚住捏鉢1点、かわらけ糸切り大皿980g、同小皿75g、手づくね大皿35gと貝、骨などが出土している。

1面出土遺物

1面調査中に出土した遺物をここに含めた。図8～12の5点が図示できた。8は青白磁水注、9はかわらけ小皿で外底面に糸切り痕が残り体部は直線的に外反する。10は銅鏡で腐食もほとんどなく完品である。背面の文様は桜と花菱で直径8.0㎝、厚さ0.2～0.3㎝、重さ75.6gを測る。11と12は銅銭で11は聖宋元寶（初鋳1101年）、12は□聖元寶。図示した遺物のほかに龍泉窯青磁蓮弁文碗3点、無文碗2点、青白磁

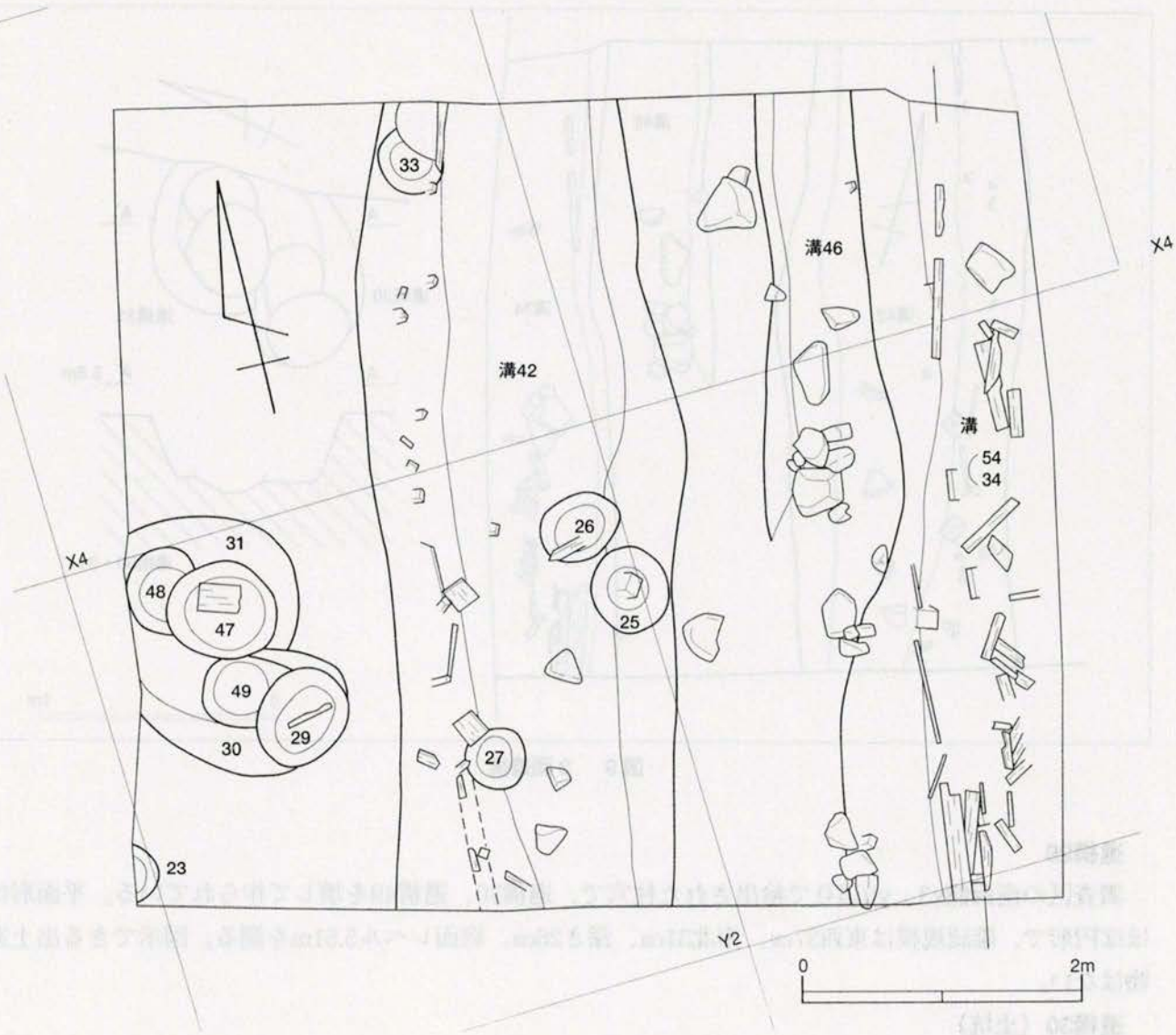


図８　２面全体図

梅瓶１点、白磁口兀皿２点、瀬戸灰釉壺１点、同灰釉碗２点、同折縁鉢１点、同片口鉢１点、瀬戸･美濃系擂鉢鉢２点、常滑甕40点、同捏鉢１点、渥美甕３点、手焙り２点、山茶碗窯系捏鉢６点、石製品（転用）１点、砥石１点、火打石１点、かわらけ糸切り大皿600ｇ、同小皿10ｇ、手づくね大皿80ｇ、同小皿15ｇ、古手糸切り10ｇ、スラグ、貝、骨などが出土している。

第２節　２面の遺構と遺物

２面では南北方向の溝２条と浅い溝状の落ち込み１条、礎石らしき鎌倉石や安山岩が確認されている。遺構の密度はあまり高くない。

遺構25

調査区中央に近いx3、y1辺りで検出された柱穴である。遺構42より新しい。平面形は円形で、確認規模は東西28㎝、南北33㎝、深さ31㎝、底面レベル5.50mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構26

遺構25の北西に接するように検出された柱穴である。遺構42より新しい。平面形はやや楕円形を呈し、確認規模は東西31㎝、南北28㎝、深さ23㎝、底面レベル5.50mを測る。図示できる出土遺物はない。

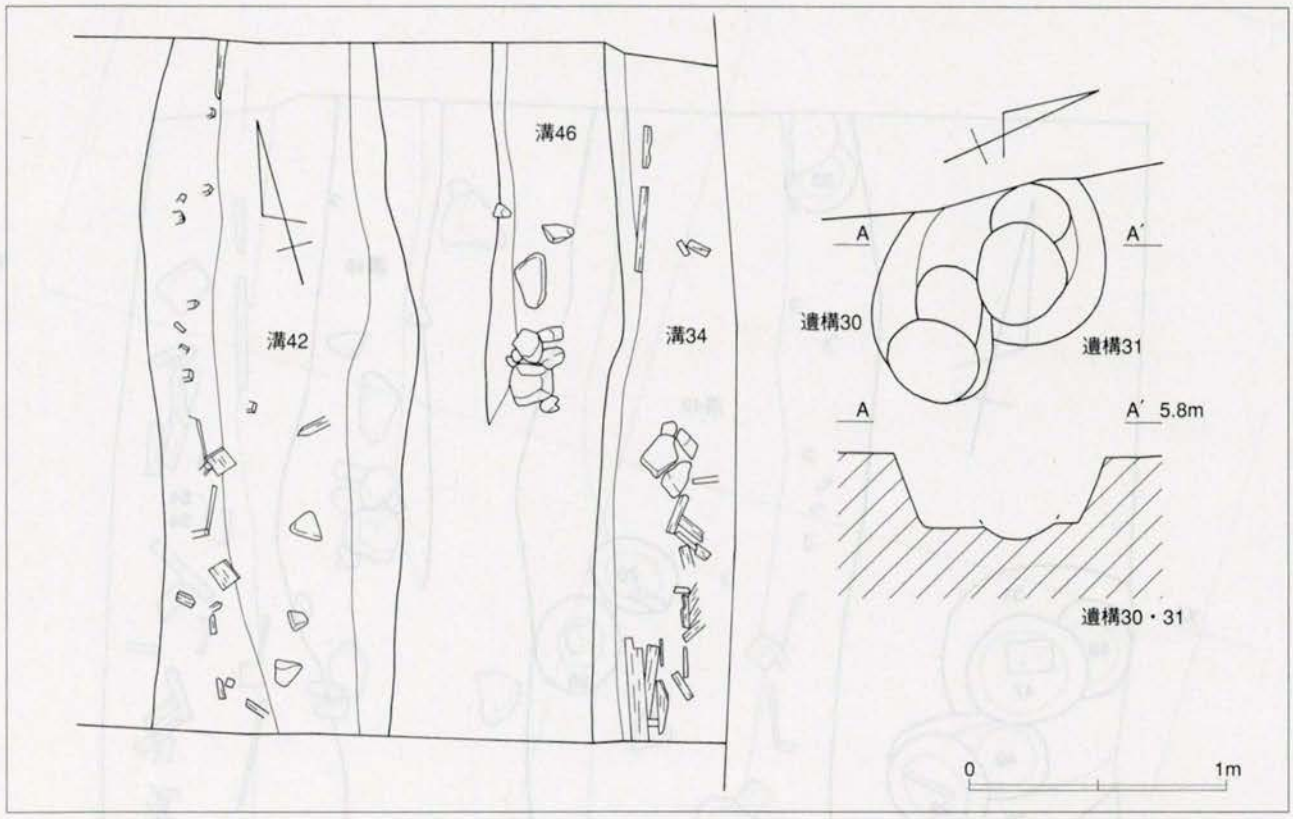


図９　２面遺構

遺構29

調査区の南西側x3、y0辺りで検出された柱穴で、遺構30、遺構49を壊して作られている。平面形はほぼ円形で、確認規模は東西37㎝、南北31㎝、深さ26㎝。底面レベル5.51mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構30（土坑）

調査区西壁のx3、y0で検出された。一部は調査区外西に延び、遺構29、遺構47～49に壊され、遺構31との関係は不明。平面形は不整楕円形で、確認規模は東西85㎝、南北46㎝、深さ11㎝、底面レベル5.38mを測る。

出土遺物は図13～15の３点が図示できた。13は龍泉窯青磁画花文碗、14は手づくねかわらけ小皿、15は糸切りかわらけ小皿。図示した遺物のほかに常滑甕２点、かわらけ糸切り大皿145ｇ、手づくね小皿22ｇ、貝、骨などが出土している。

遺構34、54（溝）

調査区の東壁に沿って検出された木組みを伴う溝である。調査区内に西側の掘り込み壁と木組みがあり、東側の掘り込み壁上部は調査区外にあって確認できなかったが北側で底面近くの掘り込み壁の一部が確認されている。調査区の南と北に延びている。溝の掘り込みは南側でやや曲線的になるが確認規模で上幅65㎝、底部幅40㎝、調査区北壁での深さ80㎝を測る。底面レベルは4.80m前後で南側がやや低くなっている。断面形は逆台形と思われる。

木組みは、背面から調査したこともありやや不鮮明であるが、角杭の後に横方向の羽目板が付く構造と思われる。角杭は４本確認できた。何れも板材で幅10.5㎝～13.5㎝、厚さ2.0㎝～3.5㎝、長さ26㎝～41㎝で海抜5.40m前後の高さに揃えてある。杭間の距離は北から35㎝、20㎝、40㎝で確認できた溝肩より20㎝ほど低い。溝の方向はN－17°－Eを測る。

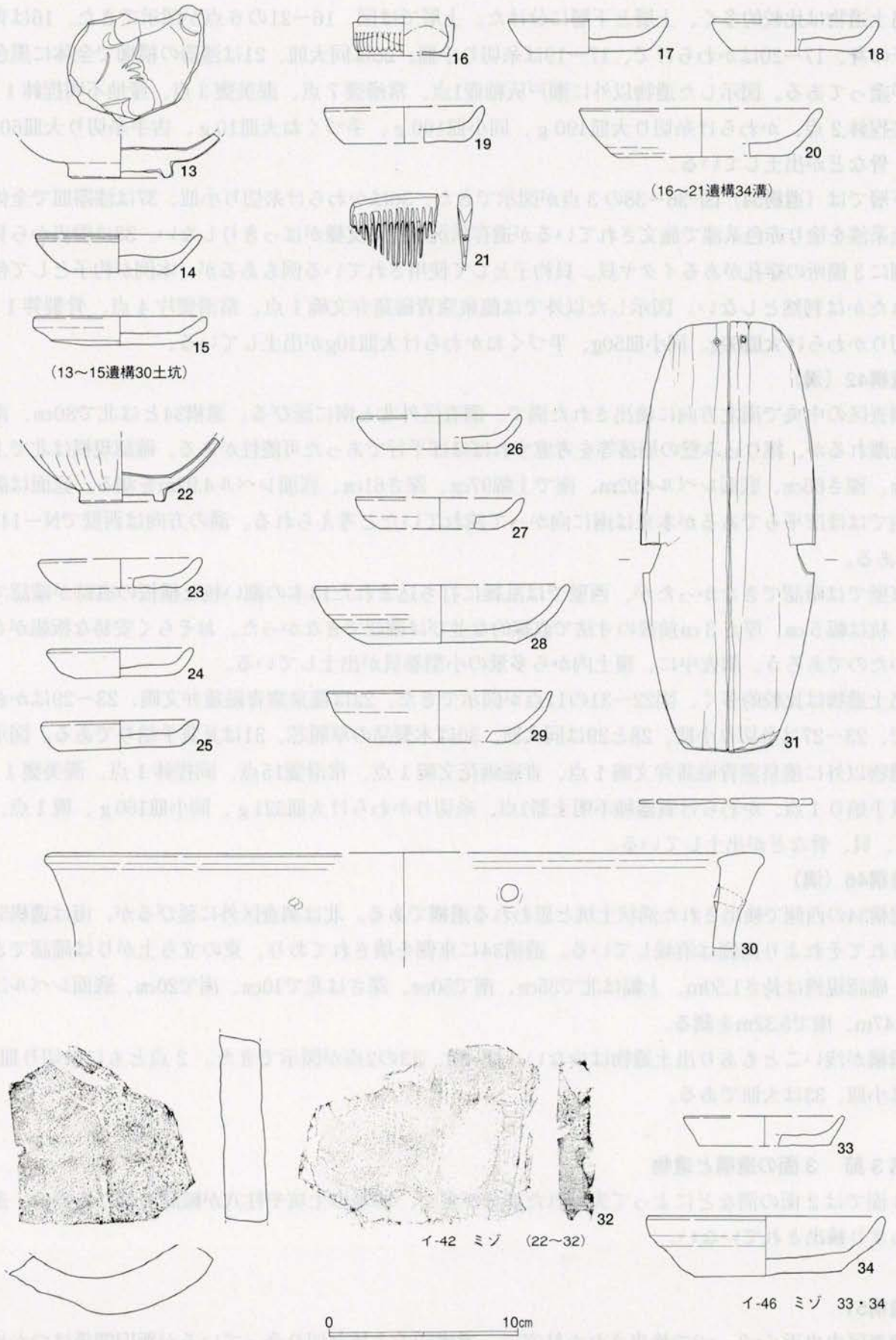


図10 2面遺構出土遺物

出土遺物は比較的多く、上層と下層に分けた。上層では図　16～21の６点が図示できた。16は青磁合子の身、17～20はかわらけで、17～19は糸切り小皿、20は同大皿、21は漆器の横櫛で全体に黒色系漆が塗ってある。図示した遺物以外に瀬戸灰釉壺1点、常滑甕７点、渥美甕３点、産地不明捏鉢１点、魚住捏鉢２点、かわらけ糸切り大皿490ｇ、同小皿100ｇ、手づくね大皿10ｇ、古手糸切り大皿60ｇ、貝、骨などが出土している。

下層では（遺構54）図-36～38の３点が図示できた。36はかわらけ糸切り小皿、37は漆器皿で全体に黒色系漆を塗り赤色系漆で施文されているが遺存状況が悪く文様がはっきりしない。38は殻表から見た左側に３箇所の穿孔があるイタヤ貝。貝杓子として使用されている例もあるが、本例が杓子として使用されたかは判然としない。図示した以外では龍泉窯青磁蓮弁文碗１点、常滑甕片４点、骨製笄１点、糸切りかわらけ大皿60g、同小皿50g、手づくねかわらけ大皿10gが出土している。

遺構42（溝）

調査区の中央で南北方向に検出された溝で、調査区外北と南に延びる。遺構34とは北で80㎝、南で65㎝離れるが、掘り込み壁の崩落等を考慮すればほぼ平行であった可能性がある。確認規模は北で上幅85㎝、深さ66㎝、底面レベル4.92m、南で上幅97㎝、深さ61㎝、底面レベル4.92mを測る。底面は調査区内ではほぼ平らであるが本来は南に向かって流れていたと考えられる。溝の方向は西壁でN－14°－Eである。

東壁では確認できなかったが、西壁では乱雑に打ち込まれた13本の細い杭と横板の痕跡が確認できた。杭は幅５㎝、厚さ３㎝前後の寸法で直線的な並びは確認できなかった。おそらく安易な板組がされていたのであろう。調査中に、覆土内から多量の小型巻貝が出土している。

出土遺物は比較的多く、図22～31の11点が図示できた。22は龍泉窯青磁蓮弁文碗、23～29はかわらけで、23～27は糸切り小皿、28と29は同大皿、30は木製品の草履芯、31は瓦質手焙りである。図示した遺物以外に龍泉窯青磁蓮弁文碗１点、青磁画花文碗１点、常滑甕15点、同捏鉢１点、渥美甕１点、瓦質手焙り１点、かわらけ質器種不明土器1点、糸切りかわらけ大皿321ｇ、同小皿160ｇ、硯１点、瓦１点、貝、骨などが出土している。

遺構46（溝）

遺構34の西側で検出された溝状土坑と思われる遺構である。北は調査区外に延びるが、南は遺構55に壊されてそれより南側は消滅している。遺構34に東側を壊されており、東の立ち上がりは確認できない。確認規模は長さ1.50m、上幅は北で35㎝、南で50㎝、深さは北で10㎝、南で20㎝、底面レベルは北で5.47m、南で5.32mを測る。

遺構が浅いこともあり出土遺物は少ない。図-32、33の2点が図示できた。２点ともに糸切り皿で、32は小皿、33は大皿である。

第３節　３面の遺構と遺物

３面では２面の溝などによって失われた部分が多く、15基の土坑や柱穴が確認されたものの、遺構はあまり検出されていない。

遺構51

調査区中央近くx3、y2で検出された柱穴で、遺構52の土坑と切り合っているが新旧関係はつかめなかった。平面形は円形で、確認規模は東西18㎝、南北20㎝、深さ17㎝、底面レベル5.30mを測る。

出土した遺物は少なかったが、図-34の１点が図示できた。34は糸切りかわらけ小皿である。

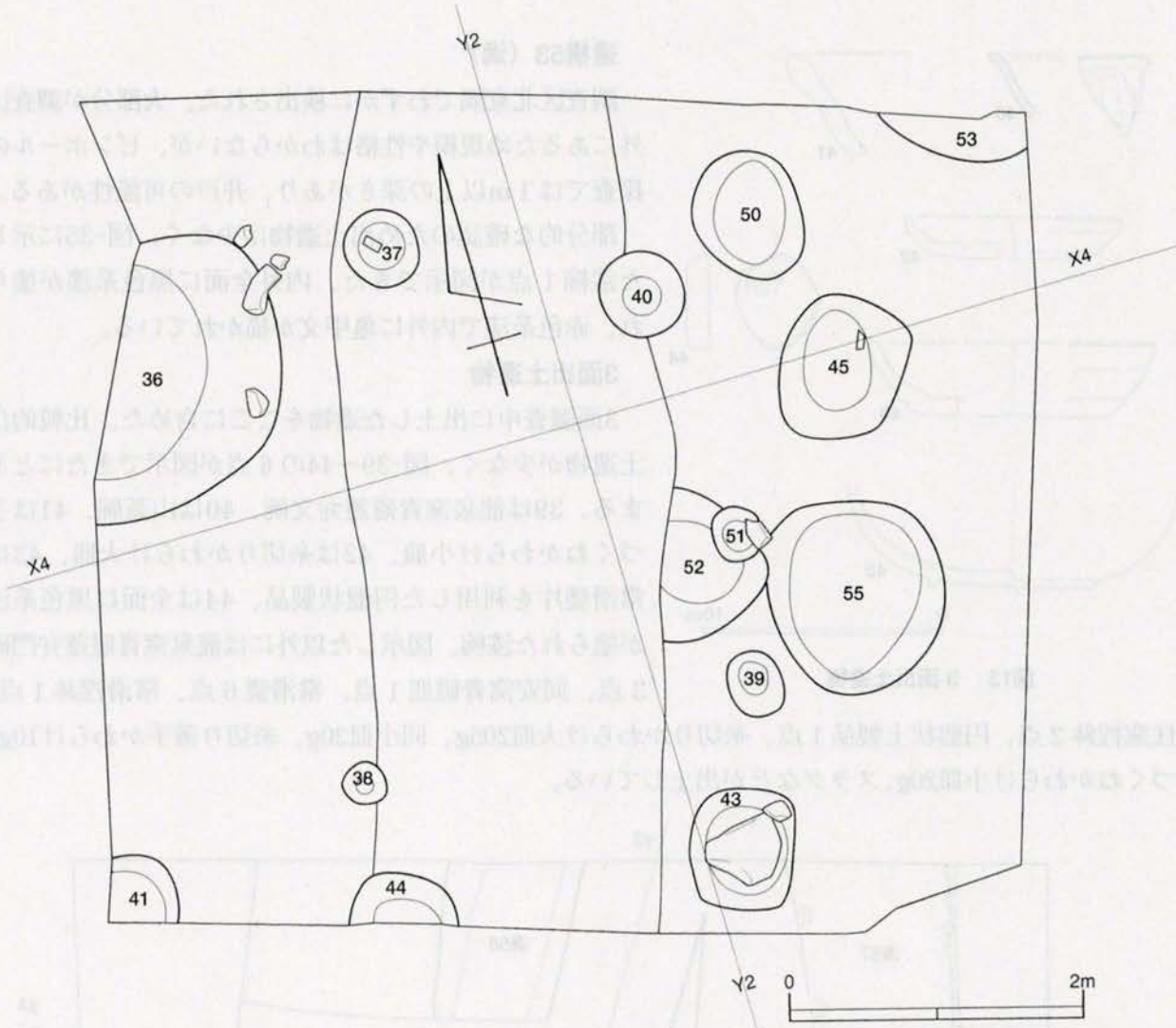


図11　3面全体図

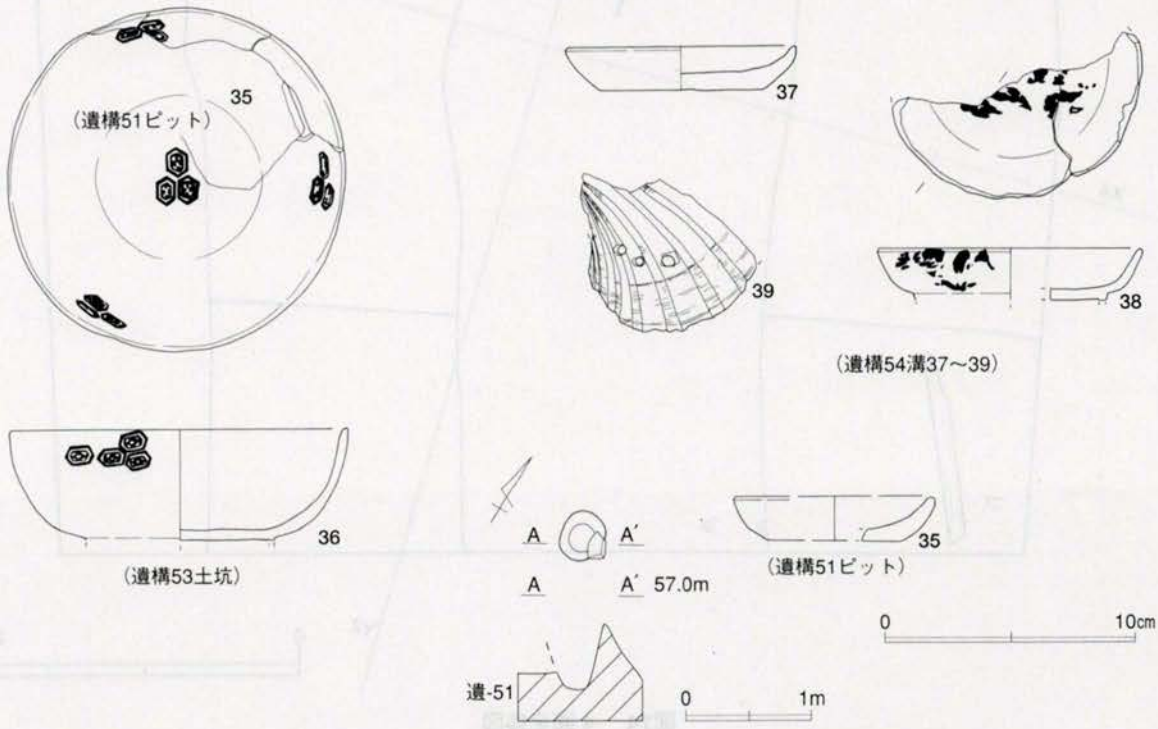


図12　3面遺構・遺物

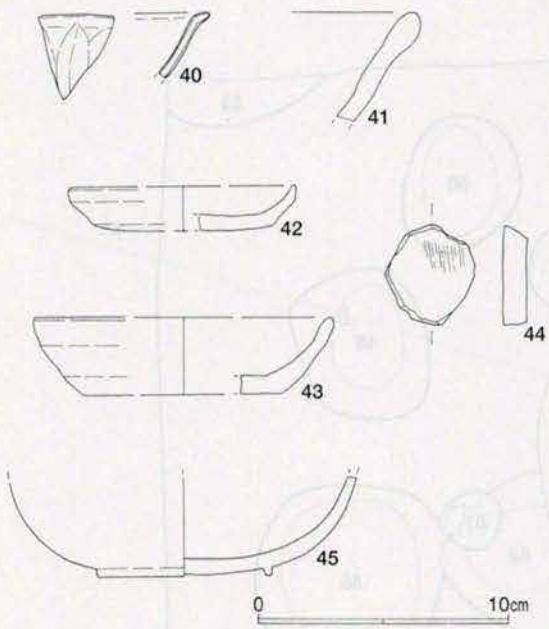


図13　3面出土遺物

遺構53（溝）

調査区北東隅でわずかに検出された。大部分が調査区外にあるため規模や性格はわからないが、ピンポールの探査では1m以上の深さがあり、井戸の可能性がある。

部分的な確認のため出土遺物は少なく、図-35に示した漆椀1点が図示できた。内外全面に黒色系漆が塗られ、赤色系漆で内外に亀甲文が描かれている。

3面出土遺物

3面調査中に出土した遺物をここに含めた。比較的出土遺物が少なく、図-39～44の6点が図示できたにとどまる。39は龍泉窯青磁蓮弁文碗、40は山茶碗、41は手づくねかわらけ小皿、42は糸切りかわらけ大皿、43は常滑甕片を利用した円盤状製品、44は全面に黒色系漆が塗られた漆椀。図示した以外には龍泉窯青磁蓮弁門碗3点、同安窯青磁皿1点、常滑甕6点、常滑捏鉢1点、魚住窯捏鉢2点、円盤状土製品1点、糸切りかわらけ大皿205g、同小皿20g、糸切り薄手かわらけ10g、手づくねかわらけ小皿20g、スラグなどが出土している。

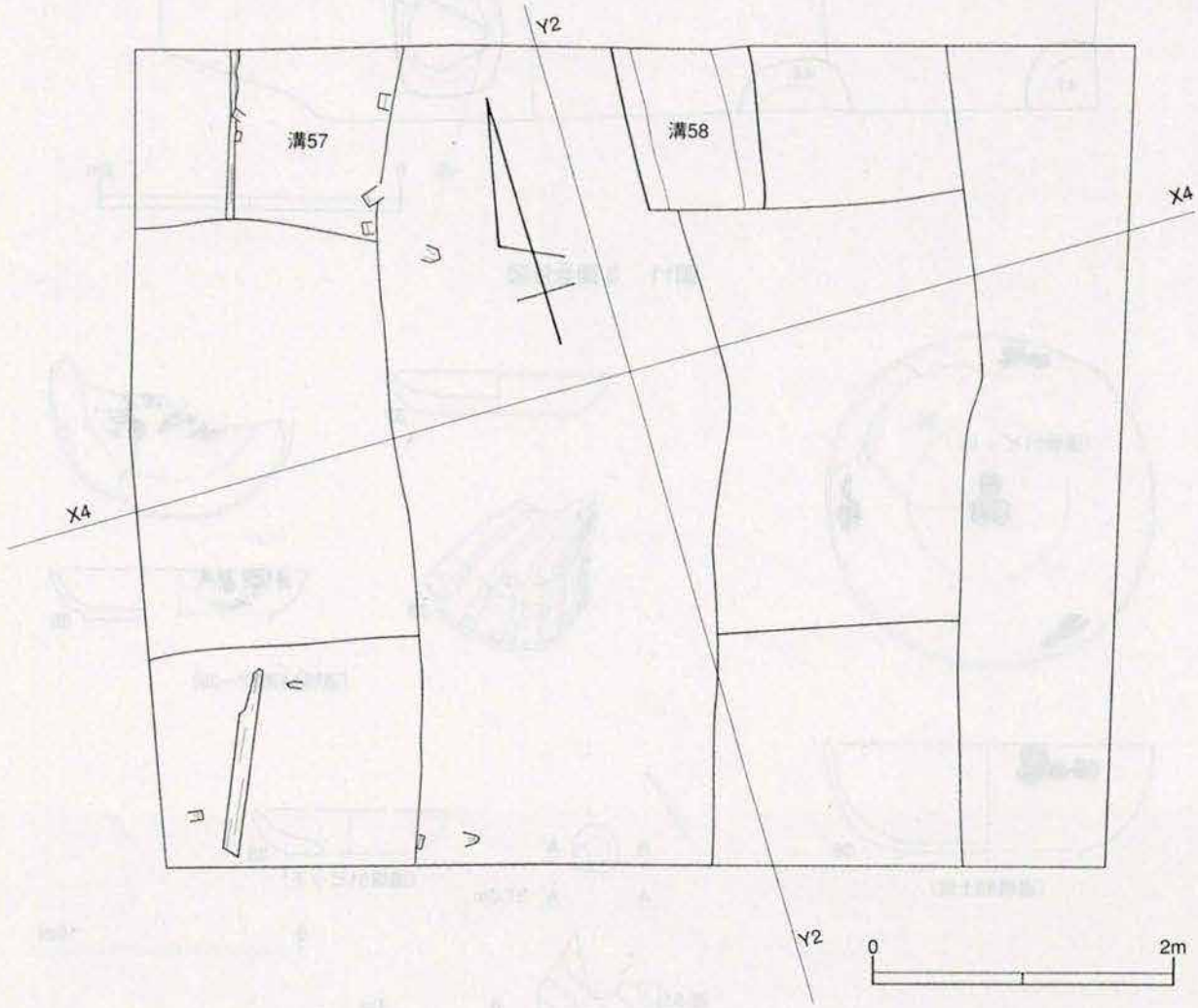


図14　4面全体図

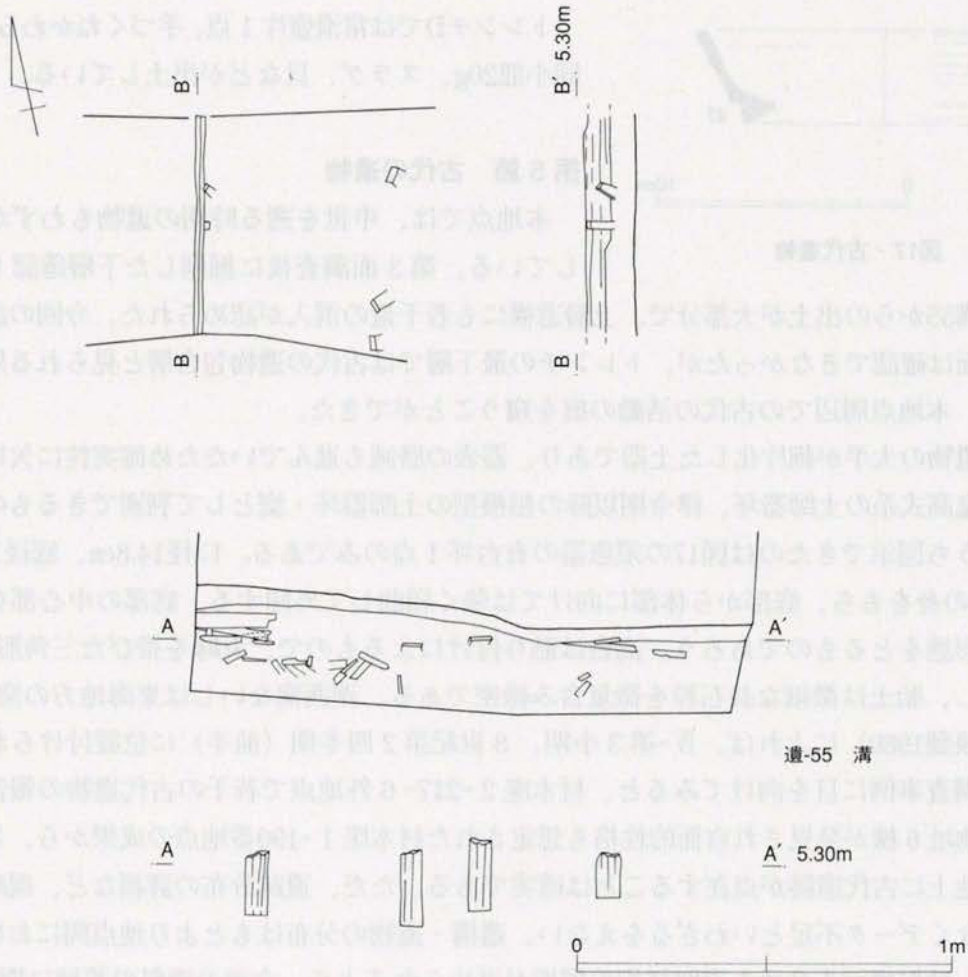


図15　4面遺構

第4節　4面の遺構と遺物

下層の堆積を確認するために調査区内4箇所に設定したトレンチで確認した遺構を4面に含めた。時間的な制約があって調査区全面の調査をしていないが、土留め状の木組み遺構などが確認できた。

4面出土遺物

4箇所のトレンチから少量の遺物が出土したが、図示できたのは図　に示したCトレンチ出土の手ずくねかわらけ1点である。墨書が底面にあるが判読不明。

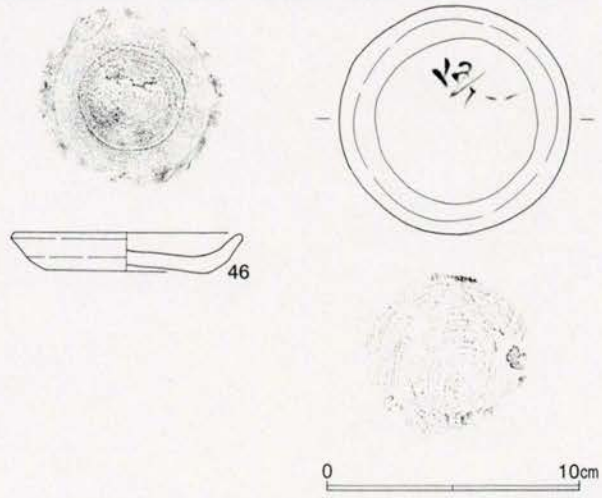


図16　4面出土遺物

この他にトレンチAでは瀬戸入子1点、手づくねかわらけ大皿70g、同小皿10g、貝などが出土している。

トレンチBでは龍泉窯青磁蓮弁文碗1点、山茶碗1点、手づくねかわらけ大皿65g、初期糸切りかわらけ1点、古代土器片3点、貝などが出土している。

トレンチCでは龍泉窯（同安窯）青磁劃花文碗1点、手づくねかわらけ大皿75g、古代土器片2点、貝などが出土している。

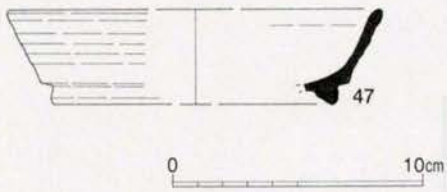


図17　古代遺物

トレンチDでは常滑壺片１点、手づくねかわらけ大皿50g、同小皿20g、スラグ、貝などが出土している。

第５節　古代の遺物

本地点では、中世を遡る時期の遺物もわずかながら出土している。第３面調査後に掘削した下層確認トレンチおよび第４面遺構55からの出土が大部分で、上層遺構にも若干量の混入が認められた。今回の調査では古代以前の遺構面は確認できなかったが、トレンチの最下層では古代の遺物包含層と見られる黒褐色砂質土が確認され、本地点周辺での古代の活動の痕を窺うことができた。

出土した遺物の大半が細片化した土器であり、器表の磨滅も進んでいたため確実性に欠けるが、古墳時代後期の鬼高式系の土師器坏、律令期以降の相模型の土師器坏・甕として判別できるものが主体であった。このうち図示できたのは図17の須恵器の有台坏１点のみである。口径14.8㎝、底径11.0㎝、器高3.7㎝。箱形の身をもち、底部から体部に向けては強く屈曲して外傾する。底部の中心部を欠くが、おそらく平底形態をとるものであろう。高台は貼り付けによるもので、丸味を帯びた三角形状を呈する。暗灰色を呈し、胎土は微細な長石粒を微量含み緻密である。湖西窯ないしは東海地方の窯産であろう。湖西編年（後藤1989）によれば、Ⅳ-第３小期、８世紀第２四半期（前半）に位置付けられようか。

周辺での調査事例に目を向けてみると、材木座２-217-６外地点で若干の古代遺物の報告があり、また掘立柱建物址６棟が発見され官衙的性格も想定された材木座１-190番地点の成果から、本地点を含む砂丘の微高地上に古代遺跡が点在することは確実である。ただ、遺跡分布の詳細など、現時点では調査例自体が少なくデータ不足といわざるをえない。遺構・遺物の分布はもとより地点間における基本堆積の差違など、地形復元も含めた遺跡様相の把握が進められるよう、今後の資料の蓄積に期待したい。

参考文献

後藤建一　1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』本文編　静岡県教育委員会

第3章　まとめ

第1節　周辺の地形

本節では、本地点あるいは周辺の調査で確認された土層から中世地形の復元を試みる。現況地形や建物、道路等は中世以降のさまざまな改変を経て現在の位置や姿に形成されているもので、まれに中世の様相をそのまま残すことがあっても、それはあくまでも例外であり、多くは中世と変化していると考えなければならない（註）。こうした中世地形の復元を行うことで、より調査地点で検出された遺構、出土遺物の意味や性格が明確になる。しかし、これは現時点で得られている結果を基にした、あくまでも簡便な復元であり、今後の調査結果で常に変えていく必要がある。

まず本地点と地点２～地点６で調査地周辺の中世地山を見る。各地点で京都系手づくねかわらけ皿が少量ながら出土しているので、12世紀末から13世紀初め頃の地形といえる。本地点の中世地山レベルは海抜5.30m前後で、バス通り南の地点２は海抜3.40m、その北の地点３は海抜3.50mと報告されている。地点4はやや赤みを帯びた褐色砂層が海抜4.0mで、地点６では同一砂層が4.40mで確認されている（註）。また、元八幡西の地点7は削平を受けた黄白色砂層で海抜5.80mの高さがあり、この砂層は、海岸部一帯の堆積に準じれば古代以前の堆積である。この事からすると、調査地点周辺で最も高いレベルに位置するのは元八幡辺りで、その周辺が次いでやや高く、バス通りから南がそれより２m前後低い土地であったということができる。材木座三丁目に広がる低い土地は、中世段階には湿地あるいは潟湖であろうとの説があり、齋木もこれを支持しているが、少なくとも地点３辺りまでは12世紀末から13世紀初め頃には陸地化していたことになる。

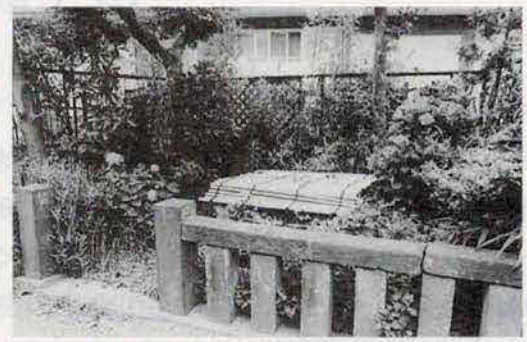
12世紀末以前の様相は明らかではないが、高台にある調査地点以外では中世以前の遺物が出土していないので、バス通り付近まで潟湖が広がっていた可能性もある。この場合、元八幡宮は潟湖に面した社であったともいえる。

遺跡範囲全体の調査様相は、紙数の都合もあってここで細かく触れられないので、遺跡範囲の北側を中心に触れる。前述のように、地点８の西側、地点２、５～７の南側、材木座三丁目一帯が中世のある段階で、沼地あるいは潟湖であろうと推定されており、図内の星印地点では確認調査深度内では中世の遺構面が確認されていない。この地域の現地表面の海抜が３mから４mで、確認調査では２mほど調査している。したがって、海抜１mから２mの高さ以上には遺構面が存在しないことになる。
地点４では海抜７mで中世以前の遺構群が検出されている。

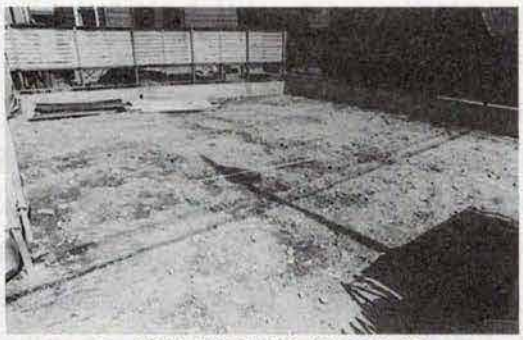
註１　仮に位置は同じでも現在の地面にある以上当然高さは変化しているはずである。
註２　平成16年、平成17年に鎌倉市教育委員会が調査を実施。未報告。

図版 1

1. 元八満宮（南から）



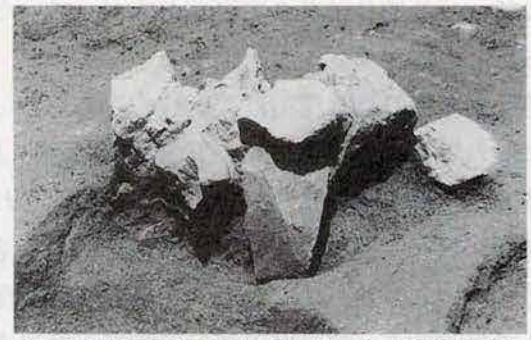
2. 石清水井（南から）



3. 調査区設定状況（南東から）

4. 1面全景（東から）

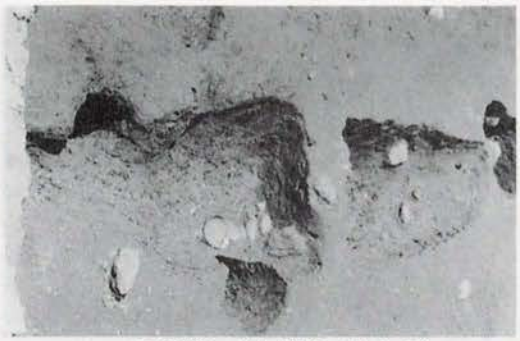
5. 1面遺構28（ピット）（南から）



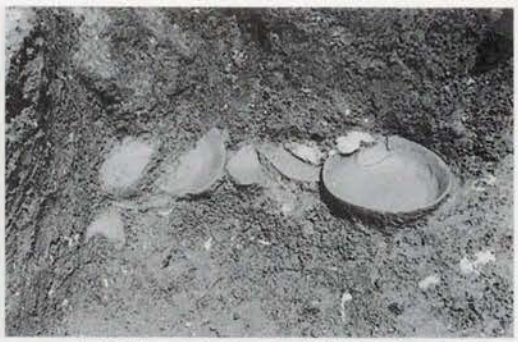
6. 1面礎石①東西エレベーション（南東から）

7. 2面全景（北から）

8. 2面遺構32完掘状況（西から）



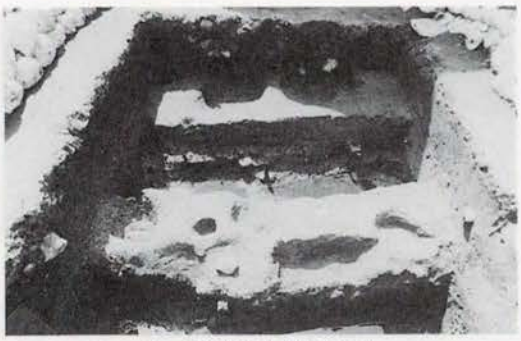
1. 2面遺構32完掘状況（南から）



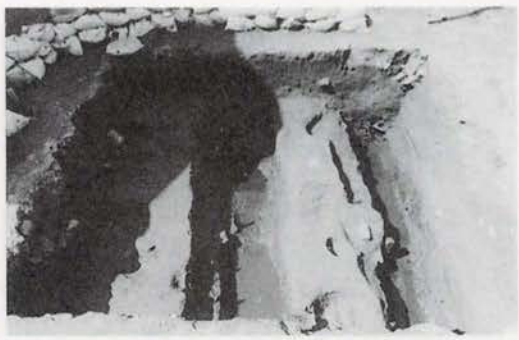
2. 2面遺構32かわらけ出土状況（北西から）

3. 2面30、31（西から）

4. 3面遺構34、42、54東西セクション（南から）



5. 3面全景（東から）

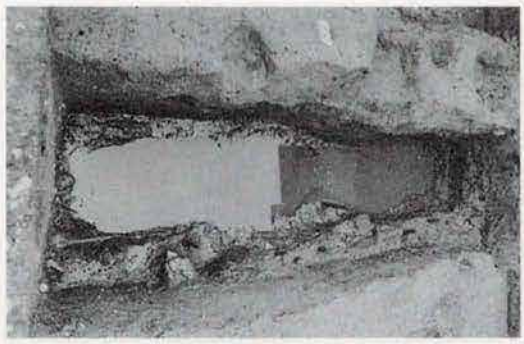


6. 3面全景（南から）

7. 3面34?漆器出土状況（南西から）

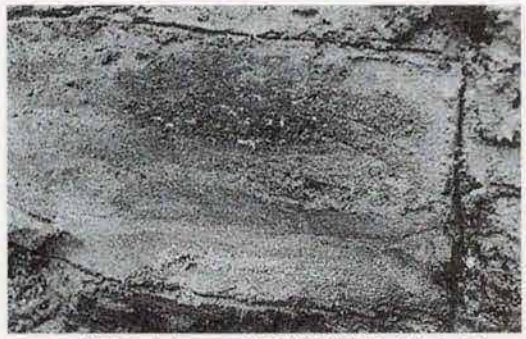
8. 3面遺構43、45、49

図版 3

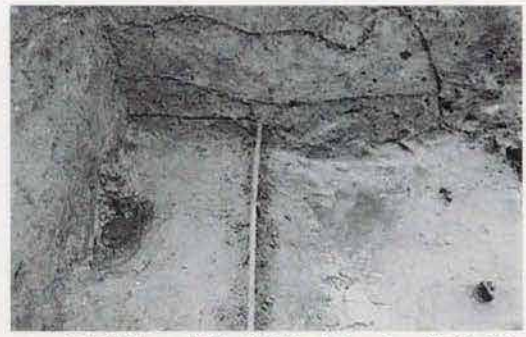


1. 3面遺構42全景（南から）

2. 3面遺構42下層貝殻出土状況（南東から）



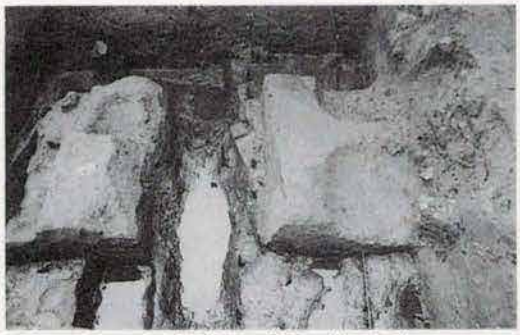
3. 南壁セクション飛砂堆積状況（北から）



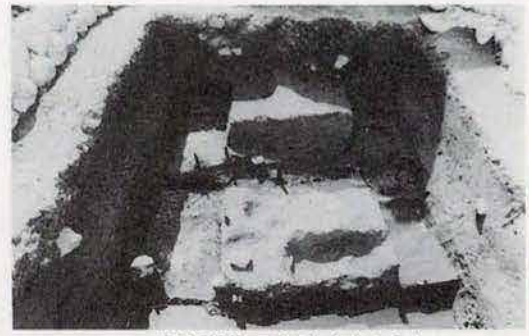
4. 3面遺構55（溝）北壁セクション（南から）

5. 3面遺構55（溝）南側木組検出状況（南から）

6. 3面遺構42、56北壁セクション（南から）



7. 最終確認面全景（東から）



8. 最終確認面全景（東から）

図7-10

図10-16

図5-2

図10-13

図13-40

図10-42

図16-46

図13-41

図17-47

かわらけ

出土遺物（1）

図版 5

図12-36

図12-37

図12-38

図10-21

図10-31

2面出土

（土壁）

出土遺物（2）

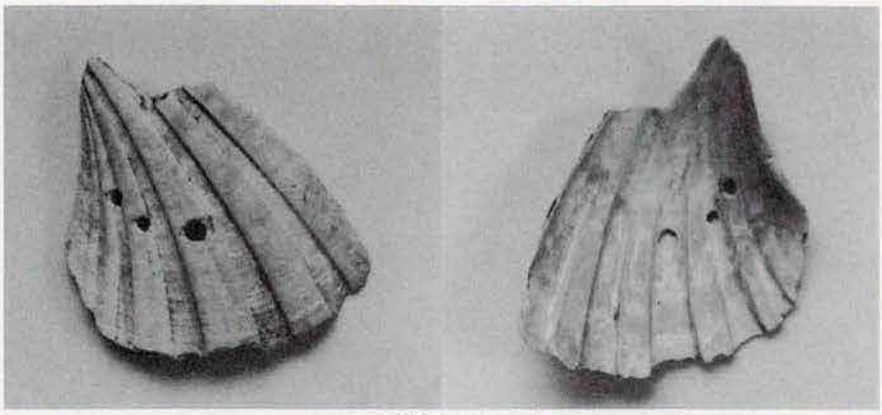
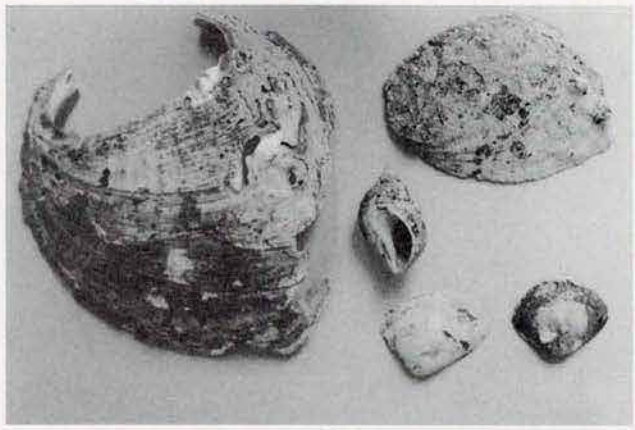
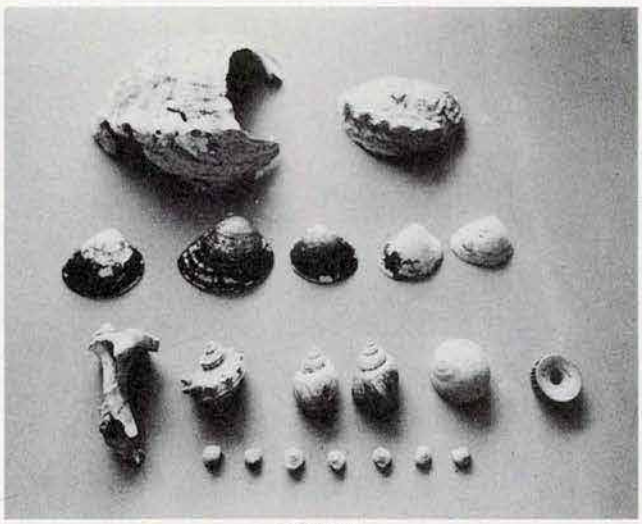


図12-39



4 面出土



4 面出土

出土遺物（3）

能蔵寺跡（のうぞうじあと）　(No.314)

材木座二丁目294番３外地点

例　言

1. 本報は「能蔵寺跡（No.314）」内の、鎌倉市材木座二丁目294番３外地点における、個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成16年７月20日から９月22日にかけて実施した。調査面積は48.00㎡である。
3. 調査体制は以下の通りである。
   調査担当者：齋木秀雄
   調　査　員：押木弘己、根本睦子、鯉渕義紀
   調査作業員：山崎一男、杉浦永章、石井清司、清水光一、河原龍雄、片山直文
4. 出土遺物の整理･報告書の作成は以下の分担で行った。
   執筆・編集：齋木秀雄、降矢順子
   実測・トレース：鯉渕義紀、村松彩美、加藤千尋
   図 版 作 成：降矢順子、加藤千尋、村松彩美
5. 本報告に使用した写真は遺構を齋木･根本･鯉渕が、遺物を三ツ橋正夫が撮影した。また、測量軸の移動･設定は押木弘己が行った。

目　次

本文目次

第1章　調査概要……291
　第1節　調査位置と歴史的環境……291
　第2節　周辺の調査……291
　第3節　堆積土層……291
　第4節　調査軸の設定……293

第2章　検出された遺構と遺物……295
　第1節　第1面の遺構と遺物……295
　第2節　第2面の遺構と遺物……297
　第3節　第3面の遺構と遺物……305
　第4節　第4面の遺構と遺物……313
　第5節　遺構外その他……321

第3章　まとめ……322
　第1節　遺跡名称について……322

第4章　能蔵寺跡の花粉化石……323

図版目次

図1　調査地点と周辺の遺跡……292
図2　座標とグリッド配置図……293
図3　堆積土層図……294
図4　1面全体図……295
図5　1面遺構……296
図6　1面遺構出土遺物……296
図7　1面出土遺物……297
図8　2面全体図……298
図9　2面道路……299
図10　2面道路出土遺物（1）……300
図11　2面道路出土遺物（2）……301
図12　2面遺構（土坑・ピット）……302
図13　2面遺構出土遺物……303
図14　2面出土遺物……304
図15　3面全体図……306
図16　3面遺構（土坑・ピット）……307
図17　3面遺構出土遺物……309
図18　3面出土遺物（1）……310
図19　3面出土遺物（2）……311
図20　3面出土遺物（3）……312
図21　4面全体図……314
図22　4面遺構（1）……315
図23　4面遺構（2）……316
図24　4面遺構出土遺物……317
図25　4面出土遺物……318
図26　遺構外出土遺物……320

写 真 目 次

図版１．1. Ⅰ区１面南側土丹検出状況（東から）…… 328
2. Ⅱ区１面全景（南から）…… 328
3. 1区２面全景（北から）…… 328
4. Ⅰ区２面北側全景（東から）…… 328
5. Ⅰ区２面道路二時期目（西から）…… 328
6. Ⅰ区道路西側アップ（南東から）…… 328
7. Ⅰ区２面遺構10完掘状況…… 328
8. Ⅰ区２面道路（東から）…… 328
図版２．1. Ⅰ区２面全景（北から）…… 329
2. Ⅰ区２面遺構21溝（東から）…… 329
3. Ⅰ区２面北側礎板列（北から）…… 329
4. Ⅰ区２面柱１検出状況（西から）…… 329
5. Ⅱ区２面全景（南から）…… 329
6. Ⅱ区２面銅製品出土状況（北から）…… 329
7. Ⅱ区２面ガラス出土状況…… 329
8. Ⅱ区２面道②-１（西から）…… 329
図版３．1. Ⅰ区２面道路②-１（西から）…… 330
2. Ⅱ区２面道路②-２（東から）…… 330
3. Ⅱ区２面道路２石積検出状況（南から）…… 330
4. Ⅱ区２面道路３（西から）…… 330
5. Ⅱ区２面道路③石組み（北東）…… 330
6. Ⅱ区２面北側石列（北東）…… 330
7. Ⅱ区２面③④（東から）…… 330
8. Ⅱ区２面④東壁セクション（西から）…… 330
図版４．1. Ⅱ区2面道路④アップ（北から）…… 331
2. Ⅰ区３面全景及びプラン確認（北から）…… 331
3. Ⅰ区３面北半分全景（東から）…… 331
4. Ⅰ区３面遺構140柱検出状況…… 331
5. Ⅰ区３面木組み（排水溝）（南から）…… 331
6. Ⅱ区３面南側全景（西から）…… 331
7. Ⅱ区３面北側全景（北から）…… 331
8. Ⅱ区３面遺構145木組み（南から）…… 331
図版５．1. Ⅱ区３面遺構222かわらけ出土状況（西から）…… 332
2. Ⅱ区３面小銭出土状況（北から）…… 332
3. Ⅱ区３面遺構215（東から）…… 332
4. Ⅱ区３面遺構143さや検出状況…… 332
5. Ⅱ区４面全景（北～）…… 332
6. Ⅱ区４面全景（北から）…… 332
7. Ⅱ区４面遺構191礎板（北から）…… 332
8. Ⅱ区４面遺構286内柱（東から）…… 332
図版６．1. Ⅱ区４面南部木組み（北から）…… 333
2. Ⅱ区４面南部タラ板①（北から）…… 333
3. Ⅱ区４面真上骨未完成（北から）…… 333
4. Ⅱ区４面遺構280形代（均子）（北から）…… 333
5. Ⅱ区４面遺構280木製品出土状況（南から）…… 333
6. Ⅱ区トレンチ土層堆積状況（南から）…… 333
7. Ⅱ区４面トレンチ土層堆積状況（南から）…… 333
8. Ⅱ区４面トレンチE層出土植物…… 333
図版７．1. Ⅱ区４面真上瓦（南から）…… 334
2. Ⅱ区５面遺構302木組み（西から）…… 334
3. Ⅱ区５面全景（北から）…… 334
4. Ⅱ区５面全景（南東から）…… 334
5. Ⅱ区５面遺構200木組み（北から）…… 334
6. Ⅱ区６面全景…… 334
7. Ⅱ区北壁砂層（南から）…… 334
8. 飛砂堆積状況…… 334
図版８．出土遺物…… 335
図版９．出土遺物…… 336
図版10．出土遺物…… 337

第１章　調査の概要

第１節　調査地点の位置と歴史的環境

調査地点は、鎌倉市材木座２丁目294番３、６地点にあり、隋我山来迎寺（時宗）の北100m程に位置している。調査地の西は、大町四つ角から南に下がり、材木座海岸入り口で東に折れ光明時門前、小坪を経て逗子に向かう幹線道路（以下、新道という）の東をほぼ平行して抜ける、近世には成立していたであろう道路（以下、旧道という）に面している。旧道は明治年間に横須賀の海軍基地に水道を送るために造られた所謂「水道路」などに分断されて明確ではないが、道標等を辿ると名越四つ角からまっすぐ南に下がり、横須賀線を越えて西と東に分岐している。西に向かう道路は水道路に分断されて辿ることは困難であるが、東に向かう道路は水道路を越えると東と南に分岐している。東方向は長勝寺を経て名越に向かい、南は来迎寺、五所神社、実相寺前を通って光明寺に至る。現在、能蔵寺の碑はこの分岐点北に設置されている。調査地点はこの分岐点から100mほど南に位置している。

調査地点周辺は、現存する寺院が多く、さながら寺町の様相を呈している。新道に面しては水道路との交差点南100mの西に啓運寺、120m南の東に妙長寺、300m南の西に向福寺があり、滑川の海岸橋から東に向かった道路と新道が交差する南西に九品寺がある。旧道では前記の寺院のほかに補陀落寺がある。また、廃寺では感応寺（乱橋）、浄土真宗・最福寺（弁ケ谷）、禅宗・聖海寺（飯島カ）、新善光寺（大町・名越あるいは弁ケ谷）、禅宗・崇寿寺（弁が谷）、万福寺（和賀江）などがあった。寺院以外では新道の向福寺北には鎌倉十橋に数えられる乱橋があり、光明寺脇の海岸には貞永二年（1233）に完成した、築港遺跡である和賀江島がある。

時代的背景を見ると来迎寺（時宗）は、もとは真言宗で治承四年（1180）に衣笠城で亡くなった三浦義明を弔うために建てられたという寺伝を持ち、境内には三浦義明らの五輪塔がある。その南に在る実相寺は建久四年（1193）に曾我兄弟に討たれた工藤祐経の邸宅趾が寺院になったとの伝承がある。補陀落寺は開山分覚で養和元年（1181）に源頼朝の祈願所として創建された寺院である。その真贋は明らかではないが、いずれも鎌倉時代初めの創建であり、調査地点周辺の開発がこれと前後して始まったことも推定できる。

第２節　周辺の調査

周辺の発掘調査は、鎌倉市内では比較的少ない。特に標記遺跡範囲内では本地点が３地点目である。材木座二丁目297番１地点（19）は現況地表8.20m前後で、５枚の生活面が調査されている。各生活面からは土坑や柱穴などが比較的多く検出され、13世紀第２四半期から14世紀初頭にかけての遺物が出土している。最下面の５面は海抜6.10m前後で、有機質を多く含んだ黒褐色粘土層上で確認されている。

御所神社参道では12世紀末から14世紀の遺構と遺物が確認されている。能蔵寺に直接的に関わるような遺構は確認されていない。

西に接する材木座町屋遺跡内では幾つかの調査が行われている。最も距離的に近い盛華園南地点では現地表約6.0m、表土を取り除いた5.60m前後で褐色砂層になる。すべての包含層は失われているが、15～16世紀頃のかわらけが出土する土坑が確認されている。

第３節　堆積土層と旧地形

本地点の調査では、13層の堆積を確認した。現地表は海抜8.0mほどで、約40㎝の厚さに表土及び現

代造成土が堆積し、その下に40㎝前後の厚さに近世耕作土が堆積している。この近世耕作土直下を1面とした。したがって、1面は近世の耕作によって削平された結果として残った包含層であり、版築を伴ういわゆる生活面ではない。1面のレベルは7.20m前後である。

2面は、1面の下30㎝前後にありやや小さな土丹が多く、薄い版築面の様相を呈している。レベル

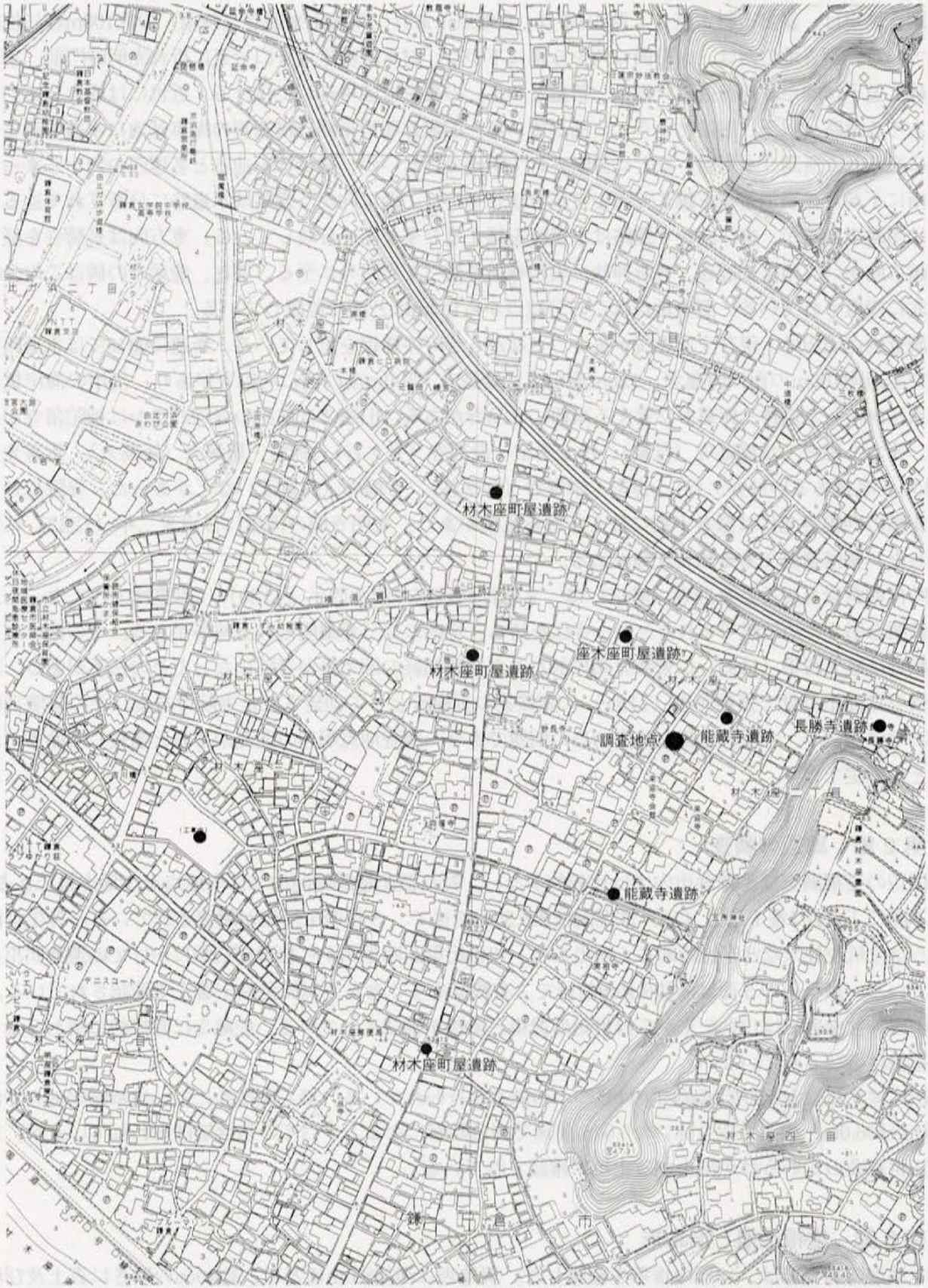


図1　調査地点と周辺の遺跡

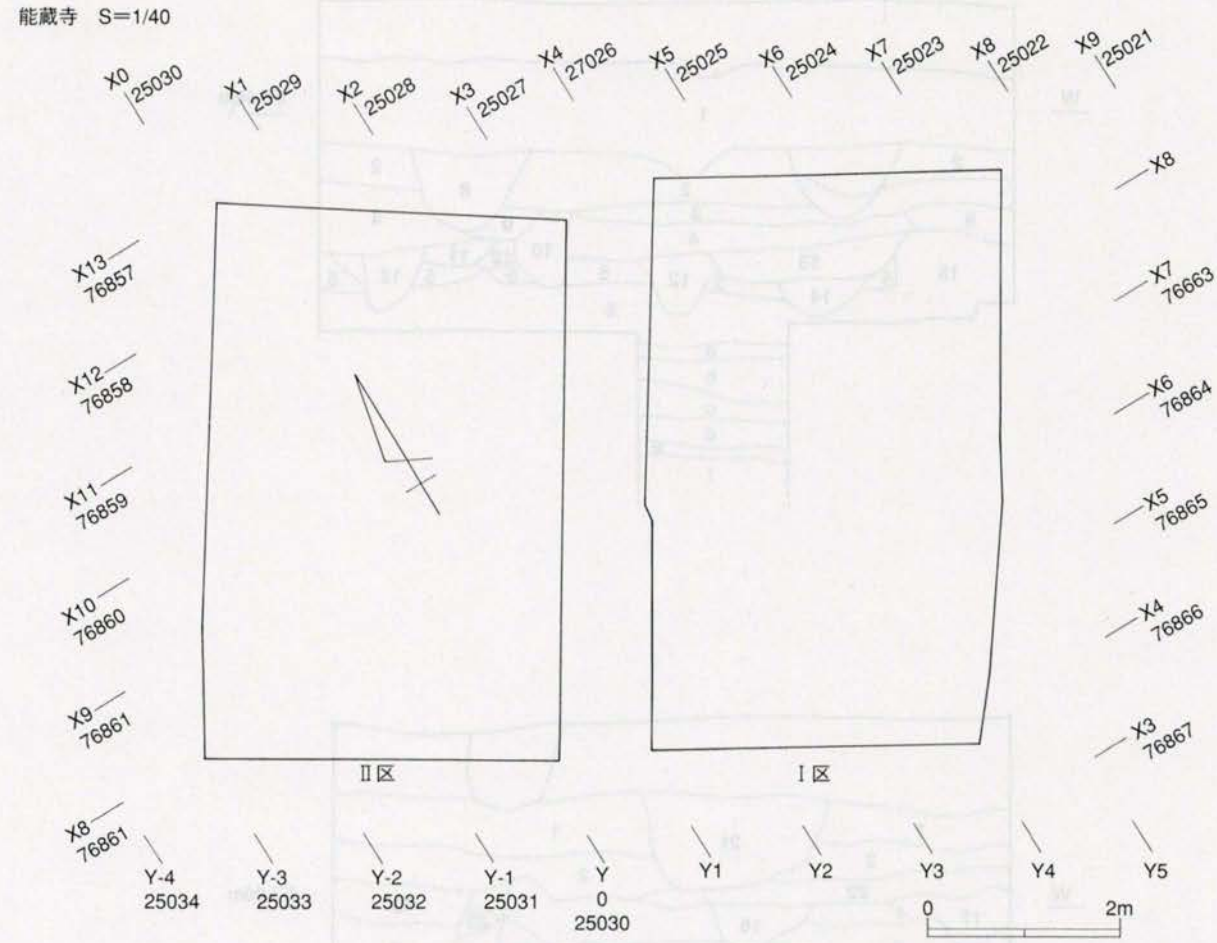


図２　座標とグリッド配置図

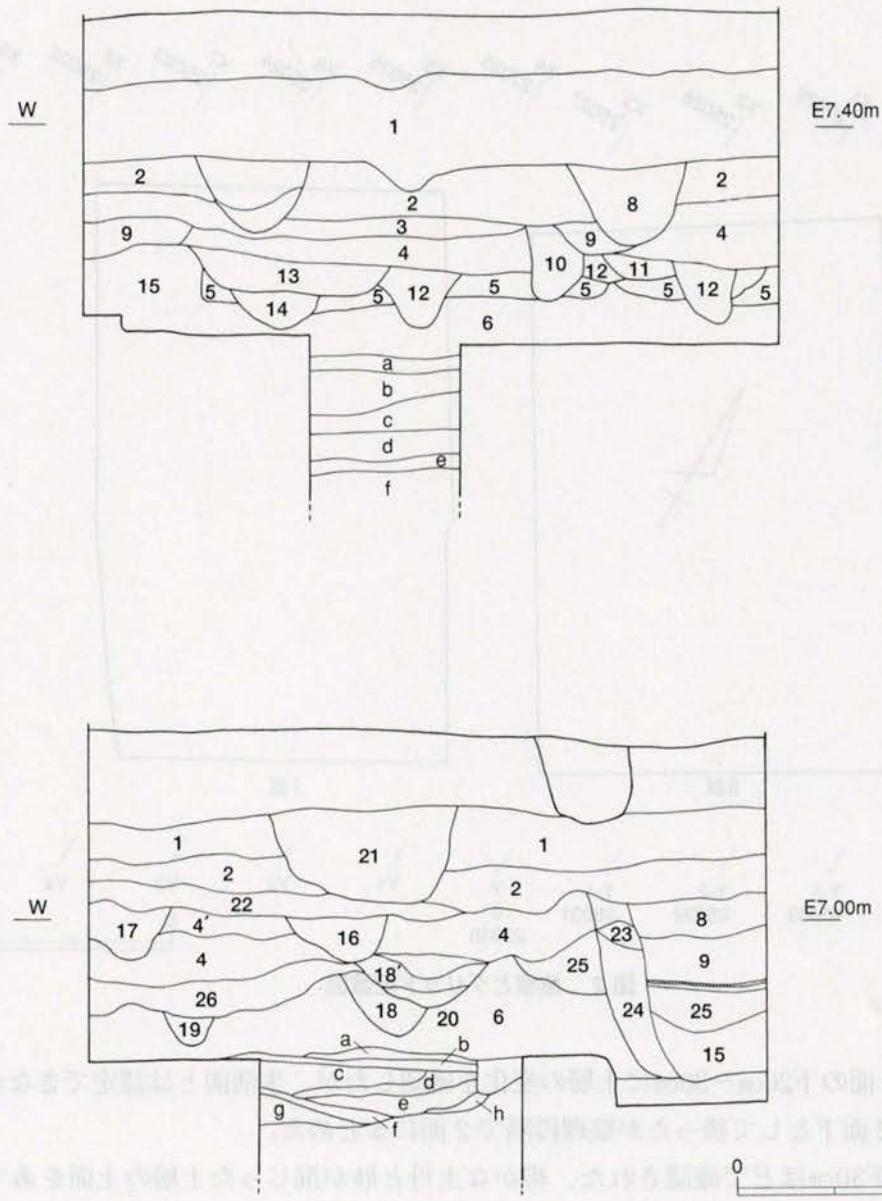
は6.90m～7.0m。２面の下20㎝～30㎝に土層の変化を確認したが、生活面とは認定できなかった。この面は、調査時には２面下として扱ったが整理段階で２面にまとめた。

３面には２面の下30㎝ほどで確認された、細かな土丹と砂が混じった土層の上面をあてた。海抜は6.60m前後である。３面を構成する土層が10㎝～20㎝堆積し、その下は暗黄褐色砂層になる。この上面を４面とした。上面レベルは6.50m前後である。この土層は、鎌倉市内の旧海岸部の調査で確認される中世のある時期の地山で、13世紀前半までに堆積したと考えられている土層に極似している。

暗黄褐色砂層の下は黒褐色粘土と青灰色砂層が10㎝～20㎝の厚さで交互に堆積しており、この状況は深さ80㎝、海抜5.50mまで確認した。これらの土層を観察すると青灰色砂層は飛砂であり、黒褐色粘土には細かな植物の茎らしきものが多く混じり、これらの植物が群生する湿地であったとも考えられる。

第４節　調査軸の設定

調査に当たっては、鎌倉市３級および4級基準点から国土座標軸の基づいた測量軸の設定を行い、測量図の作成に用いた。調査区と座標値との関係は、図２に示したとおりとなる。なお、使用した国土座標値は、旧日本測地系の第Ⅸ系に基づくものである。



北壁（Ⅰ・Ⅱ）東西土層

1．暗褐色土　（しまり有　粘性あまりない　パサパサ　中１㎝以下の土丹粒多く含む　炭化物粒子、かわらけ細片含む）
2．暗褐色土　（しまりやや弱　粘性有　中１㎝以下の土丹粒含む　炭化物、かわらけ細片微量）
3．暗褐色土　（しまり弱　粘性有　中１㎝以下の土丹粒少々含む　炭化物粒子１層より多め）
4．暗褐色土　（しまり弱　粘性有　中１㎝以下の土丹粒含む　砂質土少量含む　炭化物粒子含む）
5．暗黄褐色砂質土　（しまり有　粘性なし　ややきめの細かい砂粒　細かい貝ガラ粒子含む）　暗褐色粘土質の粒が微量に散る
6．明黄褐色砂質土　（しまり有　粘性なし　ややきめの細かい砂質　細かい貝ガラ粒子多く含む）
7．暗褐色土　（しまり有　粘性有　中１㎝以下の土丹粒含む　炭化物粒子微量）
8．暗褐色土　（しまり有　粘性有　中２～３㎝土丹粒多い）
9．暗褐色土　（しまり弱　粘性有　中１㎝以下の土丹粒含む　炭化物微量）
10．暗褐色土　（しまりやや弱　粘性有　中２～３㎜土丹粒微量　地山①の砂質を底部付近少々含む）
11．暗褐色土　（しまり有　粘性少し有　中１㎝以下の土丹粒微量　地山①砂層混入　貝ガラ粒子混入）
12．暗褐色土　（しまりやや弱　粘性有　中２～３㎜土丹粒含む　貝ガラ粒子　砂層混入）
13．暗褐色土　（しまり弱　粘性有　中１㎝以下の土丹粒微量　木細片が少しみられる　炭化物粒子微量）
14．暗黄褐色土　（しまり弱　粘性あまりない　中２～３㎝土丹粒微量　６層の地山の砂層多く混入）
15．暗黄褐色土　（しまり弱　粘性あまりない　中１㎝以下の土丹粒微量４層の暗褐色土と６層の多い砂層の混入）　細かい貝ガラ粒子含む
16．暗褐色土　（しまり有　中５㎝程の土丹粒多い　炭化物かわらけ細片含む）
17．暗褐色土　（しまり・粘性有　中５㎝～拳大の土丹粒多い　炭化物少々　かわらけ細片微量）
18．暗灰褐色砂質土　（しまり弱　炭化物粒子微量　貝ガラ粒子多　５層の砂主体）
18′．暗褐色砂質土　（しまり弱　炭化物　土丹粒微量　暗褐色粘質土が18層より少し多い）
19．暗褐色砂質土　（しまり弱　暗褐色粘質土粒含む　炭化物　中２～３㎝土丹粒少量含む）
20．暗褐色砂質土　（しまり弱　炭化物混入　中１㎜の土丹粒微量）
21．暗褐色土　（しまり非常に有　粘性少し　中５㎜以下の土丹粒含む　炭化物少々）
22．暗褐色土　（しまり強　粘性有　中10㎝以下の土丹粒非常に多い）
23．暗茶褐色砂質土　（しまり弱　粘性なし　砂を多量に含む）
24．暗褐色砂質土　（しまり弱　６層の砂層多く含む　暗褐色粘質土混入　中１㎝前後土丹粒微量　炭化物粒子、貝ガラ粒子含む）
25．暗褐色砂質土　（しまり弱　暗褐色粘質土が24層より少ない　土丹粒、炭化物粒子微量　貝ガラ粒子含む）
26．暗褐色土　（しまりやや弱　粘性有　暗褐色粘性土多く　砂質土ところどころ混入　中２～３㎜土丹粒微量）

a．黄褐色砂層
b．粘土層
c．黄褐色砂層
d．粘土層
e．黄褐色砂層
f．粘土層
g．黄褐色砂層
h．粘土層
i．青灰色砂層

図３　堆積土層図

第２章　検出された遺構と遺物

本章では、検出された遺構と遺物について説明を加える。調査では、発生土の処理を考慮して対象面積を１区、２区に分割して調査し、崩落を防止するため両調査区の間に幅50㎝の未調査区を残した。そのため、最初に調査した１区と次いで調査した２区では遺構の遺存状況が異なっていたこともあり、やや不明瞭な部分が残ってしまった。両調査区で検出した生活面は、それぞれ５枚であるが整理段階で４枚にまとめた。これは２区の１面に相当する生活面が１区では確定できなかったことによる。道路遺構を例に取ると１区では１面で検出されているが、２区では２面の遺構である。説明に当たっては、遺構は柱穴状の小型遺構が多く、紙数の関係もありすべてについて説明を加えられないので、基本的には図示できる遺物を出土している遺構を中心とした。また、以下の文中で触れる方位は、便宜上敷地西側の道路側を西、反対を東とした。正確には調査区の左上の角方向が北（真北）である。

第１節　1面の遺構と遺物

１面の遺構には１区の遺構1から遺構５、２区の遺構211をあてた。近世の耕作土に削平された面であり、生活面ではない。１区の柱穴では近世耕作土を覆土にしているものが多く、中世の遺構として明確なのは２区の遺構211だけである。１区では撹乱された道路面が部分的に検出されているが、調査時点では道路として認定できなかった。

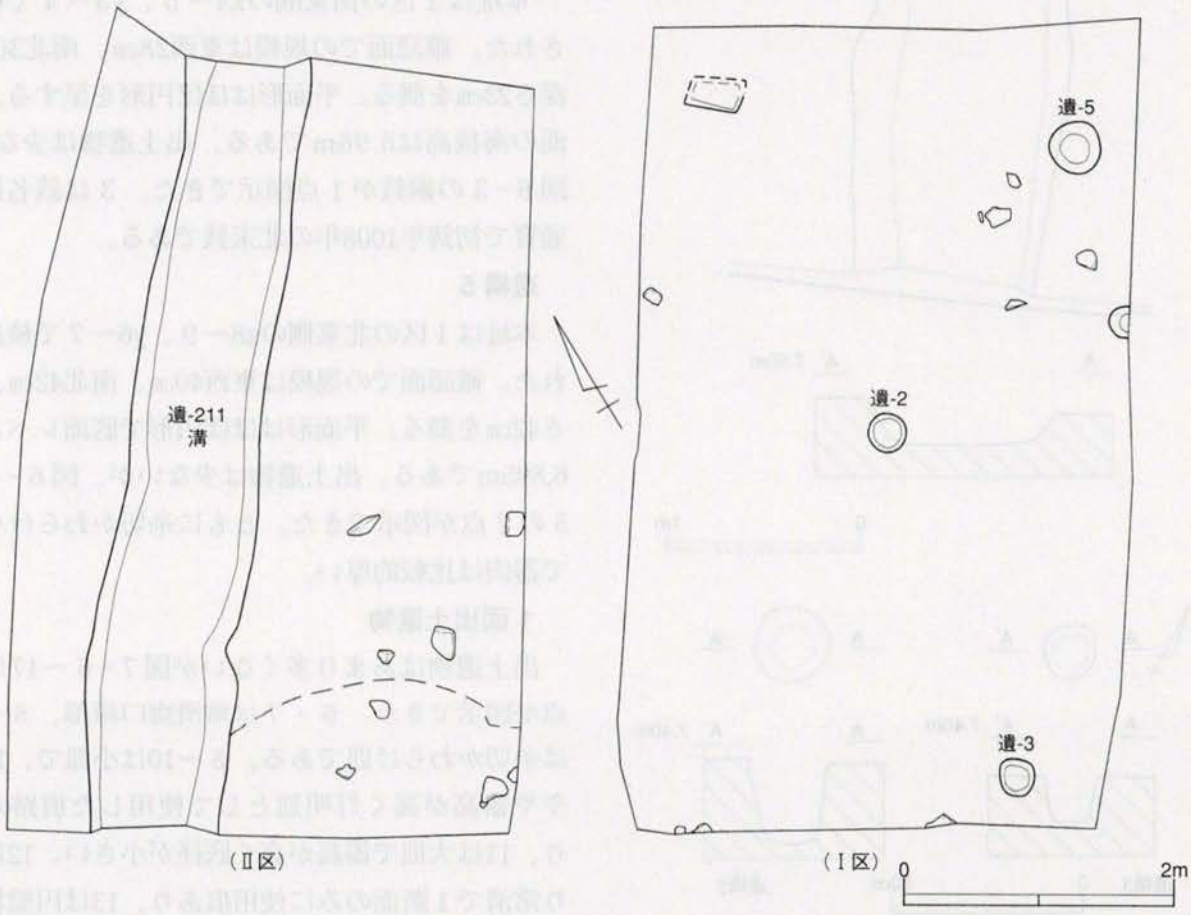


図４　１面全体図

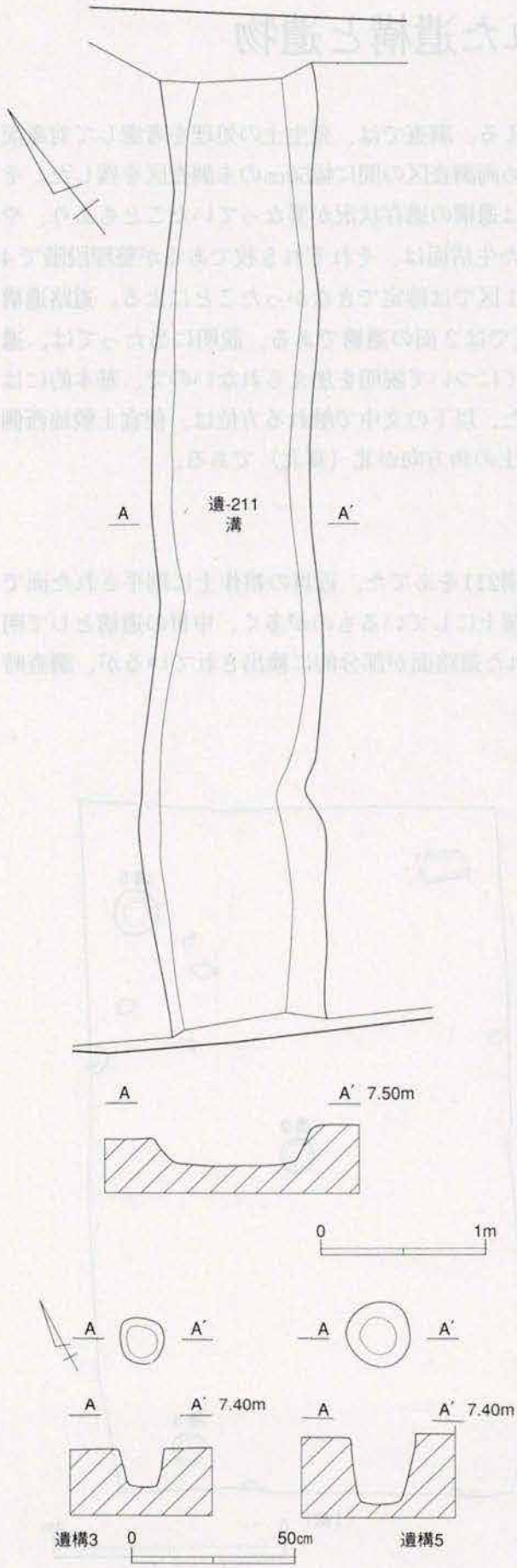


図５　１面遺構

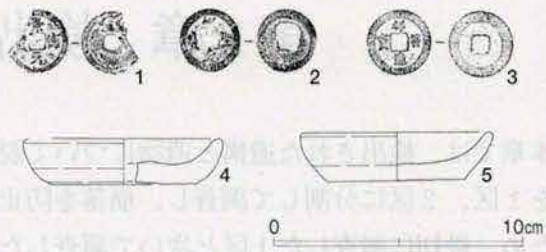


図６　１面遺構出土遺物

遺構211

本址は２区の西側、調査区西壁から１mほど離れて南北方向に検出された。現在の道路、敷地に平行する方向で、現在の道路に関係すると思われるが、明確ではない。２区の北壁セクションでみると、上部は近世耕作土に削平されているが、上幅90㎝、深さ50㎝で断面形はU字状を呈している。底面レベル7.10mで南が低い。出土遺物は少なく、図６－１、２の銅銭２枚が図示できただけである。１は銭名景徳元豊、初鋳年1004年の北宋銭で、２は紹聖元寶、初鋳年は1094年の北宋銭である。

遺構３

本址は１区の南東隅のx4～５、y3～４で検出された。確認面での規模は東西28㎝、南北30㎝、深さ23㎝を測る。平面形はほぼ円形を呈する。底面の海抜高は6.96mである。出土遺物は少なく、図６－３の銅銭が１点図示できた。３は銭名祥符通寶で初鋳年1008年の北宋銭である。

遺構５

本址は１区の北東側のx8～９、y6～７で検出された。確認面での規模は東西40㎝、南北42㎝、深さ42㎝を測る。平面形はほぼ円形で底面レベルは6,895mである。出土遺物は少ないが、図６－４・５の２点が図示できた。ともに糸切かわらけ小皿で器肉は比較的厚い。

１面出土遺物

出土遺物はあまり多くないが図７－６～17に12点が図示できた。６・７は常滑甕口縁部、８～11は糸切かわらけ皿である。８～10は小皿で、10はやや器高が高く灯明皿として使用した痕跡があり、11は大皿で器高が高く底径が小さい。12は磨り常滑で１断面のみに使用痕あり、13は円盤状土製品、14は土錘、15は石製品で石臼の部分、16・

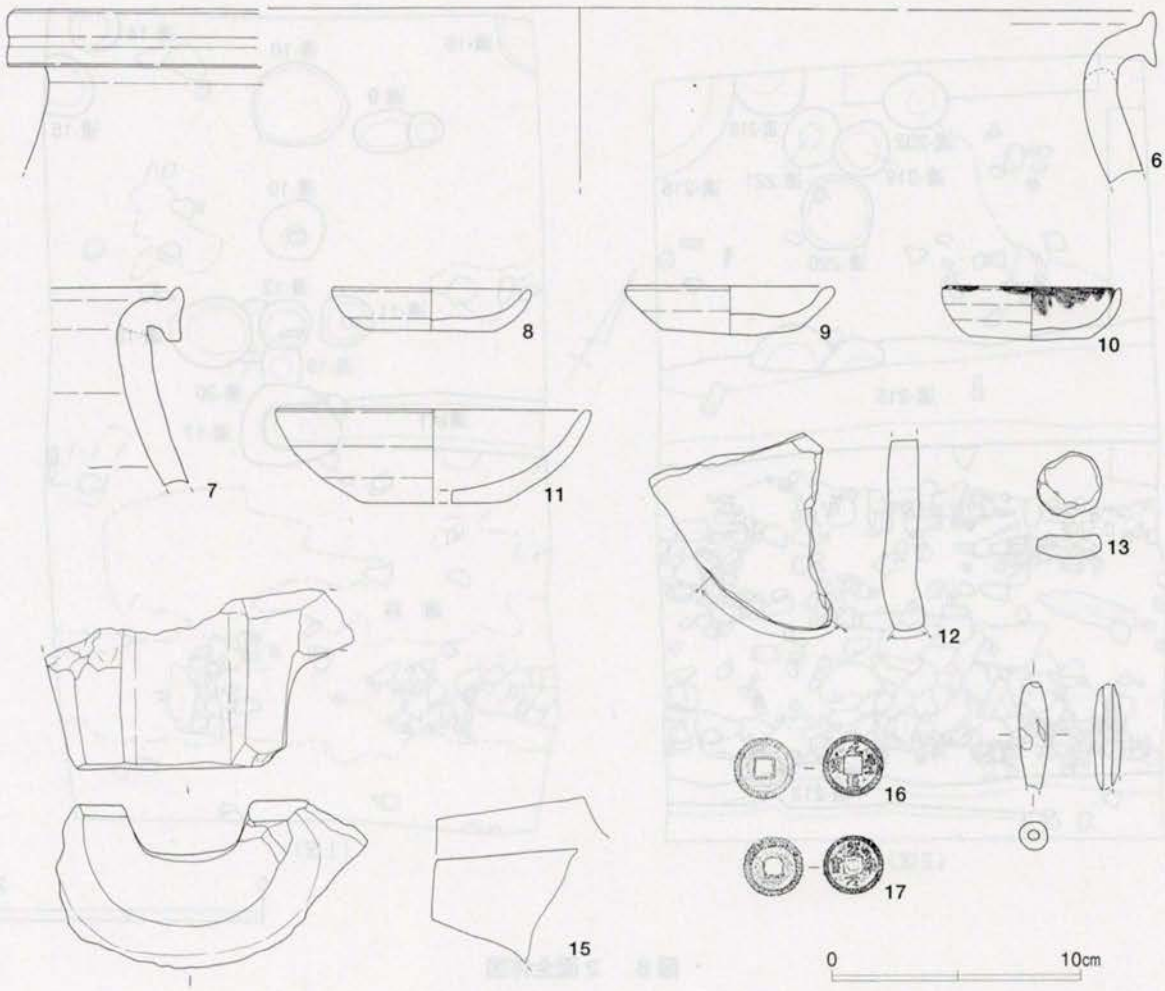


図７　１面出土遺物

17は銅銭である。16は元豊通寶で初鋳年は1078で北宋銭、17は聖宋元寶で初鋳年は1101年の北宋銭である。

第２節　2面の遺構と遺物

２面では１区、２区の南側に東西方向の道路遺構が検出され、その北側に幾つかの土坑や柱穴が確認された。しかし、これらの遺構で建物は復元できなかった。道路面は版築された土丹や鎌倉石等から３時期の改修が考えられるが、側溝はその変化が確認できなかった。そのため、道路は3面にも伴う可能性を残していると思えるが、２面にまとめた。

道路

１区では、撹乱が激しく路面が明確ではないが、幅2.20m、上面レベル7.10mで確認された。２区で確認された版築面は３枚であるが、１区でそれが確認されていないため、これが３時期の路面なのか部分的な改修の結果なのかは明確ではない。２区では最上層面が幅1.90m、上面レベル7.20mで確認され、最下層面が幅1.40m、上面レベル7.0mで確認されている。最上面では路面が荒れた状況であるが、中間では鎌倉石を路面の抑えとして北と南に並べてあり、良好な道路であったことが推測できる。

遺物は比較的多く出土している。図10-18～図11-61に44点が図示できた。出土層を大別すると18～29が最上層道路面検出時、30～51が２枚目の道路面検出まで、52～61が最下層道路面検出までの出土である。

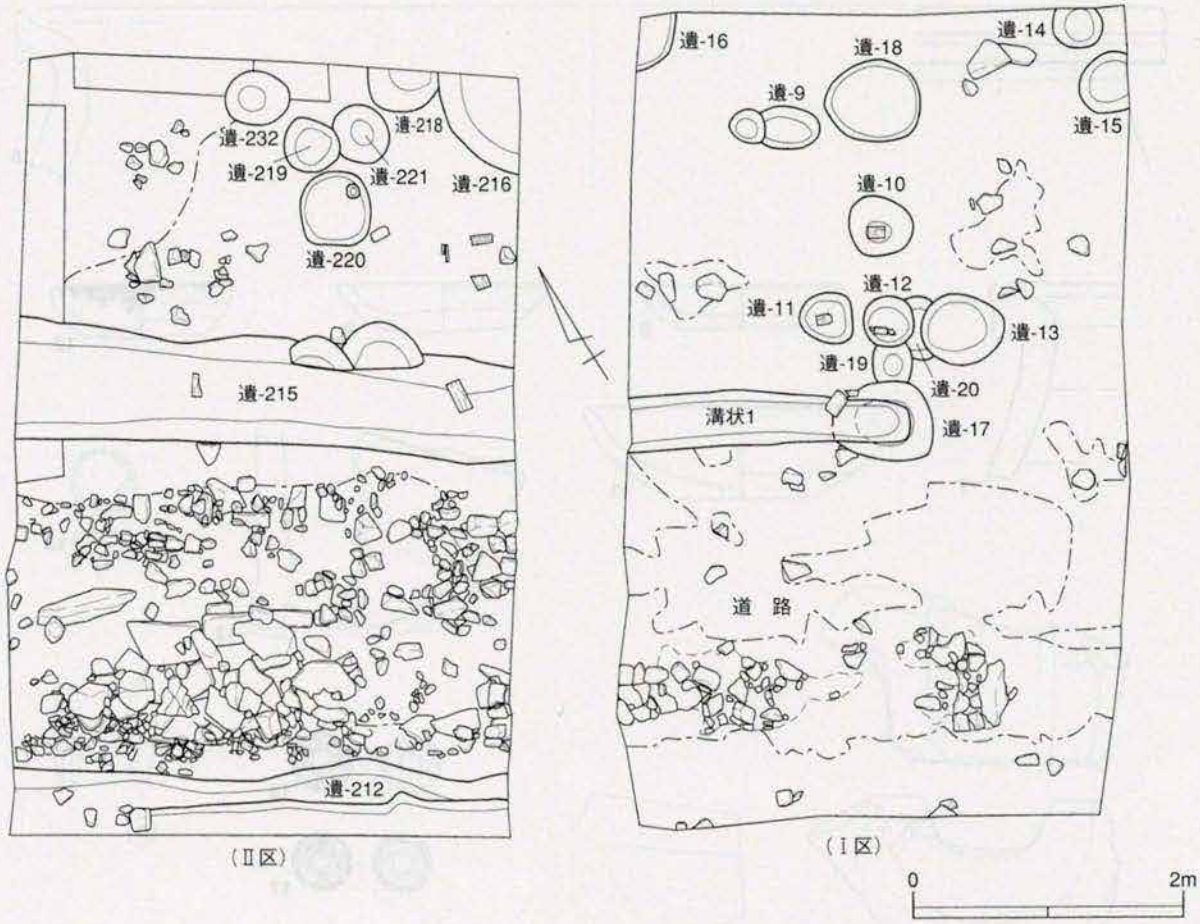


図８　２面全体図

最上面の道路では12点が図示できた。18～22は糸切りかわらけ皿である。57・58は小皿で共に灯明皿としての痕跡あり、20～22は大皿で、20も灯明皿としての使用痕あり、23は磨り常滑で２断面に磨り痕あり、24・25は円盤状土製品と思われるが作りは粗い、26は骨製品の笄で上下が欠損している。27～29は銅銭である。27は景徳元寶で初鋳年は1004年の北宋銭、28は熙寧元寶で初鋳年は1068年の北宋銭、29は政和通寶で初鋳年は1111年の北宋銭である。

２枚目の道路検出までの遺物では、図11-30～51の22点が図示できた。30は中国製縁釉盤、31は常滑甕口縁部、32は黒縁瓦器碗口縁部、33は山茶碗窯系捏鉢胴部～底部、34～46は糸切りかわらけ皿である。34～40はかわらけ小皿で、39・40は器高が高くやや薄手に作られている。41は口径10.5cmほどの中皿。42～46はかわらけ大皿である。47は骨製品の笄で、先端が欠損している。48は黒石で作られた碁石、49は仕上げ砥石で産地は鳴滝産と思われる、50・51は銅銭で銭名は50が元豊通寶、初鋳年は1078年で北宋銭、51が一部判読不明だが□元通寶と読める。

最下層の道路面では、図11-52～61の10点が図示できた。52は龍泉窯系青磁縁折鉢口縁部であるが、火熱を受けて光沢を失っている。53は常滑壷口縁部、54は常滑壷胴部～底部、55は山茶碗窯系捏鉢体部～底部、56は常滑窯捏鉢口縁部、57は糸切りかわらけ小皿、58は糸切りかわらけ小皿の内底中央と側面各一箇所に穿孔がある。内底の孔は径11mmで、側面の孔は６mmほどである。59・60は糸切りかわらけ大皿、61短冊形砥石で天草産と思われる。

遺構215（遺構１、溝状遺構１）

本址は２区のほぼ中央x9～11、y2で検出され、１区に延びる東西方向の溝である。道路の北側に作

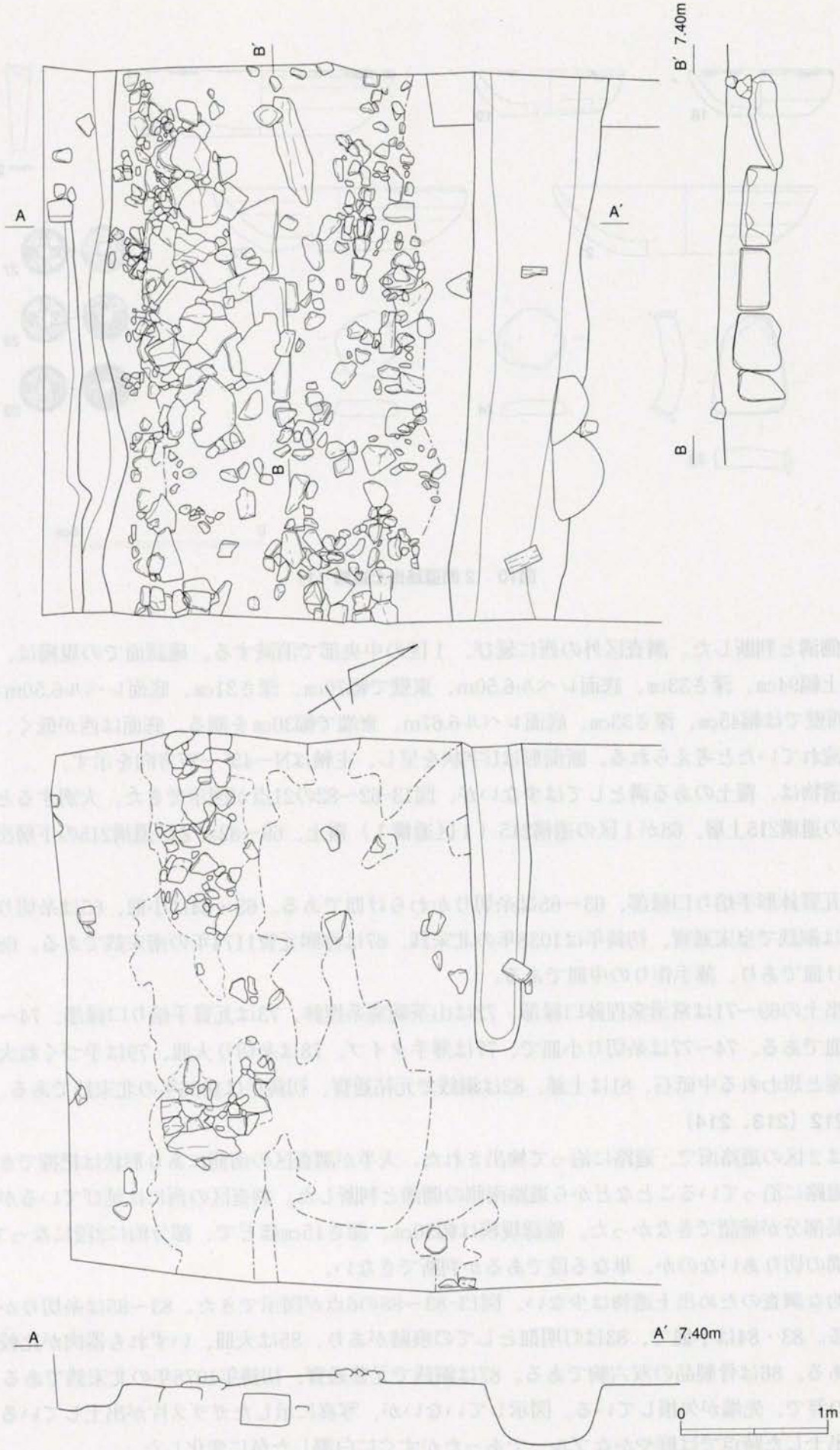


図9　2面道路

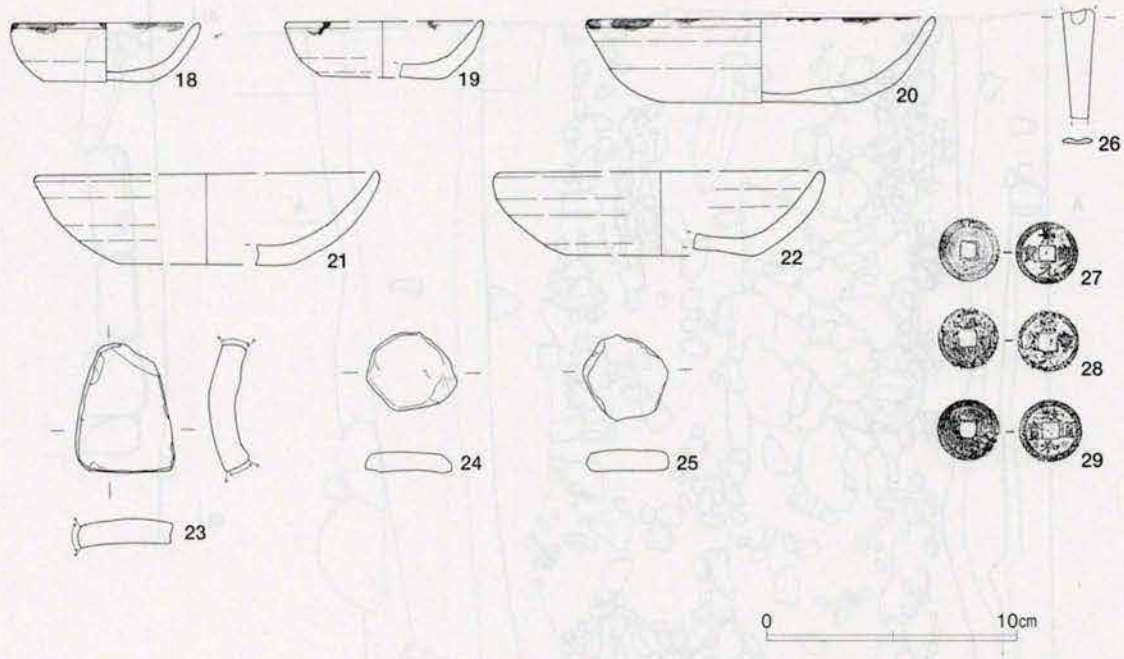


図10　2面道路出土遺物（1）

られた側溝と判断した。調査区外の西に延び、1区の中央部で消滅する。確認面での規模は、2区の西壁で上幅94㎝、深さ33㎝、底面レベル6.50m、東壁で幅70㎝、深さ31㎝、底面レベル6.50mを測る。1区の西壁では幅45㎝、深さ33㎝、底面レベル6.67m、東端で幅30㎝を測る。底面は西が低く、西に向かって流れていたと考えられる。断面形はU字状を呈し、主軸はN－45°－W方向を示す。

出土遺物は、覆土のある溝としては少ないが、図13-62～82の21点が図示できた。大別すると62～67が2区の遺構215上層、68が1区の遺構215（1区遺構1）覆土、69～82が2区遺構215の下層出土である。

62は瓦質鉢形手焙り口縁部、63～65は糸切りかわらけ皿である。63・64は小皿、65は糸切り薄手中皿、66は銅銭で皇宋通寶、初鋳年は1038年の北宋銭、67は淳熙元寶1174年の南宋銭である。68は糸切かわらけ皿であり、薄手作りの中皿である。

下層出土の69～71は常滑窯捏鉢口縁部、72は山茶碗窯系捏鉢、73は瓦質手焙り口縁部、74～79はかわらけ皿である。74～77は糸切り小皿で、77は薄手タイプ。78は糸切り大皿、79は手づくね大皿、80は天草産と思われる中砥石、81は土錘、82は銅銭で元祐通寶、初鋳年は1086年の北宋銭である。

遺構212（213、214）

本址は2区の道路南で、道路に沿って検出された。大半が調査区の南側にあり形状は把握できなかったが、道路に沿っていることなどから道路南側の側溝と判断した。調査区の西には延びているが、1区では延長部分が確認できなかった。確認規模は幅50㎝、深さ15㎝ほどで、部分的に2段になっている。これが溝の切りあいなのか、単なる段であるか判断できない。

部分的な調査のため出土遺物は少ない。図13-83～88の6点が図示できた。83～85は糸切りかわらけ皿である。83・84は小皿で、83は灯明皿としての痕跡があり、85は大皿、いずれも器肉が比較的薄き作りである。86は骨製品の双六駒である。87は銅銭で元豊通寶、初鋳年1078年の北宋銭である。88は骨製品の笄で、先端が欠損している。図示していないが、写真に示したガラス片が出土している。器形不明、出土した時点では鮮やかなブルーであったがすぐに白濁した色に変化した。

遺構10

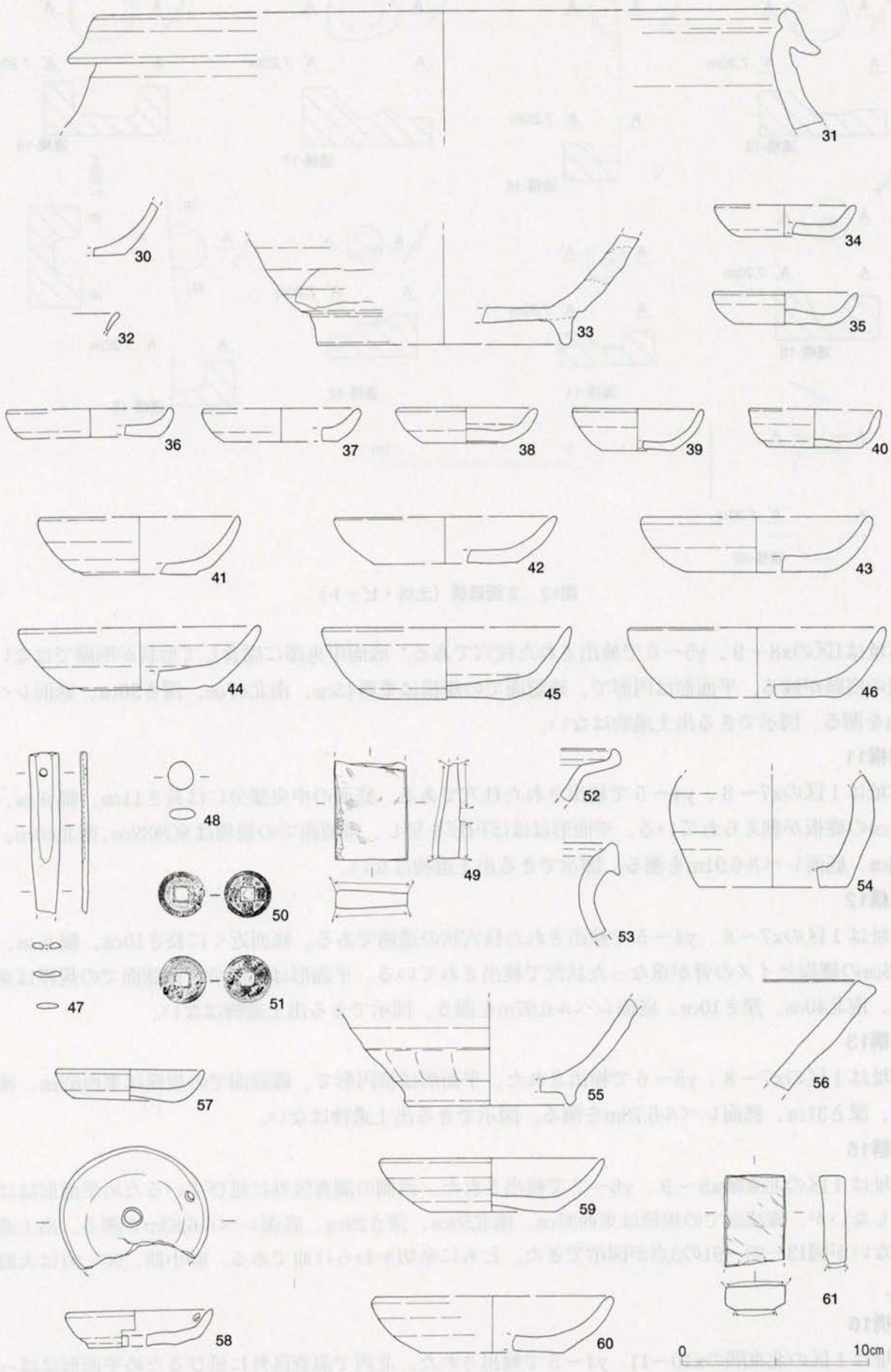


図11　2面道路出土遺物（2）

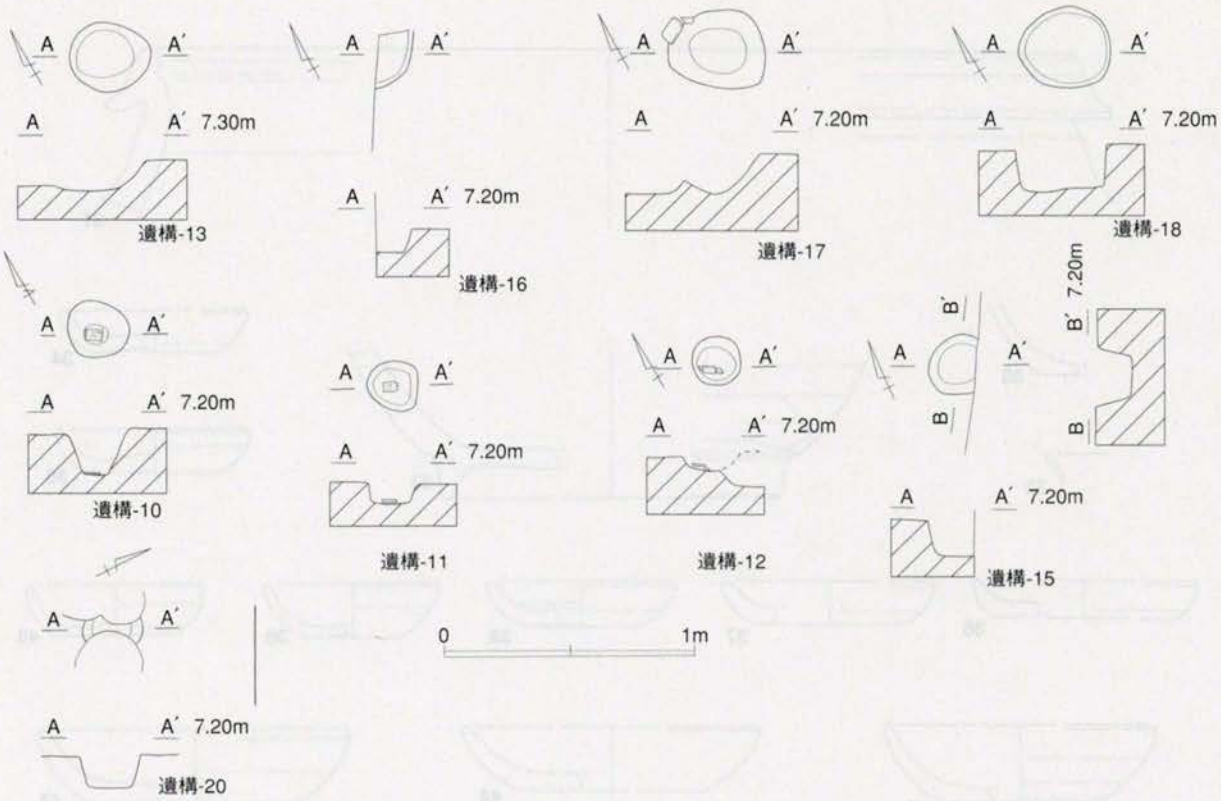


図12　2面遺構（土坑・ピット）

本址は1区のx8～9、y5～6で検出された柱穴である。底面中央部に腐食して形状が明確ではないが礎板の痕跡が残る。平面形は円形で、確認面での規模は東西45㎝、南北47㎝、深さ36㎝、底面レベル6.7mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構11

本址は1区のx7～8、y4～5で検出された柱穴である。底面の中央部分には長さ11㎝、幅9㎝、厚さ3㎝の礎板が据えられている。平面形はほぼ円形を呈し、確認面での規模は東西39㎝、南北40㎝、深さ18㎝、底面レベル6.91mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構12

本址は1区のx7～8、y4～5で検出された柱穴状の遺構である。底面近くに長さ10㎝、幅6㎝、厚さ2.6㎝の礎板とイヌの骨が重なった状況で検出されている。平面形は円形で、確認面での規模は東西40㎝、南北40㎝、深さ10㎝、底面レベル6.97mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構13

本址は1区のx7～8、y5～6で検出された。平面形は楕円形で、確認面での規模は東西62㎝、南北52㎝、深さ31㎝、底面レベル6.78mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構15

本址は1区の北東隅x8～9、y6～7で検出された。西側の調査区外に延びているため平面形ははっきりしないが、確認面での規模は東西35㎝、南北50㎝、深さ29㎝、底面レベル6,83mを測る。出土遺物は少ないが図13－89～91の3点が図示できた。ともに糸切かわらけ皿である。89小皿、90・91は大皿である。

遺構16

本址は1区の北東隅のx10～11、y4～5で検出された。北西で調査区外に延びるため平面形ははっきりしないが、確認面での規模は東西30㎝、南北45㎝、深さ7㎝、底面レベル6.85mを測る。図示できる

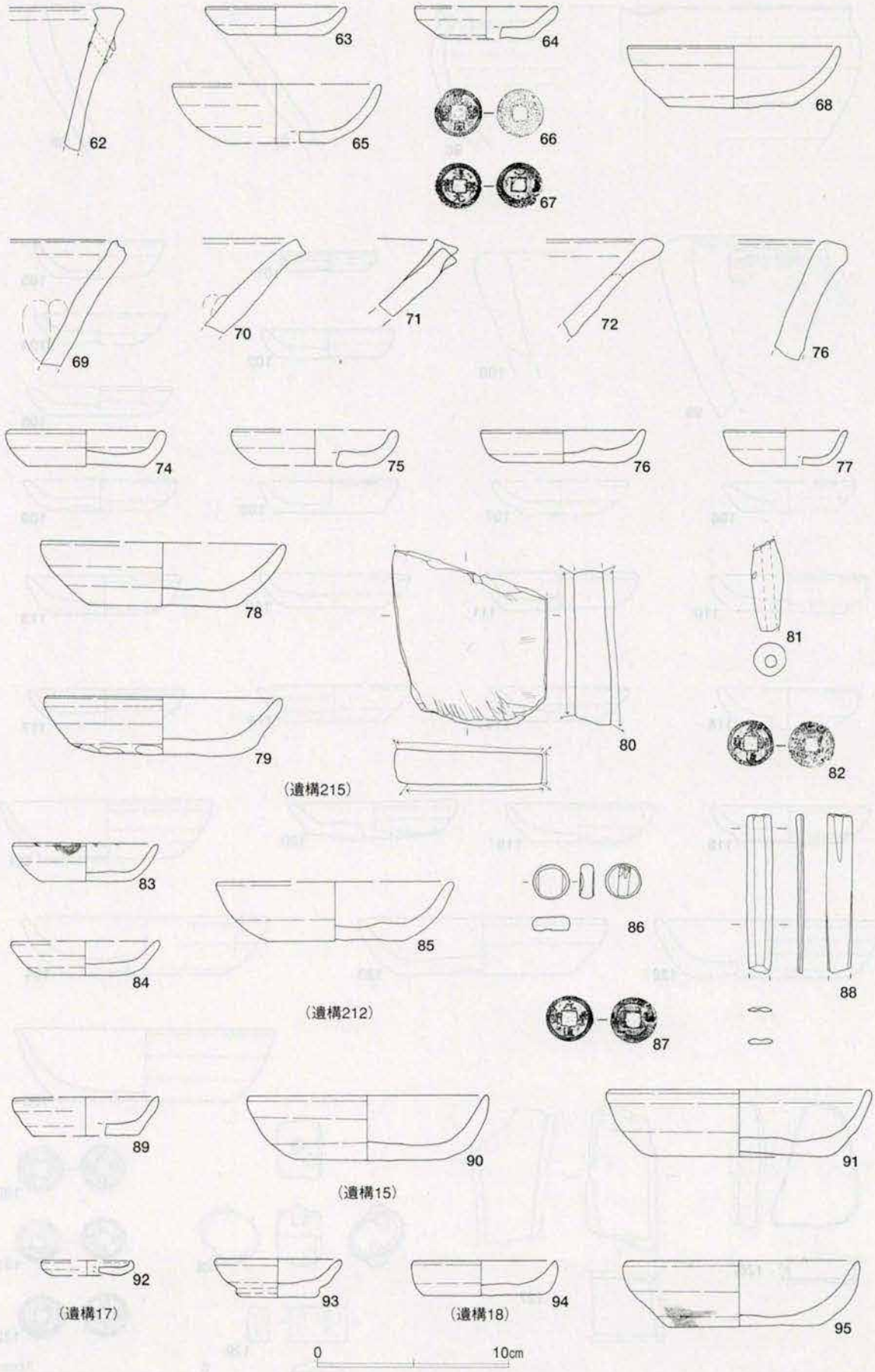


図13　2面遺構出土遺物

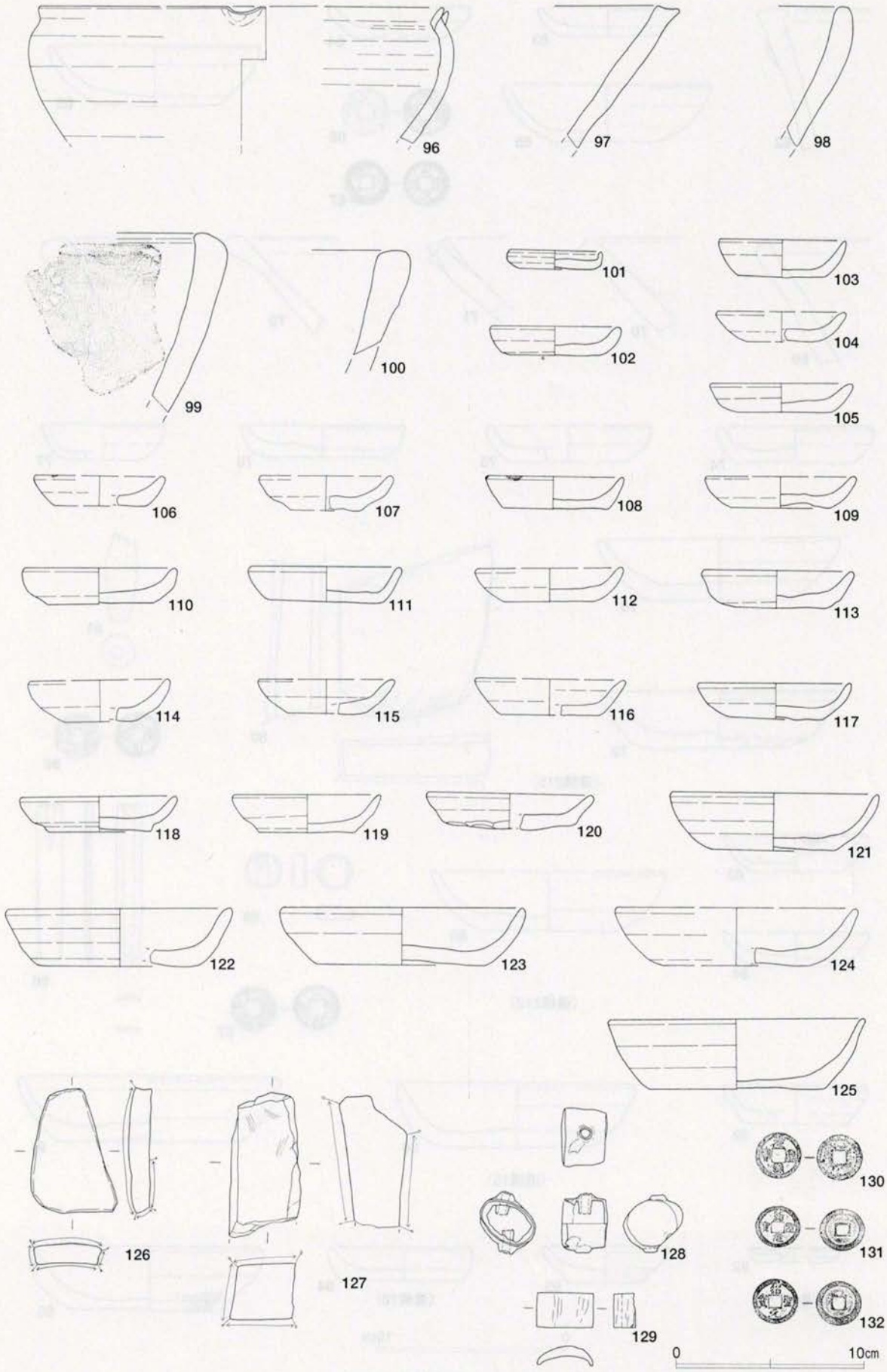

96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
0
10cm

図14　2面出土遺物

出土遺物はない。

遺構17

本址は１区のほぼ中央x7～８、y4～５で検出された。確認面での規模は東西75㎝、南北55㎝、深さ35㎝を測る。平面形は楕円形で、底面の高さは6.69mである。出土遺物は少なく、図13-92のコースター皿１点が図示できた。

遺構18

本址は１区の北側中央x6、y6で検出された。平面形はほぼ円形で、確認面での規模は東西70㎝、南北65㎝、深さ33㎝、底面レベル6.73mを測る。小さな遺構であるが、図13-93～95の糸切かわらけ皿３点が図示できた。93・94は小皿、95は大皿で灯明皿として痕跡がある。

遺構20（ピット）

本址は１区のx7～８、y4～５で検出され、遺構12、遺構13、遺構19に壊され、本址が一番古い。平面形は壊されている部分が多く明確ではないが、確認規模は東西22㎝、南北40㎝、深さ27㎝、底面レベル6.80mを測る。図示できる出土遺物はない。

２面出土遺物

２面検出時に出土した遺物のうち図14-96～132に37点が図示できた。96は常滑無頸壷の口縁部、97は常滑捏鉢口縁部、98～100は手焙り口縁部、98は土器質、99・100は瓦質である。101～125はかわらけ皿で、101は糸切りのコースター皿。102～120は小皿で、120の手づくね皿を除き全て糸切りである。小皿のうち106・108は灯明皿としての痕跡があり、103は器高が高く薄手作りである。121は比較的器肉の薄い中皿、122～125は大皿で、薄手つくりの皿は少ない。126は磨り常滑で３断面に磨り面がある。127は方形の中砥石で３面に使用痕あり、128は円柱状の銅製品で、向かい合う側面２箇所に0.4～0.5㎜の穿孔があるが用途不明。129は骨製品で製品を作った残りの部分と思われる、130～132は銅銭で、130は元豊通寶、初鋳年は1078年の北宋銭、131は紹聖元寶、初鋳年は1094年で北宋銭、132は紹聖元寶で1094年北宋銭である。

第３節　３面の遺構と遺物

３面は、１区では土坑と柱穴・礎板が数多く検出されているが、２区では１区ほど多くの遺構は検出されなかった。柱穴と礎板で建物の復元を試みたが、軸線はうかがい知ることはできても復元するには至らなかった。

遺構36

本址は１区西側x7～８、y2～３で検出され、遺構37を壊している。平面形はほぼ円形を呈し、底面東側に礎板と思われる木材が、状態が悪いながらも確認できた。確認面での規模は東西28㎝、南北32㎝、深さ10㎝、底面レベル6.52mを測る。遺物は少なく図17-133の糸切りかわらけ大皿１点が図示できただけである。

遺構37

本址は1区の西側、x7～８、y2～３で検出された。東側を遺構36に壊され、西は調査側溝に切られている。そのため平面形は明確に出来なかったが、おそらく円形であったと思われる。確認面での規模は東西12㎝、南北35㎝、深さ20㎝、底面レベル6.42mを測る。出土遺物は少なく、図17-134の糸切りかわらけ大皿１点が図示できた。やや器高が高い皿である。

遺構43

本址は１区の北西x、yで検出された。遺構101を壊している。平面形は東西に長い楕円形で、確認面

での規模は東西38㎝、南北35㎝、深さ10㎝、底面レベル6.65mを図る。出土遺物は少なく、図17-135の糸切りかわらけ小皿１点が図示できた。

遺構47

本址は１区東側のx6、y3で検出された礎板を伴うピットである。平面形はほぼ円形で、確認面での規模は東西30㎝、南北30㎝、深さ37㎝、底面レベル6.37mを測る。出土遺物は少なく図17-136の糸切りかわらけ小皿1点が図示できた。

土坑50

本址は1区のx5～６、y3～５で検出された。多くの遺構に壊されているが、平面形はおそらく隅丸方形を呈していたと思われる。確認面での規模は東西150㎝、南北120㎝、深さ50㎝、底面レベル6.24mを測る。覆土内から幅㎝、長さ100㎝ほどの板が３枚出土しているが、東側の調査区外に延びているため全長はわからない。出土状況から本址に伴う構造材とも思えないので、おそらく廃棄されたものであろう。

遺物は木製品を中心に図17－137～141の5点が図示できた。137は漆椀で内外面共に黒色系漆が施され、文様は赤色系漆で植物文の楓が内外に描かれている。138は一端を取っ手状に削り込んだヘラ状製品、139～141は箸である。

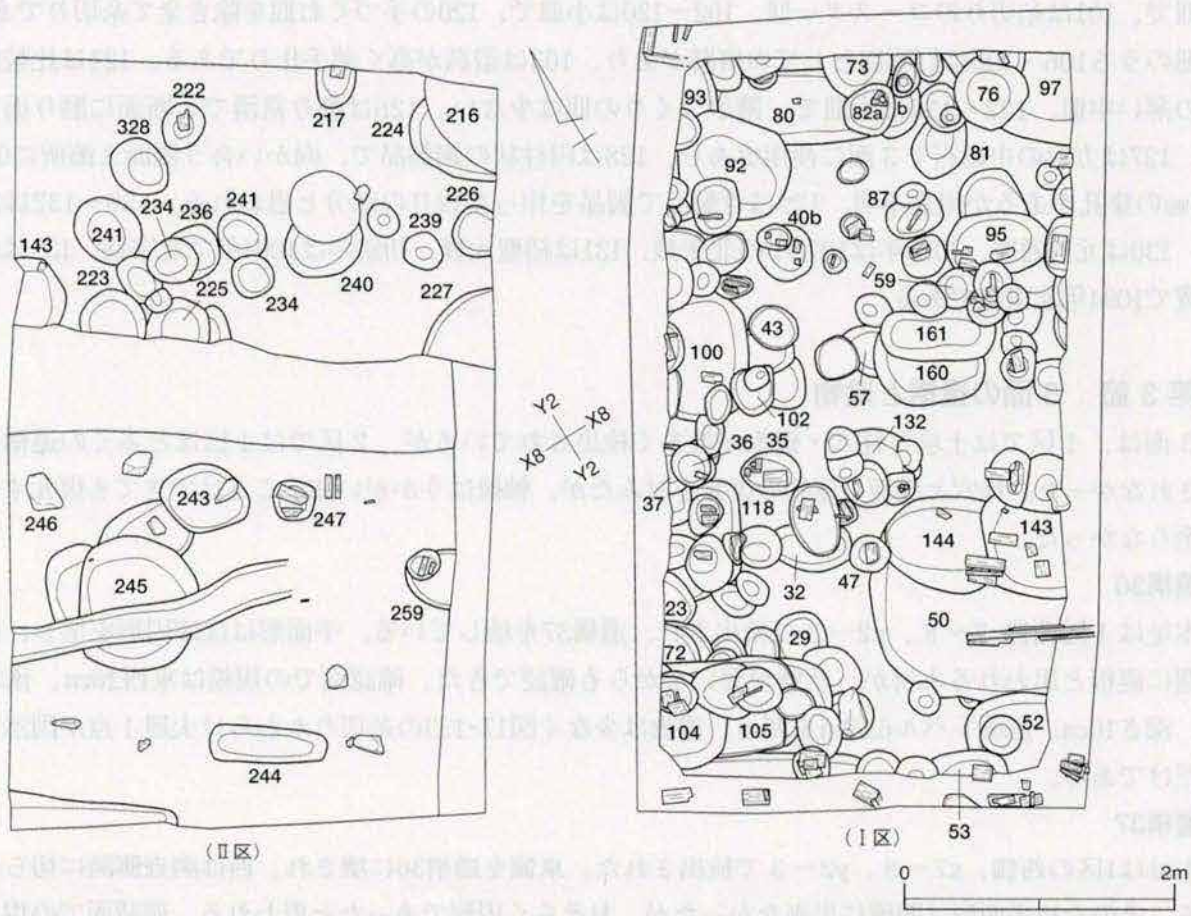


図15　３面全体図

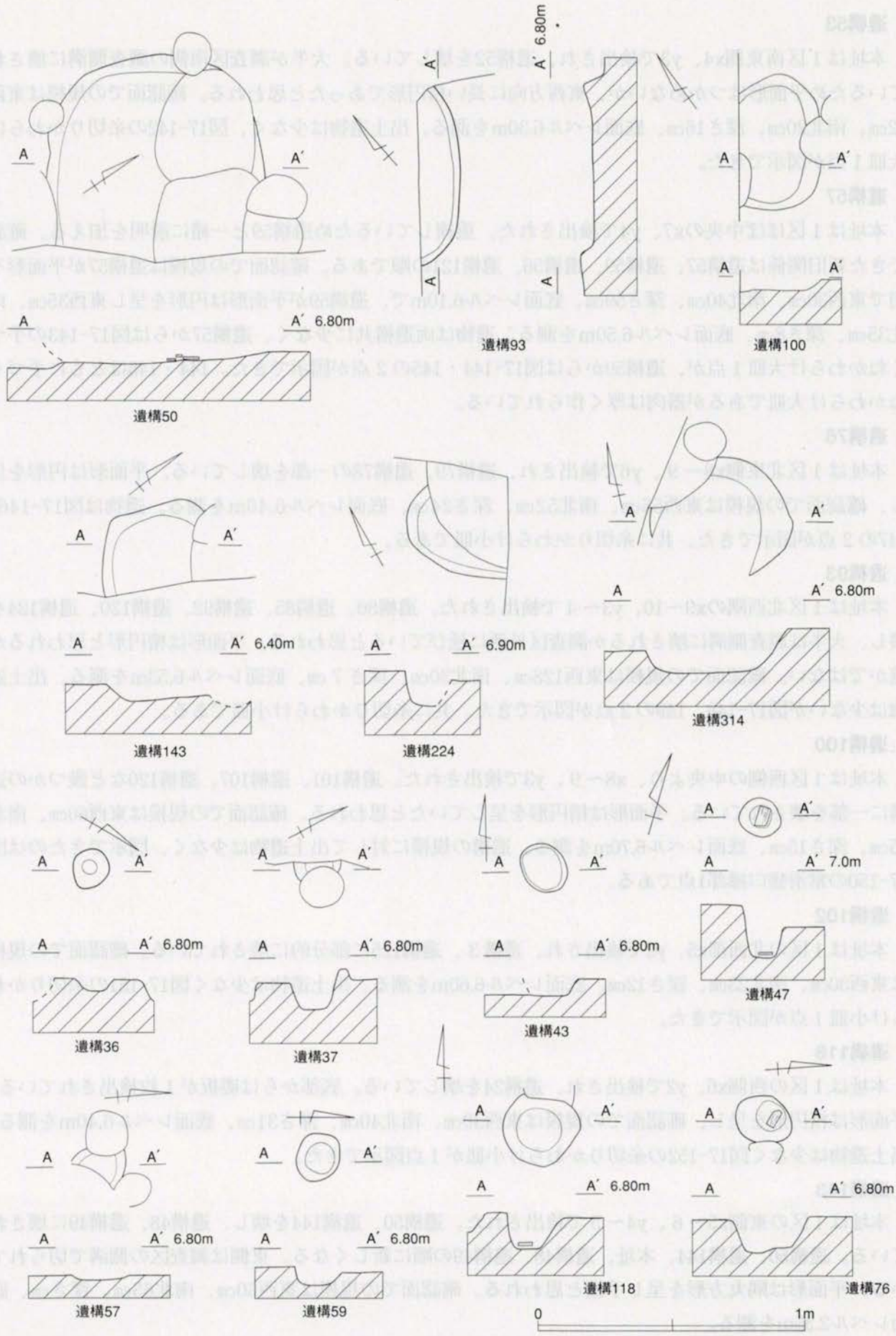


図16　3面遺構（土坑・ピット）

遺構53

本址は１区南東側x4、y3で検出され、遺構52を壊している。大半が調査区南側の調査側溝に壊されているため平面形はつかめないが、東西方向に長い楕円形であったと思われる。確認面での規模は東西62㎝、南北20㎝、深さ16㎝、底面レベル6.30mを測る。出土遺物は少なく、図17-142の糸切りかわらけ大皿１点が図示できた。

遺構57

本址は１区ほぼ中央のx7、y4で検出された。重複しているため遺構59と一緒に説明を加える。確認できた新旧関係は遺構57、遺構59、遺構56、遺構121の順である。確認面での規模は遺構57が平面形不明で東西30㎝、南北40㎝、深さ59㎝、底面レベル6.10mで、遺構59が平面形は円形を呈し東西35㎝、南北35㎝、深さ8㎝、底面レベル6.50mを測る。遺物は両遺構共に少なく、遺構57からは図17-143の手づくねかわらけ大皿１点が、遺構59からは図17-144・145の２点が図示できた。144・145はともに手づくねかわらけ大皿であるが器肉は厚く作られている。

遺構76

本址は１区北東側x8～９、y6で検出され、遺構79、遺構78の一部を壊している。平面形は円形を呈し、確認面での規模は東西55㎝、南北52㎝、深さ24㎝、底面レベル6.40mを測る。遺物は図17-146、147の２点が図示できた。共に糸切りかわらけ小皿である。

遺構93

本址は１区北西隅のx9～10、y3～４で検出された。遺構80、遺構85、遺構92、遺構120、遺構124を壊し、大半は調査側溝に壊されるか調査区外西に延びていると思われる。平面形は楕円形と思われるが確かではない。確認面での規模は東西128㎝、南北30㎝、深さ７㎝、底面レベル6.53mを測る。出土遺物は少ないが図17-148、149の２点が図示できた。共に糸切りかわらけ小皿である。

遺構100

本址は１区西側の中央より、x8～９、y3で検出された。遺構101、遺構107、遺構120など幾つかの遺構に一部を壊されている。平面形は楕円形を呈していたと思われる。確認面での規模は東西60㎝、南北95㎝、深さ15㎝、底面レベル6.70mを測る。遺構の規模に対して出土遺物は少なく、図示できたのは図17-150の常滑甕口縁部1点である。

遺構102

本址は１区の北西部x5、y2で検出され、遺構３、遺構125に部分的に壊されている。確認面での規模は東西30㎝、南北23㎝、深さ12㎝、底面レベル6.60mを測る。出土遺物は少なく図17-151の糸切りかわらけ小皿１点が図示できた。

遺構118

本址は１区の西側x6、y2で検出され、遺構24を壊している。底部からは礎板が１枚検出されている。平面形は楕円形を呈し、確認面での規模は東西30㎝、南北40㎝、深さ31㎝、底面レベル6.40mを測る。出土遺物は少なく図17-152の糸切りかわらけ小皿が１点図示できた。

遺構143

本址は１区の東側x5～６、y4～５で検出された。遺構50、遺構144を壊し、遺構48、遺構49に壊されている。遺構50、遺構144、本址、遺構48、遺構49の順に新しくなる。東側は調査区の側溝で切られている。平面形は隅丸方形を呈し手板と思われる、確認面での規模は東西60㎝、南北65㎝、深さ㎝、底面レベル2.35mを測る。

出土遺物は比較的多く、図17-153～157の５点が図示できた。153は手づくねかわらけ大皿で煤が付

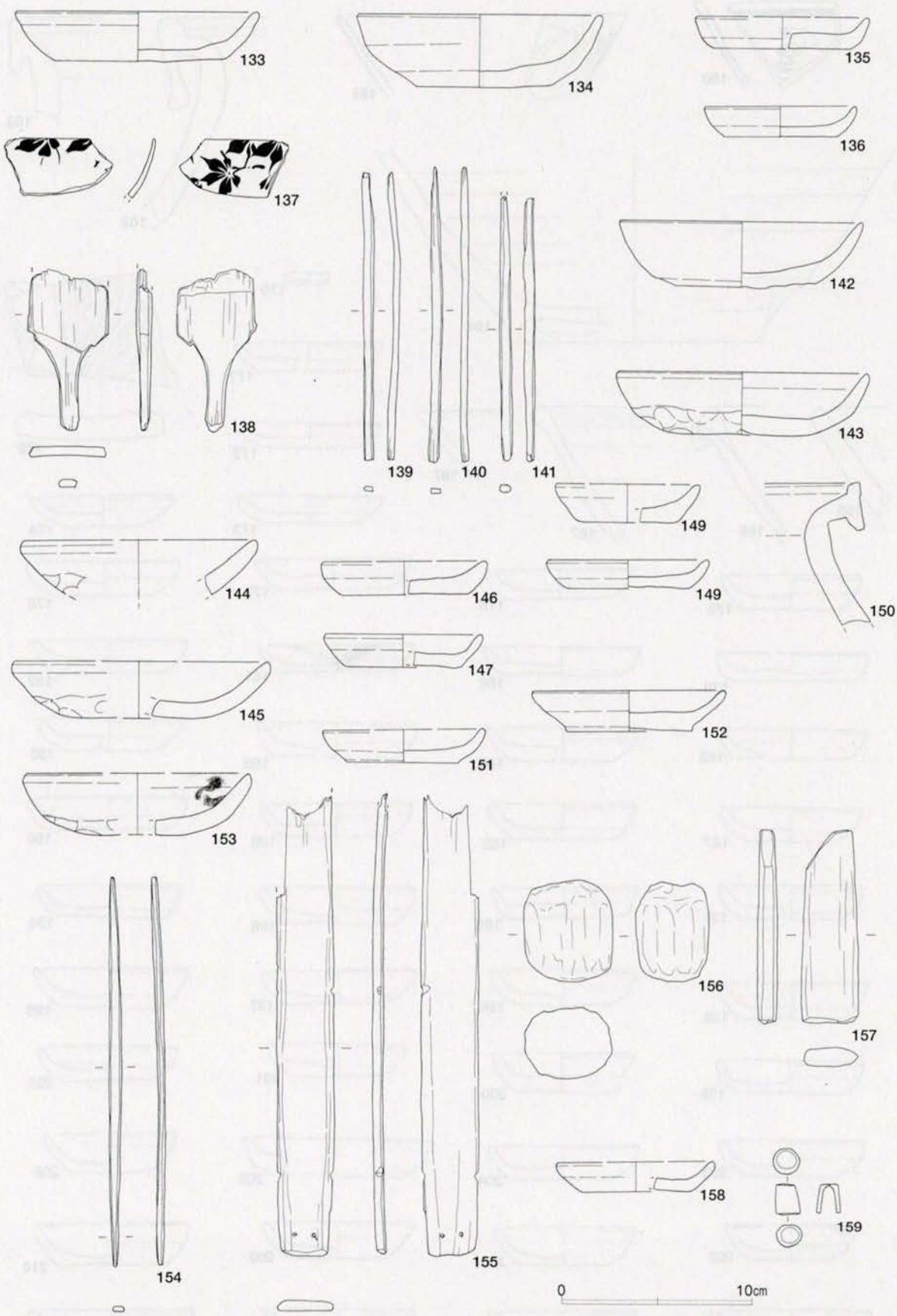


図17　3面遺構出土遺物

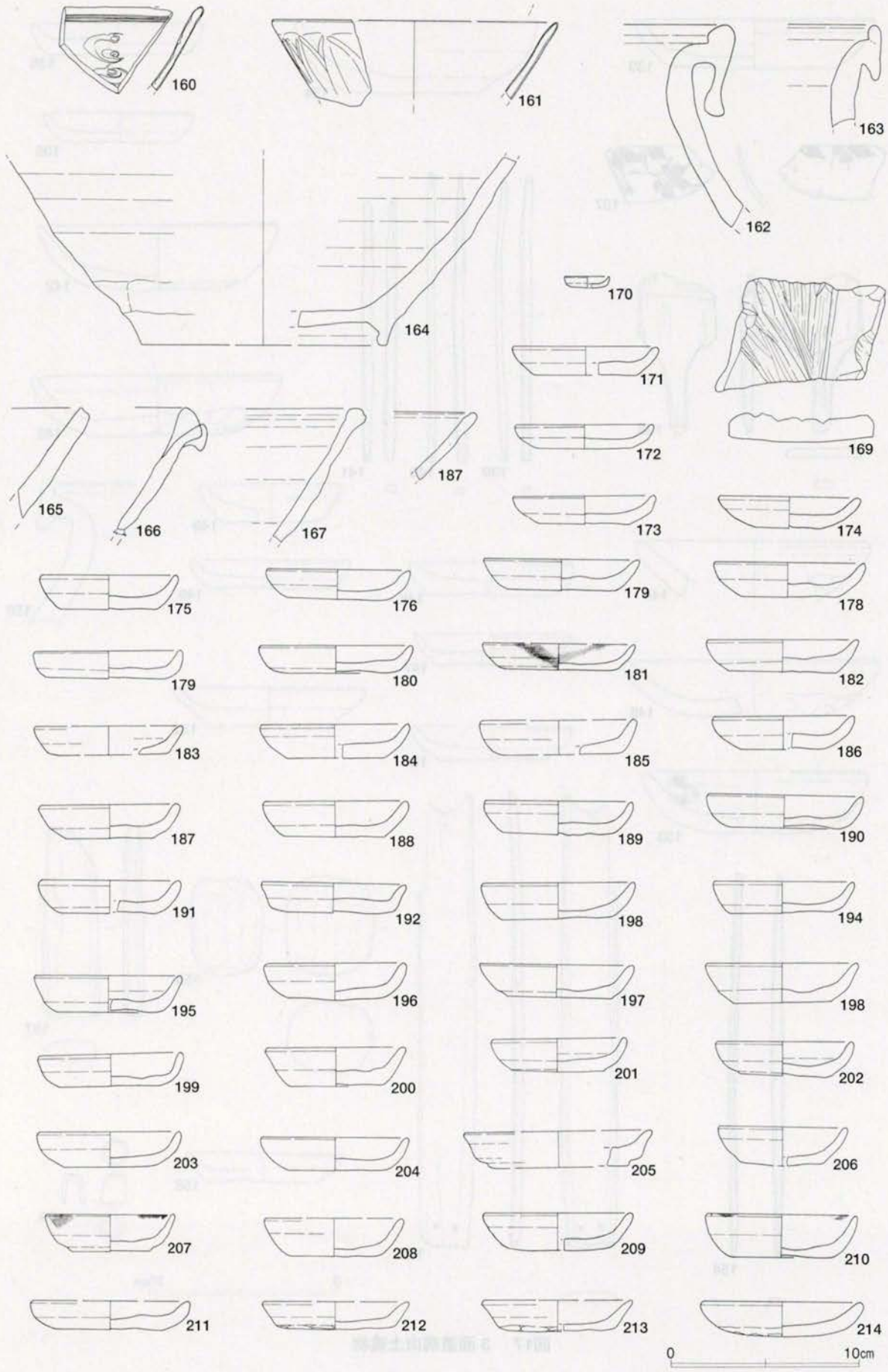

160
161
162
163
164
165
166
167
169
170
171
172
173
174
175
176
178
179
179
180
181
182
183
184
185
186
187
187
188
189
190
191
192
194
195
196
197
198
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
0
10cm

図18　3面出土遺物（1）

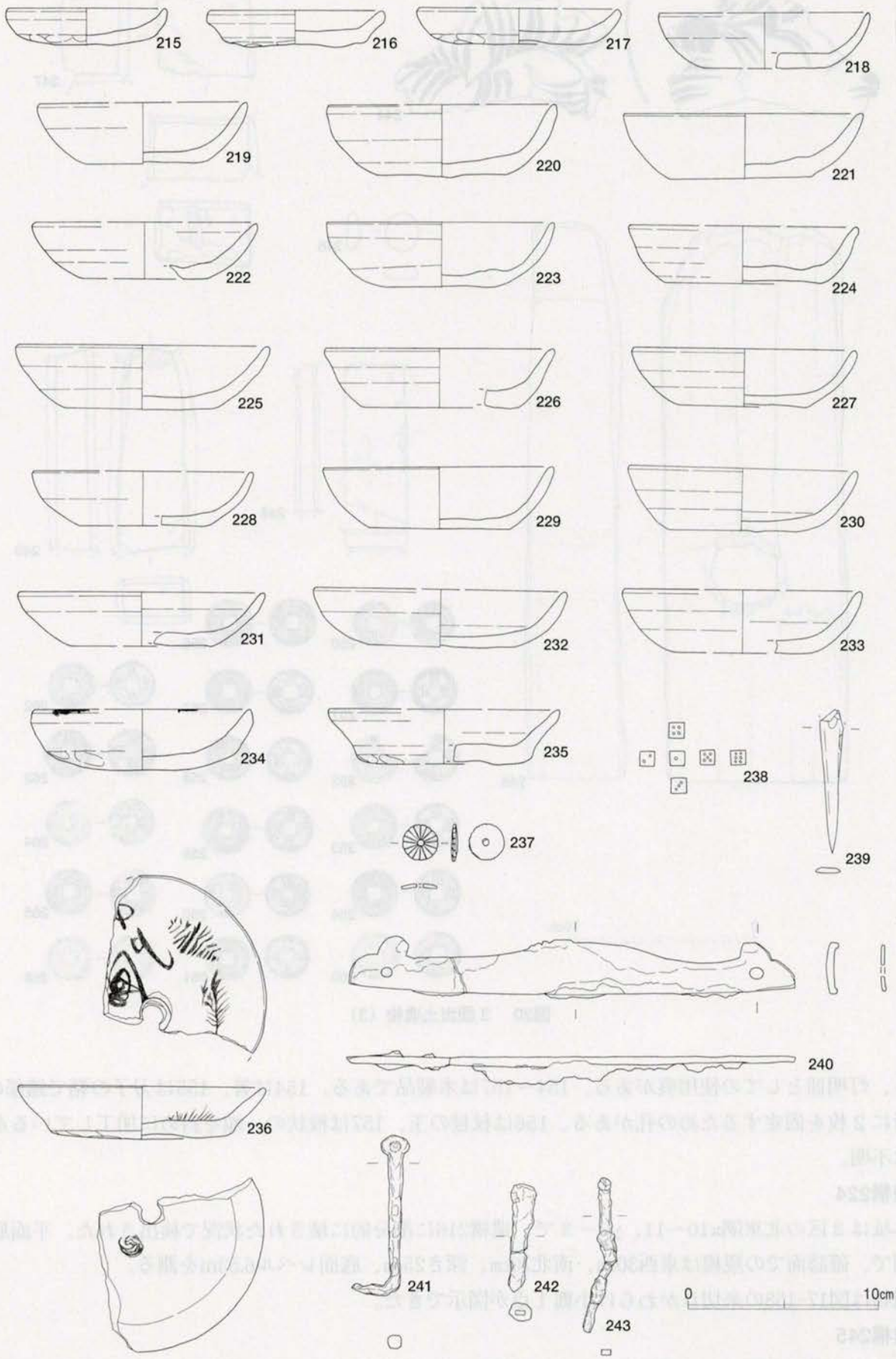

215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
238
237
239
240
236
241
242
243
0
10cm

図19　3面出土遺物（2）

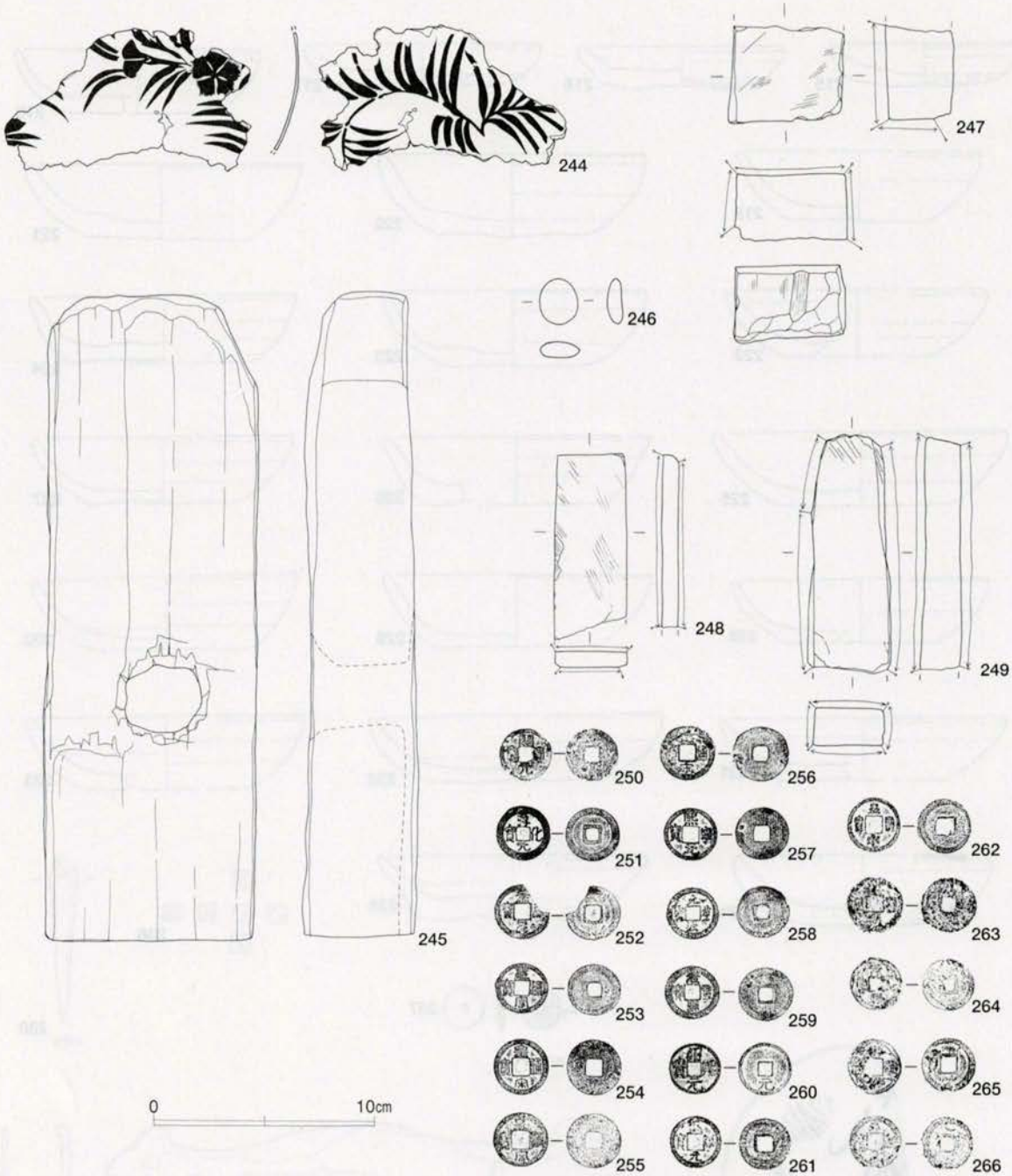


図20　3面出土遺物（3）

着し、灯明皿としての使用痕がある。154～157は木製品である。154は箸、155は刀子の鞘で鐺部の2箇所に2枚を固定するための孔がある、156は杖毬の玉、157は板状の一端を斜めに加工しているが用途は不明。

遺構224

本址は2区の北東隅x10～11、y2～3で、遺構216に部分的に壊された状況で検出された。平面形は不明で、確認面での規模は東西30㎝、南北70㎝、深さ25㎝、底面レベル6.53mを測る。

遺物は図17-158の糸切りかわらけ小皿1点が図示できた。

遺構245

本址は2区の南西x8、y2で検出された。遺構246の一部を壊している。平面形は緩やかな丸みを持つ楕円形を呈し、確認面での規模は東西95㎝、南北103㎝、深さ30㎝、底面レベル6.35mを測る。規模に

対して出土遺物は少なく、図17-159の１点が図示できた。159は骨角製品で小型のキャップ状製品であるが、箙の足とも考えられる。

３面出土遺物

３面検出時に出土した遺物のうち106点を図18～図20の160～266に図示した。160は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部、161は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、162・163は常滑甕口縁部、164は山茶碗窯捏鉢体部から底部、165は常滑捏鉢口縁部、166は魚住窯捏鉢、167は山茶碗窯系捏鉢口縁部、168は山茶碗口縁部、169は瓦器質の手焙りを砥石に転用したものと思われる（刃を磨いた痕跡が数本縦に筋状に残る）。170は瀬戸入子。171～236はかわらけ皿で、171～217が小皿、218・219が中皿、220～236が大皿である。小皿のうち手づくね皿は212～217の６点で糸切り皿が圧倒的に多い。糸切り小皿では器高が低く器肉が厚いものが多く、薄手で器高の高いものは少ない。このうち181・207・210は煤が付着し灯明皿として使用された痕跡がある。手づくね小皿も器肉が厚いものが多い。中皿はともに糸切り皿である。大皿でも手づくね皿は234～236の３点で、糸切り皿が多い。また、糸切り皿には13世紀初頭に位置づけられるタイプは含まれていない。手づくねの236は底面中央に径10㎜の穿孔があり、全体に煤が付着し、内底面には花押らしき文字と周囲に不鮮明な草木らしき絵が、外底面には崩れた巴文が描かれている。237～239は骨製品である。237は菊花を模した装飾品、238はサイコロ、239は笄で上部を欠損している。240～243は鉄製品である。240野沓で、野沓とは鞍の下に敷く「切付」に取り付けられるもので、鐙をつるす力革と切付のこすれを和らげる役目をもつものである。241は掛錠、242・243は釘である。244は漆椀で、内外面に黒漆系漆が塗られて赤色系漆で内外面に草・撫子が描かれている。245は木製品で礎板、径3.7㎝の引き穴が残っている。246は黒の碁石、247～249は石製品の砥石。247は方形の中砥、248は薄い短冊形、249はやや厚めの方形でともに鳴滝産の仕上砥石と思われる。250～266は銅銭。250は開元通寶で初鋳年は960年の北宋銭、251は淳化元寶で初鋳年は990年の北宋銭、252は景祐元寶で初鋳年は1034年の北宋銭、253～256は皇宋通寶で初鋳年は1038年の北宋銭、257は熙寧元寶で初鋳年は1068年の北宋銭、258・259は元豊通寶で初鋳年は1078年の北宋銭、260は紹聖元寶で初鋳年は1094年の北宋銭、261は□元通寶、262は聖宋通寶で初鋳年は1101年の北宋銭、263～266は判読不明である。

第４節　４面の遺構と遺物

４面には暗黄褐色砂層上で検出された遺構をあてた。検出されたのは土坑、柱穴が大半で１区の南では縦に並べられた築地壁のような痕跡が東西方向に検出され、２区では同じようなラインで部分的に板組みを残す溝状の遺構が確認されている。断定はできないが、ここでは同一遺構の可能性を考えた。柱穴には礎板を残すものが多く見られたが、建物を復元するには至らなかった。

遺構280

１区で検出された遺構200と同一遺構とした。２区では調査区の南側、２面道路遺構の下辺りで溝状に検出されている。調査区外西に延び、１区では溝状の落ち込みは確認できなかったが部分的な縦板と横板の痕跡などが確認されている。

2区の溝状の落ち込みは断面形皿形を呈し、西で上幅90㎝、深さ25㎝、底面レベル6.35m、東で上幅70㎝、深さ20㎝、底面レベル6.40mを測る。部分的に残る板材の痕跡では西で幅50㎝前後、東で幅55㎝ほどである。１区では板の痕跡が調査区外の東側に延びている。南北の板の痕跡は50㎝ほど離れるが、溝状の落ち込みは明確ではない。以上のことから本址を復元すると、本来は幅50㎝～60㎝の板組み溝であったと推定できる。

遺物は木製品を中心に７点が図24－287～293に図示できた。旧遺構別にすると289、290、293が２区

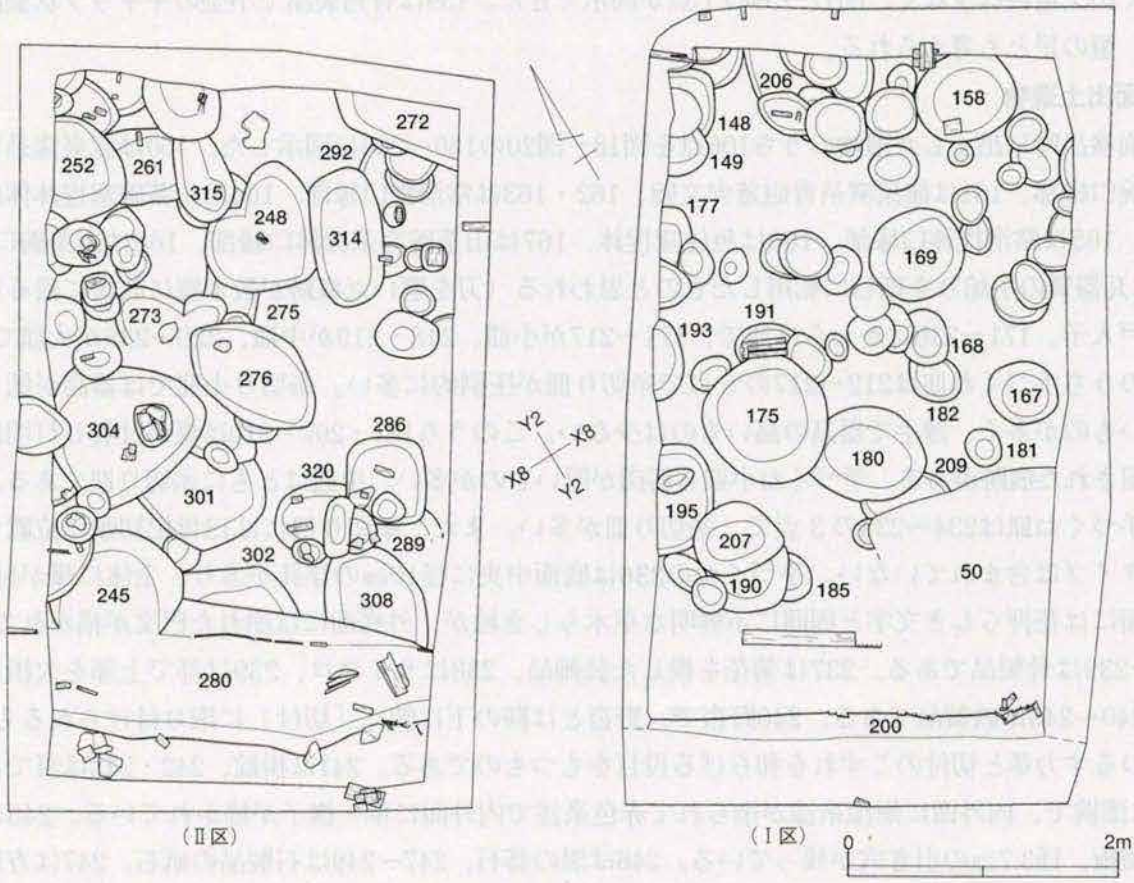


図21　4面全体図

遺構280でその他は1区遺構200出土である。287・288は糸切りかわらけ大皿で、288は外面に回転ナデ痕があり、鎌倉時代初期の様相を残している。289は漆皿、内外面に黒色系漆が塗られている、290は黒色系漆が塗られた横櫛、291は一端がやや薄く削られた箆状の製品であるが箆とはいえない、292は板草履芯、293は形代（シャモジ）である。

なお、図24-279・280の糸切りかわらけ小皿は、本址の2区部分で段差的に確認された部分からの出土である。同一遺構と確証が得られなかったので別に図示した。ともに糸切りかわらけ小皿である。

遺構175

本址は1区のx7、y3で検出され、遺構180、遺構191、遺構192、遺構205の一部を壊している。平面形はほぼ円形を呈し、確認面での規模は東西90cm、南北95cm、深さ33cm、底面レベル6.07mを測る。遺物は極めて少なく、図24-267の糸切りかわらけ小皿1点が図示できたにとどまる。鎌倉時代初期の様相を残している。

遺構181

1区の東側x6、y4で検出された。平面形はほぼ円形で、確認面での規模は東西25cm、南北28cm、深さ8cm、底面レベル6.36mを測る。覆土が少ないこともあり出土遺物は極めて少ない。わずかに図24-286の手づくねかわらけ大皿1点が図示できた。

遺構190

本址は1区の南側x6、y2～3で検出され、遺構194、遺構202、遺構207に部分的に壊されている。本址が一番古い。平面形は多くの遺構に壊されているために不明であるが、覆度には炭化物と細かな木片が多く含まれている。確認面での規模は東西65cm、南北30cm、深さ22cm、底面レベル6.15mを測る。遺

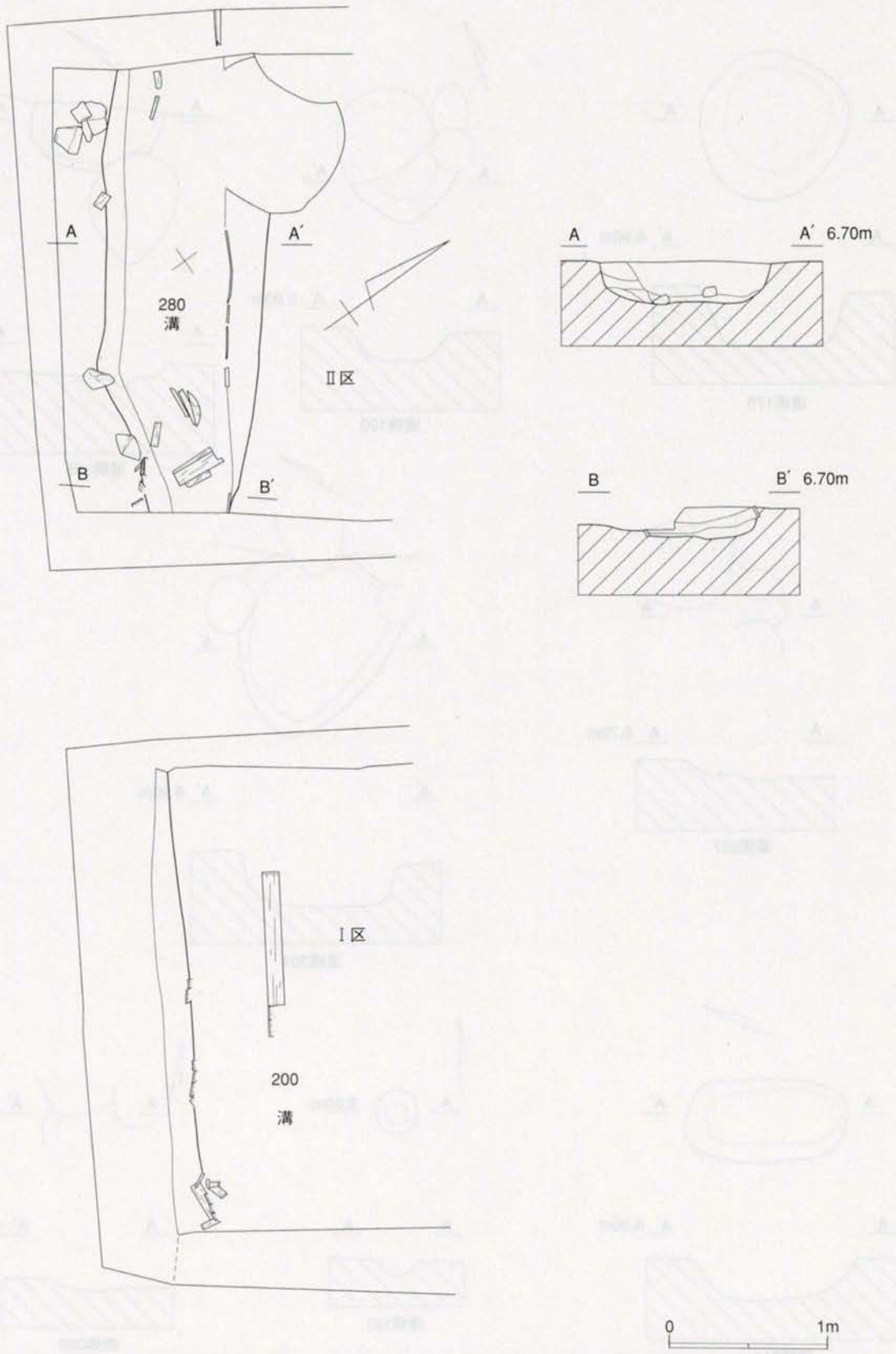


図22　4面遺構（1）

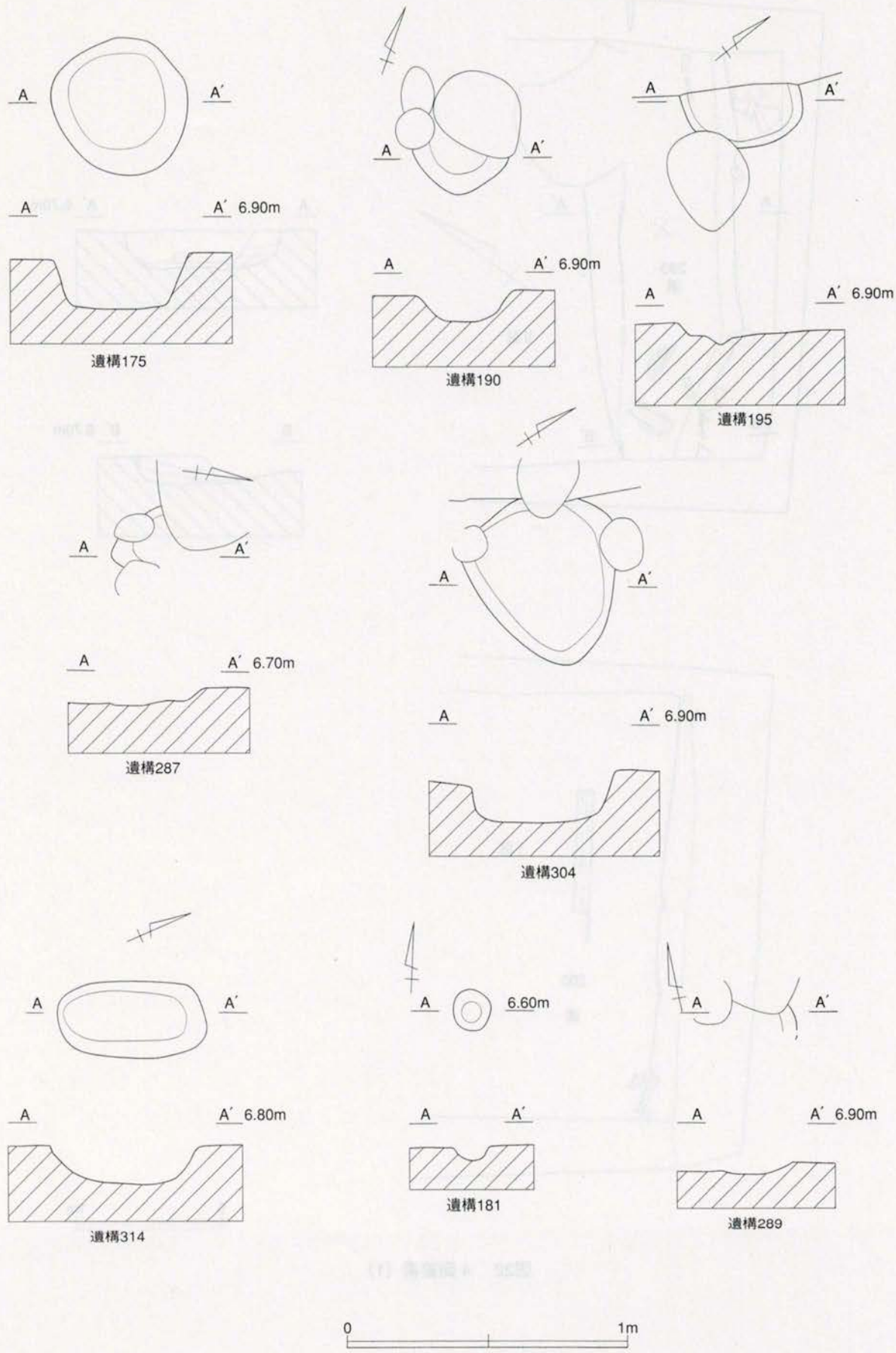

A
A′
A
A′ 6.90m
遺構175
A
A′
A
A′ 6.90m
遺構190
A
A′
A
A′ 6.90m
遺構195
A
A′
A
A′ 6.70m
遺構287
A
A′
A
A′ 6.90m
遺構304
A
A′
A
6.60m
A
A′
A
A′ 6.80m
遺構314
A
A′
遺構181
A
A′ 6.90m
遺構289
0
1m

図23　4面遺構（2）

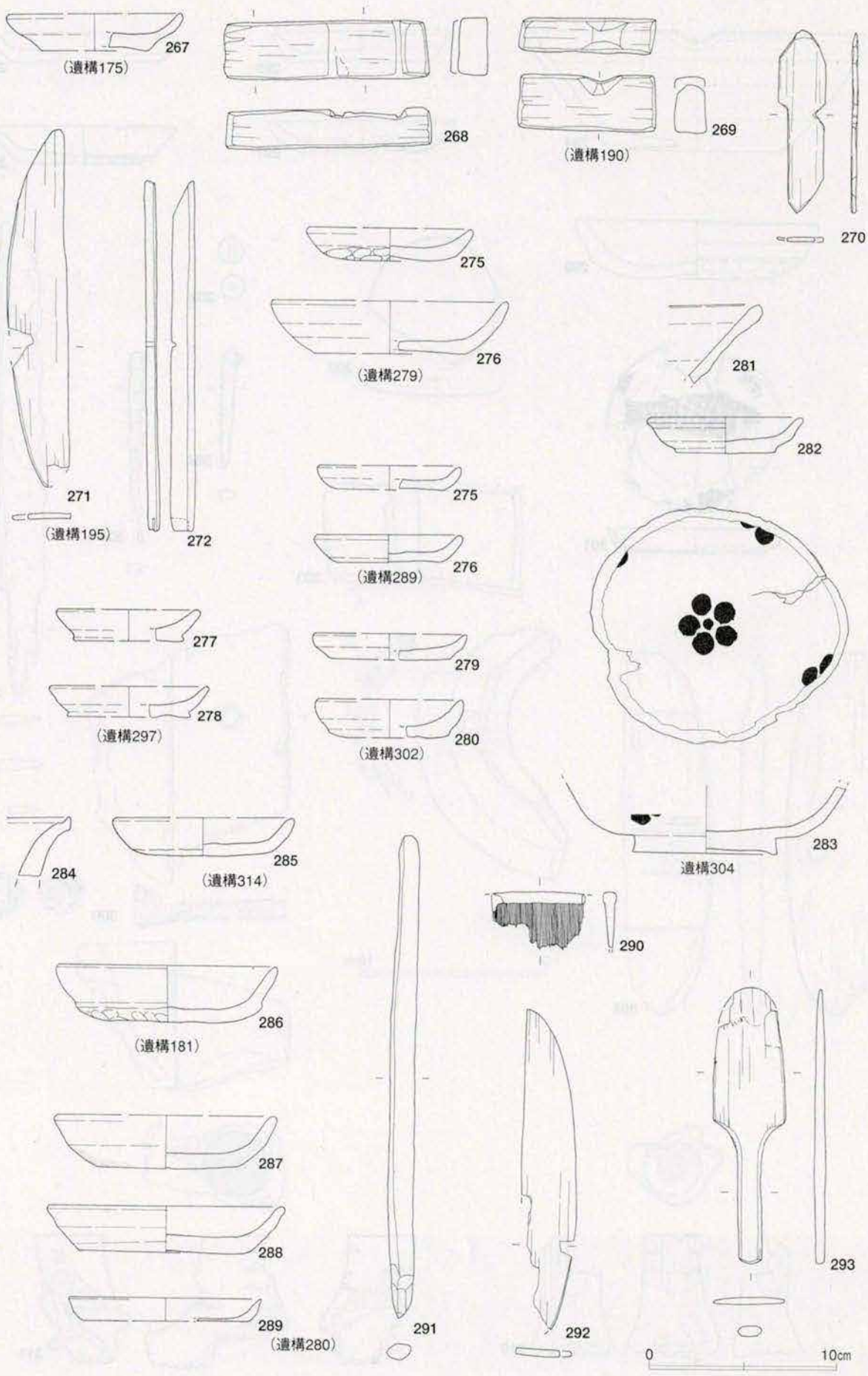


図24　4面遺構出土遺物

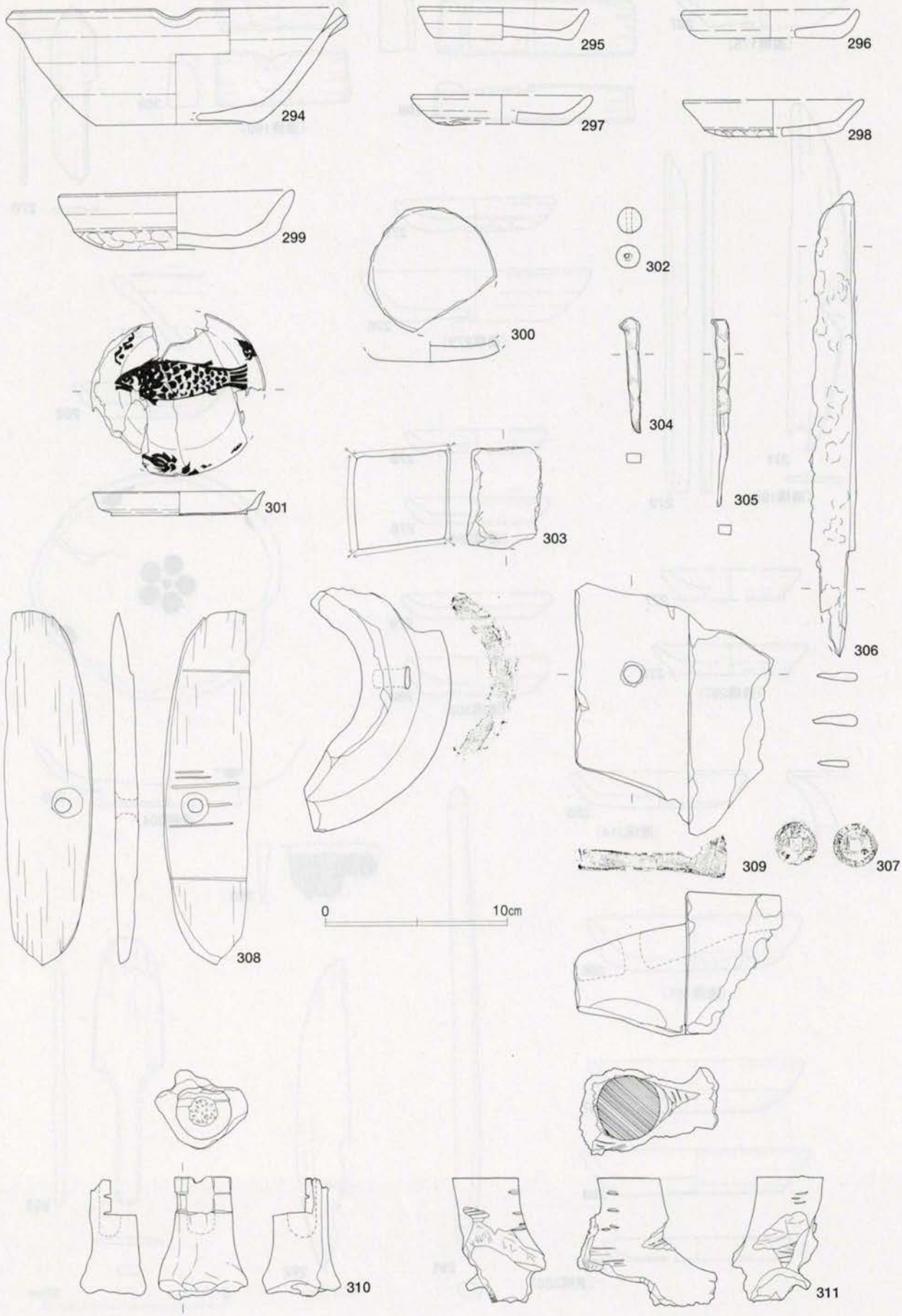

294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
0
10cm

図25　4面出土遺物

物は図24－268～270に木製品が３点図示できた。268は建具の部材の一部か、269は板状の一側面に窪みが削りこまれている。用途不明。270は薄い板状で両端をやや丸く尖らせ、中央の両側面から窪みを削りこんでいる。形代とも思えるが用途不明。

遺構195

本址は１区の西側x7、y2で検出された。東を遺構202に壊され、西は調査側溝に壊されて一部は調査区外に延びている。平面形は楕円形で、確認面での規模は東西40㎝、南北82㎝、深さ10㎝、底面レベル6.27m、主軸方向N－37°－Eを示す。遺物は木製品２点が図24-271・272に図示できた。271は草覆芯、272は転用されているが本来は調度品などの部材と思われる。

遺構279

本址は２区のほぼ中央、遺構276の下で部分的に検出された。平面図は提示できないほど部分的な検出である。遺構276に含まれる可能性もある。僅かな検出ではあるがかわらけ皿２点が図24-273・274に図示できた。273は手づくねかわらけ小皿、274は糸切りかわらけ大皿である。

遺構289

本址は２区の南東側のx7～８、y0で検出され、遺構302に壊されている。平面形はおそらく楕円形を呈していたと思われる。確認面での規模は、東西63㎝、南北58㎝、深さ12㎝、底面レベル6.45mを測り、長軸方向はN－22°－Eを示す。遺物は図24－275、276の２点が図示できた。ともに糸切りかわらけ小皿である。

遺構297

本址は２区の中央部分、遺構204の東側で検出された。多くの遺構に壊されて図示できる状況ではないが、図示できる遺物が少量出土している。図24－277、278は糸切りかわらけ小皿で、ともに外底面が突出している。

遺構304

本址は２区の西側中央のx9～10、y1で検出され、遺構296、遺構310に壊されている。平面形はやや形の崩れた楕円形を呈し、確認面での規模は東西120㎝、南北100㎝、深さ21㎝、底面レベル6.26mを測り、長軸方向はN－110°－Eを示す。

遺物は図24-281～283に３点が図示できた。281は山茶碗窯系捏鉢、282は糸切りかわらけ小皿で鎌倉時代初期の様相を残している、283は漆椀で内外面に黒色系漆を塗り、内外面中央に赤色系漆で梅が描かれている。

遺構314

本址は２区の北東部x10、y1で検出された。平面形は楕円形を呈し、確認面での規模は東西55㎝、南北105㎝、深さ25㎝、底面レベル6.37mを測り、長軸方向はN－21°－Eを示す。遺物は少なく、図24－284、285の2点が図示できた。284は常滑壺口縁部、285は糸切りかわらけ小皿である。

４面出土遺物

４面の遺構を調査中に出土した遺物から18点を図25-294～311に示した。294は常滑捏鉢口縁部～胴部、295～299はかわらけで、295～298は小皿、299は大皿。295・296は糸切りかわらけ小皿で、295は口径も大きく鎌倉時代初期の様相を呈している。297・298は手づくねかわらけ小皿で器肉は比較的薄く良好な作りである。299は手づくねかわらけ大皿。300はかわらけの底部外周を打ち欠いた円盤状土製品、301は漆皿で、内外面に黒色系漆が塗られ、内底面に赤色系漆で鯉が、側面に菊葉の意匠が描かれている。302は白濁色と赤色の混じったトンボ玉、303は石製品で砥石、304・305・306は鉄製品で、304・305は釘、306は刀子、307は銅銭で判読不明である。308は木製品で下駄、309は男瓦で8㎜の釘穴

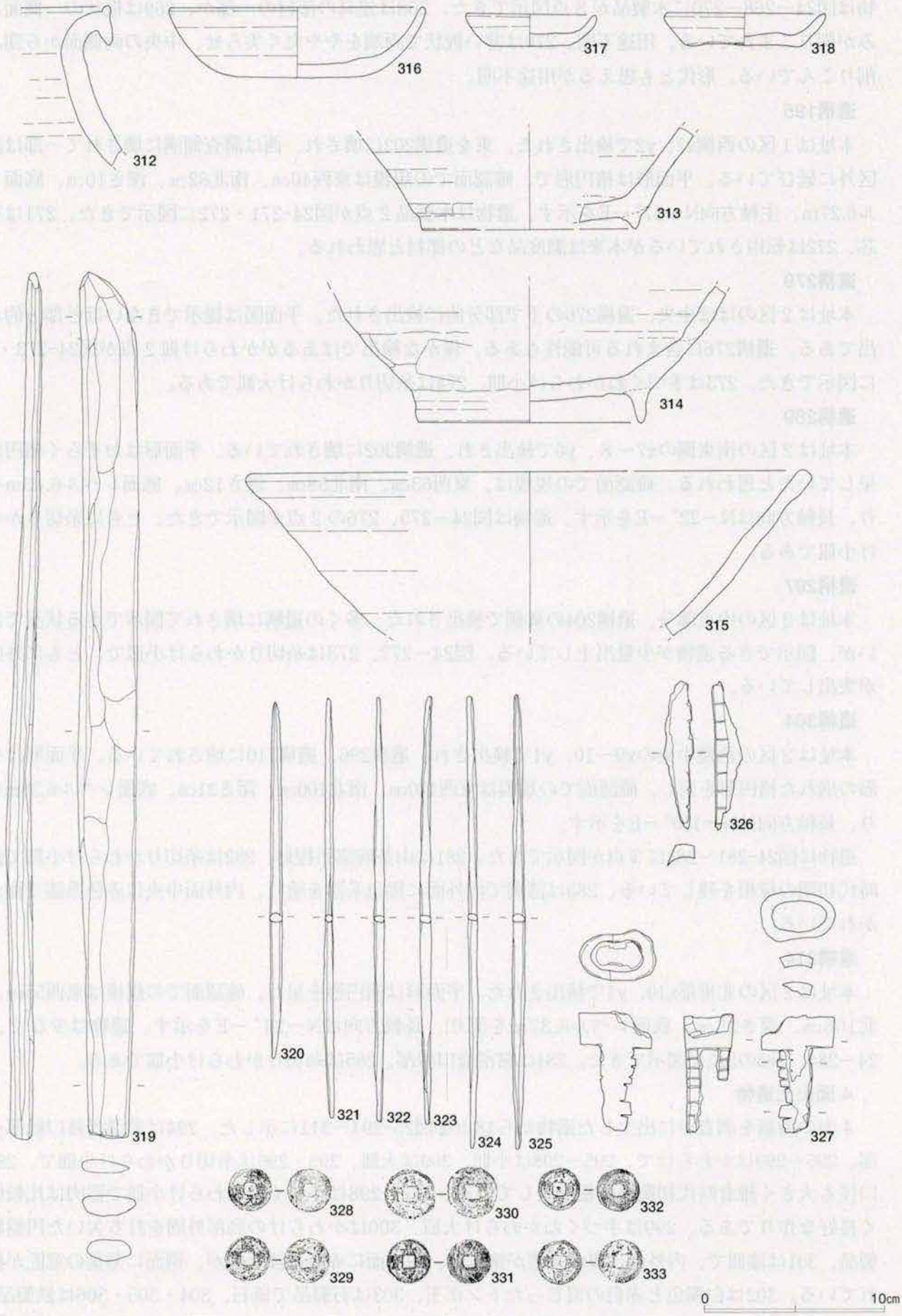

312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
0
10cm

図26　遺構外出土遺物

あり、310・311は切断痕のある動物骨である。

第５節　遺構外その他

調査中に排水の目的で調査区周囲に巡らした側溝あるいは表採された遺物のうち22点を図26-312～333に示した。312は常滑甕口縁部、313～315は山茶碗窯系捏鉢、313・314は胴部～底部、315は口縁部、316～318は糸切りかわらけ。319～325は木製品で、319は木刀あるいは刀形、320～325は箸、326・327は加工・切断痕のある動物骨、328～333は銅銭、328は景徳元寶で初鋳年は1009年の北宋銭、329は熙寧通寶で初鋳年は1068年の北宋銭、330は紹聖通寶で初鋳年は1094年の北宋銭、331は嘉祐通寶で初鋳年は1056年の北宋銭、332は開元通寶、333は元祐通寶で初鋳年は1086年の北宋銭である。

第3章　まとめと考察

第1節　遺跡名称について

調査地点を含む遺跡名称となっている「能蔵寺」について若干の考察を加える。本名称の記述があるのは『鎌倉廃寺辞典』（以下、廃寺辞典）の能蔵寺の項と『鎌倉事典』の来迎寺の項だけで、『新編相模国風土記稿』（以下、『風土記稿』）には記述が見られない。記述を見ると、『鎌倉事典』の来迎寺の項には「もと衣笠城で戦死した三浦義明を弔うために建てられた真言宗能蔵寺があったというが、いつの頃かに時宗に改めた」という寺伝が紹介されており、『廃寺辞典』の能蔵寺の項は「現在小町253～270番地、乱橋材木座207～358番地の字を能蔵寺という」きわめて簡単な記述で、その出典として亀田氏の「鎌倉」三の三をあげている。

一方『風土記稿』の乱橋村には能乗寺蹟の記述が「村ノ北端ニアリ。里老ノ伝ニ大町別願時ノ旧趾ナリト云フ。別願時伝ヲ閲スルニ古昔真言宗ニテ能成寺ト云ヒシコト見ユレド、此地ニ在リシ事ヲ伝ヘズ」とあり、乱橋村の北端に「能乗寺跡」があることがわかる。さらに、これが天文二十一年（1552）他の小町村大巧寺文書に「鎌倉能成寺分山中近江屋敷之事（略）」と書かれている能成寺か否かわからないとしている。能成寺は、『風土記稿』別願時の項に「往昔ハ真言宗ニテ能成寺ト云ヒシトゾ、起立年代、開山等詳ナラズ、弘安五年五月、遊行始祖一遍廻国ノ時、住僧公忍故アリテ改宗シ、則一遍弟子トナリ」とあり、弘安五年（1282）に時宗・別願時に改めたという。改宗される前の真言宗・能成寺が材木座にあったか現在の別願寺付近に在ったのかはわからない。『風土記稿』の来迎寺項には能蔵寺の記述は見られない。

いずれにしても「のうぞうじ」と呼ばれる廃寺は前出の記事を除くと、材木座には見当たらない。想像をたくましくして「のうじょうじ」と呼ばれる寺院が亀田氏の指摘する小町と乱橋材木座に同時期かあるいは前後して在ったが、寺院の廃絶後の伝承の中で「のうぞうじ」に訛り、能蔵寺という文字になったか、あるいは調査地点周辺に能成寺の領地が在って伝承されていくうちに「のうぞうじ」という字名になったと考えておきたい。

話はややはずれるが、乱橋は乱橋村と材木座村との間を流れる川に架かる橋で、これが両村の境になっていたことが『風土記稿』記されている。本来材木座村一村であったものを元禄頃（1688～1703）に分村したが住民は二村の名前を合わせていい、『風土記稿』を記すにあたり住民の戸数等を分けることが曖昧であると記されているが、著名な建造物などは乱橋を境として書いていると判断できる。記述に従うと、現在判断できる材木座村の北境は補陀落寺と小名沼浦の妙長寺旧蹟であり、これに対して乱橋村の南境は高御倉小路、弁ケ谷、観音寺ケ谷、九品寺、新居閻魔堂である。当然のように実相寺、妙長寺、向福寺などは乱橋村にある。夫々の位置関係を見ると、高御倉小路と弁ケ谷は補陀落寺の東にあり、東西方向で区分することは難しい。しかし、九品寺と補陀落寺との間は、旧道が分断されている為に不明瞭になるが、旧道の北と南で両村を区分することは可能である。この場合、現在の乱橋は新道の妙長寺と向福寺の間、やや妙長寺よりにあるが、旧道の補陀落寺と九品寺の間のどこかに乱橋があったことになる。

滑川の流路とその河口にあったとされる潟湖についてはあまり触れないが、材木座村の地名に中島、川尻、沼浦があるため、材木座村の一部は滑川の河口あるいは潟湖に接していたと考えられる。

第４章　能蔵寺跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鎌倉市材木座二丁目294番３外に所在する能蔵寺跡において発掘調査が行われ、遺跡周辺の古植生を検討する目的で土壌試料が採取された。以下にはこの土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、13世紀や中世以前における遺跡周辺の古植生について検討した。

２．試料と分析方法

試料はサブトレンチ北壁より採取された３試料（試料番号１～３）と、調査区北壁の３試料（４～６）の計６試料である。各試料について、サブトレンチ北壁の試料１（４層）は黒褐色の泥炭質粘土で、材片が点在している。本層上位の３層は砂（飛砂）で、５面（13世紀初頭）構成土である。また下位の５層は黄褐色の砂層、さらに下位の６層（試料２）は黒褐色の泥炭質粘土で、やはり材片が認められる。その下位の７層は黄褐色の砂層で、試料３（10層）はさらに下位の黒色泥炭で、試料２の下位90㎝層準より採取した。調査区北壁の試料４（４層：４面覆土）は黒灰色の砂質粘土で、黄褐色の砂が多く混入している。試料5（50層：5面覆土）は黒灰色粘土、試料６（31層）は材片が散在する黒褐色の砂質粘土で、５面より掘り下げられた土坑の埋積土である。時期について、４面は13世紀中頃、５面は13初頭と考えられている。これら６試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約４～７g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

３．分析結果

検出された花粉・胞子・寄生虫卵の分類群数は、樹木花粉29、草本花粉29、形態分類を含むシダ植物胞子５、寄生虫卵３の総計66である。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表１に、分布を図１（サブトレンチ）、図２（調査区北壁）に示した。なお分布図について、図１の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。しかしながら図2については得られた樹木花粉数が少なかったことから全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

サブトレンチ北壁：スギの多産で特徴づけられ、最上部の試料１でも40%を越えている。次いでコナラ属のコナラ亜属とアカガシ亜属が多く、出現率はほぼ10～20%を示している。その他マツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、シイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）などが５%前後の出現率を示しており、イボタノキ属は試料2において10%近くを示している。草本類ではアカザ科－ヒユ科が試料１、２で多産しており、出現率は30%～40%を示している。イネ科は20%前後を示しており、カヤツリグサ科は試料３において30%を越えている。その他ではヨモギ属が試料２において突出した出現率約25%

表 1　産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6
樹木							
マキ属	*Podocarpus*	-	-	2	-	-	1
モミ属	*Abies*	-	-	5	-	1	-
ツガ属	*Tsuga*	3	1	3	1	3	-
トウヒ属	*Picea*	-	1	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	2	8	6	-	11	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	3	4	1	5	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	3	1	1	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	48	25	123	3	10	10
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	7	5	11	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	-	1
クルミ属	*Juglans*	-	-	1	-	2	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	1	2	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	3	-	1	1	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	3	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	14	19	15	4	3	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	11	23	25	-	4	5
クリ属	*Castanea*	-	-	3	-	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	6	6	1	-	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	3	3	2	1	-	-
サクラ属近似種	*cf. Prunus*	1	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	1	1	-	-	1	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	-	-
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	1	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	1	-	-	-	-
マタタビ属近似種	*cf. Actinidia*	1	-	-	-	-	-
サカキ属－ヒサカキ属近似種	*cf. Cleyera-Eurya*	1	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	1	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	8	-	-	-	-
タニウツギ属	*Weigela*	-	-	-	-	1	-
草本							
ガマ属	*Typha*	8	27	36	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	-	-	2	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	6	-	1	1
イネ科	Gramineae	204	150	178	32	203	289
カヤツリグサ科	Cyperaceae	121	31	236	1	4	24
ユリ科	Liliaceae	-	1	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	6	-	-	1	1
ギシギシ属	*Rumex*	1	7	-	-	-	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	2	12	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	332	287	4	17	44	13
スベリヒユ属	*Portulaca*	-	1	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	10	52	-	-	3	7
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	12	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	4	-	-	1	-
アブラナ科	Cruciferae	14	26	2	19	15	25
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	-	1	-	-	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	1	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	2	-	3	5
マメ科	Leguminosae	-	1	1	-	5	2
セリ科	Umbelliferae	3	2	7	5	8	-
ナス属	*Solanum*	1	3	-	-	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	1	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	1	1	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	1	-	-	-	3	-
ゴキヅル属－アマチャヅル属	*Actinostemma - Gynostemma*	1	-	-	-	-	-
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	-	-	-	-	3	-
ヨモギ属	*Artemisia*	44	245	23	11	106	33
他のキク亜科	other Tubuliflorae	3	5	4	-	12	4
タンポポ亜科	Liguliflorae	16	1	2	31	24	5
シダ植物							
ゼンマイ科	Osmundaceae	6	3	2	-	1	-
ミズワラビ属	*Ceratopteris*	-	1	2	-	-	-
サンショウモ	*Salvinia natans*	1	-	1	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	23	6	4	2	7	5
三条型胞子	Trilete spore	15	3	1	-	6	1
回虫	*Ascaris*	112	239	-	-	12	23
鞭虫	*Trichuris*	465	821	-	1	51	93
肝吸虫	*Clonorchis*	1	2	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	103	106	210	14	43	18
草本花粉	Nonarboreal pollen	760	854	516	116	449	411
シダ植物胞子	Spores	45	13	10	2	14	6
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	908	973	736	132	506	435
不明花粉	Unknown pollen	8	10	19	11	22	5

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

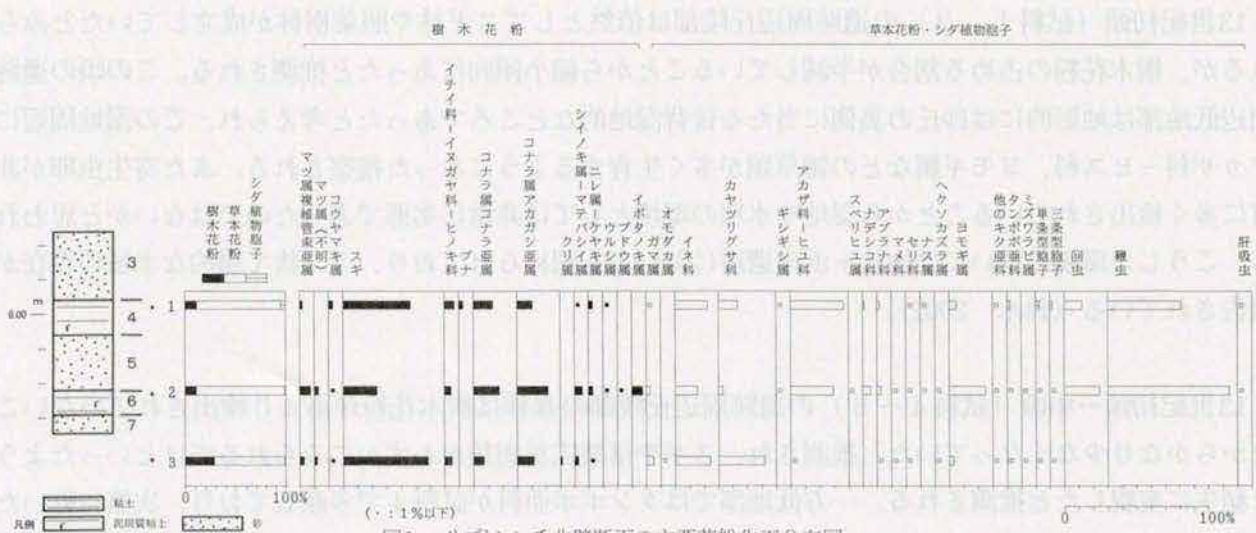


図1　サブトレンチ北壁断面の主要花粉化石分布図
（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

図2　調査区東西断面の主要花粉化石分布図
（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

を示している。また試料１、２で寄生虫卵が非常に多く観察されている。

調査区北壁：樹木花粉の占める割合は非常に低く、その中でスギが全試料１％を越えて得られている。草本類ではイネ科が多く、試料６では約66％を示すが上部に向かい急減している。反対にカヤツリグサ科は上部に向かい増加しており、最上部試料4においてアブラナ科やタンポポ亜科ガ突出した出現を示している。またヨモギ属が試料５で多く観察されている。寄生虫卵の回虫卵や鞭虫卵がイネ科と同様に上部に向かい減少する傾向を示している。

４．遺跡周辺の古植生

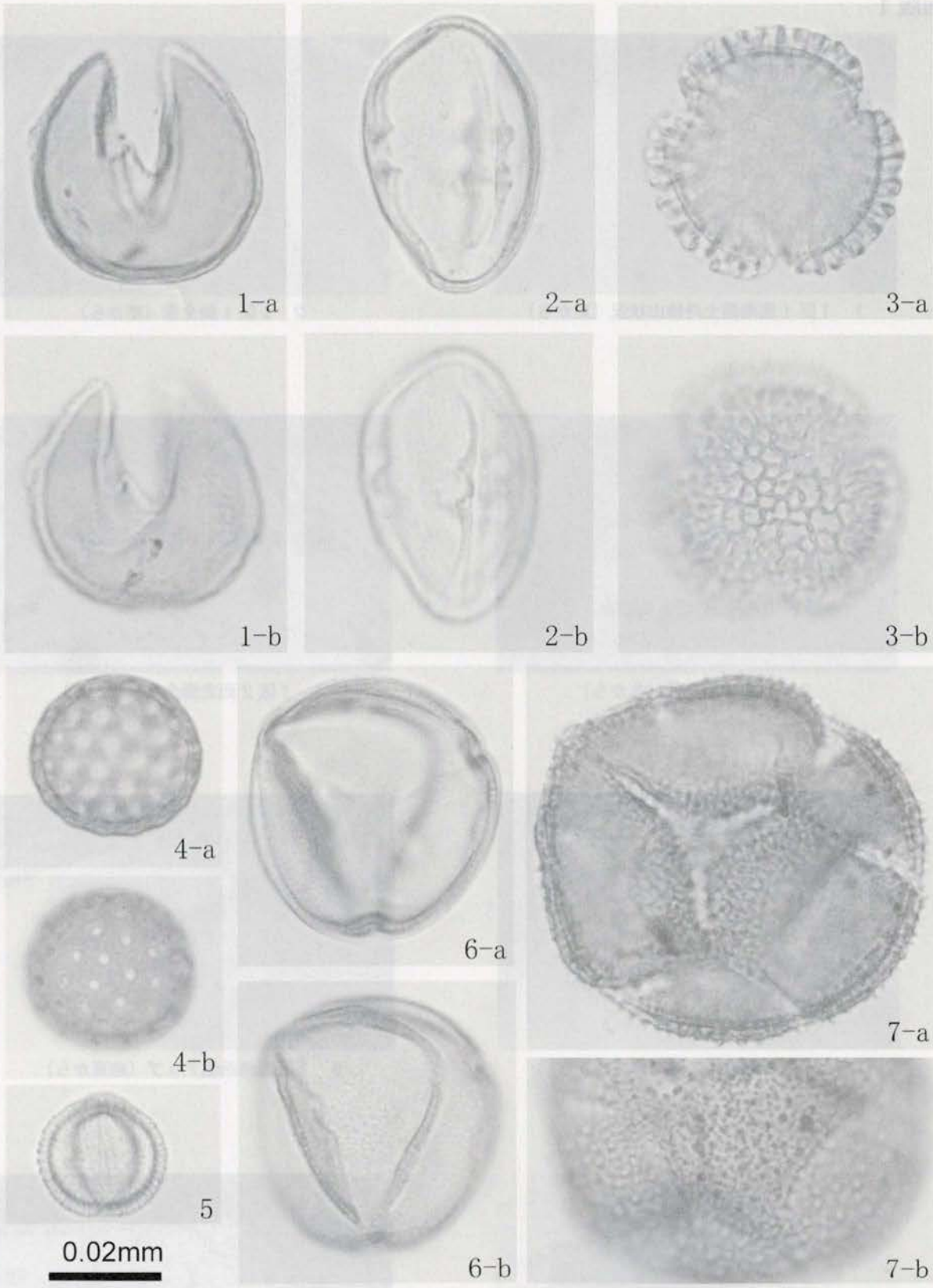
試料３は発掘状況から中世以前と考えられるが、現時点において詳しい時期については不明である。この頃の能蔵寺跡周辺丘陵部の斜面部を中心にスギ林が成立しており、丘陵の尾根部にはアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林が分布していたと推測される。一方低地部は泥炭の堆積から、湿地的環境であったことが推測され、そうしたところに水生植物のガマ属やオモダカ属、ミズワラビ属などが生育していたとみられる。またオモダカ属やミズワラビ属は水田雑草を含む分類群であることから一部で水田稲作が営まれていた可能性も考えられる。

13世紀初頭（試料１、２）の遺跡周辺丘陵部は依然としてスギ林や照葉樹林が成立していたとみられるが、樹木花粉の占める割合が半減していることから縮小傾向にあったと推測される。この頃の遺跡周辺低地部は地形的には砂丘の裏側に当たる後背湿地的なところであったと考えられ、この湿地周辺にアカザ科ーヒユ科、ヨモギ属などの雑草類が多く生育するようになった推察される。また寄生虫卵が非常に多く検出されていることから湿地や水域の環境としては非常に劣悪であったのではないかと思われる。こうした環境については由比ヶ浜南遺跡においても認められており、ゴミ捨て場的な水域の存在が報告されている（鈴木　2002）。

13世紀初頭～中頃（試料４～６）の遺跡周辺丘陵部の森林は樹木花粉があまり検出されていないことからかなり少なくなっていたと推測され、スギや落葉広葉樹類がわずかにみられるだけといったような植生に変貌したと推測される。一方低地部ではタンポポ亜科が試料４で多産しており、次第に乾いた陸域が広がるようになったと推測され、このタンポポ亜科をはじめとしてアカザ科ーヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などの雑草群落が広くみられるようになったと推察される。

引用文献

鈴木　茂・新山雅広・松葉礼子（2002）由比ケ浜南遺跡の花粉化石．由比ヶ浜南遺跡発掘調査団編「神奈川県鎌倉市由比ヶ浜南遺跡 第3分冊・分析編Ⅱ」：135-143、鎌倉市由比ヶ浜南遺跡発掘調査団．



図版　能蔵寺跡の花粉化石

1：スギ　PLC.SS 4226　No.2

2：ウルシ属　PLC.SS 4222　No.2

3：イボタノキ属　PLC.SS 4224　No.2

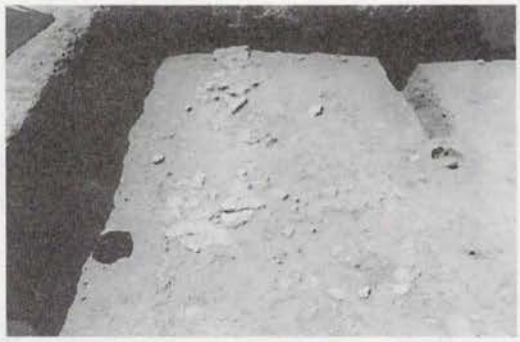
4：アカザ科　PLC.SS 4221　No.2

5：アブラナ科　PLC.SS 4223　No.2

6：ギシギシ属　PLC.SS 4227　No.2

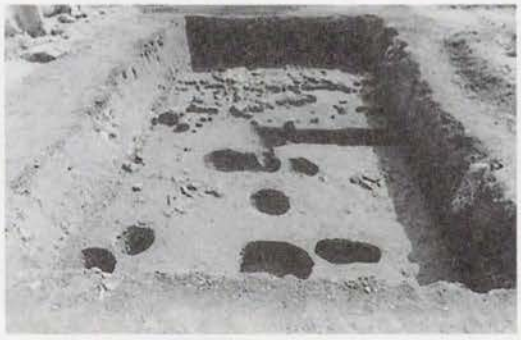
7：スベリヒユ属　PLC.SS 4225　No.2

図版１



1　Ⅰ区１面南側土丹検出状況（東から）

2　Ⅱ区１面全景（南から）



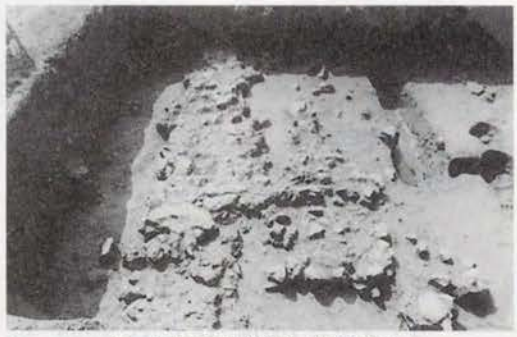
3　１区２面全景（北から）

4　Ⅰ区２面北側全景（東から）

5　Ⅰ区２面道路二時期目（西から）

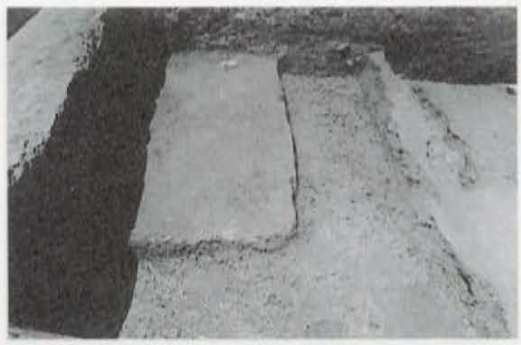
6　Ⅰ区道路西側アップ（南東から）

7　Ⅰ区２面遺構10完掘状況

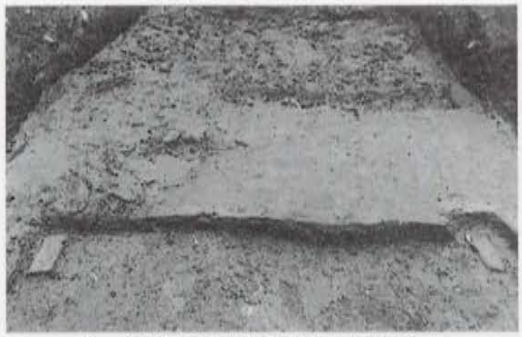


8　Ⅰ区２面道路（東から）

1　Ⅰ区２面全景（北から）

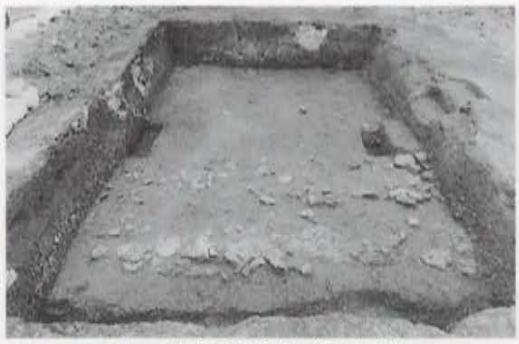


2　Ⅰ区２面遺構21溝（東から）

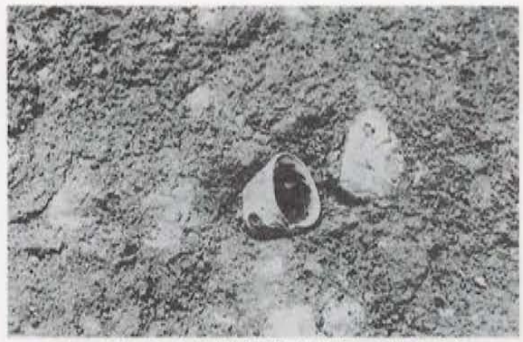


3　Ⅰ区２面北側礎板列（北から）

4　Ⅰ区２面柱１検出状況（西から）



5　Ⅱ区２面全景（南から）

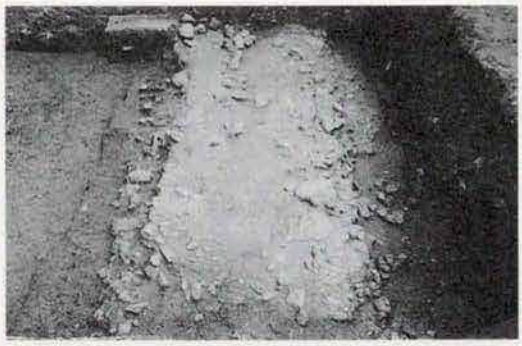


6　Ⅱ区２面銅製品出土状況（北から）

7　Ⅱ区２面ガラス出土状況

8　Ⅱ区２面道②-１（西から）

図版 3

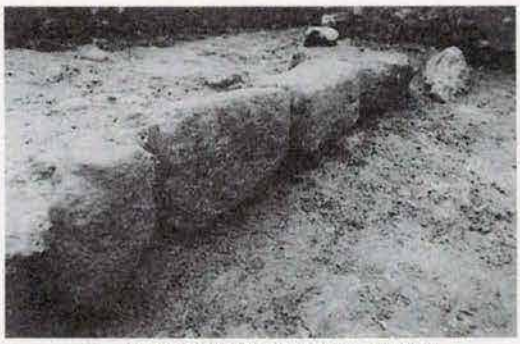


1　Ⅰ区２面道路②-１（西から）

2　Ⅱ区２面道路②-２（東から）

3　Ⅱ区２面道路２石積検出状況（南から）

4　Ⅱ区２面道路３（西から）



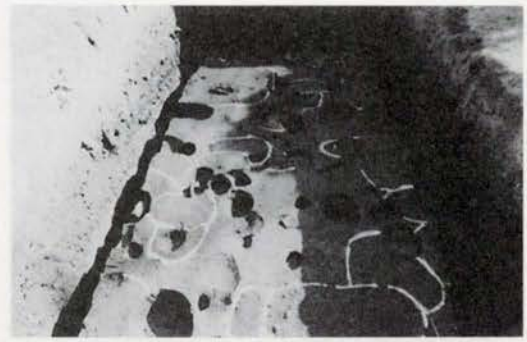
5　Ⅱ区２面道路③石組み（北東）

6　Ⅱ区２面北側石列（北東）

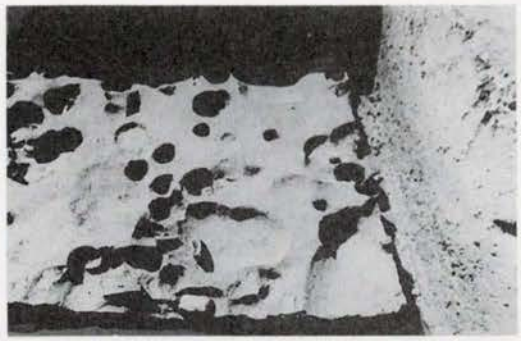
7　Ⅱ区２面③④（東から）

8　Ⅱ区２面④東壁セクション（西から）

1　Ⅱ区２面道路④アップ（北から）



2　Ⅰ区３面全景及びプラン確認（北から）

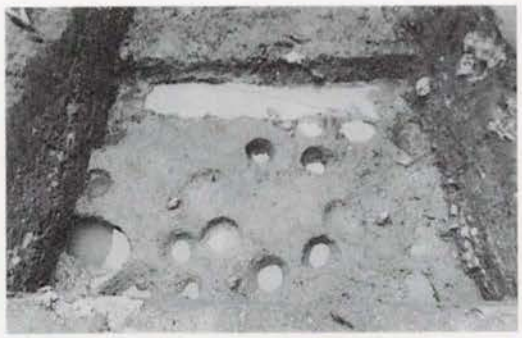


3　Ⅰ区３面北半分全景（東から）

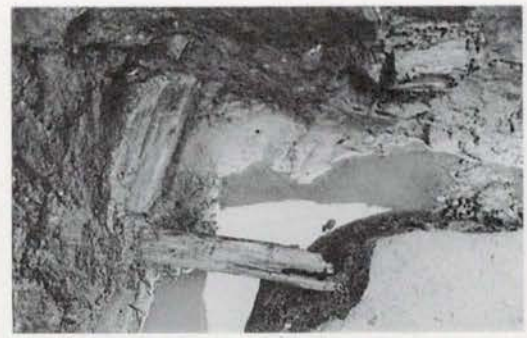
4　Ⅰ区３面遺構140柱検出状況

5　Ⅰ区３面木組み（排水溝）（南から）

6　Ⅱ区３面南側全景（西から）

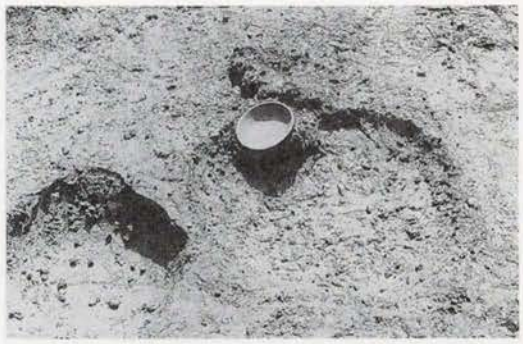


7　Ⅱ区３面北側全景（北から）



8　Ⅱ区３面遺構145木組み（南から）

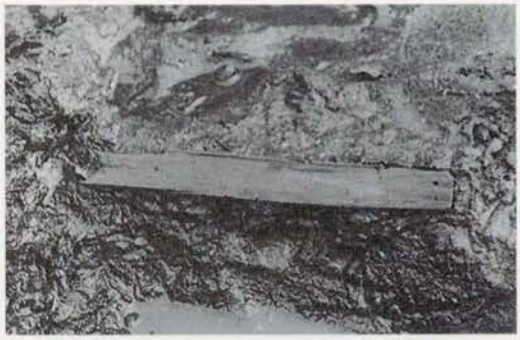
図版 5



1　Ⅱ区 3 面遺構222かわらけ出土状況（西から）

2　Ⅱ区 3 面小銭出土状況（北から）

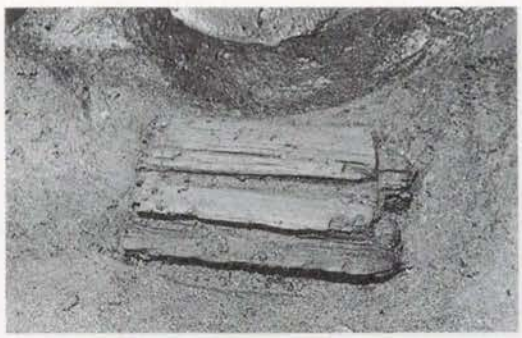
3　Ⅱ区 3 面遺構215（東から）



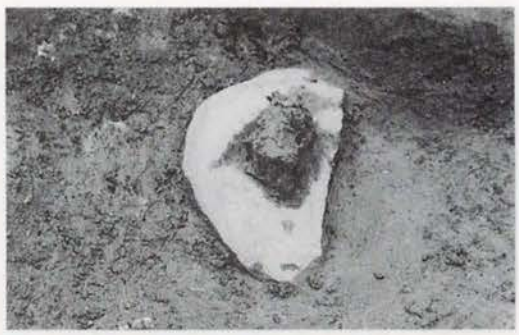
4　Ⅱ区 3 面遺構143さや検出状況

5　Ⅱ区 4 面全景（北から）

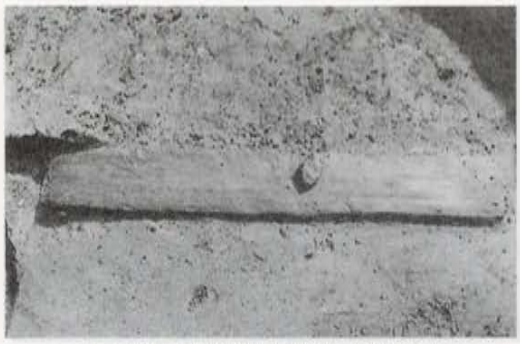
6　Ⅱ区 4 面全景（北から）



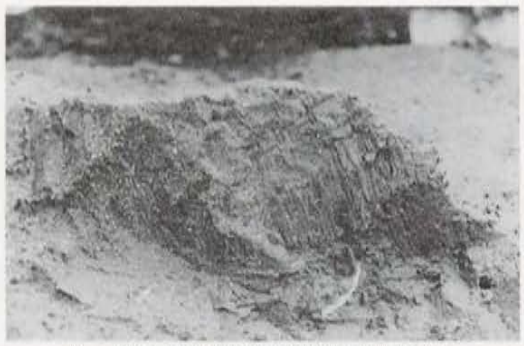
7　Ⅱ区 4 面遺構191礎板（北から）



8　Ⅱ区 4 面遺構286内柱（東から）

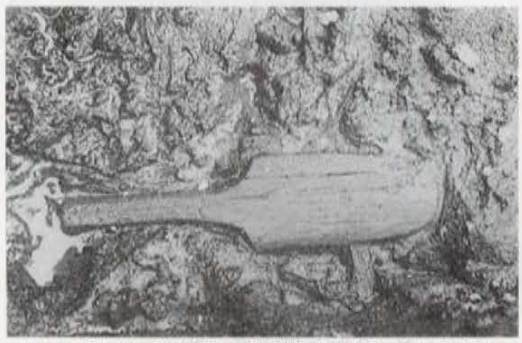


1　Ⅱ区４面南部木組み（北から）

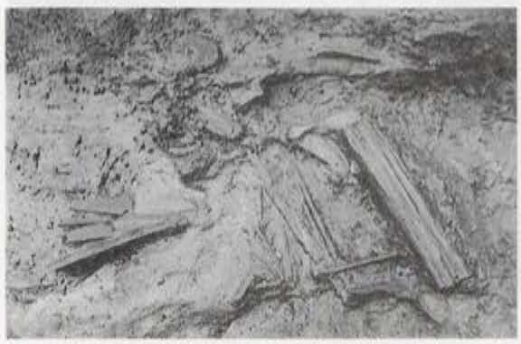


2　Ⅱ区４面南部タラ板①（北から）

3　Ⅱ区４面真上骨未完成（北から）

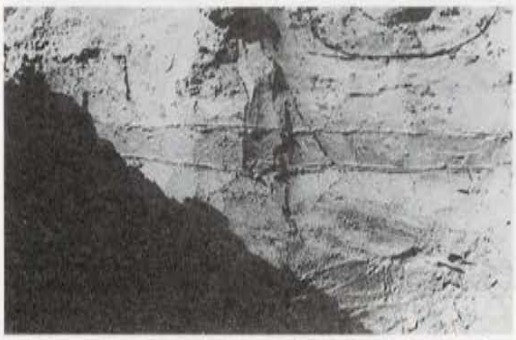


4　Ⅱ区４面遺構280形代（均子）（北から）

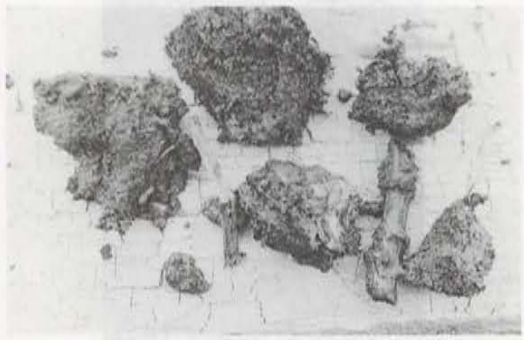


5　Ⅱ区４面遺構280木製品出土状況（南から）

6　Ⅱ区トレンチ土層堆積状況（南から）

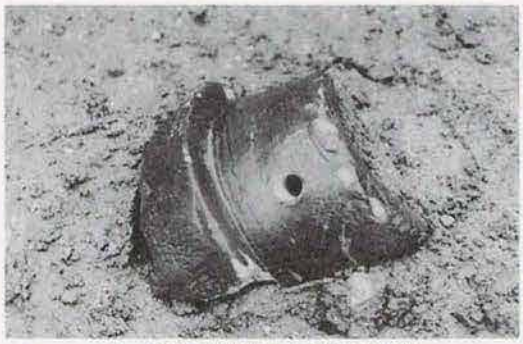


7　Ⅱ区４面トレンチ土層堆積状況（南から）

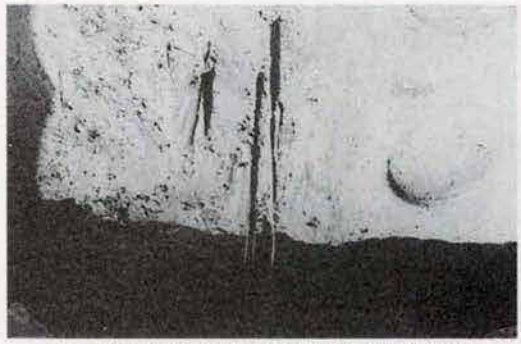


8　Ⅱ区４面トレンチE層出土植物

図版 7



1　Ⅱ区４面真上瓦（南から）



2　Ⅱ区５面遺構302木組み（西から）

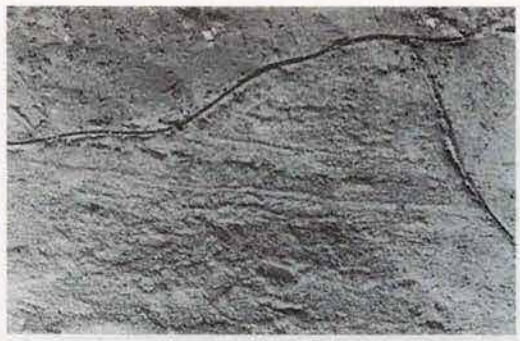
3　Ⅱ区５面全景（北から）

4　Ⅱ区５面全景（南東から）

5　Ⅱ区５面遺構200木組み（北から）

6　Ⅱ区６面全景

7　Ⅱ区北壁砂層（南から）



8　飛砂堆積状況

図18-161

図18-160

図11-55

図18-164

図17-150

図18-163

図14-96

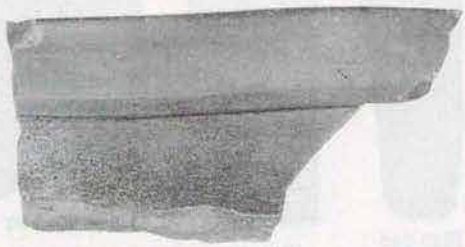


図18-162

図25-294

図14-126

図7-12

出土かわらけ

図25-302

出土遺物（1）

図版 9

図25-309

図18-169

図25-300

図20-249

図20-247

図11-49

図13-80

図19-237

図13-86

図7-14

図13-81

図14-128

図14-129

図11-47

図13-88

図10-26

図19-239

表採（くじら）

出土遺物（2）

図25-301

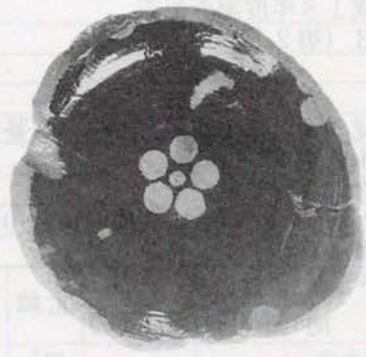


図24-283

図17-138

図24-290

図24-270

図24-293

図20-245

図24-272

図24-291

図19-240

図25-306

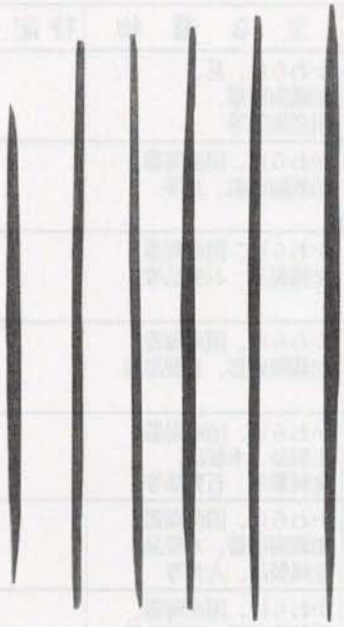


図26-320～325

図25-305

図25-304

図19-243

図19-241

出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくし
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成１８年度調査報告
巻次	２３（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	汐見一夫／福田誠／宮田眞／宗臺秀明／馬淵和雄・伊丹まどか・宇都洋平／斉木秀雄・降矢順子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦２００７年３月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ごくらくじちゅうしんがらんあと 極楽寺中心伽藍跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺三丁目 1028番1の一部	14204	290	35° 30′ 72″	139° 53′ 02″	20030528 ～ 20030627	43.00	個人専用住宅
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字四ツ石 １１５番３の一部	14204	259	35° 32′ 21″	139° 56′ 99″	20030809 ～ 20030927	80.00	個人専用住宅 （杭基礎構造）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 御成町 １２６番１	14204	242	35° 31′ 66″	139° 55′ 30″	20031025 ～ 20031121	18.00	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
ほじゅいんあと 保寿院跡	神奈川県鎌倉市 西御門一丁目 ９２２番４	14204	250	35° 32′ 27″	139° 56′ 17″	20040109 ～ 20040225	76.00	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
えんかくじもんぜんいせき 円覚寺門前遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字松岡 １３７７番６	14204	287	35° 33′ 42″	139° 54′ 70″	20040120 ～ 20040313	49.30	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 ４０２番９外	14204	242	35° 33′ 42″	139° 54′ 70″	20040310 ～ 20040516	191.00	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座一丁目 ９２１番５外	14204	261	35° 30′ 87″	139° 55′ 63″	20040617 ～ 20040630	10.50	個人専用住宅 （表層地盤改良）
のうぞうじあと 能蔵寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座二丁目 ９７５番６	14204	314	35° 30′ 68″	139° 55′ 80″	20040720 ～ 20040922	48.00	個人専用住宅 （杭基礎構造）

所収遺跡名	所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ごくらくじちゅうしんがらんあと 極楽寺中心伽藍跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壙、溝跡 井戸跡、柱穴	かわらけ、瓦、 舶載陶磁器、 国産陶器等	
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	轍、掘立柱建物跡等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦等	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 金属製品、石製品等	
ほじゅいんあと 保寿院跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、石製品等	
えんかくじもんぜんいせき 円覚寺門前遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 土製品、木製品、 金属製品、石製品等	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝跡、道路、土壙、 柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品 金属製品、人骨等	
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	室町時代 ～ 江戸時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、石製品等	
のうぞうじあと 能蔵寺跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品 金属製品、石製品等	

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくし
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成１８年度調査報告
巻次	２３（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	汐見一夫／福田誠／宮田眞／宗臺秀明／馬淵和雄・伊丹まどか・宇都洋平／斉木秀雄・降矢順子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦２００７年３月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
ごくらくじちゅうしんがらんあと 極楽寺中心伽藍跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺三丁目 1028番1の一部	14204	290	35°30′72″	139°53′02″	20030528 ～ 20030627	43.00	個人専用住宅
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字四ツ石 １１５番３の一部	14204	259	35°32′21″	139°56′99″	* ~~20030809~~ 20030808 ～ 20030927	* ~~80.00~~ 78.00	個人専用住宅 （杭基礎構造）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 御成町 １２６番１	14204	242	35°31′66″	139°55′30″	20031025 ～ 20031121	18.00	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
* ~~ほうじゅいんあと~~ ほうじゅいんあと 保寿院跡	神奈川県鎌倉市 西御門一丁目 ９２２番４	14204	250	35°32′27″	139°56′17″	20040109 ～ 20040225	76.00	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
えんかくじもんぜんいせき 円覚寺門前遺跡	神奈川県鎌倉市 * 山ノ内字松岡 ~~１３７７~~番６ １３３７	14204	287	35°33′42″	139°54′70″	20040120 ～ 20040313	49.30	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 ４０２番９外	14204	242	35°33′42″	139°54′70″	*20040310 ～ 20040518 ~~20040516~~	191.00	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座一丁目 ９２１番５外	14204	261	35°30′87″	139°55′63″	20040617 ～ 20040630	10.50	個人専用住宅 （表層地盤改良）
のうぞうじあと 能蔵寺跡	神奈川県鎌倉市 * 材木座二丁目 ~~９７５番６~~ 294番3外	14204	314	35°30′68″	139°55′80″	20040720 ～ 20040922	48.00	個人専用住宅 （杭基礎構造）

所収遺跡名	所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ごくらくじちゅうしんがらんあと 極楽寺中心伽藍跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	土壙、溝跡 井戸跡、柱穴	かわらけ、瓦、 舶載陶磁器、 国産陶器等	
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	都市	鎌倉時代～室町時代	轍、掘立柱建物跡等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦等	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代～室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 金属製品、石製品等	
ほうじゅいんあと 保寿院跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、石製品等	
えんかくじもんぜんいせき 円覚寺門前遺跡	都市	鎌倉時代～室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 土製品、木製品、 金属製品、石製品等	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代～室町時代	溝跡、道路、土壙、 柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品 金属製品、人骨等	
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	室町時代～江戸時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、石製品等	
のうぞうじあと 能蔵寺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	溝跡、土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品 金属製品、石製品等	

＊令和5年11月27日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　23

平成18年度発掘調査報告（第２分冊）

発行日　平成19年３月30日

編　集
発　行　鎌倉市教育委員会

印　刷　野崎印刷紙器株式会社